鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　26

平成21年度発掘調査報告

（第1分冊）

宇津宮辻子幕府跡

北条時房・顕時邸跡

北条小町邸跡

下馬周辺遺跡

覚園寺旧境内遺跡

平成22年3月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　26

平成21年度発掘調査報告

（第1分冊）

宇津宮辻子幕府跡

北条時房・顕時邸跡

北条小町邸跡

下馬周辺遺跡

覚園寺旧境内遺跡

平成22年3月

鎌倉市教育委員会

北条時房・顕時邸跡　第２面全景（西から）

北条小町邸跡　溝５、平場全景（南から）

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ６割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成15、16及び17年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として12ヶ所の調査成果を掲載しました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成22年３月31日

鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は平成21年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。
2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

（第1分冊）

ごあいさつ …… I
例言 …… II
本誌掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点一覧 …… IV
平成21年度調査の概観 …… V
平成21年度発掘調査地点一覧 …… IX
調査地点位置図 …… X

1　宇津宮辻子幕府跡（No. 239）小町二丁目 390 番 2 外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
第2章　調査の概要 …… 9
第3章　検出遺構と出土遺物 …… 14
第4章　まとめ …… 43

2　北条時房・顕時邸跡（No. 278）雪ノ下 236 番 1 地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 61
第2章　調査の概要 …… 65
第3章　検出遺構と出土遺物 …… 69
第4章　まとめ …… 88

3　北条小町邸跡（No. 282）雪ノ下一丁目 440 番の一部地点
第1章　遺跡と調査地点の概観 …… 113
第2章　調査の概略 …… 121
第3章　調査結果 …… 122
第4章　まとめと考察 …… 159
第5章　北条小町邸跡の花粉化石 …… 167

4　下馬周辺遺跡（No. 200）由比ガ浜二丁目 39 番 14 地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 187
第2章　調査の概要 …… 190
第3章　検出遺構と出土遺物 …… 194
第4章　まとめ …… 214

5　覚園寺旧境内遺跡（No. 435）二階堂字会下 531 番 3 外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 228
第2章　調査の概要 …… 231
第3章　発見した遺構と遺物 …… 233
第4章　まとめ …… 247

（第２分冊）

例言 …… Ⅱ
調査地点位置図 …… Ⅳ

6　長谷小路周辺遺跡（No. 236）長谷一丁目 265 番 19 地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
第２章　調査の経緯と経過 …… 7
第３章　発見した遺構と遺物 …… 9
第４章　まとめ …… 28

7　円覚寺旧境内遺跡（No. 434）山ノ内字西管領屋敷 377 番 1 地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 52
第２章　調査の概要 …… 55
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 58
第４章　まとめ …… 80

8　大楽寺跡（No. 262）浄明寺四丁目 246 番 1 地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 98
第２章　調査の概要 …… 101
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 106
第４章　まとめ …… 127

9　円覚寺旧境内遺跡（No. 434）山ノ内字瑞鹿山 393 番地点
第１章　調査に至る経緯 …… 145
第２章　遺跡概観 …… 146
第３章　調査経過 …… 153
第４章　発見された遺構と遺物 …… 156
第５章　まとめ …… 175

10　笹目遺跡（No. 207）笹目町 423 番 2 外地点
第１章　調査概観 …… 191
第２章　検出された遺構と出土遺物 …… 195
第３章　まとめ …… 215

11　浄妙寺旧境内遺跡（No. 408）浄明寺三丁目 115 番 14 外地点
第１章　遺跡の立地と環境 …… 233
第２章　調査の経過と方法 …… 235
第３章　検出された遺構と遺物 …… 238
第４章　まとめ …… 252

12　円覚寺門前遺跡（No. 287）山ノ内字藤源治 947 番 8 地点
第１章　調査の経緯 …… 267
第２章　遺跡概観 …… 268
第３章　調査経過 …… 274
第４章　発見された遺構と遺物 …… 277
第５章　まとめ …… 294

本誌掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①★	宇津宮辻子幕府跡 (No. 239)	小町二丁目390番2外	個人専用住宅 (地下室)	官衙	62.62㎡	平成16年2月26日 ～平成16年4月3日
②★	北条時房・顕時邸跡 (No. 278)	雪ノ下一丁目236番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	22.50㎡	平成16年3月3日 ～平成16年4月5日
③★	北条小町邸跡 (No. 282)	雪ノ下一丁目440番の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	56.00㎡	平成16年1月16日 ～平成16年2月19日
④◎	下馬周辺遺跡 (No. 200)	由比ガ浜二丁目39番14	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	20.00㎡	平成16年5月11日 ～平成16年5月31日
⑤◎	覚園寺旧境内遺跡 (No. 453)	二階堂字会下351番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	30.00㎡	平成16年10月27日 ～平成16年12月10日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑥◎	長谷小路周辺遺跡 (No. 236)	長谷一丁目265番19	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	56.00㎡	平成17年2月25日 ～平成17年4月11日
⑦◎	円覚寺旧境内遺跡 (No. 434)	山ノ内字西管領屋敷377番1	個人専用住宅 (地下室)	社寺	67.34㎡	平成16年7月22日 ～平成16年9月13日
⑧◎	大楽寺跡 (No. 262)	浄明寺四丁目246番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	41.50㎡	平成17年2月22日 ～平成17年4月21日
⑨◎	円覚寺旧境内遺跡 (No. 434)	山ノ内字瑞鹿山393番	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	45.00㎡	平成17年1月11日 ～平成17年2月28日
⑩▲	笹目遺跡 (No. 207)	笹目町423番2外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	144.75㎡	平成17年12月1日 ～平成18年3月31日
⑪▲	浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408)	浄明寺三丁目115番14外	個人専用住宅 (車庫・擁壁築造)	社寺	28.50㎡	平成17年7月25日 ～平成17年9月2日
⑫▲	円覚寺門前遺跡 (No. 434)	山ノ内字藤源治947番8	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	36.00㎡	平成17年4月5日 ～平成17年5月13日

★印は平成15年度実施の発掘調査
◎印は平成16年度実施の発掘調査
▲印は平成17年度実施の発掘調査

平成21年度調査の概観

平成21年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査2件を含む20件であり、調査面積は808.25㎡であった。これを前年度の25件、977.72㎡と比較してみると件数は5件の減少となり、調査面積も169.47㎡の減少となった。しかし調査面積は平均で1件あたり40.41㎡（前年度は39.10㎡）であり、1件あたりの調査面積はわずかではあるが、前年度より増加している。

調査原因は個人専用住宅の建設が17件、店舗併用住宅の建設が3件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が8件（40%）、地盤改良工事が10件（50%）、地下室の建設が1件、その他が1件となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因（18件：90%）になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査面積及び調査期間等については「平成21年度調査地点一覧」を参照。）

1　上杉定正邸跡（No. 188）

扇ガ谷二丁目に位置し、史跡寿福寺境内の東側に所在している。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区内に幅1.5m程度の東西方向の道路状遺構が発見された。当該地の東側山裾にはやぐらが存在しており、やぐら前面の土地利用を考えるうえで重要な発見となった。また出土遺物のなかには板に梵字を記した資料や枡などの貴重な資料も認められている。

2　弁ヶ谷遺跡（No. 249）

材木座四丁目に位置し、地元で弁ヶ谷と呼ばれる谷戸のうち、西側に展開する支谷の奥まった場所に所在している。当該地は谷戸の入り口部分に比べ、10メートル程高い場所である。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、現況の敷地は近現代の造成によって大きく嵩上げされたものの、谷戸の中腹部にも中世には礎石を用いた建物が作られていたことが明らかになった。

3　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

小町二丁目に位置し、扇ガ谷と小町の間を南へ流下する扇川の左岸に接している。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層上に柱穴列や土坑、溝などが発見された。溝は幅約1.5mで東西方向に走っており、中世には扇川へ流下していたらしいことが明らかになった。

4　新善光寺跡（No. 284）

材木座四丁目に位置し、弁ヶ谷と呼ばれる谷戸の中央にある過去に行われた宅地造成地の一画を占めている。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、大型の泥岩塊を用いた中世の整地層が発見された。その上には柱穴などの生活痕跡が確認でき、谷戸の中の土地利用の一端が明らかになった。

5　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

小町二丁目に位置し、若宮大路東側に平行して通る道路（小町大路）に面している。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、柱穴などの建物跡のほか、小町大路に並行する木組みの溝が発見された。その位置などから中世小町大路の側溝と考えられる。

6　田楽辻子周辺遺跡（No. 33）

浄明寺一丁目に位置する。滑川左岸にあり、北へ開口する谷戸から流下してきた支流との間にあたる。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の柱穴などが発見されたほか、その下層からは古墳時代以前の流路跡が出土した。

7　弁ヶ谷遺跡（No. 249）

材木座六丁目に位置する。弁ヶ谷と呼ばれる谷戸の中央、豆腐川の右岸に接している。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、泥岩による整地層上に 13 世紀半ばから 14 世紀にかけて作られた礎石列や柱痕の残る柱穴が発見され、大型の建物が存在していたことが明らかになった。豆腐川の護岸や、木樋も出土した。

8　米町遺跡（No. 245）

大町二丁目に位置し、県道鎌倉・葉山線の南に接している。深基礎工事を行う個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、14 世紀の板壁建物などが出土し、整地層は３面を確認することができた。中世「米町」の様子を知る上で貴重な遺構である。

9　川越重頼邸跡（No. 270）

浄明寺五丁目に位置し、釈迦堂谷と呼ばれる谷戸の入り口付近にある。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、14 世紀から 15 世紀にかけての整地層と、その上面で柱穴やかわらけ溜などの遺構を確認した。調査区を南北方向に通る溝も出土している。調査地の地盤面は西側に接する道路面から１ｍ以上高く、遺構面も道路面より高い位置で確認した。

10　材木座町屋遺跡（No. 261）

材木座六丁目に位置する。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13 世紀後半から 15 世紀にかけての遺構・遺物が出土した。整地層は３面存在し、上面では土坑や柱穴列、礎石など、中世の生活痕跡を確認した。

11　大倉幕府跡（No. 253）

雪ノ下三丁目に位置する。鶴岡八幡宮の東側にあたり、中世鎌倉の中心地であった場所である。地盤の柱状改良工事を行う個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層が 10 面にわたり確認でき、礎板をもつ柱穴や敷地境と思しき木組みの溝などが発見された。囲炉裏の跡や格子戸の材なども出土している。開幕時の遺構は確認できなかったが、15 世紀代のかわらけが多く出土した。当該期の良好な資料である。

12　下馬周辺遺跡（No. 200）

由比ガ浜二丁目に位置する。県道鎌倉･葉山線に面した場所にある。地盤の柱状改良を行う自己用店舗併用住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13 世紀から 14 世紀にかけての４時期にわたる生活面が発見でき、土坑のほか、方形竪穴建物の痕跡が出土した。方形竪穴建物は数基が切り合っており、中世にこの場所が商業地としての機能をもつ町並みの一画であることが明らかとなった。

13　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

小町一丁目に位置する。小町通り沿いの、北西から流下して来た扇川が暗渠化する場所にある。鋼管杭の設置工事を行う自己用店舗併用住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、現地表下 1.2mの深さから砂礫層が出土した。出土遺物の様相から、古墳時代から古代にかけて流れていた河道と考えられる。当時の鎌倉の自然地形を考える上で貴重な発見である。

14　横小路周辺遺跡（No. 259）

二階堂字稲葉越に位置する。二階堂川の南岸、浄明寺側より延びる丘陵の裾にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13 世紀後半から 14 世紀代にかけての整地層が確認でき、かわらけ溜りや柱穴列などが発見された。調査区南側では丘陵裾の岩盤を平らに削った上に柱穴が複数穿たれており、居住地の拡張の様子も明らかになった。

15　大倉幕府跡（No. 253）

雪ノ下三丁目に位置する。県道金沢鎌倉線の北側にあり、地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世では 13 世紀前半から 14 世紀代にかけての整地層・生活面が 15 層以上確認され、常滑の大甕埋設遺構のほか、凝灰質砂岩（鎌倉石）の切石で周囲を囲んだ基壇状の整地層も発見された。最下層では古墳時代の土器も出土し、古代以前の土地利用の一端が明らかとなった。

16　台山遺跡（No. 29）

山ノ内字藤源治の丘陵中腹に位置する。地下室を設置する個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13 世紀後半から 14 世紀代にかけての遺構・遺物が出土した。丘陵の岩盤上に盛土を行って斜面を平らにし、建物を建てていたことが明らかとなった。中世に行われた丘陵地の造成の好例である。

17　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

小町三丁目に位置する。小町大路の東側、史跡東勝寺跡への入り口付近にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層や柱穴などの遺構、遺物が出土した。中世の石組みの井戸や、大型の泥岩塊による厚い地形も確認できている。なお、現況地盤面から 60 cmほどで地山が検出された。

18　安国寺跡（No. 174）

山ノ内字東管領屋敷に位置する。主要地方道横浜鎌倉線の北側に面する場所にある。鋼管杭工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査地の地盤面は現況道路面から約 1 mほど高いが、約 30 cmの深さから遺構・遺物が検出できる。13 世紀後半から 15 世紀にかけての遺構・遺物が出土した。整地層は 4 面存在し、上面では土坑や柱穴など、生活の痕跡を確認した。

19　北条小町邸跡（No. 262）

雪ノ下一丁目に位置する。若宮大路から若干東側へ離れた場所にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

20　法泉寺跡（No. 182）

扇ガ谷四丁目に位置する。海蔵寺の存する谷戸内にあり、鋼管杭工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

平成21年度発掘調査地点一覧

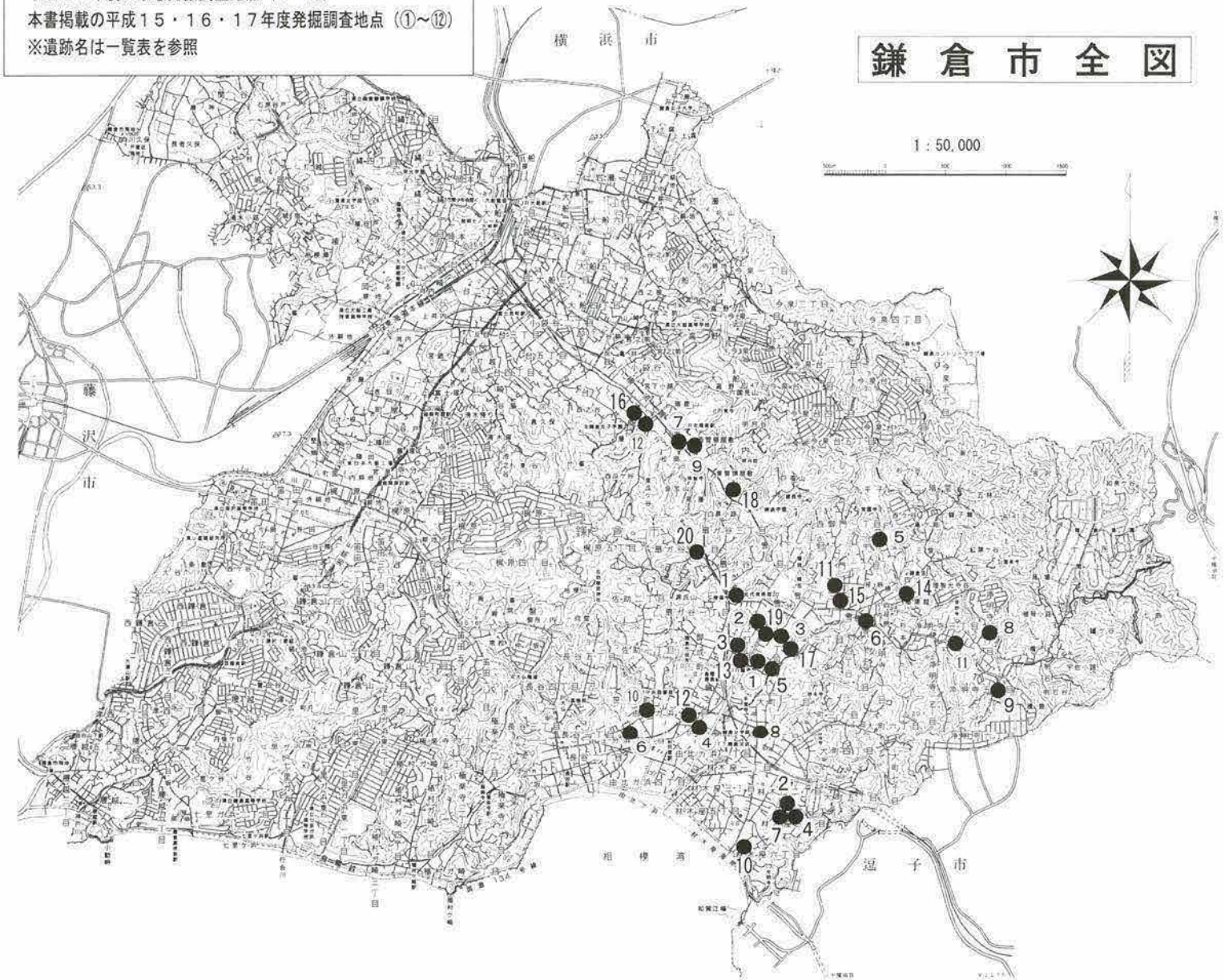
	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	上杉定正邸跡 (NO,188)	扇ガ谷二丁目１９５番２	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	25.00㎡	平成21年２月16日 ～平成21年４月10日
2 ★	弁ヶ谷遺跡 (NO,249)	材木座四丁目５９９番８	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	58.75㎡	平成21年２月17日 ～平成21年４月14日
3	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町二丁目１９番外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	35.00㎡	平成21年４月６日 ～平成21年５月12日
4	新善光寺跡 (NO,284)	材木座四丁目５７９番４	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	50.00㎡	平成21年４月14日 ～平成21年６月10日
5	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町二丁目３６４番１７	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	30.00㎡	平成21年４月17日 ～平成21年６月１日
6	田楽辻子周辺遺跡 (NO, 33)	浄明寺一丁目５５６番６外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	39.00㎡	平成21年４月22日 ～平成21年５月19日
7	弁ヶ谷遺跡 (NO,249)	材木座六丁目６４０番２	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都市	49.50㎡	平成21年６月15日 ～平成21年８月28日
8	米町遺跡 (NO,245)	大町二丁目２３１１番５	個人専用住宅 (深基礎)	都市	55.00㎡	平成21年６月22日 ～平成21年８月31日
9	川越重頼邸跡 (NO,270)	浄明寺五丁目３１８番１の一部	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	城館	74.00㎡	平成21年６月30日 ～平成21年９月30日
10	材木座町屋遺跡 (NO,261)	材木座六丁目７４２番４外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	45.00㎡	平成21年７月21日 ～平成21年８月26日
11	大倉幕府跡 (NO,253)	雪ノ下三丁目６９３番８	個人専用住宅 (柱状改良工事)	官衙	33.00㎡	平成21年９月14日 ～平成21年11月20日
12	下馬周辺遺跡 (NO,200)	由比ガ浜二丁目１１３番５外	自己用店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	12.00㎡	平成21年10月13日 ～平成21年11月13日
13	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町一丁目６５番２６	自己用店舗併用住宅 (鋼管杭構造)	都市	20.00㎡	平成21年11月４日 ～平成21年11月24日
14	横小路周辺遺跡 (NO,259)	二階堂字稲葉越８５６番５	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	41.00㎡	平成21年11月４日 ～平成21年12月28日
15	大倉幕府跡 (NO,253)	雪ノ下三丁目６４８番３	個人専用住宅 (柱状改良工事)	官衙	42.00㎡	平成21年11月24日 ～平成22年２月19日
16	台山遺跡 (NO, 29)	山ノ内字藤源治８６０番１	個人専用住宅 (地下室)	集落	30.00㎡	平成22年１月12日 ～平成22年２月17日
17 ◎	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町三丁目４１８番５	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	58.00㎡	平成22年１月21日 ～平成22年３月24日
18 ◎	安国寺跡 (NO,174)	山ノ内字東管領屋敷１４７番９外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	46.00㎡	平成22年２月12日 ～平成22年３月31日
19 ◎	北条小町邸跡 (NO,262)	雪ノ下一丁目４２１番１	個人専用住宅 (柱状改良工事)	城館	27.00㎡	平成22年３月29日 ～平成22年３月31日
20 ◎	法泉寺跡 (NO,182)	扇ガ谷四丁目５１８番８	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	38.00㎡	平成22年３月29日 ～平成22年３月31日

★印は平成20年度からの継続調査を示す。
◎印は平成22年度への継続調査を示す。

平成２１年度の緊急発掘調査地点（１～20）
本書掲載の平成１５・１６・１７年度発掘調査地点（①～⑫）
※遺跡名は一覧表を参照

鎌倉市全図

1：50,000



宇津宮辻子幕府跡（No.239）

小町二丁目390番2外

例　　言

1. 本報文は、宇津宮辻子幕府跡（№239）の所在する遺跡内、小町二丁目390番2外地点における個人専用住宅（地下室）建設に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成16年2月26日から同年4月3日にかけて、調査面積62.62㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下の通りである。
   現地調査
   調査担当者：原　廣志
   調　査　員：本城　裕・須佐仁和・早坂伸市・中川健二
   調査補助員：古田土俊一・宇都洋平・高橋拓也・小野夏菜・佐原恵美子・嶋田久恵・野崎美帆・山口正紀（鶴見大学）・橋本和之・原　考史（国士館大学）・銘苅春也・福田淳史
   整理作業
   調　査　員：宇都洋平・菊川　泉・須佐直子・栂岡ケイト・小野夏菜・山口正紀
   調査補助員：高橋奈美・平井里永子（鶴見大学生）
   協力機関名：鎌倉考古学研究所
4. 本報の執筆は、第1章～第3章を宇都が行い、第4章については調査員協議のもと宇都が稿を草した。また遺物実測、挿図、写真図版作成は菊川・須佐（直）・栂岡・小野・山口・高橋・平井が行った。
5. 本報掲載の写真は全景・遺構を須佐（仁）・宇都・野崎があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は以下の通りである。
   ・図版縮尺　　全測図：1/80　遺構図：1/40　遺物図：1/3
   ・遺構図版　　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している。
   ・遺物図版　　－・－・－は釉薬の範囲を示す。黒塗りは主に灯明皿に付着の油煤煙や漆器の朱漆文様を表現している。遺物観察表における手捏ねかわらけ底径計測値は外底指頭痕と口縁部の稜部の数値を表している。
   ・使用名称　　本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）
秋山哲雄・池谷初恵・伊丹まどか・岡　陽一郎・小野正敏・河野眞知郎・菊川英政・五味文彦・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・関　幸彦・手塚直樹・野本賢二・韓盛旭・福田　誠・松尾宣方・松吉大樹・馬渕和雄・宮田　眞

本 文 目 次

第1章　遺跡の位置と歴史的環境……5
　1．遺跡の位置……5
　2．遺跡の歴史的環境……5
第2章　調査の概要……9
　1．調査の経緯と経過……9
　2．測量軸の設定……9
　3．層序と生活面……11
第3章　検出遺構と出土遺物……14
　1．検出した遺構……14
　2．出土した遺物……25
第4章　まとめ……43

挿 図 目 次

図1　調査地点と周辺遺跡……6
図2　グリット配置図……10
図3　国土座標位置図……11
図4　調査区中央土層堆積図……12
図5　上層遺構全測図……13
図6　下層遺構全測図……14
図7　土坑1・2・5、溝1……15
図8　土坑4、ピット14・15……16
図9　土坑9・10・12・13・18……17
図10　土坑16・17・20～22……18
図11　土坑19・27……19
図12　各土坑・ピット……20
図13　井戸1……21
図14　井戸2上層遺物出土状況……22
図15　井戸3・4、土坑33・34……23
図16　ピット6～9・17……24
図17　土坑1・2・4出土遺物……26
図18　土坑5・6・8出土遺物……27
図19　土坑9～15・17・18出土遺物……28
図20　土坑19出土遺物(1)……30
図21　土坑19出土遺物(2)……31
図22　土坑20・22～24・27出土遺物……33
図23　土坑30・32・34・35出土遺物……34
図24　井戸1出土遺物……35
図25　井戸2出土遺物(1)……36
図26　井戸2出土遺物(2)……37
図27　井戸2出土遺物(3)……38
図28　井戸3出土遺物……39
図29　溝1出土遺物……40
図30　ピット11・22・32・34・37～39出土遺物……41
図31　遺構外出土遺物……42

図 版 目 次

図版 1　1．上・下層遺構全景（北から）　2．同上調査区北西域（西から）　3．同上調査区南西域（西から）……45
図版 2　1．土坑２遺物出土状況　2．土坑８　3．土坑５遺物出土状況　4．同左土層断面　5．土坑 11　6．同上土層断面　7．土坑 12　8．同上土層断面……46
図版 3　1．土坑 15 遺物出土状況　2．土坑 18　3．土坑 19 遺物出土状況　4．土坑 20 土層断面　5．土坑 22　6．同左土層断面　7．井戸１・２、溝　8．P15……47
図版 4　1．井戸１（井戸木枠上層）　2．同上（井戸木枠下層）　3．井戸１（井戸枠組方）　4．井戸２　5．井戸２（中層出土遺物）　6．井戸２土層断面　7．井戸４……48
図版 5　1．土坑１　2．土坑２　3．土坑４　4．土坑６……49
図版 6　1．土坑５　2．土坑８　3．土坑９　4．土坑 12　5．土坑 13　6．土坑 14　7．土坑 15……50
図版 7　1．土坑 19……51
図版 8　1．土坑 20　2．土坑 22　3．土坑 23　4．土坑 24　5．土坑 27　6．土坑 30　7．土坑 35　8．土坑 34……52
図版 9　1．井戸１上層　2．井戸１下層　3．井戸２上層　4．井戸２中層……53
図版 10　1．井戸２中層　2．井戸２下層　3．井戸３……54
図版 11　1．溝１　2．P11　3．P22　4．P32　5．P34　6．P37　7．遺構外……55

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．　遺跡の位置

本調査地点は旧鎌倉市街地を形成する平野地の東端に位置し、JR 鎌倉駅より北東方に約 470m、小町二丁目 390 番２外に所在する（図１）。

鎌倉旧市街は鶴岡八幡宮から由比ガ浜にかけて伸びる若宮大路を中心として、南北に今小路・小町大路、またこれらに直行するように横大路など数本の道路により区画されている。これらの周辺地域を神奈川県遺跡台帳では「若宮大路周辺遺跡群（No.242）」として登録されているが、この内に囲まれるように「北条時房・顕時邸跡（No.278）」・「北条小町邸跡（No.282）」・「宇津宮辻子幕府跡（No.239）」が別登録されている。

本調査地点の遺跡名である「宇津宮辻子幕府跡」は「北条小町邸跡」に南接するかたちで、若宮大路二ノ鳥居までの南北約 300m、若宮大路東側から小町大路西側までの東西約 150m の範囲が遺跡登録されており、調査地点はこの遺跡の南東隅に位置している。

２．　遺跡の歴史的環境

源頼朝の開府時、幕府政庁は大倉の地に置かれた。『吾妻鏡』によれば、治承四（1180）年十月六日に鎌倉入りを果たした頼朝は九日には懐島景能を奉行として御所の作事を命じており、十五日には御所入りしている（註1）。この大倉の地に作られた「大倉御所」は頼朝・頼家・実朝の源氏三代の御所として使用されており、大倉に開府当初の幕府が置かれた理由としては、四神相応の地であった事や、古代から中世初めにおいての六浦道の重要性が指摘されている（松尾 1993・山村 1997）

しかし実朝が公暁により暗殺され、鎌倉幕府第四代将軍として藤原頼経が承久元（1219）年七月十九日に鎌倉入りをすると、同じ大倉にある北条義時邸内に新造された御所へ入ることとなり、大倉御所は頼朝の妻である政子の居住の場となるが、同年十二月二十四日に失火により大倉御所は灰燼に帰してしまう（註2）。この後大倉御所はこの後再建されることはなく頼経は義時邸南御所で居住するが、嘉禄元（1225）年十月三日に北条泰時・時房により宇津宮辻子付近に御所を移転する話が論議され、同年十二月五日に上棟式、同月二十日に頼経が宇津宮辻子御所へ移っている（註3）。

宇津宮辻子御所については松尾剛次（1993）によりその範囲が想定されている。これによると伊賀朝行勝長寿院前邸内に存在した頼経の寝所から宇津宮辻子御所の北西隅まで東西二百五十六丈五尺、南北六十一丈とし、御所の範囲を東西二十二丈八尺五寸以上、南北十六丈八尺以上としている。また御所の西頬が若宮大路と接していなかった可能性を挙げている。なおこの宇津宮辻子御所の名前にもある「辻子」についてであるが、鎌倉内に存在した辻子について狭義では様々な見解があるが（註５）、広義においては「東西にはしる小さな道」と解釈しても差し支えはないであろう。また「宇津宮」については鎌倉において葛西ヶ谷や比企ヶ谷・千葉地のようにそこに屋敷地を領していた御家人の苗字を地名として残しているところがある（註6）。よってこの辻子に面した一角に宇都宮一族の屋敷地（もしくは跡地）が存在していたものと考えられる。

『吾妻鏡』によると宇津宮辻子御所には「南門」・「東御門」・「中門」・「北土門」などの門や「寝殿」・「二棟御所」・「小御所」・「竹御所」・「持仏堂」・「東小侍所」・「西侍所」・「車寄戸」・「納殿」・「釜殿」・「馬場殿」・「贄殿」・「渡殿」・「御台所」・「進物所」・「休所」・「御車宿」・「御厩」などの施設、「南庭」・「北小庭」が存在

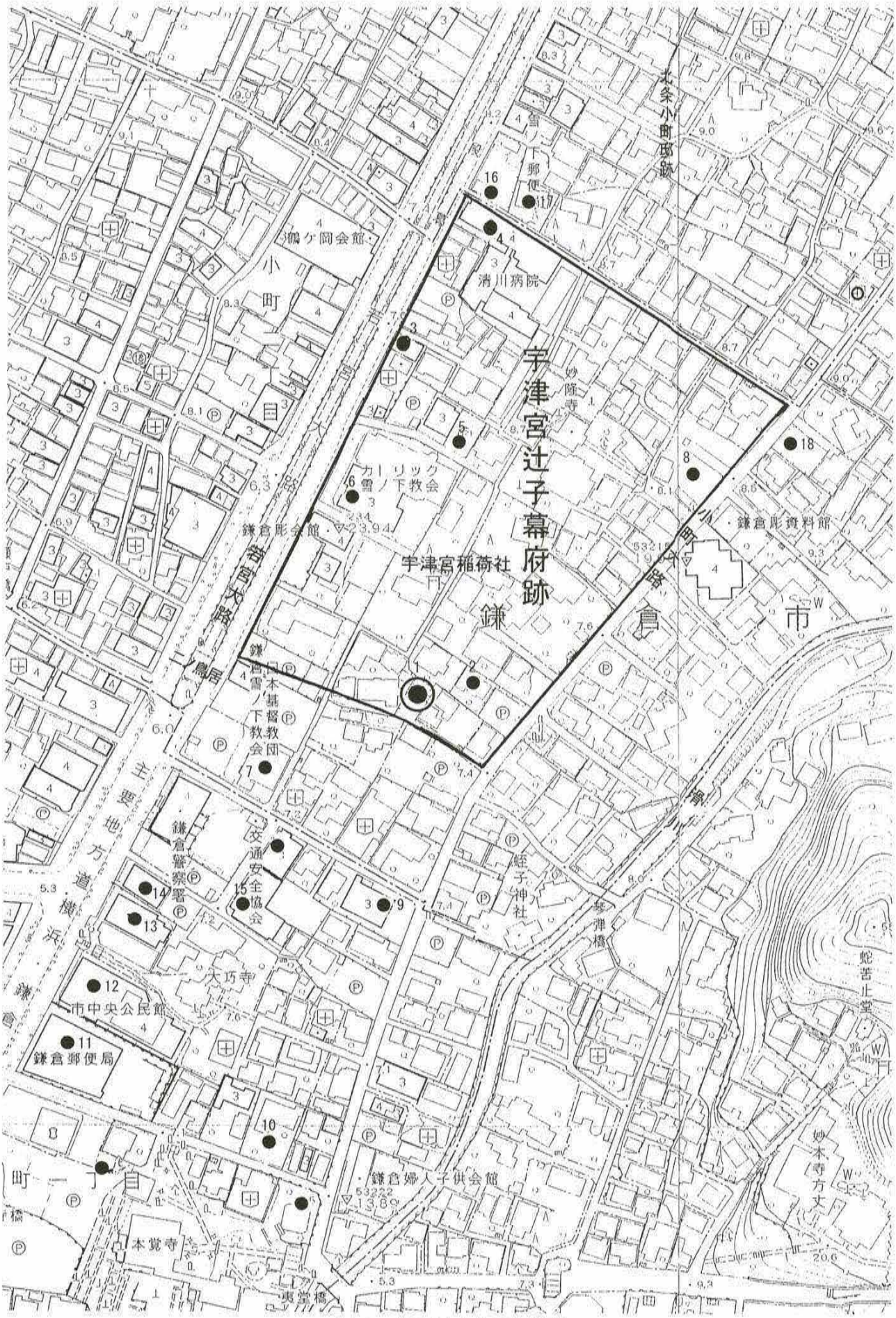


図１　調査地点と周辺遺跡

していたことが分かるが、御所移転からわずか１１年後の嘉禎二（1236）年八月四日、頼経の疱瘡・腫れ物が土公の祟りと関係しているとのことで御所は北側の区画に移され、宇津宮辻子御所はその短い役目を終える事となる。

当遺跡は本地点以外に若宮大路沿いで５件、小町大路沿いで２件の調査が行われている。若宮大路沿いの調査地点の内小町二丁目 366-1 番他地点では中世の生活面は近世の掘削により確認されていないが、地山面より、一括で 13 世紀初頭から 15 世紀初頭に属すると思われる若宮大路側溝及び大路側溝に直行する溝、建物、柵列、井戸が検出されている。遺物については土壙２とした遺構からは板碑伝が、また大路側溝Ｉとした遺構の上層木器堆積層からは「多胡郷　嘉暦□」と記された墨書木管が出土している。小町二丁目 361-1 地点も同様に中世の生活面は近世の掘削により失われている。検出された遺構としては小町二丁目 366-1 他地点と同様、若宮大路側溝、柱穴列、柱穴などがある。

小町二丁目 354 番 2 地点では二時期の生活面が確認されている。第１面とした 14 世紀前半の生活面では柱穴、道路状遺構、溝状遺構、土壙が検出されており、第２面からは南北五間・東西六間を最大建物面積とする掘立柱建物が９軒、橋脚、土壙、柱穴列、溝状遺構、井戸等が検出されている。

小町二丁目 354 番 12 外地点も 13 世紀中～ 14 世紀中葉と考えられる第１面と 13 世紀前～中葉と考えられる二時期の生活面が確認されており、第２面からは東西三間・南北三間の規模を持つ掘立柱建物、柱穴列等が検出されている。

小町大路沿いの小町二丁目 389 番 1 地点では 13 世紀前半から 15 世紀前半の四時期の生活面が検出されており、この内１期～２Ｂ期では掘立柱建物が検出されており特に１期の建物は大きな屋敷地の一部との可能性が示されている。また小町二丁目 373 番 1 地点では小町大路西側の木組みの側溝及び、若宮大路と平行する木組みの溝（溝２）が検出されており、この溝２からは「三丈　□きのやまの□□宗□」と墨書された木簡が出土している。

〈註〉

1　『吾妻鏡』治承四年十月六日条
「着御于相模国。畠山次郎重忠爲先陣。千葉介常胤候御後。凡是扈従軍士不知幾千万。楚忽之間未及營作沙汰。以民家被定御宿所云々」
『吾妻鏡』治承四年十月九日条
「爲大庭平太景義奉行。被始御亭作事。但依難致合期沙汰。暫點知家事兼道山内宅被移築「立之」（後略）」
『吾妻鏡』治承四年十月十五日条
「武衛始入御鎌倉御亭。此間爲景義奉行所令修理也」

2　『吾妻鏡』承久元年七月十九日条
「左大臣道家公賢息二歳。母公経卿女。健保六年正月十六日寅刻誕生。下向關東。（中略）今日牛剋入鎌倉。着于右京權大夫義時朝臣大倉亭。郭内南方。此間構新造屋。（後略）」
『吾妻鏡』承久元年十二月廿四日条
「子剋故右府将軍亭當時二品居所。焼亡。失火云云。（後略）」

3　『吾妻鏡』嘉禄元年十月三日条
「相州、武州参御所給。當御所可被移於宇津宮辻子之由有其沙汰。（後略）」
『吾妻鏡』嘉禄元年十二月五日条
「新御所上棟也。相州、武州監臨。（後略）」
『吾妻鏡』嘉禄元年十二月廿条
「今日若君有御移徙之儀。申一點御出。御狩衣。御騎馬。午刻之由雖載勘文、推移如此。（後略）」

4　宇津宮辻子御所の推定地については高柳光寿（高柳 1959）と松尾剛次（松尾 1993）の二説があるが、松尾説の方がより自然な解釈と受け止められるため、ここでは松尾の説を採用することとする。

5　たとえば高柳 1959・大三輪 1985・石井 1989・山村 1997 など
6　千葉地については中世までその地名がさかのぼる事が出来るのか若干の疑問が残る。

＜引用・参考文献＞

石井　進　1989　「大路・小路・辻子・辻」石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世３武士の都鎌倉』平凡社
伊藤正義　1991　「鎌倉・大倉幕府から宇都宮辻子幕府へ　御所の破却と政権の再生」『「吾妻鏡」の総合的研究』
岡陽一郎　2006　「鎌倉の変容」小野正敏・萩原光雄編『鎌倉時代の考古学』高志書院
河野眞知郎　1995　『中世都市鎌倉　遺跡が語る武士の都』講談社選書メチエ　講談社
国史大系編集会　1971　『新訂増補国史大系　吾妻鏡』吉川弘文館
高柳光寿　1959　『鎌倉市史　総説編』　吉川弘文館
田代郁夫ほか　1992　「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目 354 番 12 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3』鎌倉市教育委員会
田畑佐和子　1991　「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第一回鎌倉市遺跡調査・研究発表会要旨』
継　実　1992　「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第三回鎌倉市遺跡調査・研究発表会要旨』
原　廣志　1999　「神奈川・宇津宮辻子幕府跡」『木簡研究　第二十一号』木簡学会
原　廣志ほか　1996　『宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書　小町二丁目 361 番 1 地点』宇津宮辻子幕府跡発掘調査団
原　廣志ほか　1996　「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目 389 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-2』鎌倉市教育委員会
原　廣志ほか　1997　「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目 361 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13-2』鎌倉市教育委員会
山村亜希　1997　「中世鎌倉の都市空間構造」『史林 80-2』史学研究会
松尾剛次　1993　『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館

＜図１の調査地点名一覧＞

1. 小町二丁目 390 番 2 外：本調査地点
2. 小町二丁目 389 番 1 地点
3. 小町二丁目 361 番 1 地点
4. 小町二丁目 366 番外地点
5. 小町二丁目 354 番 12 外地点
6. 小町二丁目 354 番 2 地点：雪ノ下カトリック教会
7. 小町二丁目 345 番 2 地点：鎌倉雪ノ下教会
8. 小町一丁目 374 番 1 地点
9. 小町一丁目 325 番イ地点
10. 小町一丁目 333 番 2 地点
11. 小町一丁目 374 番 1 地点：鎌倉中央郵便局
12. 小町一丁目 374 番 1 地点：生涯学習センター
13. 小町一丁目 374 番 1 地点
14. 小町一丁目 309 番 1 地点
15. 小町一丁目 322 番地点
16. 雪ノ下一丁目 367・378 番 1 地点
17. 雪ノ下一丁目 419 番 1 地点
18. 小町二丁目 402 番 5 地点

第２章　調査の概要

１．　調査の経緯と経過

本調査地点は宇津宮辻子幕府跡の南側東隅に位置している。今回の現地調査に先立ち鎌倉市教育委員会に地下室を伴う個人住宅建設の相談があった。この工事により埋蔵文化財への影響が予想されたため、事前に鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が実施された。その結果、地表下約 50cm から鎌倉時代の遺構・遺物が確認され、工事による埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断されたため、事業者との協議がおこなわれた。結果、平成十六年２月 26 日より埋蔵文化財への影響が予想される約 62.62 ㎡を調査対象として発掘調査を実施した。

現地調査は平成十六年２月 26 日に機材搬入、重機により試掘データに基づいて地表下約 50cm 前後まで堆積していた近現代の撹乱・客土・近世耕作土の除去をおこない、以下を人力による掘り下げで調査をおこなった。その結果、12 世紀末から 15 世紀前半にかけての鎌倉時代を中心とした中世の遺構・遺物が検出された。同年４月３日までの間に必要な記録作業をおこない、同日機材の撤収を含め現地調査を終了した。その間の作業内容については以下を参照されたい。

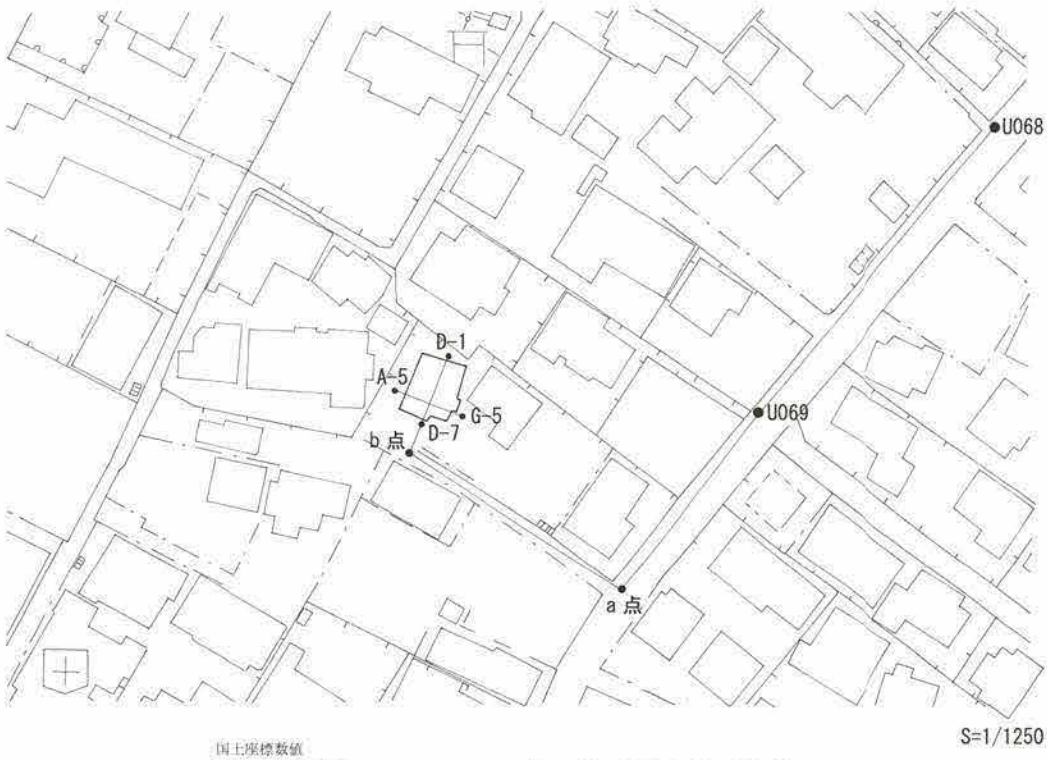
【日誌抄】

２月 26 日（木）機材搬入。重機により地表下約 50cm まで掘削。
　28 日（土）確認調査開始。鎌倉市四級基準点を基とし、測量用基準点を設定。鎌倉市三級基準点から海抜標高を調査地点に移動。
３月　６日（土）井戸２上層のかわらけ溜りの写真撮影および平面実測。
　10 日（水）溝状遺構の写真撮影および平面実測。
　17 日（水）調査区南側の平面・遺構土層実測。井戸１・２の写真撮影。
　23 日（火）調査区南側の平面・遺構土層実測。
　30 日（日）全景写真撮影および平面実測・遺構土層実測。
４月　１日（木）調査区各壁面土層堆積状況実測。
　３日（土）現地調査終了。機材撤収。

２．　測量軸の設定

調査にあたって使用した測量設定は、図２で示したように調査地点東側の小町大路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級都市基準点（第Ⅳ座標系）の U068(X=－75752.344　Y=－25030.674) と U069(X=－75799.463　Y=－25071.002) を使用した。さらに U068･U069 両四級基準点から調査地点に測量基準点を設置するため任意の a 点（X=－75828.161　Y=－25094.715)・b 点（X=－75805.708　Y=－25129.135) の２点を設けD－１杭の座標数値をもとめた (X=－75788.996　Y=－25125.905)。ただしグリットは測量の利便性を優先させるかたちで調査区の形状に合わせ設置したので国土座標とは一致していない（図3)。

調査終了後、図３のように改めて国土座標区画 X－75780.000 ～ 75810.000・Y－25115.000 ～



国土座標数値

鎌倉市4級都市基準点		a 点	X＝−75828, 161　Y＝−25094, 715
U068	X＝−75752, 344　Y＝−25030, 674	b 点	X＝−75805, 708　Y＝−25129, 135
U069	X＝−75799, 463　Y＝−25071, 002	D−1 杭	X＝−75788, 996　Y＝−25125, 905

国土地理院水準点（若宮大路段葛のニノ鳥居脇）　No. 15673=6. 1684m

図２　グリット設定図　(S=1/200・1/400)

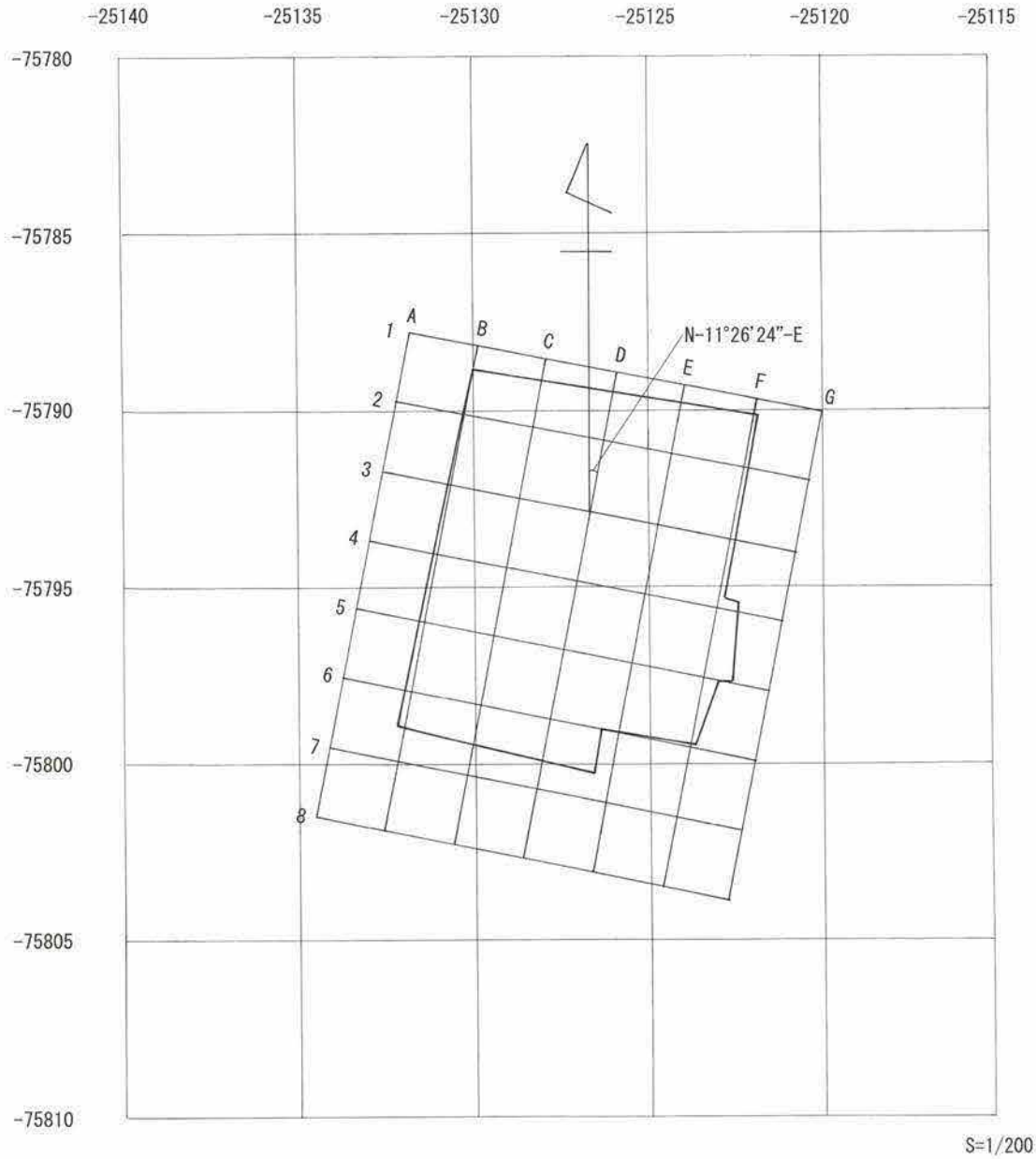
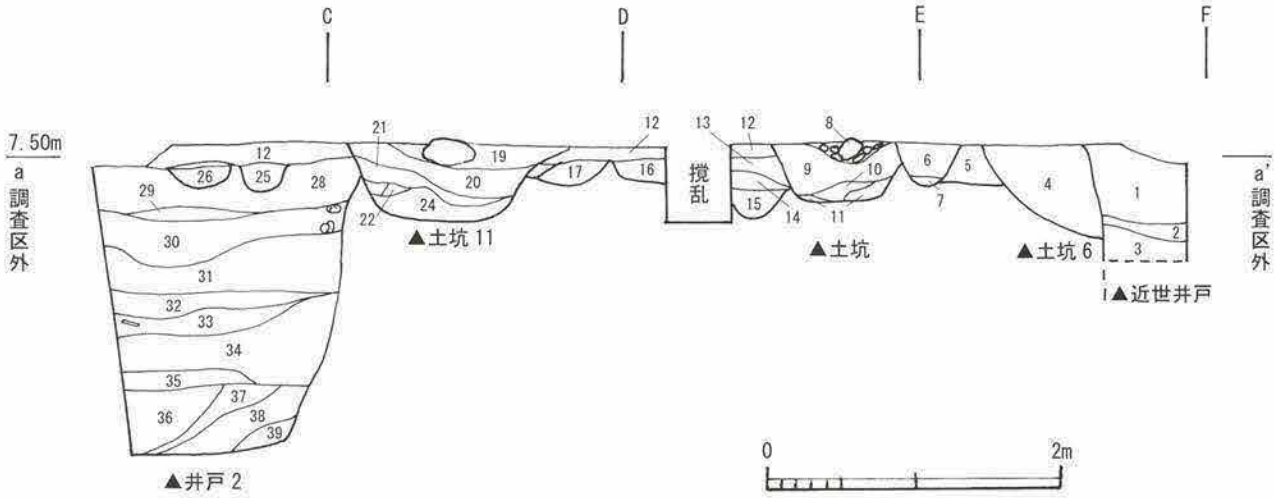


図 3　国土座標位置図

25140.000 内に遺構図を移しかえて掲載した。調査区グリットは図 3 に示すように東西軸と南北軸をそれぞれ 2m 方眼で組み、北から東西軸をアルファベット、南北軸を西から算用数字を充てた。各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。

3．　層序と生活面

調査地点の現地表は海抜標高 8.00m前後でほぼ平坦な土地となっていた。しかし遺跡地内の標高をみると、中央部の南端の鎌倉雪ノ下教会から北端に近い妙隆寺へ向かって緩やかに高くなっているが、小町大路と若宮大路方向にあたる東西側は低くなる地形を呈している。調査で確認した土層は厚さ 40～50 cmほどの近・現代の客土層の堆積土を除去すると、図 4 で示した中世遺物包含層の薄い堆積が観察され



土層注記

1. 明茶褐色砂質土	黒褐色砂質土を斑に中量含む。土丹塊・粒、小石、貝砂を少量含む。粘性・締まり共に無し。	近世井戸
2. 暗灰色砂質土	かわらけ片・明茶褐色砂質土を極少量含む。粘性有り、締まりやや有り。	
3. 明茶褐色砂質土	1層と類似するが貝砂含まない。粘性・締まり共に無し。	
4. 暗褐色砂質土	黄灰色砂質土中量含む。土丹粒・かわらけ片を極少量含む。粘性・締まり共にやや有り。	土坑6 4
5. 暗褐色砂質土	黄灰色砂質土を中量含む。土丹粒・炭化物粒を極少量含む。粘性・締まり共にやや有り。	
6. 黒褐色砂質土	かわらけ片・土丹塊・小石を少量含む。粘性無し、締まりやや有り。	P4 6～7
7. 黄灰色砂質土	地山の土に類似するが黒褐色砂質土を斑状に少量含む。粘性・締まり共に無し。	
8. 暗灰色砂質土	土丹塊・粒を多量に含む。小石を少量含む。粘性やや有り、締まり無し。	土坑 8～11
9. 暗灰色砂質土	小石・炭化物粒を少量、かわらけ片・土丹粒を極少量含む。粘性無し、締まり極わずかに有り。	
10. 茶褐色砂質土	黄灰色砂質土を少量、土丹粒・炭化物粒を極少量含む。粘性・締まり共にやや有り。	
11. 黄灰色砂質土	地山の土に類似するが茶褐色砂質土。	
12. 暗灰色砂質土	かわらけ片・土丹粒・炭化物粒を少量含む。粘性極わずかに有り、締まりやや有り。	
13. 茶褐色砂質土	かわらけ片・土丹粒・炭化物粒を少量含む。粘性・締まり共にやや有り。	P19 13～15
14. 灰色砂質土	貝砂を多量に含む。かわらけ片少量含む。粘性無し、締まりやや有り。	
15. 暗灰色砂質土	炭化物粒を中量含む。粘性無し、締まり有り。	
16. 暗青灰色砂質土	炭化物粒多量に含む。かわらけ片・土丹粒少量含む。黄灰色砂質土を斑状に中量含む。粘性わずかに有り、締まり有り。	
17. 暗褐色砂質土	黄灰色砂質土を極少量斑状に含む。かわらけ片を少量含む。粘性無し、締まり有り。	P17
18. 暗褐色砂質土	黄灰色砂質土を極少量斑状に含む。粘性無し、締まり有り。	P18
19. 黄灰色砂質土	暗褐色砂質土を斑状に中量含む。炭化物粒・かわらけ片を極少量含む。粘性・締まり共に無し。	土坑11 19～24
20. 茶褐色砂質土	黄灰色砂質土と暗褐色砂質土を斑状に少量含む。かわらけ片を極少量含む。粘性無し、締まり有り。	
21. 茶褐色砂質土	20層に類似するが、黄灰色砂質土をより多く含む。炭化物粒を極少量含む。粘性無し、締まり有り。	
22. 暗黄灰色砂質土	暗褐色砂質土を極少量含む。粘性・締まり共に無し。	
23. 暗茶褐色砂質土	暗褐色砂質土を極少量含む。粘性・締まり共に無し。	
24. 黒褐色砂質土	暗褐色砂質土を中量、黄灰色砂質土を少量斑状に含む。粘性無し、締まり有り。	
25. 暗茶褐色砂質土	土丹塊・かわらけ片を中量、炭化物粒・土丹粒を少量含む。粘性極わずかに有り、締まりやや有り。	P10 25
26. 暗灰色砂質土	貝砂を多量に含む。粘性無し、締まり有り。	P11 26～27
27. 暗黄灰色砂質土	茶褐色砂質土・炭化物粒を中量含む。粘性無し、締まりやや有り。	
28. 茶褐色砂質土	かわらけ片・小石・炭化物粒を中量含む。挙大の伊豆石片を極少量含む。粘性無し、締まりやや有り。	井戸2 28～39
29. 茶褐色砂質土	貝砂を中量含む。かわらけ片・炭化物粒・土丹粒を少量含む。粘性無し、締まり有り。	
30. 暗茶褐色砂質土	かわらけ・かわらけ片を多量に含む。炭化物粒を中量・挙大土丹塊を少量含む。粘性・締まり共にやや有り。	
31. 茶灰色砂質土	土丹粒を中量、かわらけ片・炭化物粒・小石を少量含む。粘性・締まり共にやや有り。	
32. 茶褐色砂質土	土丹粒・炭化物粒を中量、挙大土丹塊を少量含む。粘性無し、締まりやや有り。	
33. 暗青灰色粘質土	炭化物・かわらけ片を多量に含む。粘性・締まり共に有り。	
34. 暗灰色砂質土	土丹塊・粒を中量、かわらけ片・炭化物粒を少量含む。粘性わずかに有り、締まりやや有り。	
35. 暗灰褐色砂質土	土丹粒・小石を多量に含む。炭化物粒少量含む。粘性無し、締まりやや有り。	
36. 暗青灰色粘質土	貝砂を中量含む。挙大土丹塊を極少量、土丹粒を中量、有機物を少量含む。粘性わずかに有り、締まりやや有り。	
37. 茶褐色砂質土	土丹粒・炭化物粒を少量含む。粘性無し、締まりやや有り。	
38. 黒灰色砂質土	有機物を少量含む。粘性無し、締まりわずかに有り。	
39. 茶褐色砂質土	有機物・小石を少量含む。粘性・締まり共に無し。	

図4　調査区中央土層堆積図　(S=1/40)

た。層位的にこの付近から掘り込まれた遺構もあるが、撹乱と遺構重複が多く認められるので最終的に検出はもう少し掘り下げた縄文時代海進・海退によって形成された自然堆積の灰～黄褐色砂層上面でおこなうことにした。遺構は平面プランの確認だけでは新旧関係が掴みきれないほど複雑に切り合っており、ほぼ全域がその覆土となって連続的に検出されるため、他の鎌倉遺跡群のように遺構を生活面や層位から明確に群別することは難しかった。よって現地での新旧関係や整理作業の検討により概ね上層・下層遺構の二群に大別したが、これはあくまで便宜上のものである。

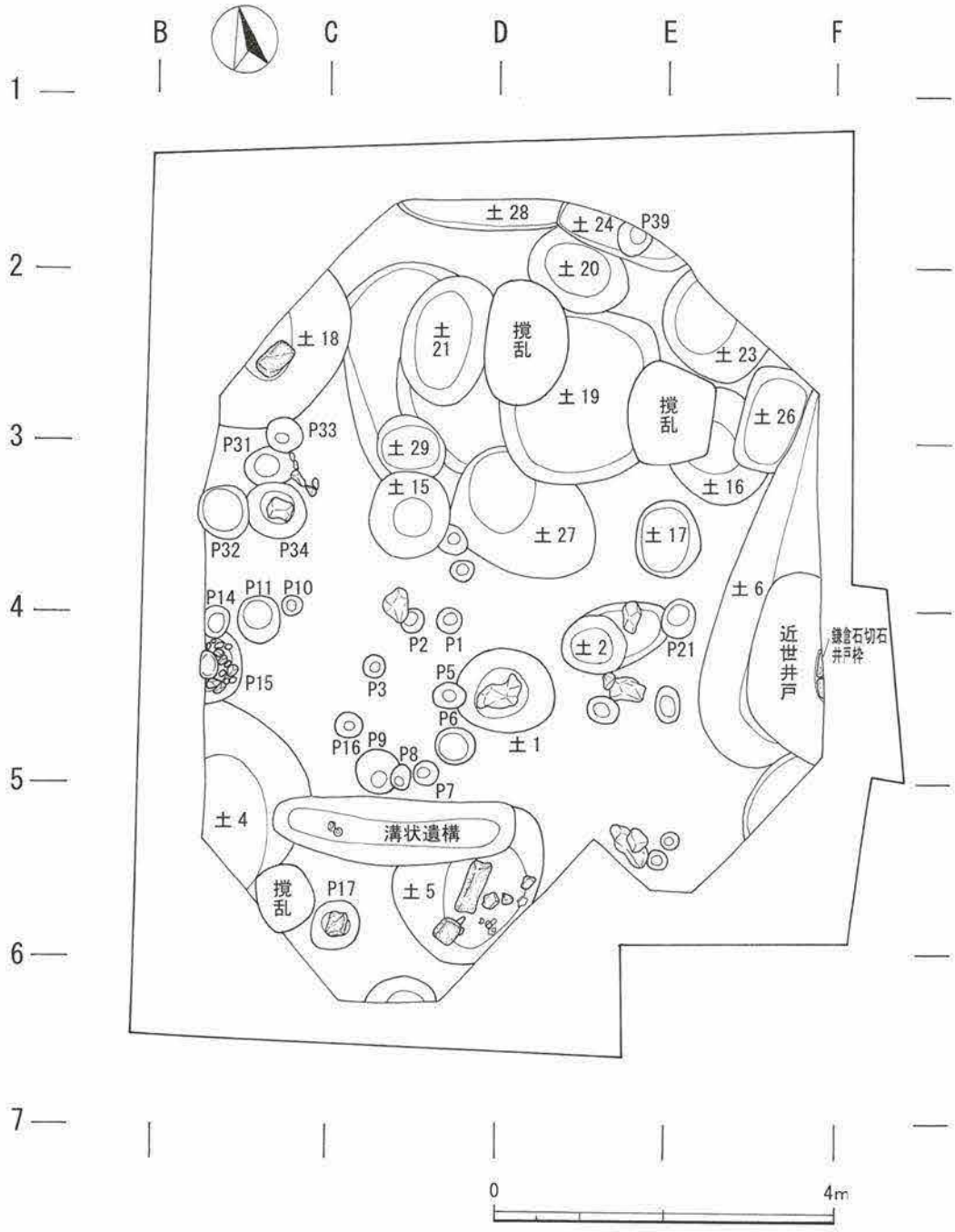


図５　上層遺構全測図　(S=1/80)

第３章　検出遺構と出土遺物

１．　検出した遺構

土坑は 35 基を確認した。

土坑 1（図 7）：調査区のほぼ中央、D-3 グリット付近で検出。短辺 100cm× 長辺 110cm× 深さ 40cm、円形。P5 にきられる。覆土は砂質土で、3 層に土層は分けられる。かわらけ・刀子などが出土。

土坑 2（図 7）：調査区のほぼ中央、E-4 グリット付近で検出。短辺 120cm× 長辺 150cm× 深さ 30cm、円形。かわらけが出土。

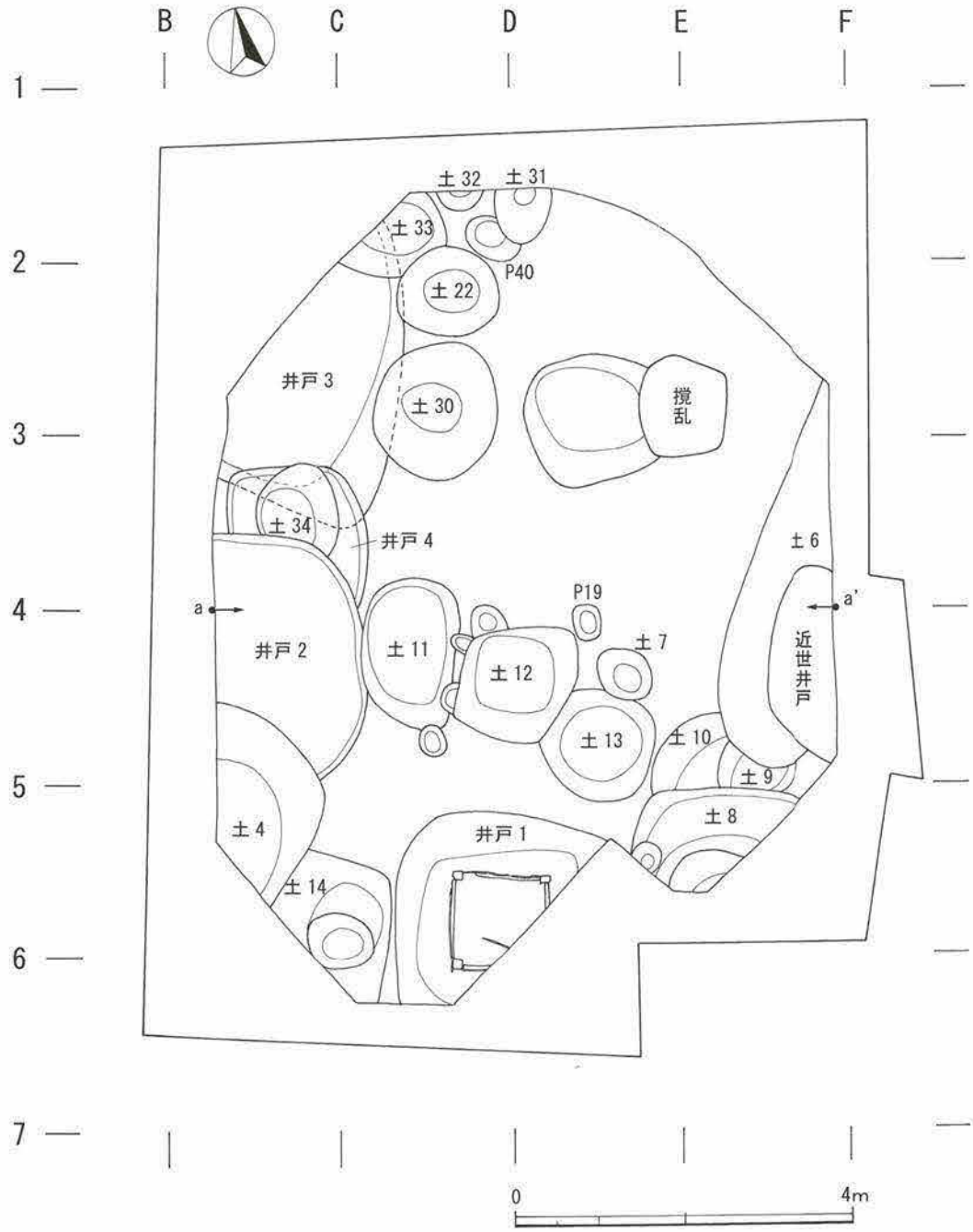


図 6　下層遺構全測図　(S=1/80)

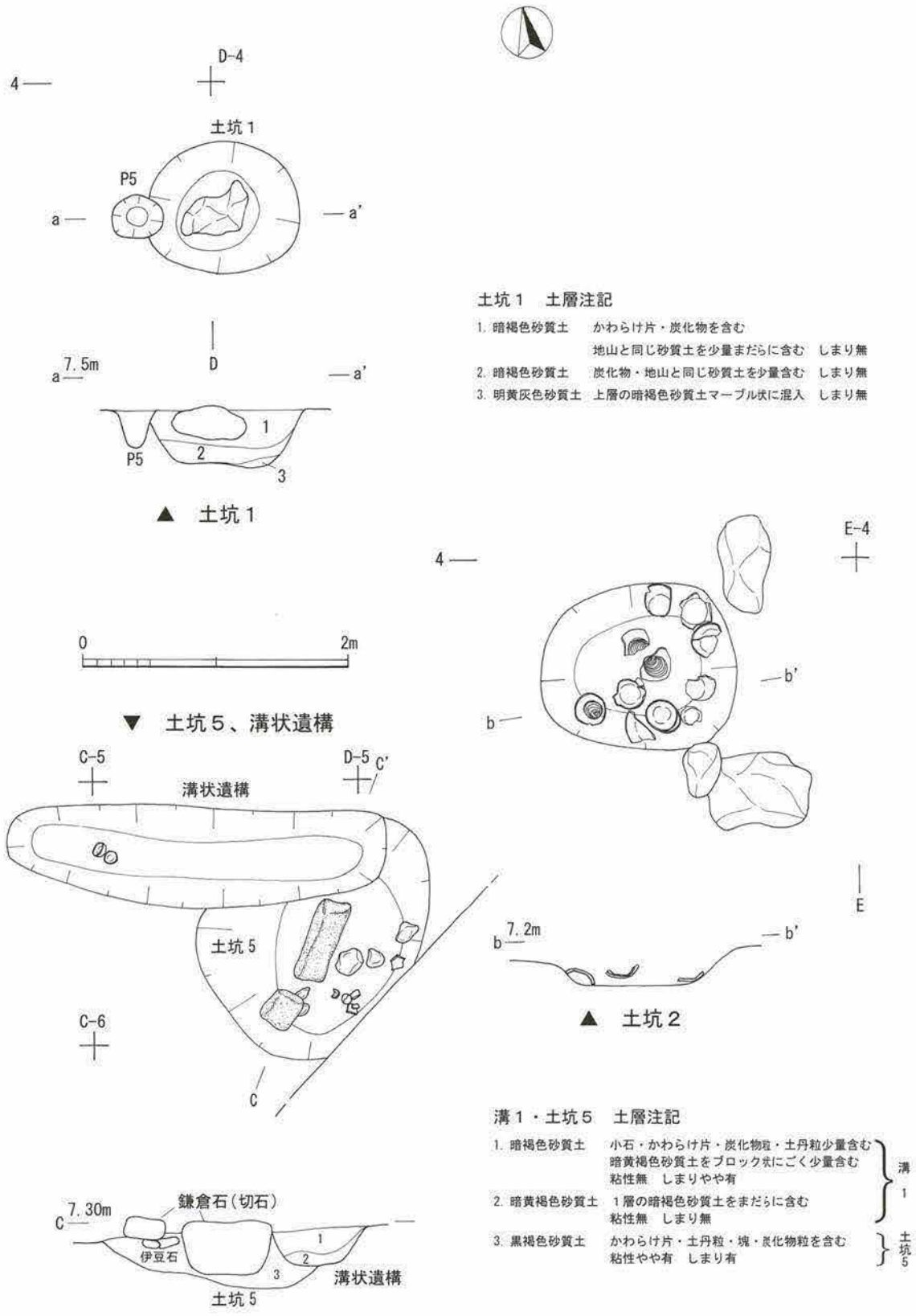


図７　土坑１・２・５、溝１　(S=1/40)

土坑 4(図 8) : 調査区の南東隅、B-5 グリット付近で検出。深さ 70cm。土坑 14・井戸 2 を壊して掘られてる。覆土は 9 層に分けられ、このうち 3 層～ 9 層でかわらけ片が他の層と比べ比較的多く含まれている。遺物はかわらけ・青磁・常滑窯製品・瀬戸窯製品が出土。

土坑 5(図 7) : 調査区の南西隅、B-5 グリット付近で検出。深さ 70cm。土坑 14・井戸 2 を壊す。覆土

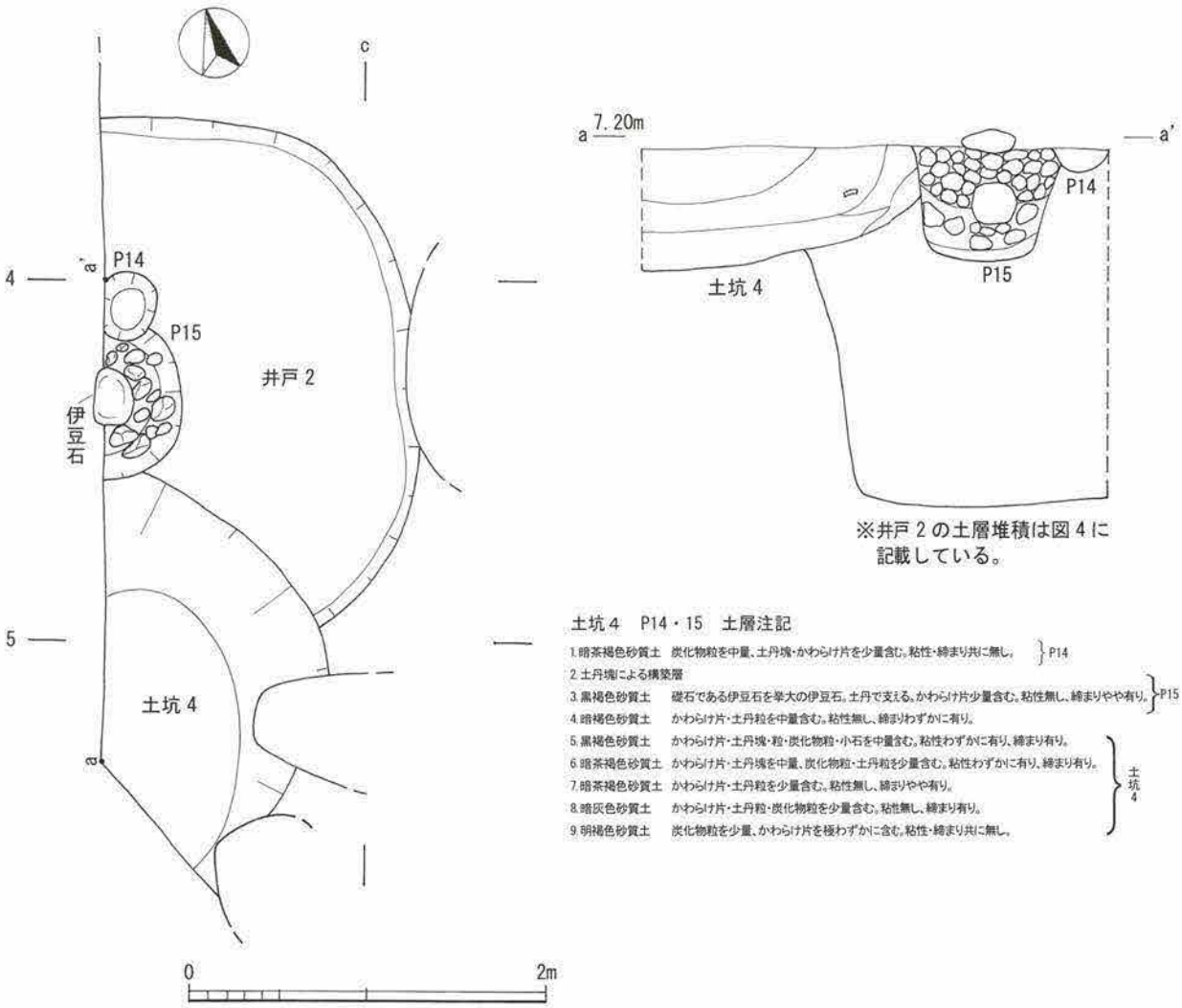


図８　土坑４、Ｐ１４・１５　(S=1/40)

は砂質で鎌倉石・伊豆石を含む。かわらけ・常滑窯製品・瀬戸窯製品・瓦質製品・硯が出土。

土坑 6(図 5)：調査区の東側、F-3 グリット付近で検出。深さ 70cm、長楕円形。土坑 9・土坑 10・土坑 26 を壊して掘り込む。かわらけ・青磁・常滑窯製品・瀬戸窯製品が出土。

土坑 7(図 9)：調査区のほぼ中央、E-4 グリット付近で検出。短辺 62cm× 長辺 71cm、楕円形。土坑 13 より新しい。

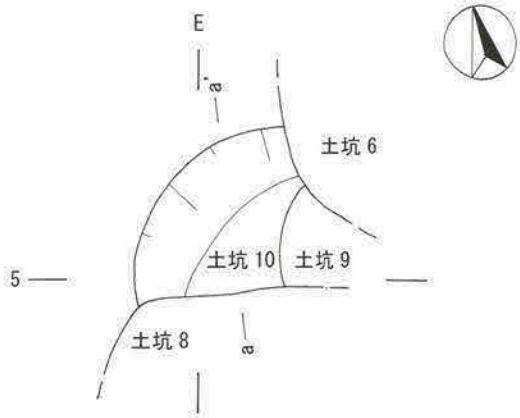
土坑8(図6)：調査区の南東隅、E-5グリット付近で検出。土坑9・土坑10をきる。かわらけ・青磁・白磁・釘が出土。

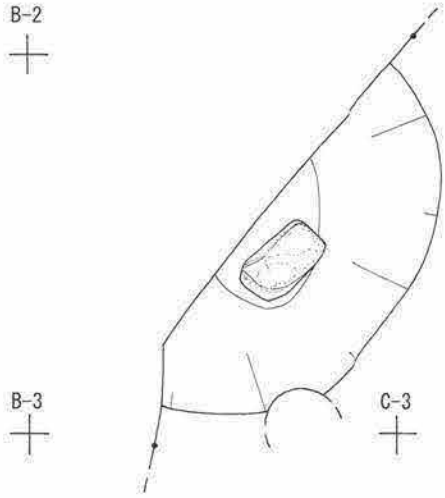
土坑9(図6)：調査区の南東隅、F-5グリット付近で検出。土坑6・土坑8に壊され、土坑10より新しい。かわらけ・常滑窯製品・渥美窯製品・瓦が出土。

土坑10(図9)：調査区の南西隅、F-5グリット付近で検出。深さ30cm。土坑6・土坑8・土坑9にきられる。覆土は砂質で3層に分けられる。かわらけが出土。

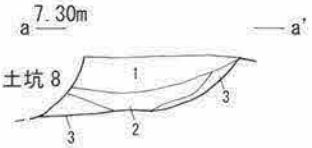
土坑 11(図 6)：調査区のほぼ中央、D-4 グリット付近で検出。短辺 123cm× 長辺 162cm、楕円形。井戸 2 より新しい。青磁が出土。

土坑 12(図 9)：調査区のほぼ中央、D-4 グリット付近で検出。短辺 143cm× 長辺 171cm× 深さ 72cm、不整形。土坑 13 を壊す。覆土は砂質であり、10 層に分けられる。このうち 3 層は炭化物で構成された層である。かわらけ・青磁・常滑窯製品が出土。





▼土坑 10



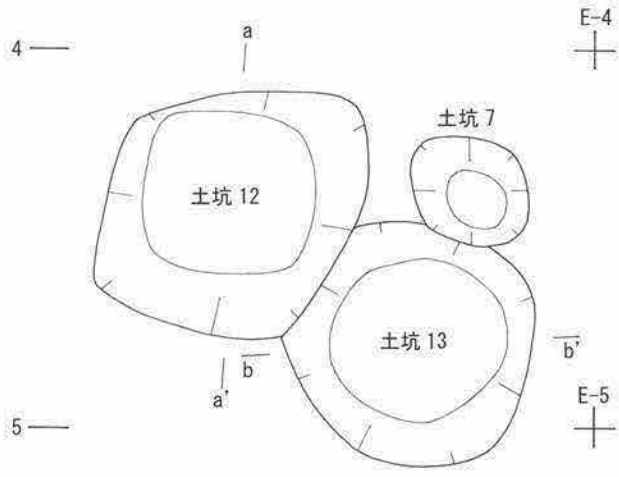
土坑 10　土層注記

1.暗茶褐色砂質土　土丹粒・炭化物を多量に含む。黄灰色砂・暗褐色粘質土ブロック混じる。やや締まり有り。
2.茶褐色砂質土　黄褐色砂質土ブロックを多量に含む。締まり有り。
3.黄灰黄灰色砂層色砂質土ブロックを少量含む。締まり無し。

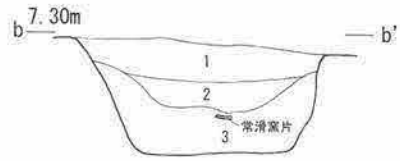
▼土坑 18

土坑 18　土層注記

1.暗褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒・片を含む。粘性若干有り、締まり無し。
2.暗青褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒を少量含む。炭化物を若干含む。暗茶褐色砂質土を少量含む。粘性やや有り、締まり若干有り。
3.暗褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒を少量含む。暗黄褐色砂質土を極少量含む。粘性やや有り、締まり若干有り。
4.黒褐色砂質土　かわらけ片を極少量含む。拳大土丹を若干含む。粘性やや有り、締まり無し。
5.暗褐色砂質土　黄褐色砂質土を含む。かわらけ片を極少量含む。粘性・締まり共にやや有り。



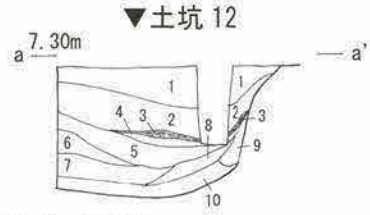
▼土坑 13



土坑 13　土層注記

1.暗茶褐色砂質土　土丹粒・炭化物を多量に含む。締まりやや有り。
2.暗茶褐色砂質土　黄灰色砂・炭化物ブロックを多量に含む。やや締まり有り。
3.暗茶褐色砂質土　黄灰色砂ブロック・炭化物・焼土を多量に含む。締まり無し。

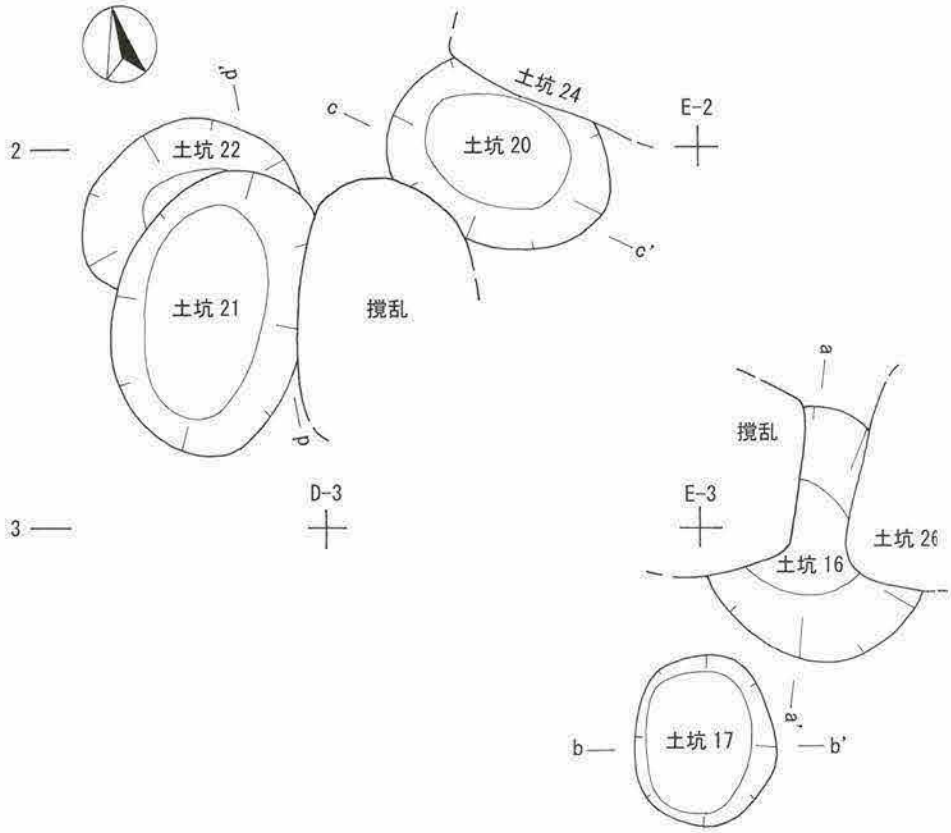
▼土坑 12

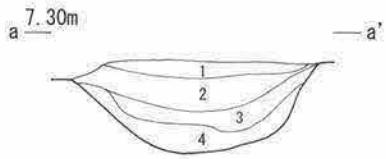


土坑 12　土層注記

1.暗茶褐色砂質土　大小土丹塊・炭化物・かわらけを含む。やや締まり有り。
2.茶褐色砂質土　土丹粒・砂利・炭化物を含む。締まり有り。
3.黒褐色砂質土　炭化物を多量に含む。締まり無し。
4.茶褐色砂質土　粘土ブロック混入。締まり無し。
5.茶褐色砂質土　黄灰色砂ブロック多量、炭化物を含む。締まり有り。
6.茶褐色砂質土　黄灰色砂ブロック少量、炭化物を含む。締まり有り。
7.茶褐色砂質土　黄灰色砂小ブロック・炭化物を含む。
8.茶灰色砂質土　黄灰色砂を多量に含む。
9.暗茶褐色砂質土　炭化物多めに含む。
10.黄灰色砂層　茶褐色砂質土が帯状に堆積。締まり無し。

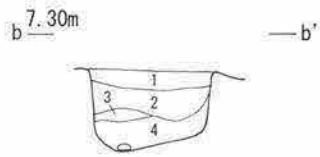
図9　土坑１０・１２・１３・１８　(S=1/40)





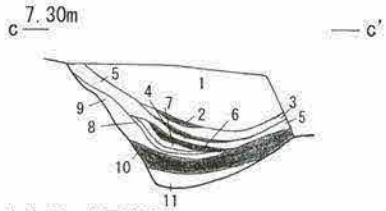
土坑 16　土層注記

1. 茶褐色砂質土　炭化物少量を含む。締まりやや有り。
2. 茶褐色砂質土　地山の砂・土丹片・炭化物を少量含む。締まりやや有り。
3. 黄褐色砂質土　茶褐色土・炭化物を少量含む。締まりやや有り。
4. 暗茶褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒・炭化物を少量含む。締まり有り。



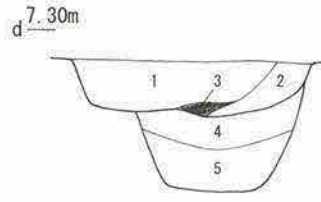
土坑 17　土層注記

1. 暗茶褐色砂質土　かわらけ片・炭化物を少量含む。締まり有り。
2. 暗茶褐色砂質土　炭化物を斑に含む。締まりやや有り。
3. 黄褐色砂質土　炭化物少量含む。締まりやや有り。
4. 暗茶褐色砂質土　地山の砂・土丹片・炭化物を少量含む。締まり有り。



土坑 20　土層注記

1. 茶褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒・炭化物を少量含む。締まりやや有り。
2. 炭化物層
3. 茶褐色砂質土　黄褐色砂ブロック少量、貝砂を極わずかに含む。締まりやや有り。
4. 炭化物層
5. 暗茶褐色粘質土　炭化物少量含む。締まりやや有り。
6. 炭化物層
7. 茶褐色砂質土　黄褐色砂ブロックをわずかに含む。炭化物少量含む。締まりやや有り。
8. 茶褐色砂質土　黄褐色砂ブロックをわずかに含む。締まりやや有り。
9. 黄褐色砂質土　貝砂を少量含む。締まりやや有り。
10. 炭化物層　瓦片・炭化物を含む。
11. 黄褐色砂質土　貝砂を極少量含む。



土坑 21・22　土層注記

1. 暗茶褐色砂質土　地山の砂ト~3cm大の小石かわらけ片・土丹粒を含む。締まりやや有り。
2. 茶褐色砂質土　3cm大の土丹かわらけ片を少量含む。締まりやや有り。
3. 炭化物層
4. 茶褐色砂質土　地山の砂かわらけ片・炭化物を少量含む。締まりやや有り。
5. 暗茶褐色砂質土　地山の砂かわらけ片を含む。締まり有り。

土坑 22

図１０　土坑１６・１７・２０～２２　(S=1/40)

土坑 13（図 9）：調査区の中央よりやや南側、E-5 グリット付近で検出。短辺 133cm×長辺 135cm 以上×深さ 62cm、円形。土坑 7・12 より古い。覆土は砂質であり、3 層に分けられ、すべての層に炭化物が多く含まれているのが特徴である。かわらけ・常滑窯製品が出土。

土坑 14（図 6）：調査区の南西隅、C-6 グリット付近で検出。不整形。土坑 4 にきられる。かわらけ・土師器が出土。

土坑 15（図 5）：調査区のほぼ中央、D-3 グリット付近で検出。短辺 96cm×長辺 105cm、円形。土坑 27 をきる。かわらけ・骨角製品が出土。

土坑 16（図 10）：調査区の北東、E-3 グリット付近で検出。長辺 143cm、円形。土坑 26 にきられる。覆土は砂質であ

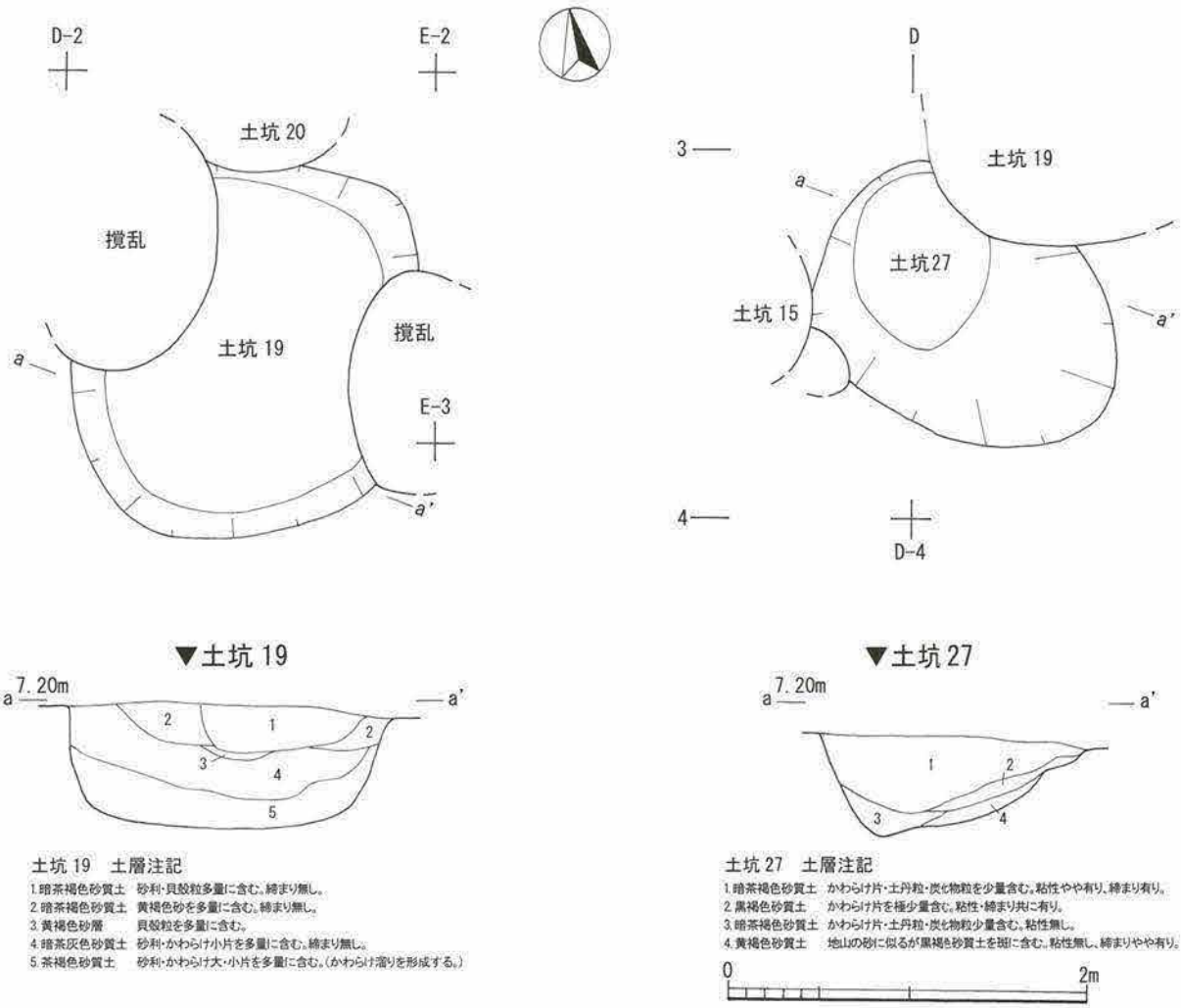


図１１　土坑１９・２７　(S=1/40)

り、4 層に分けられる。

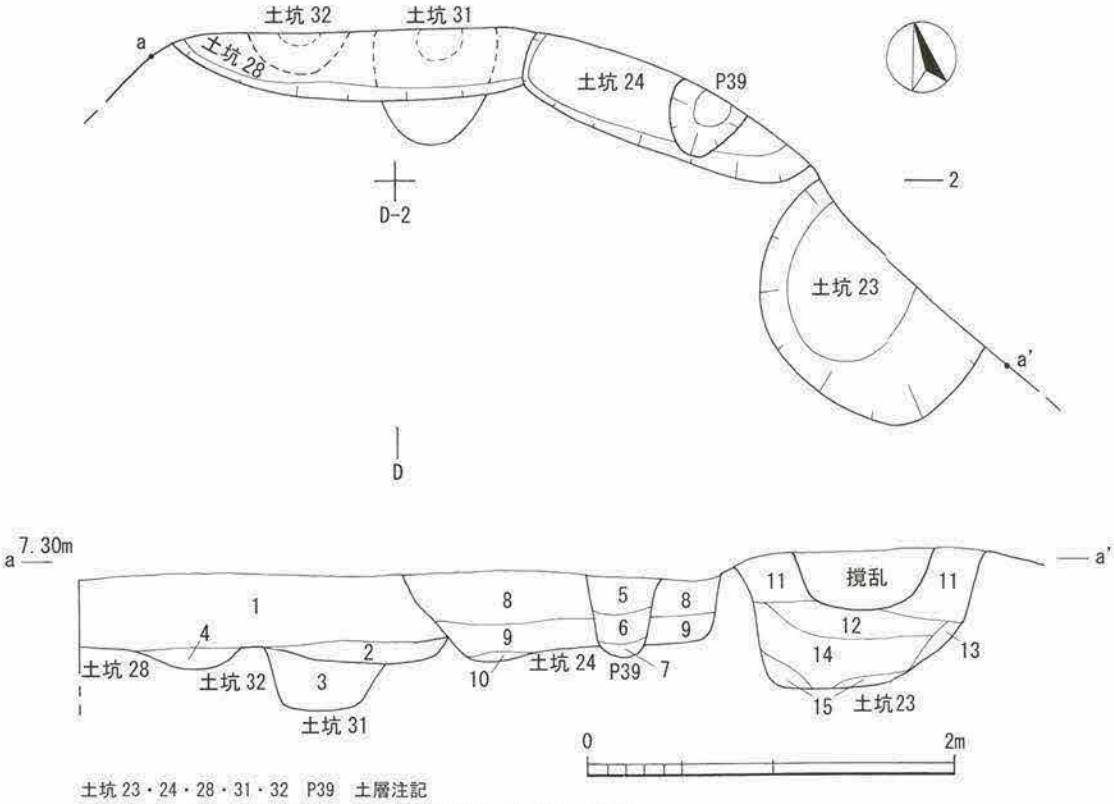
土坑 17(図 10) : 調査区の中央東側、E-4 グリット付近で検出。短辺 85cm× 長辺 93cm、楕円形。覆土は砂質であり、4 層に分けられる。かわらけ・青磁が出土。

土坑 18(図 9) : 調査区の北西隅、C-3 グリット付近で検出。短辺 85cm 以上 × 長辺 225cm× 深さ 108cm、楕円形。P33 にきられる。覆土は砂質であり、5 層に分けられる。かわらけ・青磁・青白磁・瀬戸窯製品・砥石・碁石が出土。

土坑 19(図 11) : 調査区の中央北側、E-3 グリット付近で検出。長辺 124cm× 深さ 75cm、円形。土坑 20 より古く土坑 27 より新しい。覆土は砂質で 5 層に分けられ、1 ～ 3 層からは貝殻片を、4･5 層からはかわらけ片が多量に含まれている。このほかに青磁・緑釉陶器が出土。

土坑 20(図 10) : 調査区の中央北側、D-2 グリット付近で検出。長辺 125cm× 深さ 72cm、楕円形。土坑19にきられ土坑24をきる。覆土は11層に分けられ、砂質土と炭化物層の互層になっている。かわらけ・青磁・渥美製品・瓦が出土。

土坑 21(図 10) : 調査区のほぼ中央、D-3 グリット付近で検出。短辺 103cm 以上 × 長辺 163cm× 深さ 32cm、楕円形断面皿状の浅い土坑である。土坑 22 をきる。覆土は砂質で単層である。



土坑 23・24・28・31・32　P39　土層注記

1. 茶褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒を少量、炭化物粒を極少量含む。粘性無し、締まり有り。　土坑28
2. 暗茶褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒を少量、0.3～0.5cmの小石を極少量を含む。粘性・締まり共にやや有り。
3. 暗灰色砂質土　黄灰色砂質土を斑状に中量、炭化物粒を中量、土丹塊を極少量含む。粘性わずかに有り、締まりやや有り。　土坑 31
4. 暗灰色砂質土　黄灰色砂質土を斑状に少量、炭化物粒を中量、かわらけ片を少量含む。粘性・締まり共にやや有り。　土坑32
5. 暗茶褐色砂質土　かわらけ片中量、土丹粒を少量含む。粘性無し、締まりやや有り。
6. 黒褐色砂質土　かわらけ片・小石を少量、土丹粒を中量含む。粘性・締まり共にやや有り。　P39
7. 暗灰色砂質土　地山の砂を全体に多量に含み、炭化物粒を少量含む。粘性無し、締まりやや有り。
8. 暗茶褐色砂質土　5層に似るが5層よりかわらけ片・土丹粒を少量含む。炭化物粒を少量含む。粘性わずかに有り、締まりやや有り。
9. 暗灰色砂質土　明黄褐色砂質土を中量、かわらけ片・土丹粒を少量含む。粘性・締まり共にやや有り。　土坑 24
10. 暗灰色砂質土　9層に似るが明黄褐色砂質土を多量に含む。粘性・締まり共に無し。
11. 茶褐色砂質土　かわらけ片・炭化物粒・土丹粒を中量含む。粘性・締まり共にやや有り。
12. 茶褐色砂質土　かわらけ片・炭化物粒・土丹粒を少量含む。粘性やや有り、締まり無し。
13. 明黄灰色砂質土　地山の砂に似るが、暗茶褐色砂質土を斑状に中量含む。粘性・締まり共に無し。　土坑 23
14. 暗褐色砂質土　炭化物粒を中量、明黄灰色砂質土を斑状に少量含む。粘性・締まり共にやや有り。
15. 暗灰色砂質土　明黄灰色砂質土を斑状に中量含む。粘性・締まりわずかに有り。

図１２　各土坑・Pit　(S=1/40)

土坑 22（図 10）：調査区の中央北側、D-2 グリット付近で検出。短辺 52cm 以上 × 長辺 60cm× 深さ 72cm、円形。土坑 33・井戸 3 をきる。覆土は砂質であり、4 層に分けられる。かわらけ・青磁が出土。

土坑 23（図 12）：調査区の北東隅、E-2 グリット付近で検出。長辺 123cm× 深さ 75cm、円形。覆土は砂質であり、5 層に分けられる。かわらけ・青磁・白磁・青白磁・渥美窯製品・瓦・釘・骨未製品が出土。

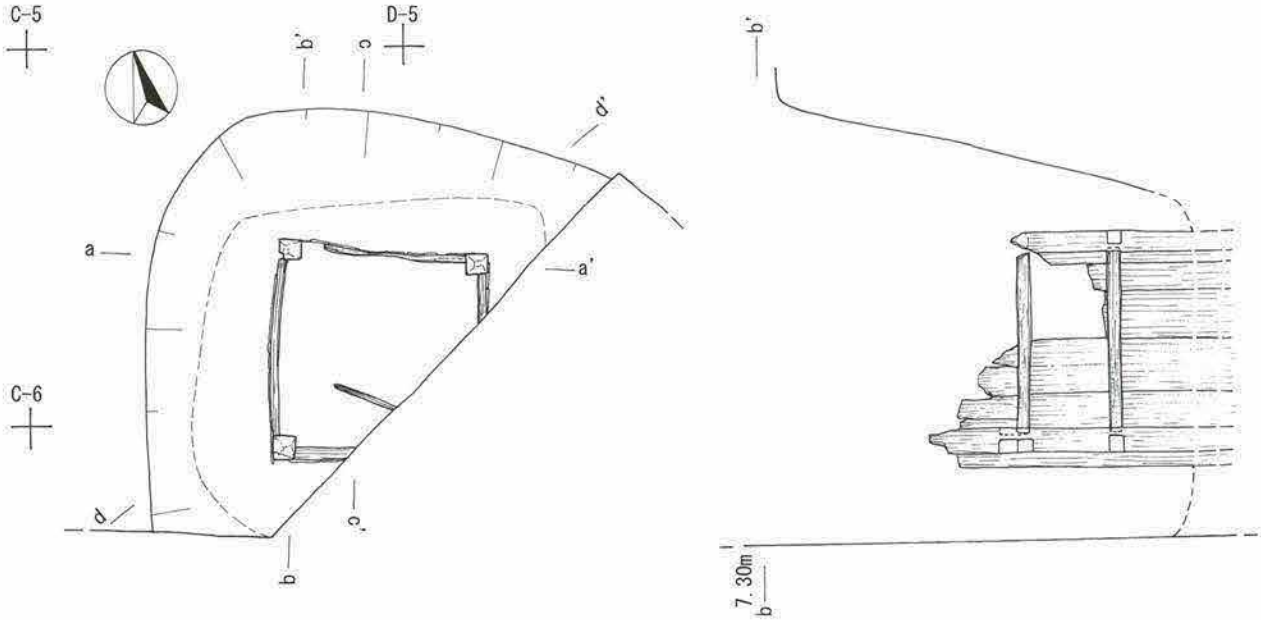
土坑 24（図 12）：調査区の北側隅、E-2 グリット付近で検出。長辺 170cm× 深さ 53cm、楕円形。P39 にきられ土坑 28 をきる。覆土は砂質であり、3 層に分けられる。常滑窯製品が出土。

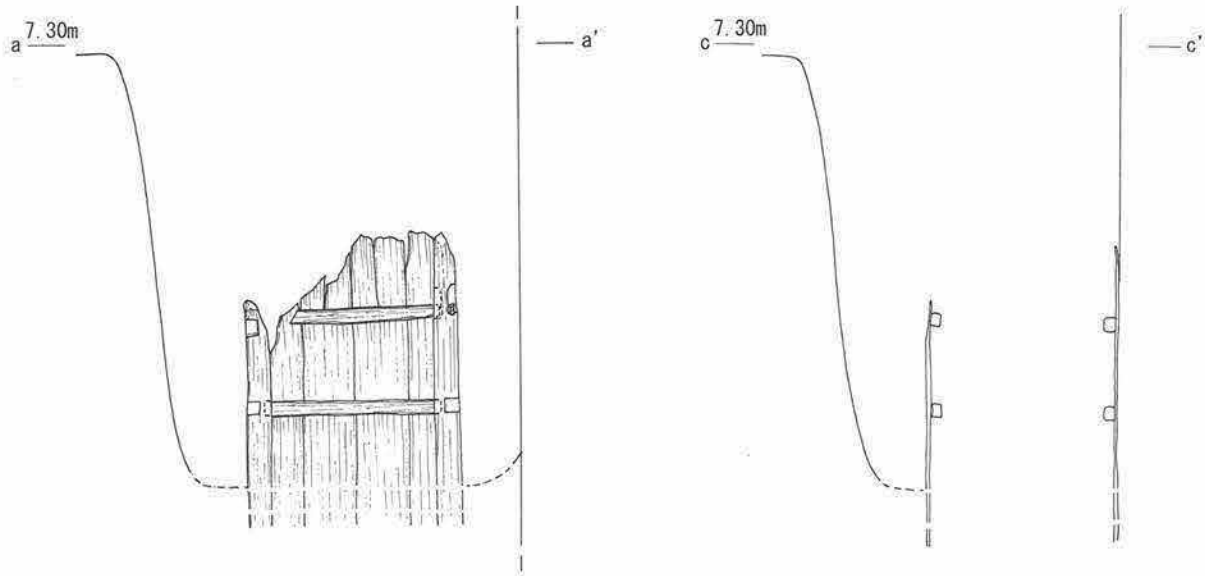
土坑 27（図 11）：調査区のほぼ中央、E-2 グリット付近で検出。短辺 113cm 以上 × 長辺 184cm× 深さ 52cm、楕円形。土坑 15・19 にきられる。覆土は砂質であり、4 層に分けられる。土師器が出土。

土坑 28（図 12）：調査区の北隅、D-2 グリット付近で検出。長辺 190cm 以上 × 深さ 43cm。土坑 24 にきられ土坑 31・32 をきる。覆土は単層の砂質土である。

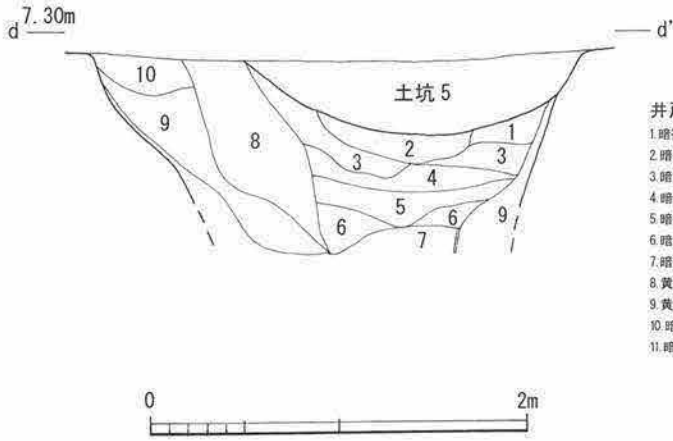
土坑 30（図6）：調査区の中央北側、D-3 グリット付近で検出。短辺 73cm× 長辺 82cm、円形。井戸 3 をきる。かわらけ・青磁・常滑窯製品・須恵器が出土。

土坑 31（図 12）：調査区の北隅、D-2 グリット付近で検出。短辺 73cm× 長辺 182cm× 深さ 43cm、楕円形。土坑 28 にきられる。覆土は砂質で、2 層に分けられる。このうち上部の 1 層には炭化物がやや多めに含





▼土層堆積図



井戸1　土層注記

1. 暗褐色砂質土　かわらけ片・炭化物粒・土丹粒を含む。地山の砂4%程混入。粘性わずかに有り、締まりやや有り。
2. 暗褐色砂質土　炭化物粒多量、かわらけ片・土丹塊を中量含む。粘性わずかに有り、締まりやや有り。
3. 暗褐色砂質土　炭化物粒多量、かわらけ片・土丹塊・暗灰色砂を少量含む。粘性・締まり共にやや有り。
4. 暗灰色砂質土　かわらけ片、炭化物粒、土丹塊・粒、小石を少量含む。粘性無し、締まりやや有り。
5. 暗褐色砂質土　土丹塊・粒、炭化物粒、かわらけ片を中量含む。粘性無し、締まりわずかに有り。
6. 暗灰色砂質土　暗黄灰色砂を多量、炭化物粒・土丹粒を少量含む。粘性・締まり共に無し。
7. 暗褐色砂質土　炭化物粒を多量、かわらけ片・土丹塊を極少量含む。粘性やや有り、締まり無し。
8. 黄褐色砂質土　黄褐色砂を斑に含む、かわらけ片・小石・炭化物粒を少量含む。粘性・締まり共に無し。
9. 黄褐色砂質土　暗褐色砂を斑に含む。炭化物粒を極少量含む。粘性・締まり共に無し。
10. 暗褐色砂質土　小土丹塊・かわらけ片を少量、小石を極わずかに含む。粘性無し、締まり有り。
11. 暗褐色砂質土　炭化物粒を少量含む。粘性・締まり共に無し。

図１３　井戸１　(S=1/40)

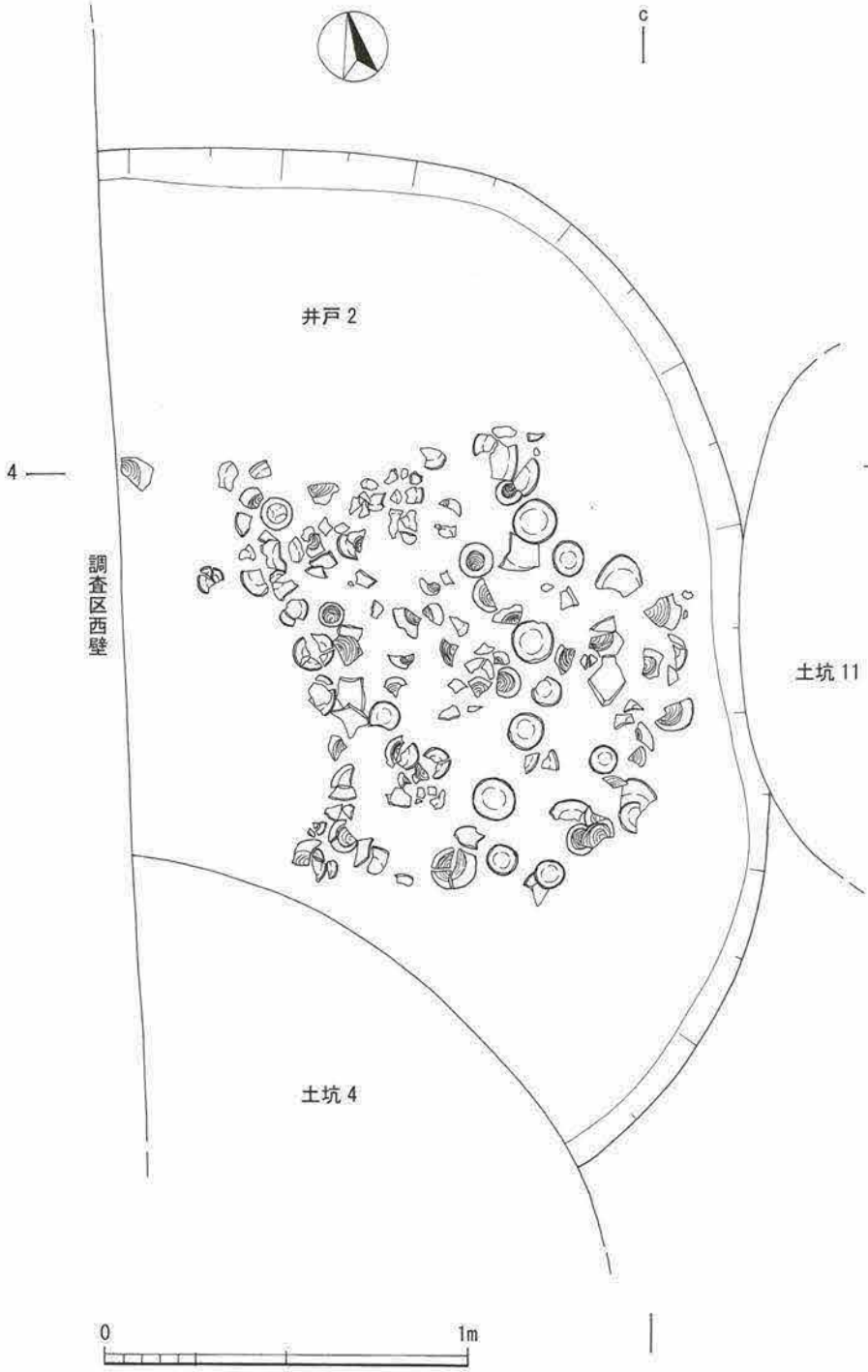


図１４　井戸２上層遺物出土状況　(S=1/20)

まれている。

土坑 32(図 12) : 調査区の北東、C-2 グリット付近で検出。深さ 13cm。土坑 28 にきられる。覆土は砂質であり、確認された限りでは単層である。覆土は土坑 31 の上層に似る。かわらけが出土。

土坑 33(図 15) : 調査区の北西隅、C-2 グリット付近で検出。短辺 120cm 以上 × 深さ 43cm、楕円形。井戸 3 をきり土坑 22･28 にきられる。覆土は砂質で 3 層に分けられる。

土坑 34(図 15) : 調査区のほぼ中央、E-2 グリット付近で検出。短辺 103cm× 深さ 70cm。井戸 3･4 をきり井戸 2 にきられる。覆土は単層の砂質土であり、かわらけ･青磁・常滑窯製品・瓦・釘が出土。

土坑 35(図 6) : 調査区の中央北側、E-3 グリット付近で検出。短辺 82cm、不整形。土坑 19 にきられる。常滑窯製品・転用陶器が出土。

井戸は 4 基を確認した。

井戸 1(図 13) : 調査区の中央南隅、D-6 グリット付近で検出。上部は腐食により木材は残存していないが、確認面より 1.0m 掘り下げた段階で木材を確認した。木枠は一辺約 110cm の方形を呈する横桟支柱式で側板幅は 17 ～ 29cm。掘り方は隅丸方形を呈している。崩落の恐れがあるために完堀は出来なかったが、ピンポールを差し込み底部の状態を確認したところ底板や曲げ物の存在は確認されなかった。かわらけ･青磁・常滑窯製品・瀬戸窯製品・瓦質製品・骨角製品・木製品・石製品が出土。

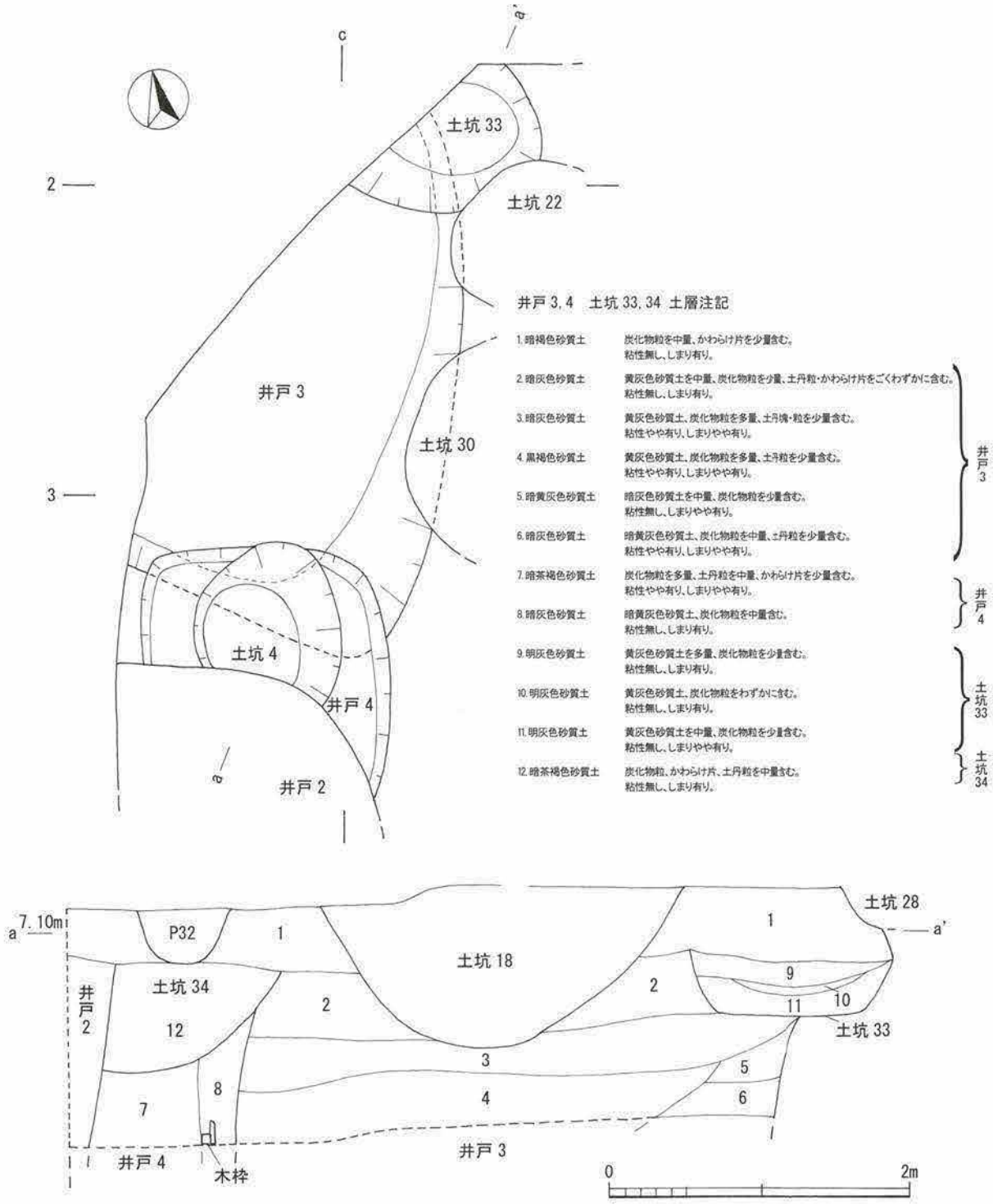
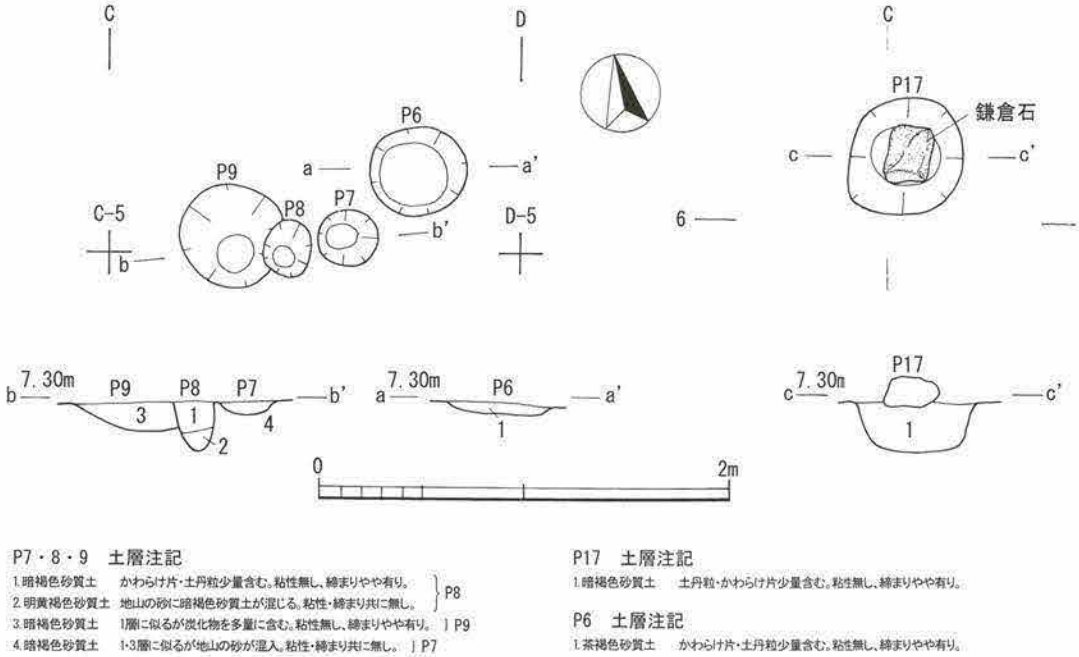


図１５　井戸３・４、土坑３３・３４　(S=1/40)

井戸 2(図 8・14)：調査区西隅 C-4 付近で検出。平面形体は隅丸方形を呈しており、深さ 2.1m。遺構の形状から井戸と判断した。土層の観察から素掘りの井戸であった可能性が高い。なお、覆土上層からは大量のかわらけが出土している。

井戸 3(図 15)：調査区北西隅 C-3 付近で検出。井戸 4 にきられる。平面形体は不整形であり、湧水があり崩落の危険があったため 1.6m までの深さまでしか調査をおこなえなかった。土層の観察では木枠と思われる木材は確認されなかったが、素掘りか木組みかは判断できなかった。かわらけ・青磁・白磁・



P7・8・9　土層注記
1.暗褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒少量含む。粘性無し、締まりやや有り。 } P8
2.明黄褐色砂質土　地山の砂に暗褐色砂質土が混じる。粘性・締まり共に無し。
3.暗褐色砂質土　1層に似るが炭化物を多量に含む。粘性無し、締まりやや有り。] P9
4.暗褐色砂質土　1-3層に似るが地山の砂が混入。粘性・締まり共に無し。] P7

P17　土層注記
1.暗褐色砂質土　土丹粒・かわらけ片少量含む。粘性無し、締まりやや有り。

P6　土層注記
1.茶褐色砂質土　かわらけ片・土丹粒少量含む。粘性無し、締まりやや有り。

図１６　Ｐ６～９・１７　(S=1/40)

常滑窯製品・瓦が出土。

井戸 4(図 15)：調査区中央西隅 C-3 付近で検出。井戸 3 をきり井戸 2 にきられる。掘り方平面形体は隅丸方形であり、土層の観察から木枠と思われる木材の一部が確認できたため木組みの井戸と思われるが、湧水があり崩落の危険があったため 1.6m までの深さまでしか調査をおこなえなかった。

溝は 1 条を確認した。

溝 1(図 7)：調査区の南側 C ～ D-5 付近で検出。溝幅 72cm× 長さ 280cm× 深さ 30cm。土坑 4・5 をきる。覆土は砂質であり、かわらけ・白磁・常滑窯製品・石製品が出土。

ピット (P) は 40 穴ちかく確認されているが、この内特徴のあるピットのみを報告することにする。

P15(図 8)：中央西隅 B-4 付近で検出。短辺 42cm× 長辺 93cm× 深さ 61cm、円形。土坑 4、井戸 2 をきり P14 にきられる。覆土には伊豆石・砂岩塊・泥岩塊を多量に含み覆土上部に設置されている伊豆石製の礎石を支えている。同様の構造の柱穴が調査区内からは確認されていないため、この柱穴に伴う建物は調査区より西側に存在していたと思われる。

P17(図 16)：中央南西隅 C-6 付近で検出。短辺 63cm× 長辺 66cm、円形。土坑 14 をきる。覆土上部に平坦に加工された砂岩がおかれているが、この石が礎石になるかは不明。

2．　出土した遺物

a. 土坑出土遺物

土坑 1（図 17－1 ～ 8）

1･2 は手捏ね成形のかわらけである。1 は小皿で推定口径 9.3 ㎝、底径 7.2 ㎝、器高 2.1 ㎝、2 は大皿で推定口径 14.2 ㎝、底径 11.8 ㎝、器高 3.3 ㎝を計り、胎土は両資料とも淡橙色の粉質精良土である。3 は底部糸切り成型のかわらけ大皿で口径 14.7 ㎝、底径 9.8 ㎝、器高 2.9 ㎝と器高の低い大型口径である。器型は内底面が広く器壁が開いた立ち上がりである。4 は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で推定口径 14.2 ㎝、素地は灰白色で緻密、釉薬は淡緑色透明である。口縁部に刻みで輪花様に施す。口縁部下と刻み目下に区画の二条沈線を片切彫りし、飛雲文を描くもので龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4 類（横田･森田 1978）に相当する。5 は常滑窯片口鉢Ⅰ類口縁部、6 は渥美窯片口鉢口縁部、7 は渥美窯甕口縁部片である。8 は残存長 27.5 ㎝、刀身の幅 2.3 ㎝、厚さ 3 ㎜、茎幅 1.6 ㎝を計り、腐食が進行しており茎の目釘などは不明である。

土坑 2（図 17－9 ～ 27）

9 ～ 26 は底部糸切り成形のかわらけである。小皿は 9 が口径 7.5 ㎝、底径 5.8 ㎝、器高 1.4 ㎝と器高が低く口径と底径の比率が小さい。10 が口径 7.9 ㎝、底径 5.2 ㎝、器高 2.1 ㎝を計り口径・底径比がやや大きい数値を示す。11 ～ 25 は主に砂粒などを含む粉質胎土であるが、21 は口径 11.3 ㎝の中皿、26 は粉質胎土で口径 17.0 ㎝、器高 5.0 ㎝と「薄手丸深」特大になる資料であり、それ以外は口径 12 ㎝前後の大皿である。21～23は口縁部周辺の内外面に煤が付着し灯明皿と思われる。27は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面の口縁直下に片切彫りによる二条沈線を施し、素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明である。

土坑 4（図 17－28～38）

28～ 33 は底部糸切り成形のかわらけである。28～ 32 の小皿は口径 8 ㎝台であるが、32 の粉質精良胎土以外は混入物がやや多い。33 は口径12.3 ㎝の大皿である。34 は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面の口縁直下に片切彫りによる二条沈線を施し、素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明である。35 は瀬戸窯灰釉の壺または瓶類の胴部片である。36 は常滑窯片口鉢Ⅰ類口縁部、37 は常滑窯片口鉢Ⅱ類口縁部で共に内面が使用により磨耗している。38 はかわらけを転用した鋳造品の坩堝か。内面から外面口縁部まで黒紫色の溶融物が付着し気泡が潰れた無数の小穴がみられ、外面は強い火を受け赤変している。

土坑 5（図 18－1～26）

1～17は底部糸切り成形のかわらけである。小皿は1～9が口径 6 ㎝台と小さく、いずれも厚めの器壁で開きながら直線的に立ち上がり、10は背高で内湾気味の薄い器壁である。11～13 は口径9㎝前後の中皿で器壁が直線的に立ち上がり、口縁が外反気味になる。14～ 17 は口径 11 ㎝台の大皿で体部中位から屈曲して口縁は外反する。18～ 20 は瀬戸窯製品である。18 緑釉小皿口縁～体部、19 は卸皿底部で内底部の卸目は浅く目は粗い。体部に灰釉を薄く刷毛塗りで施す。20 は折縁深皿体部片で灰釉の薄い刷毛塗りが斑に発色、胎土は黄白色で堅微である。21～23は常滑窯甕の口縁部であり、中野編年の 8 形式に相当すると考えられる（中野 1994）。23は火鉢口縁部、24･25 は火鉢底部である（河野 1993）。23は口縁部が肥厚する鉢形器型のもので、胎土は粉質良好で微砂を交えたあまい焼成。24 は軟礫を含む瓦質の胎土、器表は磨かれ黒色処理され、外面の底部脇に横位の沈線と菊花文の小型スタンプを施す。25 は胎土が軟質礫を交えた粗胎の瓦に類似し、厚さ 1.2 ㎝ほどの底板内面に斜格子文の暗文を入れ外面は砂目底になる。26 は上面を欠損するが硯である。

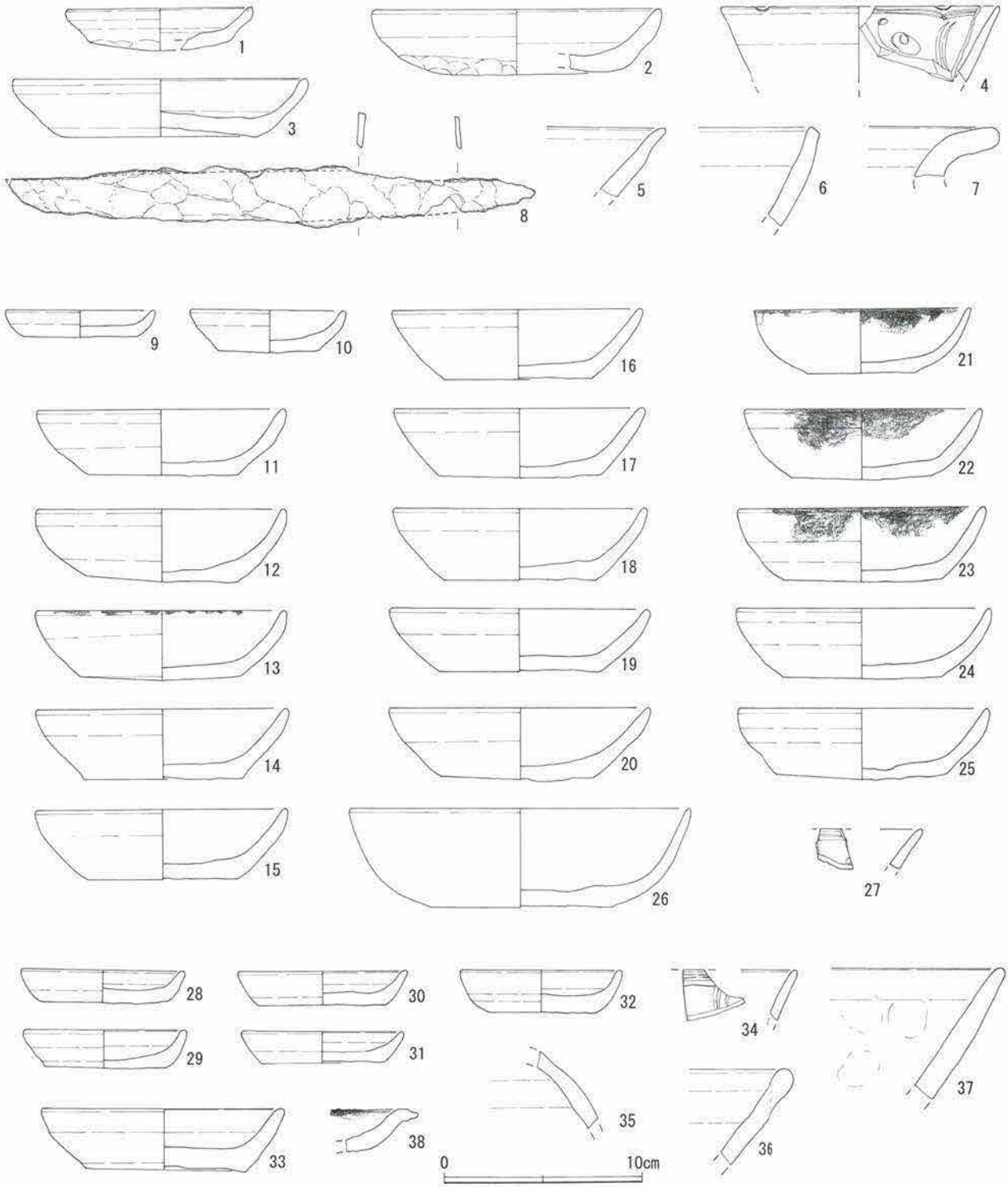


図１７　土坑１・２・４出土遺物　(S=1/3)

土坑 6（図 18－27～30）

27 は口径 7.8 ㎝で低い器高の底部糸切り成形のかわらけである。28 は混入物が多めの弱砂質胎土の手捏ね成形のかわらけ大皿である。29 は男瓦（丸瓦、以下省略）で凸面に縄目叩き、凹面に布目痕があり鶴岡八幡宮中世基盤層に伴う鎌倉時代初期瓦（男瓦Ⅰ類 B）と胎土・成形が類似する。30 は土師器甕の底部～胴部下位の破片である。

土坑 8（図 18－31～38）

31～34 は底部糸切り成形のかわらけである。31･32 は口径 8.5 ㎝前後の小皿、33 は口径が 11 ㎝台の

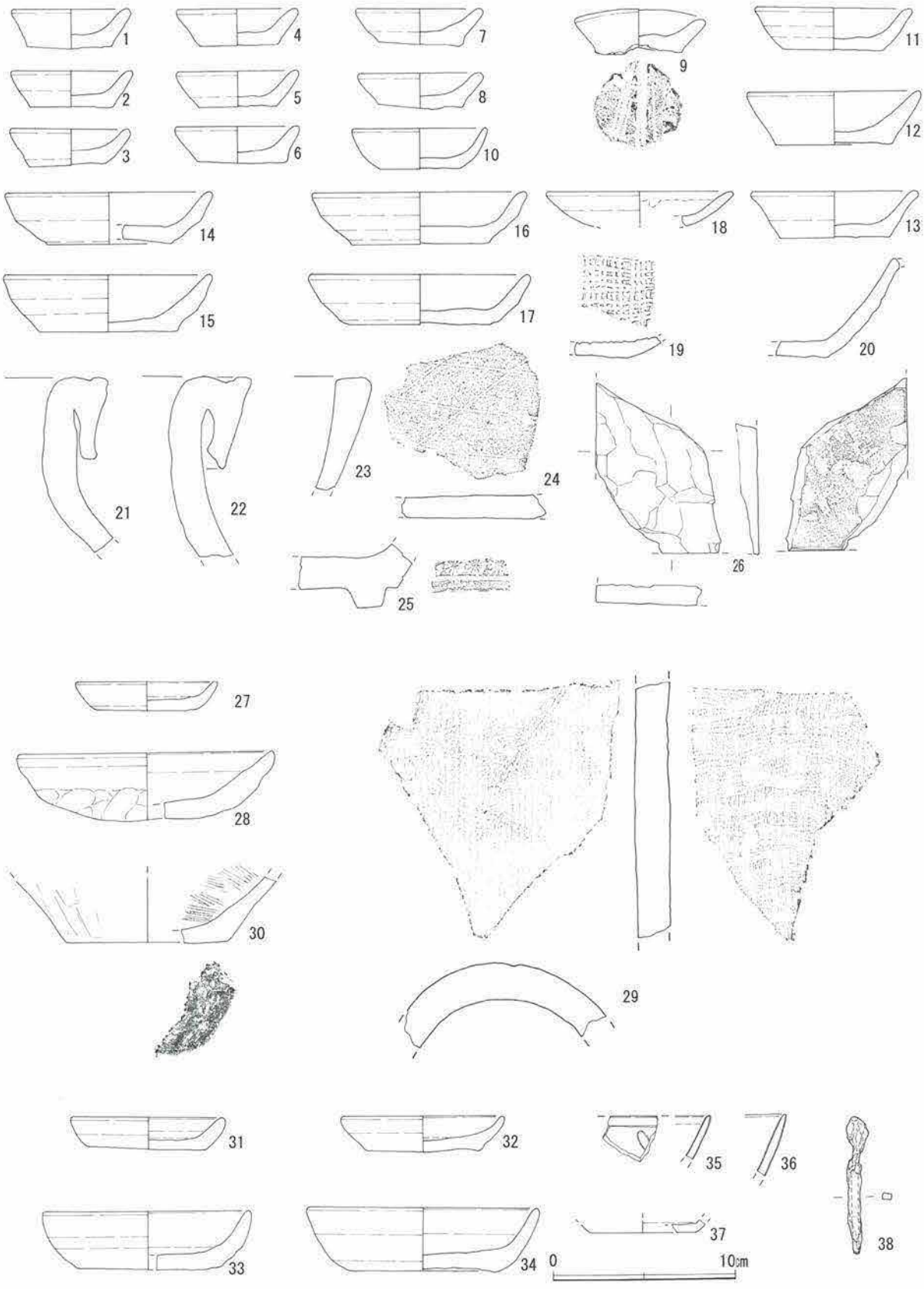


図１８　土坑５・６・８出土遺物　(S=1/3)

中皿 34 は口径が 13 cmにちかい大皿である。35･36 は龍泉窯系青磁碗口縁部で 35 は内面に劃花文を片切彫りで施文、36 は無文であり、共に素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明である。37 は白磁口冗皿の

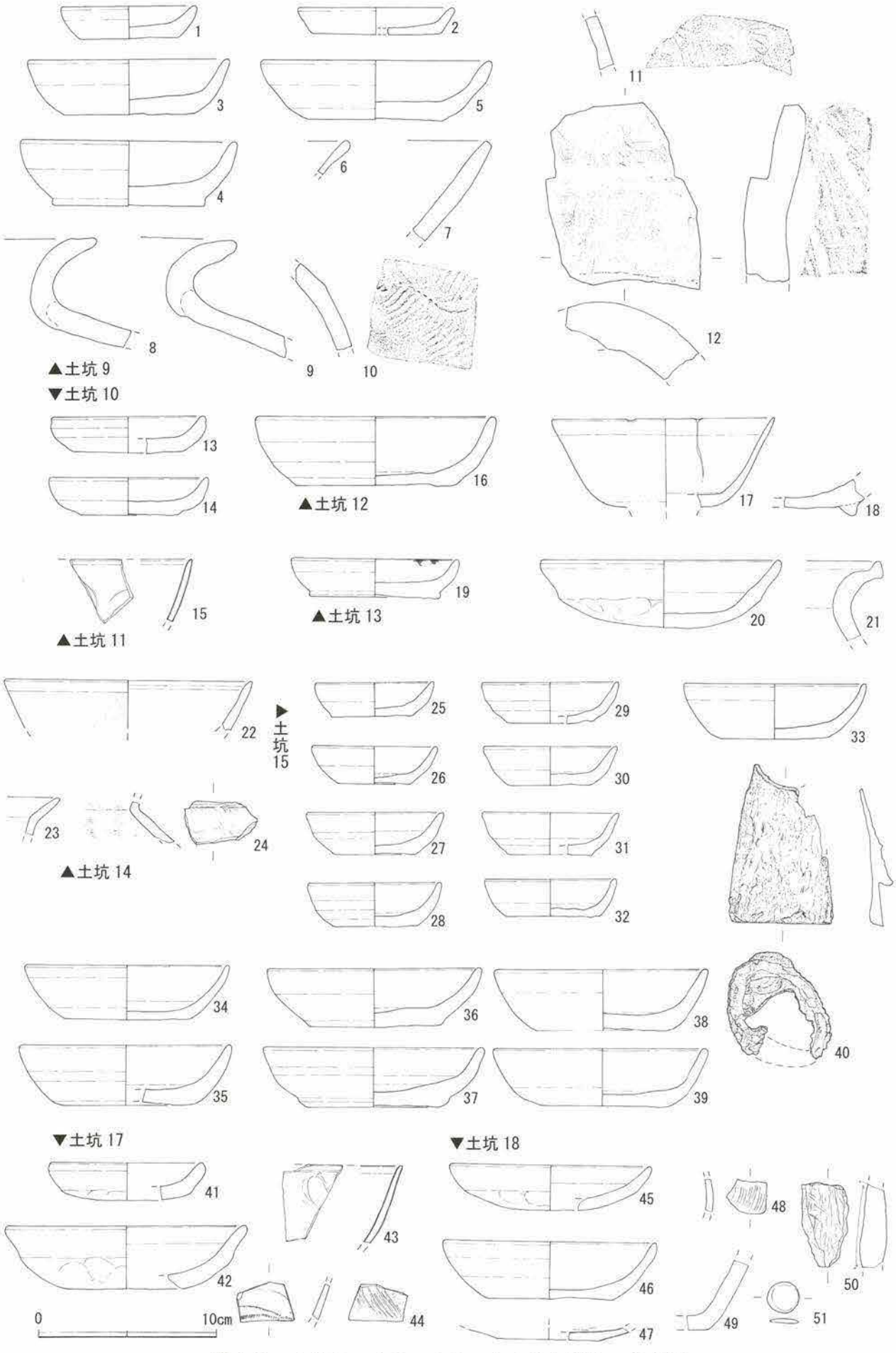


図１９　土坑９～１５・１７・１８出土遺物　(S=1/3)

底部。素地は白色緻密、釉薬は灰白色で平底外面の釉を粗く拭き取る。38は鉄釘で断面方形である。

土坑9(図19－1～12)

1～5は底部糸切り成形のかわらけである。1は口径7.7㎝の弱砂質土で厚い器壁をもち、2は口径8.6㎝で器高が低く器壁が薄手であり精良土。3～5は内湾気味の器形で厚手の器壁であり胎土は夾雑物の多い砂質土である。6は胎土が灰白色精良な北部系山茶碗口縁部、7は常滑窯片口鉢Ⅱ類口縁部である。8･9は渥美窯甕口縁部、10は渥美窯肩部片で胎土は共に長石微粒を少量交えた灰～青灰色で緻密。10には平行叩き目痕がある。11は常滑窯胴部。表面に菊花文と斜格子を組み合わせた叩き目痕がある。12は玉縁を残す男瓦で永福寺創建期所用瓦と同類である。

土坑10(図19－13･14)

13･14は底部糸切り成形のかわらけである。口径8.5㎝前後で、厚手の器壁で体部は内湾している。胎土は夾雑物を多く含む砂質土である。

土坑11(図19－15)

15は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面に片切彫りで施文されている。素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明で細やかな貫入がある。

土坑12(図19－16～18)

16は底部糸切り成形のかわらけ大皿である。器高は高く、胎土は夾雑物を多く含む粉質土。17は龍泉窯系青磁輪花碗で素地は灰色の岩石質、釉薬は灰緑色半透明、内面に白色の筋がある。18は常滑窯片口鉢Ⅰ類底部片で断面三角形の貼付高台をもつ。

土坑13(図19－19～21)

19は底部糸切り成形のかわらけ小皿で、器高は低く胎土は弱砂質土。20は手捏ね成形かわらけ大皿で、指頭との境を強い横ナデを施し明瞭な稜となり、胎土は粉質精良土。21は常滑窯甕口縁部で形態から13世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑14(図19－22～24)

22は土師器坏口縁部、23･は土師器甕口縁部、24は土師器甕肩部である。

土坑15(図19－25～40)

25～39は底部糸切り成形のかわらけである。25～32の小皿は口径8㎝以下、器高2㎝以上の背高で薄い器壁をもち、胎土は粉質精良土。中皿は口径10㎝台、大皿は口径12㎝台で器高は高く、薄手の器壁をもつ側面観碗形で胎土は粉質精良土が主体である。40は用途不明骨角製品で下面と上端に刃物による削りで整形された痕跡がある。加工途中のものであろう。

土坑17(図19－41～44)

41･42は粉質胎土の手捏ね成形かわらけの大皿・小皿で、厚手器壁で口唇端部が丸みをもつ。43は龍泉窯系劃花文碗口縁部で内面に切り彫り劃花文を施す。素地は灰白色緻密、釉薬は淡灰緑色透明である。44は同安窯系青磁櫛描文碗体部で素地は黄灰色粘質で緻密。釉薬は淡灰緑色透明の薄い釉薬である。

土坑18(図19－45～51)

45は手捏ね成形、46は底部糸切り成形のかわらけ大皿である。47は同安窯青磁皿底部で素地は灰白色堅微。釉薬は淡灰緑色透明の薄い施釉で外底露胎である。48は青白磁で素地は白色精緻。釉薬は淡青白色で気泡多めのやや不透明、外面に櫛描文を施す梅瓶の胴部小片と思われる。49は瀬戸窯折縁深皿底部で胎土は黄白色できめが粗くやや軟質である。50は両面に使用痕が残る砥石。51は碁石黒の石製品。

土坑19(図20・21－1～126)

この土坑覆土中からは図20・21で示したとおり、ゴミ穴に廃棄されたような状況で破片数1213点と

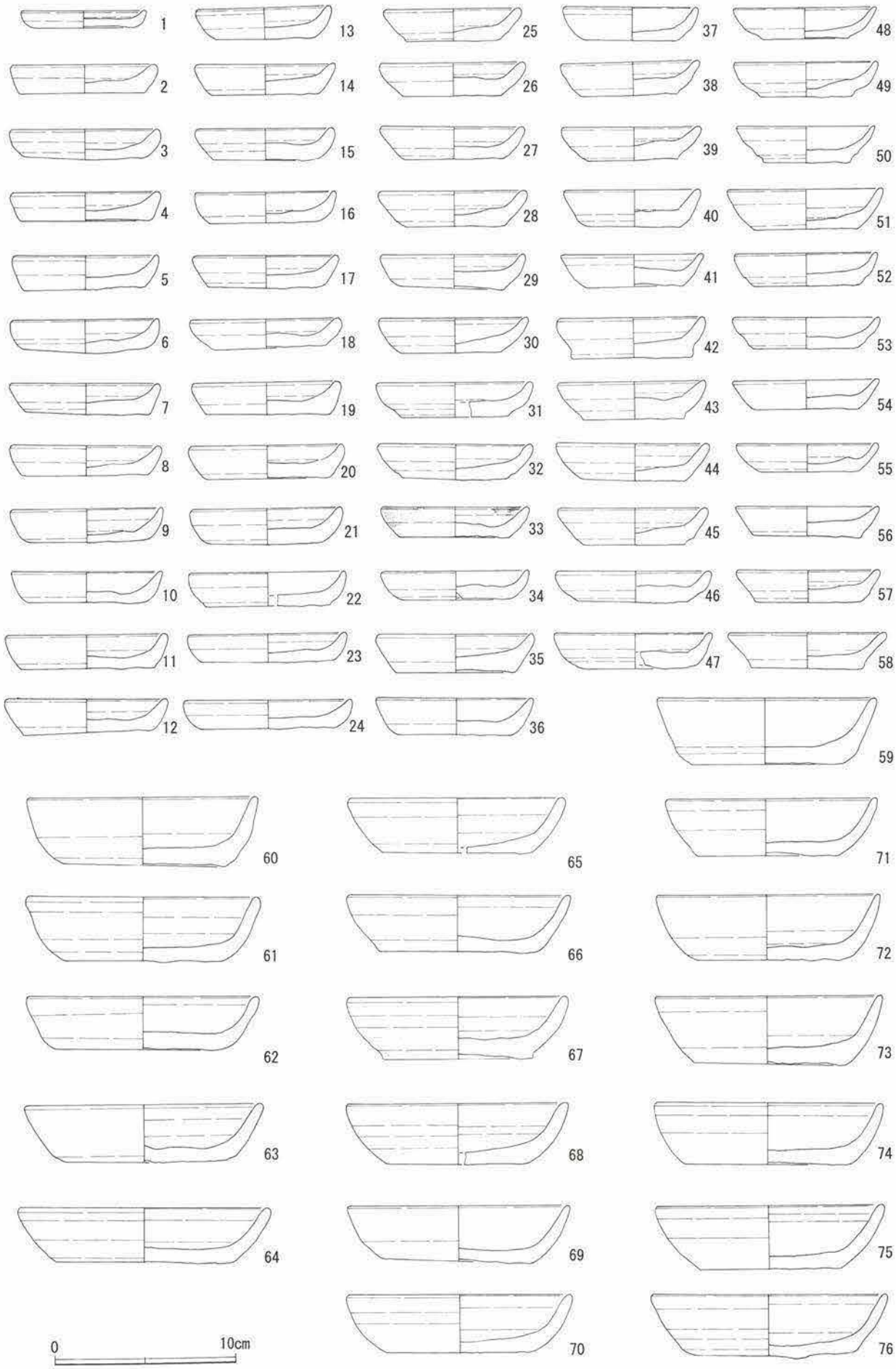


図２０　土坑１９出土遺物（1）　(S=1/3)

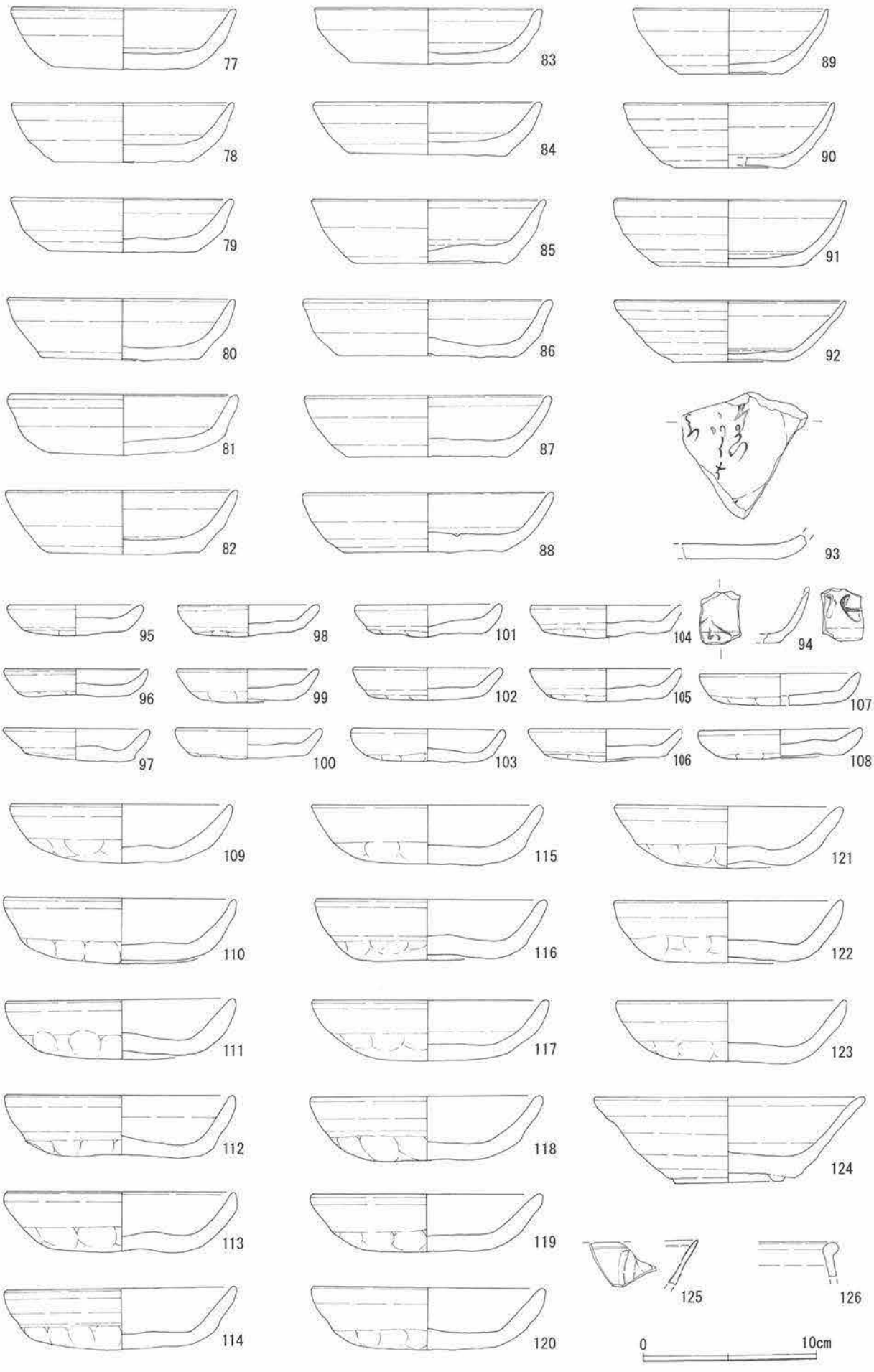


図２１　土坑１９出土遺物（2）（S=1/3）

まとまった量のかわらけが出土している。かわらけには底部糸切り成形のもの（1～94）と手捏ね成形のもの（95～123）とに大別できる。さらに底部糸切り成形のものは胎土に夾雑物を含んだやや粗胎で厚手の器壁をもち内底にナデ調整を施す一群（小皿1～47・大皿59～88）と、胎土は粉質精良、焼成堅微で明瞭な轆轤目痕のある薄手の器壁をもち内底は未調整で中央の凹む一群に分けられる（小皿48～58・中皿89・大皿90～92）。

このように本土坑出土のかわらけは3種類に大別されるが、この諸特徴や出土様相などは今小路西遺跡（宇都・原ほか 2006）第3面池3に伴って大量に出土したかわらけと類似している。今小路西遺跡の報告書の分類では底部糸切り成形のものを薄手器壁で精良胎の内底未調整の一群（A類）、厚手器壁で粗胎の内底ナデ調整の一群（B類）、手捏ね成形のものをC類としている。本土坑出土のかわらけ分類別出土比率をみると、A類：131点=11%、B類：739点=61%、C類：343点=28%であった。この中でA類とした資料は薄手器壁の精良な胎土で大中小型の器型分科がなされている。鎌倉遺跡群ではこのような3種器型分科するものには13世紀後半に出現すると考えられる糸切り底かわらけがあり、このタイプのかわらけは比較的に良好な胎土で口径は小型品が8cm以下、中型品が10cm前後、大型品が12.5cm前後を測り、内底をナデ調整した高い器高もつ薄手器壁で側面観碗型の形態に近い。想像の域を出ないがこの新型の器種が初源的な器形になり、その後の出現である「薄手丸深型＝側面観碗型」に影響を与えた可能性も考えられよう。

93・94は墨書された底部糸切り成形のかわらけで93は内底面、94は体部内外面にみられるが判読はできなかった。

124は口径15.6cm、器高4.6cm、高台径6.5cmを測る南部系山茶碗で内底面外周にかけて摩滅した使用痕があり13世紀中葉の所産と考えられる。125は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面に切り彫り劃花文を施す。素地は灰色でやや緻密。釉薬は灰緑色透明である。126は泉州窯系緑釉盤口縁部で褐灰色の粗胎、内外面に薄く緑色釉を施す。

土坑20（図22－1～9）

1・2は砂質胎土の手捏ねかわらけ小皿で、口唇端部が尖り気味の断面三角形を呈する。3は口径14.9cmの龍泉窯系青磁劃花文碗で底部を欠く。内面の口縁下に横線と縦位に界線の施文がある。素地は灰白色、釉薬は淡緑色半透明である。4は底径4.8cmの龍泉窯系青磁皿で素地は灰色、釉薬は灰緑色で薄手施釉、外底が露胎である。8～10は永福寺創建期所用瓦と同類の男瓦・女瓦（平瓦、以下省略）である。

土坑22（図22－10～16）

10～12は底部糸切り成形で、小皿は器高の低い薄い器壁が開きながら立ち上がる器形、大皿は11が低い器高の厚手器壁でやや粉質胎土、12が器高やや高めで夾雑物少ない砂質胎土である。15は龍泉窯系青磁劃花文碗体部で内面に縦位の界線を切り彫り施文。素地は灰白色堅微、釉薬は灰緑色透明で薄手施釉。16は同安窯系青磁櫛描文皿底部。高台はなく、外底面は浅い皿状に削り込まれ、この部分が露胎となっている。内底面には所謂猫描き手の櫛描文を配している。素地は微孔の多い灰白色、釉薬は淡灰緑色透明の薄手施釉。

土坑23（図22－17～26）

17は底部糸切り成形の小皿。器高が低く薄い器壁が開きながら立ち上がる器形、夾雑物が少なめの粉質胎土である。18は手捏ね成形のかわらけ小皿で底部が平底に近く、指頭痕とナデ調整の境の稜は明瞭。胎土は夾雑物が多めの弱砂質土である。19は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面に飛雲文風の施文があり薄手の器壁。素地は杯白色堅微、釉薬は灰緑色で気泡を含むが透明。20は青白磁梅瓶底部で底径8.9cmを測り素地は白色緻密である。21は型捺し作りの白磁小壺類の蓋で上面に細蓮弁文を配する。素地は緻密で白色、釉薬は上面に薄く灰味白色のやや不透明、受部から内天井は露胎である。22は渥美窯甕の

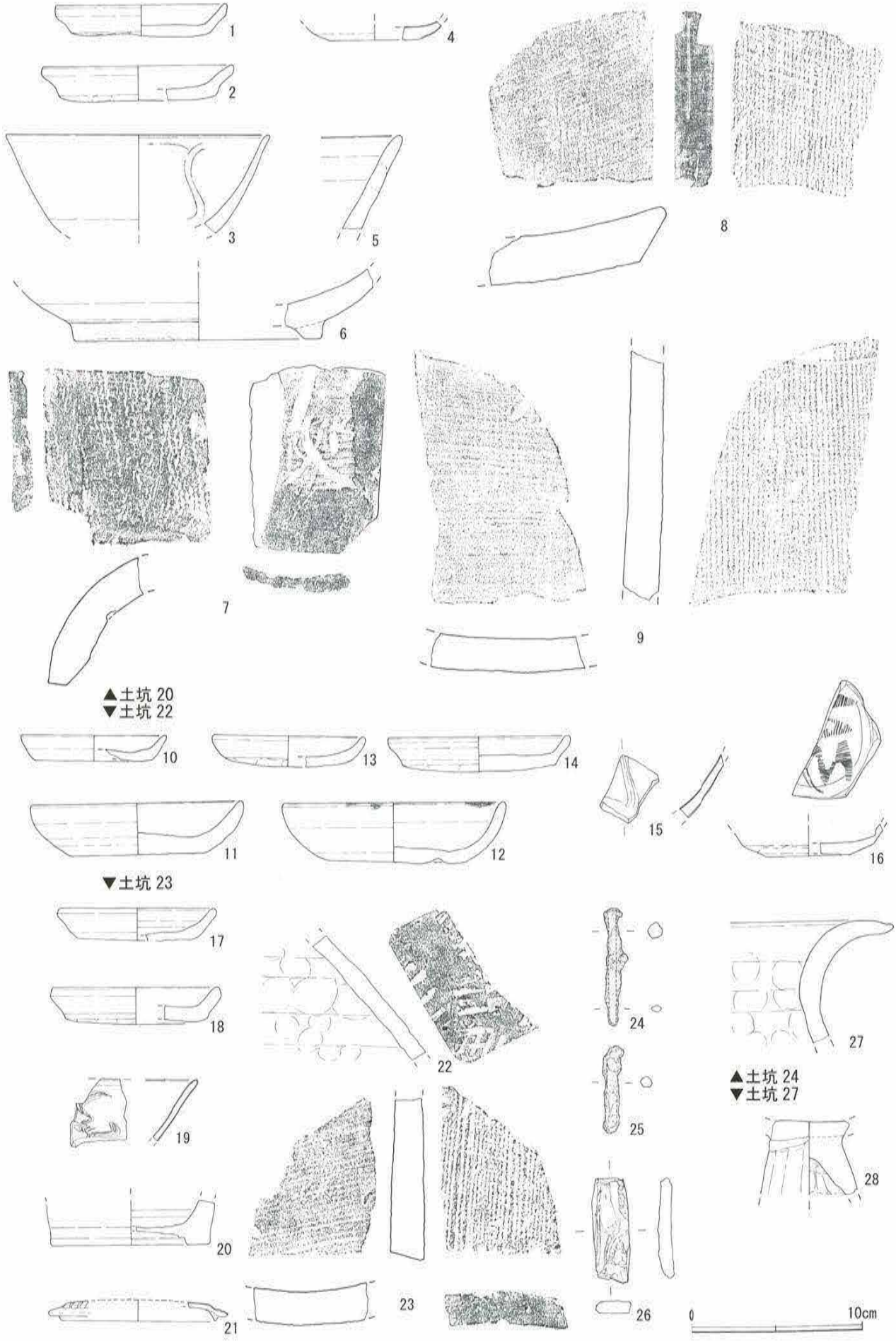


図２２　土坑２０・２２～２４・２７出土遺物　(S=1/3)

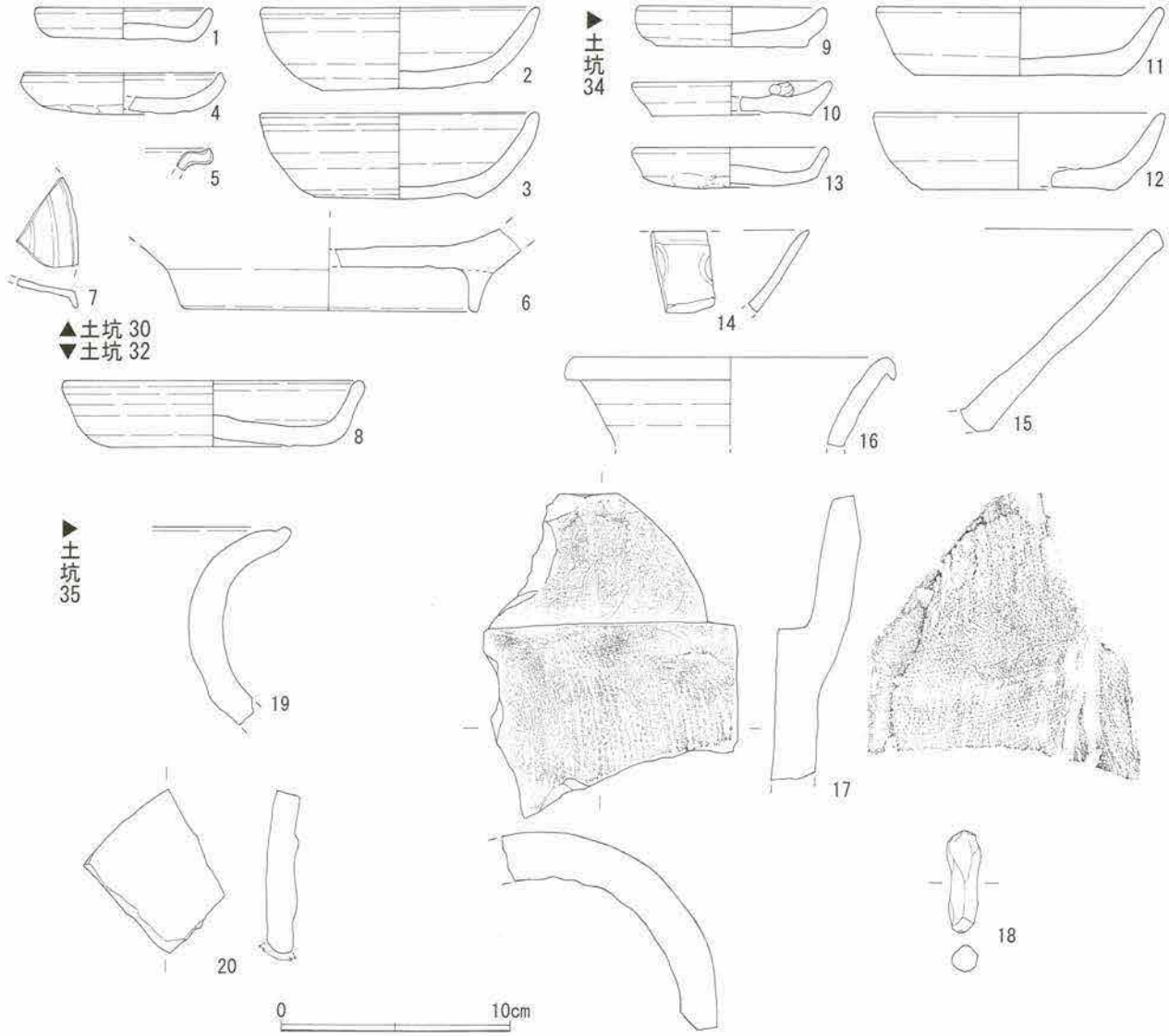


図２３　土坑３０・３２・３４・３５出土遺物　(S=1/3)

肩部で平行文状の叩き目痕が見られる。23は凸面に縄目叩きを施し永福寺創建期所用瓦と同類の女瓦である。24･25は腐食しているが鉄製の角釘で断面は方形を呈する。26は長さ4.1㎝、幅1.4㎝、厚さ0.5㎝で鹿角を薄切りにしたもので製作途中の骨角製品と思われる。

土坑24(図22－27)

27は常滑窯甕口縁部で大きく丸みをもって外反しており13世紀前葉の所産であろうか。

土坑27(図22－28)

28は土師器高坏の脚上半部。

土坑30(図23－1～7)

1～3は底部糸切り成形のかわらけである。小皿は器高が低く器壁が開きながら立ち上がる器形でやや粗い粉質胎土であり、2･3の大皿は夾雑物を多く含む弱粉質胎土である。4は手捏ね成形のかわらけ小皿で指頭痕とナデの境の稜は不明瞭。胎土は夾雑物を多く含む弱粉質胎土である。5は龍泉窯系青磁折縁盤口縁部で素地は明白色堅微、釉薬は青味灰緑色の気泡を多く含んだ不透明で厚手の施釉である。6は常滑窯片口鉢Ⅰ類底部である。外底には断面三角形の貼付高台で籾殻痕がみられ、内面は使用のため摩滅している。7は古代遺物の混入品で須恵器の坏蓋である。

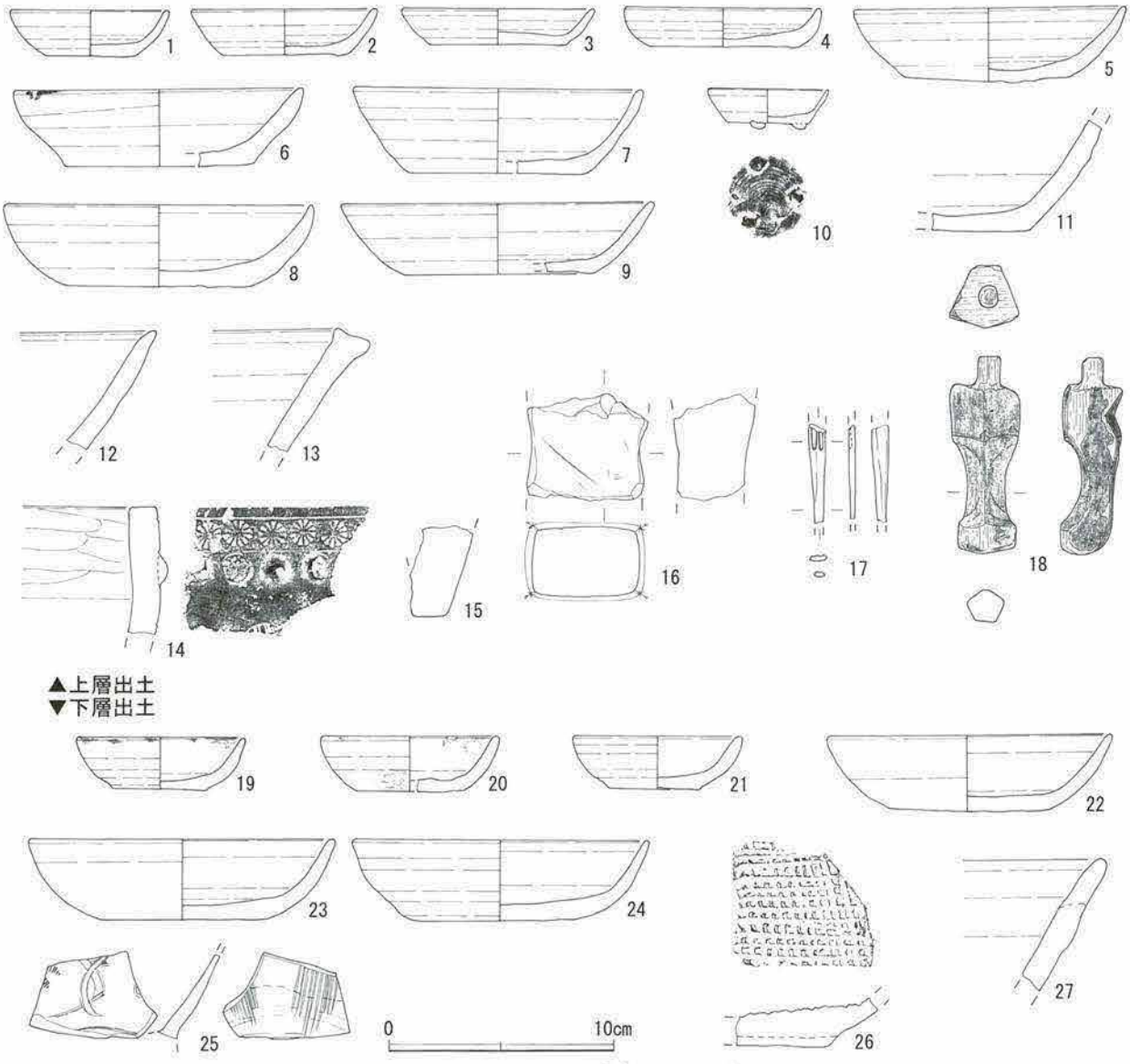


図２４　井戸１出土遺物　(S=1/3)

土坑 32(図 23－8)

28 は口径 13.0 cm、底径 9.2 cmと口径と底径比の少ない弱粉質胎土である。

土坑 34(図 23－9～18)

9～ 12 は低部糸切り成形のかわらけである。小皿は器高が低く厚手の器壁でやや弱粉質胎土。11・12 の大皿は夾雑物を多く含む弱粉質胎土である。10 の小皿は底部中央と体部に小孔が穿たれている。13 は手捏ね成形のかわらけ小皿で指頭痕とナデの境の稜は不明瞭、胎土は弱粉質胎土である。14 は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で素地は明灰色堅微、釉薬は灰緑色透明である。15・16 は常滑窯製品で 15 は片口鉢Ⅱ類、16 は壺口縁部である。17 は玉縁付の男瓦。18 は用途不明鉄製品。

土坑 35(図 23－19・20)

19・20 は常滑窯製品で 19は甕の口縁部、20は甕の胴部片であるが、一辺に転用による摺り痕がみられる。

b．井戸出土遺物

井戸 1(図 24)

上層・下層に大別した出土遺物は図 13 を参照すると上層としたものが井戸枠確認までの資料 (1～18)、

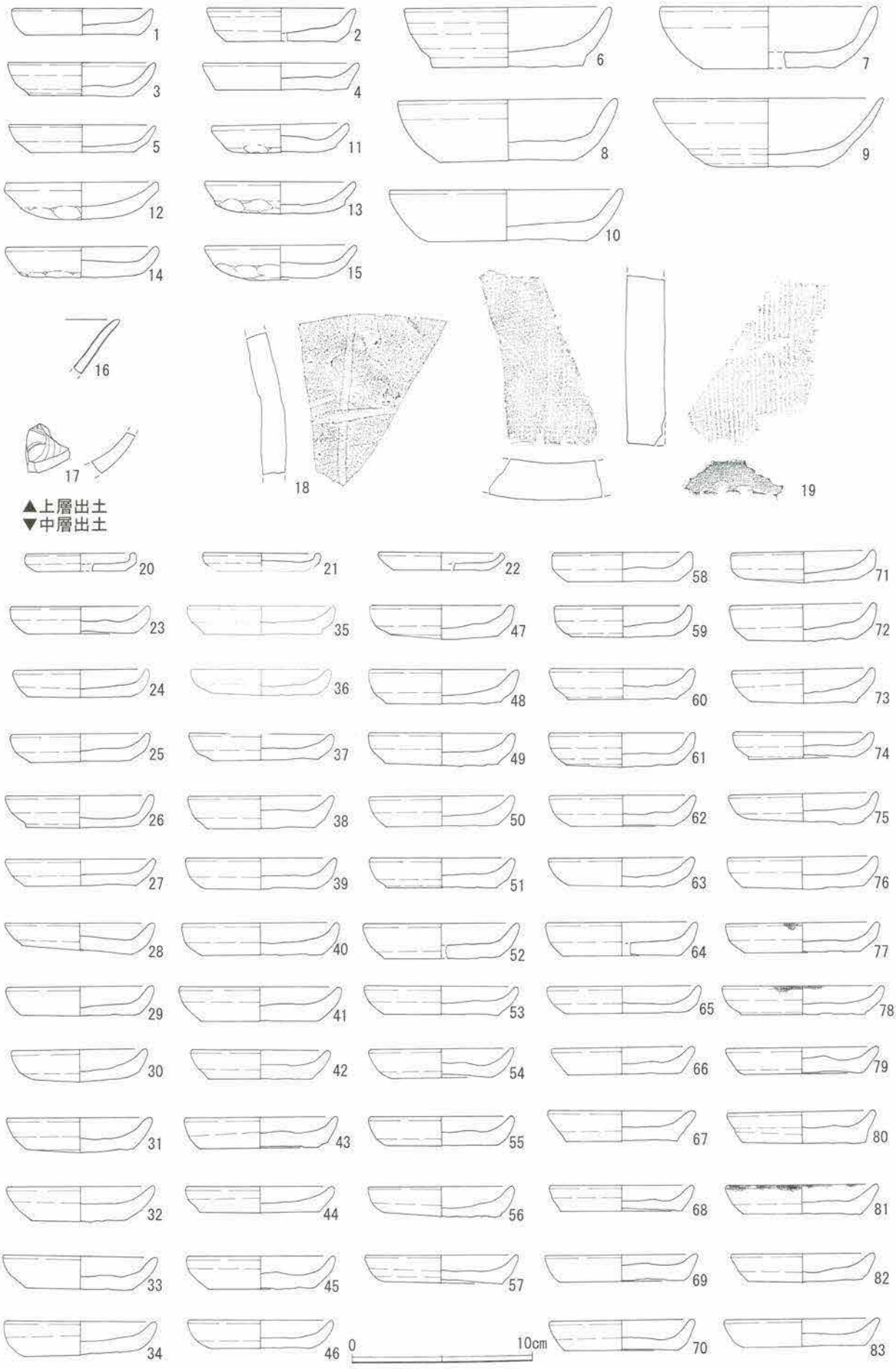


図２５　井戸２出土遺物（1）（S=1/3）

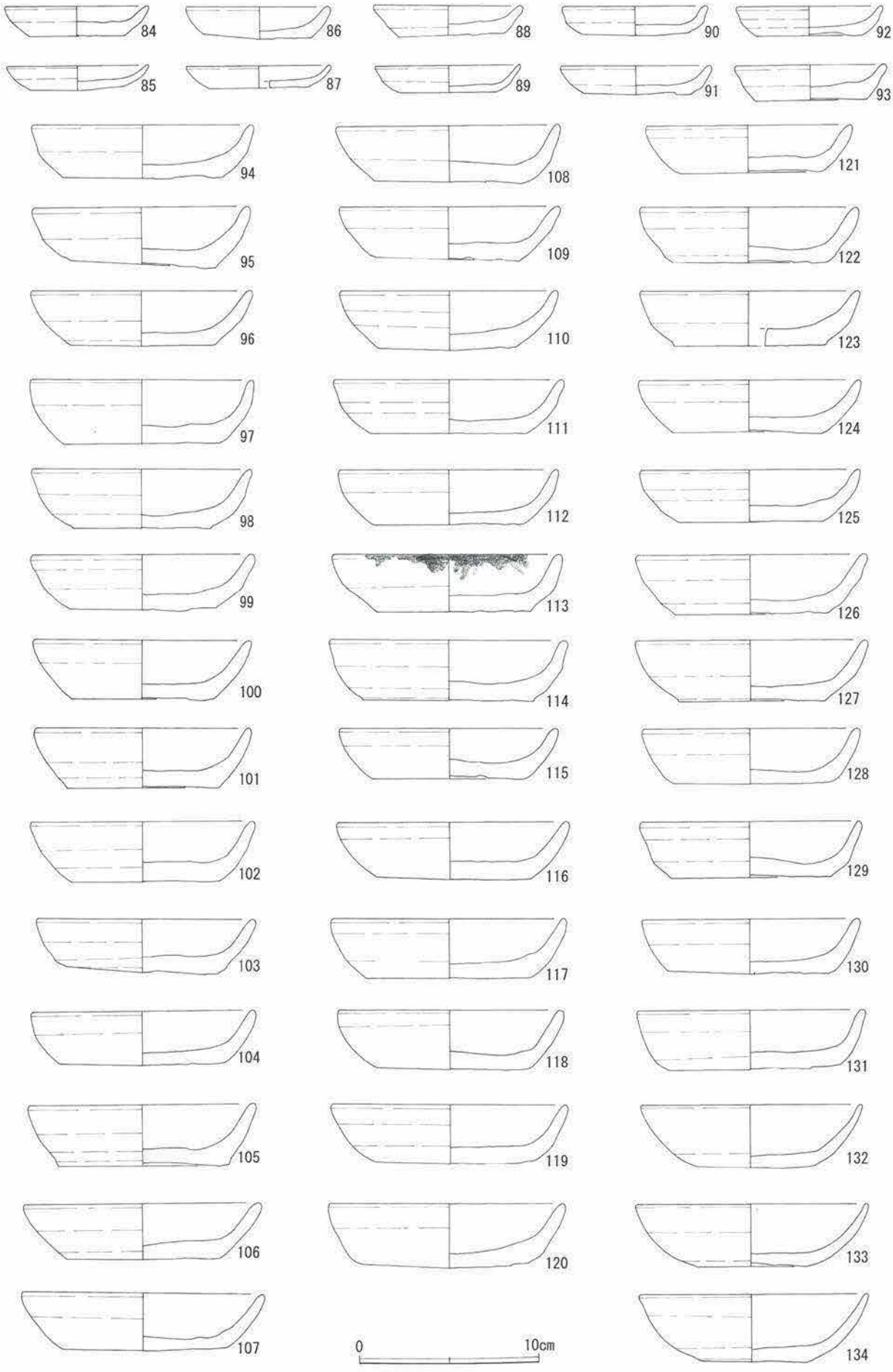


図２６　井戸２出土遺物（2）　(S=1/3)

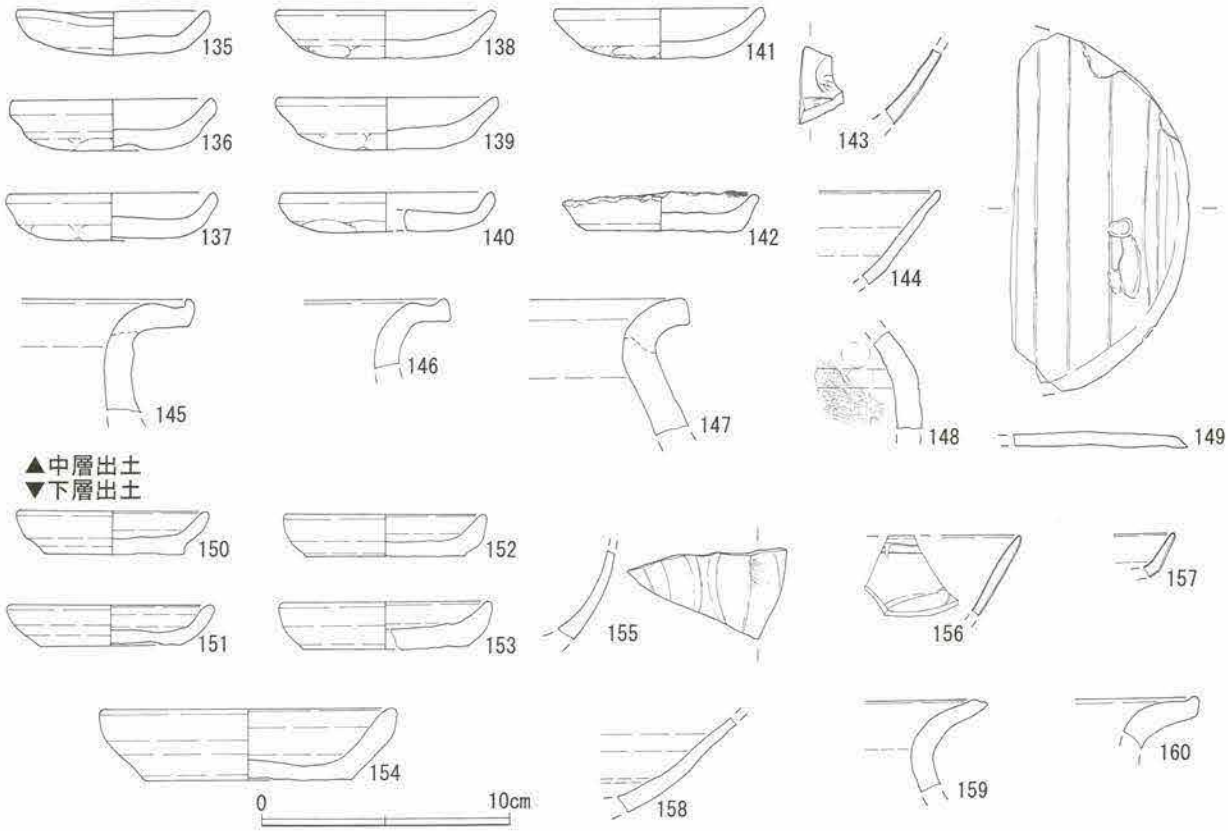


図２７　井戸２出土遺物（3）　(S=1/3)

下層としたものは井戸枠以下に伴った資料（19～27）である。

1～9は底部糸切り成形のかわらけ。1・2・5・7・9は夾雑物の少ない粉質精良胎で側面観碗型を呈した所謂「薄手丸深」タイプである。4･6･8は夾雑物を多く含む胎土。10は瀬戸窯入子で口径5.3㎝、底径3.3㎝、器高1.7㎝を測り浅い碗型を呈した無釉のものである。糸切りの底部には径４㎜ほどの目を三箇所に貼付けており、胎土は灰色精良。11は瀬戸窯折縁深皿底部～体部下位片。胎土は黄味明灰色土で緻密、釉は白濁した淡黄緑色である。12は渥美窯片口鉢口縁部。13は常滑窯片口鉢Ⅱ類口縁部。14･15は瓦器質火鉢。14はは口縁部で凹線間に小型菊花文のスタンプと貼付連珠文を配し、器表は磨かれ黒色処理され光沢がある。15は底部に取り付く逆台形の板状脚である。16は群馬県上野砥の所産と思われる。17は鹿骨製の笄で表面がよく磨かれた細身のものである。18は獣脚様にした黒色漆塗りの膳脚。

19～24は底部糸切り成形のかわらけで夾雑物の少ない粉質精良胎なもので器高の高い側面観碗型を呈している。25は同安窯系青磁櫛描文碗体部で外面に櫛描文、内面に櫛描文と片切り文を施す。26は瀬戸窯卸皿底部で、内底の卸目は細かく丁寧な目を刻む。27は常滑窯片口鉢Ⅰ類口縁部で口縁下に強いナデを施す。胎土は長石・石英粒を含む灰色粗土である。

井戸２（図25～27）

上層・中層・下層と別けた出土遺物は図4にみられる井戸2の堆積土層の28・29層が上層、中層は30～35層、下層は36～39層に相当する。なお図14に示したかわらけは30・31層から出土。

上層から出土した遺物（1～19）のうち、1～10は底部糸切り成形のかわらけ。1～5は小皿であるが、1･2･4は夾雑物を多く含む弱砂質の胎土で、3･5は夾雑物の少ない粉質精良土の薄手器壁のタイプである。6～10は大皿であるが、このうち9はいわゆる「薄手丸深」で、これ以外は厚手器壁で夾雑物を多く含む弱粉質の胎土である。11～15は手捏ね成形のかわらけ小皿で夾雑物が多めの弱砂質の胎土のもの。16･17は龍泉窯系青磁劃花文碗の口縁部と体部で、それぞれ素地は灰白色堅微、釉薬は灰緑色で透明である。

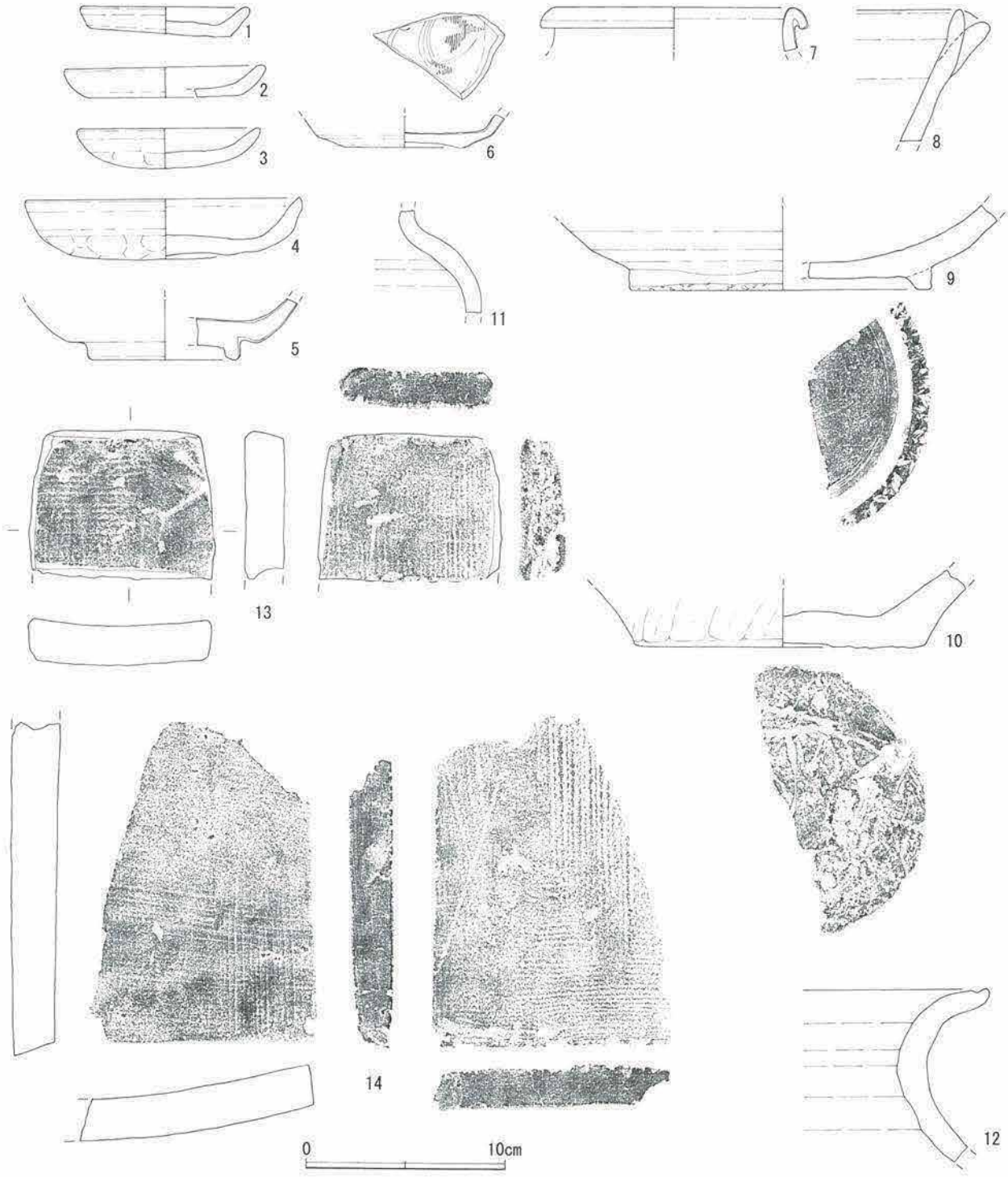


図２８　井戸３出土遺物　(S=1/3)

18 は常滑窯甕の胴部で外面に先端が丸まった棒状のもので「×」状に刻まれており、窯印かと思われる。19 は凸面に側面に平行した縄目叩きを施す永福寺跡の創建期瓦と同類の女瓦である。

中層から出土した遺物（20～149）のうち、20～134 は底部糸切り成形かわらけ。20～22 は口径 6.0 cm の内折れ気味になる極小タイプで胎土は粉質精良の胎土である。小皿のうち 23～83 は口径 7.6～8.6 cm、底径 6.2～6.9 cm、器高 2.0 cm以下と低めの器高で器壁が開きながら立ち上がるものと、体部中程から内湾気味になる器形のものに分けられる。胎土は夾雑物を多く含む。84～ 93 は胎土が粉質良土で器高の高い薄手器壁のものである。94～134 は大皿。このうち 94～131 は口径 12.6～13.5 cm、底径 8.2～9.6 cm、器高 3.0 cm前後と器高が低く厚手器壁のもので、132～134 は粉質精良の胎土をもつ「薄手丸深型」である。

なお、77･78･81･113 は口縁部に煤が付着しており灯明皿として使用されたと思われる。135～141 は手捏ね成形かわらけの小皿。夾雑物を多く含む砂質胎土であり、底部は平底に近いが指頭痕とナデ調整の境は弱い稜を呈している。142 は底部糸切り成形のかわらけを鋳造の坩堝に転用したものである。143 は龍泉窯系青磁劃花文碗体部、144 は薄手器壁で均質な精良胎土の北部系山茶碗である。145～147 は常滑窯甕口縁部で 13 世紀前～中葉の所産と思われる。148 は常滑窯壺胴部。149 は木製品の曲物底板である。

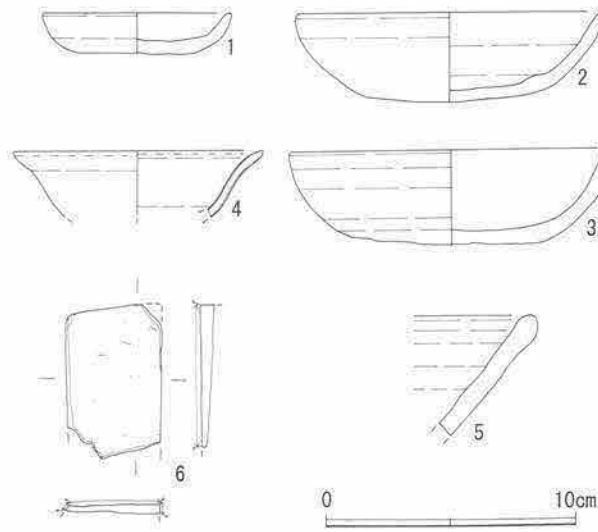


図２９　溝１出土遺物　(S=1/3)

下層の遺物（150～160）のうち、151～154 は底部糸切り成形のかわらけ小皿・大皿で、ともに夾雑物を多く含む弱砂質胎土であり器高は低く器壁は厚手で内湾する。155 は龍泉窯系青磁蓮弁文碗体部で外面に幅広の鎬連弁文を片彫りしている。素地は灰白色堅微、釉薬は淡灰緑色透明で薄い施釉。156 は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面の口縁直下に二本の沈線、さらに蓮華文を片彫りで施している。素地は灰白色堅微、釉薬は灰緑色で半透明である。157 は龍泉窯系青磁皿と思われる口縁部。素地は明灰白色緻密、釉薬は暗草緑色である。158 は均質な精良胎土の北部系山茶碗。159･160 は常滑窯甕口縁部で 13 世紀前半の所産と思われる。

井戸 3（図 28）

1･2 は底部糸切り成形のかわらけ小皿で夾雑物を多く含む粉質胎土であり、器形は低い器高でやや厚手の器壁をもち開きながら立ち上がる。3･4 は手捏ね成形のかわらけで 3 の小皿は夾雑物を多く含む弱砂質胎土で底部が丸底に近く指頭痕と横位ナデ調整との境の稜は不明瞭である。4 の大皿は夾雑物を多く含む弱砂質胎土で外底は中央部が凹んだ平底に近く口縁部断面は三角形状を呈し、指頭痕と横位ナデ調整との境の稜は明瞭。5 は龍泉窯系青磁無文碗底部。断面方形の削り出し高台で腰は張っており素地は灰色緻密、透明度の高い淡草色の釉薬を厚く釉薬しているが高台の畳付から内側は露胎になる。6 は同安窯系青磁櫛描文皿底部である。内底面には櫛描きのジグザグ状文様と片切り掘り文を施している。外底面は浅皿状に削りこまれ、この部分のみが露胎となる。素地は淡黄色で白色粒を含む。7 は白磁壺口縁部で、おそらく四耳壺と思われる。素地は白色堅微、釉薬は緑味乳白色である。8～12 は常滑窯製品。8･9 は片口鉢Ⅰ類の口縁部と底部で、ともに胎土は長石・石英を多めに含む灰色土であり、9 の貼付高台には籾痕がみられる。10 は底径 15.1 cmで壺の底部。11 は鳶口壺の頸～肩部。12 は甕口縁部で 13 世紀前葉の所産と思われる。13･14 は凸面に側面と平行した縄目叩きを施す永福寺跡の創建期所用瓦の女瓦と同類資料である。13 は下端を欠するが側面を擦って長方形状に再加工した痕跡を残す。

c．溝出土遺物

溝 1（図 29）

1～3 は薄手の器壁をもつ底部糸切り成形かわらけで粉質精良な胎土。4 は白磁口兀皿で、口径 10.1 cmの外反した口縁をもち口唇部の釉薬を削り去るために角張った様子。素地は灰白色の粘性がある緻密なもので緑味白色の釉薬を薄手に施す。5 は常滑窯片口鉢Ⅰ類口縁部。胎土に石微粒を多く交えた粗い灰色土である。6 は砥石片で長さ 5.8 cm、幅 3.8 cm、厚さ 0.3 cmの京都鳴滝産の仕上砥。

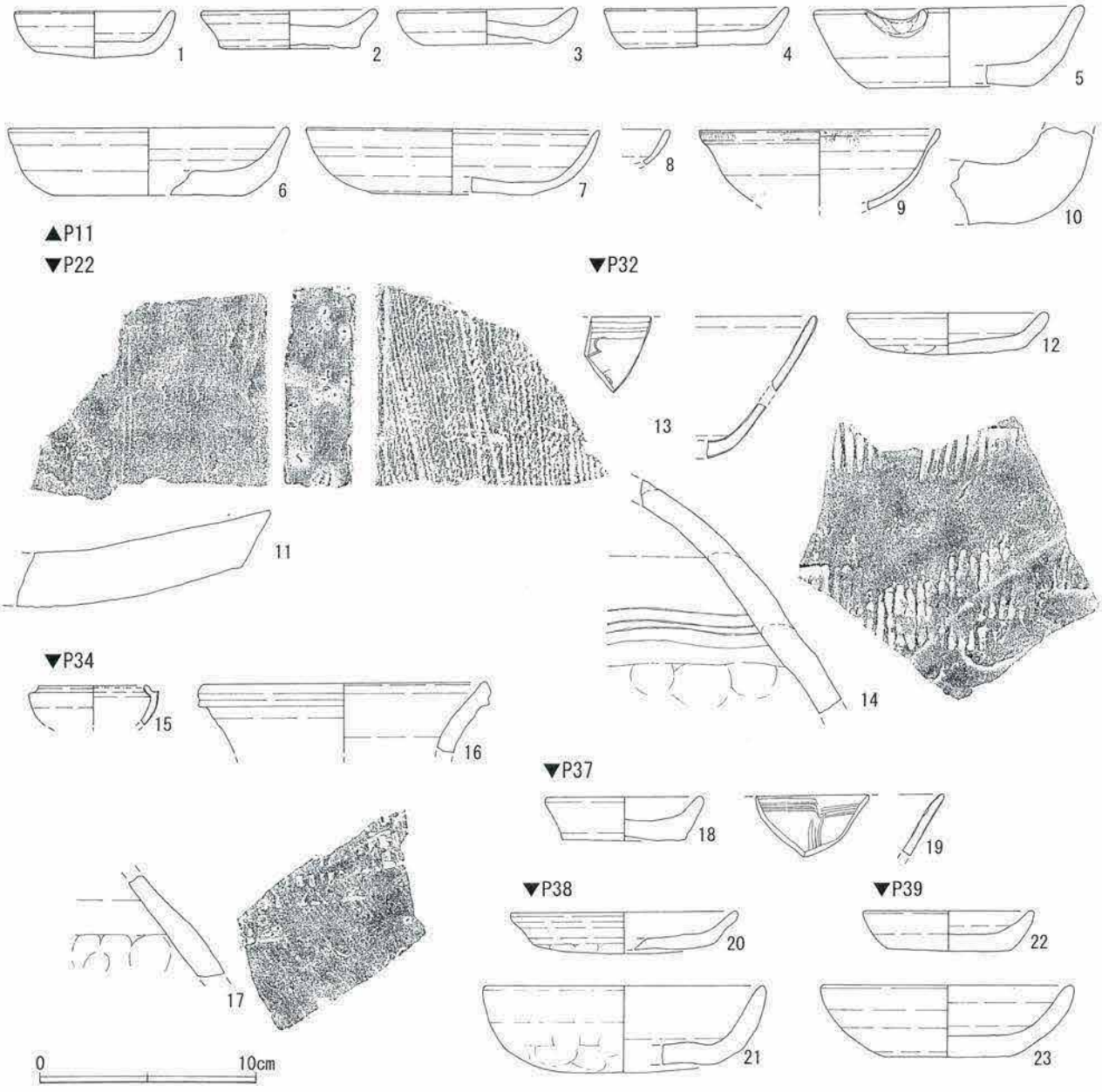


図３０　ピット出土遺物　(S=1/3)

d．ピット (P) 出土遺物

P11（図 30－1 ～ 10）

1 ～ 7 のかわらけはすべて底部糸切り成形である。1･7 は薄手の器壁をもち夾雑物の少ない良好な胎土だが、2 ～ 6 は夾雑物を多く含む粗めの粉質胎土。8 は山皿口縁部で胎土は青味灰色の薄手器壁をもつ。東遠系か。9 は口径 11.1 cmの手捏ね成形のかわらけであり、口縁部に煤が付着する。10 は厚手器壁の土器質火鉢底部でかわらけと類似した胎土である。

P22（図 30－11）

11 は女瓦で凸面縄目叩きを施し、胎土・製作法は永福寺創建期所用瓦と同類である。

P32（図 30－12～14）

12 は口径 9.0 cm、器高 1.9 cmの手捏ね成形のかわらけ小皿で、胎土は粉質精良。13 は接合しないが同一個体の龍泉窯系青磁劃花文碗口縁・体部である。内面の口縁直下に二本沈線を施文する。素地は灰白色緻密、透明度の高い淡草緑色の釉薬を施す。14 は渥美窯甕肩部で胎土に僅かな長石微粒を含む灰色緻

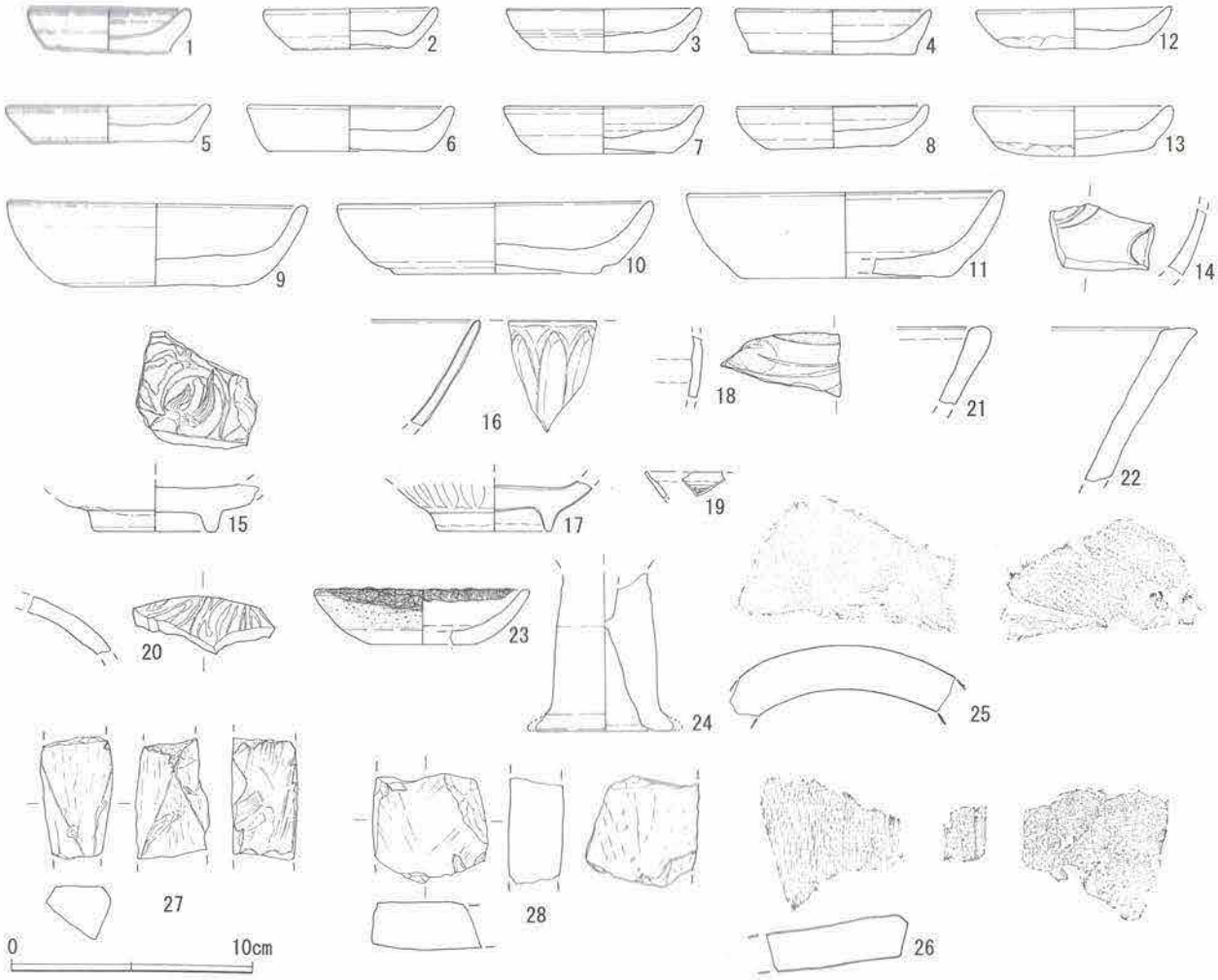


図３１　遺構外出土遺物　(S=1/3)

密土。外面に格子状の叩き目痕を施す。

P34(図 30－15～17)

15 は白磁合子の身で無文である。素地は白色緻密、釉薬は乳白色半透明で蓋受けの凹状部が露胎である。17 は渥美窯甕肩部で胎土に僅かな長石微粒を含む灰色緻密土。外面に格子状の叩き目痕を施す。16 は須恵器甕の口縁部で混入品である。

P37(図 30－18･19)

18は底部糸切り成形のかわらけ小皿で口径 7.2㎝と小型品。器高が低く厚手器壁で逆八字型の器形である。19 は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で口縁部内面直下に縦位界線の二本沈線を施文。素地は灰白色緻密で草緑色の釉薬を施す。

P38(図 30－20･21)

20･21は手捏ね成形のかわらけ小皿は薄手器壁で砂質胎、大皿は厚手器壁で粉質精良な胎土である。

P39(図 30－22･23)

22･23は底部糸切り成形のかわらけ。厚手器壁で夾雑物を多く含む粗めの粉質胎土である。

e. 遺構外出土遺物

図 31－1～11は底部糸切り成形のかわらけ。12･13は砂質胎土の手捏ね成形のかわらけ小皿である。底部糸切り成形の小皿は主に器高が低く器壁が開きながら立ち上がる器形であり、胎土は夾雑物を多く

含む粗めの弱粉質胎土である。14･15 は龍泉窯系青磁劃花文碗で 14 は体部、15 は底部で断面方形の削り出し高台である。16･17 は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。16 は口縁部で外面に細身の蓮弁文を彫り出す。釉薬厚手施釉で草緑色の釉薬を施す。17 は底部で断面三角形の削り出し高台をもつ。釉薬は厚手施釉で高台畳付が露胎となる。18 は青白磁梅瓶胴部。19 は内型捺作りの白磁小皿で口唇部は釉薬を削り露胎である。20 は瀬戸窯瓶子肩部で外面に牡丹文を施す。21･22 は常滑窯製品で 21 は片口鉢Ⅰ類口縁部、22 は片口鉢Ⅱ類口縁部。23 は底部糸切り成形のかわらけ小皿を転用した坩堝で口縁部に無数の小気泡が開き赤銅色の溶融物が付着している。24 はかわらけ質の灯明台脚部。25 は男瓦、26 は女瓦である。25 は鶴岡八幡宮の中世最下層に伴う鎌倉時代初期瓦と同類であるが、26 は鎌倉市役所周辺で出土する古代瓦と同類のものである。27･28 は中砥で上野産と思われる。

第4章　まとめ

調査では一面の遺構確認面で 12 世紀末から 15 世紀前半にかけての鎌倉時代を中心とした中世の遺構・遺物が検出された。これは本調査地点を含めた周辺域が微高地になっていることに起因する。具体的には若宮大路の東側、大町四ツ角以北、横大路以南の地域、六浦道南側の地域がこれに該当し、鎌倉遺跡群の多くでは中世基盤層の確認が現地表より 2m 以上のことも珍しくないが、当該地域では 1m 前後で確認される。よって鎌倉遺跡群でよく見られるような盛土による生活面の複数枚化はあまりみられない。「吾妻鏡」によれば御所移転の理由の一つとして大路が西に大道、東に河川、北に鶴岡、南に海があり四神相応の地であったために若宮大路に接する（ あるいは交差する ）宇津宮辻子に幕府を移設したとある。しかし先の発掘調査の結果をふまえるのであれば、四神相応であったという理由と共に周辺より微高地であるがために水はけの良さなど実利的な要因も含めて選定されたと考える必要があると思われる。

・遺構について

遺跡周辺には嘉禄元（1225）年に大倉から御所が移動し様々な施設が建設されている。小町二丁目 354 番 12 外地点第 2 面では東西三間・南北三間の規模を持つ掘立柱建物、柱穴列等が、小町二丁目 389 番 1 地点 1 期では大きな屋敷地の一部との可能性が示されている掘立柱建物が検出されている。しかしながら本調査地点では様々な遺構が検出されたが、建物跡と考えられる柱穴列は検出されなかった。これは後世の掘削の影響という考え方もあるが、むしろ同時期の井戸や土坑などが多く検出されている点から本調査地点は屋敷地の中でも裏手などであった可能性を考えたい。

なお本調査地点では伊豆石・砂岩塊・泥岩塊を多量に詰め込みグリ石にし、その上に伊豆石を据えている P15 が検出されている。年代は土坑 4・井戸 2 をきるかたちで検出されており、2 つの遺構出土の遺物年代から 13 世紀後半と考えられる。同様の遺構はこのほかに検出されておらず、P15 が建物の東限になると考えられる。また構造のわりには置かれた礎石は小さく恐らくは庇部の柱が建っていたと思われる。

この P15 の礎石を伴う建物の軸線については、周辺の調査地点で検出された建物及び溝が遅くても 13 世紀中頃以降には若宮大路に軸線を合わせていると考えられるので、本遺構の軸線もこれと同じくすると考えられる。

・遺物について

本遺跡で特徴的な遺物として土坑 19 と井戸 2 中層一括出土のかわらけが挙げられる。土坑 19 からは

大量の出土している（図20・21参照）が、図示できた遺物はほんの一握りであり、出土した多くは復元実測できないような小片であった。土層堆積状況からみるとこれらのかわらけは遺構底面部周辺から出土しており、一括廃棄された状況がよくみてとれる。また図11の土層堆積図をみてもわかるとおり、最下層とした5層のほうが上層の4層より遺物の残存率が高く、1～3層はかわらけをほとんど含まない弱砂質土層である。このことからかわらけは廃棄されたあと、一度上から踏まれるなどして圧を軽くかけられたのち砂質土により完全に埋められたと想像できる。なお出土遺物には落書と思われる墨書痕があるかわらけも含まれている点、また灯明に使用されたと考えられる煤が付着したかわらけの出土も少ない点から宴会の際に使用され一括廃棄されたものと思われる。

土坑19・井戸2中層からは夾雑物が少なく器壁が薄いかわらけが出土している。第3章で今小路西遺跡（御成町200番2地点）の第3面池3から出土したかわらけとの類似をしていたが、本遺跡で出土したかわらけと今小路西遺跡で出土したかわらけの差異を本章で述べることとする。本調査地点出土のかわらけと今小路西遺跡出土のかわらけの胎土の共通性は先に述べたとおりであるが、大きく異なる点が3つある。1つは本調査地点出土のかわらけには指2本乃至は3本で内底面にナデ調整が施されているが、今小路西遺跡では内底面のナデ調整が施されていない。また焼成も今小路西遺跡出土のかわらけは通常のかわらけより高温で焼かれたらしく良く焼き締められており、弾くと高音を発する。それに対し本調査地点のかわらけも通常のかわらけよりは焼き締められているが今小路西遺跡ほどではない。また色調も今小路西遺跡出土のかわらけは黄色味が強いものが多いが本調査地点出土のかわらけは赤味が強い印象を受ける。

その他の遺物ではかわらけを使用した坩堝や骨角製品の未製品などが製作にかかわる遺物が若干出土している。今小路西遺跡御成小学校地点の南側武家屋敷の一角からは鋳型が詰め込まれているピットが検出されていることから武家屋敷では職能民を呼び、必要に応じたものを作らせるという行為が行われていたと推測されるが、本遺跡でも同様の行為が行われていたと思われる。このような製作活動は屋敷の表側では行われず裏手などで行われたはずであるので、本調査地点が屋敷地の裏手にあたることが遺物からも理解できると思われる。

最後になるが、本調査地点を含めた周辺からは鎌倉時代以前（主に古代）の遺物が出土することがある。本地点からも土師器・須恵器などが出土しているが、詳しく年代などを検討することができなかった。今後これらの遺物の年代を細かに分析することにより、鎌倉時代以前の景観復元の一端を考える上で貴重な資料になり得ると思われる。

引用・参考文献（第1章と同一のものは省略）

秋山哲雄　2006『北条権力と都市鎌倉』吉川弘文館

河野眞知郎　1989「武家屋敷に呼ばれた鍛冶屋」石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世3武士の都鎌倉』平凡社

河野眞知郎　1990『今小路西遺跡（御成小学校内）』今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会

河野眞知郎　2004「政権都市「鎌倉」－考古学的研究のこの十年－」『政権都市　中世都市研究9』新人物往来社

河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考－東国との関連において－」『考古論叢　神奈河』第2章

鈴木絵美　2008「中世鎌倉の職能活動－分布図と出土点数、個別事例から探る職能民の存在形態－」『考古論叢神奈河　第16集』神奈川県考古学会

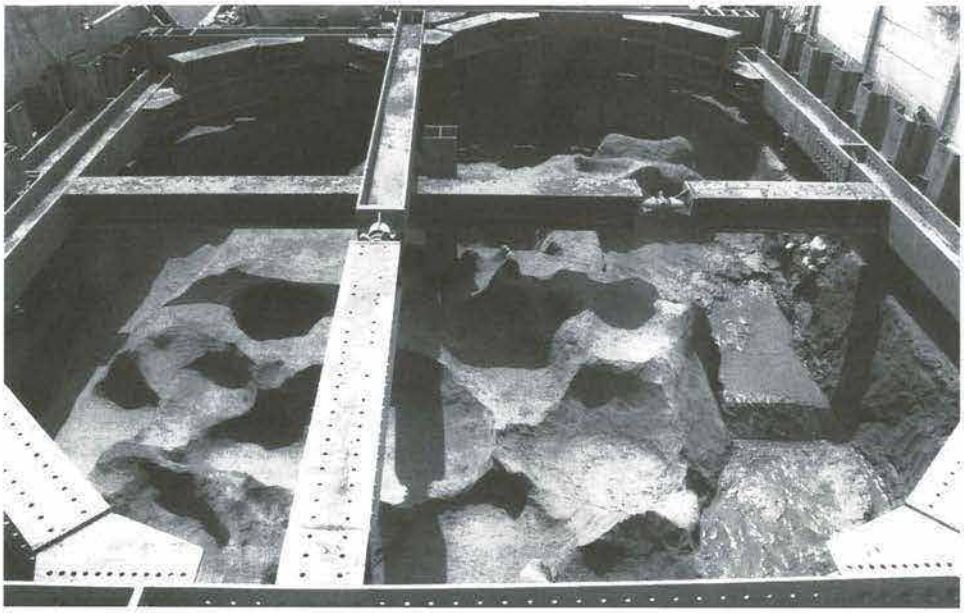
中野晴久　1994「知多半島（常滑）窯の編年について」『第2回中世都市研究討論会』発表要旨

宇都洋平・原　廣志ほか　2006「今小路西遺跡　御成町200番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22』鎌倉市教育委員会

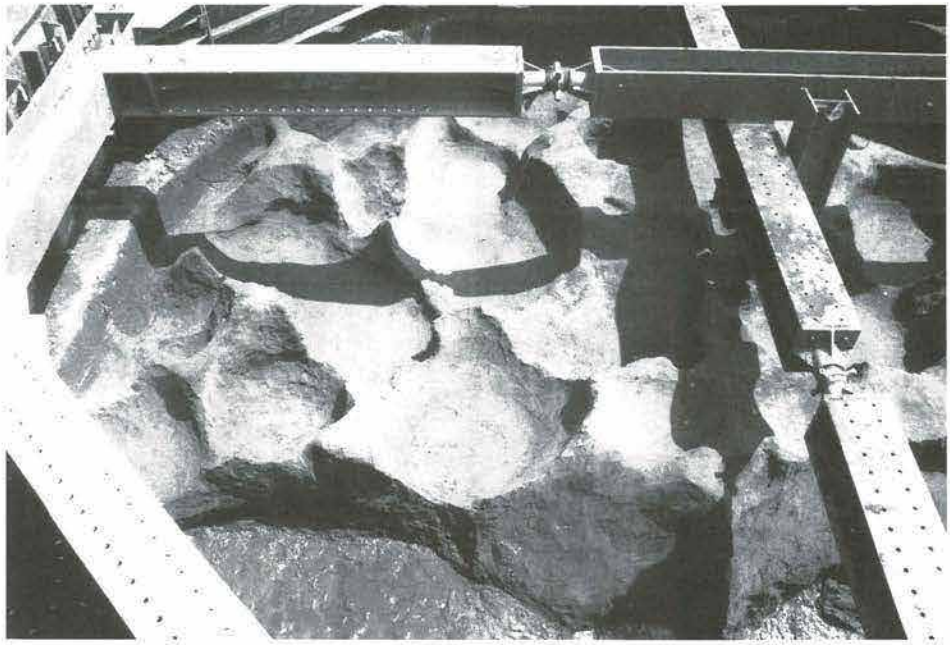
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

横田賢次郎・森田勉　1978「大宰府出土輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』

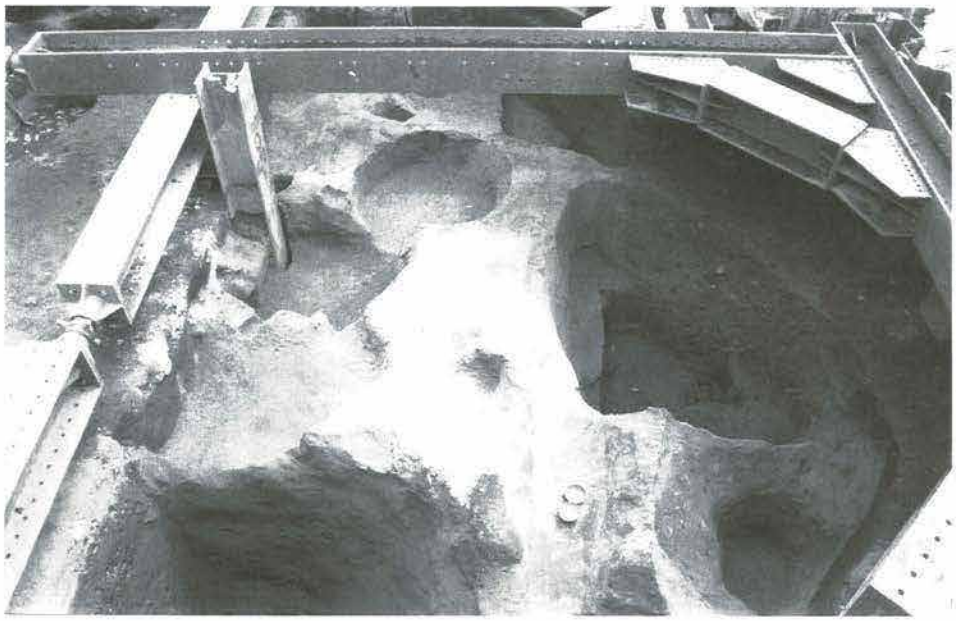
図版 1



1．上・下層遺構全景（北から）

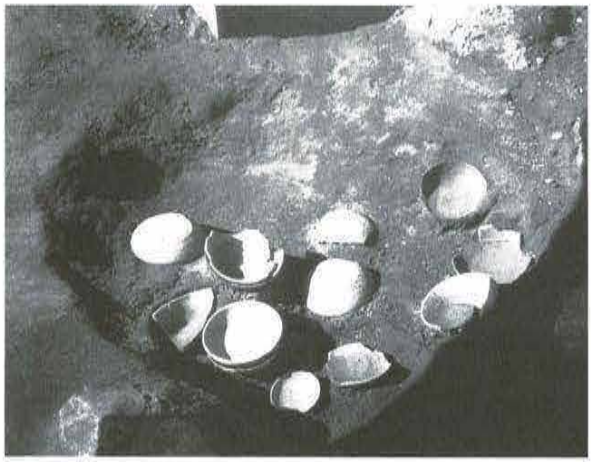


2．調査区北西域（西から）



3．調査区南西域（西から）

図版２



▲ 1. 土坑２遺物出土状況

▲ 2. 土坑８

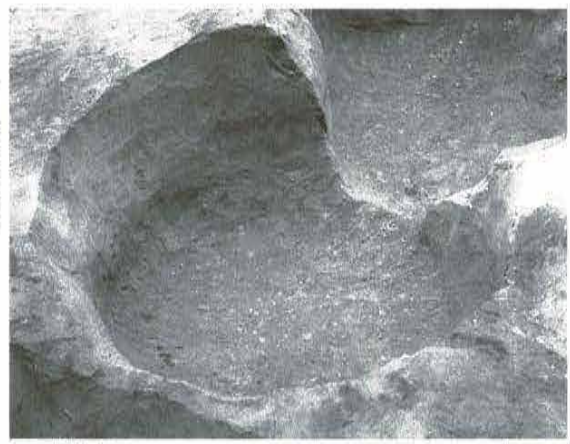
▼ 3. 土坑５遺物出土状況

▼ 4. 同左土層断面

▼ 5. 土坑 11

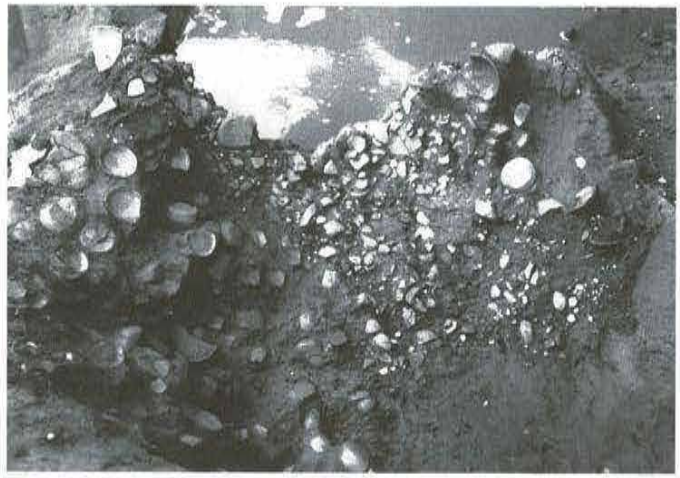
▼ 6. 同上土層断面

▶ 7. 土坑 12



▶ 8. 同上土層断面

◀ 1. 土坑15遺物出土状況



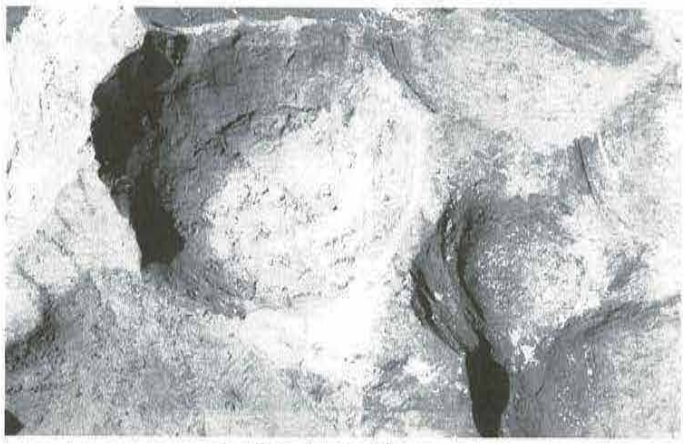
▲ 3. 土坑 19 遺物出土状況

▼ 2. 土坑 18

▼ 4. 土坑 20 土層断面

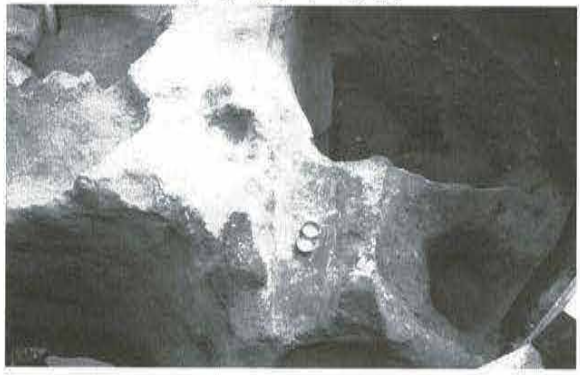
▼ 5. 土坑 22

▼ 6. 同左土層断面



▼ 7. 井戸１・２、溝

▼ 8. P15



図版４

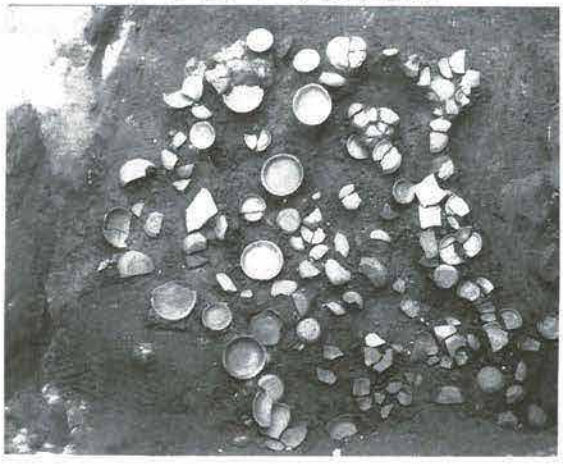
▲ 1. 井戸１（井戸木枠上層）
▼ 2. 同上（井戸木枠下層）

▲ 3. 井戸１（井戸枠組方）

▼ 4. 井戸２

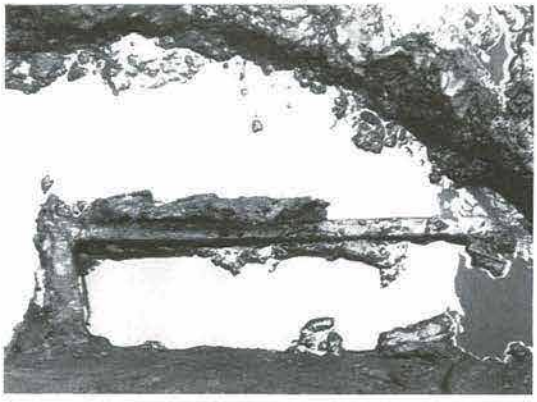
▼ 5. 井戸２　中層出土遺物

▼ 6. 井戸２　土層断面

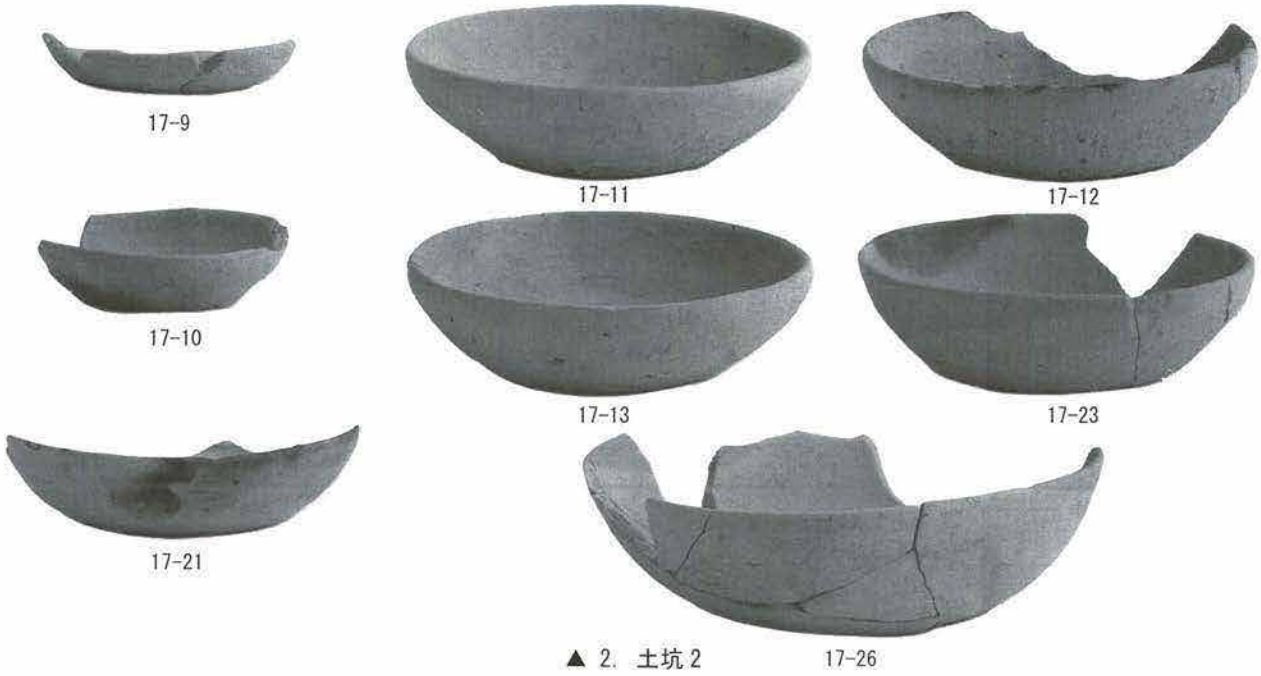


▼ 7. 井戸４

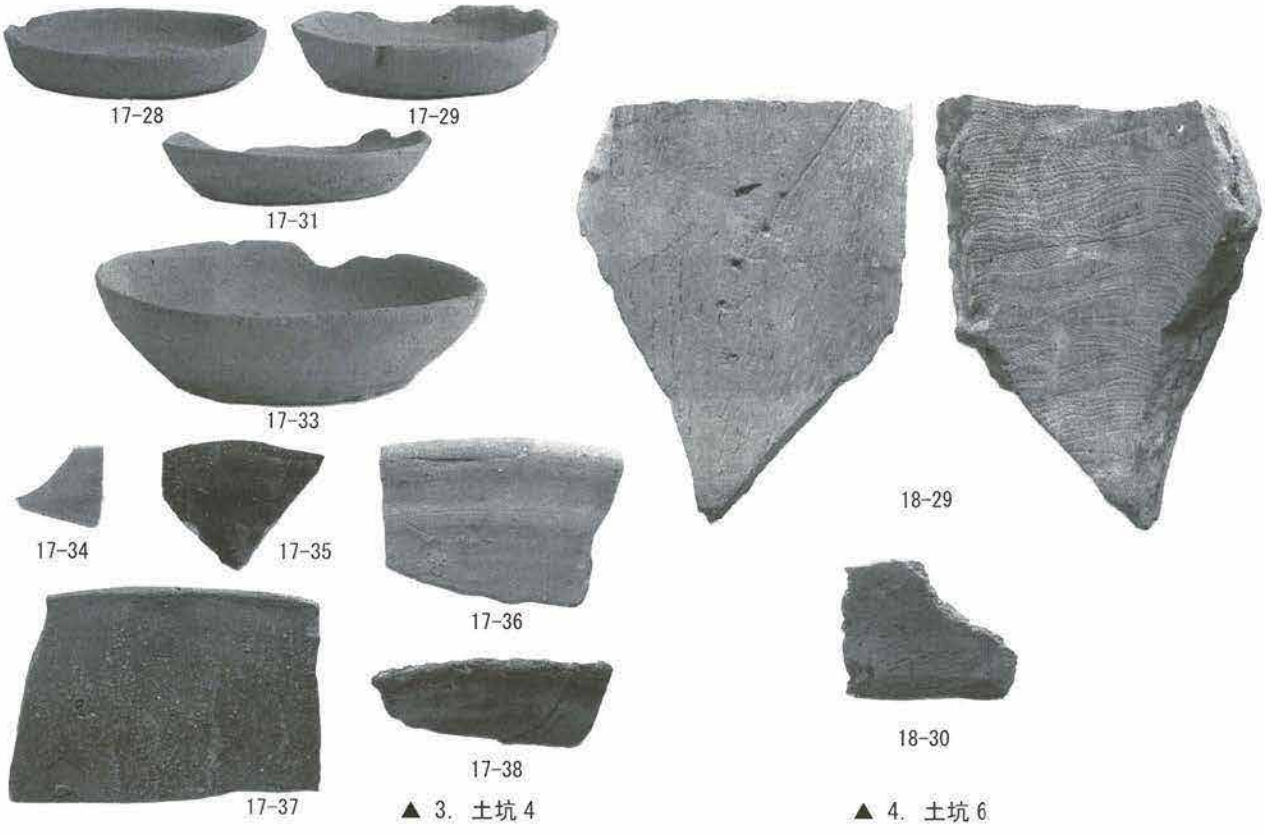
▼ 8. 近世井戸　鎌倉石 切石組 井戸枠



▲ 1. 土坑１



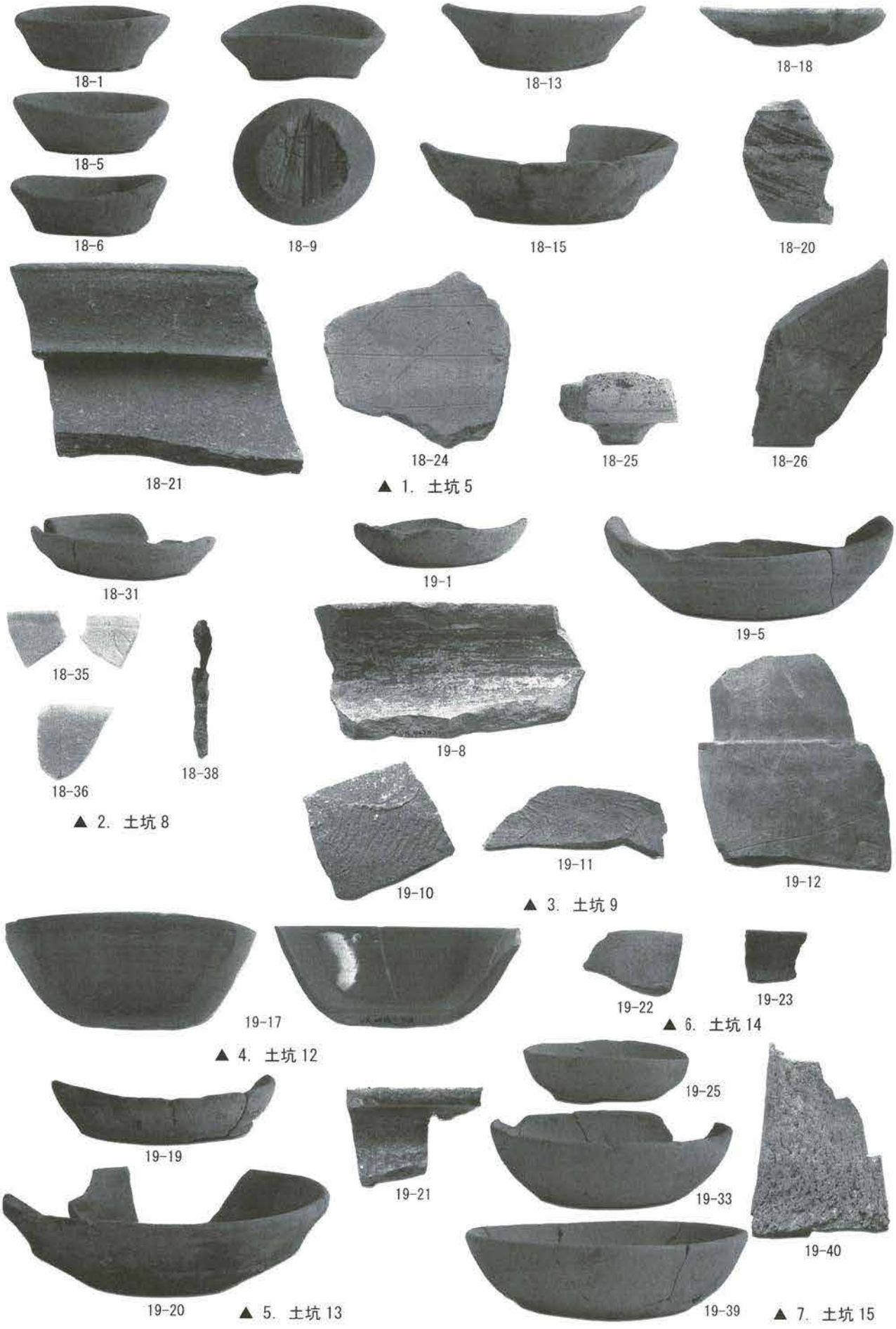
▲ 2. 土坑２



▲ 3. 土坑４

▲ 4. 土坑６

図版６


18-1
18-13
18-18
18-5
18-6
18-9
18-15
18-20
18-21
18-24
18-25
18-26
▲ 1. 土坑 5
18-31
19-1
19-5
18-35
18-36
18-38
19-8
19-10
19-11
19-12
▲ 2. 土坑 8
▲ 3. 土坑 9
19-17
19-22
19-23
▲ 4. 土坑 12
▲ 6. 土坑 14
19-19
19-21
19-25
19-33
19-40
19-20
19-39
▲ 5. 土坑 13
▲ 7. 土坑 15

20-1

20-12

20-21

20-39

20-6

20-15

20-30

20-41

20-7

20-19

20-38

20-56

20-69

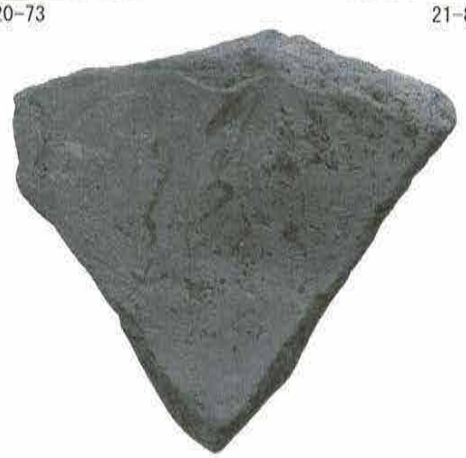
21-78

21-85

20-73

21-82

21-91


21-93

21-94

21-100

21-111

21-116

21-102

21-117

21-120

21-124

21-125

21-126

▲ 1. 土坑 19

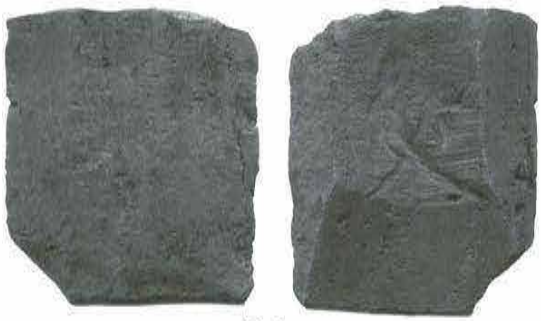
図版８

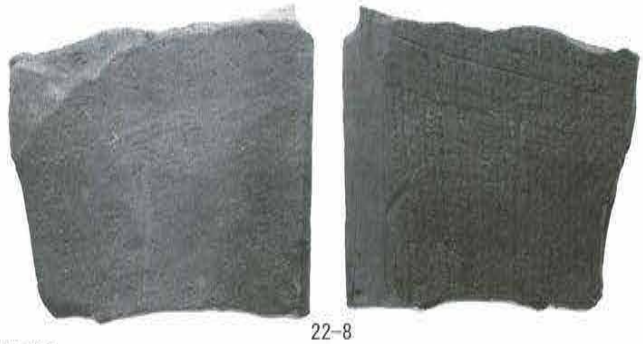
22-1

22-3

22-5

22-6


22-7


22-8

▲ 1. 土坑 20

22-12

22-13

22-16

▲ 2. 土坑 22

22-21

22-22

22-24

22-25

22-26

▲ 3. 土坑 23

22-27

22-28

▲ 4. 土坑 24

▲ 5. 土坑 27

23-9

23-11

23-12

23-15

23-1

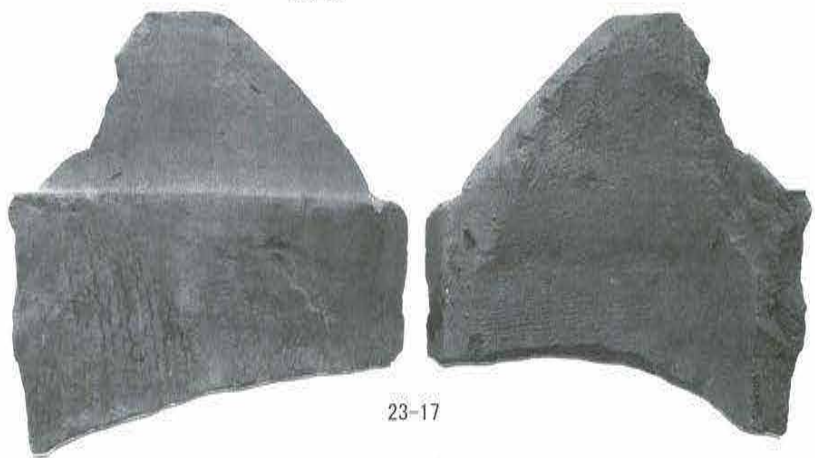
23-3

▲ 6. 土坑 30

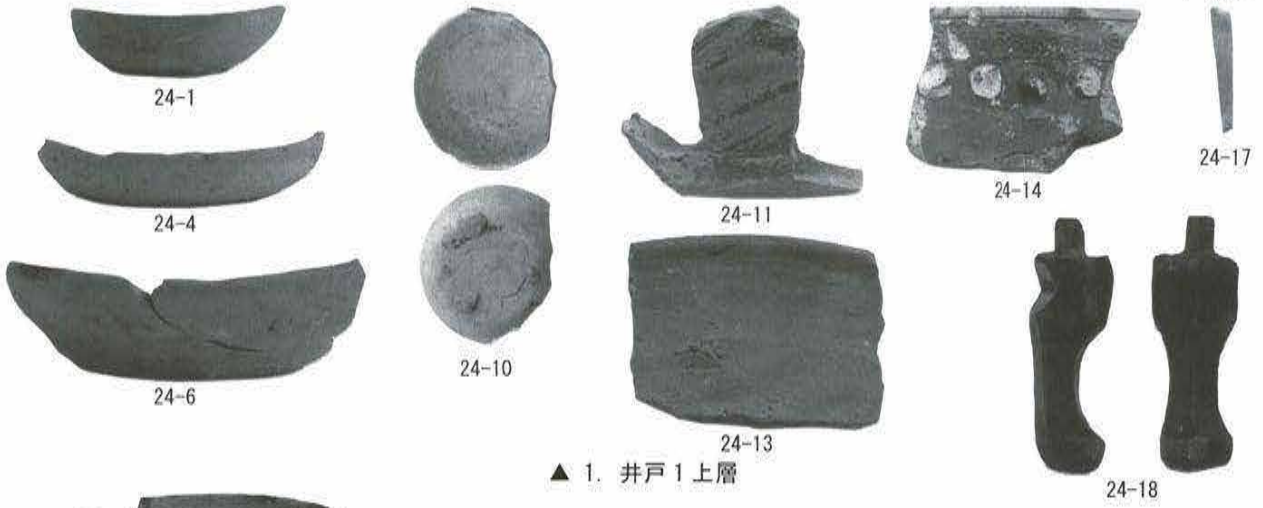
23-19

23-20

▲ 7. 土坑 35

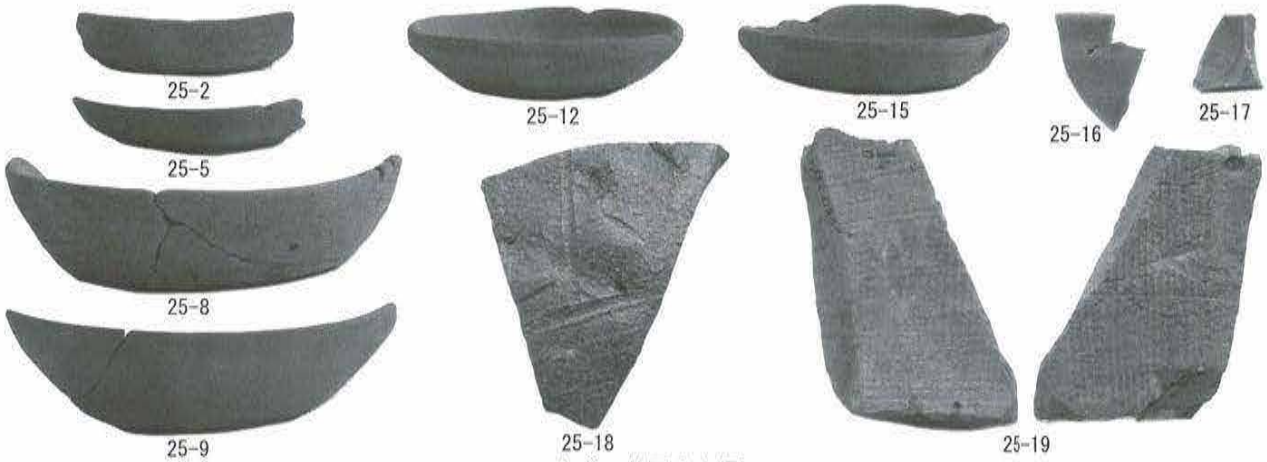

23-17

▲ 8. 土坑 34

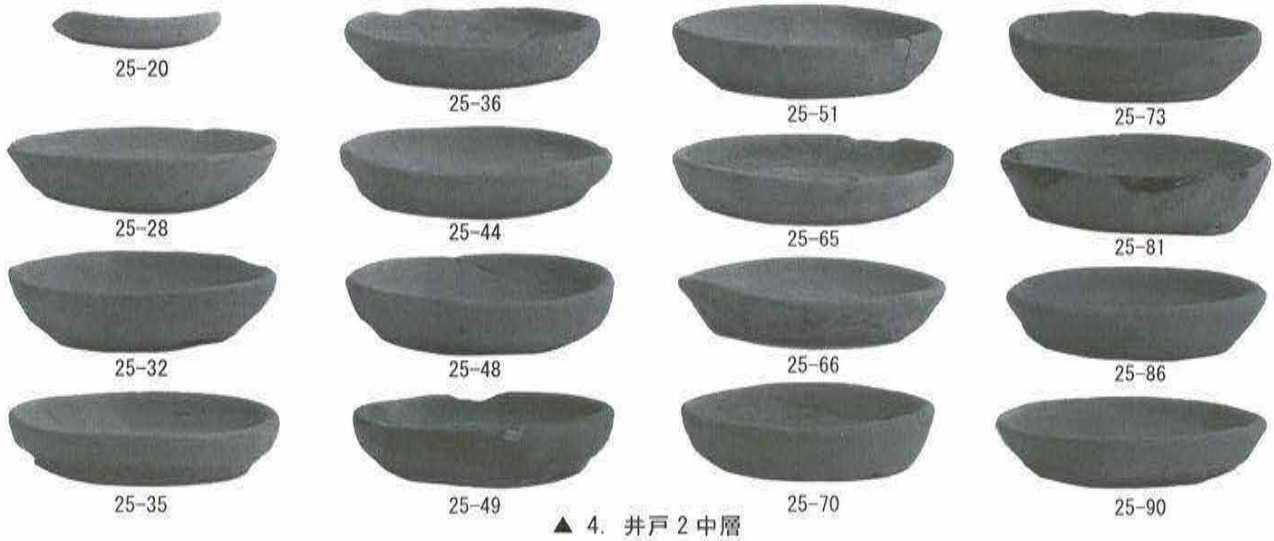


▲ 1. 井戸１上層

▲ 2. 井戸１下層



▲ 3. 井戸２上層



▲ 4. 井戸２中層

図版 10

26-95

26-109

26-118

26-103

26-113

26-128

26-104

26-116

26-131

27-135

27-147

27-149

27-150

27-152

27-136

27-154

27-141

27-148

27-156

27-158

▲ 1. 井戸 2 中層

▲ 2. 井戸 2 下層

28-1

28-9

28-12

28-4

28-10

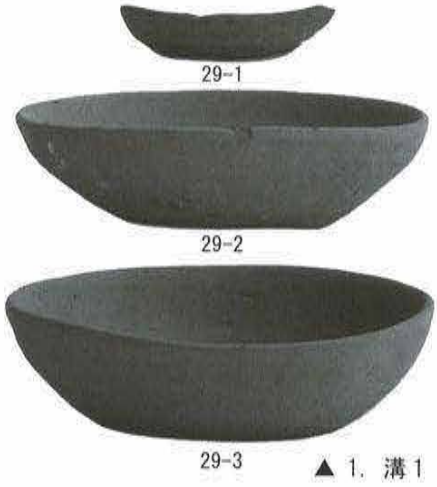
28-5

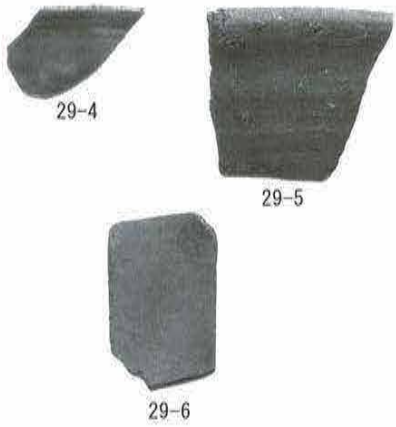
28-6

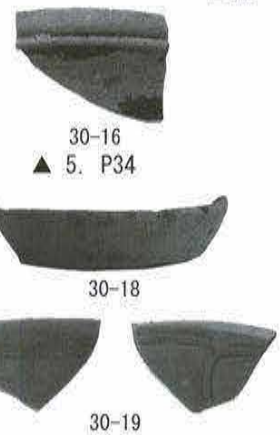
28-13

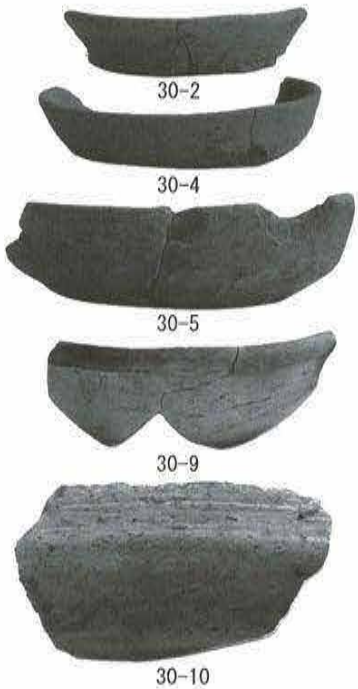
28-7

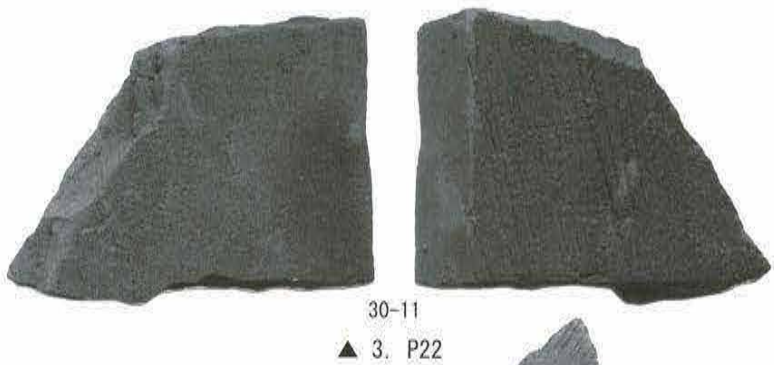
▲ 3. 井戸 3

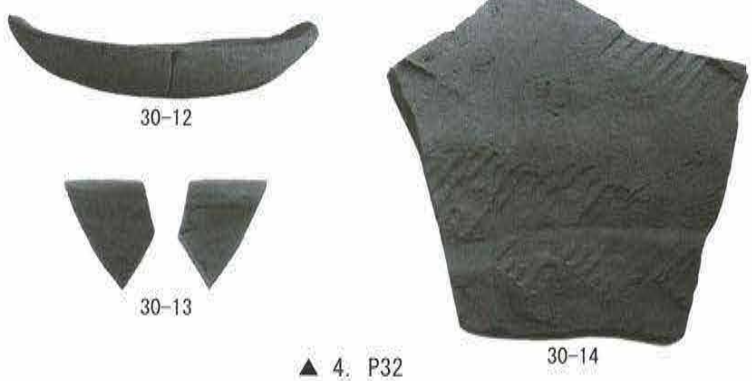

29-1
29-2
29-3
▲ 1. 溝 1

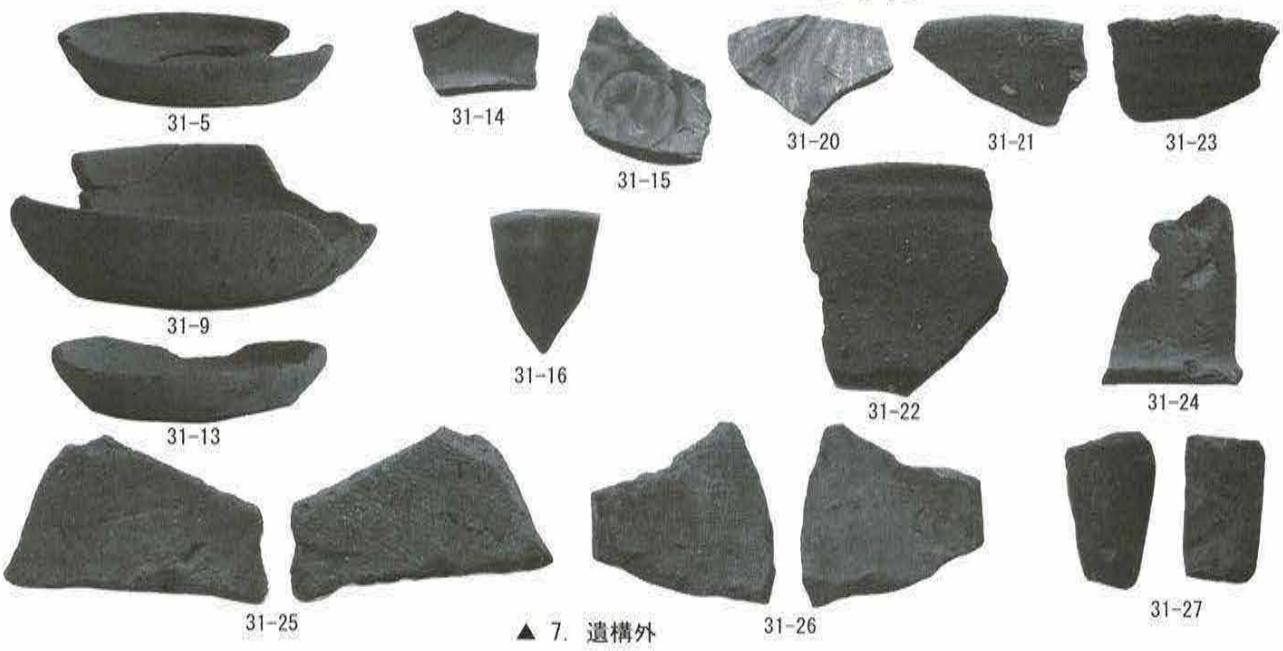

29-4
29-5
29-6


30-16
▲ 5. P34
30-18
30-19
▲ 6. P37


30-2
30-4
30-5
30-9
30-10
▲ 2. P11


30-11
▲ 3. P22


30-12
30-13
30-14
▲ 4. P32


31-5
31-9
31-13
31-14
31-15
31-16
31-20
31-21
31-22
31-23
31-24
31-25
31-26
31-27
▲ 7. 遺構外

北条時房・顕時邸跡（No. 278）

雪ノ下一 丁目236番1

例　　言

1．本報は、北条時房・顕時邸跡の鎌倉市雪ノ下丁目236番1地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2．発掘調査は、平成16年3月3日～同年4月5日にかけて、調査面積22.50㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3．調査体制は、以下の通りである。
調査担当者：原　廣志
調　査　員：須佐直子・太田美智子・石元通子・須佐仁和・久保田裕美・鈴木絵美・栂岡ケイト
調査補助員：長友純子・宇都洋平・山口正紀・野崎美帆・小野夏菜
協力　機関：（社）鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4．本報の執筆は、第1～3章を原が執筆し、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。また挿図・写真図版作成には須佐（直）・栂岡・山口・小野が実施した。
5．本報の掲載写真は、全景・個別遺構を原、久保田があたり、出土遺物は須佐（仁）が撮影した。
6．発掘調査における出土遺物、図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。
7．本報の凡例は、以下の通りである。
・図版縮尺　全測図：1／50　遺構図：1／20　遺物図：1／3
・遺 構 図　遺構図のレベルは海抜標高の数値を示している。
・遺 物 図　－・－・－は釉薬範囲を示す。黒塗は主にかわらけ灯明皿付着の油煤煙や漆器の朱漆文様を表現している。遺物観察表における手捏ねかわらけの底経計測値は外底指頭痕と口縁部との境、即ち稜部の数値を表わしている。
・使用名称　本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
8．現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
秋山哲雄・伊丹まどか・河野眞知郎・菊川　泉・菊川英政・古田戸俊一・汐見一夫・玉林美男・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木弘太・手塚直樹・福田　誠・松尾宣方・馬淵和雄

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……61
１．調査地点の位置……61
２．歴史的環境……63

第２章　調査の概要……65
１．調査の経過……65
２．測量軸の設定……65
３．層序……66

第３章　検出遺構と出土遺物……69
１．第１面の遺構・遺物……69
２．第２面の遺構・遺物……72
３．第３面の遺構・遺物……75
４．第４面の遺構・遺物……79
５．第５面の遺構・遺物……82
６．第６面の遺構・遺物……85

第４章　まとめ……88

挿 図 目 次

図１　調査地点位置図……61
図２　調査地点とその周辺……62
図３　国土座標・測量軸設定図……66
図４　調査区南壁・西壁土層図……67
図５　第１面全測図……69
図６　第１面各遺構……70
図７　第１面出土遺物……71
図８　第２面全測図……73
図９　第２面各遺構……73
図10　第２面出土遺物……74
図11　第３面全測図……75
図12　第３面各遺構……76
図13　第３面出土遺物……78
図14　第４面全測図……79
図15　第４面各遺構……80
図16　第４面出土遺物……81
図17　第５面全測図……82
図18　第５面Ｐ１……82
図19　第５面出土遺物（１）……83
図20　第５面出土遺物（２）……84
図21　第６面全測図……85
図22　第６面出土遺物（１）……86
図23　第６面出土遺物（２）……87

表 目 次

表１　第５面玉砂利計測表（１）……89
表２　第５面玉砂利計測表（２）……90
表３　第５面玉砂利計測表（３）……91
表４　第５面玉砂利計測表（４）……92
表５　玉石計測比票 ……92
表６　遺物観察表（１）……93
表７　遺物観察表（２）……94
表８　遺物観察表（３）……95
表９　遺物観察表（４）……96
表 10　遺物分類別出土数量・比率表 ……97

図 版 目 次

図版１．１．第１面全景（東から）　２．第１面全景（西から）　３．溝１（西から）
　　４．溝１かわらけ出土状況 ……98
図版２．１．建物１－イ礎石　２．建物１－ロ礎石　３．建物１－ ハ礎石　４．Ｐ２
　　５．溝１土土層断面 ……99
図版３．１．第２面全景（東から）　２．第２面全景（西から）　３．鎌倉石切石列
　　３．溝１北側土丹塊敷 ……100
図版４．１．第３面全景（東から）　２．第３面全景（西から）　３．かわらけ出土状況
　　４．Ｐ７礎板検出状況 ……101
図版５．１．第４面全景（東から）　２．第４面全景（西から）　３．溝１の木杭列
　　４．調査区中央部（北から） ……102
図版６．１．第５面全景（東から）　２．第５面全景（西から）　３．玉砂利敷範囲近景
　　４．玉砂利群 ……103
図版７．１．第６面確認トレンチ（東から）　２．トレンチ内ハマグリ出土状況
　　３．調査区北壁土層断面　４．調査区南壁土層断面　５．調査区西壁南端土層断面
　　６．調査区西壁北側土層断面 ……104
図版８．１．第１面　２．第２面 ……105
図版９．１．第３面　２．第４面 ……106
図版 10．１．第５面遺構外 ……107
図版 11．１．第６面遺構外 ……108

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．調査地点の位置

「鎌倉城」と呼称される馬蹄形の山塊に囲まれた鎌倉旧市街地は、鶴岡八幡宮から市街中心を抜けて由比ケ浜の海岸に向かって縦貫する若宮大路と、この幹線道路とほぼ平行・直交したいくつかの道路にによって区画されている。この中で鶴岡八幡宮社前を東西に走る通りを「横小路」と呼び、若宮大路の

図１　調査地点位置図

図２　調査地点とその周辺

調査地点位置と周辺遺跡

図２調査地点名	調査報告書名など
①「雪ノ下一丁目 236 番 4」	本調査地点
②「雪ノ下一丁目 271 番 1」	田代郁夫・原廣志　1889『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 271 番 1 地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団（団長吉田章一郎）
③「雪ノ下一丁目 271 番 3」	馬渕和雄　2000「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 272 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16　第２分冊
④「雪ノ下一丁目 271 番 4」	馬渕和雄・鍛冶屋勝二・松原康子　2000「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 271 番 4 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16　第２分冊
⑤「雪ノ下一丁目 272 番」	宗臺秀明・宗臺富貴子　1998「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 272 番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14　第１分冊
⑥「雪ノ下一丁目 273 番ロ」	佐藤泉・福田誠・原廣志　1988「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 273 番ロ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
⑦「雪ノ下一丁目 273 番イ」	瀬田哲雄・熊谷満　1997「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 273 番イ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15　第１分冊
⑧「雪ノ下一丁目 274 番 2」	福田誠・原廣志　1988「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 274 番 2 地点」北条時房・顕時邸跡発掘調査団（団長吉田章一郎）
⑨「雪ノ下一丁目 233 番 9」	馬渕和雄　1987「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 233 番 9 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
⑩「雪ノ下一丁目 372 番 7」	馬渕和雄　1985「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 372 番 7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1
⑪「雪ノ下一丁目 371 番 1」	馬渕和雄　1985「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 371 番 1 地点」北条時房・顕時邸跡発掘調査団（団長吉田章一郎）
⑫「雪ノ下一丁目 370 番 1」	宗臺富貴子・土屋浩美　1998「北条小町（泰時・時頼邸跡）雪ノ下一丁目 367 番 7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14　第１分冊
⑬「雪ノ下一丁目 369 番」	瀬田哲雄　1991「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 369 番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7
⑭「雪ノ下一丁目 369 番 1」	秋山哲雄・須佐直子・原廣志　1998「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目 369 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14　第２分冊
⑮「雪ノ下一丁目 367･368 番 1」	宮田真・森孝子・堀川浩通　2000「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）雪ノ下一丁目 367 番 1 地点」北条小町邸跡発掘調査団（団長宮田真）
⑯「雪ノ下一丁目 419 番 3」	玉林美男　1987「北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目 419 番 3 地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
⑰「小町二丁目 366 番 1 外」	継実　1991「宇都宮辻子幕府跡」『第１回鎌倉市遺跡発表会・研究発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

西方約 300mを JR 横須賀線と平行に走る通りを「今小路」と呼び、その間の南北方向の通りには商店が軒を連ねて一年を通じ観光客で賑わう「小町通り」が位置している。さらに若宮大路の反対側 200mほど東には、鎌倉幕府域東限をなして南北に走る道路の「小町大路」があり、この道は南進して町屋域を抜け和賀江津（港）へ至る経済要路でもあった。二ノ鳥居から段葛を鶴岡八幡宮方面へ約 250m西には若宮大路から今小路踏切に至る真っ直ぐな路地がある。この路地と、若宮大路・横小路・小町通りに四辺を囲まれた範囲、およそ南北 240m× 東西 110mに及ぶ長方形の地域が「北条時房・顕時邸跡」として神奈川県遺跡台帳（台帳番号：No. 278）に掲載されている場所である。調査地点はこの区画内の南側中央寄りの一角にあたり、鶴岡八幡宮より約 190mほど南の位置で、地番は鎌倉市雪ノ下一丁目 236 番１に所在している。

２． 歴史的環境

治承四（1180）年秋に鎌倉入りした源頼朝は、まず平安時代後期に源頼義が浜地の由比郷鶴岡に勧請した鶴岡若宮を、現在の小林郷北山へ環座して鶴岡八幡宮新宮若宮と称した。鶴岡八幡宮社頭から由比ケ浜へ一直線に延びる八幡宮への参詣道が若宮大路である。『吾妻鏡』には寿永元（1182）年春、鎌倉幕府による街造りの第一歩として、また妻北条政子の安産祈願をかねて大路設営を行ない頼朝自ら陣頭指揮にたち北条時政以下の諸将が土石を運んで段葛を築造したと伝えている。この時期の御所（幕府）は鶴岡八幡宮東側に位置した大倉に設けられていが、健保五（1217）年の火災焼失と、嘉禄元（1225）年に北条政子が没してまもなく、執権北条泰時はこれまでの大倉御所から鶴岡八幡宮前、若宮大路東方にあたる宇都宮辻子に面した地に御所（宇都宮辻子幕府）を移転し、翌年京都より迎えられた藤原摂関家の九条頼経が鎌倉幕府第四代将軍としてここに入っている。さらに嘉禎二（1236）年に「若宮大路の東の頬」へと新たに御所の造営が行なわれ移転されたのだが、その場所は若宮大路御所で鎌倉幕府第三代執権の北条泰時邸内の一画に置かれたという。この区画の若宮大路を挟んだ向かい側に位置したのが本調査地点が所在する「北条時房・顕時邸跡」である。

本遺跡である北条時房・顕時について簡単に触れることにする。時房（1175 ～ 1240 年）は初代執権北条時政の嫡子であり、文治五（1189）年の奥州合戦や健保元（1213）の和田合戦などの際に参戦しており、さらに承久の乱（1221 年）では泰時とともに上洛を果たし、のちに初代六波羅探題に任ぜられるほか没するまで連著などの要職を努めている。

顕時（1248 ～ 1301 年）は初代金沢北条氏の実時嫡子で引付衆・評定衆などの要職を歴任している。北条実時と、鎌倉の外港六浦津及び金沢の地との縁は、宝治元（1247）年の宝治合戦で三浦一族を滅亡させたのち、六浦荘金沢を支配したのが金沢氏の祖、父実時であった。実時は六浦荘金沢に居館を営み、その一画に持仏堂から発したと推定されるのが現在の横浜市金沢区金沢町に所在した金沢山称名寺（西大寺末）である。称名寺は弘長二（1262）年に浄土教寺院として登場するが、文永四（1267）年に実時は五部大乗経を受け取るために鎌倉に下向した下野国薬師寺（戒壇院を有す）の僧審海を招聘して長老に据え、真言律宗に改宗して称名寺の礎を築いた。弘安八（1285）年義父泰盛のおこした霜月騒動に座し下総国埴生庄へ流謫の身となった。後に出家し、法名を恵日と号した。境内には顕時の墳墓となる大型の石塔五輪塔が建立されている。

〈引用・参考文献〉

大三輪龍彦　　1989　「鎌倉の都市計画－政治都市・軍事都市として－」『よみがえる中世３ 武士の都 鎌倉』平凡社

河野眞知郎　2004　『政権都市「鎌倉」－考古学的研究のこの十年－』中世都市研究会編『中世都市研究９　政権都市』新人物往来社
斎藤直子　1999　「13～19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容」『国立歴史民族博物館研究報告』第81集 国立歴史民族博物館
高橋慎一朗　2005　『日本史リブレット21　武家の古都鎌倉』山川出版社
前田元重・村岡正　1988　「史跡称名寺境内－鎌倉を守った東の要害－」『称名寺庭園－鎌倉時代随一の浄土庭園－』横浜市教育委員会・神奈川県立金沢文庫
西岡芳文　2004　「港湾都市六浦と鎌倉」　五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院

第２章　調査の概要

１．　調査の経過

本地点は個人専用住宅の建設に先立つ発掘調査であった。建設計画は鋼管杭打ち基礎工事であったため、鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が実施された。その結果、現地表下約 75～ 85cm まで近・現代の客土があり、その直下から中世遺物包含層を挟んで遺構面（生活面）の存在が明らかになり発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成 16 年3月3日から調査機材の搬入及び確認調査の成果を基に客土の重機掘削から開始し、後に人力で掘り下げながら各遺構面の調査を行なった。調査期間中は高い地下水位に伴う多量湧水に悩まされながら、4月5日に現地調査を無事終了した。調査面積は 22.5㎡ を対象である。調査経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

3月3日（水）晴天　調査区を設定し、地表下70cmまで重機による表土掘削と後追い残土処理。調査機材搬入とテント設営。
4日（木）晴天　土丹版築の整地層が確認され、第１面として検出作業を開始。市４級基準点を基に測量軸方眼の設定及び測量用水準点の原点レベル移動。
6日（土）晴天　第１面全景・個別遺構の写真撮影、平面図作成後に下層遺構検出の粗掘り開始。
8日（月）晴天　下層遺構検出の粗掘りと面出し精査。
11日（木）晴天　第２面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。第３面検出の粗掘りと面出し遺構確認の精査。
15日（月）晴天　第３面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。次の生活面へ向け粗掘りと面出し遺構確認の作業開始。
19日（金）晴天　第４面の遺構検出と写真撮影の為の清掃、全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
22日（月）曇天　第５面検出に向け粗掘りと面出し遺構確認の作業開始。
27日（土）晴天　第５面全景・個別遺構の写真撮影、平面図作成開始。
29日（月）晴天　調査区南半分にトレンチ設定し、下層の生活面・遺構を確認するために深掘りを開始。
31日（水）晴天　トレンチ内第６面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
4月1日（木）晴天　調査区南壁・西壁土層堆積の写真撮影及び土層断面図作成。
5日（月）晴天　機材撤収、現地調査終了。

２．　測量軸の設定

現地調査にあたり使用した測量軸の設定には、図３に示したように国土座標の数値を用いており、グリットは調査区範囲にほぼ平行して基準の東西軸を設けた。設定には調査地点東側を南北に走る道の路面上に鎌倉市道路管理課が設置した市３級基準点（第Ⅸ座標系）のS111（X＝－75,462.628 Y＝－25,133.411）とS112（X＝－75,501.598 Y＝－25,153.207）が確認された。このS111・112 を国土座標の基準点として図３に示したように敷地内へ任意点にあたるａ・ｂ点を移動した。その後、調査区に併

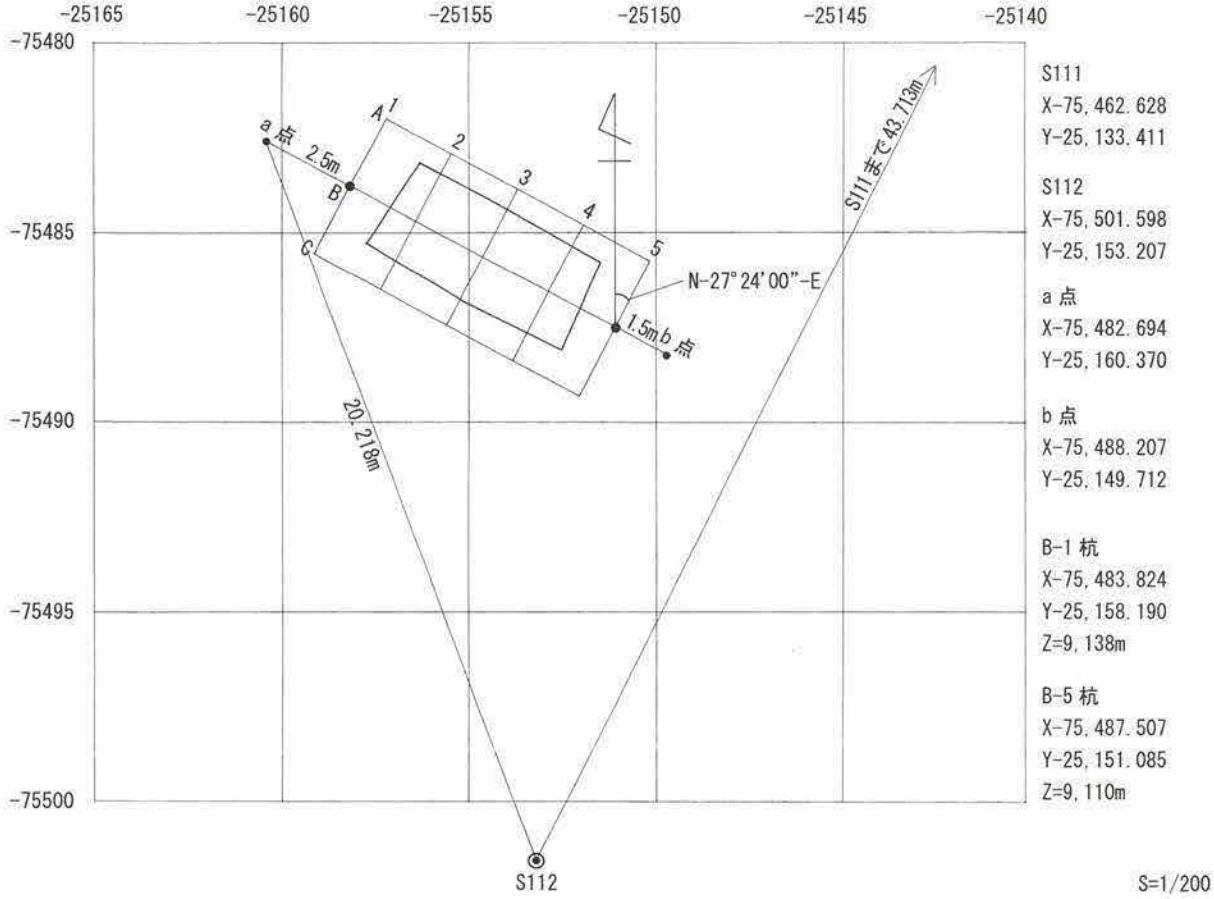


図３　国土座標・測量軸設定図

てグリットの基準としてＢ－１杭（Ｘ＝－75.483.824　Ｙ＝－25,158.190）とＢ－５杭（Ｘ＝－75,487.507　Ｙ＝－25,151.085）をそれぞれ設置した。なお、方眼軸線は測量の便利性と、予想される検出遺構の軸方位を優先させた方法で調査区の形状に即した配置にしたために、国土座標とは一致していない。

調査区の方眼軸は、図２上段で示したように東西軸と南北軸をそれぞれ４ｍ方眼を組み、北から東西軸をアルファベット、南北軸は西から算用数字を充てた。各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。方眼の南北軸線は真北よりＮ－27°24′00″－Ｅを示し、現若宮大路の中軸線は真北よりＮ－26°48′23″－Ｅである。

調査中に使用した海抜標高の水準原点は、若宮大路二ノ鳥居の基礎に近接して設置されている国土地理院水準点No.15673(6.1684m）を基準にして調査地内の東西軸になるＢ－１杭（9.138m）・Ｂ－５杭（9.110m）上に仮水準点を移動したものである。従って、文章中及び挿図に記載されたレベル数値はこれを基準とした海抜標高である。

３．　層序

調査区の南壁と西壁で確認した図４の土層堆積図を用いて、その堆積状況を表土より説明する。調査前現地表の海抜標高は約9.00m程でほぼ平坦な地形を呈している。第１面までの堆積土層は近・現代の客土と攪乱層（主に関東大震災後に伴うゴミ穴）が約85cm前後の厚さで堆積していた。近・現代の堆積土（攪乱・表土）を重機により取り除いたのち、中世の遺物包含層をほとんど挟まずに小土丹塊やかわらけ小片を含んだ締まった第１層の灰褐色砂質土が顔を覗かせ、上面より遺構が確認できたので第１面

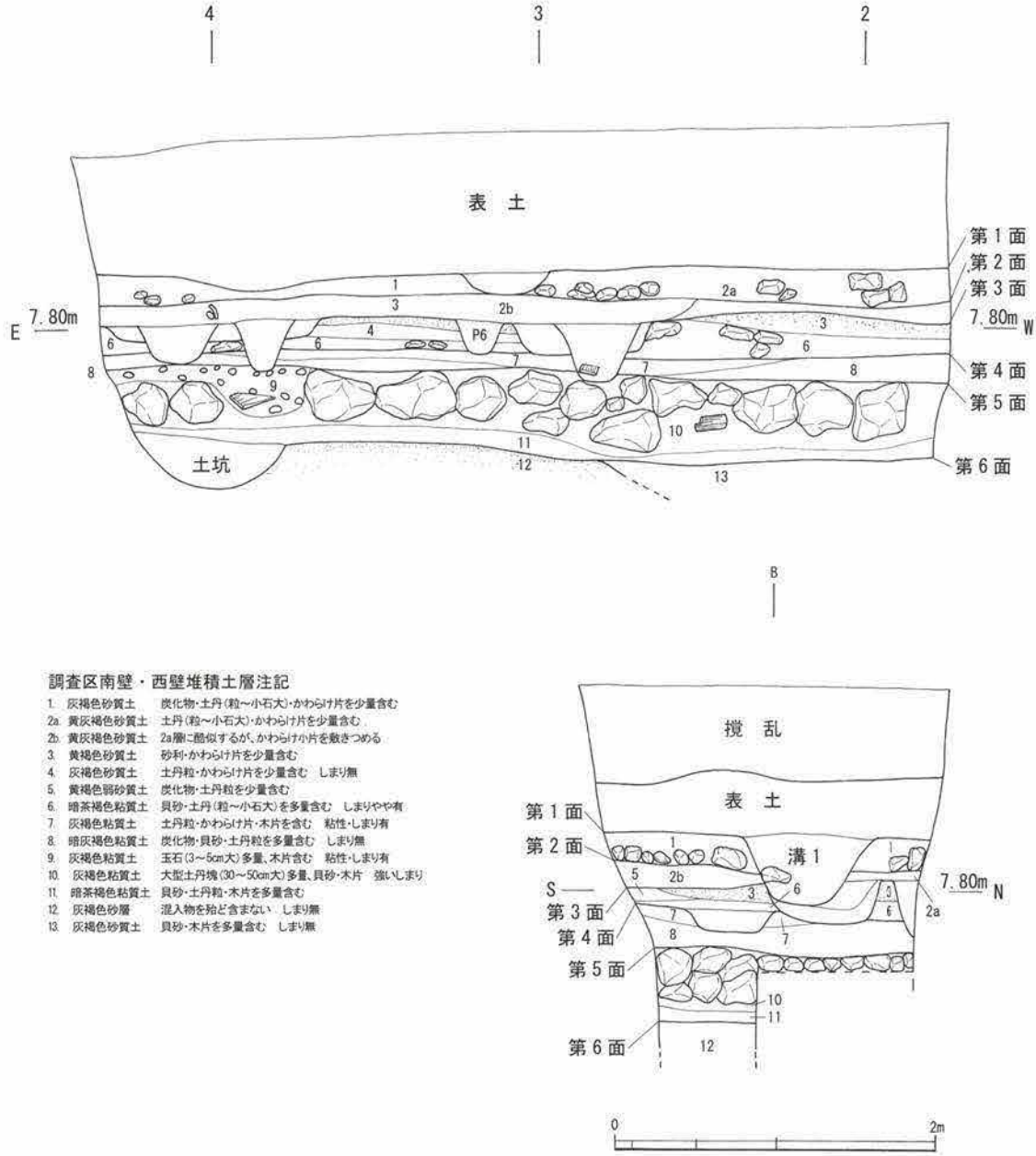


図４　調査区南壁・西壁土層堆積図

とした。第１面は海抜高約8.15mを呈し、調査区内全体で比較的良好な土丹塊を利用した整地がなされていたが、溝１を挟んで異なる様相を示していた。調査区北壁直下の礎石建物側は平らな土丹版築の地行を施して生活面を構築しているのに対し、南側は表面にまで土丹塊を貼り付けており凹凸を残す地行で構成されてる。第２面は海抜高約7.95m程で面に起伏がある整地を施し、厚さ10～20cm第１面構成土を除去した直下より２a・b層上を生活面としている。調査区内でこの面を構成する版築層や整地層はa・b層と区別したように異なる土丹地行層が施されていた。調査区南半分の範囲は地盤が土丹地行版築で固められていた（２b層)。その上におおむね拳大～人頭大の土丹塊が列をなし延長上に鎌倉石の長方形切石２個が認められた。２a層は小土丹塊と粗砂を混入した黄灰褐色砂質土の薄手造成土で構成される。この時期は鎌倉石切石以外、ピット３口が認められるだけで遺構密度は低く屋敷の中の空閑地と考えられる。

第３面は海抜高7.85m前後であった。第２面の厚さ15cm程の構成土を除去すると、暗黄褐色砂層で多

量の砂利と粗砂を固めた地行層で表面が硬化した生活面を特徴とする。硬化した３層は下層の締まりが弱く脆弱な4･5層の地盤を改良するため､結果的にこうなったのだろう。この面では礎板を伴う柱穴、土坑、溝状土坑など第２面に比べ、やや高い遺構密度であった。第４面は海抜高約 7.70mで調査区北半分の一定の範囲に土丹地行が確認された。この面の整地土は７層の土丹粒・かわらけ片を多めに含んだ粘性の強い締まりある灰褐色粘質土と、８層の炭化物・貝砂・土丹粒を多量に含んだ締まりの弱い粘質土で両層の堆積は厚さ15～25cm である。第５面は海抜高 7.50m前後であった。この面の構成土は拳大～50cm 大の大小土丹塊を多量に交えて地行した厚さ30～50cmの強固で硬化した整地層になり、東域の面上には3～5cm 大の玉石敷きが検出さられた。

第６面は海抜高約7.05m程である。第５面の調査終了後、多量の降雨・湧水によって調査区壁面の一部が崩落した。そこで調査の安全確保を考慮する目的で第５面以下は調査区南壁沿いにトレンチを設定して遺構確認を行なった。この面は 12･13 層の無遺物層より構成された生活面で、第５面の地行整地層との間に薄い有機物腐食土（11 層）の堆積が認められた。

第３章　検出遺構と出土遺物

１．　第１面の遺構・遺物

第１面は、地表レベル海抜 8.10 ～ 20m を測り、調査区北半分を中心に土丹塊を突き固めた地行面で緩やかに東から西に向かって傾斜している。この面では礎石建物１棟、溝１条、ピット４穴を検出した。建物１は東西に走る溝１の一部を壊して建られている。出土遺物には溝１に伴うかわらけ（ロクロ成形）をはじめ、舶載陶磁器、瀬戸・常滑窯、瓦類、骨角製品などである。

建物１（図５～７）

調査区北壁際において東西方向で検出された礎石建物であり、現状では礎石３個からなり２間分（420cm）が確認され、南辺の限界と考えられるが、調査区の北・東西外へと拡がっているため規模は不明である。柱間寸法（図６上段を参照）をみると、西端に位置する礎石の建１－イから東端の建１－ハまでの柱間芯々距離がそれぞれ 212cm（約７尺）・212cm を測り、建物主軸は若宮大路中軸線にほぼ直交した軸方向を示している。浅い掘り方をもつ各礎石は径 40～ 47cm・厚さ 17～ 23cm 程の楕円形の偏平な川原石を用いている。建１－イの礎石上面には焼失した柱あたりの痕跡を残し、使用された柱の寸法は一辺約

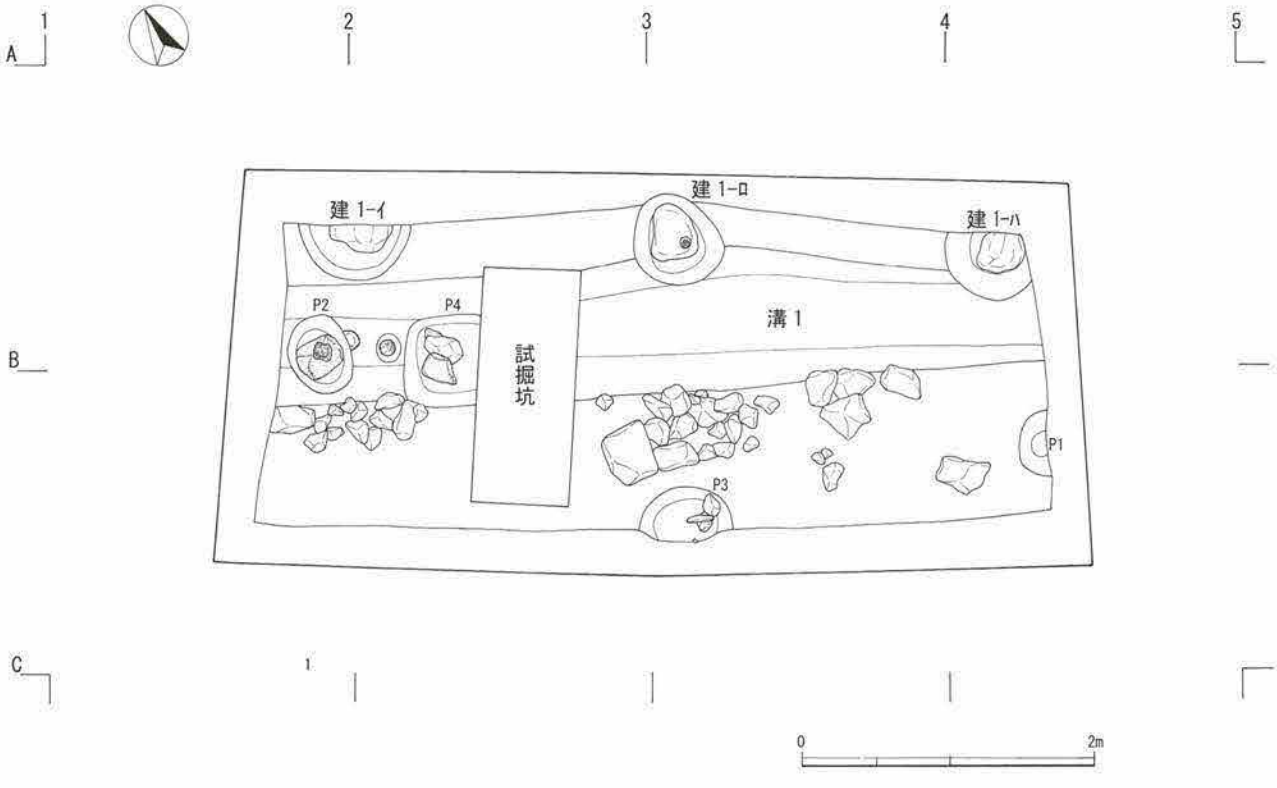
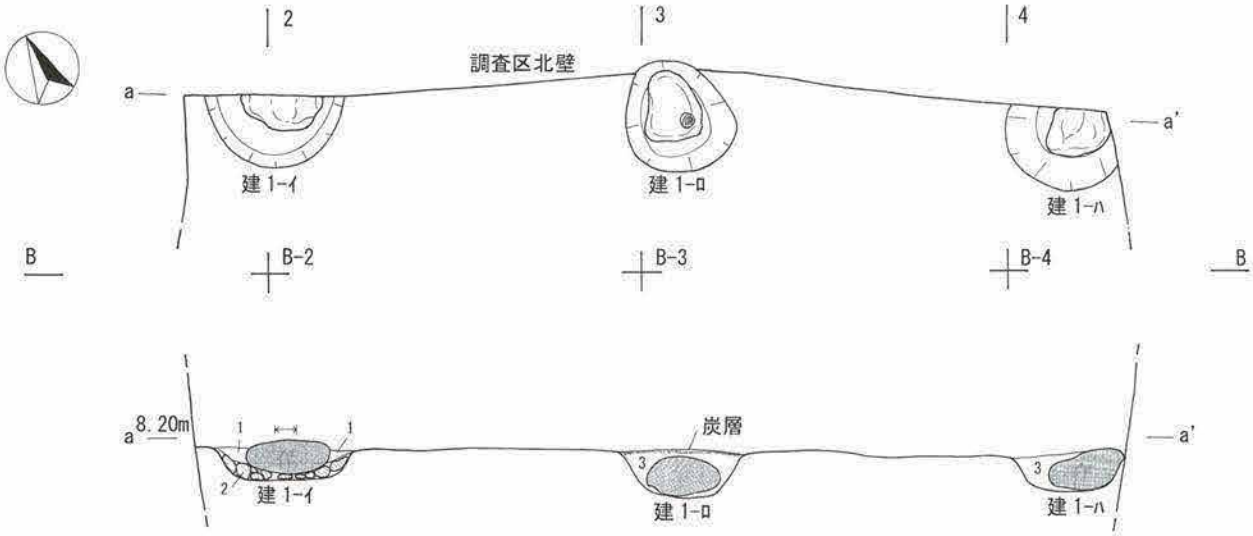


図５　第１面全測図

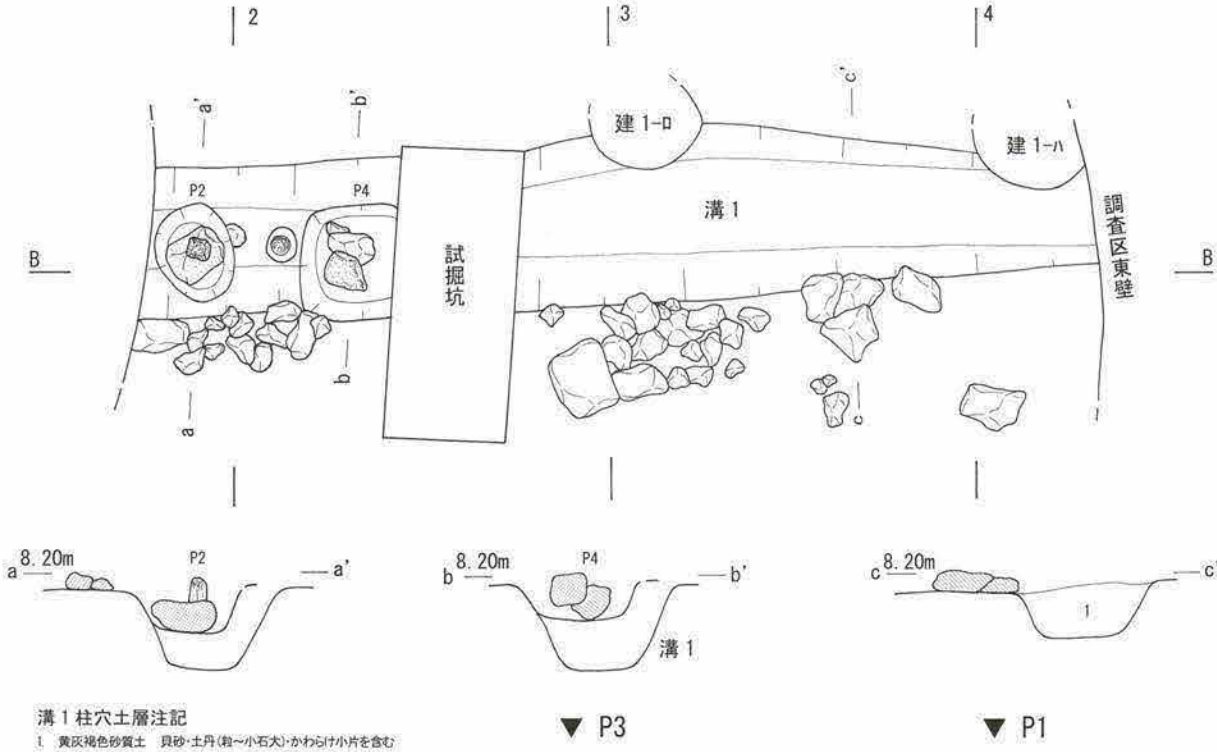


建物 1 柱穴土層注記

1. 灰褐色弱粘質土　炭化物・かわらけ小片を多量含む
2. 黄灰褐色粘質土　拳大土丹塊による根固め
3. 暗褐色粘質土　炭化物多量、土丹粒・かわらけ小片含む

▲建物 1

▼溝 1・ピット



溝 1 柱穴土層注記

1. 黄灰褐色砂質土　貝砂・土丹（粒～小石大）・かわらけ小片を含む

▼ P3

▼ P1

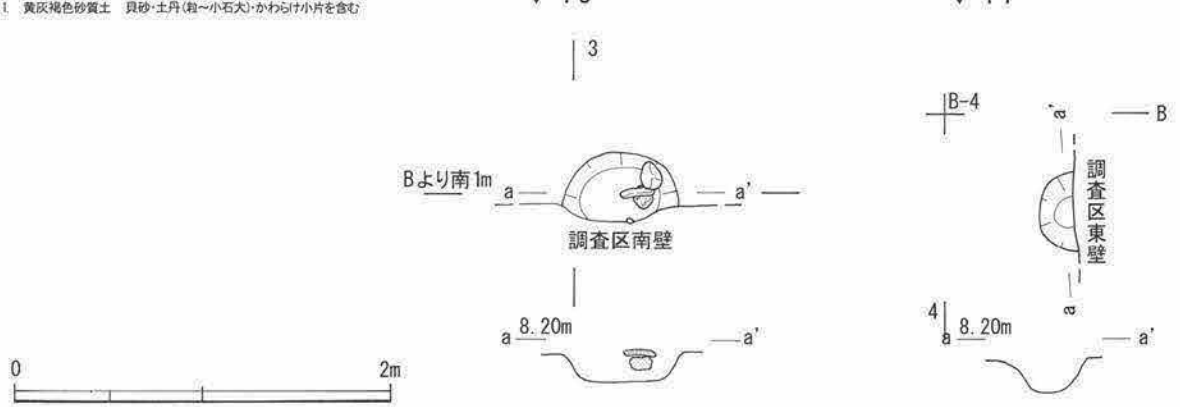


図 6　第 1 面各遺構

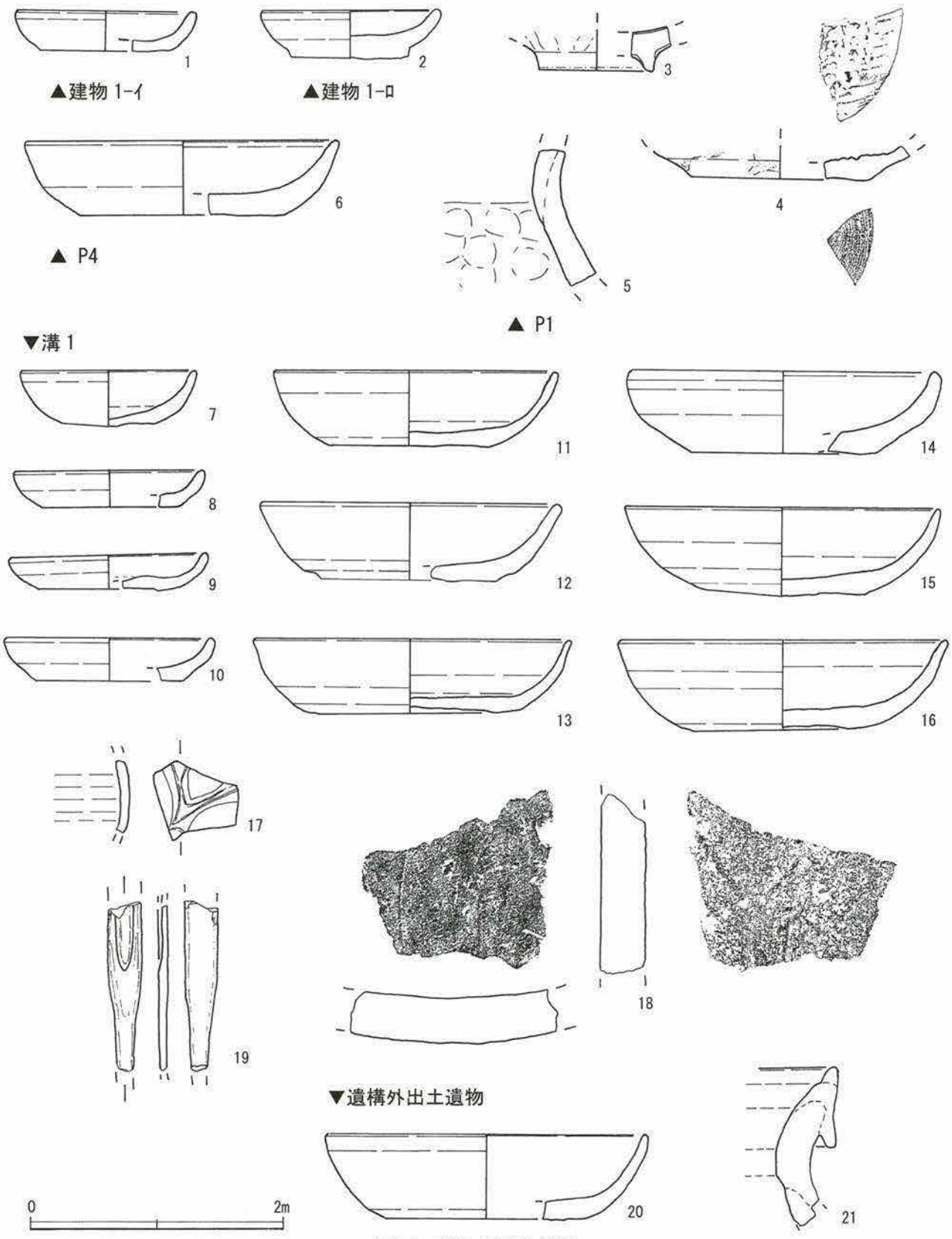


図７　第１面出土遺物

13cm の角柱と推定された。建１－イは礎石上面の海抜高 8.20mであり、礎石下に拳大の土丹塊により根固めを施した掘り方である。建１－ロの礎石上層には薄い炭層が覆っており、建１－ハの礎石表面に煤けた痕跡が認められ、この建物が被災した可能性が予想させる。出土遺物は建１－イ・建１－ロから図

7－1・2のロクロ成形のかわらけ小皿がそれぞれ伴っていた。

溝1（図6・7）

調査区中央で建物1や柱穴に一部を壊されているが、建物1と同じ主軸方位で東西へ延びる素掘り溝である。溝は幅68～93cm、深さ35～45cm、長さ5.2m以上を計測し、掘り方の断面は逆台形を呈する。溝底の海抜高は東端で7.85m、西端で7.70mで東から西へ緩やかに流下している。覆土は貝砂ブロック・水磨した土丹小塊・炭化物を含む黄灰褐色砂質土である。出土遺物は図7－7～19である。7～16は糸切底ロクロ成形のかわらけ皿で7～10が小型、11が中型、12～16が大型である。7は薄手器壁の背高で口径・底径比が大きいもの、8～10が背低で内底面が広く、内彎気味の器形である。11は口径10.8cmの背高で薄手器壁の内彎した器形、12～16は口径12.1～13.3cm、底径6.7～7.8cm、器高3.0～3.5cmと薄手丸深型の器形である。17は青白磁梅瓶の胴部片、18は女瓦、19は鹿骨製品の笄である。

ピット（図6・7）

P1は調査区東南隅で西半分を確認した径43cm、深さ25cmの掘り方をもつ。遺物は図7－3～5の青磁蓮弁文碗底部・瀬戸卸皿底部・常滑甕頸部の破片である。

P2はB－2杭に位置し溝1より新しいもので、掘り方は径40～50cmの楕円形を呈し、深さ24cmで底面に方形状の鎌倉石を据えてその上に一辺12cmの角柱痕を残している。図示可能な出土遺物はない。

P3は調査区南壁中央で確認した径65cm、深さ18cmの浅く楕円形の掘り方である。図示可能な遺物はない。

P4はP2東隣で溝1を壊して掘り込まれる。掘り方は一辺45cmの隅丸方形を呈し、深さ22cmを測り中には根固めに用いたのか鎌倉石・土丹塊が認められた。遺物は図7－6のロクロ成形かわらけの大型品が出土した。

第1面遺構外出土遺物（図7）

図7－20はロクロ成形の大型かわらけ、21は常滑甕の口縁部片で13世紀末葉～14世紀前葉頃の所産である。

以上、第1面の遺構・遺物について述べてきたが、この面に伴う遺物の種別出土量・出土比率について触れる。遺物は遺構及び遺構外の資料を併せたて破片数が130点であり、出土比率は全体の17%を占めていた。その内訳をみると、かわらけ98点、舶載磁器4点、国産陶器23点、瓦質製品3点、骨製品1点の他、獣骨1点も出土している。

2．第2面の遺構・遺物

第2面は、海抜高8m前後で調査区南側域を中心に破砕土丹を多く混入して突き固めた比較丁寧な地行版築面の拡がる範囲を検出された。面上には大小土丹塊が認められ、地行面東端から鎌倉石切石が2個が据えられていた。北側域の地行面は版築を施していないが、破砕土丹を含んだ黄灰褐色砂質土の整地層なっており、併せてこの面上で遺構検出を行なった。遺構は石列とピットが検出されただけで遺構密度が低いの特徴でる。出土遺物にはかわらけ、瀬戸・常滑窯、瓦類などがある（図8～10）。

切石列（図9）

調査区南東端で南壁に沿って鎌倉石の切石が面に据えられた状況で検出されており、石列の主軸方位は若宮大路軸線に対して直交している。切石は割れているが、1が長さ80cm・幅36cm・厚さ13cm、2が76cm・幅36cm・厚さ13cmで上面の海抜高約8.10mである。西側にある土丹版築面の切石延長線上には粗

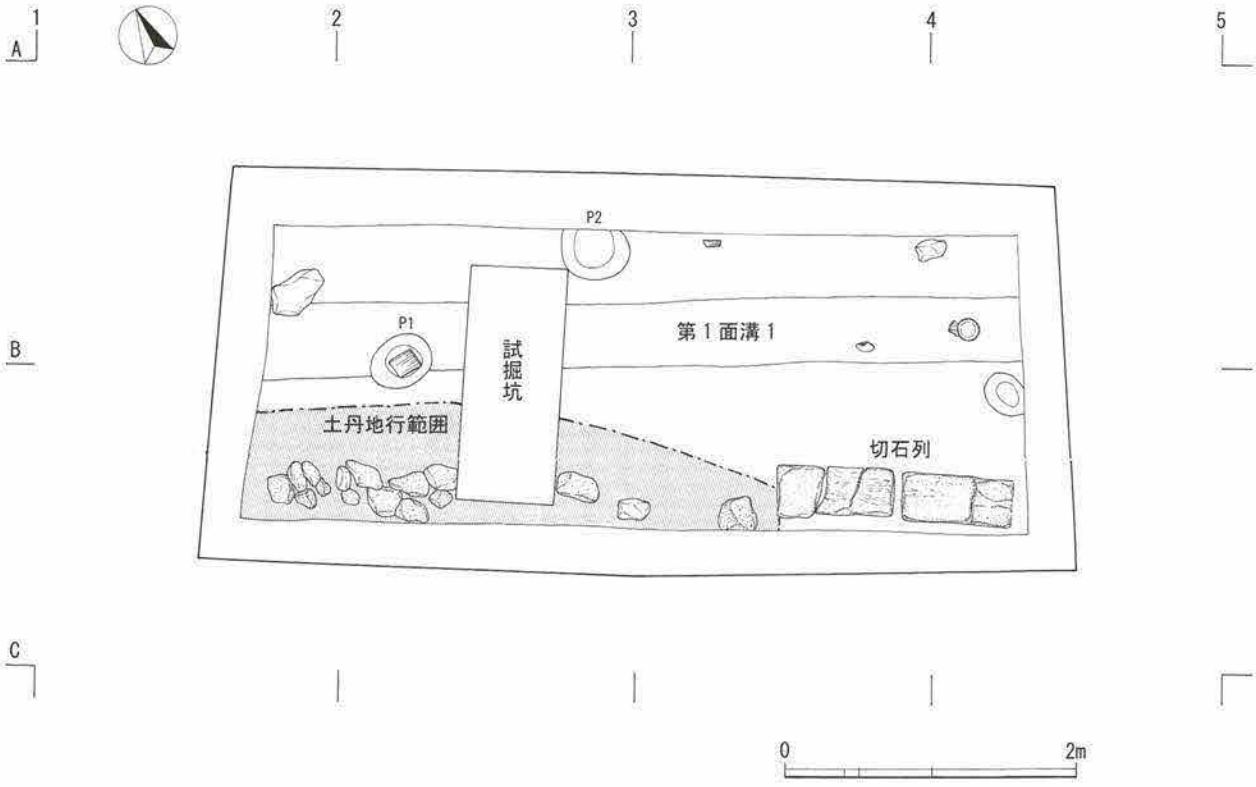


図８　第２面全測図

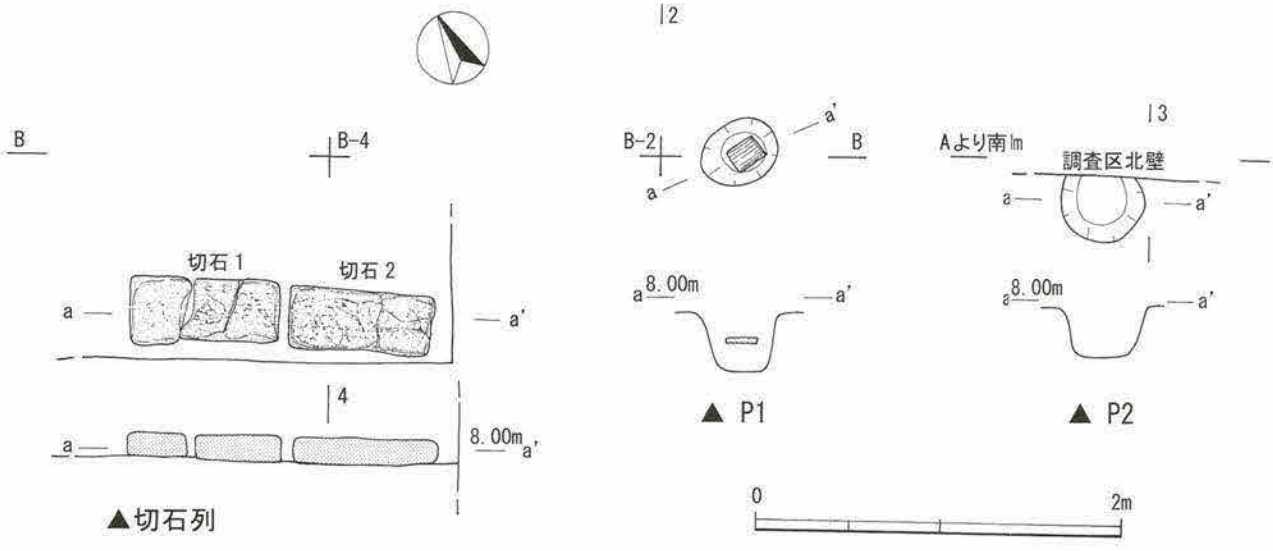


図９　第２面各遺構

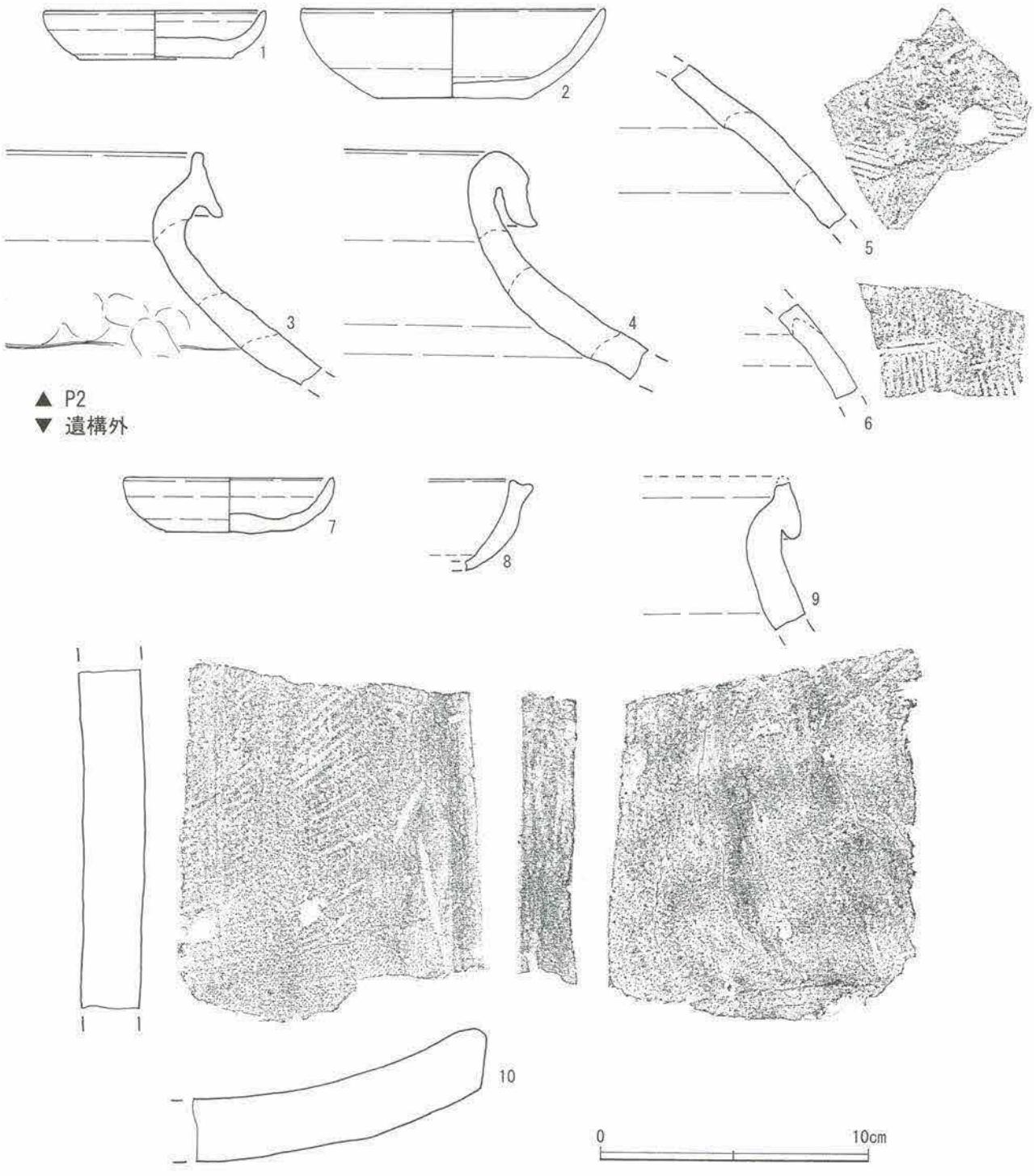


図１０　第２面出土遺物

密の土丹塊列が認められたるが本遺構との関係は不明である。

ピット（図９・10）

Ｐ１はＢ－２杭に位置する。径 45～35cm、深さ35cm で楕円形を呈した掘り方をもつ。掘り方中程に長さ 18cm、幅 13cdm、厚さ4cm の礎板と思われる。図示可能な遺物は出土していない。

Ｐ２は調査区北壁中央に位置したもので、掘り方は径約 45cm の楕円形を呈し、深さ 30cm で底面平らになる。灰褐色砂質土の覆土に交じって、図 10－１～６の遺物が出土した。１・２はかわらけで小型が背低で薄手器壁の内彎した器形、２は口径 11.0cm の中型で粉質良胎の薄手丸深の器形である。３～６は常

滑甕の口縁部・肩部片であるが、口縁玉縁部の型体は 13 世紀後葉頃の所産であろう。

遺構外出土遺物（図 10）

７は小型のかわらけで器壁の薄目のものである。８は瀬戸窯の灰釉卸皿、９は常滑甕の口縁部片で玉縁部の型体からみて13 世紀後葉頃の所産と考えられる。10 は女瓦（平瓦）で凹面に斜め方向の糸切痕と離れ砂、
凸面に斜格子の叩き締め後、縦位の指ナデ消しを施す。

以上のように第２面の遺構・遺物について述べてきた。この時期の生活面は遺構密度が低く、それに伴う遺物の種別出土量・出土比率も各面中、一番少ないものであった。遺物は破片数にして 33 点、出土比率は全体量の４％程に留まり、その内訳はかわらけ 14 点、国産陶器 18 点、瓦１点だけで舶載

３．　第３面の遺構・遺物

第２面を構成する整地層を除去すると、上面が褐鉄で硬化した暗黄褐色砂層が表出された。この砂層は砂利と粗い貝砂から構成され、厚さ5～ 12cm で調査区中央の一部を除き敷きつめられた状況で確認された。上面検出レベルは海抜標高 7.85m前後である。この面に伴う遺構には土坑・溝状土坑、ピットなどが検出された。出土遺物は主にかわらけで、この他に少量の舶載陶磁器、瀬戸・常滑窯、瓦質製品、漆器などがみられた。

土坑１（図 11・12）

調査区南壁の３ラインに位置し、南半分は調査区外に拡がっている。Ｐ９との新旧関係は図12 左下の土層観察のように本遺構が古い。確認した東西径 86cm、深さ 20cm であり、浅い皿型の窪みで覆土は貝砂

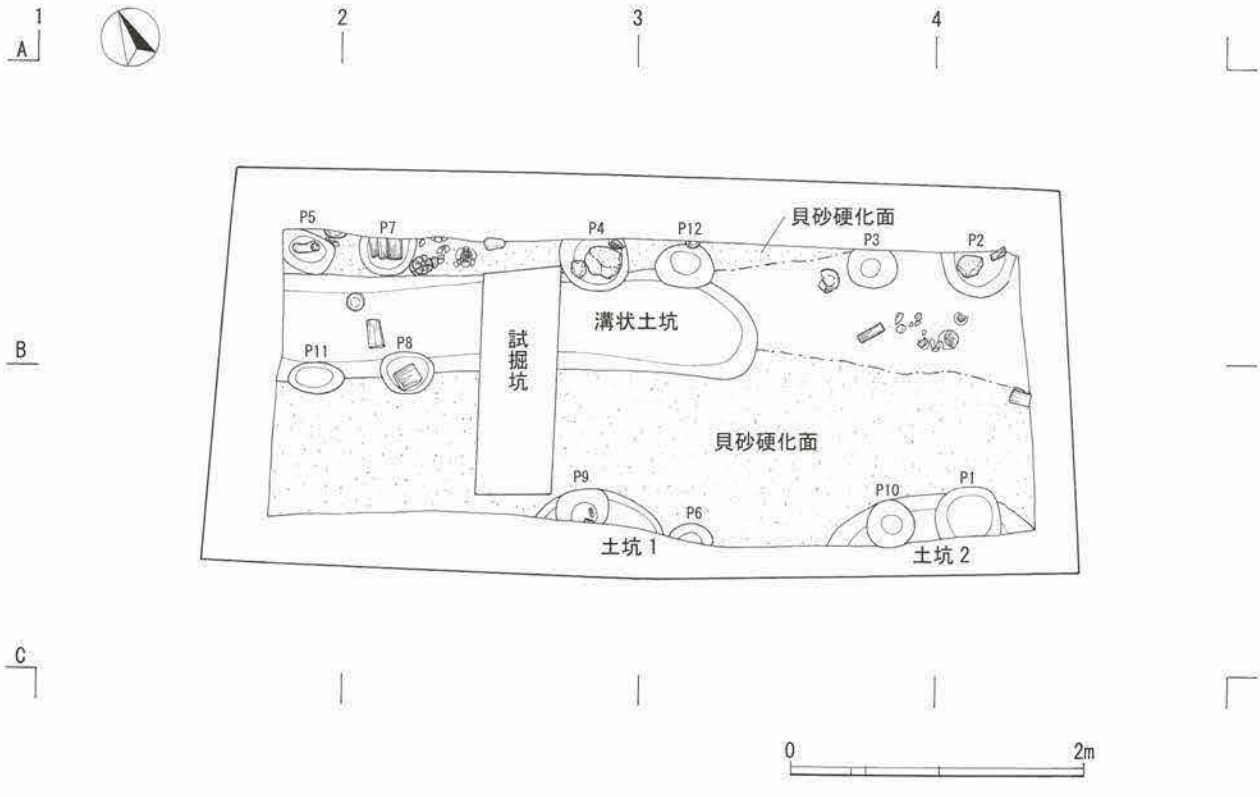


図１１　第３面全測図

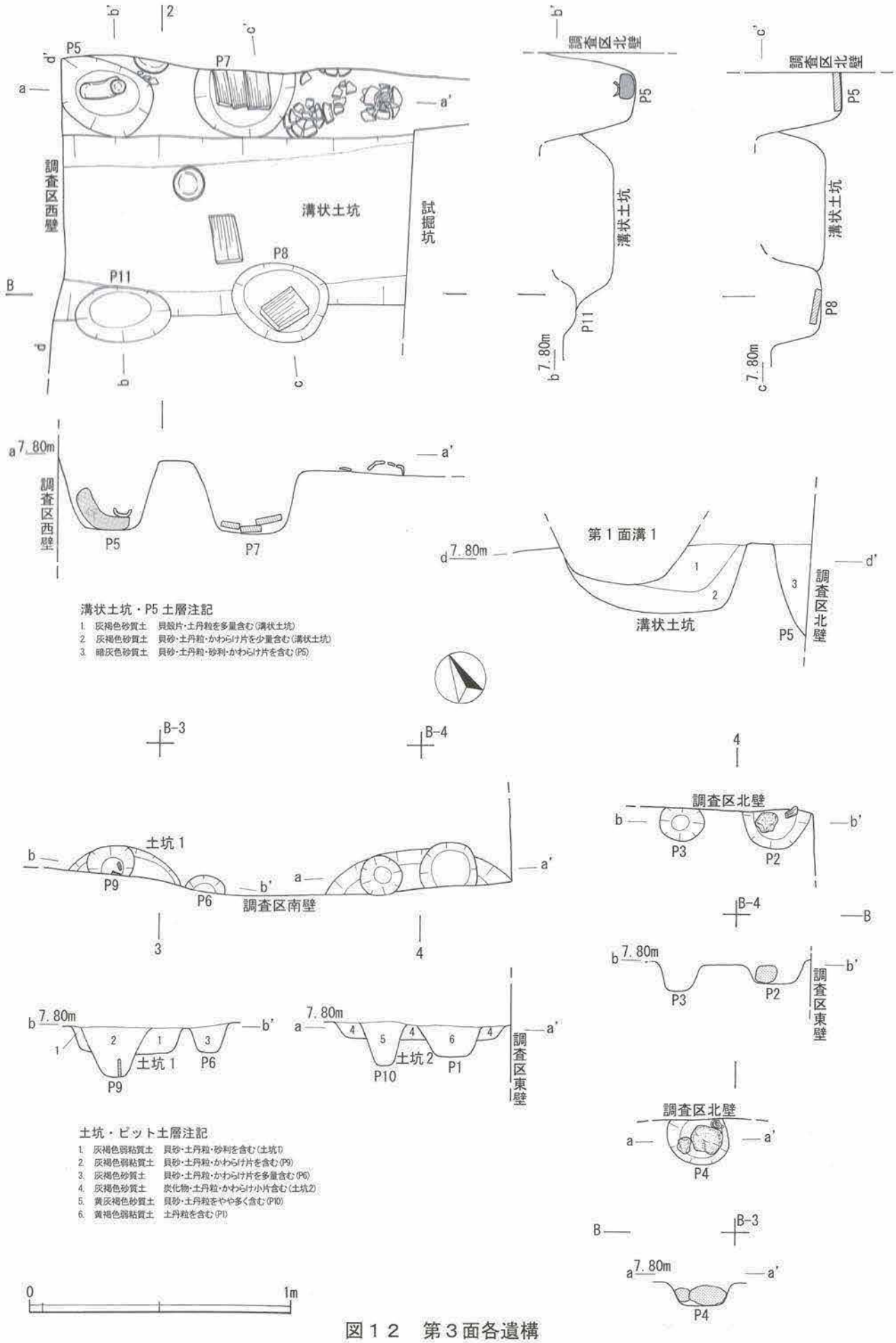

P5
P7
P8
P11
溝状土坑
試掘坑
調査区西壁
調査区北壁
7.80m
第1面溝1
土坑1
土坑2
P1
P2
P3
P4
P6
P9
P10
調査区南壁
調査区東壁
B-3
B-4
溝状土坑・P5 土層注記
1. 灰褐色砂質土　貝殻片・土丹粒を多量含む(溝状土坑)
2. 灰褐色砂質土　貝砂・土丹粒・かわらけ片を少量含む(溝状土坑)
3. 暗灰色砂質土　貝砂・土丹粒・砂利・かわらけ片を含む(P5)
土坑・ピット土層注記
1. 灰褐色弱粘質土　貝砂・土丹粒・砂利を含む(土坑1)
2. 灰褐色弱粘質土　貝砂・土丹粒・かわらけ片を含む(P9)
3. 灰褐色砂質土　貝砂・土丹粒・かわらけ片を多量含む(P6)
4. 灰褐色砂質土　炭化物・土丹粒・かわらけ小片含む(土坑2)
5. 黄灰褐色砂質土　貝砂・土丹粒をやや多く含む(P10)
6. 黄褐色弱粘質土　土丹粒を含む(P1)
0
1m

図１２　第３面各遺構

・砂利を含む灰褐色弱粘質土である。図示可能な遺物の出土はない。

土坑２（図 12）

土坑１の東隣に位置し、南半部は調査区壁にかかるため全体形は不明である。Ｐ１・10 との壊された重複関係にある。確認した東西径145cm、深さ 12cm を測り、浅い皿型の窪みをもつ掘り方で覆土は炭化物・小土丹を含む締まりのない灰褐色砂質土である。図示可能な遺物の出土はない。

溝状土坑（図 12）

Ｂライン北側に位置した東西位に長い土坑で西側は調査区外に拡がっている。第１面溝１とピットのＰ４・５・８・11・12 に壊されていた。確認できた規模は長さ 3.2m以上、幅 66cm 前後、深さ 58cm 程で掘り方は断面逆台形の形状である。覆土は締まりのない灰褐色砂質土の２層からなり、上層が貝殻片や小土丹を含み、下層が貝砂・かわらけ小片を交えたもの。図示可能な遺物の出土はない。なお土坑西側の位置で出土したかわらけは遺構が埋まった後に周辺面上のかわらけと同じように廃棄された遺物資料が遺存したと解釈されたものである。

ピット（図 12・13）

Ｐ１は調査区南東隅に位置し、土坑２を壊し掘り込んだピットで掘り方は楕円形で径 23cm を測る。覆土は小土丹を含む締まりのない黄褐色弱粘質土である。Ｐ２は調査区北東隅に位置し、北半部は調査区壁にかかり全体形は不明、径 22cm、深さ 10cm の楕円に近い形状と思われる。覆土からは拳大土丹がみられ、遺物は図 13－１・２の南部系山茶碗と碁石黒が出土。

Ｐ３はＰ２の西隣に位置する。大きさは径20cm、深さ15cmの平面円形を呈す。遺物は３の碁石黒出土。

Ｐ４は溝状土坑を切り込んだ遺構である。北半部は調査区壁にかかり全体形は不明、長径 25cm 程、深さ 12cm で、底面に偏平な鎌倉石と小土丹塊が据えられていた。遺物は４のロクロ成形の小型かわらけが出土した。Ｐ５は調査区北東隅に位置し、溝状土坑を壊して掘り込んでいる。掘り方は長径 40cm、短径 26cm、深さ 35cm の平面楕円形を呈する。深い掘り方の底面には伊豆石が据えられており、礎石上に５の小型かわらけ完形品（灯明皿）が１点出土した。

Ｐ７はＰ５に隣接し溝状土坑を切って掘り込まれたピットで、掘り方は一部調査区壁にかかり規模不明、径 25cm 以上、深さ 35cm を測り、底面に礎板３枚を据えている。覆土は貝砂ブロックの多い灰褐色砂質土である。Ｐ８は溝状土坑を壊している。平面楕円形で長径 38cm、短径 26cm、深さ 20cm を測り、底面に礎板を置く。Ｐ９は土坑１を壊したピット、平面形楕円形で長径 25cm、深さ 18cm と浅い掘り方である。覆土は灰褐色弱粘質土である。Ｐ10 は土坑２を壊して掘り込み、平面円形で径 20cm、覆土は貝砂を多く含む黄灰褐色砂質土である。

第３面遺構外出土遺物（図 13）

６～ 26 は糸切底のかわらけである。６～ 10 の小型品は口径 7.4 ～ 8.2cm、底径 4.5 ～ 6.0cm、器高 1.6 ～ 2.1cm で器高低めで内湾気味の器形のものが主体である。11 ～ 13 の中型かわらけは口径 10.6 ～ 11.6cm、底径 5.5 ～ 7.5cm、器高 3.2 ～ 3.8cm、14 ～ 26 の大型かわらけは口径 12.2 ～ 13.6cm、底径 7.5 ～ 8.3cm、器高 3.1 ～ 3.6cm を測るもので薄手の丸深型が多い。27・28 は常滑甕の口縁部と底部片である。29 は土器質火鉢の脚部片である。

以上、第３面の遺構・遺物について述べてきたが、この面に伴う遺物の種別出土量・出土比率について簡単に触れる。遺物は遺構及び遺構外の資料を併せたて破片数 264 点 、出土比率は全体量の 34%ともっとも多く認められた。その内訳をみると、かわらけ 243 点、舶載磁器１点、国産陶器８点、瓦質製品３点、石製品２点の他、獣骨３・貝１点も出土している。

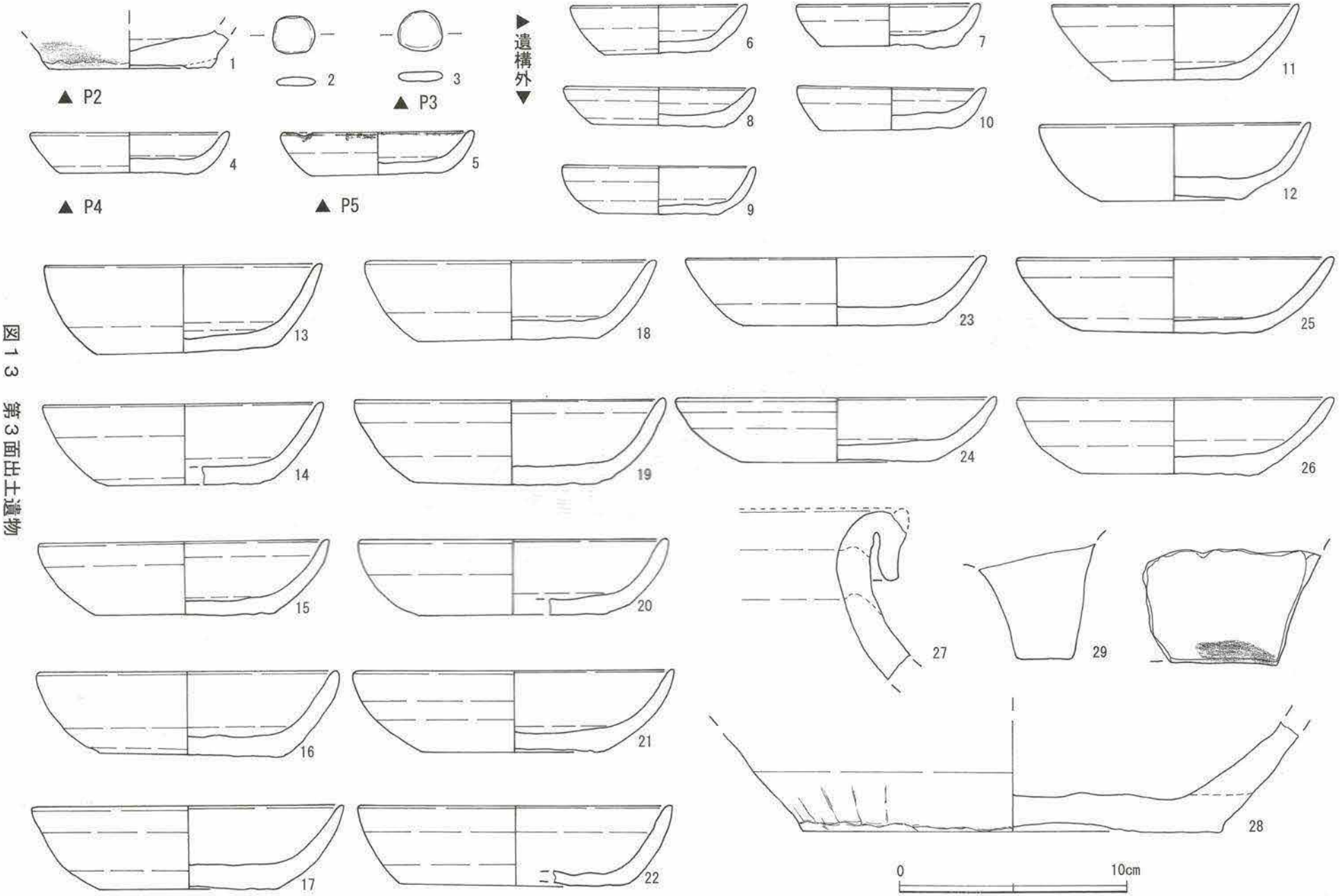


図13　第3面出土遺物

4．第４面の遺構・遺物

第３面の整地・地行層を除去すると、破砕土丹・かわらけ小片を交えた締まり強めの茶褐色粘質土が表出し、上面で遺構が検出されたので第４面とした。この面は調査区北側域を中心に破砕土丹を密に突き固めて版築を施した堅牢な地行範囲が認められた。また木組溝を挟んだ南側は破砕土丹や貝砂を含んだやや締まりの弱い暗灰褐色粘質土の整地層で構成された海抜高 7.65m前後の生活面である。遺構は溝１条、ピット１口である。

溝１（図14～16）

調査区中央のＢラインの南側に沿った東西方向の溝で両端は調査区外に延びている。確認された規模は長さ 5.15m、幅 30cm、深さ 20cm 程であり、溝底の両基底部に打ち込まれた細い角杭が部分的に残存していた。これは木組溝と思われ、細い木杭は土止めに用いた横板材を受けるために打ち込まれた杭であり、屋敷内において建物や場を区画するような雨水などを処理する役割の溝であろう。溝中からは有機物腐植土ブロックや貝砂に交じりの覆土中からかわらけや木製品、アワビなどの貝殻、魚の骨と雑多なものが出土しており、ゴミ捨て場の様相を呈していた。

出土遺物は図 16－１～３がロクロ成形の小型かわらけである。口径 7.0～ 7.6cm、底径 4.3～6.0cm、器高 1.5cm を測り、背低気味で内底面が広く開いた立ち上がりの器壁をもつ。４は口径 5.0cm、高台径 1.5cm、器高 2.3cm で小型かわらけ質の碗型土製品である。高台はヘラで削り出した断面三角形を呈す。内外面に煤が付着している。５は土器質火鉢片で断面四角形の肥厚した口縁部になる。６は滑石製鍋を転用したもので厚さから推測すると、鍋鍔を削り加工しているが上面に四角い切込みを施したもので用途不明である。

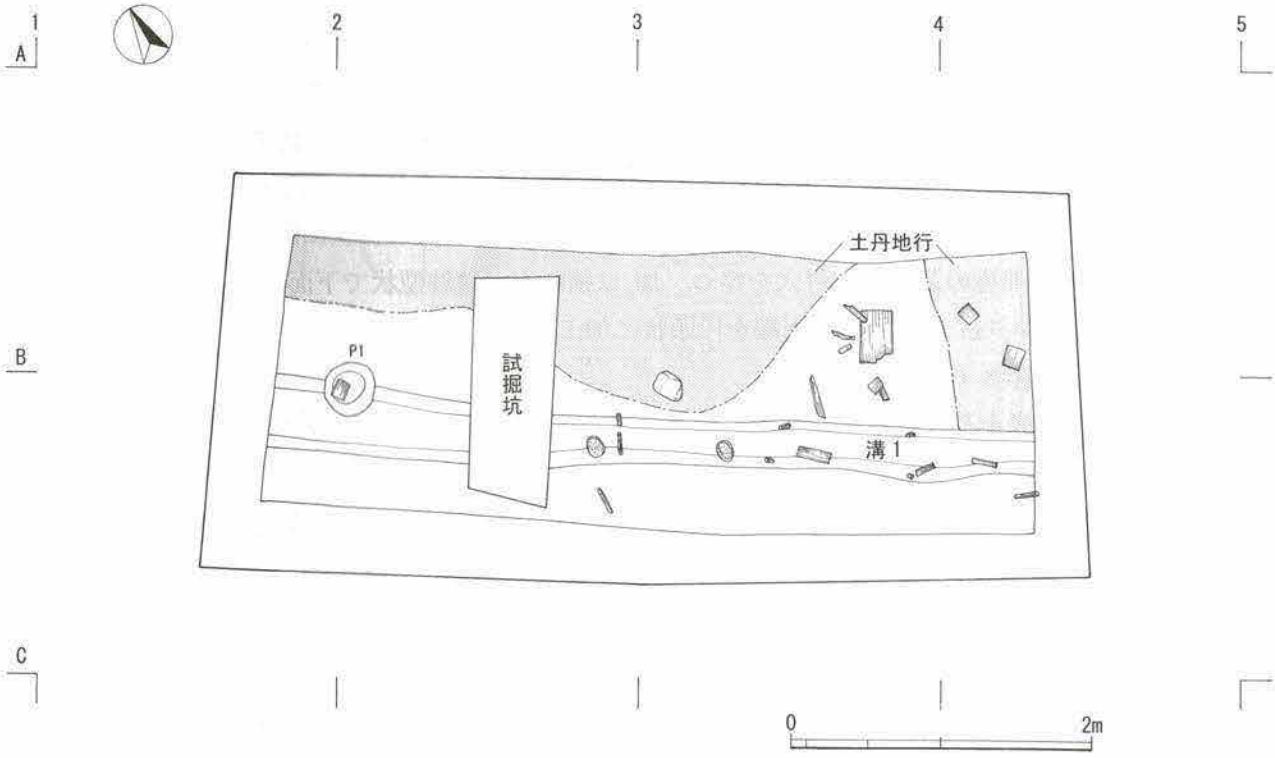


図１４　第４面全測図

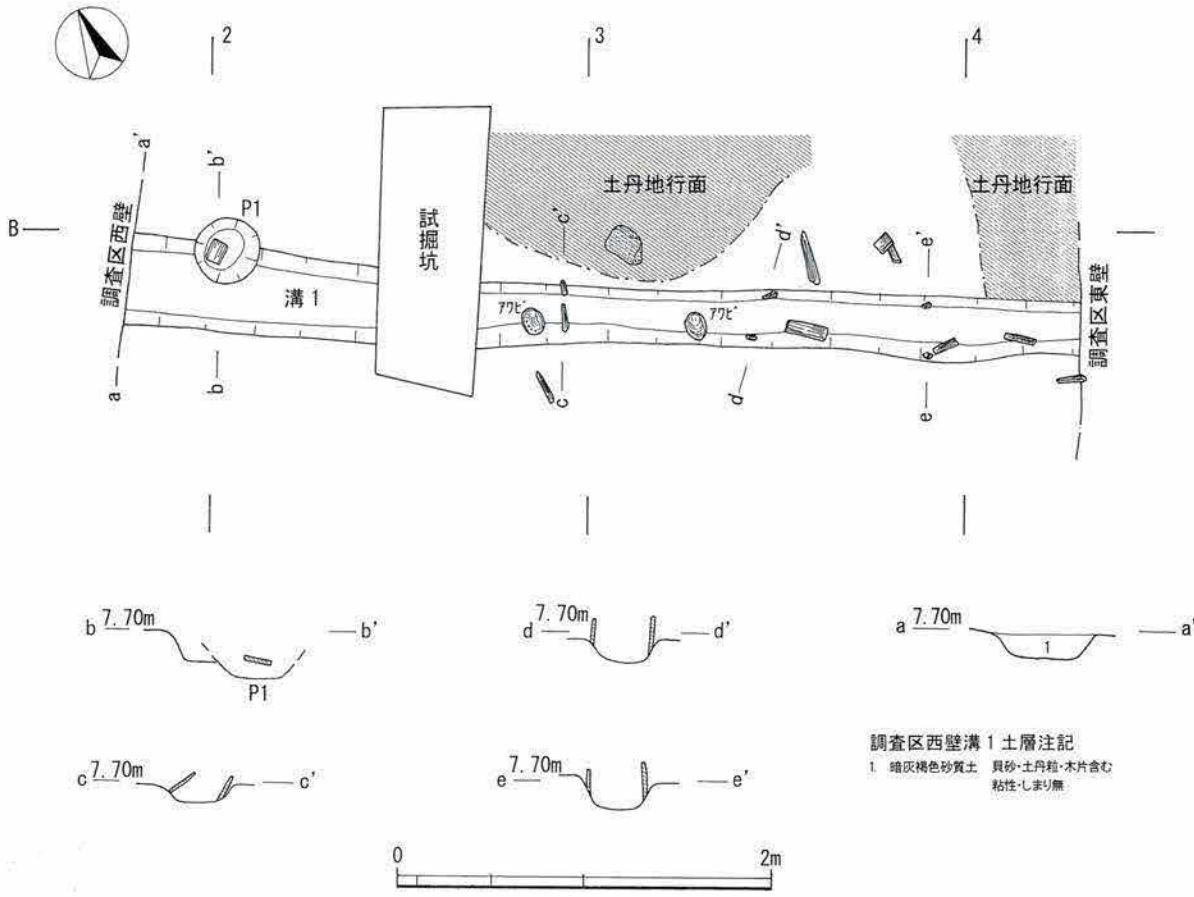


図１５　第４面各遺構

7は釣針状に曲がった鉄釘で推定長 7.5cm の断面四角形である。8～ 10 は漆器皿である。8は口径 9.9cm、底径 6.9cm、器高 1.2cm を測り、無高台の外底面を除き黒色漆が塗られており、内面のみに朱色漆による手描き草文がみられる。薄い木地の丁寧な仕上げである。9は高台径 4.2cmの輪高台で畳付内側から外底面を除き黒色漆が塗られ、内底面に朱色漆による花文スタンプを施文する。10 は底径 6.9cm の無高台 で外底面を除き黒色漆が塗られている。内底面に朱色漆による鶴丸文スタンプを施す。11 ～ 17 は木製品である。11 は長さ 34.0cm 以上、幅 1.3cm、厚 0.6cm で多角形の偏平な断面の菜箸である。12 ～ 14 は箸で長さ 22.6 ～ 24.6cm 以上、幅 0.7cm を測り、断面多角形の棒状に削った両口加工である。15 は檜扇の扇子で短冊型の基部に木釘穴を穿つ。16 は横断面が蒲鉾型状で下面中央に抉りがあり鍋蓋の摘みのようなものか。17 は薄板材の両端を円頭状に加工したものふで用途不明品。

第４面遺構外出土遺物（図 16）

ここでは第３面構成土及び第４面の面出し精査に伴なって出土した資料で遺構に共伴しない遺物を一括して述べる。

14～24 はすべて回転糸切底のロクロ成形かわらけである。14 は口径 4.2cm、底径 3.4cm、器高 0.9cm を測る極小タイプで内折れ気味の器形である。19 ～ 21 は口径 7.6 ～ 7.9cm、底径 4.8 ～ 5.7cm、器高 1.6cm 程の小型品である。混入物少なめの弱粉質胎土、いずれも背が低めで内彎気味に立ち上がる。22 ～ 24 の大型品は口径 12.1 ～ 13.6cm、底径 7.5 ～ 7.8cm、器高 2.9 ～ 3.3cm を測り、22・23 が混入物多めの弱粉質胎土、24 が混入物少なめの弱粉質胎土である。器壁はやや内彎しながら立ち上がる。

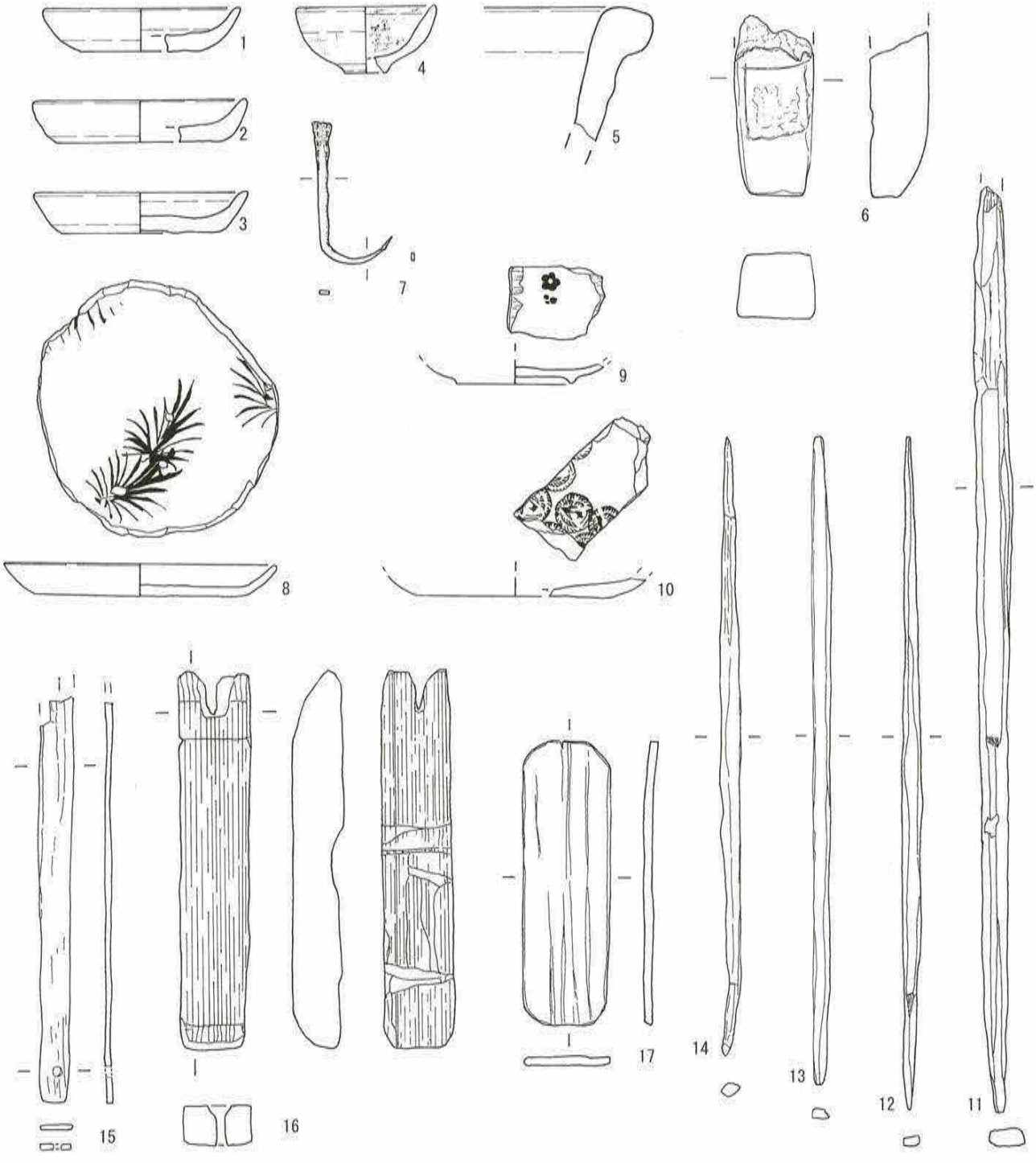


図 16　第 4 面出土遺物

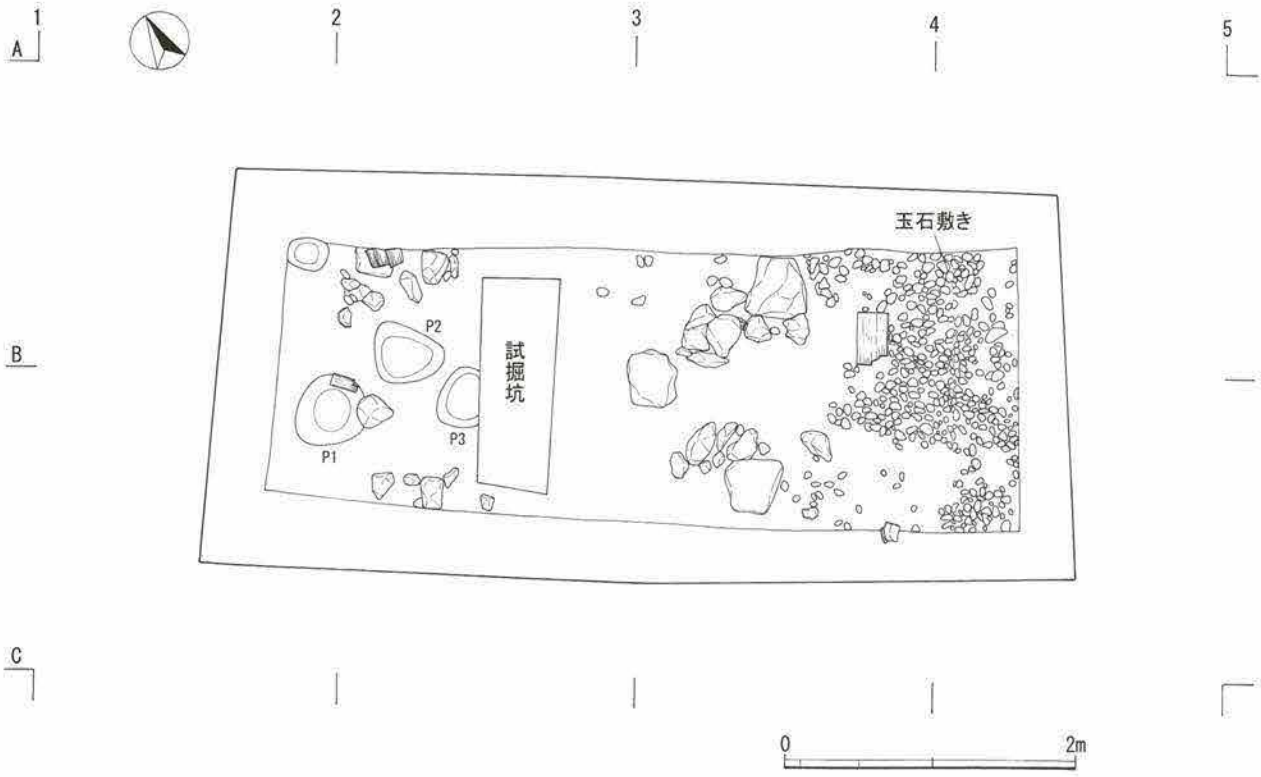


図１７　第５面全測図

以上、第４面発見の遺構・遺物について触れたが、ここではこの面に伴う遺物の種類別出土量と出土比率を簡単に述べる。遺物は破片点数で 156 点で出土比率は全体量の２割を占め第３面についで高い出土比率を示している。その内訳をみると、かわらけ 100 点、舶載陶磁器２点、国産陶器８点、土製品４点、石製品１点、金属製品１点であり、また湧水の深度に係る地下水位の関係で漆・木製品 40 点と出土比率が高い数値で認められた。

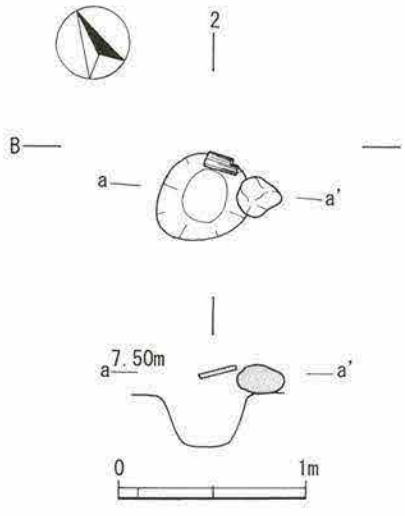


図１８　第５面Ｐ１

５．第５面の遺構・遺物

第４面を構成する厚さ 20cm 前後の整地層（第７・８層）を除去すると、海抜標高 7.5m前後の暗褐色粘質土層上を第５面とした。この面の構築土は30 ～ 50cmの厚い堆積で大小型土丹塊を多量に交え整地層上面を破砕土丹で版築した地行を施している。調査区東域の３ラインから約１ｍの間に偏平な土丹塊が多めに表出した範囲がみられ、さらに土丹塊敷きが切れたのを境に玉砂利集中の範囲となっていた。この面で検出した遺構はピット、玉砂利・土丹塊集中範囲などである。

ピット（図 17・18）

試掘坑の西側で建物を構成しないピット４穴が発見された。

Ｐ１は平面楕円形を呈し、長径 53cm、短径 45cm、深さ 30cm の掘り方である。覆土は貝砂・木片を含む締まりのない灰褐色粘

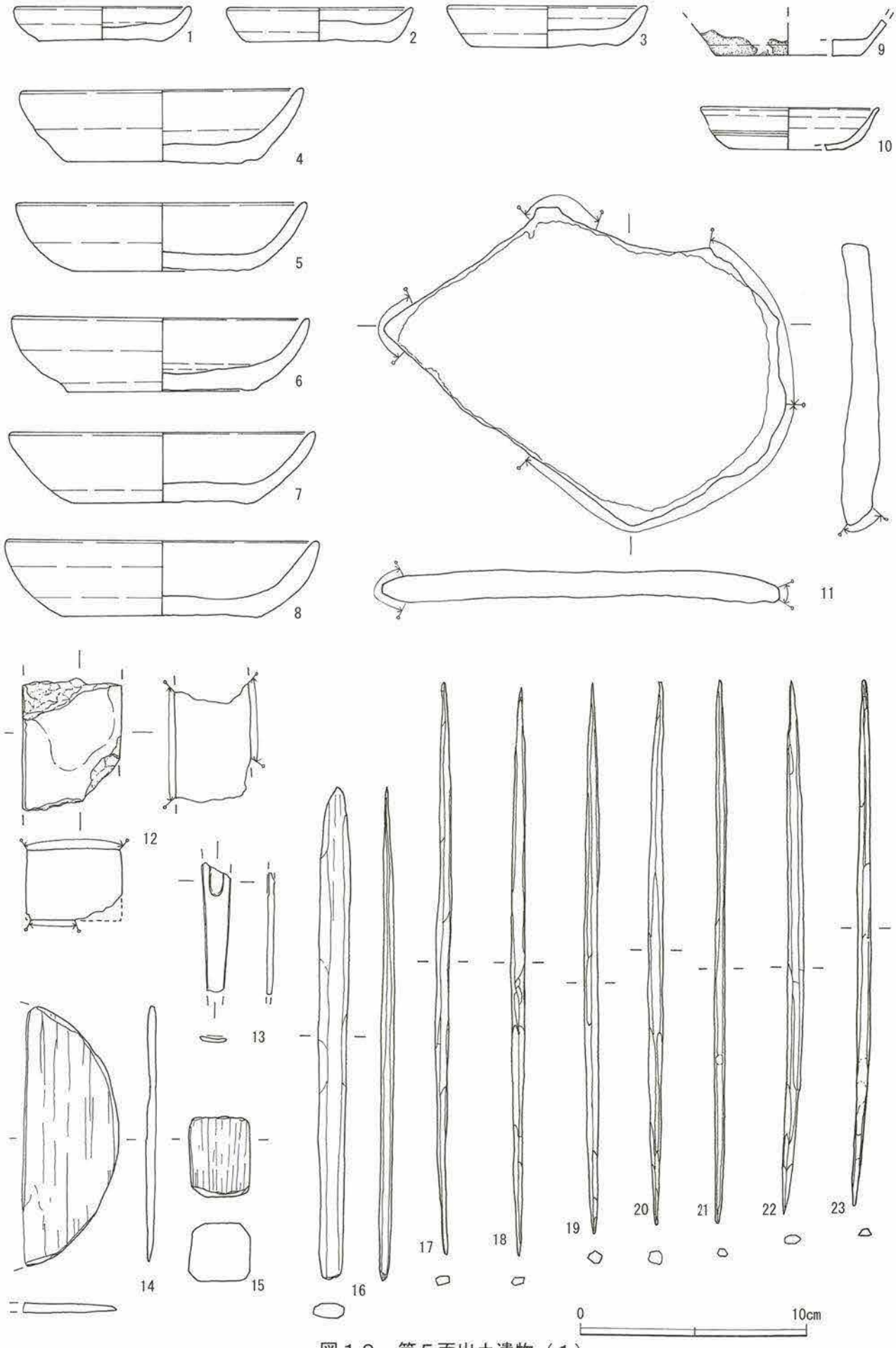


図１９　第５面出土遺物（１）

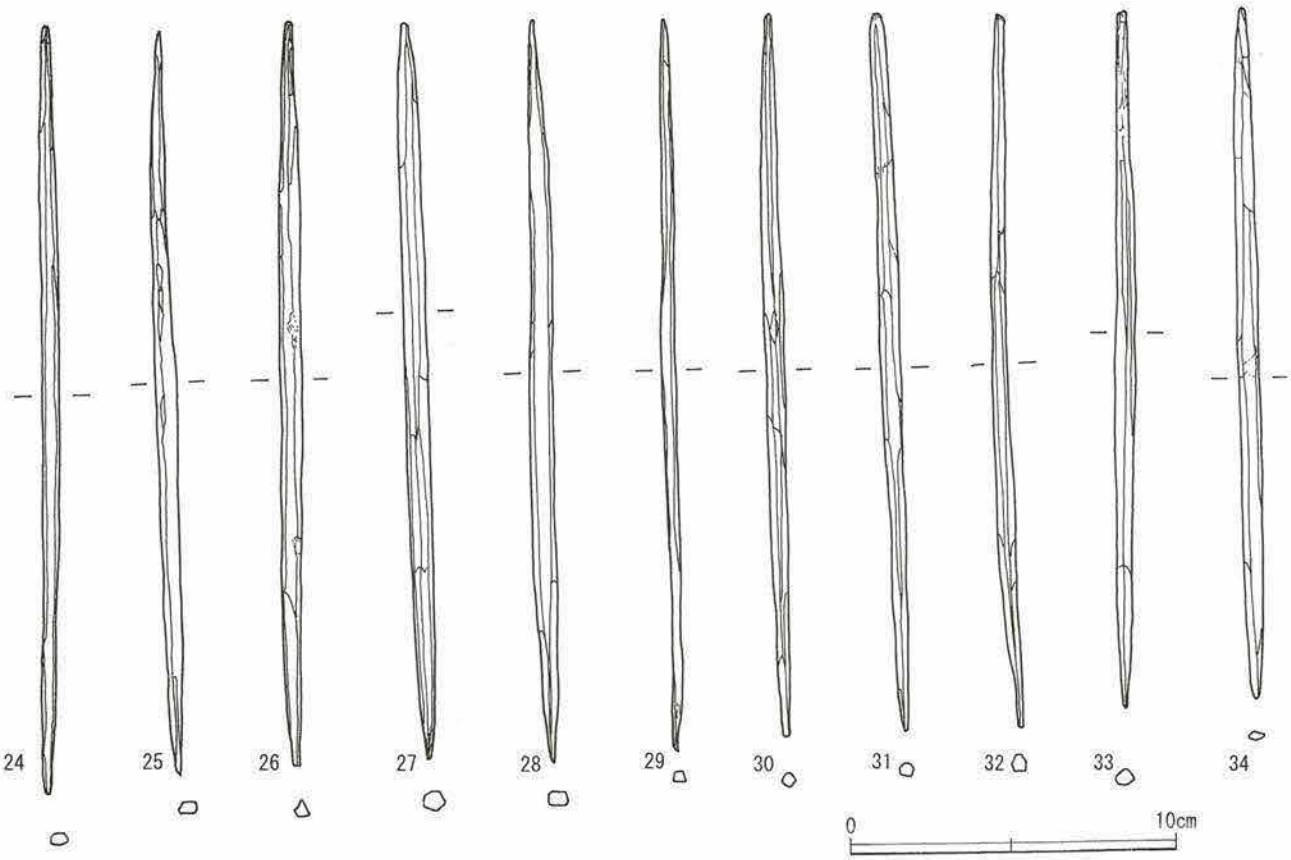


図２０　第５面出土遺物（２）

質土、遺物はロクロ成形のかわらけ小片だけである。

Ｐ２は平面不整円形を呈し、長径 48cm、短径 37cm、深さ 25cm の大きさである。覆土は貝砂・破砕土丹を交えた茶褐色弱粘質土、図化可能な遺物は出土していない。

Ｐ３は平面不整円形を呈し、長径 48cm、短径 37cm、深さ 25cm の掘り方である。覆土は貝砂・木片を含む締まりのない茶褐色粘質土、図化できる遺物は出土していない。

玉砂利範囲（図 17）

調査区東端において検出され、調査区壁へかかり拡がっている。確認海抜高は約 7.55ｍを測り、敷かれた大型の玉砂利の厚さは10cm 前後である。大きさは長径 4.8 ～ 10.2cm の偏平な楕円形の水磨した川原玉石である。玉砂利範囲には密に敷き詰められている部分と比較的まばらな場所が認められた。玉砂利範囲は土丹敷きの東側だけと区画を意識して限定した範囲にのみに敷いていたものと考えられる。玉砂利各試料の計測表及び長径・短径の計測比については表１～５を参照されたい。

第５面遺構外出土遺物（図 19・20）

第４面構成土及び第５面上に伴なって出土した遺物を一括してここに述べる。

１～８はすべて回転糸切底のロクロ成形かわらけである。１～３は口径 7.4 ～ 8.3cm、底径 5.3 ～ 6.2cm、器高 1.4cm と 1.7cm の小型品。いずれも背低で内底面が広く、器壁は開き気味の器形である。１は混入物が少なめ弱粉質胎土である。４～８の大型品は口径 12.0 ～ 13.2cm、底径 7.6 ～ 8.2cm、器高 2.9 ～ 3.3cm を測り、６・８は混入物多めの弱砂質胎土、５・７は混入物少なめの弱粉質胎土である。背低で器壁は内彎気味の器形である。

９は底径 6.3cm で白磁口兀皿である。10 は瀬戸窯入子で口径 7.8cm、底径 4.8cm、器高 1.7cm で口縁部に

薄く自然降灰釉が付着する。11 は摩耗陶片で最大長 17.0cm、最大幅 11.8cm、厚 1.5cm の常滑甕転用で、摩耗部は割口面が中心である。12 は砥石で砥面が上下面に使用した痕跡があり、凝灰岩製で上野国産の中砥であろうか。13 は鹿骨製の笄片で下端が細くなるように加工する。

14 ～ 34 は木製品である。14 は推定径 23.6cm、厚 0.4cm の円盤状木製品である。柾目材で周縁部を削り加工した曲物の底板と考えられるもの。15 は骰子型で四隅は面取り加工を施した栓のようなものか。16 は篦状工具で細長い偏平にした丁寧な削り加工し、先端は尖り気味で薄く仕上げている。17 ～ 34 は箸である。長さ 20.5 ～ 24.5cm、幅 0.4 ～ 0.7cm で断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工である。

第５面遺物の種類別出土量や出土比率を簡単に述べる。この面に伴う遺物は破片点数 126 点で、その内訳をみると、漆・木製品が 60 点と最も高い出土数値を示し、次いでかわらけ 38 点、舶載陶磁器・

６ ． 第６面の遺構・遺物

第５面の調査を終了した時点で掘削深度が表下２ .3m以上に達して豊富な湧水量に伴う調査区壁崩落の危険性と、排土の処理が不可能となり、調査区の北半分を排土置場として利用したためにトレンチのみでの調査になったことをお断りしていく。

第６面は大型土丹塊を密に交えた厚さ 35 ～ 50cm の第５面整地土を除去すると、暗茶褐色粘質土層の薄い堆積土を挟んだ海抜高 7.05m前後で灰褐色砂層が検出された。この土層中からは遺物などの混入物を含んでおらず中世基盤層となる自然堆積と考えられた。トレンチという狭い調査範囲ではあったが遺構として土坑、礎板や貝殻敷りなどが発見された。

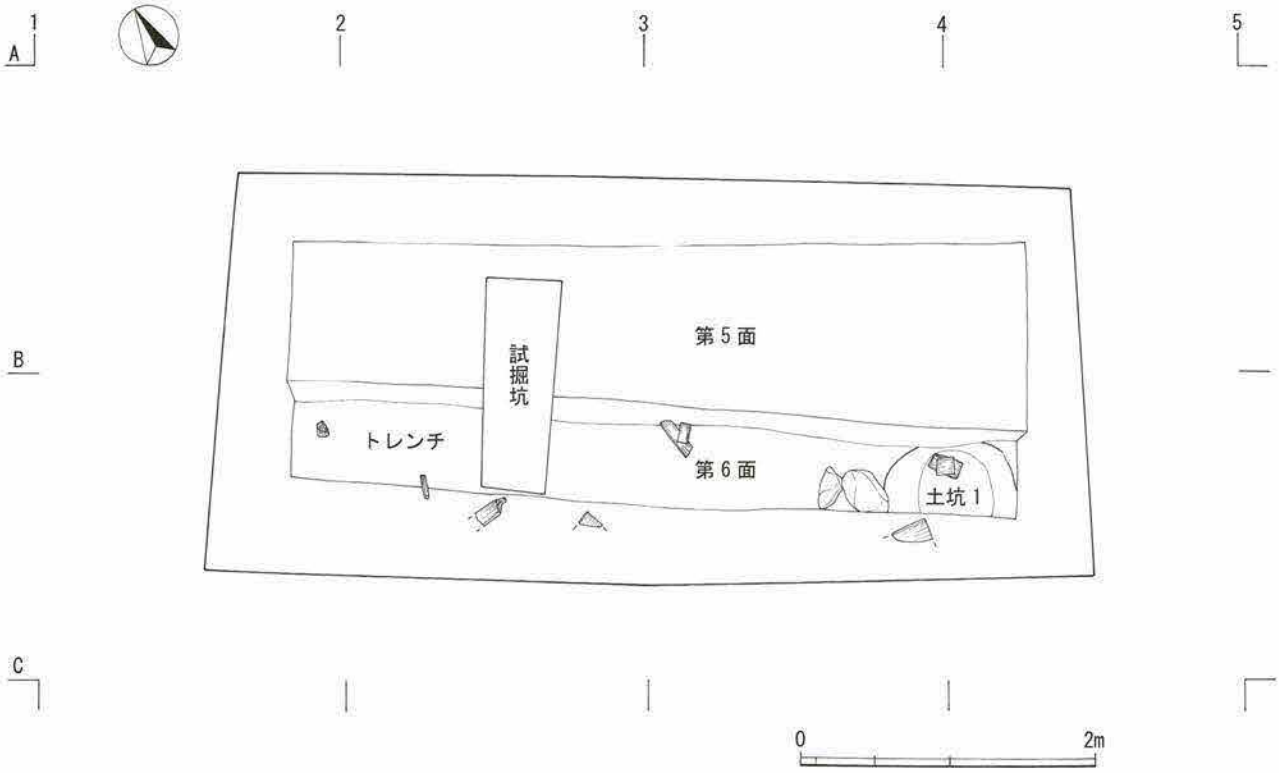


図２１　第６面全測図

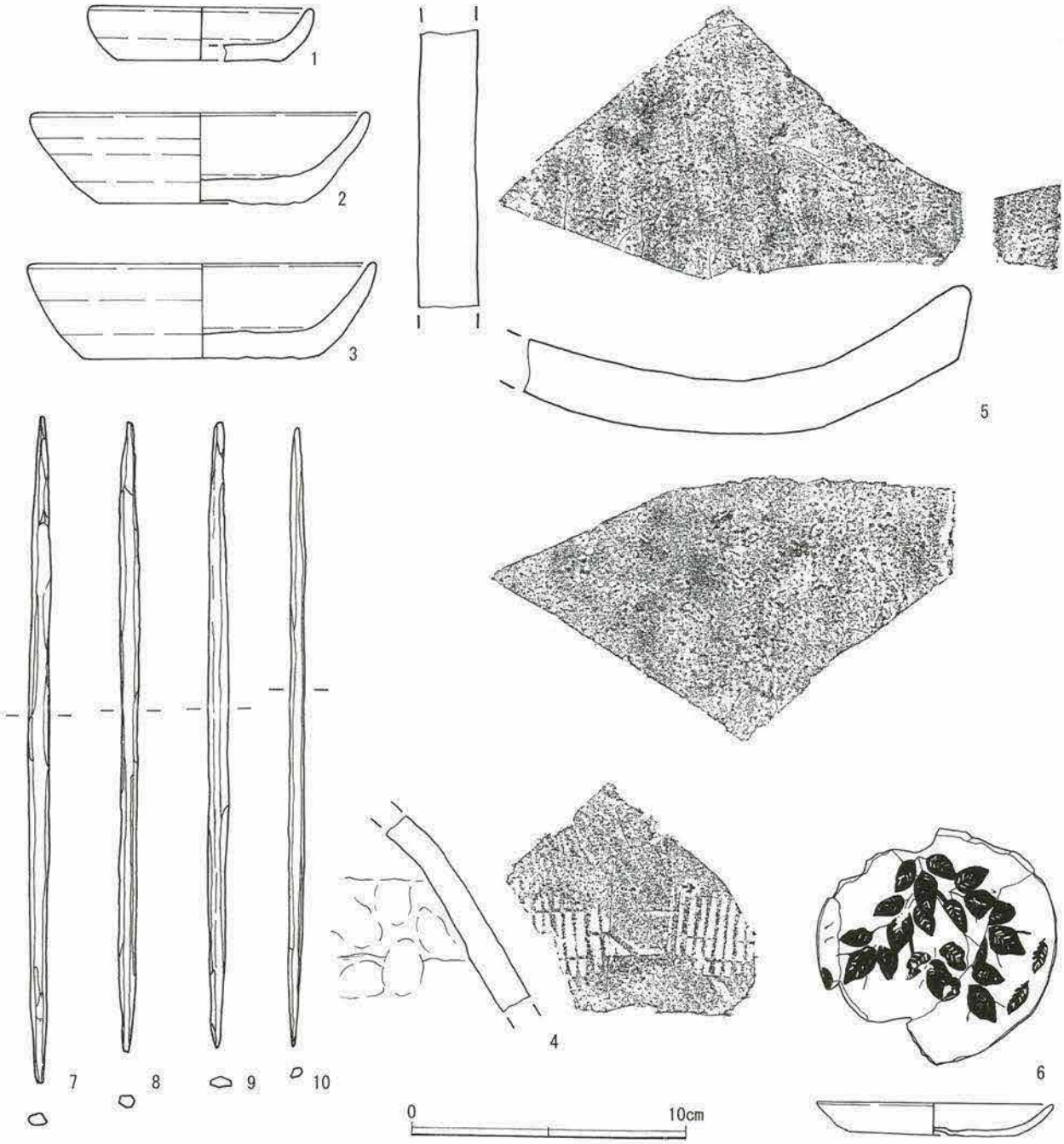


図２２ 第６面出土遺物（１）

土坑１（図 21）

調査区東端に位置した全容不明の土坑である。大きさは東西径 90cm・南北径 50cm 以上で断面浅い皿型を呈する。覆土は有機物腐蝕土で上層に貝殻（ハマグリ）や木片・藁状ものなどを多く含む堆積がみられたが、実測可能な遺物は出土していない。

第６面遺構外出土遺物（図 22・23）

第５面構成土及び第６面上に伴なって出土した遺物を一括してここに述べる。１～３はすべて回転糸切底のロクロ成形かわらけである。１は口径 7.8cm、底径 5.8cm、器高 1.9 の小型品で背低の内底面が広い器形である。２・３の大型品は口径 12.0・12.2cm、底径 7.1・8.3cm、器高 3.2・3.3cm で開き気味の器形である。４は常滑甕の肩部片で叩き目が見られる。５は女瓦（平瓦）で凸面が縄目叩き後に縦位指ナ

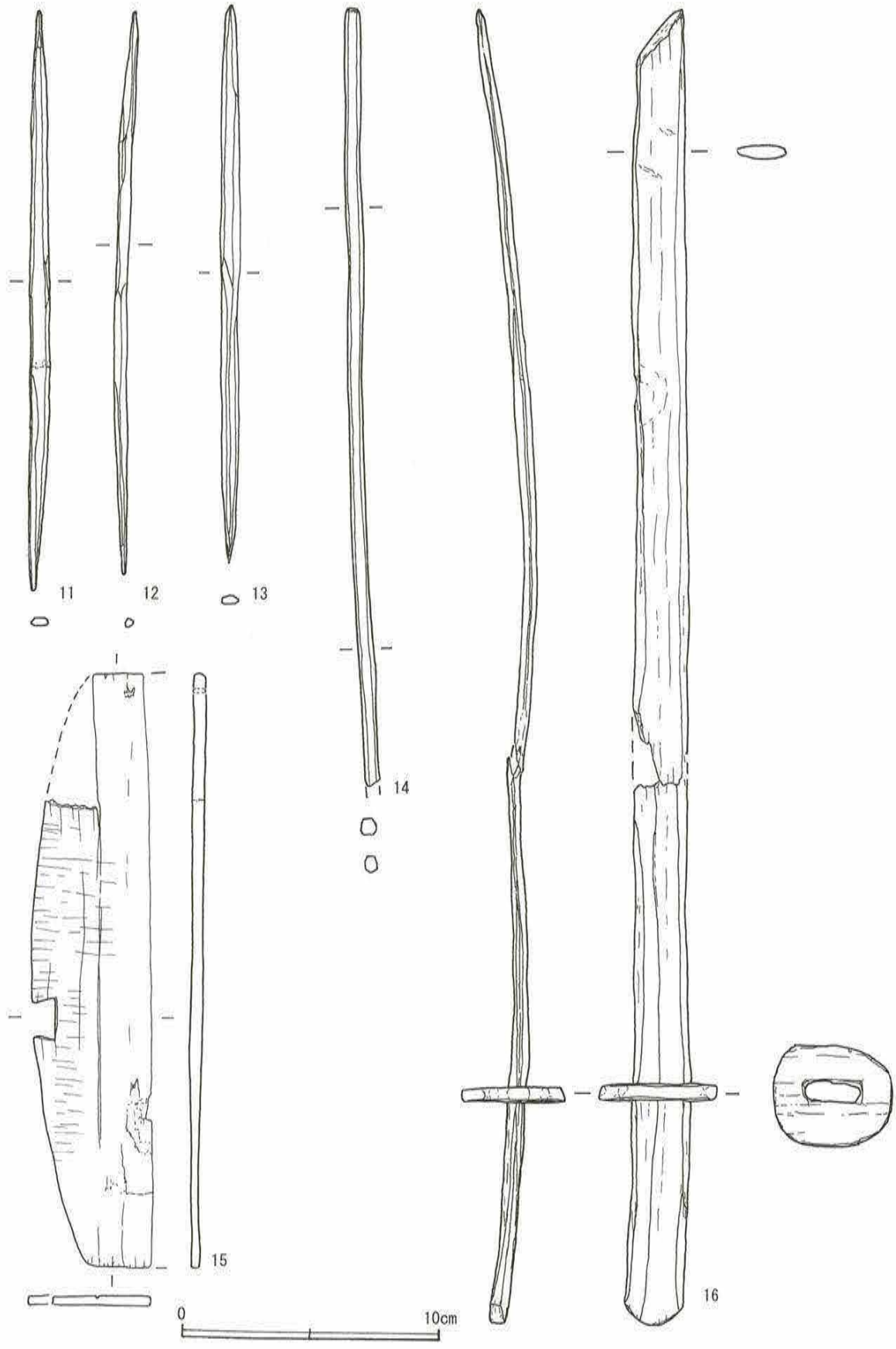


図２３　第６面出土遺物（２）

デで粗く擦り消す。鎌倉時代前期の所産。６は口径約９ cm の漆器皿である。無高台の外底を除き、黒色漆が塗られており内面にのみ朱色漆による手描きの木葉文を施している。

７～ 16 は木製品である。７～ 13 は箸で長さ 21.6 ～ 24.2cm、幅 0.4 ～ 0.6cm を測り、断面多角形の棒状に削り、端部を尖らした両口の加工を施す。14 も箸状の加工を施したもので長さ 30cm 以上あり菜箸と考えられる。15 は金剛草履の板芯で半分で表面に藁編みの植物圧痕が残る。

16 は刀形である。全長 51.3cm、幅 1.8 ～ 2.2、厚 0.5cm 前後で刃身が断面蛤型で先端を切先状に削り、鍔は長径 4.7cm、短径 4.0cm、厚 0.6cm の楕円形を呈し、刀身へ差し込む加工が施されている。

以上、第６面発見の遺構・遺物について触れたが、ここではこの面に伴う遺物の種類別出土量と出土比率を簡単に述べる。遺物は破片点数で 69 点で、その内訳は漆・木製品 46 点と最も多く、かわらけ 16 点、国産陶器３点などがみられた。

第4章　まとめ

今回の調査地点では、調査面積や掘削深度の関係で制約を受けて狭い範囲の限定された深さでの遺構検出にとどまり遺構の性格や敷地の空間的な解釈を明確にすることはできていない。ここでは前章までに記した調査の成果について概観すると共に、近辺の調査地点との関係や検出遺構の特徴などを簡単に触れてまとめにかえたい。

第１面の礎石建物跡は区画溝（溝１）を埋め立た生活面を土丹版築の地行によって整地が行なわれ、その後に建築されたものである。この礎石建物は東西列の２間分（柱間寸法芯々約 212cm＝７尺）だけの確認で建物規模は不明であるが、調査区南壁面には礎石や掘り方が発見できなかった。従って北域へ拡がるものと予想される。この面に伴う出土遺物からみて概ね 14 世紀中頃の所産と考えられる。さらに大小土丹塊を突き固めた生活面に繋がる鎌倉石の切石列が検出された第２面も近い時期が想定される。

第３面は褐鉄分が染み込んだ貝砂硬化面からは掘立柱建物を構成しない不揃いな柱穴が溝状の土坑を挟んで確認された。この面に伴う出土遺物からみて概ね 14 世紀前葉の所産と考えらる。第４面も近似した頃の生活面と思われる。

第５面では小型玉石とでも呼べる大きさの砂利敷き面が検出されているが、このように屋敷内に砂利を敷きつめるのは、幕府周辺（宇都宮辻子幕府跡・北条小町邸跡など）及び寺社（鶴岡八幡宮・永福寺跡・東勝寺跡・建長寺など）、今小路西遺跡（御成小学校）の南谷屋敷跡などとある程度限られた確認例にすぎない。この調査区範囲では第１面のような礎石建物を予想させる遺構は画できなかったが、砂利敷き面の存在から武家屋敷の庭園一部などの一画と想定される。なお第５・６面の時期はかわらけなどの年代観から概ね 13 世紀後～末葉と考えたいところである。

本遺跡の発掘調査では現在までのところ、若宮大路沿い西側に面した地点を中心に調査が実施されており、若宮大路西側溝と築地塀を挟んでその西域へ拡がる武家屋敷と推定される 13 世紀～ 14 世紀代にあたる中世前期を主体とした生活空間が発見されている。しかし若宮大路より西に奥まった地点での調査事例は少なく不明な点が多く今後の調査資料が増加すれば具体的な屋敷地の規模や地割りが見えてくると思われる。

表1　第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
1	7.09	4.27	1.93	0.60	0.45	80.0	38	5.46	5.13	2.01	0.94	0.39	75.7
2	8.11	5.60	3.08	0.69	0.55	212.3	39	5.30	4.02	1.93	0.76	0.48	62.2
3	6.97	4.49	1.72	0.64	0.38	89.1	40	7.08	5.64	3.00	0.80	0.53	176.8
4	7.38	4.13	3.70	0.56	0.90	157.1	41	8.92	5.81	2.68	0.65	0.46	211.5
5	6.45	4.69	3.17	0.73	0.68	134.8	42	15.46	7.93	2.62	0.51	0.33	455.1
6	7.25	6.50	3.15	0.90	0.48	214.3	43	6.27	5.30	2.19	0.85	0.41	115.4
7	8.49	4.72	2.35	0.56	0.50	132.1	44	9.66	6.29	3.48	0.65	0.55	288.9
8	8.82	6.40	2.99	0.73	0.47	230.9	45	8.36	6.64	3.22	0.79	0.49	270.6
9	7.78	6.69	2.60	0.86	0.39	194.2	46	5.66	4.97	2.66	0.88	0.54	101.7
10	7.95	5.41	2.76	0.68	0.51	173.0	47	9.44	6.14	2.46	0.65	0.40	233.6
11	10.34	4.48	2.99	0.43	0.67	194.8	48	9.62	3.63	2.97	0.38	0.82	155.3
12	6.21	5.82	3.00	0.94	0.52	150.1	49	6.34	4.65	2.39	0.73	0.51	93.2
13	5.63	4.41	2.34	0.78	0.53	93.5	50	7.78	5.90	3.00	0.76	0.51	198.9
14	7.90	6.70	3.80	0.85	0.57	247.9	51	6.50	5.91	2.50	0.91	0.42	149.5
15	8.77	6.71	2.80	0.77	0.42	233.6	52	6.71	5.11	2.50	0.76	0.49	114.6
16	7.40	4.22	2.52	0.57	0.60	118.5	53	8.14	4.86	2.66	0.60	0.55	140.2
17	7.46	4.25	2.93	0.57	0.68	125.2	54	7.77	4.55	2.61	0.59	0.57	140.1
18	6.32	4.30	2.49	0.68	0.58	105.2	55	4.81	4.85	2.58	1.01	0.53	70.0
19	7.48	4.47	2.36	0.57	0.53	123.1	56	5.99	5.28	2.58	0.88	0.49	111.7
20	9.68	7.42	3.20	0.77	0.43	281.5	57	8.04	7.09	2.24	0.88	0.32	185.4
21	7.12	4.62	2.95	0.65	0.64	115.9	58	4.80	4.55	1.99	0.95	0.44	62.3
22	7.25	5.80	3.08	0.80	0.53	178.7	59	10.22	6.08	3.44	0.59	0.57	291.5
23	6.98	7.06	2.69	1.01	0.38	194.8	60	8.83	7.42	2.82	0.84	0.38	329.5
24	7.22	4.58	2.50	0.63	0.54	138.3	61	7.73	4.31	2.30	0.56	0.53	107.0
25	6.68	6.50	2.22	0.97	0.34	147.5	62	7.80	5.45	2.77	0.70	0.51	171.0
26	5.88	4.67	2.71	0.79	0.58	128.2	63	8.47	5.55	2.88	0.66	0.52	175.8
27	7.61	3.83	3.10	0.44	0.80	132.5	64	8.00	5.71	1.62	0.71	0.28	126.4
28	8.07	6.28	2.28	0.77	0.44	223.0	65	7.21	6.48	3.05	0.90	0.47	189.7
29	8.30	5.77	2.82	0.69	0.49	171.1	66	8.81	4.55	2.85	0.52	0.63	172.0
30	7.61	4.88	3.60	0.64	0.74	182.5	67	5.73	3.28	2.60	0.57	0.79	77.7
31	7.42	5.28	2.00	0.71	0.38	129.4	68	5.97	4.91	2.30	0.82	0.47	104.7
32	8.83	6.40	2.61	0.72	0.41	226.4	69	7.42	6.10	3.57	0.82	0.59	218.9
33	6.71	5.23	1.89	0.78	0.36	98.9	70	7.34	3.55	2.47	0.48	0.70	108.2
34	8.25	6.71	2.92	0.81	0.44	230.6	71	8.31	4.72	2.22	0.57	0.47	140.0
35	5.62	4.80	1.62	0.85	0.34	71.4	72	5.48	5.08	2.49	0.93	0.49	124.7
36	6.90	5.42	1.96	0.79	0.36	113.1	73	6.49	6.61	2.43	1.02	0.37	97.9
37	6.78	5.12	2.40	0.76	0.47	127.7	74	7.98	5.09	2.78	0.64	0.55	164.4

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a.短径÷長径、b.厚さ÷短径)の計測数値　　単位：cm

表1　第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
1	7.09	4.27	1.93	0.60	0.45	80.0	38	5.46	5.13	2.01	0.94	0.39	75.7
2	8.11	5.60	3.08	0.69	0.55	212.3	39	5.30	4.02	1.93	0.76	0.48	62.2
3	6.97	4.49	1.72	0.64	0.38	89.1	40	7.08	5.64	3.00	0.80	0.53	176.8
4	7.38	4.13	3.70	0.56	0.90	157.1	41	8.92	5.81	2.68	0.65	0.46	211.5
5	6.45	4.69	3.17	0.73	0.68	134.8	42	15.46	7.93	2.62	0.51	0.33	455.1
6	7.25	6.50	3.15	0.90	0.48	214.3	43	6.27	5.30	2.19	0.85	0.41	115.4
7	8.49	4.72	2.35	0.56	0.50	132.1	44	9.66	6.29	3.48	0.65	0.55	288.9
8	8.82	6.40	2.99	0.73	0.47	230.9	45	8.36	6.64	3.22	0.79	0.49	270.6
9	7.78	6.69	2.60	0.86	0.39	194.2	46	5.66	4.97	2.66	0.88	0.54	101.7
10	7.95	5.41	2.76	0.68	0.51	173.0	47	9.44	6.14	2.46	0.65	0.40	233.6
11	10.34	4.48	2.99	0.43	0.67	194.8	48	9.62	3.63	2.97	0.38	0.82	155.3
12	6.21	5.82	3.00	0.94	0.52	150.1	49	6.34	4.65	2.39	0.73	0.51	93.2
13	5.63	4.41	2.34	0.78	0.53	93.5	50	7.78	5.90	3.00	0.76	0.51	198.9
14	7.90	6.70	3.80	0.85	0.57	247.9	51	6.50	5.91	2.50	0.91	0.42	149.5
15	8.77	6.71	2.80	0.77	0.42	233.6	52	6.71	5.11	2.50	0.76	0.49	114.6
16	7.40	4.22	2.52	0.57	0.60	118.5	53	8.14	4.86	2.66	0.60	0.55	140.2
17	7.46	4.25	2.93	0.57	0.68	125.2	54	7.77	4.55	2.61	0.59	0.57	140.1
18	6.32	4.30	2.49	0.68	0.58	105.2	55	4.81	4.85	2.58	1.01	0.53	70.0
19	7.48	4.47	2.36	0.57	0.53	123.1	56	5.99	5.28	2.58	0.88	0.49	111.7
20	9.68	7.42	3.20	0.77	0.43	281.5	57	8.04	7.09	2.24	0.88	0.32	185.4
21	7.12	4.62	2.95	0.65	0.64	115.9	58	4.80	4.55	1.99	0.95	0.44	62.3
22	7.25	5.80	3.08	0.80	0.53	178.7	59	10.22	6.08	3.44	0.59	0.57	291.5
23	6.98	7.06	2.69	1.01	0.38	194.8	60	8.83	7.42	2.82	0.84	0.38	329.5
24	7.22	4.58	2.50	0.63	0.54	138.3	61	7.73	4.31	2.30	0.56	0.53	107.0
25	6.68	6.50	2.22	0.97	0.34	147.5	62	7.80	5.45	2.77	0.70	0.51	171.0
26	5.88	4.67	2.71	0.79	0.58	128.2	63	8.47	5.55	2.88	0.66	0.52	175.8
27	7.61	3.83	3.10	0.44	0.80	132.5	64	8.00	5.71	1.62	0.71	0.28	126.4
28	8.07	6.28	2.28	0.77	0.44	223.0	65	7.21	6.48	3.05	0.90	0.47	189.7
29	8.30	5.77	2.82	0.69	0.49	171.1	66	8.81	4.55	2.85	0.52	0.63	172.0
30	7.61	4.88	3.60	0.64	0.74	182.5	67	5.73	3.28	2.60	0.57	0.79	77.7
31	7.42	5.28	2.00	0.71	0.38	129.4	68	5.97	4.91	2.30	0.82	0.47	104.7
32	8.83	6.40	2.61	0.72	0.41	226.4	69	7.42	6.10	3.57	0.82	0.59	218.9
33	6.71	5.23	1.89	0.78	0.36	98.9	70	7.34	3.55	2.47	0.48	0.70	108.2
34	8.25	6.71	2.92	0.81	0.44	230.6	71	8.31	4.72	2.22	0.57	0.47	140.0
35	5.62	4.80	1.62	0.85	0.34	71.4	72	5.48	5.08	2.49	0.93	0.49	124.7
36	6.90	5.42	1.96	0.79	0.36	113.1	73	6.49	6.61	2.43	1.02	0.37	97.9
37	6.78	5.12	2.40	0.76	0.47	127.7	74	7.98	5.09	2.78	0.64	0.55	164.4

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a.短径÷長径、b.厚さ÷短径)の計測数値　　単位：cm

表２　第５面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
75	6.50	5.72	3.10	0.88	0.54	198.9	112	8.52	4.95	2.57	0.58	0.52	165.0
76	10.38	4.28	2.32	0.41	0.54	144.2	113	6.13	4.12	2.06	0.67	0.50	80.7
77	7.82	3.68	2.67	0.47	0.73	117.5	114	5.78	4.87	3.02	0.84	0.62	133.4
78	8.41	4.25	2.66	0.51	0.63	147.2	115	9.57	5.18	2.33	0.54	0.45	168.9
79	6.97	5.08	2.95	0.73	0.58	146.1	116	6.63	3.60	3.03	0.54	0.84	88.8
80	4.99	3.79	2.83	0.76	0.75	115.1	117	6.20	3.90	2.70	0.63	0.69	86.3
81	6.87	3.46	1.86	0.53	0.54	70.7	118	7.21	5.65	3.21	0.78	0.57	181.9
82	5.15	4.82	2.67	0.87	0.55	108.4	119	6.35	3.78	2.30	0.60	0.61	84.0
83	6.00	4.30	2.23	0.72	0.52	88.2	120	6.30	5.19	3.12	0.82	0.60	127.6
84	5.82	4.82	3.36	0.83	0.70	134.9	121	7.32	6.10	3.40	0.83	0.56	202.3
85	9.73	5.61	2.91	0.61	0.52	232.7	122	5.86	5.42	2.40	0.92	0.44	116.8
86	6.62	5.95	2.18	0.90	0.37	128.7	123	5.98	4.18	3.16	0.70	0.76	96.1
87	5.42	4.11	2.00	0.76	0.49	68.0	124	6.61	5.73	2.95	0.87	0.51	165.2
88	7.00	4.12	2.16	0.59	0.52	100.2	125	6.31	5.52	2.43	0.87	0.44	140.0
89	10.12	4.76	2.55	0.47	0.54	173.9	126	6.05	5.31	3.64	0.88	0.69	67.7
90	8.20	4.00	2.76	0.49	0.69	129.9	127	9.07	4.80	2.82	0.53	0.59	184.5
91	6.05	5.81	2.19	0.96	0.38	109.7	128	5.37	5.01	2.44	0.93	0.49	95.8
92	12.05	5.18	3.90	0.43	0.75	413.8	129	8.09	5.27	4.45	0.65	0.84	230.7
93	8.33	6.70	3.28	0.80	0.49	257.7	130	6.05	3.38	2.33	0.56	0.69	62.8
94	5.85	3.88	2.30	0.66	0.59	82.7	131	5.00	4.89	2.53	0.98	0.52	88.8
95	5.23	2.94	3.25	0.56	1.10	71.1	132	8.43	4.28	2.34	0.51	0.55	126.4
96	7.89	4.58	1.81	0.58	0.40	111.3	133	7.72	4.89	2.60	0.63	0.53	151.0
97	8.57	5.04	2.25	0.59	0.45	159.6	134	7.85	4.30	3.05	0.57	0.71	139.4
98	7.56	4.08	2.53	0.54	0.62	121.4	135	8.71	7.24	1.98	0.83	0.27	165.0
99	5.11	3.48	2.18	0.68	0.62	61.6	136	8.31	4.96	2.16	0.60	0.44	112.9
100	7.19	4.28	2.49	0.60	0.58	126.2	137	6.35	3.70	2.60	0.58	0.70	77.8
101	6.04	5.42	2.87	0.90	0.53	136.4	138	10.22	6.40	3.07	0.63	0.48	271.5
102	9.18	4.68	2.63	0.51	0.56	169.2	139	7.10	5.04	2.75	0.71	0.55	154.4
103	5.60	6.12	2.27	1.09	0.37	118.1	140	5.60	4.88	2.06	0.87	0.42	80.8
104	9.63	5.62	3.28	0.58	0.58	252.0	141	7.40	6.15	1.80	0.83	0.29	137.3
105	8.24	4.30	2.00	0.52	0.47	102.6	142	5.51	4.91	2.77	0.89	0.56	115.1
106	7.88	5.32	2.50	0.68	0.47	143.3	143	4.20	3.61	1.95	0.86	0.54	36.9
107	6.78	6.12	2.72	0.90	0.44	161.2	144	7.55	5.62	2.58	0.74	0.46	181.0
108	9.28	5.51	2.51	0.59	0.46	225.3	145	6.62	5.03	2.31	0.76	0.46	124.0
109	7.76	6.00	3.60	0.77	0.54	244.3	146	7.15	5.70	3.60	0.80	0.63	183.7
110	8.61	5.82	3.88	0.68	0.66	230.5	147	7.86	4.54	2.85	0.58	0.63	147.2
111	9.16	4.43	2.39	0.48	0.54	150.9	148	6.58	4.16	2.89	0.63	0.70	96.2

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a.短径÷長径、b.厚さ÷短径)の計測数値　　単位：cm

表３　第５面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
149	5.25	3.31	2.30	0.63	0.69	47.4	186	7.34	4.28	2.76	0.58	0.64	135.2
150	5.41	3.45	2.35	0.64	0.68	56.8	187	5.41	4.97	2.60	0.92	0.52	104.4
151	5.18	3.60	2.17	0.69	0.60	53.4	188	7.45	6.10	2.18	0.82	0.36	182.2
152	7.16	4.21	2.79	0.59	0.66	93.5	189	7.18	4.59	2.92	0.64	0.64	140.3
153	5.78	3.10	1.91	0.54	0.62	58.9	190	6.39	4.97	3.09	0.78	0.62	133.4
154	7.02	4.63	1.70	0.66	0.37	89.6	191	8.80	3.59	2.73	0.41	0.76	113.3
155	9.29	4.25	2.38	0.46	0.56	139.1	192	6.50	5.82	3.60	0.90	0.62	160.8
156	5.12	3.11	1.55	0.61	0.50	46.4	193	6.62	5.57	1.53	0.84	0.27	71.5
157	6.40	3.97	2.38	0.62	0.60	87.8	194	6.73	4.58	1.78	0.67	0.39	93.8
158	6.14	4.62	1.88	0.75	0.41	81.7	195	6.83	5.43	2.16	0.80	0.40	99.5
159	8.37	6.79	2.60	0.81	0.38	170.5	196	7.45	5.69	3.40	0.76	0.60	203.2
160	8.60	5.11	2.60	0.59	0.51	164.3	197	7.79	5.72	3.30	0.73	0.58	230.1
161	6.58	4.05	2.23	0.62	0.55	102.9	198	7.52	2.79	1.57	0.37	0.69	50.4
162	5.76	4.56	3.26	0.79	0.80	129.6	199	5.62	4.45	2.17	0.79	0.49	85.7
163	4.70	4.70	3.00	1.00	0.64	70.9	200	7.01	3.90	3.35	0.56	0.86	125.6
164	7.45	3.68	2.13	0.36	0.58	86.9	201	5.61	3.45	2.10	0.61	0.61	61.8
165	9.45	5.94	4.40	0.63	0.74	324.0	202	8.59	5.54	3.26	0.64	0.59	195.5
166	8.06	4.68	2.18	0.58	0.47	122.4	203	10.15	6.99	3.51	0.69	0.50	301.4
167	5.85	4.61	2.16	0.79	0.47	88.5	204	6.71	6.16	2.85	0.92	0.46	182.9
168	4.04	4.10	2.22	1.01	0.54	48.7	205	7.55	6.51	4.06	0.86	0.62	236.1
169	6.10	3.79	2.12	0.62	0.56	90.4	206	4.39	2.74	0.83	0.62	0.30	16.6
170	5.00	3.33	2.12	0.62	0.56	90.4	207	6.12	3.92	2.37	0.64	0.60	88.1
171	6.69	5.65	3.00	0.84	0.53	167.1	208	5.28	4.50	2.62	0.85	0.58	92.9
172	8.73	3.92	2.65	0.45	0.68	152.4	209	7.00	4.73	3.05	0.68	0.64	167.0
173	5.48	5.11	2.32	0.93	0.45	88.0	210	5.05	4.62	2.97	0.91	0.64	90.4
174	8.26	3.74	2.58	0.45	0.69	114.8	211	8.06	4.86	2.48	0.60	0.51	175.4
175	5.22	3.91	2.13	0.75	0.54	65.7	212	5.71	3.42	2.60	0.60	0.70	82.4
176	5.29	4.48	2.24	0.85	0.50	79.4	213	8.03	4.78	2.41	0.60	0.50	145.3
177	7.60	4.70	2.47	0.62	0.53	126.9	214	7.21	5.82	3.13	0.81	0.54	201.3
178	5.02	3.83	1.70	0.76	0.44	51.8	215	7.38	4.42	1.62	0.60	0.37	103.6
179	7.29	5.21	2.86	0.71	0.55	170.5	216	5.39	4.03	2.10	0.75	0.52	68.9
180	4.31	3.89	2.17	0.90	0.56	42.9	217	6.85	4.68	2.53	0.68	0.54	131.2
181	5.89	4.55	1.72	0.77	0.38	77.2	218	7.09	4.10	2.11	0.58	0.51	108.0
182	7.76	4.03	2.60	0.52	0.65	124.2	219	6.61	5.00	3.31	0.76	0.66	171.6
183	8.70	5.40	3.29	0.62	0.61	227.0	220	8.26	4.63	2.00	0.56	0.43	127.3
184	7.55	5.30	2.95	0.70	0.56	158.5	221	5.90	3.32	2.68	0.56	0.81	76.8
185	7.21	4.22	1.58	0.59	0.37	72.1	222	8.09	4.43	4.32	0.55	0.98	208.1

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a.短径÷長径、b.厚さ÷短径)の計測数値　　単位：cm

表４　第５面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
223	6.82	4.40	2.81	0.65	0.64	112.3	229	7.02	3.16	2.00	0.45	0.63	67.7
224	7.08	3.20	1.95	0.45	0.61	68.5	230	7.81	6.08	2.61	0.78	0.43	195.3
225	6.83	5.30	2.37	0.76	0.45	158.8	231	10.91	4.62	2.00	0.42	0.43	193.9
226	3.89	2.65	2.01	0.68	0.76	32.2	232	6.45	4.48	2.36	0.69	0.53	104.5
227	5.47	4.93	2.81	0.90	0.57	106.2	233	5.41	3.11	1.98	0.57	0.64	53.5
228	5.94	4.88	3.30	0.82	0.68	134.0	234	4.97	3.83	2.51	0.77	0.66	68.6

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a.短径÷長径、b.厚さ÷短径)の計測数値　　単位：cm

表５　玉砂利計測比票

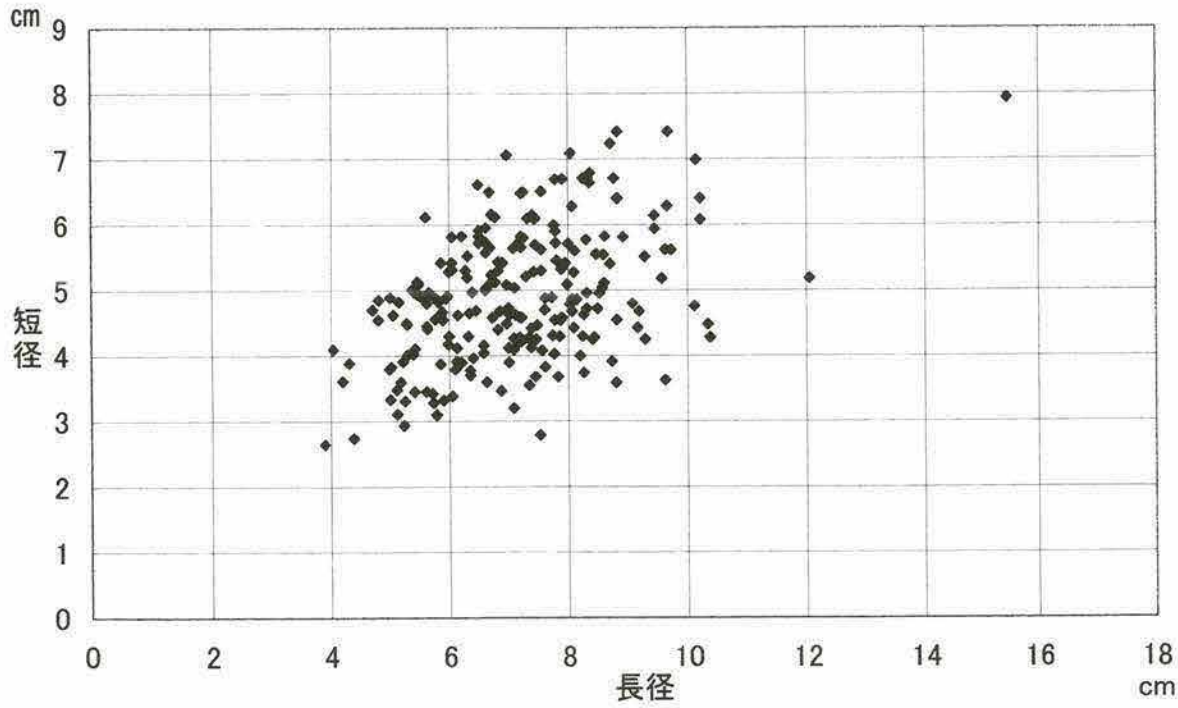


表6 遺物観察表(1)　　( )は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	観察項目
7-1	第1面 建物1-イ	かわらけ	(6.9)	(5.0)	1.6	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
7-2	第1面 建物1-ロ	かわらけ	7.0	4.7	1.9	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
7-3	第1面 P1	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	／	(4.6)	／	素地 明灰白色 精良堅緻 釉 灰緑色半透明 内外面共厚く施釉 高台畳付露胎 文様 外面鎬蓮弁文
7-4	〃	瀬戸 卸皿	／	(7.4)	／	内面ヘラによるおろし目 外底糸切痕 胎土 明白黄色砂粒 良土 釉 淡灰白色 灰釉ハケ塗り
7-5	〃	常滑 壺	／	／	／	肩部小片 胎土 灰色 砂粒 白色粒 長石粒やや多量 器表 赤褐色 降灰部 灰緑色
7-6	第1面 P4	かわらけ	(12.4)	(8.1)	2.9	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-7	第1面 溝1	かわらけ	6.8	3.7	2.2	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質
7-8	〃	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
7-9	〃	かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
7-10	〃	かわらけ	(8.1)	(5.7)	1.7	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 灰褐色 微砂 雲母 白色針状物質
7-11	〃	かわらけ	10.8	6.3	3.0	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 土丹粒
7-12	〃	かわらけ	(11.9)	(7.1)	3.0	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-13	〃	かわらけ	12.6	7.8	2.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-14	〃	かわらけ	(12.5)	(7.6)	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-15	〃	かわらけ	12.8	6.5	3.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 淡黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-16	〃	かわらけ	13.3	7.3	3.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 淡黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
7-17	〃	青白磁 梅瓶	／	／	／	胴部片 素地 灰白色 精良堅緻 釉 水青色不透明
7-18	〃	女瓦(平瓦)	厚1.8			凹面 離れ砂少量付着 縦方向ナデ 凸面 離れ砂多量に付着 斜格子の叩き目 胎土 灰色 砂粒 白色粒 やや粗土色調 暗灰色～淡橙色
7-19	〃	骨角製品 笄	残存長6.7 幅0.6～1.3 厚0.2～0.25			
7-20	1面上包含層	かわらけ	(12.7)	(7.9)	3.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-21	〃	常滑 甕	縁帯幅 3.4			口縁部小片 胎土 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 器表 暗褐色
10－1	第2面 P2	かわらけ	(8.0)	5.6	1.6	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
10－2	〃	かわらけ	11.0	5.6	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
10－3	〃	常滑 甕	縁帯幅 2.9			口縁部小片 胎土 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒若干多く含む 器表 暗赤褐色
10－4	〃	常滑 甕	縁帯幅 2.8			口縁部小片 胎土 灰色 砂粒 白色粒少量 器表 暗褐色
10－5	〃	常滑 甕	／	／	／	肩部小片 胎土 暗灰色 砂粒 白色粒少量 器表 黒褐色
10－6	〃	常滑 甕	／	／	／	肩部小片 胎土 淡黄橙色 砂粒 白色粒多量 小石粒 器表 暗赤褐色
10－7	第2面遺構外	かわらけ	(7.6)	(4.6)	2.0	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
10－8	〃	瀬戸 卸皿	／	／	／	口縁部片 胎土 灰白色 砂粒 白色粒若干含む 精良土 釉 灰白色 灰釉ハケ塗り
10－9	〃	常滑 甕	／	／	／	口縁部小片 胎土 淡橙色 砂粒 白色粒 黒色粒少量 器表 暗赤褐色

表7　遺物観察表(2)　　(　)は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	観察項目
10－10	第2面遺構外	女瓦(平瓦)	厚2.2～2.5			凹面　離れ砂若干付着 布目痕 斜め方向糸切り痕 縦方向ナデ 凸面　離れ砂若干付着 斜格子の叩き目 斜め方向ナデ 側面 ケズリ 側縁 ナデ ケズリ　胎土 灰色 砂粒 白色粒 良土　色調 暗灰色
13－1	第3面　P2	南部系山茶碗	／	(6.8)	／	外底糸切痕 貼付高台破損　胎土 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや粗土 軟質
13－2	〃	碁石	幅1.6×1.8	厚0.3		黒色
13－3	第3面　P3	碁石	幅1.6×1.9	厚0.4		黒色
13－4	第3面　P4	かわらけ	8.2	5.5	1.7	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
13－5	第3面　P5	かわらけ	8.0	5.8	1.8	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒　灯明皿
13－6	第3面遺構外	かわらけ	7.4	4.5	2.1	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－7	〃	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.8	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－8	〃	かわらけ	8.0	5.6	1.6	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物 赤色粒
13－9	〃	かわらけ	(8.2)	4.9	2.0	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－10	〃	かわらけ	7.9	6.0	1.8	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
13－11	〃	かわらけ	10.6	5.5	3.2	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－12	〃	かわらけ	11.6	6.0	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－13	〃	かわらけ	11.6	7.5	3.8	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－14	〃	かわらけ	(11.8)	(6.4)	3.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－15	〃	かわらけ	12.2	7.5	3.1	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13－16	〃	かわらけ	12.6	7.9	3.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13－17	〃	かわらけ	13.0	7.5	3.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13－18	〃	かわらけ	12.2	7.6	3.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13－19	〃	かわらけ	(13.0)	8.0	3.6	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－20	〃	かわらけ	(13.0)	(7.8)	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－21	〃	かわらけ	13.6	7.7	3.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－22	〃	かわらけ	(13.2)	(9.8)	3.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13－23	〃	かわらけ	12.6	8.3	2.9	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－24	〃	かわらけ	(13.6)	7.8	2.7	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13－25	〃	かわらけ	13.6	7.7	3.2	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－26	〃	かわらけ	13.5	7.6	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕　胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13－27	〃	常滑 甕	縁帯幅(3.0)			口縁部小片　胎土 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒　器表 褐色
13－28	〃	常滑 甕	／	18.0	／	胎土 灰色 砂粒 白色粒 黒色粒少量　器表 暗赤褐色

表8 遺物観察表(3)　　( )は復元値

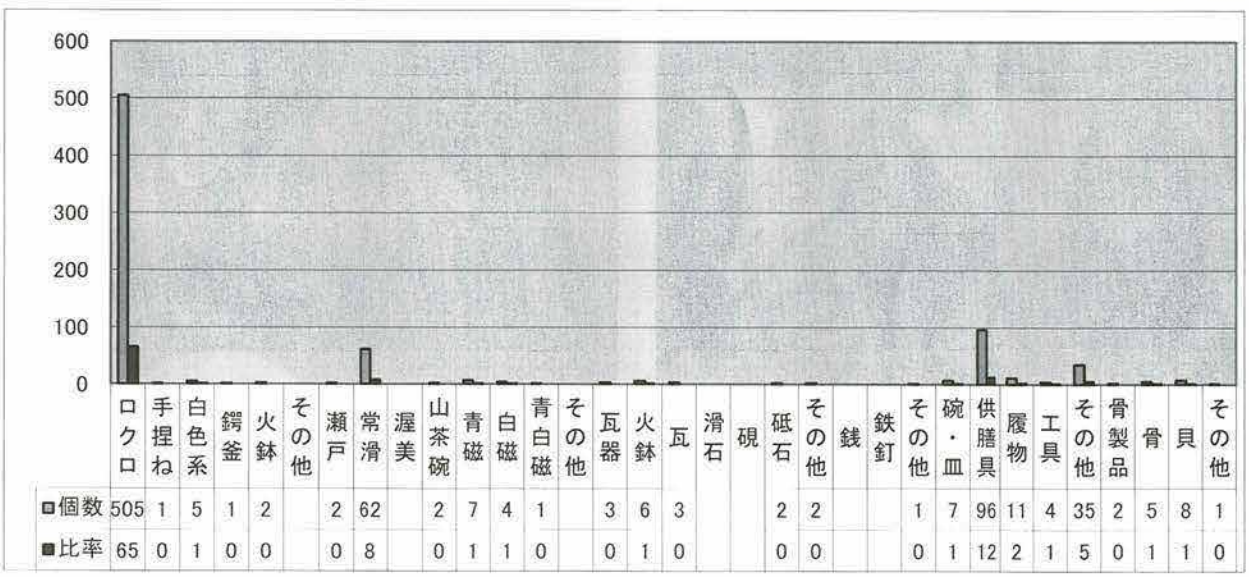
図番号	層位・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	観察項目
13－29	第3面遺構外	土器質 火鉢	／	／	／	脚部片 胎土 灰色～淡橙灰色 砂粒多量 赤色粒 器表 淡橙灰色
16－1	第4面 溝1	かわらけ	(7.0)	(4.3)	1.5	ロクロ成形 外底糸切痕、板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
16－2	〃	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 多量 雲母 白色針状物質 赤色粒
16－3	〃	かわらけ	(7.6)	5.7	1.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
16－4	〃	かわらけ質土製品	(5.0)	(1.5)	2.3	削り出し高台 胎土 黄橙色 微砂 白色粒 良土 内外面共にスス付着
16－5	〃	土器質 火鉢	／	／	／	口縁部小片 胎土 橙灰色 砂粒 白色粒 器表 淡橙色 浅鉢型
16－6	〃	滑石鍋転用品	残存長6.5 幅3.0 厚2.2			鍋時の鍔部分 上面に四角く切り込みを入れスタンプに加工しようとしたものか？
16－7	〃	鉄製品 釣針	長5.0 幅0.3 厚0.1			先端が鏃のように尖る
16－8	〃	漆器 皿	(9.9)	(6.9)	1.2	無高台 外底部以外黒漆塗布 内面朱漆で草文を手描き
16－9	〃	漆器 皿	／	(4.2)	／	削り出し高台 内外面黒漆塗布 内面朱漆で花文をスタンプ
16－10	〃	漆器 皿	／	(7.0)	／	高台欠損 内外面黒漆塗布 内面朱漆で松喰鶴をスタンプ
16－11	〃	木製品 菜箸	残存長33.9 幅1.3 厚0.6			先端欠損 断面多角形の棒状に削り加工
16－12	〃	木製品 箸	長24.6 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
16－13	〃	木製品 箸	長23.8 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
16－14	〃	木製品 箸	長22.6 幅0.7 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
16－15	〃	木製品 扇子	残存長15.0 幅1.0～1.2 厚0.2 孔径0.3			全体を平らに加工 基部に木釘を差し込む孔を穿つ
16－16	〃	木製品 用途不明	長13.9 幅2.4～2.6 厚1.5～1.9			上端部中央を1.7cm程削り込む 両端丸味を帯びる加工 染・紡具(糸巻き)か？
16－17	〃	木製品 用途不明	長10.4 幅3.2 厚0.3			側面面取り加工 表裏面共丁寧に平らに加工 小判型の形代か？
16－18	第4面 遺構外	極小かわらけ	(4.2)	(3.4)	0.9	ロクロ成形 外底糸切痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 赤色
16－19	〃	かわらけ	(7.6)	4.7	1.6	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
16－20	〃	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
16－21	〃	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.5	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
16－22	〃	かわらけ	12.0	7.8	2.9	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
16－23	〃	かわらけ	(12.6)	(7.5)	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
16－24	〃	かわらけ	13.6	7.8	3.1	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
19－1	第5面 遺構外	かわらけ	(7.3)	(5.3)	1.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 暗橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
19－2	〃	かわらけ	7.8	6.2	1.4	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
19－3	〃	かわらけ	8.4	6.2	1.7	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
19－4	〃	かわらけ	(11.8)	8.0	3.0	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
19－5	〃	かわらけ	12.0	7.6	2.9	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
19－6	〃	かわらけ	12.4	7.8	3.1	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
19－7	〃	かわらけ	(12.8)	7.6	3.0	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
19－8	〃	かわらけ	(13.2)	8.2	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒

表9 遺物観察表(4)　　( )は復元値

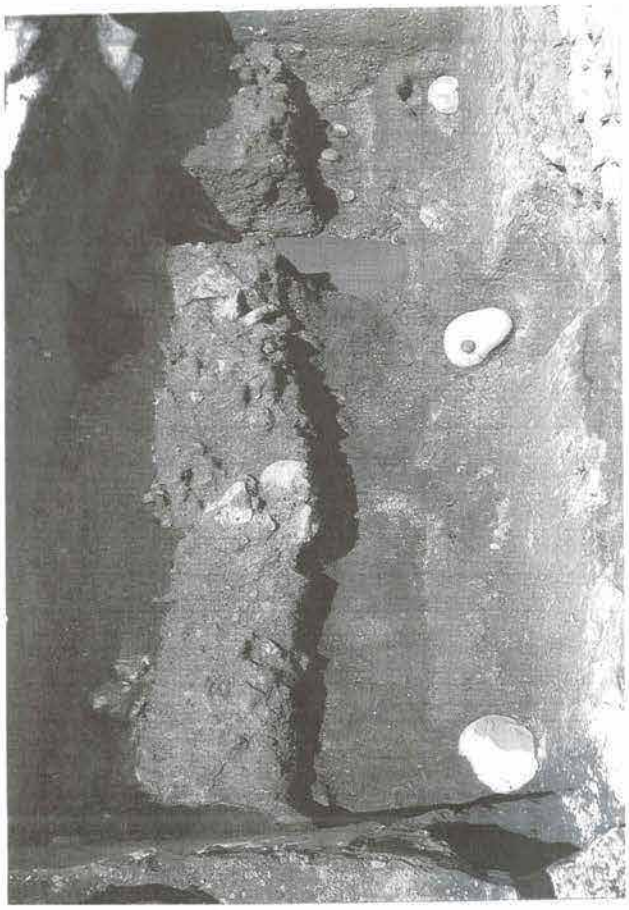
図番号	層位・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	観察項目
19－9	第5面 遺構外	白磁 口兀皿	／	(6.3)	／	素地 灰白色 精良堅緻 釉 灰白色半透明 薄く施釉 外面下位～外底面に鉄分付着
19－10	〃	瀬戸 入子	(7.8)	(4.8)	1.7	胎土 灰色 精良土 口唇部に淡灰緑色の自然釉
19－11	〃	常滑転用砥石	厚1.0～1.5			常滑甕の転用品 周り殆ど使用され磨滅する
19－12	〃	石製品 砥石	残存長5.3 幅4.0 厚3.1			砥面は上下面に使用痕 凝灰岩製 上野産の中砥か？
19－13	〃	骨角製品 笄	残存長5.5 幅0.7～1.2 厚0.2			両面と周縁を丁寧な磨り加工
19－14	〃	木製品 曲物	残存長11.0 残存幅4.0 厚0.2～0.4			周縁面取り加工 下面粗い加工
19－15	〃	木製品 栓状	長3.4 幅2.5×2.6			断面八角形に面取り加工
19－16	〃	木製品 箆	長21.3 幅0.5～1.5 厚0.1～0.6			偏平な用材に丸味を持たせ丁寧に加工 先端部に向け薄く削り仕上げる
19－17	〃	木製品 箸	長24.5 幅0.5 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
19－18	〃	木製品 箸	長24.3 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
19－19	〃	木製品 箸	長23.6 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
19－20	〃	木製品 箸	長23.3 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
19－21	〃	木製品 箸	長23.3 幅0.6 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
19－22	〃	木製品 箸	長23.0 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
19－23	〃	木製品 箸	長22.6 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－24	第5面 遺構外	木製品 箸	長22.8 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－25	〃	木製品 箸	長22.2 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－26	〃	木製品 箸	長22.1 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－27	〃	木製品 箸	長21.8 幅0.7 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－28	〃	木製品 箸	長22.0 幅0.7 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－29	〃	木製品 箸	長21.7 幅0.4 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－30	〃	木製品 箸	長21.4 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－31	〃	木製品 箸	長21.4 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－32	〃	木製品 箸	長21.2 幅0.5 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－33	〃	木製品 箸	長20.7 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
20－34	〃	木製品 箸	長20.5 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
22－1	第6面 遺構外	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.9	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
22－2	〃	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.2	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 暗橙色 微砂雲母 白色針状物質 小石粒
22－3	〃	かわらけ	(12.2)	8.3	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 胎土 暗橙色 微砂雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
22－4	〃	常滑 甕	／	／	／	肩部小片 胎土 暗橙色 砂粒 白色粒やや多い 黒色粒 器表 暗褐色
22－5	〃	女瓦(平瓦)	厚2.1			凹面 離れ砂若干付着 布目痕 縦方向ナデ 凸面 離れ砂若干付着 縦方向ナデにより縄目叩き消す 側面 ケズリ 側縁 ナデ 胎土 暗赤褐色 砂粒 白色粒 良土 色調 灰色
22－6	〃	漆器 皿	8.9	(6.4)	1.2	外底部以外黒漆塗布 内面朱漆で葉文を手描き
22－7	〃	木製品 箸	長24.2 幅0.6 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
22－8	〃	木製品 箸	長22.9 幅0.6 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
22－9	〃	木製品 箸	長22.7 幅0.7 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
22－10	〃	木製品 箸	長22.5 幅0.4 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
23－11	第6面 遺構外	木製品 箸	長22.4 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
23－12	〃	木製品 箸	長21.8 幅0.4 厚0.4			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
23－13	〃	木製品 箸	長21.6 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工
23－14	〃	木製品 菜箸	長29.9 幅0.6 厚0.6			先端欠損 断面多角形の棒状に削り加工
23－15	〃	木製品 草履板芯	長23.0 幅(4.6) 厚0.2～0.5			先端に小孔 藁状の植物圧痕残る
23－16	〃	木製品 刀	長51.3 幅1.8～2.2 厚0.5～0.7 鍔部 4.6×4.0 厚0.5～0.6			刀身の先端は尖らせずなだらかに加工 持ち手の下端は丸味を帯びる 子供の玩具か？形代か？

表10　遺物分類別出土数量・比率表

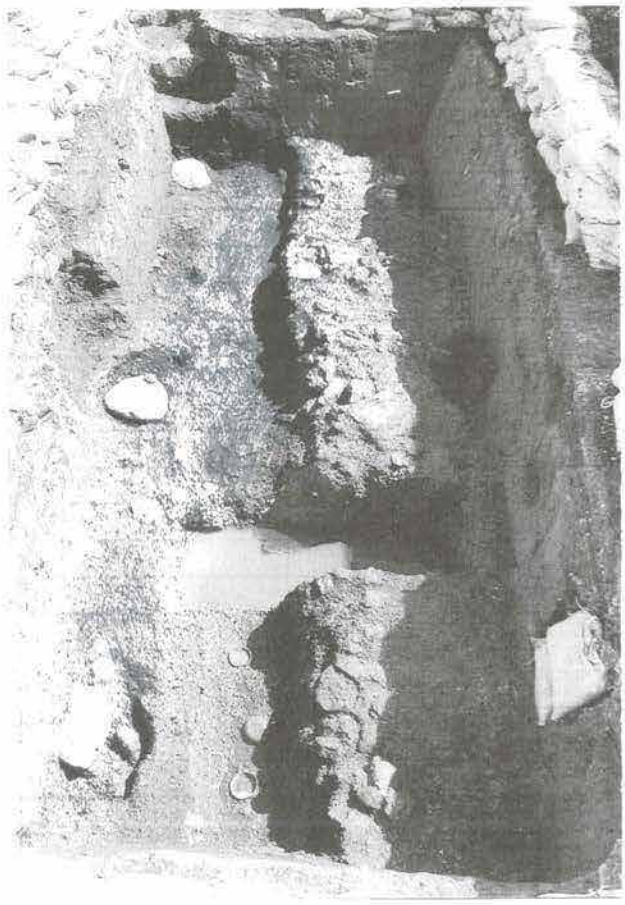
種類＼出土地		1面	2面	3面	4面	5面	6面	合計	比率(%)
かわらけ	ロクロ	98	14	243	100	36	14	505	65
	手捏ね						1	1	0
	白色系				2	2	1	5	1
土製品	鍔釜				1			1	0
	火鉢			1	1			2	0
	その他								
国産陶器	瀬戸	1	1					2	0
	常滑	22	17	8	8	4	3	62	8
	渥美								
	山茶碗			1		1		2	0
舶載陶磁器	青磁	2		1	2	2		7	1
	白磁	1				3		4	1
	青白磁	1						1	0
	その他								
瓦質製品	瓦器	1		2				3	0
	火鉢	1		1		4		6	1
	瓦	1	1			1		3	0
石製品	滑石								
	硯								
	砥石				1	1		2	0
	その他			2				2	0
金属製品	銭								
	鉄釘								
	その他				1			1	0
漆・木製品	碗・皿			1	4	1	1	7	1
	供膳具				20	44	32	96	12
	履物				8		3	11	2
	工具					2	2	4	1
	その他				8	18	9	35	5
骨製品		1				1		2	0
自然遺物	骨	1		3		1		5	1
	貝			1		4	3	8	1
	その他					1		1	0
合計		130	33	264	156	126	69	778	
比率(%)		17	4	34	20	16	9		100



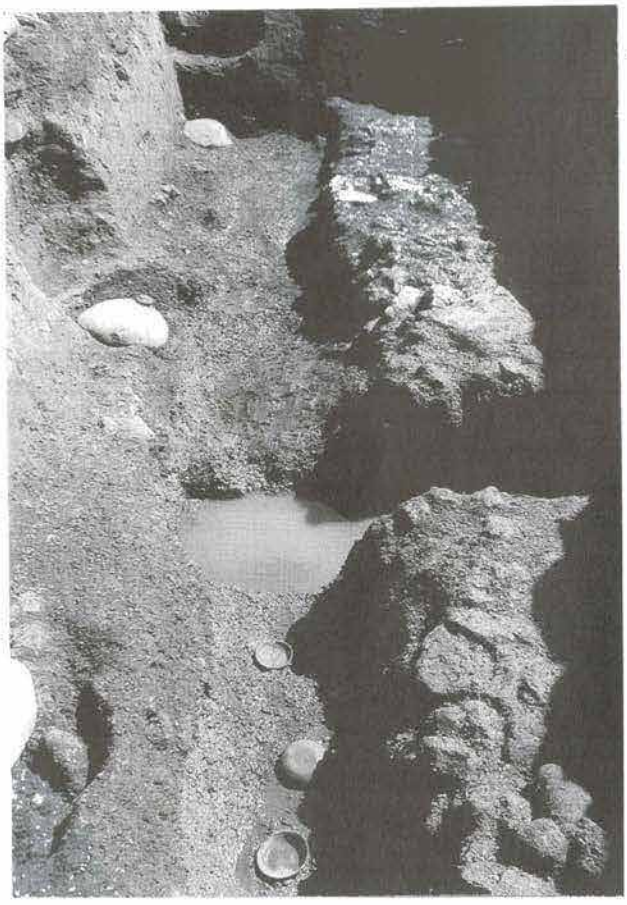
図版 1



▲ 1. 第 1 面全景（東から）

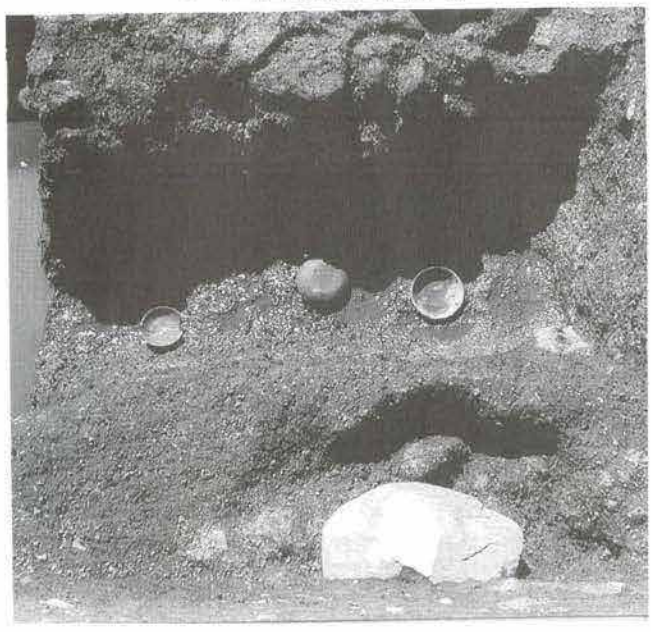


▲ 2. 第 1 面全景（西から）

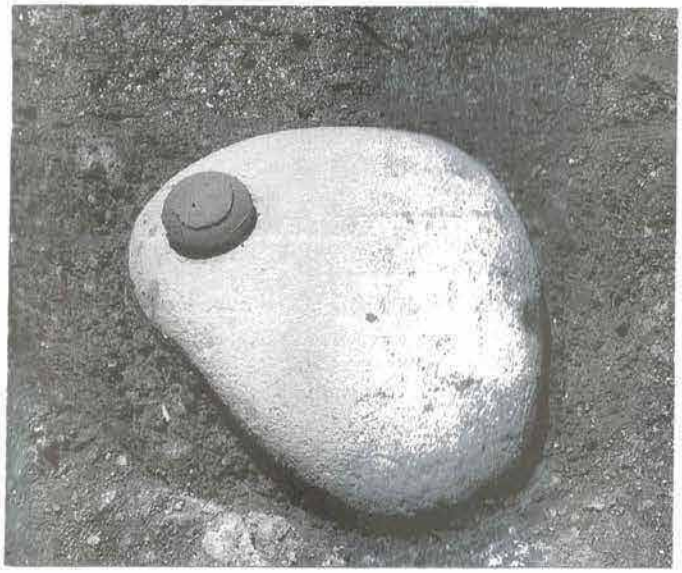


◀ 3. 調査区南西域（西から）

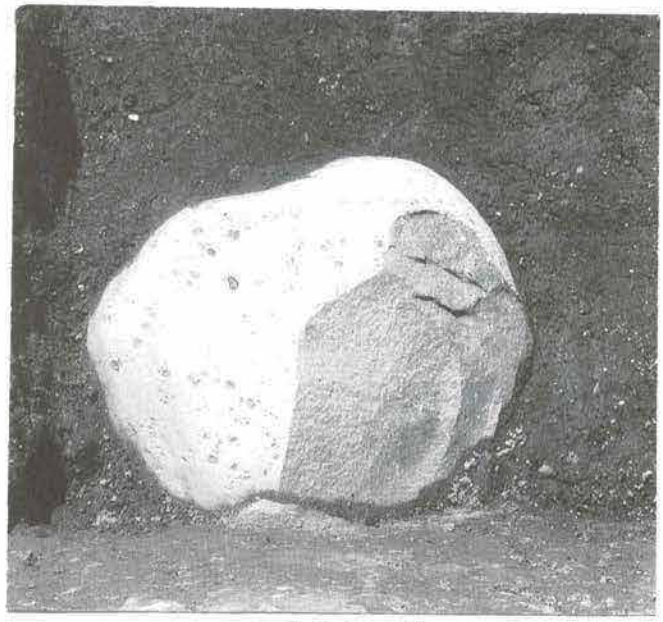
▼ 4. 第 1 面溝 1（西から）



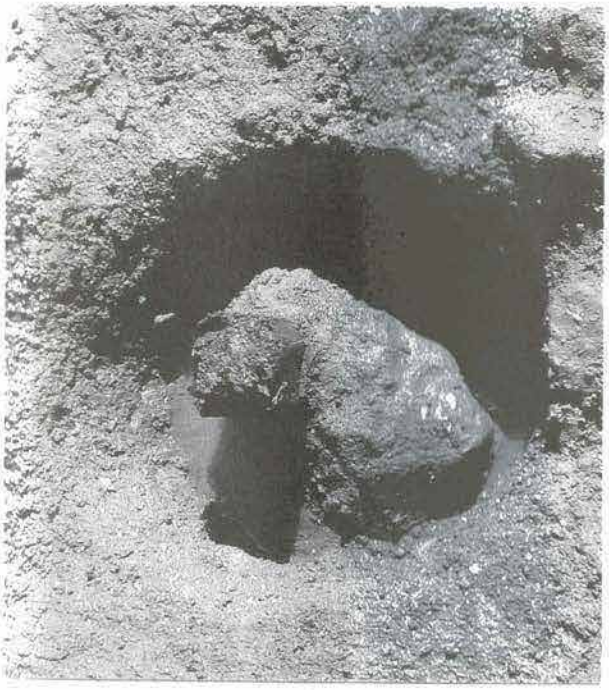
◀ 1. 建物１ーイ礎石
再火の為か表面が



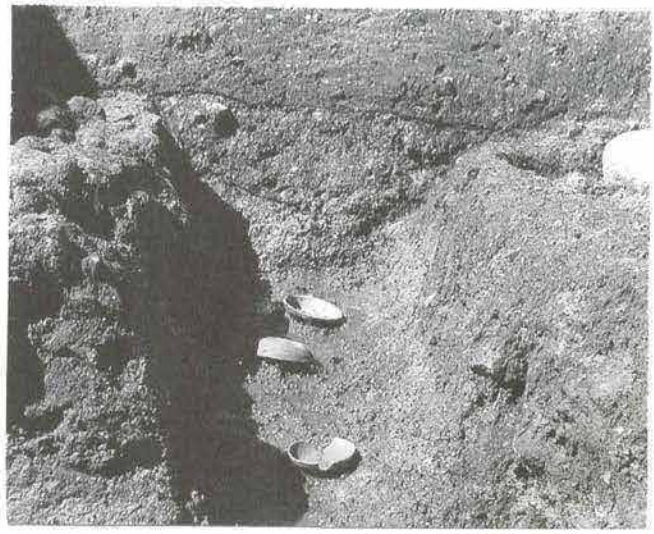
▲ 2. 建物１ーロ礎石



▲ 3. 建物１ーハ礎石



▲ 4. P2（角柱痕あり）

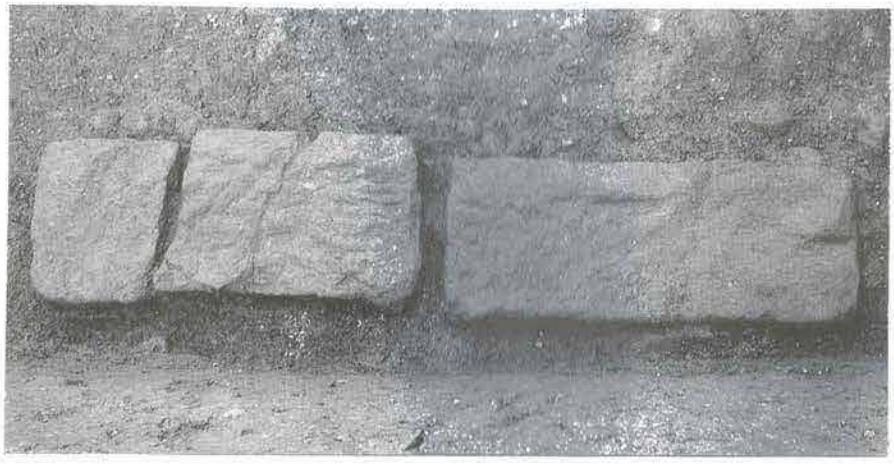


▲ 5. 溝１ 土層堆積

図版３

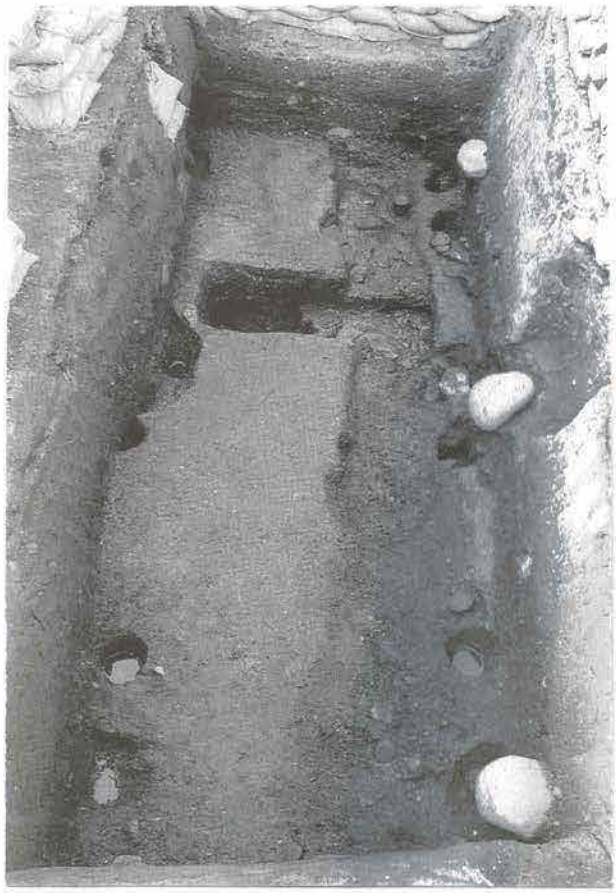
▲ 1. 第２面全景（東から）

▲ 2. 第２面全景（西から）

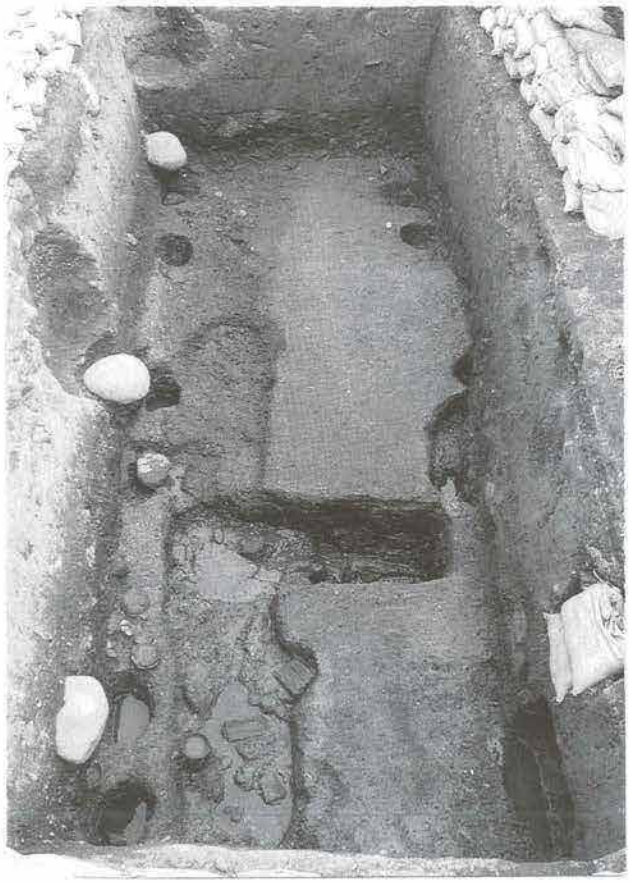


◀ 3. 鎌倉石切石列
建物１・溝１と
同一軸方位

4. ▶ 溝１北側生活面 土丹塊敷き部分

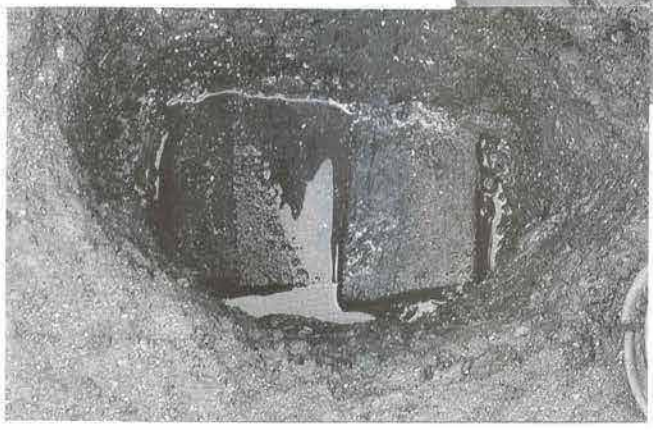


▲ 1. 第３面全景（東から）



▲ 2. 第３面全景（西から）

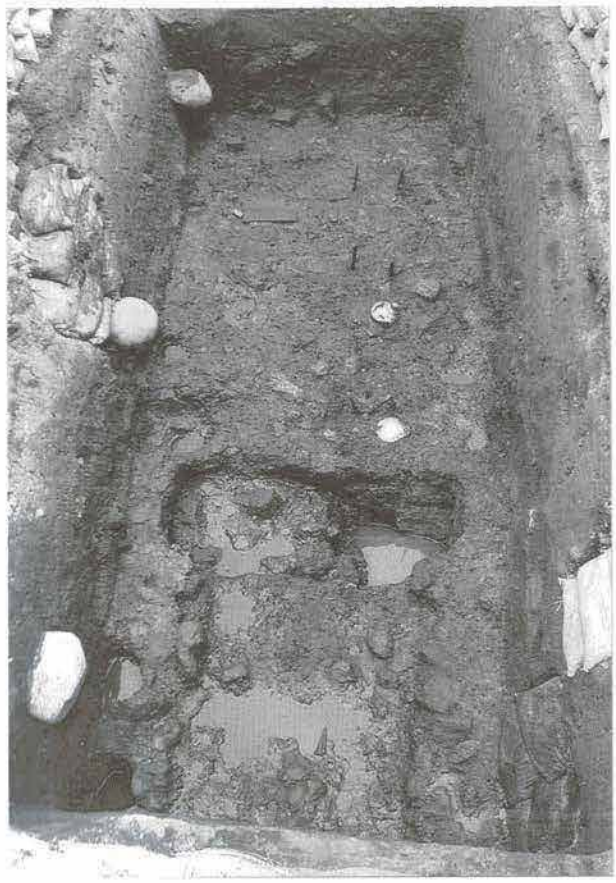
3. かわらけ出土状況 ▶



◀ 4. P7 礎板検出状況

図版５

▲ 1. 第４面全景（東から）



▲ 2. 第４面全景（西から）

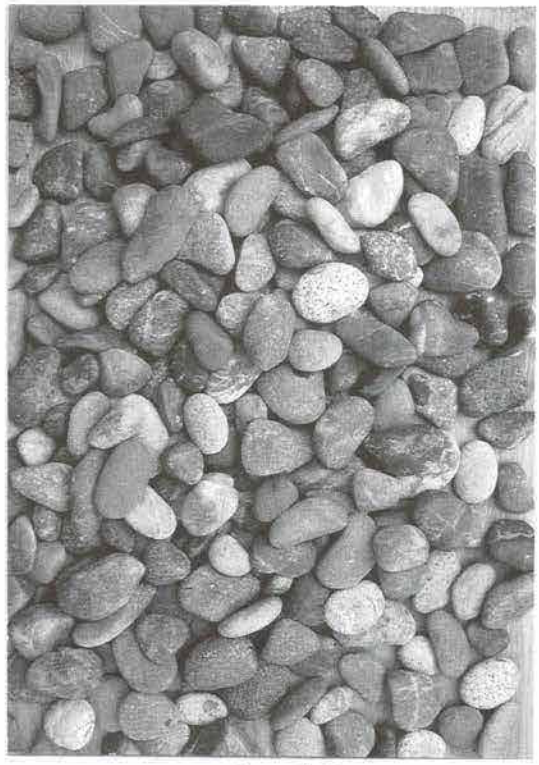
▲ 3. 溝１の木杭列

▲ 4. 調査区中央部（北から）

▲ 1. 第５面全景（東から）

▲ 2. 第５面全景（西から）

▲ 3. 玉砂利敷範囲近景

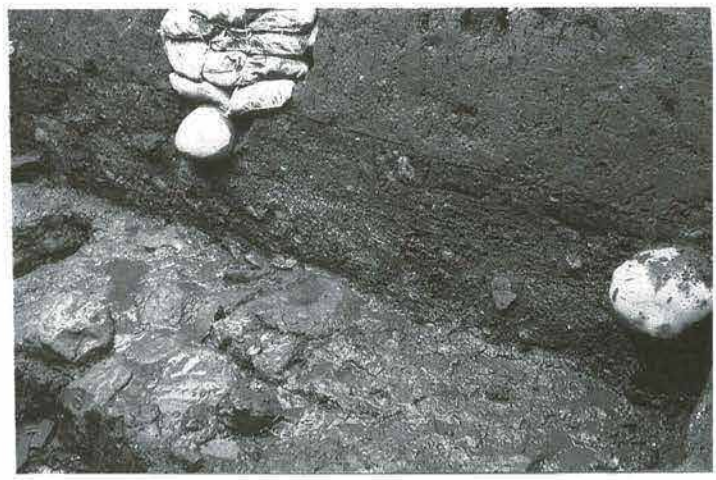


▲ 4. 玉砂利

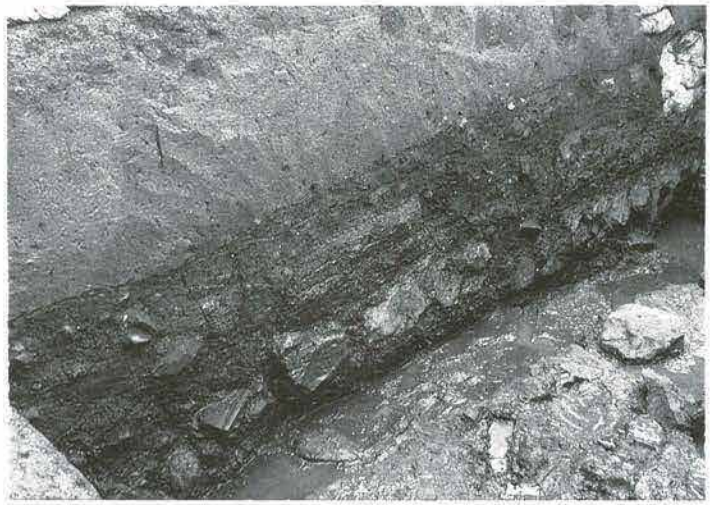
図版７

▲ 1. 第６面確認トレンチ（東から）

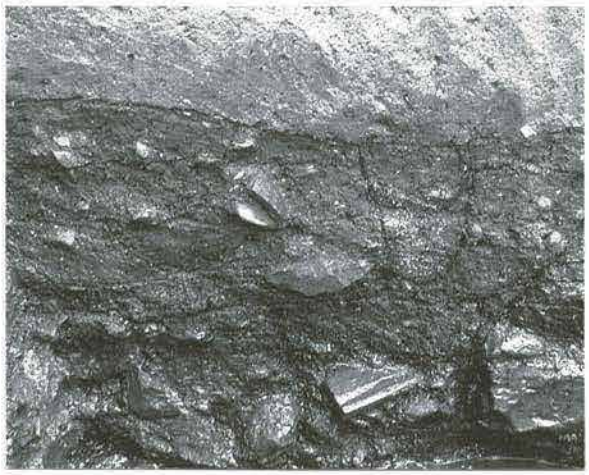
▲ 2. トレンチ内ハマグリ出土状況



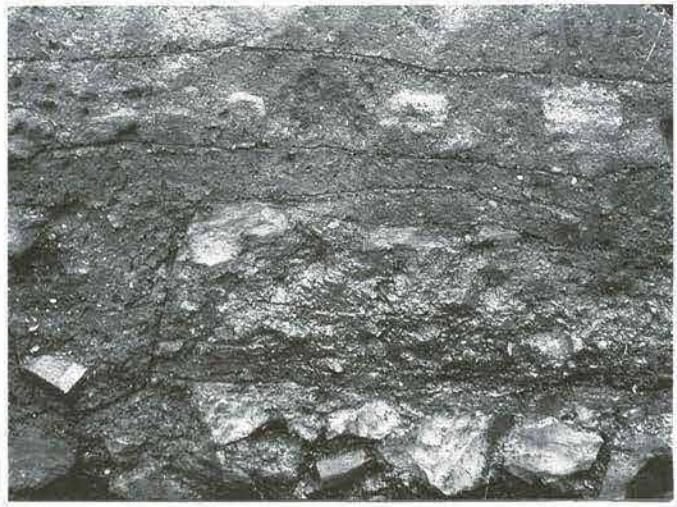
▲ 3. 調査区北壁土層断面



▲ 4. 調査区南壁土層断面



▲ 5. 調査区西壁南端土層断面



▲ 6. 調査区西壁北側土層断面

7-2

▲ 建物 1－ロ

7-7

7-17

7-11

7-18

7-3

7-4

7-15

7-5

▲ P1

7-16

▲ 溝 1

7-19

7-6

▲ P4

7-20

7-21

▲ 面上包含層

▲ 1. 第 1 面
▼ 2. 第 2 面

10-1

10-2

10-3

10-4

▲ P2

10-5

10-6

10-7

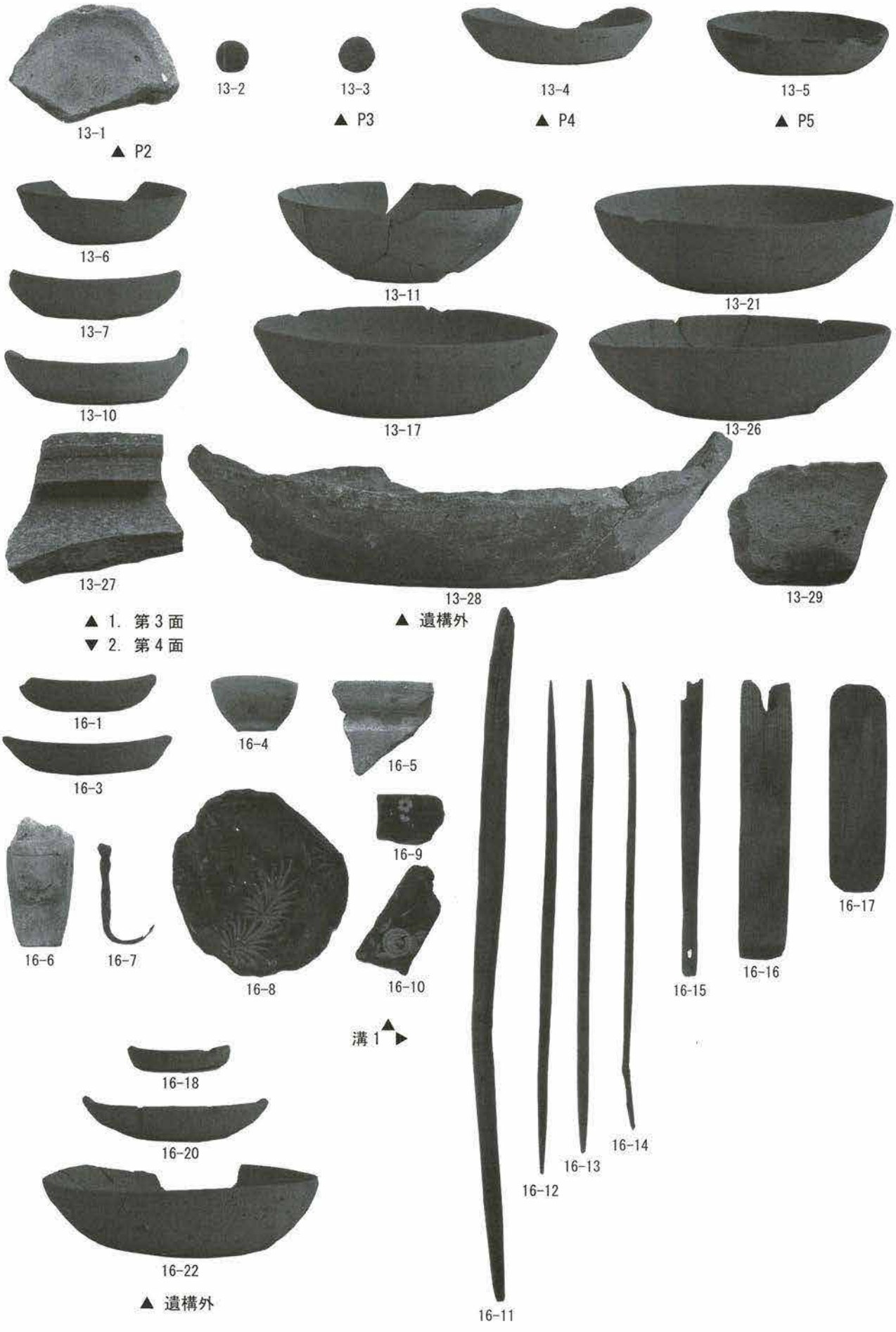
10-8

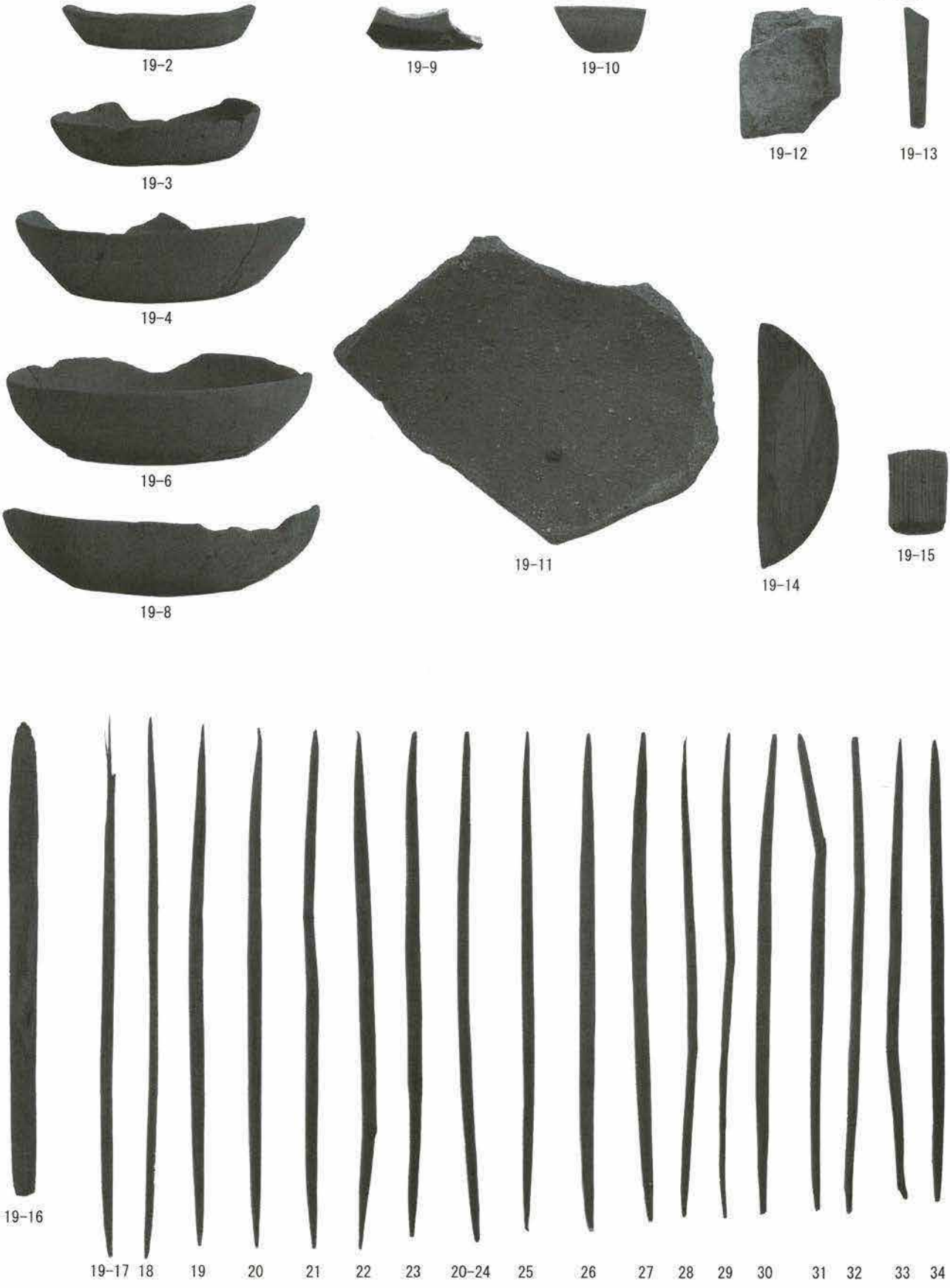
10-9

▲ 遺構外

10-10

図版９


13-1
▲ P2
13-2
13-3
▲ P3
13-4
▲ P4
13-5
▲ P5
13-6
13-7
13-10
13-11
13-17
13-21
13-26
13-27
13-28
13-29
▲ 1. 第３面
▼ 2. 第４面
▲ 遺構外
16-1
16-3
16-4
16-5
16-6
16-7
16-8
16-9
16-10
溝１
16-11
16-12
16-13
16-14
16-15
16-16
16-17
16-18
16-20
16-22
▲ 遺構外


19-2
19-9
19-10
19-12
19-13
19-3
19-4
19-11
19-14
19-15
19-6
19-8
19-16
19-17
18
19
20
21
22
23
20-24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

▲ 1. 第 5 面遺構外

北条小町邸跡（No. 282）

雪ノ下一 丁目440番の一部

例　　言

1．本報は「北条小町邸跡（鎌倉市№282）」内、雪ノ下一丁目440番の一部における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．調査期間　2004年1月16日～同年2月19日
　調査面積　56㎡
3．本調査地点の略称はYYT1440とした。
4．調査体制
　担　当　者　馬淵和雄
　調　査　員　鍛治屋勝二（資料整理）・松原康子（同）・根本志保（同）
　調査補助員　鈴木弘太・吉田智哉・岩崎卓治（資料整理）・佐藤あおい（同）
　作　業　員　箕田孝善・田口康雄・清水光一・篠原敏夫・田島道夫・堀住稔
　　（以上社団法人鎌倉シルバー人材センター）
5．本報作成分担
　遺構図整理　馬淵・鍛治屋・根本
　遺物実測　松原・岩崎・鈴木・佐藤
　同墨入れ　松原・岩崎
　同観察表　松原
　原稿執筆　馬淵・鍛治屋・松原（担当部分末尾に執筆者名を記した）
　編　　集　馬淵
　総　　括　馬淵
　寄　　稿　鈴木茂（パレオ・ラボ）

目　　次

第１章　遺跡と調査地点の概観……113
　１．位置と地勢……113
　２．歴史的環境……113
第２章　調査の概略……121
　１．調査にいたる経緯……121
　２．調査方法……121
　３．調査の経過……121
第３章　調査結果……122
　第１節　層序と面の概要……122
　１．基盤層の状況……122
　２．小町大路側溝と平坦面のあり方……122
　第２節　各説……124
　１．小町大路側溝 1･2 と関連遺構……124
　２．小町大路側溝 3 と関連遺構……126
　３．小町大路側溝 4･5 と関連遺構……132
　４．小町大路側溝 6 と関連遺構……136
　５．小町大路側溝 7 と関連遺構……141
　６．小町大路側溝 8･9･10 と関連遺構……145
　７．側溝一括出土遺物……150
　８．中世以前の遺物……150
　９．遺構外採集遺物……150
第４章　まとめと考察……159
　１．遺構の変遷について……159
　２．まとめ……164
第５章　北条小町邸跡の花粉化石……167

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡……114
図２　明治15年頃の遺跡付近の状況……119
図３　調査区設定図……121
図４　調査区壁土層図……123
図５　遺構全図 (1)－側溝 1･2 と関連遺構、同出土遺物……125
図６　遺構全図 (2)－側溝 3 と関連遺構……127
図７　側溝 3・東西溝 2・東西溝 3 出土遺物……128
図８　土師器集中部出土遺物……130
図９　建物 1・柱穴列 1～3、同出土遺物……131
図10　遺構全図 (2) 内落込み出土遺物……132
図11　遺構全図 (3)－側溝 4･5 と関連遺構、同出土遺物……133
図12　遺構全図 (4)－側溝 6 と関連遺構……135
図13　側溝 5･6 同出土遺物……136
図14　側溝 6 出土遺物……137
図15　側溝 6 西岸上出土遺物……138
図16　土師器集中部 3、同出土遺物……139
図17　橋脚 1・柱穴列 4～6、同出土遺物……140
図18　遺構全図 (5)－側溝 7 と関連遺構……142
図19　側溝 7 出土遺物 (1)－上層……143
図20　側溝 7 出土遺物 (2)、側溝 8・9・10・側溝 7 西岸・P. 98、同出土遺物……144
図21　遺構全図 (6)－側溝 8・9・10 と関連遺構……146
図22　側溝一括出土遺物 (1)……148
図23　側溝一括出土遺物 (2)……149
図24　中世以前・遺構外採集遺物……150
図25　遺構変遷図……160
図26　小町大路側溝変遷模式図……161
図27　小町大路側溝対比図……165

表 目 次

表１　遺物観察表（１）……151
表２　遺物観察表（２）……152
表３　遺物観察表（３）……153
表４　遺物観察表（４）……154
表５　遺物観察表（５）……155
表６　遺物観察表（６）……156
表７　遺物観察表（７）……157
表８　遺物観察表（８）……158

図 版 目 次

図版１-１　土師器集中部１　南から……175
１-２　建物１Ｐ．２……175
１-３　側溝５　南から……175
１-４　側溝５と関連遺構　南から……175
１-５　側溝５と関連遺構　西から……175
図版２-１　土師器集中部３　南から……176
２-２　側溝６肩部　東から……176
２-３　側溝７と関連遺構　東から……176
２-４　側溝７と関連遺構　西から……176
２-５　側溝７と関連遺構　北から……176
図版３-１　側溝８木材出土状況　南から……177
３-２　側溝９と関連遺構　東から……177
３-３　側溝９西岸上大型礎板　南から……177
３-４　側溝９　東から……177
３-５　側溝９　南から……177
３-６　側溝９　西から……177
図版４-１　調査区北壁東側土層断面（上段）……178
４-２　同（下段）……178
４-３　調査区南壁東側土層断面（上段）……178
４-４　同（下段）……178
図版５　遺物出土……179
図版６　遺物出土……180
図版７　遺物出土……181

第１章　遺跡と調査地点の概観

１．位置と地勢

位　置

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにほぼ平行した東西２本の南北大路、および直交する何本かの東西大路と小路（「辻子」か）により区画される。市街地のほとんどの地下には中世都市遺跡が存在し、このうち若宮大路東側の鶴岡八幡宮前面（南）にある一辺約 200ｍの方形区画が、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市№282）として登録されている。この区画は西辺を若宮大路、北辺を横大路、東辺を小町大路に囲まれ、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正亭のあった場所ともいわれている（高柳 1959・秋山 1996・同 1997）。

調査地点はこの方形区画の東南角にあり、現在の小町大路からは約 10ｍ西に入った場所に位置する。「北条小町邸跡」東辺の調査事例は近年増加しており、地点２（雪ノ下一丁目 432 番２地点，1988 年調査－菊川 1989）、地点４（雪ノ下一丁目 400 番１地点，2000 年調査－馬淵ほか 2002）、地点５（雪ノ下一丁目 401 番５ほか地点，2001 年調査－馬淵ほか 2003）とはいずれも約 100ｍ以内の至近距離にある。とくに小町大路に臨んで大路側溝の発見された地点 2・4 とは、東西位置でほぼ同じ並びにあり、本地点はその南側の延長線上にある。現在の地番は、鎌倉市雪ノ下一丁目 440 番となっている。

地　勢

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のように表現できる。鎌倉東辺の山中に源を発した滑川は、現在の浄明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷間を開析したあと、大倉の辺から南に向きを変えて市内中心部の沖積平野を形成しつつ、相模湾に流れ込む。この間中流域から下流では東側の山裾を削り、右岸に河岸段丘を形成する。調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。滑川までは約 170ｍ、現在の標高は 9.4ｍ前後、中世期には、削平されて詳しいことは不明ながら、ほぼ 8.2 ～ 8.5ｍ程度であったと推測される。現況で西の若宮大路よりほぼ 80㎝ 高い。

２．歴史的環境

縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地は水面下であったと考えられ、遺跡は二階堂や大倉の山裾に限られる。海退期以降では、本調査地点東側のほぼ隣地といっていい地点１の調査で、深さ２ｍ以上、幅が検出範囲だけで８ｍはある縄文晩期の大きな落込みの南岸が検出されている（馬淵ほか 2002）。逆台形の断面をしており、おそらく古滑川の流路か河跡湖と考えられる。しかし、他の地点でその対（北）岸は検出されていないので、広がりは把握できない。

調査地点一帯で人の生活痕跡がみられるようになるのは弥生時代中期後半からである。大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成されており（馬淵 1998・1999）、当地点近辺でも、中世層の中からしばしば中期後半～後期の土器が出土する。古墳時代の集落は、周辺山稜部・海岸部・二階堂付近の平坦な微高地で発見されているが、当地点付近ではまだ例がない。地点 18 での花粉分析でイネ科のプラントオパールが析出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある。

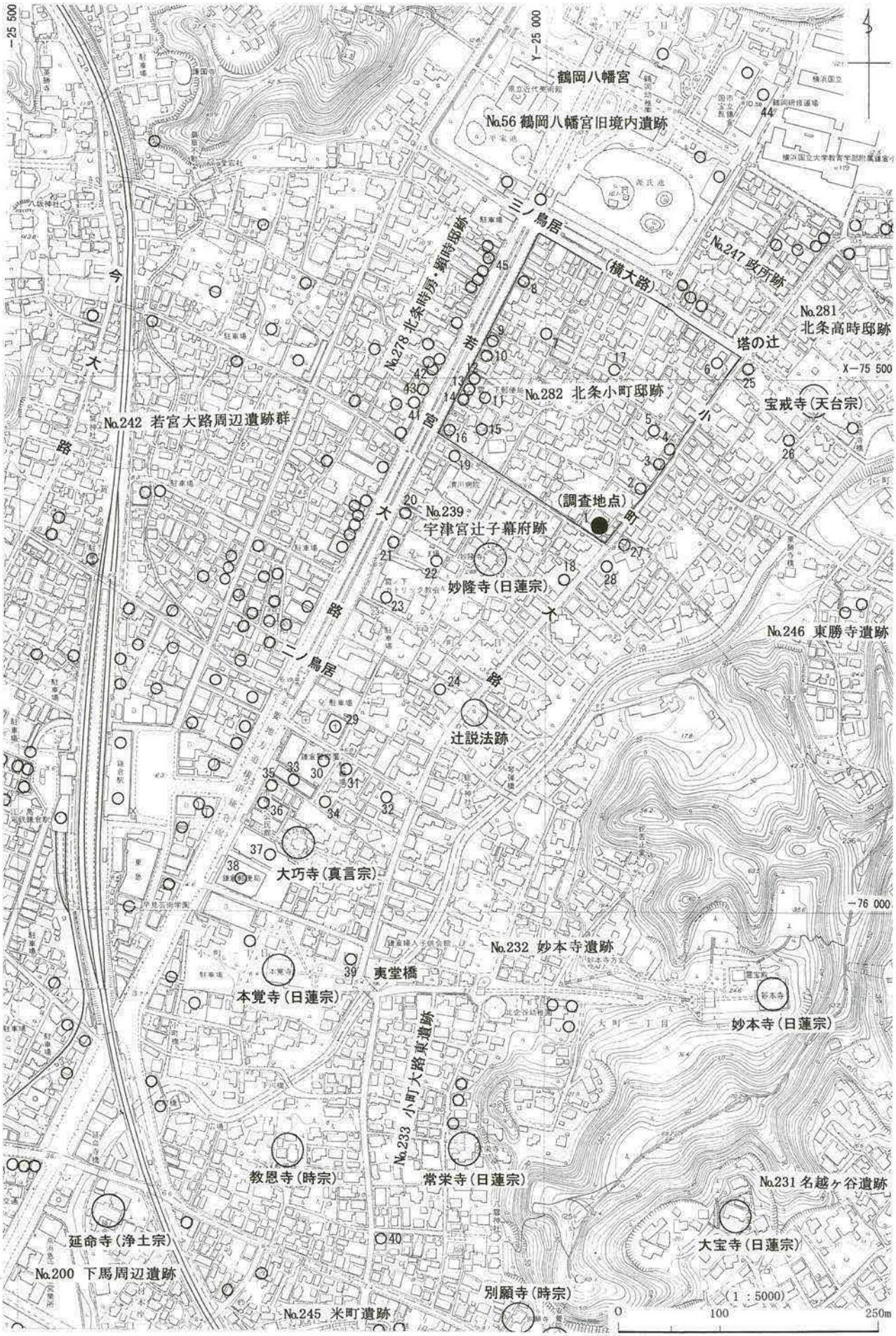


図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図1 調査地点名

地点名に続く（）内は担当者と調査年度、調査報告書名に続く（）は編著主体者と発行年度を示す

北条小町邸跡（No.282）

1. 雪ノ下1丁目440番（馬淵2004）**本地点** 2. 雪ノ下1-432-2（菊川1988）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』（菊川1989） 3. 雪ノ下1-432-2（市教委1977）『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』（1983） 4. 雪ノ下1-400-1（馬淵2000）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第2分冊）』（馬淵2002） 5. 雪ノ下1-401-5外（馬淵2001）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』（馬淵2002） 6. 雪ノ下1-395（菊川1988）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』（菊川1989） 7. 雪ノ下1-374-2（玉林・田代1985）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』（玉林ほか1986） 8. 雪ノ下1-377-6,7（馬淵1994～95）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第2分冊）』（馬淵1996） 9. 雪ノ下1-372-7（馬淵1984）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』（馬淵1984） 10. 雪ノ下1-371-1（馬淵1984）『北条泰時・時頼邸跡』（馬淵1985） 11. 雪ノ下1-369外（田代1989） 12. 雪ノ下1-370-1（田代1996）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第1分冊）』（土屋ほか1998） 13. 雪ノ下1-369外（瀬田1990）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』（瀬田1991） 14. 雪ノ下1-369-1（原1996）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第2分冊）』（原ほか1998） 15. 雪ノ下1-419-3（玉林・田代1986）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』（玉林1987） 16. 雪ノ下1-367-1・368-1（宮田1999～2000）『北条小町邸跡（泰時・時頼邸）』（諸星ほか2000） 17. 雪ノ下1-407-3の一部（原2002～03）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21（第2分冊）』（原2005）

宇津宮辻子幕府跡（No.239）

18. 小町2-373-1の一部（原1998） 未報告 19. 小町2-366-1（手塚1990～91） 未報告 20. 小町2-361-1（原1996）『宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書』（原ほか1996）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13』（小林1997） 21. 小町2-354-2（松尾1997） 未報告 22. 小町4-354-12（田代1991）『宇津宮辻子幕府跡（No.239）』（熊谷1993） 23. 小町2-354-2（田代1992） 未報告 24. 小町2-389-1（原・佐藤1994）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第1分冊）』（佐藤1996）

北条高時邸跡（No.281）

25. 小町3-426-3（原1994）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第1分冊）』（原ほか1996）

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

26. 小町3－455－4（原1997～98） 未報告 27. 小町2－409－9外（伊丹2004）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23（第2分冊）』（馬淵2007） 28. 小町2－402－5（手塚・野本1999）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17（第1分冊）』（野本2000） 29. 小町2－345－2（馬淵1983）『小町二丁目345番－2地点遺跡』（馬淵1985） 30. 小町1－321-1（宮田1993）『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』（宮田1996） 31. 小町1－322－2（菊川1987） 未報告 32. 小町1－325－イ（田代・佐藤1992～93）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10（第3分冊）』（佐藤1994） 33. 小町1－319－2（斎木1978）『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』（松尾ほか1983） 34. 小町1－322（宮田1992～93）『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』（宮田1997） 35. 小町1－309－5（斎木1982）『小町1丁目309番5地点発掘調査報告』（斎木1983） 36. 小町1－309－4（斎木1977）『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』（松尾ほか1983） 37. 小町1－891（1－309－2）（斎木1978～79）『（推定）藤内定員邸跡遺跡』（斎木ほか1982） 38. 小町1－305・308（斎木1975） 未報告 39. 小町1－302（斎木1977） 未報告

小町大路東遺跡（No.233）

40. 大町1-1181（原1980） 未報告

北条時房・顕時邸跡（No.278）

41. 雪ノ下1－273－ロ（原1987）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4（原ほか1988） 42. 雪ノ下1－271－4（馬淵1998）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書（第2分冊）』16（馬淵ほか2000） 43. 雪ノ下1－272（宗臺1996）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書（第1分冊）』14（宗臺ほか1998）／『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』（宗臺ほか1997）

鶴岡八幡宮旧境内遺跡（No.56）

44. 雪ノ下4-1051（松尾1982）『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査）』（松尾ほか1985）

律令期～平安時代後期

律令時代の鎌倉は、『相摸国封戸租交易帳』に相摸（模）国八郡のひとつとして現れる（『正倉院文書』正集十八―『神奈川県史　資料編』1－58による）。現在の鎌倉市内中心部はおそらく当時の鎌倉郷にあたり、調査地点もこのうちに含まれていた可能性がある。広範囲に集落が存在していたようで、市街地からの竪穴住居や掘立柱建物の検出例も漸増している。地点23では石帯部材の駝尾が出土しており（未報告，該品は筆者実見）、律令の官吏が一帯を往来していたことがわかる。地点8でも盤状坏が発見されている（馬淵ほか1996）。

王朝国家期末期（平安時代末期）の鎌倉には二十近い寺社があり、12世紀初頭までに荏柄天神社・祇園天王社（大町八雲神社）・御霊神社（坂ノ下）等、都市神の勧請もおこなわれているので、このころすでにかなりの集住形態が形成されていた可能性がある（野口1993・馬淵1994）。市内のいくつかの地点から若宮大路と異なる軸線を持つ平安後期の溝の検出が相次いでおり（地点41－原ほか1988・馬淵ほか2000・地点43－宗臺ほか1997）、また定窯白磁（地点41－原ほか1988）や渥美刻画文壺（馬淵ほか1985a・地点34－宮田ほか1997）など、鎌倉時代以前に属する遺物の出土も珍しいことではない。鶴岡八幡宮境内で創建期以前の層から発見された、板製五輪塔をともなう男女2体の合葬墓（地点44－松尾宣ほか1985）も、おそらくこの頃、12世紀前半期のものであ

る可能性が高い。

鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には横大路をはさんで鶴岡八幡宮と政所跡比定地、東側には東勝寺、南側には宇津宮辻子幕府跡比定地（嘉禄元年＝1225 以降）がある（文中『比定地』としたのは鎌倉市教育委員会による遺跡名称）。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれる場所である。そして当遺跡付近は北条小町邸跡とも『若宮大路幕府』跡ともいわれる場所である（高柳 1959）。以下、この一帯の変遷をみてみよう。

『吾妻鏡』によれば、嘉禄元年（1225）7 月 11 日に北条政子が死ぬと、前年第三代執権に就任したばかりの泰時はただちに大倉からの『御所』移転を計画する。10 月 3 日に計画が群議され、翌 4 日、連署北条時房・執権泰時らにより候補地が巡検される。そして、12 月にはやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、20 日には将軍藤原頼経移徙の儀がおこなわれた。慌ただしい移転に違いないが、これによって政治の中心が大倉の地から若宮大路一帯に移行した。

このときの御所移転について、はやくに須藤博史・貫達人らは『鎌倉市史　総説編』（高柳 1959）の史料解釈の誤りを指摘している（須藤／貫 1963・貫 1989）。すなわち、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる『東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈』という長さが、高柳のいう新御所の大きさではなく、当時仮御所としていた伊賀朝行亭（勝長寿院前）の御寝所からの距離であることを明らかにした。また松尾剛次はそれを図化した（松尾剛 1992・1993）。史料の読みは彼らのとおりに違いない。しかし、なお未解決の問題が残っている。この点については過去に何度か触れたが（馬淵ほか 2002，P. 78 ～ 80 など）、本章後段でもあらためて触れる。

この移転にともない、泰時は鎌倉にはじめて丈尺制を導入した。これは平城京や平安京で施行されていた都市の地割制度で、街区を方眼区画に再編しようと意図したことを意味する。また屋敷単位として戸主制を採用した。

11 年後の嘉禎二年（1236）、幕府と持仏堂などを『若宮大路東頬』に新造する（三月廿日条）。その場所については、高柳光寿は幕府郭内での北方への移動といい（高柳 1959）、松尾剛次は（宇津宮辻子幕府郭外の）『北西寄り』といっている（松尾 1992・1993）。しかし、いずれの主張もそれぞれの比定する宇津宮辻子幕府の位置から推測しているので、先にその点を解決しない限り、若宮大路幕府の位置もまた確定することはない。これについても別稿で何度も書いたので（馬淵ほか 2002，P. 78 ～ 80 など）、ここでは触れない。

調査地点南方約 70ｍの地点 18 では小町大路側溝のすぐ脇で、小町大路ではなく若宮大路に平行した大溝が発見され、『三丈　せきのやまの□□　　宗近』と書かれた木簡も出土した（原 1998）。これは幕府が公共事業を御家人に課役として割り当てた工事区間の表示札であり、従来若宮大路側溝からのみ出土していたものである。この木簡の出土した溝に関しては、小町大路側溝のすぐ脇でありながら、小町大路ではなく若宮大路に平行していること、しかもそこが宇津宮辻子幕府比定地に至近の場所であることから、幕府外郭の側溝である可能性も視野に入れておく必要がある。

小町大路に関しては、近年側溝の調査例が増加しつつある。東側側溝が地点25（原 1996）・27（伊丹ほか 2007）・28（野本 2001）で、西側側溝が上記地点 18 のほか地点 2（菊川 1989ａ）や地点 4（馬淵ほか 2002）などで検出されており、大路幅の復元がようやく可能になってきた。馬淵は地点 4 の調査結果から、かつておよそ 16m という数値を算出したことがある（馬淵ほか 2002，『第四章　まとめと考察』）。しかし、図上復元であるためいまひとつ精度を欠くといわざるをえず、今

回の調査結果であらためて検討したい。

南北朝時代

鎌倉幕府が滅ぶと、関東十ヶ国を統治する鎌倉府が浄妙寺の南東にでき、政治の中心は再び鎌倉時代以前のように、東西山際道路沿いに移行する。南北朝時代以後、当地付近がどうなっていたかは、あまりよくわかっていない。しかし、調査地点南側隣地にある叡昌山妙隆寺は日蓮宗中山門流の鎌倉における拠点であり、重要な施設であると考えられるので、概略をみておきたい。

妙隆寺は小町大路西側にある日蓮宗寺院で、『日蓮辻説法跡』とされる場所の北（八幡宮方向）100mほどにある。一帯は鎌倉幕府の有力御家人であった千葉常胤の子孫胤貞（1288 ～ 1336）の故地（別邸か）と伝え、一般に『千葉屋敷』とも呼ばれている。胤貞は下総に広く保有する領地を積極的に経営し、自家とその氏寺である下総中山法華経寺の勢力を不動のものとしていった。妙隆寺は、胤貞が祖先追福のため至徳二年（1385）七堂伽藍をととのえ、中山法華経寺の日英を開山に迎えて開いたという。しかし、胤貞はすでに建武三年（1336）に没しているので、これはのちの付会ということになる。

日英は、日蓮宗諸門流の激しい争いの中で身延山久遠寺の日叡との論争に勝利し、彼以後中山門流は大いに勢力をのばした。妙隆寺は鎌倉における中山門流の拠点となった。激しい修行で知られる第二代の日親は、室町幕府六代将軍足利義教に、宗祖日蓮に倣い『立正治国論』を建白しようとしたが容れられず、捕らえられて拷問を受けた。そのとき灼熱した鍋を被せられても主張を曲げなかったという。

室町時代以後

調査地点南約 400mの小町大路東側には商業の神である蛭子神社があり、さらに南の『大町四ツ角』近くには町衆の信仰を集めた八雲神社（祇園山王社）がある。室町時代から戦国時代にかけて、一帯は町衆の往来する賑やかな場所であったようである（藤木 1993）。上述妙隆寺のほか、このころから本覚寺（永享八年＝1436 開創）など調査区南方の市内中心部への日蓮宗寺院の進出が顕著になる。

遺跡地および近辺の調査例

これまで『北条小町邸跡』比定地では、縁辺部を中心に 10 数箇所で発掘調査がおこなわれている。近隣の調査も併せ、簡単に成果をみておこう。

若宮大路沿いでは７例があり、いずれにおいても大路の東側側溝が検出された。側溝は何度も改修されているが、鎌倉時代中期以降断面箱型の木枠をもち、掘片幅は大体３mであることが明らかにされている。木枠は、束柱で連結された上下２段の角材によって、側板を固定する構造になっている。鎌倉時代前期に相当する溝は素掘りで、逆台形の断面形状をもつ。溝の内側には大型の柱穴列が見つかっており、柵列の存在が指摘できる。道路側溝と内側の大型柵列という構成は、やはり鎌倉時代前期を中心に若宮大路の両側で確認されているので、当該期のこの付近における特徴的なあり方なのだろう。このあり方は、鎌倉時代中期以降、変質する。すなわち、柵列が姿を消し、それまで断面Ｖ字形あるいは逆台形で素掘りであった溝が、箱形の木枠を持つようになる。

東の小町大路側でも、先述のように側溝が発見されており、若宮大路のそれと同様、箱型の構造をもつ（地点１・３・24）。しかし、両岸が明瞭になった例は少なく、幅など規模は確定的でない。

若宮大路側では溝作事を御家人に課役として割り当てた、当該地点の表示札らしい人名木簡が何例か出土している。地点 10 では『一丈　伊北太郎跡』・『一丈南　くにの井の四郎入道跡』と書かれた２枚が（馬淵 1985）、地点８では『二けん　おぬきの二郎』・『二けん　まきのむくのすけ』・『二

けん　かわしりの五郎』と書かれた３枚が出土した（馬淵ほか 1996）。この種の木簡は、若宮大路西側の地点 45 からも『口二丈　あかき［　］入道』の文字の読めるものが出土している（田代ほか 1990・宗台ほか 1999）。また、小町大路側の地点 18 でも、溝中から『三丈　せきのやまの□□宗近』と書かれた木簡が出土しているのも、先述のとおりである（原 1998）。つまり、若宮大路に限らず、他の大路側溝や大型溝等の作事が、公共事業として御家人役でまかなわれていたことがわかる。

小町大路東側でも近年調査例が漸増しており、本地点の対岸に相当する地点 27 で側溝が検出されている（馬淵ほか 2007）。本地点の調査結果との対比によって、小町大路の幅が明らかになることが期待される。

このほか、本遺跡北東角近くで横大路南側側溝が検出されている（地点 6－菊川 1989ｂ）。ここでは側溝幅は約 1.9m～２mで（報告書掲載図から筆者概測）、本地点で検出されたのと同様の側板構造をもつ。

嘉禄元年と嘉禎二年の御所移転について

二度の御所移転はおそらく地割の変更を余儀なくさせるものであり、調査地点にも多大な影響をおよぼさずにはいなかったはずである。あらためて近年の研究成果を整理しておこう。

嘉禄元年（1225）、北条政子の死の直後、泰時は『御所』移転を計画し、たった二ヶ月で完成させた。この移転について、かつて高柳光寿は『鎌倉市史　総説編』中で、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる『東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈』という数値を宇津宮辻子幕府の大きさと読み誤り、『東西二百五十六丈五尺』が地形に比べて大きすぎることから、『吾妻鏡』筆記者が『五十六丈五尺』に『二百』を書き加えたとした。

高柳のこの意見については、はやくに須藤博史・貫達人らが史料解釈の誤りを指摘している（須藤／貫 1963・貫 1989）。すなわち、この数値が、高柳のいう新御所の大きさではなく、方違えにともなって当時仮御所としていた伊賀朝行亭（『大御堂（勝長寿院）前』）の御寝所からの距離であることを明らかにした。これによれば、朝行亭内御寝所から西に 256 丈 5 尺行き、そこから南に 61 丈下ったところが新御所の乾（北西）の角となる。松尾剛次はこの比定地を図示しており、それにしたがうならば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道（『宇津宮辻子』か）の北側東半部ということになる（松尾 1992・1993）。

須藤・貫・松尾の『吾妻鏡』文言の解釈自体はそのとおりであろう。しかし、松尾の比定した位置は実際の子午線によって東西南北が設定されているため、留保を要する。というのは、川副武胤が指摘したように、中世鎌倉にあっては、若宮大路が子午線とみなされていた可能性が高いからである（川副 1980）。

どちらが子午線と認識されていたか。御所の位置比定の場合は、松尾の想定する伊賀朝行亭の位置にしたがって後者を使うと、鶴岡八幡宮の社頭付近に宇津宮辻子御所の北西角がきてしまい、『吾妻鏡』の関連諸記事と整合しない。実際の子午線を使ったほうが、松尾の図のとおり、都合よくおさまるようにみえるのは確かである。

しかしその一方で、若宮大路を子午線と想定しなければ説明できない場合がある。それは松尾も触れているように（松尾 1992）、小山下野入道生西の『若宮大路家』に対する宇津宮辻子御所と若宮大路御所の位置関係である。

生西の『若宮大路家』は『車大路』にも面していた（『吾妻鏡』安貞二年＝1228　十月十五日条）。つまりその位置は、若宮大路の東側で車大路の北側、すなわち両大路の交差点の北東角になる。そ

して、生西家からみて、若宮大路御所は『正北方』、宇津宮御所は癸の方向にあたるという（注1）。若宮大路は真北から26度40分東に振れているので、もし実際の子午線が用いられていたとすると、若宮大路の『東頬』（嘉禎二年三月廿日条）にあったはずの若宮大路御所は、大路の西側にきてしまうことになる。この位置関係は、若宮大路が子午線に見立てられていなければ成立しないのである。

このように、須藤・貫・松尾らによっていったん決着がついたかにみえた御所移転問題は、肝心の点にいまだ未解決の部分を残している。小山生西の『若宮大路家』と宇津宮辻子・若宮大路両御所の位置関係は、若宮大路を子午線としなければならないことを示唆している。そして、小山生西家の位置は、『大御堂前』というだけの情報しかない伊賀朝行亭に比べ、より確定的である。とすると、当時の測量技術に誤りがなければ、問題の根幹は『大御堂（勝長寿院）前』にあったという伊賀朝行亭の位置にあることがわかる。松尾剛次が勝長寿院のある谷（大御堂ヶ谷）の入り口に比定しているのは、おそらく間違いである。『大御堂前』とはどこか。それは、勝長寿院の伽藍形式に深くかかわる。しかし、もはやそれは本稿の課題を超えていよう。

幕府の移転にともなっては、当然近在の諸屋敷も影響を免れ得なかったであろう。この点については最近秋山哲雄が整理している（秋山1996・1997）。

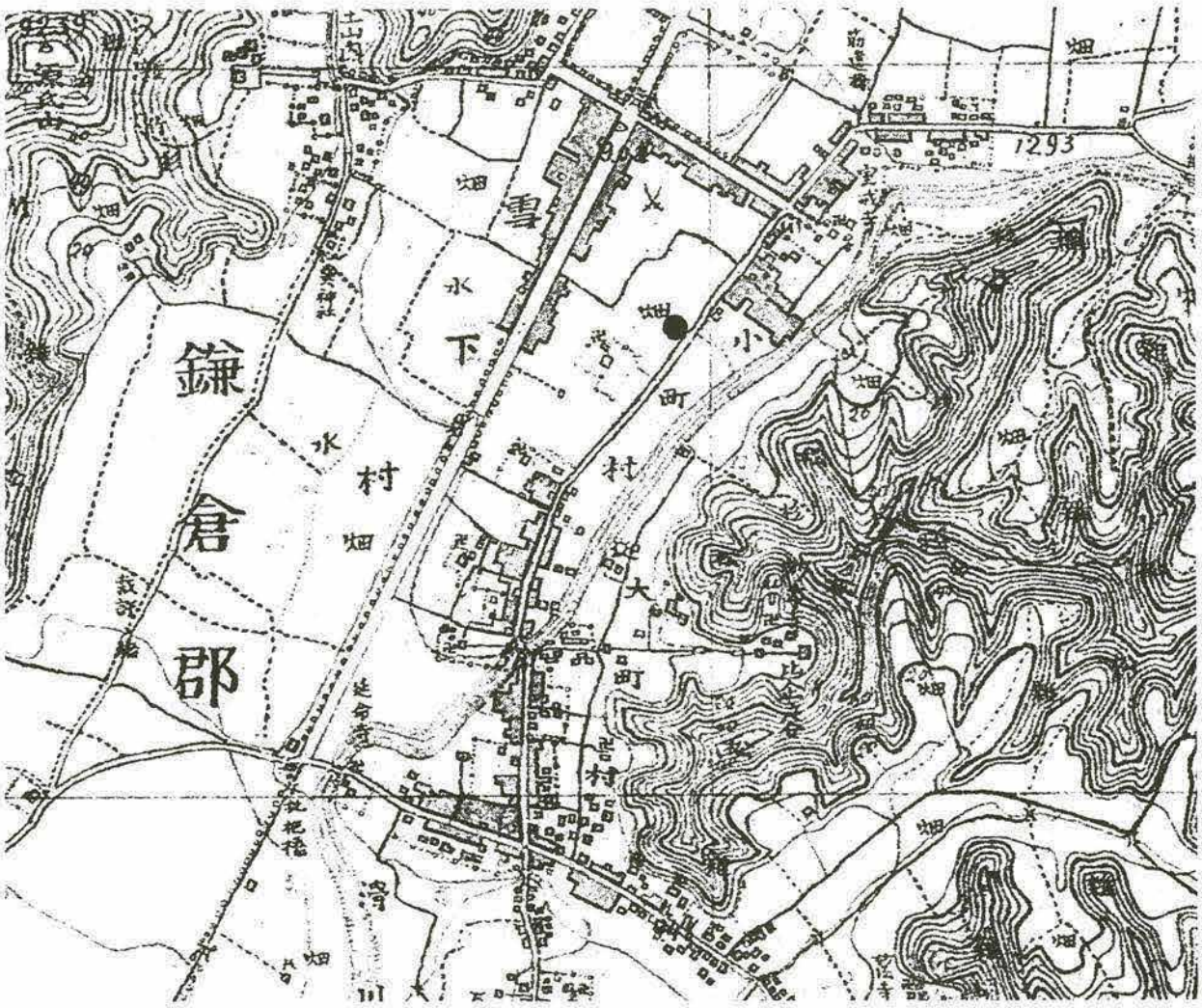


図2　明治15年頃の遺跡付近の状況（迅速測図，黒丸印が調査地点）

秋山によれば、建保元年（1213）頃当遺跡地方形区画の北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉禄元年に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉禎二年の幕府再移転まで当遺跡全体を泰時亭が占めるようになる。この年、『若宮大路の東頬』へ再移転した後、遺跡地は三つに分割される。すなわち南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭がある。秋山は、宝治元年（1247）以後経時亭および泰時亭は合わせて重時に相伝され、一方宝戒寺の地が得宗亭となるという。秋山は時宗以後の当遺跡地については、南半部に幕府を想定し、北域は不明としている。

この説の前半部には汲むべきところがあるが、嘉禎二年の幕府再移転については、基本的に北方向への移動であることを前提としているため、検討の必要があろう。両幕府の位置関係から、若宮大路幕府は宇津宮辻子幕府の北西に位置していなければならないからである。

『吾妻鏡』同年六月二十六日条に、将軍藤原頼経は、宇津宮辻子御所からみて若宮大路御所が、方角のよくない乾方向（北西）に当るのではないかとの疑いを持った、という記事がある。これは結局そうではないことが判明するが、大きくみて北西方面という認識がなければこの疑念は発生しないはずである。とすれば、松尾剛次のいうように、もし宇津宮辻子幕府が若宮大路から小町大路の間の東半分（小町大路側）の区画を占めていたとすると、若宮大路幕府は西半分の北寄りに移転したと考えれば、『吾妻鏡』と矛盾は生じないことを指摘しておきたい。いずれにせよ方形区画内で地割改編があったことは確かであろうから、秋山の意見を参考として挙げておいた。

注1　『吾妻鏡』嘉禎二年（1236）四月四日条に、『（小山下野入道生西の若宮大路家は）為丁方之由』とあり、逆に生西の若宮大路家から宇津宮御所を見れば、癸（丁の反対方向）に相当することになる。

（馬淵ほか2002を大幅に加除筆）

引用・参考文献

秋山哲雄 1996　「御所と北条氏亭」（「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）」特論）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12　鎌倉市教育委員会（以下発行者が鎌倉市教育委員会単独の場合はこれを略す）
秋山哲雄 1997　「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編第9号
須藤博史／貫達人 1963　「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11　鎌倉文化研究会
高柳光寿 1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
田代郁夫 1998　「大町大路と小町大路―中世都市の中の「町」と「路」」『湘南考古学同好会々報』73　湘南考古学同好会
貫達人 1989　「第二章　古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史　近世通史編』吉川弘文館
野口実 1993　「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45　（財）古代学協会
野本賢二 2001　「若宮大路周辺遺跡群―小町二丁目402番5地点―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
原廣志 1996　「北条高時邸跡―小町三丁目426番3地点―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
原廣志 1998　「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会・市教委
藤木久志 1993　「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』11号　神奈川地域史研究会
松尾剛次 1993　『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
馬淵和雄 1994　「武士の都　鎌倉―その成立と構想をめぐって―」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社
馬淵和雄 1987　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
馬淵和雄 1998　「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
馬淵和雄 1998　『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
馬淵和雄 1999　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄 2002　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18（第2分冊）
馬淵和雄 2003　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目401番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』
馬淵和雄 2008　「大倉幕府周辺遺跡群（№49）の発掘調査―雪ノ下天神前562番30地点―」『第19回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか 1996　「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）　雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
馬淵和雄・伊丹まどか 2007　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目409番9外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23（第2分冊）

第２章　調査の概略

１．　調査にいたる経緯

雪ノ下一丁目 440 番の一部において個人専用住宅建設の事前相談があった。鋼管杭打ちをともなう基礎工事を実施する計画で、埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのあることが予想された。そのため確認調査を実施した結果、小町大路側溝と思われる溝や中世遺物など良好な埋蔵文化財が確認された。それを踏まえ事業者と協議をおこなったところ、当初の計画どおりに工事を実施したいという意向が示され、それにともなう遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、平成 16 年１月 16 日から発掘調査を開始した。

２．調査方法

調査時の測量は便宜上、街区に合わせて任意に設定した方眼を使用した。小町大路上の国土座標４級点（TO42・TOC0001・C0002）を基点にして調査地点の座標を計測した後、測量方眼を座標系に変換したものを本書に掲載した。調査区はＸ－74 631 ～ 76 641、Ｙ－24 942 ～ 24 952（エリア 9）の区域内に位置する。

３．調査の経過

調査は平成 16 年１月 15 日～同年２月 19 日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり

１月 15 日（木）　重機による表土掘削。
１月 20 日（火）　側溝１を含む中世面の掘り上げ後、撮影と実測
１月 31 日（土）　側溝３を含む中世面全景撮影と実測。
２月 11 日（水）　側溝６を含む中世面全景撮影と実測。
２月 17 日（火）　側溝７を含む中世面全景撮影と実測。
２月 18 日（水）　土層図実測、座標値測量など。
２月 19 日（木）　機材撤収。調査完了。　（鍛治屋）

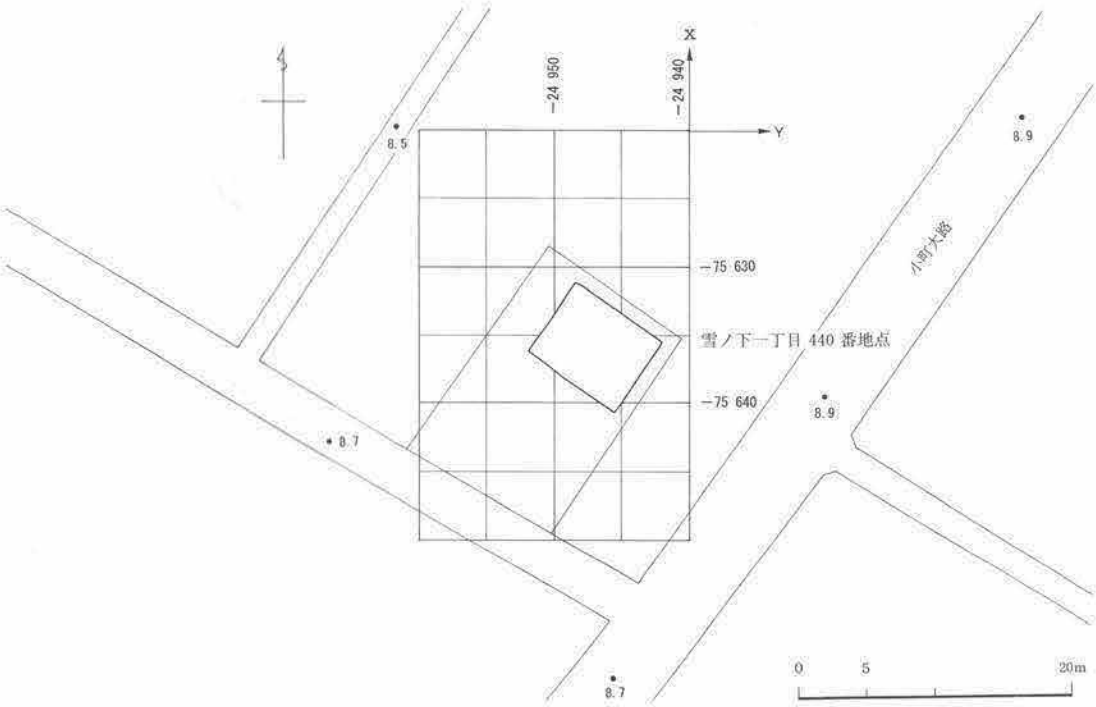


図３　調査区設定図

第３章　調査結果

第１節　層序と面の概要

１．　基盤層の状況

若宮大路を中心とした鎌倉市の中心街は、全体的に海岸から僅かずつ高まっていく。若宮大路東側では大町四つ角付近が丘陵状になっていて 7.4mほどの高さをもつが、夷堂橋にかけて 5.4m辺りまで下った後はふたたび緩やかに高まっていく。調査地点東の小町大路の海抜は約 8.8m、北約 250mの宝戒寺門前では約 10mまで上っている。

調査地点の地表高は 8.9mで、80cm ほどの厚さの近・現代土に覆われている。この表土を除くと、すぐに茶褐色の基盤粘質土層と中世遺物を含んだ遺構が現れる。海抜約 8.2m前後である。この状況は近・現代に基盤層まで削り取られたことを示している。同様の状況は「北条小町邸」内の小町大路沿い調査地点に共通して認められ、60mほど北の地点２（雪ノ下一丁目 432 番２地点）で 100m北の地点４（雪ノ下一丁目 400 番１地点）では表土下に基盤層が確認されている（基盤層標高は前者が 8.25m、後者が 8.05m）。

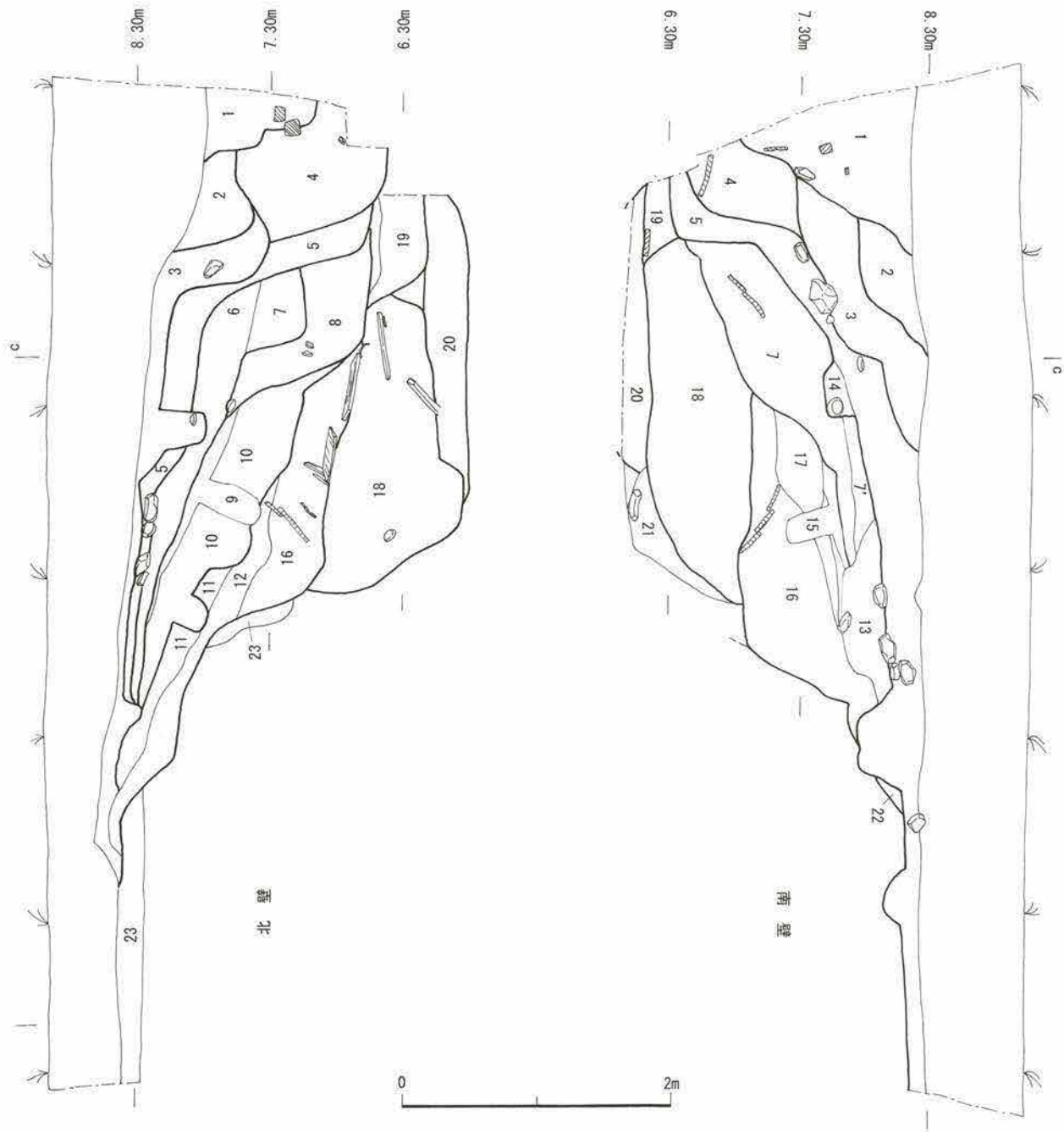
しかし一方、本地点から至近の位置にあっても、過去の調査では小町大路東側の平坦部では顕著な削平は認められない。本地点とは大路を挟んで対面位置にある地点 27（小町二丁目 409 番９ほか地点）、およびその南隣で本地点東南 30mの位置にある地点 28（小町二丁目 402 番５地点）の調査例では、平坦部の表土下にいずれも厚さ 50cm を超える中・近世包含層が残っている（馬淵 2007，図４・野本 2000，図 4）。両地点においては、平坦部での基盤層標高は、前者が 8.5 ～ 8.6m、後者が 8.1 ～ 8.2mで、近世から近代にかけてのある時期に、大路側溝以西では上部層が大きく削られていることが土層断面図で確認できる。以上の状況は、削平が要するに小町大路を中心としておこなわれたことを示している。この辺は畑地となっていたのだろうか。

２．小町大路側溝と平坦面のあり方

調査区内の東側半部を小町大路西側の側溝らしい大溝が占めており、生活面は西半部にしか見られない。側溝東岸は東側の調査区外にあって現れていない。大路側溝は古いものほど西寄りに位置しており、最古期のものだと調査区全体の３分の２に達する（図 26 側溝断面模式図参照）。したがってこの時期にあって、基盤層の露頭は調査区西側の３分の１に過ぎない。側溝は時代を下るにつれ東に移行し、平坦部分もそれとともに拡がる。そのため新しい溝の西肩は、おおむねその前代の堆積土中に構成されることになる（図４参照）。またそれにともない、柱穴などの遺構確認範囲も基盤層上から次第に東方向に拡張されることになる。

小町大路側溝と確認される溝が少なくとも７条検出できたが、すべて上部を削り取られており、それにともなう生活面もほとんどが失われている。したがってほぼ同一の面上で柱穴等を検出することとなり、側溝との組み合わせを見出すのは容易でない。ここでは側溝を５時期に分け、平坦部の遺構のうち、位置や切合い、また埋土などから同時存在と判断したものを組み合わせて提示する。判断の具体的根拠については各説で述べる。

土層断面については、調査区全体に関して図４を、小町大路側溝に関しては溝の個別図を参照してほしい。



1. 側溝１
2. 側溝２
3. 側溝３
4. 側溝４
5. 側溝５
6. 暗茶褐色砂質土
7. 側溝６埋土
8. 側溝６裏込め
9. 土師器集中部３及び柱穴埋土
10. 暗青灰色粘質土
11. 黄褐色泥岩層
12. 暗茶褐色粘質土～暗灰褐色粘質土～明茶褐色繊維質土
13. 土坑埋土
14. 柱穴埋土
15. 柱穴埋土
16. 側溝７
17. 炭化層
18. 側溝８
19. 側溝９
20. 側溝 10
21. 地山崩土
22. 焼土
23. 落込み埋土

側溝個別の詳細については第２節を参照

図４　調査区壁土層断面図

第2節　各説

1．　小町大路側溝1･2と関連遺構（図5）

調査区西半部では表土直下に基盤層が露われるが、東半部3分の2ほどはそれがなく、位置と方位などから、全体として小町大路西側側溝であると判断した。基盤層の切れ目から東の小町大路方向になだらかに傾斜しており、調査区東壁まで2m前後のあたりからは急な落ちとなる。位置と方向からみて、これが小町大路西側の上層側溝であることは間違いない。溝は平行して2条検出され、側溝1・2と名づけた。層位的には最も新しい一群であるが、近代に上部が深く抉られている。東壁寄りの側溝1が同2を切る。北半部では2に切られた溝肩も見えており（図4土層断面図土層番号6）、側溝の作り直しが何度にもおよんだことがうかがえる。

先述の通り、側溝1・2はいずれも肩の部分が2mあまりの幅で平坦部より一段落ちた形になっている。溝枠を支える何らかの施設の可能性があるが、上部が失われて本来の深さが不明なため、性格もまたわからない。

調査区西南域に、小町大路側溝に直交する幅1m前後の東西溝が検出された（「溝1」）。上部の大半が失われて10cmほどの深さしか残っていないが、側溝1・2と共通の埋土を持ち、また全遺構の中で層位的にも後出であるため、ともなう可能性が高いと判断した。

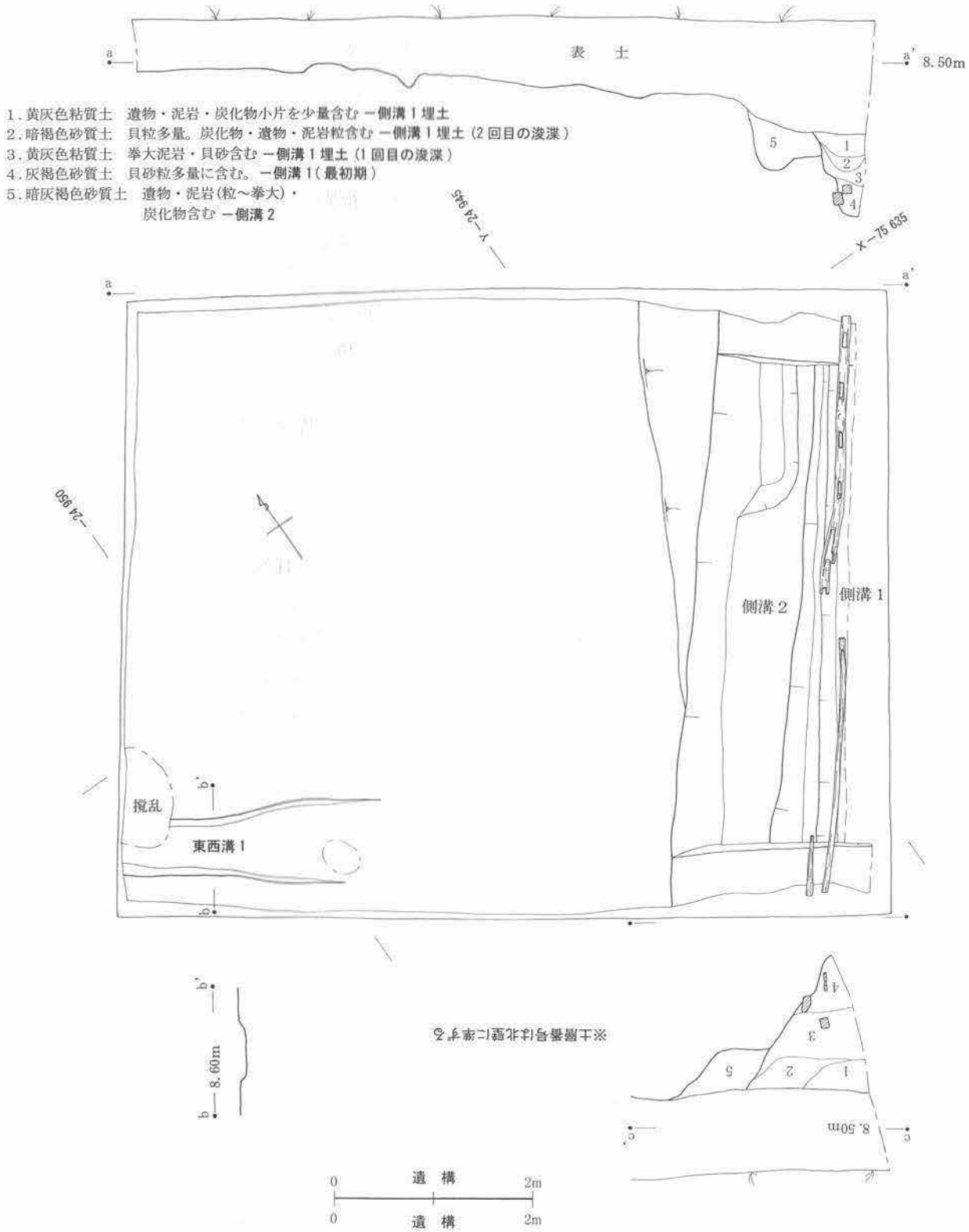
検出高：8.1～8.5m　構成土：明茶褐色粘質土（基盤層）・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色砂質土・破砕泥岩地行　検出遺構：小町大路側溝2条・東西小溝1条

なお以下で「深さ」としたのは、直近の平坦面からの計測値である。

側溝1（図　5）

位　置：X－75 634～－75 641　Y－24 942～－24 947　**規　模**：東西幅122cm以上×深さ143cm以上（最下面標高約6.74m）　**断面形**：（逆台形）　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：（N－38.5°－E）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝2を切る　**出土遺物**：（側溝2と一括）土師器皿T種（1）・土師器皿R種（2～6）・白色系土師器皿T種（7）・瀬戸（8）・青白磁碗（9）　**特記事項**：調査区東壁沿いに南北に走行する溝の西側掘り方を検出した。下端付近には護岸の部材とみられる根太がある。根太は調査区内で2本が縦位置に並び、北側のものにはホゾ穴があるが、南側のものにはない。ホゾ穴のある根太の検出高は7.2m前後、幅約10cm×厚み約10cm×長さ184cm以上（北側は調査区外）、ホゾ穴のない根太は検出高7.4m前後、幅約6cm×厚み約11cm×長さ160cm以上（南側は調査区外）。南側の根太にホゾ穴のない理由はわからないが、前代にこの位置には橋があり、その点で構造が他と異なっていた可能性はある。ホゾ穴の根太を含む側溝は、雪ノ下一丁目400番1地点（図1地点4）にもみられる。こちらは大路西側溝の掘り方、東肩部分を検出した。雪ノ下一丁目400番1地点の側溝2は主軸方位：N－39°－E、底面高約7m、根太の検出高7.2m前後、本地点の側溝1と共通する。また雪ノ下一丁目432番2地点（図1地点2）のトレンチ調査でも同様の根太が出土している。これらの根太自体は規格において若干の差異がみられるが、その軸線を延長すると根太の間隔が約3mとなる。これらを同時期の小町大路側溝とすれば、若宮大路側溝と同規格の溝が存在していたことになる。

次述の側溝2と区別できていないが、遺構年代は13世紀後半～14世紀前半、すなわち鎌倉時代後期いっぱいを充てたい。



側溝1・2出土遺物

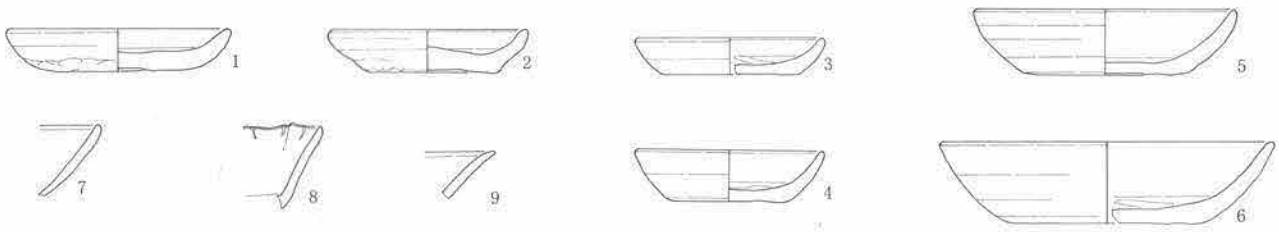


図5　遺構全図（1）—側溝1・2と関連遺構，同出土遺物

側溝2（図5）

位　置：X－75 634～－75 640　Y－24 942～－24 948　**規　模**：東西幅100㎝以上×深さ85cm以上（最下面標高約7.42m）　**断面形**：（深皿形）　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：（N－39°－E）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝1に切られる　**出土遺物**：（側溝1と一括）　**特記事項**：肩の部分が平坦部から一段落ちさらに一段の落ちがある。側溝1より70cmほど浅い溝。側溝に据えられた木枠などの控えにかかわる施設か。その場合は側溝1との関連も視野に入れておきたい。

年代は側溝1に準じるが、層位上いくらか早く終焉することになる。

東西溝1（図5）

位　置：X－75 635～－75 640　Y－24 944～－24 952　**規　模**：最大幅85㎝×深さ11cm以上（最下面標高8.26m）　**断面形**：浅皿形　**流下方向**：西→東　**主軸方位**：N－56.5°－W）　**出土遺物**：図化可能遺物なし

有効な出土遺物を欠くので年代を判断しにくいが、側溝1・2と同時存在だとすればそれに準拠する。

2．小町大路側溝3と関連遺構（図6）

側溝2を除くと、下に別の側溝が現れる。ほとんどが2に削り取られ残存部は少ないが、埋土と控えの束材などの様子から別の側溝と認識し、「側溝3」とした。また先の側溝1・2関連遺構と検出高は変わらないが、位置と側溝中の束材などとの関連が推測される遺構をここにまとめた。ただし、平坦面の遺構は削平によってすべて同一面（基盤層上）で検出されたため、柱穴の中には本来層位的に下位に属していたものでもこの期に含めた可能性は低くない。側溝3西岸には部分的に泥岩を粗く敷いた地行がみられ、直上に土師器皿を中心とした遺物が集中的に出土している。比較的生活面に近い状況が残存しているものの、各遺構との関連については詳細不明である。

また西域には東西に平行した2条の溝が通じており、その間には幅3m弱の平坦面がある。この平坦面の延長上の大路側溝中には、橋脚の可能性のある石も見られる。すなわち、2条の溝の間が道路であった可能性が指摘できる。

検出高：8.1～8.4m　構成土：明茶褐色粘質土（基盤層、1と同じ）　検出遺構：小町大路側溝1条・東西小溝2条・小穴61口（うち建物1、柱穴列1～3の柱穴含む）

側溝3（図6･7）

位　置：X－75 634～－75 640　Y－24 942～－24 948　**規　模**：東西幅120㎝以上×深さ103cm以上（最下面標高約7.50m）　**断面形**：（逆台形）　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：（N－37°－E）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝1に切られる　**出土遺物（図7）**：土師器皿T種（1～3）・土師器皿R種（4～7）・常滑山茶碗（8）・瀬戸灰釉卸皿（9）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（10）・平瓦（11）

特記事項：これも二段落ちの構造となっている。側溝2の護岸の裏込め部分の可能性も残るが、上部が大きく削れられて全容がつかめないので、何ともいえない。溝中には、流水方向に直交する横木と、それを固定するためのものとみられる杭が並んで出土した。厳密な規格は認められないが、長さ80～90㎝、幅5～10㎝弱で、側溝の構造を考えると木組の束柱が水流側に傾かないよう設置した護岸の跡とみたい。若宮大路側溝をはじめ、鎌倉市内遺跡の護岸跡ではこのような「控え貫」「控え横木」とよばれるものが頻繁に発見されるが、規模だけではなく構造上も、小町大路側溝は若宮

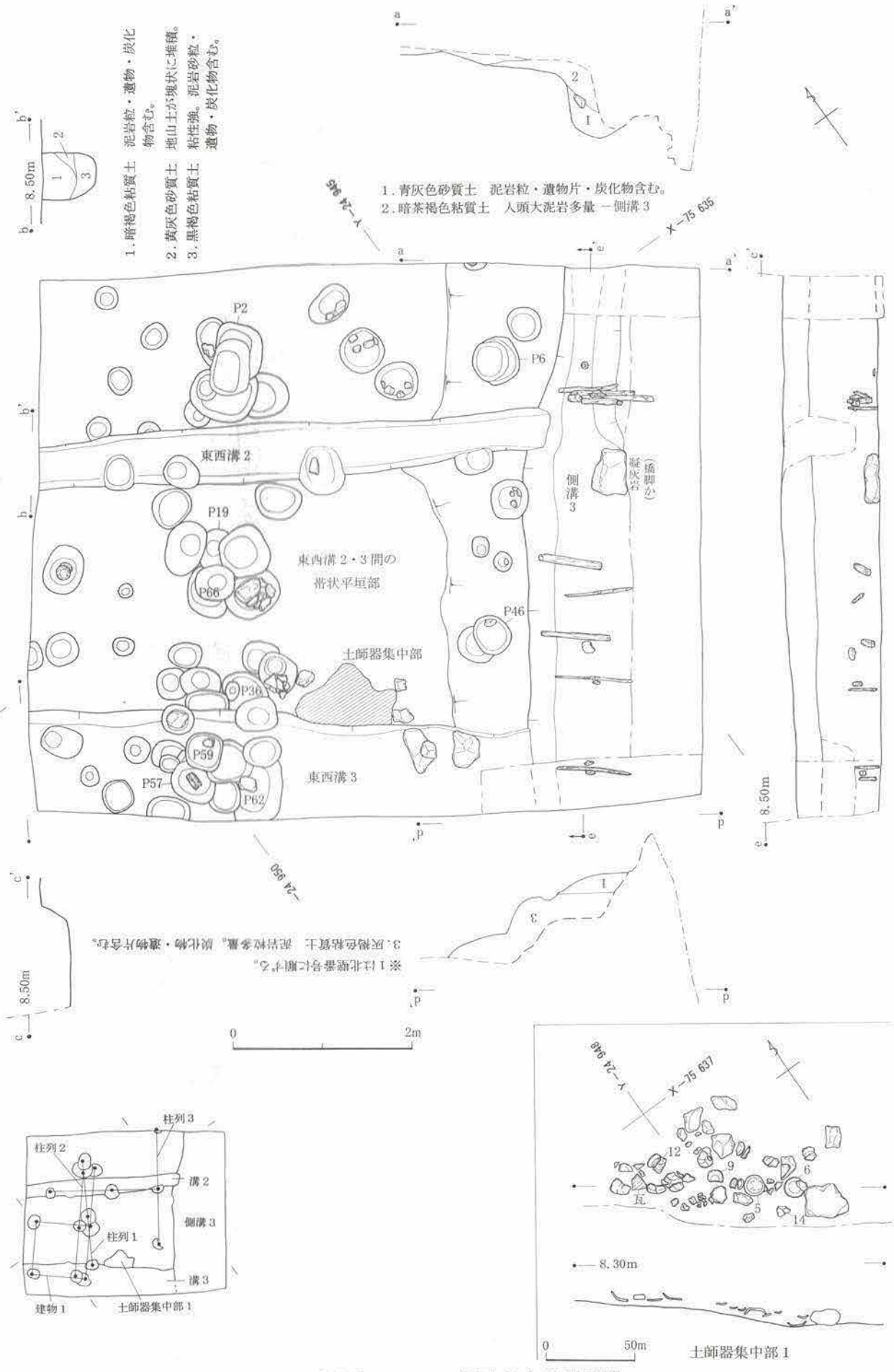


図6　遺構全図（2）―側溝3と関連遺構

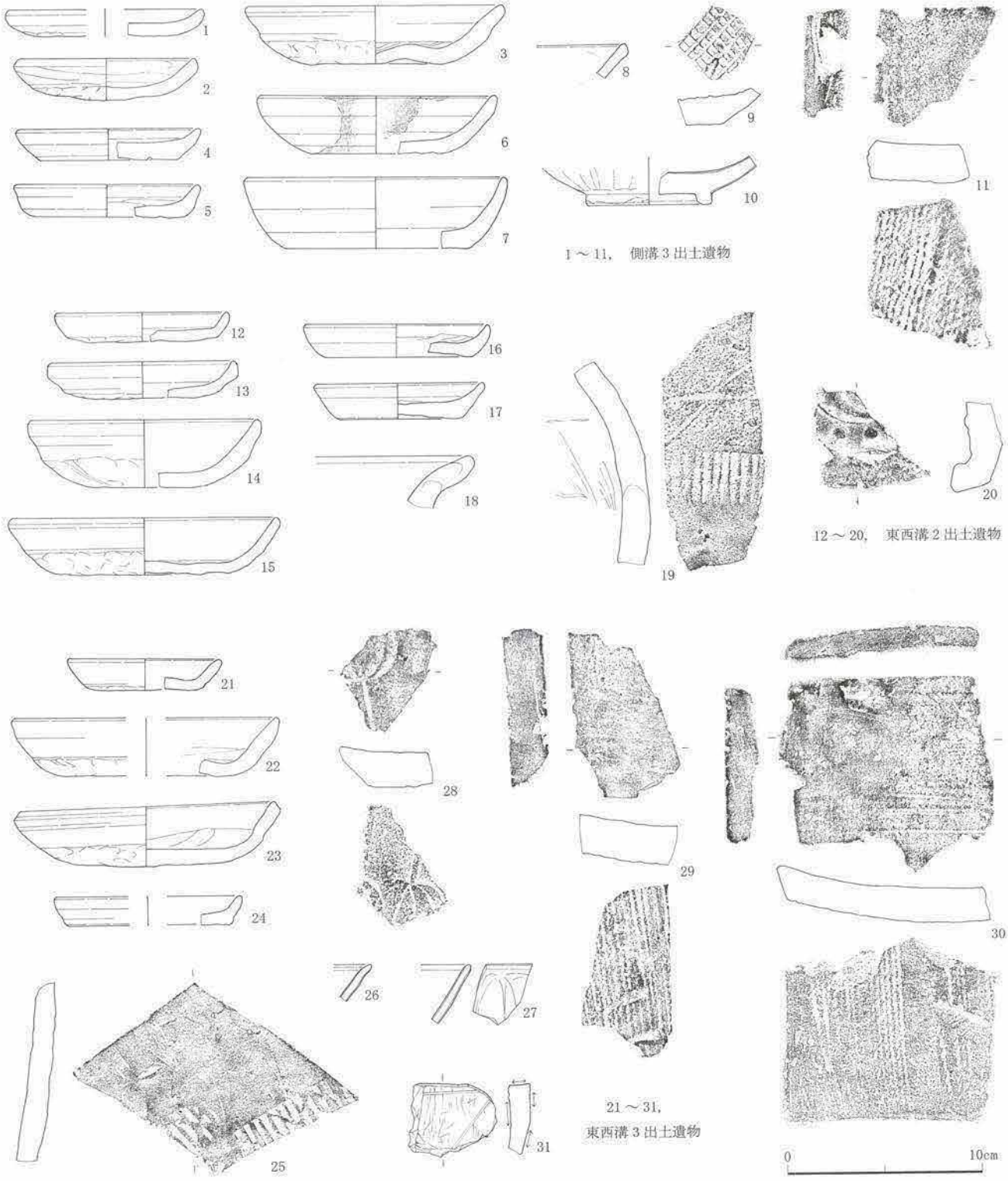


図7　側溝3・東西溝2・東西溝3出土遺物

大路のそれと共通している。溝底のやや北寄りに1辺50㎝におよぶ凝灰岩があり、付近にはこれ以前から橋脚の存在が指摘できることから（側溝6・7期、図12・18）、この石も橋脚の礎石である可能性を視野に入れておきたい。

出土遺物には土師器皿T種が多く、またR種でも器高低く底径・口径比の小さい13世紀第2四

半期～中葉のものも同様に多い上、常滑山茶碗（8）などもみられる。複弁の青磁鎬連弁文碗（10）などが含まれているとはいえ、全体的には13世紀第2四半期～中葉の年代を示している。

東西溝2（図6・7）

位　置：X－75 634～－75 640　Y－24 944～－24 950　**規　模**：南北幅68㎝以上×深さ62cm以上（最下面標高約7.34m）　**断面形**：箱形　**流下方向**：西→東　**主軸方位**：N－58°－W　**充填土**：図に記載　**重複関係**：柱穴列3を切り、側溝3に切られる。　**出土遺物（図7）**：土師器皿T種（12～15）・土師器皿R種（16・17）・渥美甕（18・19）・軒丸瓦（20）　**特記事項**：側溝3にほぼ直交する小溝。上部を失っているが、大路側溝へ排水するためのものと推測される。次述の東西溝3とは3m弱の間隔で平行する。

出土遺物には土師器皿T種が多く、渥美甕なども含まれているところから、本址の年代を13世紀前半としたい。

東西溝3（図6・7）

位　置：X－75 634～－75 640　Y－24 946～－24 952　**規　模**：南北幅128㎝以上×深さ53cm以上（最下面標高約7.54m）　**断面形**：（逆台形）　**流下方向**：西→東　**主軸方位**：（N－53°－W）　**充填土**：暗褐色砂質土　**重複関係**：側溝3・建物1・柱穴列1・2に切られる。　**出土遺物（図7）**：土師器皿T種（21～23）・土師器皿R種（24）・渥美甕（25）・白磁口はげ皿（26）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（27）・平瓦（28～29）・滑石鍋転用品（31）　**特記事項**：溝2とは約3mを隔てて平行しており、同じく側溝3とは直交している。溝2との間に道があったのか、あるいは、位置的にみて遺跡南辺を画する道の北側側溝である可能性もあろう。前者であればやや狭い印象を受け、側溝としてもいずれも近在の同一遺跡内地点5で見つかった東西溝に比べ規模が小さすぎる。後者とすれば、溝2との間に土塁ないしは築地のような施設の存在を考慮することもできる。

本址の年代は、土師器がT種主体で13世紀前半とみたいところだが、13世紀中～後半の竜泉窯青磁鎬連弁文碗・白磁口はげ皿も含む点を勘案して、13世紀第2四半期～第3四半期としたい。

東西溝2・3間の帯状平坦部（図6）

位　置：X－75 633～－75 639　Y－24 944～－24 956　**規　模**：幅（南北）318cm×長さ560cm　**断面形**：ほぼ平坦　**特記事項**：2本の東西溝に挟まれた平坦な部分。延長上の小町大路側溝3底面に平たい凝灰岩があり、これを橋脚の礎石と考えれば本址を道路とすることができる。この位置には断続的とはいえ前代まで橋が確認されているので、この石をそう考えるのは無理ではない。

年代は、次述の土師器集中部1が同一遺構と考えられるので、その遺物から13世紀前半代としたい。

土師器集中部1（図6・8）

位　置：X－75 637～－75 639　Y－24 947～－24 949　**規　模**：東西約150㎝×南北約80㎝　検出高：8.2～7.9m　**重複関係**：東西方向の溝3に切られる　**出土遺物（図8）**：土師器皿T種（1～7）・土師器皿R種（8～14）・渥美甕（15）・平瓦（16）　**特記事項**：側溝3西岸の粗い泥岩地行上に土師器を中心とした遺物片が集中的に出土した。大路側溝に向かって緩やかに傾斜し、遺物もその斜面上に載る。位置的には上記東西溝2と3の間の帯状平坦部中におさまる。あるいは道路かとも推測される帯状平坦部にかかわる祭祀かもしれない。

年代は広く13世紀前半代といっておきたい。

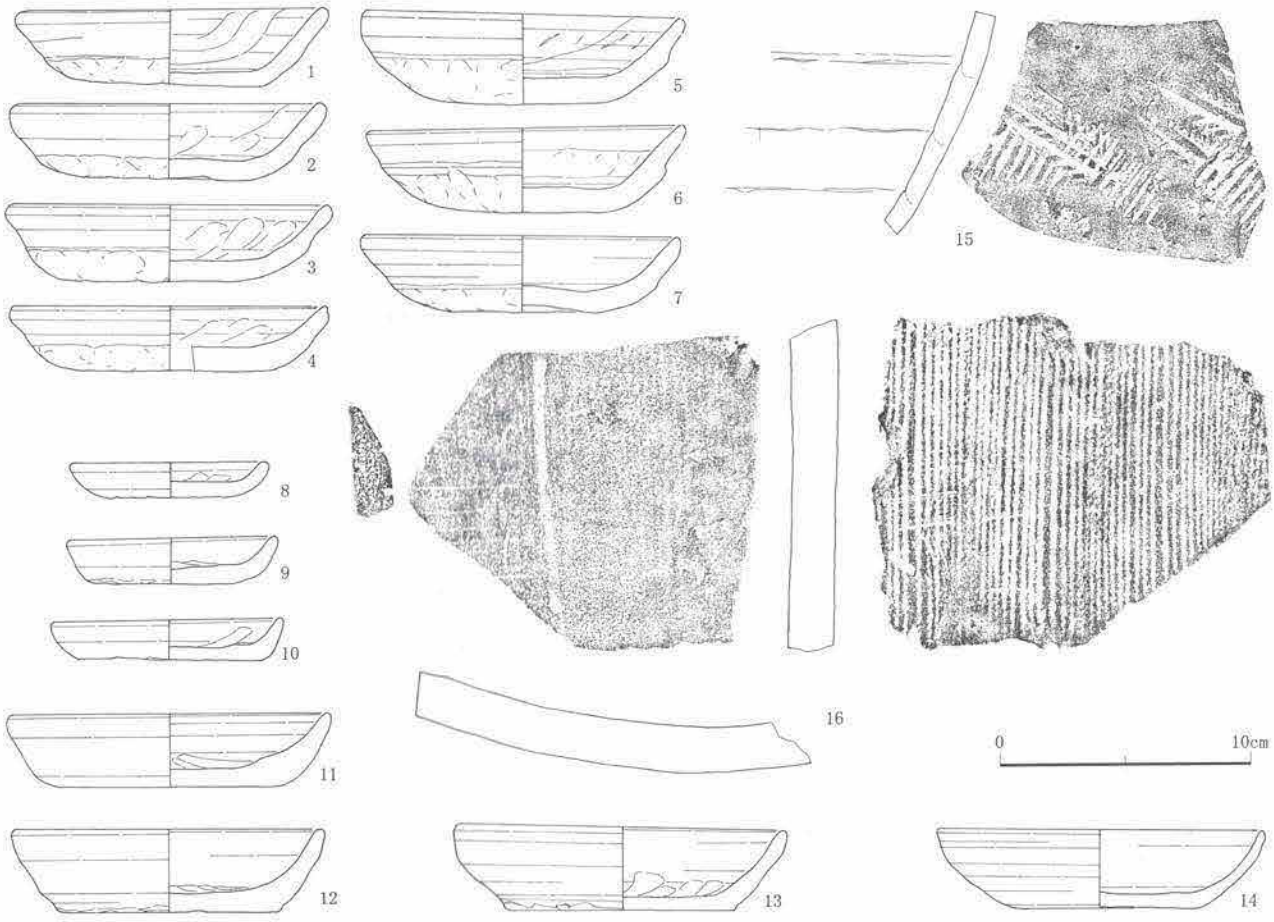


図 8　土師器集中部 1 出土遺物

建物 1（図 9）

位　置：X－75 633 ～－75 638　Y－24 946 ～－24 952　**規　模**：東西 1 間（柱間距離 2.02m）× 南北 2 間（柱間距離 2.01m）・柱穴底面高 7.73m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－40°－E　**重複関係**：溝 4 を切り、柱穴列 1・2 に切られる　**出土遺物**：土師器皿 R 種（1・2）

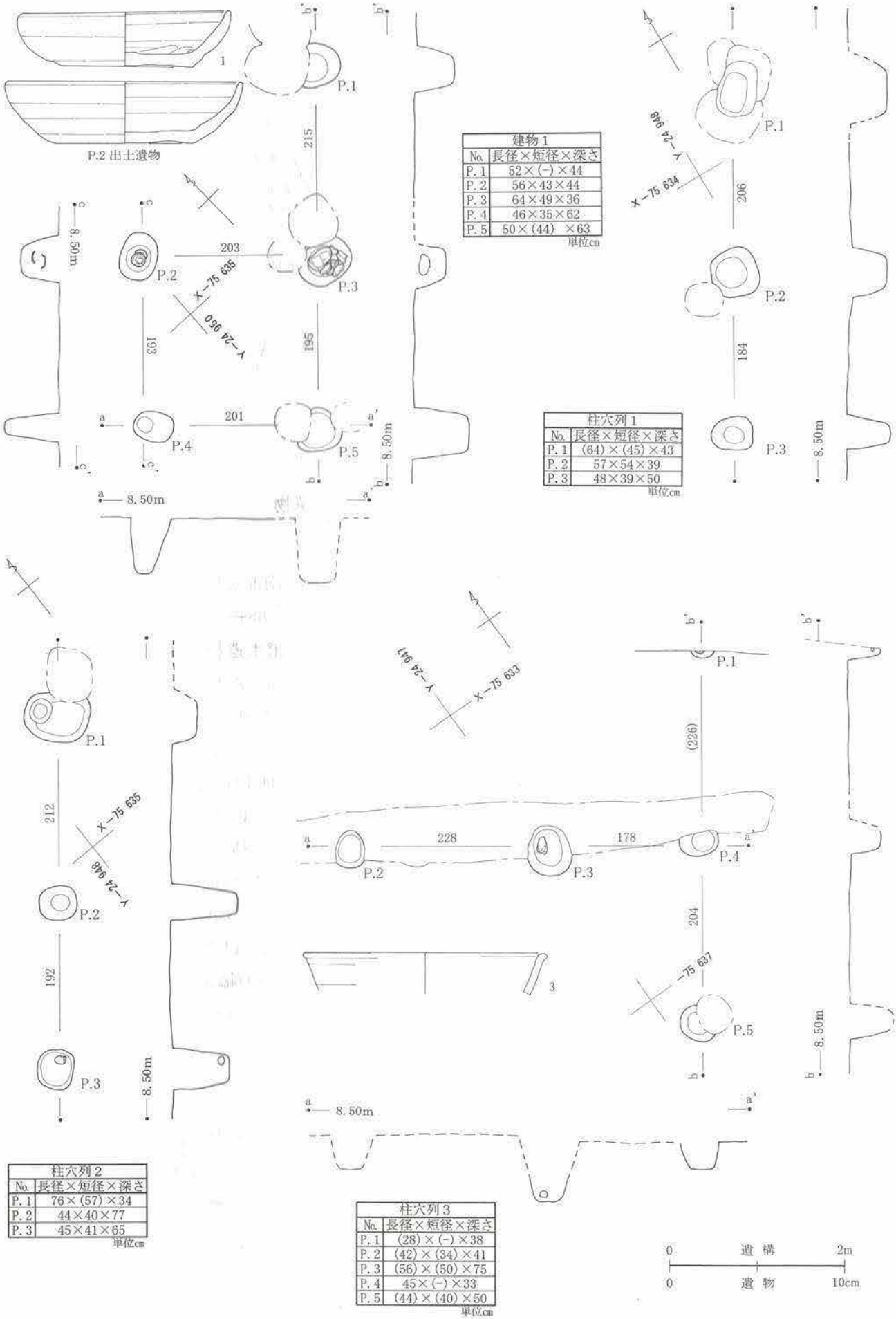
特記事項：側溝 3 と並列して存在していた施設で、柱穴は比較的深く残っている。P.2 は充填土内に土師器が 2 枚、口を合わせるように埋納されていた。

柱穴列 1（図 9）

位　置：X－75 633 ～－75 637　Y－24 946 ～－24 950　**規　模**：南北 2 間（柱間距離約 1.95m）柱穴底面高 7.69m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－30.5°－E　**重複関係**：建物 1・柱穴列 2・溝 4 を切る　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：側溝 3 から約 3m 西に位置する。軸線が溝と若干異なるが、形状の共通した柱穴が並んでいるので、柱穴列として抽出しておく。建物や塀などが考えられるが、いずれにせよ南東角の一部を捉えたものであろう。

柱穴列 2（図 9）

位　置：X－75 633 ～－77 637　Y－24 946 ～－24 951　**規　模**：南北 2 間（柱間距離 2.02m）柱穴底面高 7.63m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－38.5°－E　**重複関係**：建物 1・溝 4 を切り、柱穴列 1 に切られる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：軸線は側溝 3 や建物 1 と並ぶ。位置的には柱穴列 1 と重なっていることから、1 と同種の遺構としてよかろう。



建物1	
No.	長径×短径×深さ
P.1	52×(-)×44
P.2	56×43×44
P.3	64×49×36
P.4	46×35×62
P.5	50×(44)×63

単位cm

柱穴列1	
No.	長径×短径×深さ
P.1	(64)×(45)×43
P.2	57×54×39
P.3	48×39×50

単位cm

柱穴列2	
No.	長径×短径×深さ
P.1	76×(57)×34
P.2	44×40×77
P.3	45×41×65

単位cm

柱穴列3	
No.	長径×短径×深さ
P.1	(28)×(-)×38
P.2	(42)×(34)×41
P.3	(56)×(50)×75
P.4	45×(-)×33
P.5	(44)×(40)×50

単位cm

図9　建物1・柱穴列1～3，同出土遺物

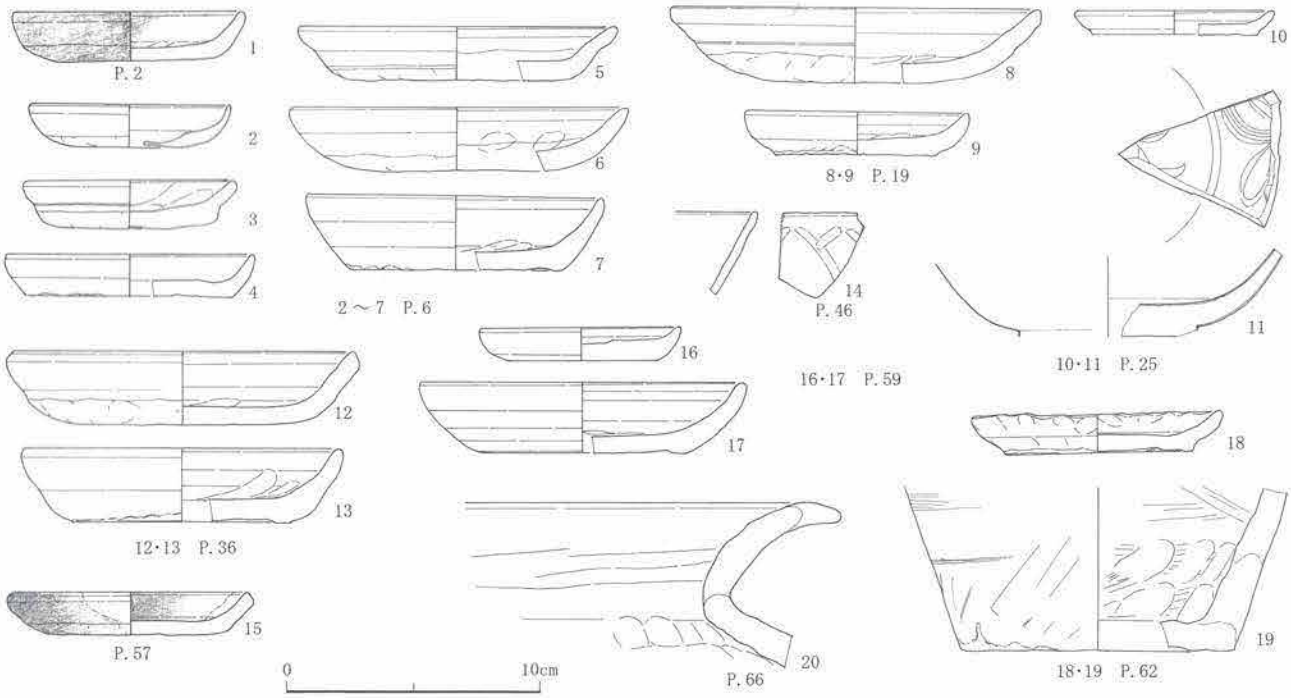


図 10　遺構全図（2）内落込み出土遺物

柱穴列 3（図 9）

位　置：X－75 633～－77 638　Y－24 944～－24 949　**規　模**：南北 2 間（柱間距離約 2.15m）柱穴底面高 7.77m×東西 2 間（柱間距離約 2.03m）柱穴底面高 7.68m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－35°－E　**重複関係**：溝 2 に切られる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：側溝 3 と直交する溝 2 と軸を同じくするＴ字状の柱穴列。形状や柱間距離など、ほかの柱穴列とは異なる。南北軸は側溝 3 まで約 40 ㎝しかないが、性格は不明。

柱穴等その他落込み（図 9·10）

出土遺物（図 10）：〔P. 2〕土師器皿 T 種（1）〔P. 6〕白色系土師器皿 T 種（2）·土師器皿 T 種（3·5·6）·土師器皿 R 種（4·7）〔P. 19〕土師器皿 T 種（8）·土師器皿 R 種（9）〔P. 25〕土師器皿 T 種（10）·竜泉窯青磁画花文碗（11）〔P. 36〕土師器皿 T 種（12）·土師器皿 R 種（13）〔P. 46〕竜泉窯青磁連弁文碗（14）〔P. 57〕土師器皿 T 種（15）〔P. 59〕土師器皿 R 種（16·17）〔P. 62〕土師器皿 R 種（18）·常滑壷（19）　**特記事項**：大雑把に年代だけ指摘しておきたい。13 世紀中葉まで下る可能性がある P. 59 出土の R 種土師器皿 2 点を除き、提示した遺物のほとんどは 13 世紀前半代までに収まる。P. 46 出土の 14 も、竜泉窯青磁連弁文碗ではあるものの鎬を持たない幅広連弁で、これも 13 世紀第 2 四半期の前半までにはおそらく終焉を迎えているものである。この一群の出土遺物年代観は 13 世紀前半としてよい。

3．小町大路側溝 4·5 と関連遺構

側溝 1·2·3 を掘り上げると、その下の調査区東壁近くに 2 条の溝が現れる。東壁寄りの新しい方を側溝 4、その 4 に切られて西岸しか残っていない方を 5 とした。ただし 2 条は切り合ってはいるが、接する領域が非常に小さく、新旧の判断が不安定であることを否定しない。ここでは断面に

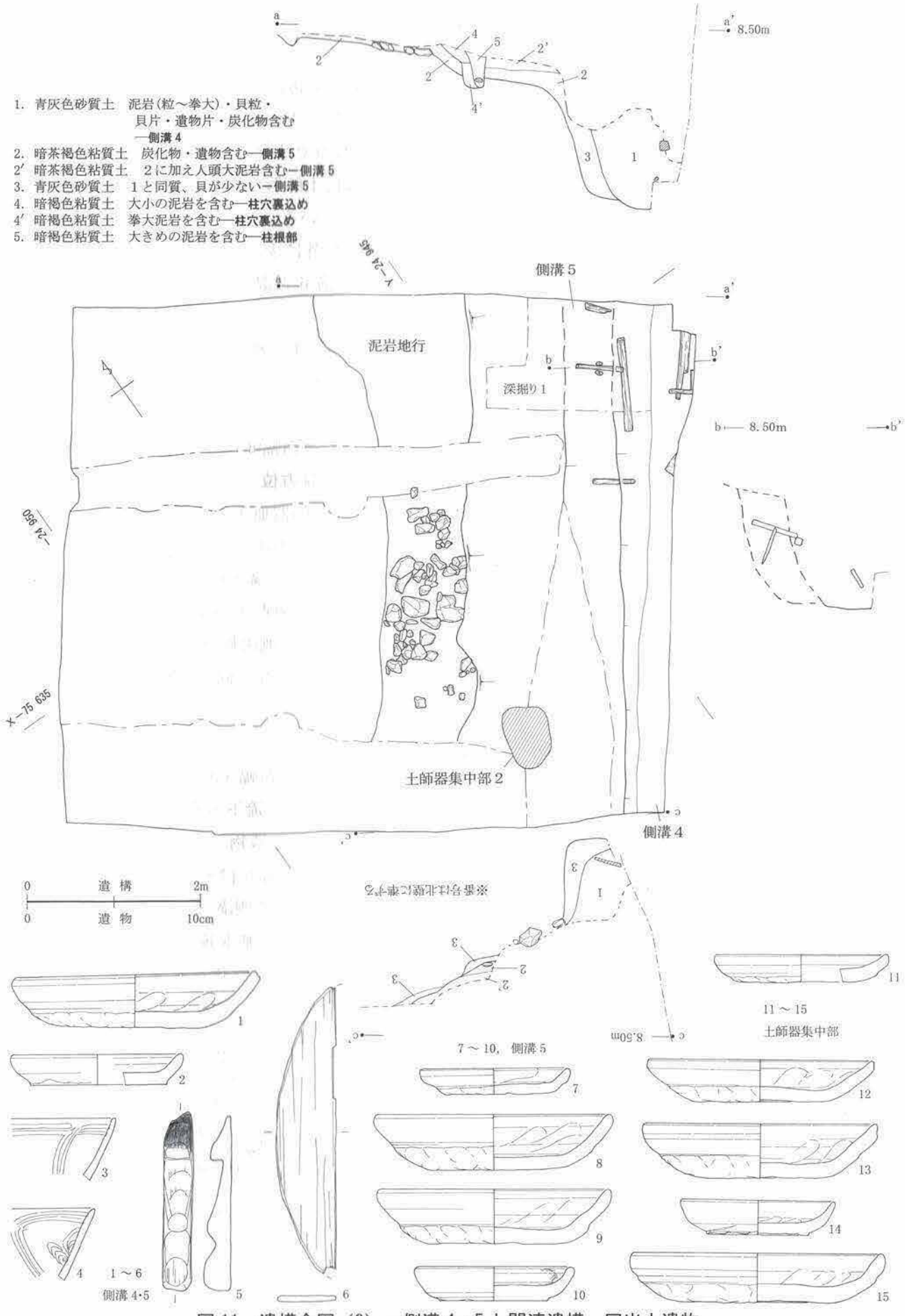


図11　遺構全図（3）―側溝4・5と関連遺構，同出土遺物

みえる全体的な堆積土の流れで判断した。この点は今後本地点前後の側溝資料の増加によって、正確な判断を求めていきたい。

西岸には 1mあまりの幅で、拳大～半人頭大泥岩の粗い集積が認められる。この付近の上層には側溝 3 に伴うとみられる泥岩の集積もあったが、本址は側溝 3 の下に潜っていくので、時期的に別遺構と判断した。ただしこのことは遺構の継続性を否定するものではない。また側溝以外の遺構(建物や柱穴列など)との関連性は不明である。側溝5の落ち際には、土師器皿の集中した場所があり、「土師器集中部 2」とした。これは後述する側溝 6 埋土の上に載っている。

なお側溝 5 は側溝 3・4 に大半が削り取られ、残存部分が意想外に少ない。当初そのことについての認識が不足していたため、掘削作業中に出土遺物が下層の側溝 6 と混じってしまう事態が生じた。それらの遺物については後述する。

検出高:7.9 ～ 8.4m　構成土:明茶褐色粘質土 (基盤層)・泥岩地行土　検出遺構:小町大路側溝 2 条・土師器集中部 1

側溝 4 (図 11)

位　置:X－75 634～－75 640　Y－24 942～－24 947　**規　模**:東西幅96㎝以上×深さ195cm 以上(最下面標高約 6.20m)　**断面形**:(逆台形)　**流下方向**:北→南　**主軸方位**:(N－33.5°　－E)　**充填土**:図に記載　**重複関係**:側溝 5 を切る　**出土遺物**:(側溝 5 と一括) 土師器皿 T 種 (1)・土師器皿 R 種 (2)・竜泉窯青磁画花文碗 (3・4)・木製紡織機部材 (5)・円盤状木製品 (6)　**特記事項**:上半部を失ってもなお平坦部から 2m近い深さがあり、若宮大路側溝に匹敵する。溝の西半部しかとらえられなかったが、底面標高から推測して雪ノ下一丁目 400 番 1 地点 (図 1 地点 4) の「側溝 3」に相当する可能性が高い (底面標高は約 6.65m)。軸線を延長させて計測すると側溝幅は約 3mになる。

遺構年代は、2 点の竜泉窯青磁画花文碗の存在、土師器皿 T 種の存在と同 R 種の形状から、13 世紀前半と考える。

側溝 5 (図 11)

位　置:X－75 634～－75 640　Y－24 943～－24 947　**規　模**:東西幅 60 cm以上 × 深さ (平坦面から) 95cm 以上 (最下面標高約 7.50m)　**断面形**:(現存部は皿形)　**流下方向**:北→南　**主軸方位**:(N－34°　－E)　**充填土**:図に記載　**重複関係**:側溝 4 に切られる　**出土遺物**:土師器皿 T 種 (7～9)・土師器皿 R 種 (10)　**側溝 5・6 出土遺物 (図 13)**:先述のように側溝 5 は側溝 3・4 に削られて残存部分が少なく、当初その点についての認識不足から出土遺物が下層の側溝 6 と混じってしまう事態が生じた。ここでは合わせて提示する　土師器皿 T 種(1～5)・土師器皿 R 種(6～9)・渥美甕(10)・平瓦 (11)・不明木製品 (12)・円盤状木製品 (13・14)・棒状木製品 (15)・ヘラ状木製品 (16) **特記事項**:先の側溝 3 と同じ、裏込め部分にある控え材とそれを固定する杭を持つ。側溝 4 の護岸施設か。

年代は側溝 4 と同じく、13 世紀前半とする。

土師器集中部 2 (図 11)

位　置:X－75 638～－75 639　Y－24 946～－24 948　**規　模**:東西約 54 cm × 南北約 72 cm　検出高 7.5～7.7m　**出土遺物**:土師器皿 T 種 (11～14)・土師器皿 R 種 (15)　**特記事項**:粗い泥岩面が西岸から側溝に向かって緩やかに下る、その傾斜地に土師器小片が集中的に出土した。先の集中

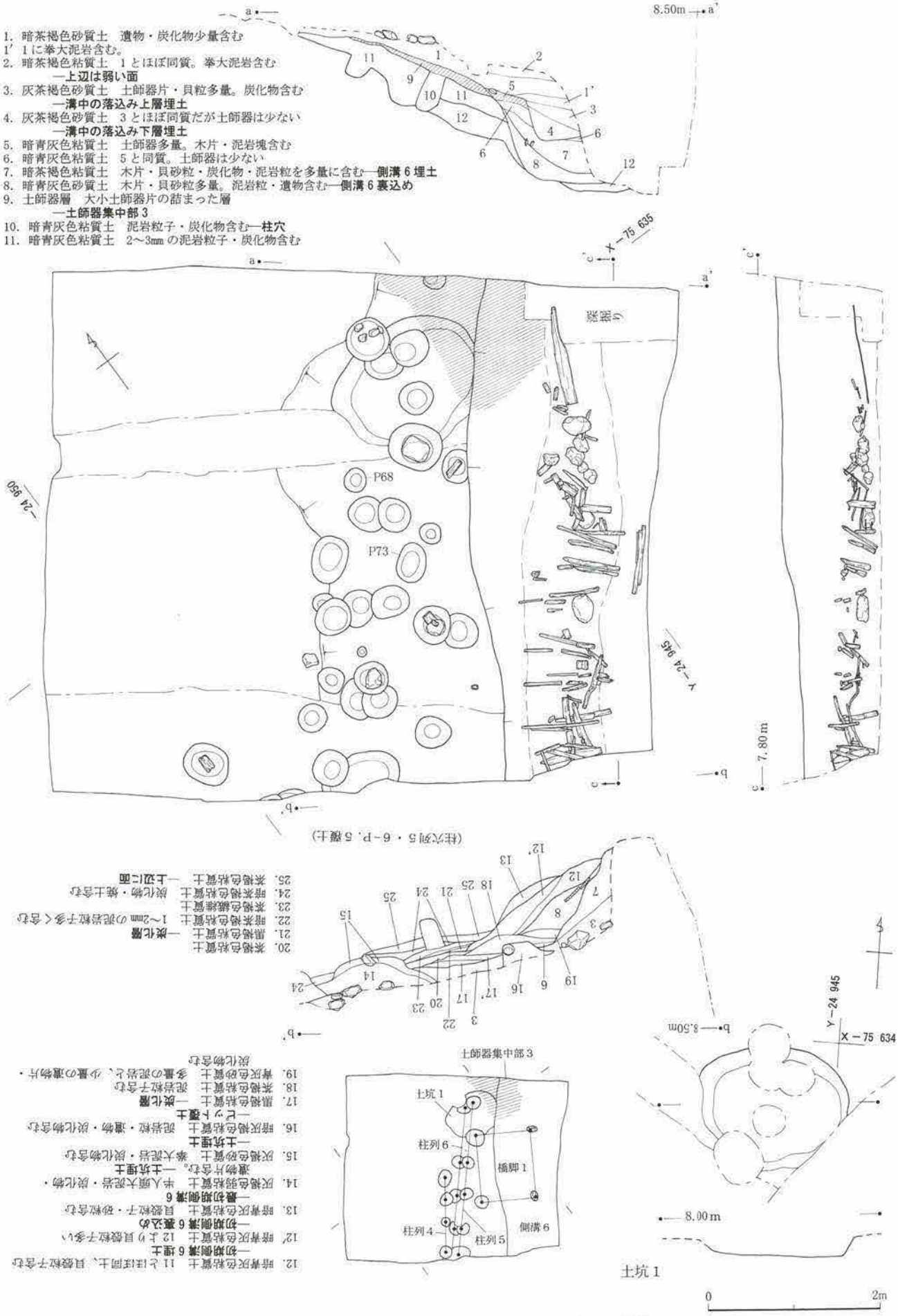


図12　遺構全図（4）—側溝6と関連の遺構

部１とは検出高が異なるが、同じ泥岩面直上で検出されているので、連続性が認められる。ただし、側溝６・７の埋土上にあるので、確実にそれより新しい。

年代は土師器皿Ｔ種の形状から判断して、13 世紀前半に属するとしてよい。

４．小町大路側溝６と関連遺構（図 12）

側溝 4・5 の西岸部から東へと傾斜している泥岩地行を取り除くと、土師器を大量に含んだ土が現れる。土師器は特に調査区北側に集中（土師器集中部 3）し、南側は炭が多量に含まれていた。それらの土を取り除くと、人頭大～半人頭大泥岩を多く含む層となる。この層は、上面にいくつかの柱穴様の穴が掘り込まれ、東に向かって傾斜している。そして 2mほどで急な落ちとなり、小町大路側溝本体となる。これを側溝 6 とした。ここでは側溝 6 と、泥岩含有層からの遺構をあわせて提示する。すでに遺構全図 2（図 6）に載せた調査区西側の遺構群にも本期と同時期のものが含まれている可能性は否定できないが、西側は削平によりすべて基盤層での検出になるため、時期を特定することができなかった。またこの層では、柱穴と溝中礎石の組み合わせから橋脚とみられる

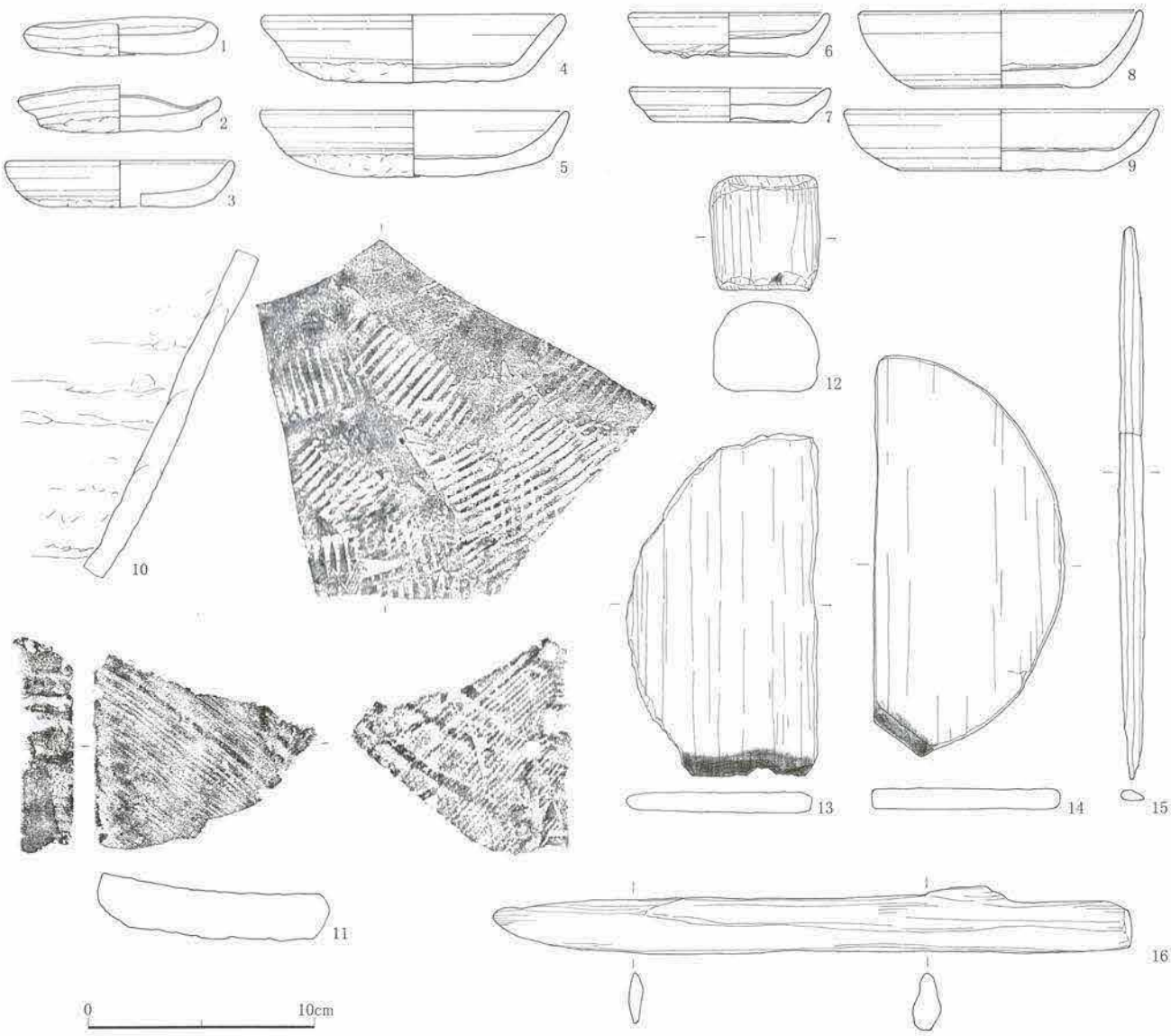


図 13　側溝 5・6 出土遺物

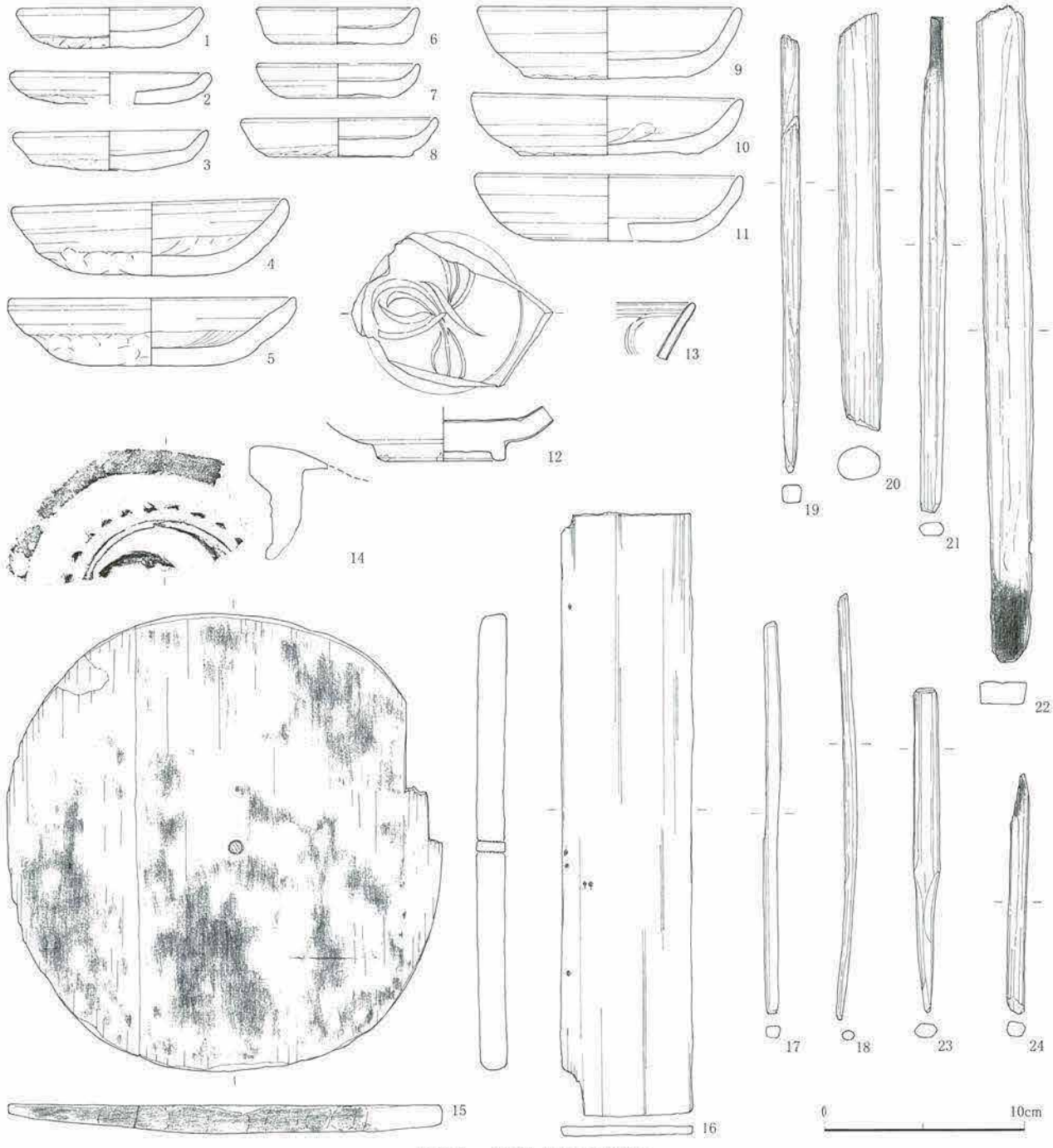


図 14　側溝 6 出土遺物

遺構も検出されている。

検出高：7.6 ～ 8.4m　構成土：明茶褐色粘質土（地山）・泥岩地行土・暗褐色砂質土　検出遺構：小町大路側溝 1 条・土坑 1 基・小穴 29 口（うち橋脚 1、柱穴列 4 ～ 6 の柱穴を含む）

側溝 6（図 12 ～ 14）

位　置：X－75 634 ～－75 640　Y－24 943 ～－24 948　**規　模**：東西幅 180 ㎝以上 × 深さ（平坦面から）208cm 以上（推定最下面標高約 6.45m）　**断面形**：（箱形？）　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：（N－30°　－E）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：土坑 1 を切る　**出土遺物（図 14）**：土師器皿 T

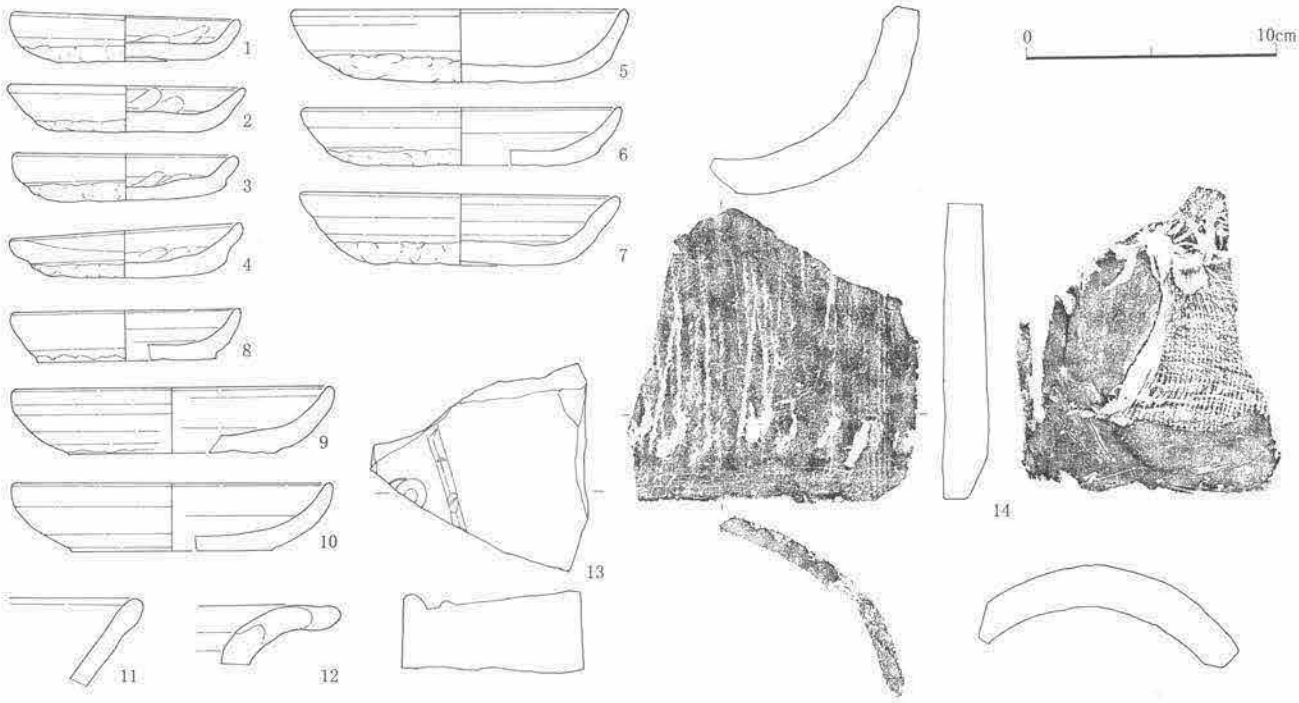


図 15　側溝 6 西岸上出土遺物

種（1 ～ 5）・土師器皿 R 種（6 ～ 11）・竜泉窯青磁画花文碗（11・12）・軒丸瓦（14）・円盤状木製品（15）・折敷（16）・棒状木製品（19 ～ 24）**側溝 5・6 出土遺物（図 13）**：当初の遺物取り上げの際、側溝 5 についての認識不足から混乱が生じた。この遺物については側溝 5 の項参照。　**特記事項**：安全性の確保から掘削途中で南北両端および東側の壁断面を階段状に縮小したため、土層断面図に断絶が生じている。本址は調査区西側の基盤層上の平坦面から約 2 m強、西岸際から約 1.4mの深さがあり、これは若宮大路側溝に匹敵する。図 12 土層№8 の下面に溝底が形成され、さらに下に落ちていくことが確認できたが、その先は階段状に狭めた東の調査区外に出て、全体の幅や形状は確認できない。別の側溝と考えるべきかもしれない。側溝 6 は 5 に比べ全体的に 0.7mほど西に移動している。溝中には橋脚の基礎とみられる礎石や、溝木枠部材の束や横板などが多数残る。出土遺物からみた本址の年代は、土師器皿 T 種の多さとともに、同 R 種における器高の低さと底径：口径比の小ささ、同じく全体にがっしりとして薄手深皿器形の前段階のものである点、さらには竜泉窯の青磁画花文碗 2 点の存在など、全体的に 13 世紀第 2 四半期の様相を呈している。

側溝 6 西岸出土遺物（図 15）

出土遺物：土師器皿 T 種（1 ～ 7）・土師器皿 R 種（8 ～ 10）・常滑片口鉢 I 類（11）・渥美甕（12）・鬼瓦（13）・丸瓦（14）　**特記事項**：西岸にかなりの遺物が廃棄されているのは、ここがおそらく地表面に出ていたからと考える。

年代は、瓦 2 点がいずれも永福寺 I 期であること、土師器皿 T 種の多さ、さらに同 R 種も器高が低く口径：底径比の小さいことなど、全体に 13 世紀前半の様相をもっている。やはり側溝 6 と同時期の 13 世紀第 2 四半期とみるのが妥当であろう。

土師器集中部 3（図 16）

位　置：X－75 633 ～－75 636　Y－24 944 ～－24 946　**規　模**：東西約 150 cm × 南北約 150 cm　検

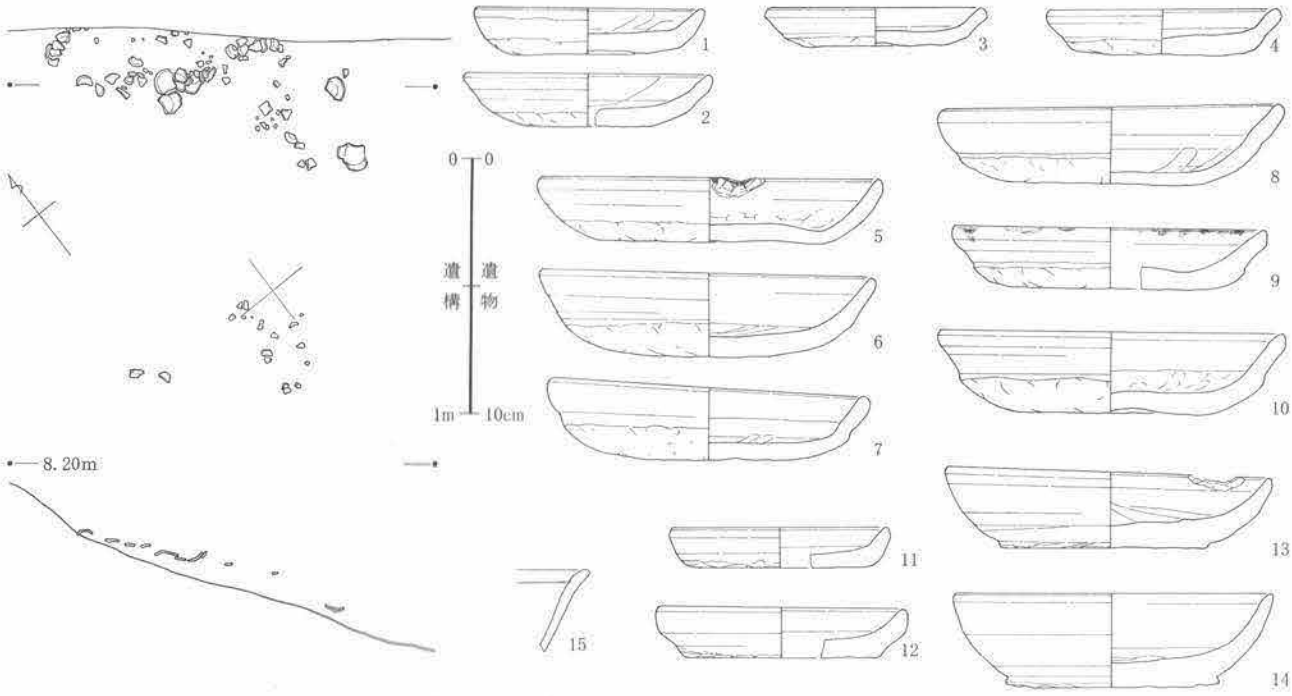


図 16　土師器集中部 3，同出土遺物

出高 7.6 ～ 7.9m　**出土遺物**：土師器皿 T 種（1 ～ 10）・土師器皿 R 種（11 ～ 14）・竜泉窯青磁画花文碗（15）　**特記事項**：側溝 6 西岸の緩やかな傾斜から側溝 6 の上層にかけて、かなり広範囲に土師器が散在する。東側は小さめの掘り直し（図 12 北側土層図土層№3・4）に切られており、側溝 6 の埋没期もしくは改修時に形成されたものだろう。開渠当初のものとは考えにくい。

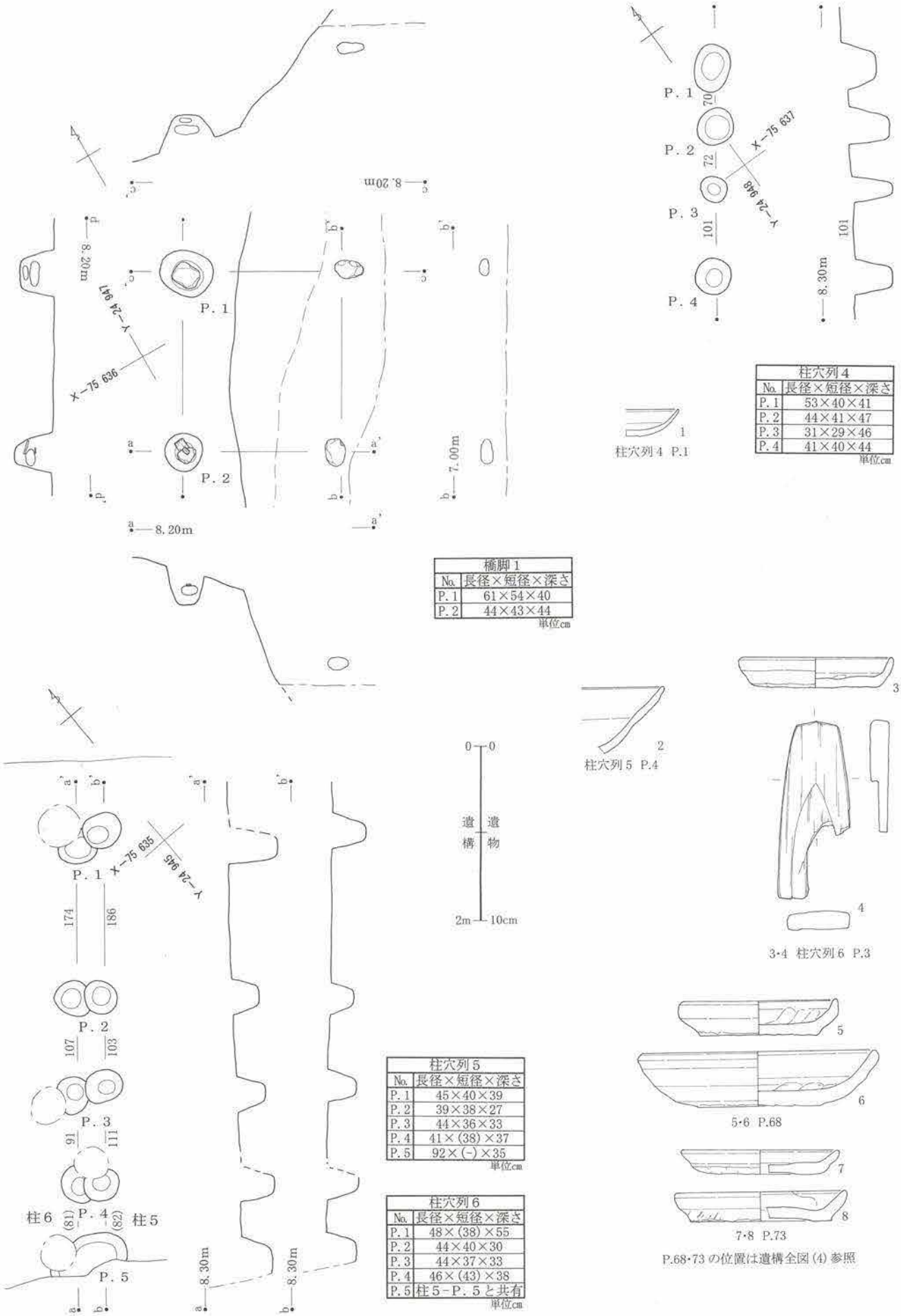
出土遺物の様相は側溝 6 のそれと共通しており、年代的にも同時期とみてよい。

橋脚 1（図 17）

位　置：X－75 635 ～－75 639　Y－24 944 ～－24 948　**規　模**：東西 1 間（柱間距離 1.84m）× 南北 1 間（柱間距離 2.08m）・柱穴底面高 7.38m・礎石高 6.7m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－30°－E　**重複関係**：土坑 1 を切る　**出土遺物**：関連遺物と特定できるものなし　**特記事項**：側溝 6 西岸の緩傾斜面上にある柱穴と溝内にある礎石の軸線が一致することから、これらを橋脚の基礎と認識した。この付近には前代の側溝 7 の段階（次述）ですでに橋とおぼしい礎石や礎板の列があるので、本址を橋脚とすることに無理はない。側溝西岸の緩斜面に 1 脚、溝底面に 1 脚を据えた構造となる。柱穴内礎石と溝内礎石との間隔は芯々で 1.84m。東側は調査区内では見えないが、溝底面の礎石については、これのみとすれば溝の中心に置かれていた可能性が高いとみたい。仮に東にもう 1 脚あったと想定すれば、溝中の礎石から 1m の地点で側溝上端幅は若宮大路と同規模のほぼ 3m に復元され、それ以上の幅は考えにくい。溝内の礎石の海抜高は 6.7m で、護岸材の一部も付近に多く残っている。

柱穴列 4（図 17）

位　置：X－75 635 ～－77 638　Y－24 947 ～－24 950　**規　模**：南北 3 間（柱間距離 0.81m）柱穴底面高 7.55m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－35°－E　**重複関係**：柱穴列 5・6 を切る。　**出土遺物**：青白磁小皿（1）　**特記事項**：側溝 6 に並列する。橋脚関連遺構か？柱穴列 5・



柱穴列4	
No.	長径×短径×深さ
P. 1	53×40×41
P. 2	44×41×47
P. 3	31×29×46
P. 4	41×40×44

単位cm

橋脚1	
No.	長径×短径×深さ
P. 1	61×54×40
P. 2	44×43×44

単位cm

柱穴列5	
No.	長径×短径×深さ
P. 1	45×40×39
P. 2	39×38×27
P. 3	44×36×33
P. 4	41×(38)×37
P. 5	92×(−)×35

単位cm

柱穴列6	
No.	長径×短径×深さ
P. 1	48×(38)×55
P. 2	44×40×30
P. 3	44×37×33
P. 4	46×(43)×38
P. 5	柱5−P. 5と共有

単位cm

図17　橋脚1・柱穴列4～6，同出土遺物

6と同類であろう。

柱穴列5（図17）

位　置：X－75 634～－77 639　Y－24 945～－24 950　**規　模**：南北4間（柱間距離1.20m）柱穴底面高7.52m(平均)※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－40°－E　**重複関係**：土坑1・柱穴列6を切る　**出土遺物**：東遠系山茶碗（2）　**特記事項**：橋脚関連遺構か？柱列4・6と同類遺構であろう。

柱穴列6（図17）

位　置：X－75 634～－77 639　Y－24 945～－24 950　**規　模**：南北4間（柱間距離1.15m）柱穴底面高7.56m(平均)※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**:N－40°－E　**重複関係**:土坑1を切り、柱穴列5に切られる　**出土遺物**:土師器皿T種(3)・舟形木製品(4)　**特記事項**:柱穴列5の作り直しか、補強のためのものか、規模もほぼ共通している。

土坑1（図12）

位　置：X－75 634～－75 636　Y－25 944～－24 947　**規　模**：東西172 cm以上×南北142cm×深さ約26cm(最下高7.50m)　**平面形**:(楕円形)　**断面形**:皿形　主軸方位:(N－85.5°－E)　**重複関係**:側溝7を切り、側溝6・橋脚1・柱穴列5・6に切られる。土師器集中部3が上に載る　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：側溝6西岸の緩斜面に検出された浅い穴。この位置の下層には側溝7の溝枠と礎板があり（次述）、それとの関連も推測されるが、詳細は不明。

P.68 出土遺物（図17）

出土遺物：土師器皿R種（5・6）　**特記事項**：位置的には橋脚関連遺構の可能性がある。小型の5は体部中位が垂れ気味に外に膨らむ、鎌倉時代初期に多い形状を備える。大型の6は底径よりもかなり内側にロクロ糸切りの範囲が収まっており、これも鎌倉時代前期に多い特徴をもつ。

年代については、13世紀前半以前に帰属すると考えてよい。

P.73 出土遺物（図17）

出土遺物：土師器皿T種（7）・土師器皿R種（8）　**特記事項**：これも位置からいって橋脚関連の柱穴であろう。T種・R種とも小型。8は口径：底径比がきわめて小さく、鎌倉時代初期～前期に多い特徴を備える。

年代は13世紀前半までとみたい。

5．小町大路側溝7と関連遺構（図18）

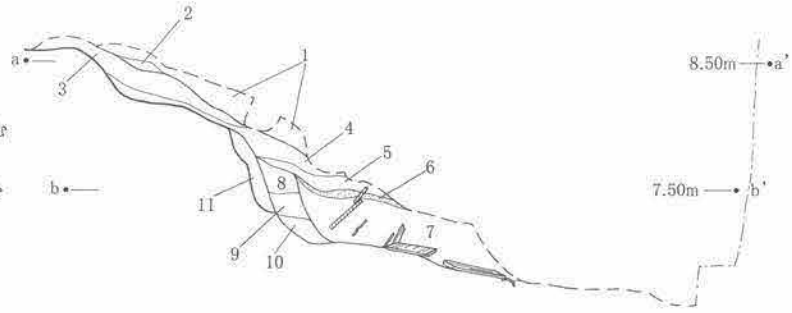
側溝6西岸の泥岩層を掘り下げると、古い溝があらわれ、これを側溝7とした。位置は側溝6より西へ2m近くずれ、調査区の半分ほどにもおよぶ

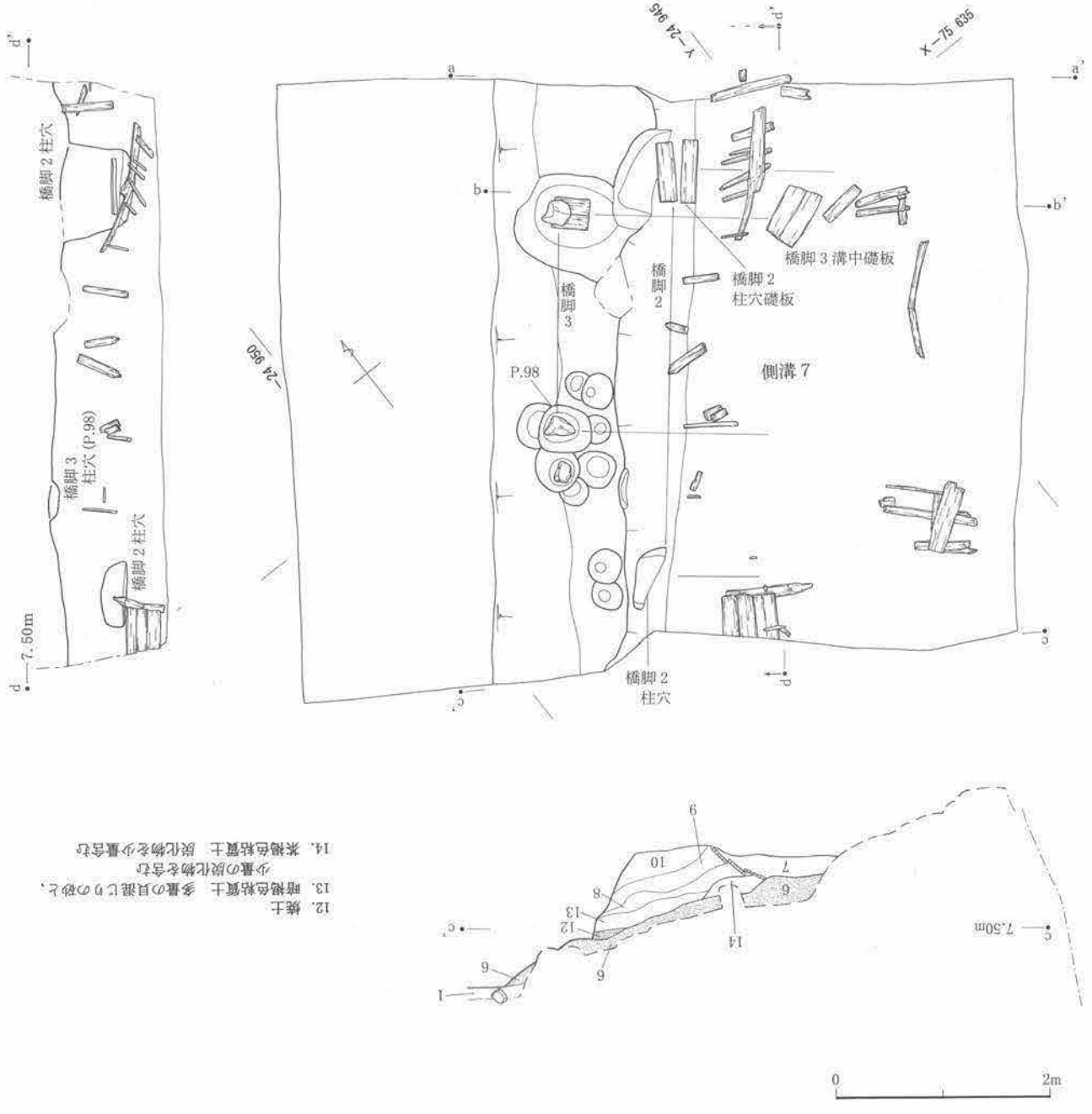
検出高：約8.4m　構成土：明茶褐色粘質土（基盤層）　検出遺構：小町大路側溝1条・小穴13口

側溝7（図18～20）

位　置：X－75 632～－75 640　Y－24 942～－24 951　**規　模**：東西幅245 cm以上（底面幅約210 cm以上）×深さ（平坦面から）185cm以上（最下面標高約6.20m）　**断面形**：(箱形ないしは浅い逆台形)　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－39°－E　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝8・9を切る　**出土遺物(図19・20)**:土師器皿T種(1～4)・土師器皿R種(5～9)・南部系山茶碗(10)・

1. 黄褐色泥岩層　拳大泥岩の層
2. 茶褐色粘質土　泥岩・炭化物含む
3. 暗茶褐色粘質土　少量の遺物片と泥岩・炭化物含む
4. 暗灰褐色粘質土　炭化物多く、泥岩粒子・遺物片を少量含む
5. 明茶褐色繊維質土
6. 炭化層
7. 暗青灰色粘質土　2～3㎝大の小粒泥岩と炭化物を少量含む
   —側溝7水流部分
8. 暗青灰色砂質土　小粒泥岩と炭化物を少量含む
   —側溝7裏込め
9. 暗青灰色砂質土　小粒泥岩・炭化物・木片を少量含む
   —側溝7裏込め
10. 暗青灰色砂質土　貝殻片を多く含む
    —側溝7裏込め
11. 黒褐色粘質土　挟雑物少ない**—柱穴埋土**





12. 焼土
13. 暗褐色粘質土　多量の貝混じりの砂と、少量の炭化物を含む
14. 茶褐色粘質土　炭化物を少量含む

図18　遺構全図（5）—側溝7と関連遺構

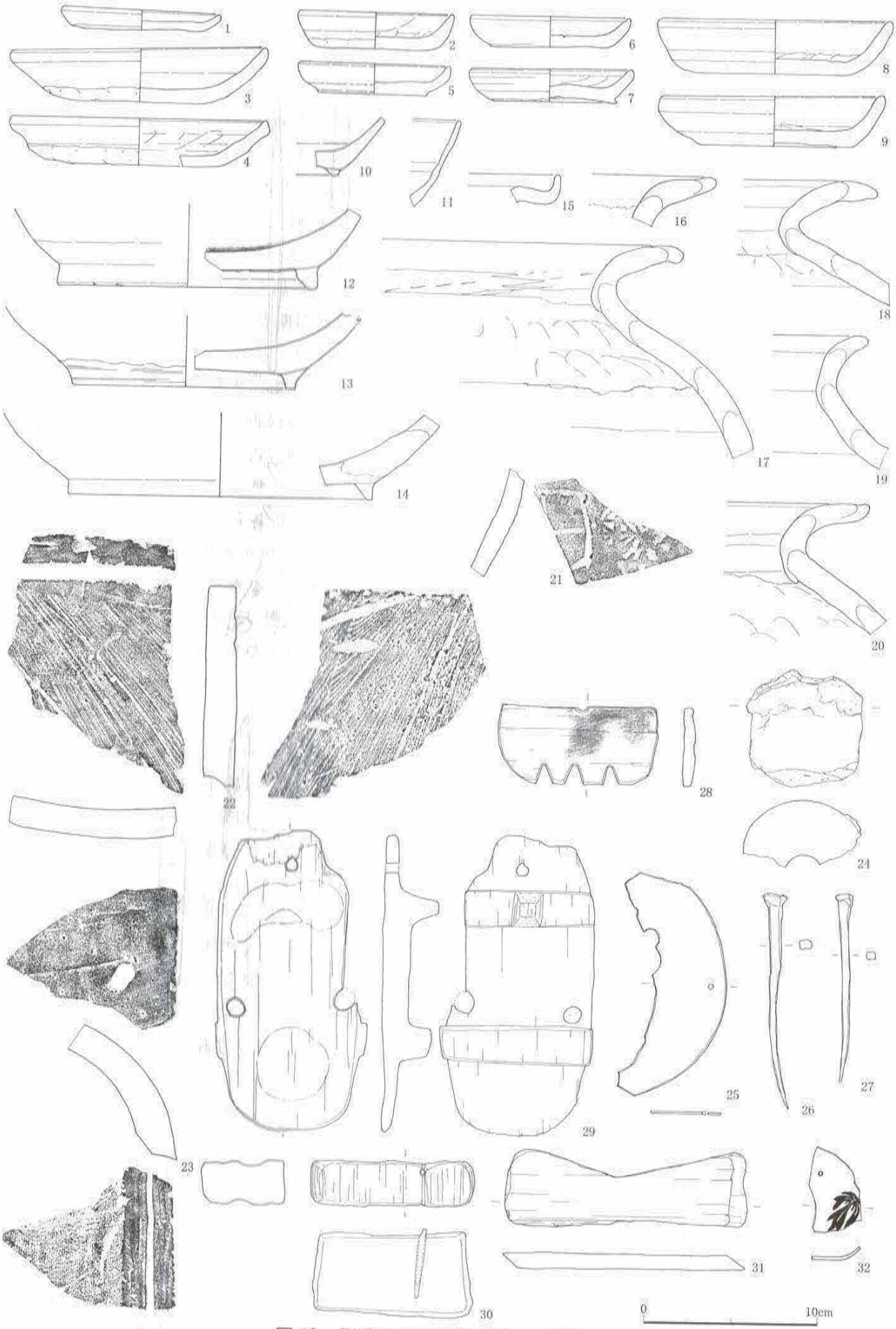


図 19　側溝 7 出土遺物（1）—上層

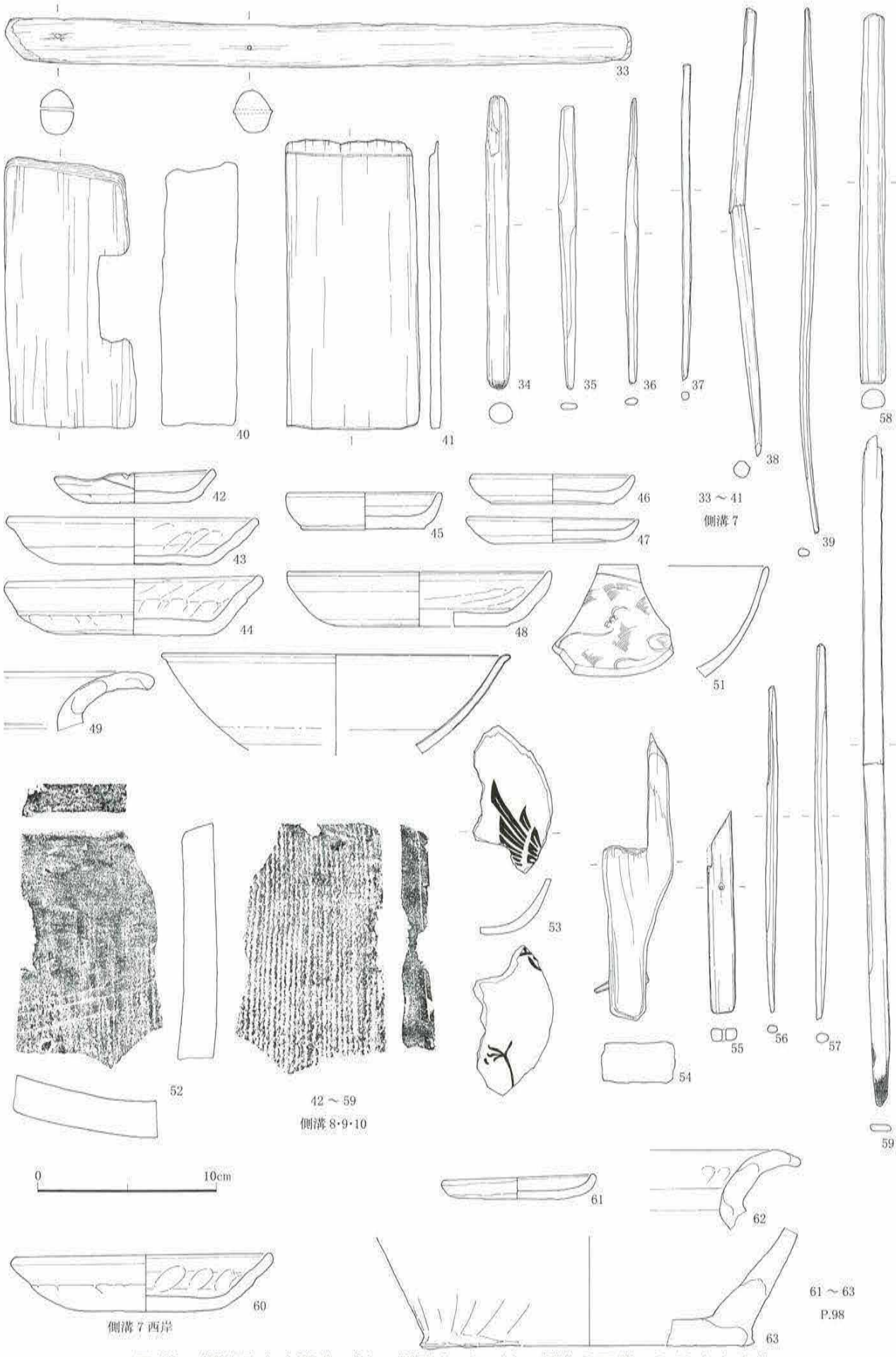


図20　側溝7出土遺物（2），側溝8・9・10・側溝7西岸・P.98出土遺物

東遠系山茶碗(11)・常滑片口鉢Ⅰ類(12～13)・常滑甕(15)・渥美甕(16～21)・平瓦(22)・丸瓦(23)・鞴羽口(24)　**側溝7西岸出土遺物(図20)**:(側溝7の西岸にへばりつくように黒褐色粘質土があり、ここから数点の遺物が出土した)土師器皿T種(60)　**特記事項**:側溝7は側溝6底面から1mほどの深さを持つ。逆台形の断面をもち、側溝6より約1.7m、側溝1からは約3.6m西に位置する。この時点で小町大路側溝が全体的に西に移行したか、あるいは拡幅されたのであろう。底面も上層側溝より幅広で深く、全体に上層のものに比べひと回り大きい。調査区西半部の基盤層上面と溝底面との比高差は約1.7m、側溝1底面より約0.9m深く掘り込まれている。側溝7は、調査区の限りで底面の幅210cmを超え、全体では推定で3mほどあった可能性もある。次述の側溝8・9・10にはこれほどの大きさはなく、この7の時代になって、小町大路は最も立派な側溝を備えることとなった。またこの時期には橋脚も備わっている。南側隣地には現在、小町大路から若宮大路に抜ける東西道が走行しているので、この橋はその初期のものかもしれない。ただしこれに連なる道そのものは、削平によるためか調査区の限りで発見されなかった。

年代は13世紀第1四半期から第2四半期としたい。側溝7西岸の土は下層の側溝10上層部分の可能性もあるが、さらに古い時期のものである可能性もある。

橋脚2(図18)

位　置:X－75 634～－75 639　Y－24 945～－24 949　**規　模**:南北1間(柱間距離3.4m)×東西不明・柱穴底面高6.6m・礎板高6.7m(平均)　**南北軸方位**:N－29°－E　**特記事項**:柱間距離3.4mと非常に大きい。先述のように、調査地点のすぐ南側を走行している小町大路から若宮大路に抜ける東西道(「辻子」か?)の当初のものかもしれない。ただし道そのものは、削平によるためか調査区内で発見されなかった。

橋脚3(図18)

位　置:X－75 634～－75 637　Y－24 945～－24 948　**規　模**:南北1間(柱間距離2m)×東西不明・柱穴底面高7.34m・礎板高7.43m(平均)　**南北軸方位**:N－28.5°－E　**P.98出土遺物(図20)**:土師器皿T種(61)・渥美甕(62・63)　**特記事項**:幅2mと、規模は小橋脚2に比べ小さい。2mの柱間は鎌倉時代中期以降に一般的になるが、P.28出土遺物からみた年代は鎌倉時代初期の様相を示す。ここでも連接したはずの道は明確にならなかった。

6．小町大路側溝8・9・10と関連遺構(図20～21)

小町大路側溝7の完掘後、下にさらに古い側溝があることが確認された。しかしその時点で側溝部分の掘削深度は2mにおよんでいたため、安全性確保の観点から調査区南北壁を約1m迫出して掘削することとした。この下層の側溝は当初1条の認識で掘り下げたが、のちの断面観察から三時期に分けられることが判明したため、それぞれ大路側溝8・9・10の番号を付した。新旧の関係は、側溝10が最も古く、次いで8、最も新しいのが9となる。下層側溝10の堆積土中の中～上層には、8と9の境をなす断面3角の掘り残しが観察された。北壁際では側溝10の底面まで掘削し、基盤層を確認した。一方、南壁際は崩落の危険性があり、底面までの掘削は断念せざるを得なかった。ここでは遺構番号に沿う形で記述するが、出土遺物に関しては3条それぞれに帰属させることが困難であるため、図20においては包括的に提示した。

側溝8(図20・21)

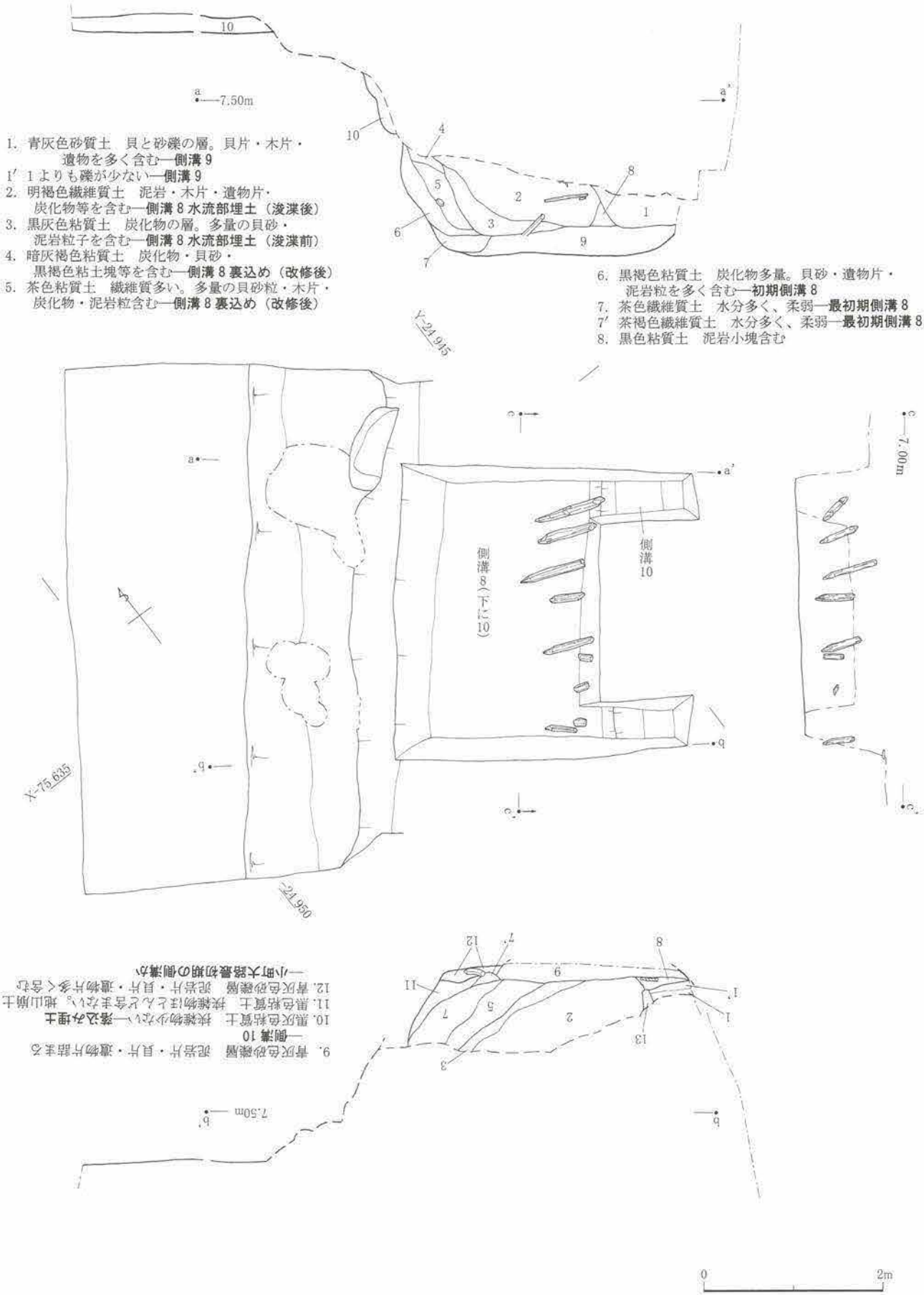


図 21　遺構全図（6）—側溝 8・9・10 と関連遺構

位　置：X－75 632～－75 640　Y－24 942～－24 951　**規　模**：東西幅 220 cm以上（底面幅 175 cm以上）× 深さ（平坦面から）225cm 以上（最下面標高約 5.95m）　**断面形**：逆台形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－38°－E　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝 9 に切られ、同 10 を切る　**出土遺物（図 20）**：後述　**特記事項**：この下にさらに初期の大路側溝が見えているので（「側溝 10」）、初期から 2 期目の側溝にあたる。側溝 10 に木材は検出されておらず、この側溝 8 の時期に小町大路側溝ははじめて角材を使った護岸を備えたことになる。調査区東壁際で辛うじて確認できた東岸の立ち上がりからすると、底面幅は約 2.3m となる。溝内には護岸の部材が多数出土した。西岸沿いの部材の検出高は約 6.2～7.2m、東側は約 6.0～6.7m内に集中している。2 ないし 3 時期の改修あるいは浚渫が観察される。

年代は、大路側溝 9・10 と遺物が弁別できていないため決めがたいが、側溝 7 との相対関係から、12 世紀末～13 世紀第 1 四半期頃としたい。

側溝 9（図 20・21）

位　置：X－75 635～－75 639　Y－24 943～－24 947　**規　模**：東西幅 105 cm以上（底面幅 65 cm以上）× 深さ（平坦面から）210cm 以上（最下面標高約 6.10m）　**断面形**：逆台形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－38°－E　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝 8・10 を切る　**出土遺物（図 20）**：後述　**特記事項**：8 の東側を切った側溝。東側調査区外に大半の部分が出ており、実際の大きさは不明。側溝 8 との関係では短い切合い部分の観察からひとまず本址が新しいとみたが、断定するにはもう少し周辺の調査例の増加を俟ちたいところである。大路東側溝との対比が難しいので、これが大路全体の東側への移動か、あるいは規模の縮小化かについてもわからないが、ともかくもこの時期に小町大路側溝西岸は東に移行した、ということはできる。

年代は 13 世紀第 1 四半期ごろであろう。

側溝 10（図 20・21）

位　置：X－75 634～－75 639　Y－24 944～－24 948　**規　模**：東西幅 235 cm以上（底面幅 205 cm以上）× 深さ（平坦面から）245cm 以上（最下面標高約 5.75m）　**断面形**：逆台形　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－37°－E　**充填土**：図に記載　**重複関係**：側溝 8・9 に切られる　**出土遺物（図 20）**：後述　**特記事項**：検出された一群の小町大路西側溝のうち、層位的に最古に位置づけられる。南壁際では安全上の観点から底面までの掘削を断念したが、北壁際は完掘し基盤層を確認した。したがってこれ以下にさらに古い側溝が存在することはまず考えられない。大路反対側の東側溝が古来の自然流路を利用していることが確認されているのに対し（馬淵・伊丹 2007）、この点は異なっている。大半を上層溝に削り取られているので全形は窺えないものの、残存部の形状からみておおむね逆台形として大過ない。当初から側溝として作られたものだろう。

年代は 12 世紀第 4 四半期、すなわち鎌倉時代のごく初期と考えたい。

側溝 8・9・10 出土遺物（図 20）

先述のように、この 3 条の側溝については当初 1 本との認識で掘削したために、遺物が混りあってしまった。ここではまとめて提示する。

土師器皿 T 種（42～44）・土師器皿 R 種（45～48）・渥美甕（49）・白磁端反碗（50）・竜泉窯青磁画花文碗（51）・平瓦（52）・漆器椀（53）・部材（54）・不明木製品（55）・箸状木製品（56・57）・棒状木製品（58）・不明木製品（59）　**特記事項**：全体に鎌倉時代前期までの様相を示しているが、

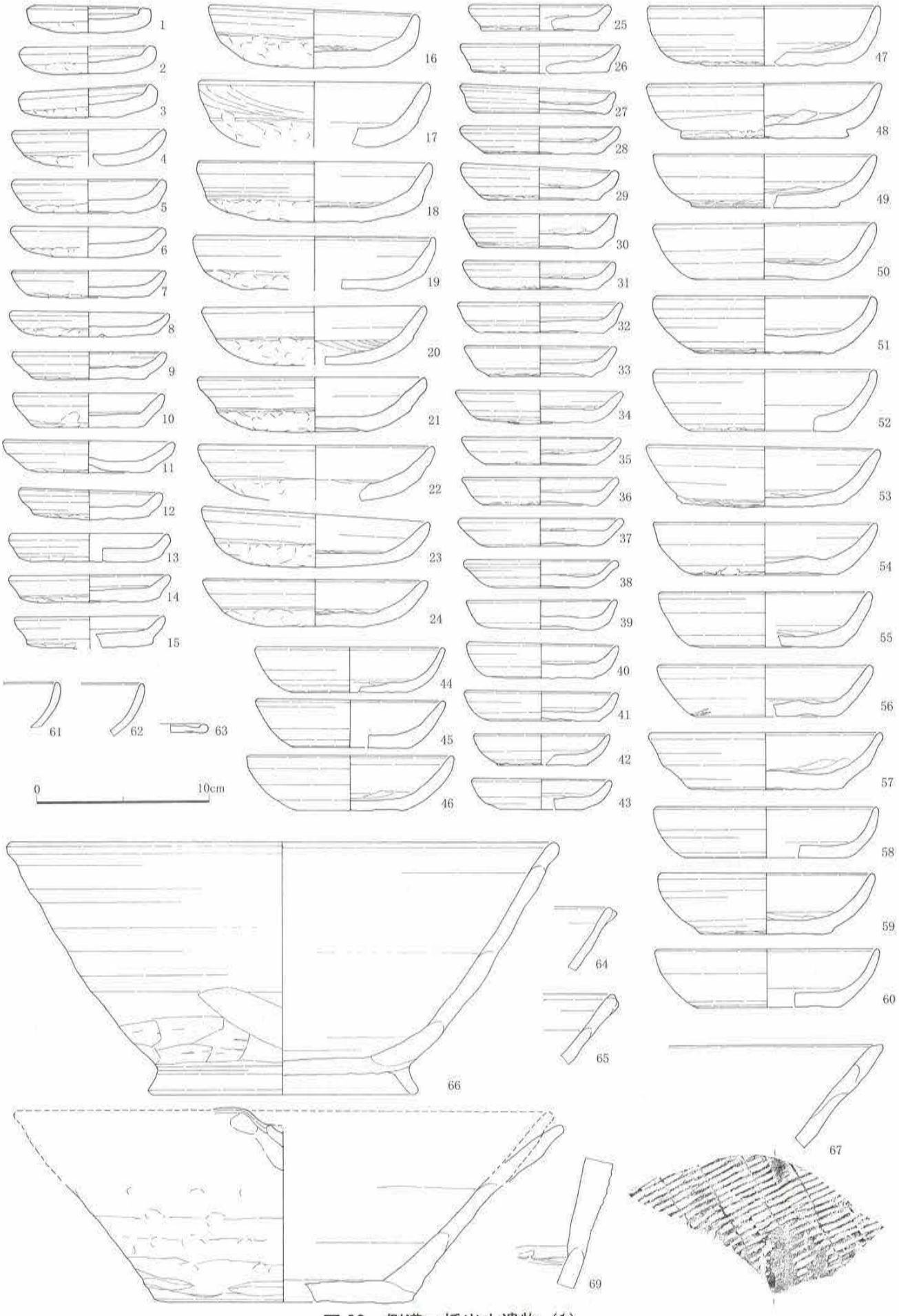


図 22　側溝一括出土遺物（1）

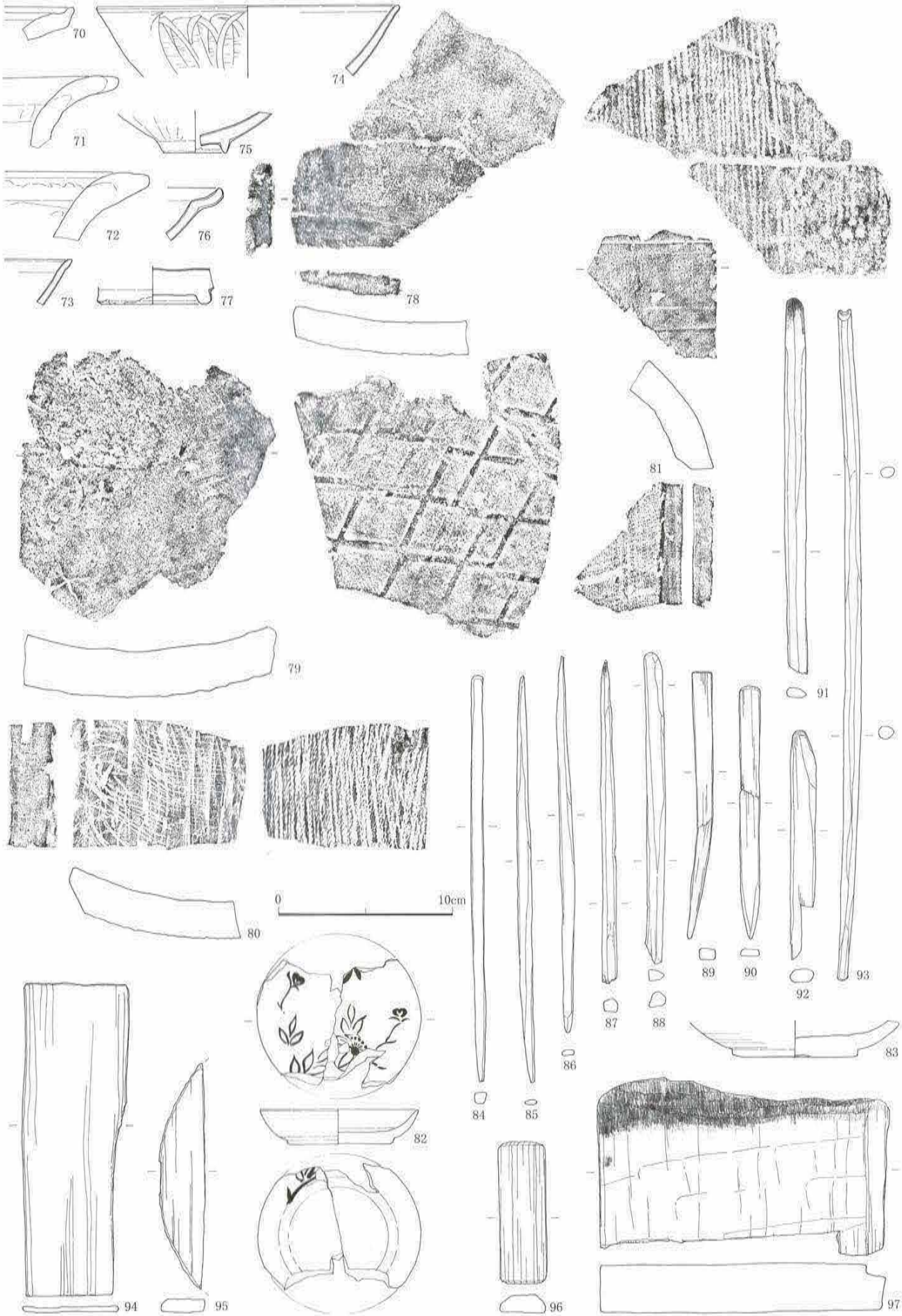


図 23　側溝一括出土遺物（2）

51 は竜泉窯青磁画花文碗のうちでも古式の、12 世紀後半に属する（亀井 1992 による年代観）。43・44 の土師器皿 T 種は扁平な底部を持ち、全体に薄く硬く焼きしまっている。これも鎌倉時代初期の様相を示す。

7．側溝一括出土遺物（図 22・23）

小町大路側溝掘削時、帰属が混乱したものを一括した。おおむね側溝 7 かそれ以下に属する。

土師器皿 T 種（図 21-1 ～ 24）・土師器皿 R 種（25 ～ 60）・白色系土師器皿 T 種（61・62）・瓦器小皿（63）・常滑片口鉢 I 類（64 ～ 66）・常滑片口鉢 II 類（68）・渥美甕（69・図 22-71・72）・白磁碗（73）・竜泉窯青磁鎬連弁文碗（74・75）・竜泉窯青磁折縁鉢（76）・竜泉窯青磁画花文碗（77）・平瓦（78・79）・東海系平瓦（80・81）・漆器皿（82）・漆器椀（83）・箸状木製品（84 ～ 86）・串状木製品（87・89）・ヘラ状木製品（88・90・92）・棒形木製品（91・93）・折敷（94）・木製円板（95）・不明木製品（96）・部材（97）　**特記事項**：全体に鎌倉時代前期に属するものが多いが、白色系土師器皿 T 種 61・62 や竜泉窯青磁 74 ～ 77 は中～後期の様相を呈している。漆器 82・83 は分厚い底部の、鎌倉時代前期の特徴的なかたちをしている。皿 82 は橘文が手描きされている。

8．中世以前の遺物（図 24）

土師器坏（1）・須恵器坏（2・3）

9．遺構外採集遺物（図 24）

土師器皿 R 種（4）・東遠系山皿（5）・鍔鍋（6）・南伊勢系土鍋（7）・渥美甕（8・9）・下駄歯（10）・部材（11）　**特記事項**：鍔鍋の 6 は伊勢産の可能性がある。

（鍛治屋・松原・馬淵）

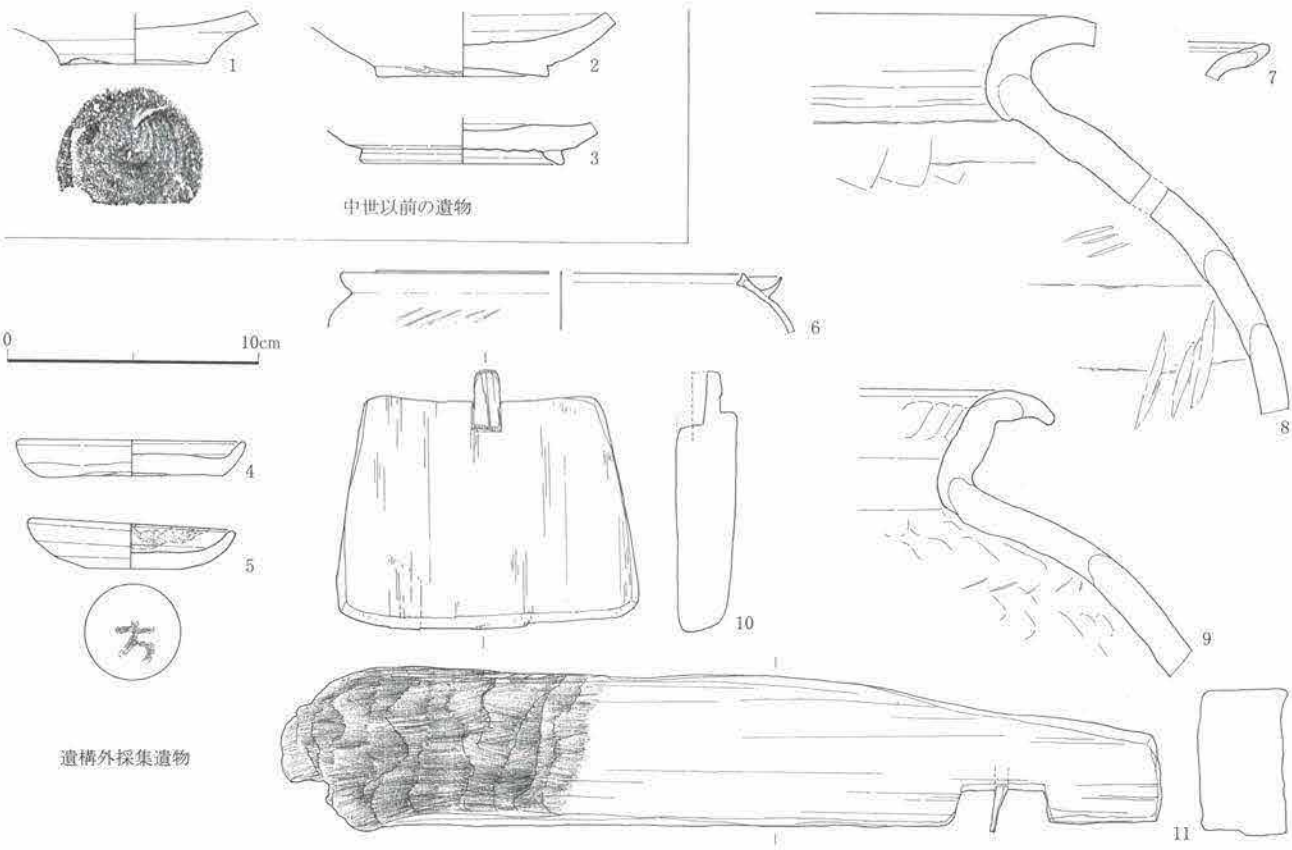


図 24　中世以前・遺構外採集遺物

表1 出土遺物観察表（1）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5－1	側溝1・2	土師器皿T種小型	口径(8.5)cm 器高1.75m 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
2	側溝1・2	土師器皿R種小型	口径7.65cm 底径5.1cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯・白色粒を含む
3	側溝1・2	土師器皿R種小型	口径(7.3)cm 底径(5.4)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・質・砂粒・白色粒子を含む
4	側溝1・2	土師器皿R種小型	口径(7.3)cm 底径(4.45)cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
5	側溝1・2	土師器皿R種中型	口径(10.2)cm 底径(6.4)cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡灰橙色砂質土、赤色粒子質・砂粒・海綿骨芯を含む
6	側溝1・2	土師器皿R種大型	口径(13.1)cm 底径(7.5)cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
7	側溝1・2	白色系土師器皿T種大型	口縁部片 胎土は乳白色粉質精良土
8	側溝1・2	瀬戸輪花入子	口縁片 ロクロ成形後刻みを入れ輪花 胎土は明灰褐色 口縁内側に自然釉
9	側溝1・2	青白磁碗	口縁部片 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は灰色を帯びた水色半透明
図7－1	側溝3	土師器皿T種小型	口径(9.8)cm 器高1.4cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	側溝3	土師器皿T種小型	口径(8.85)cm 器高2.1cm 内底部ナデ 胎土は淡黄灰色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	側溝3	土師器皿T種大型	口径(13.05)cm 器高3.0cm 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	側溝3	土師器皿R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.0)cm 器高1.55cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	側溝3	土師器皿R種小型	口径(9.25)cm 底径(7.5)cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	側溝3	土師器皿R種大型	口径12.5cm 底径7.4cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 油煤付着
7	側溝3	土師器皿R種大型	口径(13.1)cm 底径(9.4)cm 器高3.6cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	側溝3	常滑 山茶碗	口縁部片 胎土は灰色、石英含む
9	側溝3	瀬戸灰釉卸皿	底部片 胎土は灰色、硬質 灰釉
10	側溝3	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	底径(6.4)cm ロクロ成形 複連弁文 削り出し高台 素地は明灰色、胎芯黄灰色 釉は灰緑色半透明
11	側溝3	平瓦	厚さ2.0cm 胎土は砂粒・礫を含み明灰色 凸面は縄目、凹面は離れ砂
12	溝2	土師器皿T種小型	口径(8.6)cm 器高1.5cm 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
13	溝2	土師器皿T種小型	口径(9.25)cm 器高1.85cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、黒色粒子・赤色粒子を含む粉質土
14	溝2	土師器皿T種大型	口径(11.7)cm 器高3.5cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
15	溝2	土師器皿T種大型	口径(13.5)cm 器高2.9cm 内底部ナデ 外底部板状圧痕あり 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
16	溝2	土師器皿R種小型	口径(9.3)cm 底径(7.7)cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
17	溝2	土師器皿R種小型	口径8.55cm 底径6.4cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
18	溝2	渥美甕	口縁部片 胎土は淡灰褐色、白色粒含む 外側刷毛塗り、内側は厚い降灰によりざらつく
19	溝2	渥美甕	肩～胴部片 胎土は淡灰褐色、白色粒含む 肩部に厚い降灰 18と同一個体か 斜めに交差する陰刻・縦線の叩き目あり
20	溝2	軒丸瓦	瓦頭部片 巴文 胎土は灰色から淡橙色、白色粒子・微砂粒含む
21	溝3	土師器皿T種小型	口径(7.75)cm 器高1.0cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
22	溝3	土師器皿T種大型	口径(13.4)cm 器高3.0cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
23	溝3	土師器皿T種大型	口径13.0cm 器高3.05cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒含む砂質土
24	溝3	土師器皿R種小型	口径口径(9.3)cm 底径(8.0)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、赤色粒子・砂粒を含む
25	溝3	渥美甕	胴部片 胎土は灰褐色 縦線に斜め格子の叩き目あり
26	溝3	白磁口ハゲ皿	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 釉は淡青灰色透明
27	溝3	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 釉は青灰色透明
28	溝3	平瓦	厚さ1.7cm 胎土は砂粒・礫を含み淡灰色 凸面に蓮華文の陽刻 凹面に同文の陰刻
29	溝3	平瓦	厚さ1.9cm 胎土は白色粒・礫を含み灰色 凸面に縄目
30	溝3	平瓦	厚さ1.8cm 胎土は灰色～灰橙色、白色粒子・黒色粒子・微砂粒を含む 凸面は縄目、凹面は縄目の後ヘラでなでる？
31	溝3	滑石鍋転用品	残存長(3.7)cm 残幅(4.3)cm 最大厚1.2cm 銀灰色 3面に擦過痕多数、加工途中又は砥石として使用か
図8－1	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.0cm 器高3.0cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
2	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.0cm 器高13.0cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む

表2 出土遺物観察表（2）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
3	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.5cm　器高3.0　内底部ナデ　胎土は赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む
4	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.4cm　器高2.6cm　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む砂質土
5	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.5cm　器高3.6cm　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
6	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.5cm　器高3.4cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
7	土師器集中部1	土師器皿T種大型	口径12.0cm　器高3.05cm　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
8	土師器集中部1	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径4.9cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
9	土師器集中部1	土師器皿R種小型	口径8.2cm 底径6.3cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り　内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
10	土師器集中部1	土師器皿R種小型	口径9.0cm 底径7.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
11	土師器集中部1	土師器皿R種大型	口径12.7cm 底径8.6cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
12	土師器集中部1	土師器皿R種大型	口径(12.3)cm 底径(8.8)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は赤橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む砂質土
13	土師器集中部1	土師器皿R種大型	口径12.8cm 底径9.0cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む弱砂質土
14	土師器集中部1	土師器皿R種大型	口径13.0cm 底径7.5cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子含む粉質精良土
15	土師器集中部1	渥美甕	胴部片 胎土は灰色、白色粒含む 縦線・斜線の叩き目あり
16	土師器集中部1	平瓦	厚さ1.8cm 胎土は砂粒・白色粒を含み灰色 凹面縄目 永福寺Ⅰ期
図9—1	建物1 P.2	土師器皿R種大型	口径11.9cm 底径7.8cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む
2	建物1 P.2	土師器皿R種大型	口径13.5cm 底径8.4cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む精良土
図10—1	P.2	土師器皿T種小型	口径9.0cm 器高1.9cm　内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子・砂粒を含む 内・外側とも半分強に油煤付着
2	P.6	白色系土師器皿T種小型	口径(7.9)cm　胎土は乳白色
3	P.6	土師器皿T種小型	口径8.2cm 器高2.0cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	P.6	土師器皿R種小型	口径(9.8)cm 底径(8.2)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・砂粒含む砂質土
5	P.6	土師器皿T種大型	口径(12.5)cm　器高(2.2)cm　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	P.6	土師器皿T種大型	口径(14.7)cm　胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・礫を含む
7	P.6	土師器皿R種大型	口径(11.7)cm 底径(8.5)cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	P.19	土師器皿T種大型	口径(14.4)cm　器高3.0cm　内底部ナデ 胎土は淡橙色、海綿骨芯・赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
9	P.19	土師器皿R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.4)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 弱砂質
10	P.25	土師器皿T種小型	口径(7.8)cm 底径(6.5)cm 器高0.9cm　内底部ナデ 胎土は淡橙色、粉質精良土
11	P.25	竜泉窯青磁画花文碗	高台径(7.0)cm ロクロ成形 素地は淡灰色 釉は青緑色半透明、細かい貫入 内底面に使用による傷が残る 内側に画花文、外側は無文
12	P.36	土師器皿T種大型	口径(13.5)cm 器高2.9cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
13	P.36	土師器皿R種大型	口径(12.5)cm 底径(8.7)cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む
14	P.46	竜泉窯青磁蓮弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は淡灰色 釉は青灰色不透明 外側は片彫り蓮弁文、花弁の中心に鎬はない
15	P.57	土師器皿T種小型	口径9.3cm 器高1.7cm　内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む弱砂質土 全体に火を受け灰色に変色
16	P.59	土師器皿R種小型	口径7.8cm 底径6.0cm 器高1.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む弱砂質土
17	P.59	土師器皿R種大型	口径(12.8)cm 底径(8.2)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む弱砂質土
18	P.62	土師器皿R種小型	口径(9.8)cm 底径(7.4)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む弱砂質土。ロクロ成形後全体に指頭で形を整えたような観あり
19	P.62	常滑壷	底径(10.8)cm 輪積み成形　胎土・器表は灰色～灰橙色、黒色粒子含む　二次焼成の強い火熱で全体に質量が損なわれている
20	P.66	渥美甕	口縁部片 輪積み成形　黒褐色に発色した灰釉をハケ塗りした後、厚く自然釉かかる 胎土は灰～灰黒色で、岩石質に焼き上がる
図11—1	側溝4・5	土師器皿T種大型	口径13.8cm 器高3.0cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
2	側溝4・5	土師器皿R種小型	口径(9.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色・黒色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む

表3 出土遺物観察表（3）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
3	側溝4･5	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は淡灰褐色 釉は淡緑灰色透明、貫入あり 内側は二又片刀による分割線、外側は無文
4	側溝4･5	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 釉は水色半透明 内側は二又片刀による分割線の内側に飛雲文、外側は無文
5	側溝4･5	木製紡織機部材	残存長(10.4)cm 幅1.2cm 厚み1.5cm 鋸歯状の刻みが入る 一端は炭化している
6	側溝4･5	円板状木製品	残存長(16.6)cm 残幅(3.4)cm 厚み0.3cm 柾目材 蓋？
7	側溝5	土師器皿T種小型	口径(8.3)cm 器高1.5cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子･白色粒子を含む
8	側溝5	土師器皿T種大型	口径(13.6)cm 器高3.2cm 内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子･赤色粒子を含む
9	側溝5	土師器皿T種大型	口径(13.2)cm 器高3.2cm 内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子･赤色粒子･砂粒を含む
10	側溝5	土師器皿R種小型	口径(8.9)cm 底径6.2cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯･泥岩粒を含む
11	土師器集中部2	土師器皿T種小型	口径(9.9)cm 器高(1.6)cm 胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
12	土師器集中部2	土師器皿T種大型	口径(12.9)cm 器高2.5cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、海綿骨芯･泥岩粒を含む
13	土師器集中部2	土師器皿T種大型	口径(13.5)cm 器高3.2cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
14	土師器集中部2	土師器皿T種大型	口径(14.3)cm 器高2.8cm 内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子･赤色粒子を含む
15	土師器集中部2	土師器皿R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.0)cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、白色粒子･赤色粒子･海綿骨芯を含む
図13−1	側溝5･6	土師器皿T種小型	口径9.25cm 器高1.65cm 内底部ナデ コースター型 胎土は赤橙色、赤色粒子･海綿骨芯･雲母変･砂粒を含む 弱砂質
2	側溝5･6	土師器皿T種小型	口径8.2～8.6cm 器高2.1cm 内底部ナデ 歪み大きい 胎土は淡赤橙色、白色粒子･海綿骨芯を含む
3	側溝5･6	土師器皿T種小型	口径(9.75)cm 器高2.05cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨芯を含む
4	側溝5･6	土師器皿T種大型	口径13.0cm 器高2.95cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
5	側溝5･6	土師器皿T種大型	口径13.3cm 器高2.9cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子･赤色粒子･海綿骨芯を含む
6	側溝5･6	土師器皿R種小型	口径8.6cm 底径6.9cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
7	側溝5･6	土師器皿R種小型	口径(8.6)cm 底径(6.8)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む 砂質
8	側溝5･6	土師器皿R種大型	口径(12.2)cm 底径8.2cm 器高3.35cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、白色粒子･赤色粒子･を含む 弱粉質
9	側溝5･6	土師器皿R種大型	口径(13.6)cm 底径9.3cm 器高2.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡灰褐色、白色粒子･赤色粒子･海綿骨芯を含む
10	側溝5･6	瀧美甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石･暗灰色粒含む 縦線叩き目
11	側溝5･6	平瓦	厚さ2.1cm 胎土は灰色、表面に金雲母片 凸面は糸切り･格子叩き目、凹面は糸切り
12	側溝5･6	不明木製品	長4.9cm 幅4.65cm 厚3.9cm 蒲鉾型に成形されている
13	側溝5･6	円板状木製品	最大長(15.0)cm 最大幅(8.4)cm 厚0.9cm 推定径14cm前後 柾目材 一端が炭化
14	側溝5･6	円板状木製品	最大長(17.6)cm 最大幅(8.5)cm 厚0.9cm 推定径14cm前後 柾目材 一端が炭化 13と同一個体か？
15	側溝5･6	棒状木製品	長24.3cm 幅1.0cm 最大厚0.5cm 片方の端部が尖る 斎串か
16	側溝5･6	ヘラ状木製品	長28.3cm 最大幅2.5cm 最大厚1.2cm 切匙か
図14−1	側溝6	土師器皿T種小型	口径(8.6)cm 器高1.9cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
2	側溝6	土師器皿T種小型	口径(9.1)cm 器高(1.45)cm 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、白色粒子･砂粒を含む 弱砂質
3	側溝6	土師器皿T種小型	口径9.0cm 器高1.9cm 胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯･白色粒子･砂粒を含む
4	側溝6	土師器皿T種大型	口径13.0cm 器高3.4cm 外底部薄く板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒･泥岩粒を含む 砂質土
5	側溝6	土師器皿T種大型	口径(13.3)cm 器高3.2cm 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子･海綿骨芯･白色粒子を含む
6	側溝6	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径(6.4)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡灰褐色、赤色粒子･白色粒子を含む
7	側溝6	土師器皿R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.8)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子･白色粒子･砂粒を含む 弱砂質土
8	側溝6	土師器皿R種小型	口径9.2cm 底径7.2cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子･白色粒子･砂粒を含む
9	側溝6	土師器皿R種大型	口径12.45cm 底径7.9cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子･海綿骨芯･白色粒子を含む
10	側溝6	土師器皿R種大型	口径12.7cm 底径8.7cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子･赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む
11	側溝6	土師器皿R種大型	口径(12.5)cm 底径(8.3)cm 器高3.15cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子を含む
12	側溝6	竜泉窯青磁画花文碗	高台径5.6cm ロクロ成形 素地は淡灰色、黒色微粒子含む 釉は緑青色透明 内底面に片彫画花文、擦過痕あり 削り出し高台

表 4 出土遺物観察表（4）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
13	側溝6	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は淡灰色 釉はオリーブ色透明、大きめの貫入 内側は二又片刀による分割線、外側は無文
14	側溝6	軒丸瓦	胎土は白色粒・微砂を含む灰色土 巴文の周りに扁平な連珠文を巡らす
15	側溝6	円板状木製品	径21.9cm 厚1.9cm 片側は木目と直交方向に中央から端部に向かって次第に薄くなる 中央に径5.5mmの円孔があけられ、中に棒が詰まっている。つまみ部分の取れた名残か 片面と側面の一部に黒漆状のもの付着 甕あるいは鍋等の蓋
16	側溝6	折敷	長28.9cm 残幅(6.3)cm 厚0.5cm 柾目材 一端は薄く削られており、6箇所の小穴の一部には木繊維質のもの残る 折敷底部
17	側溝6	棒状木製品	長18.7cm 幅0.65cm 厚0.5cm 断面方形、両端を切り落とす
18	側溝6	棒状木製品	長20.4cm 幅0.6cm 厚0.4cm 片口箸
19	側溝6	棒状木製品	残存長(20.7)cm 最大幅0.9cm 厚0.8cm 一端を尖らす 斎串か
20	側溝6	棒状木製品	残存長(19.7)cm 幅2.1cm 厚1.5cm 断面楕円形、両側面を面取り
21	側溝6	棒状木製品	長25.5cm 幅1.2cm 厚0.6cm 一端が炭化
22	側溝6	棒状木製品	残存長(31.0)cm 幅2.4cm 厚1.0cm 断面長方形、一端が炭化
23	側溝6	棒状木製品	長15.6cm 幅1.2cm 厚0.6cm 断面楕円形、一端を尖らす
24	側溝6	棒状木製品	長11.5cm 最大幅0.9cm 厚0.7cm 一端が炭化
図15－1	側溝6西岸上	土師器皿T種小型	口径8.8cm 器高1.85cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	側溝6西岸上	土師器皿T種小型	口径(9.3)cm 器高1.8cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色海綿骨芯・砂粒を含む
3	側溝6西岸上	土師器皿T種小型	口径8.6cm 器高1.8cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	側溝6西岸上	土師器皿T種小型	口径9.1cm 器高1.85cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
5	側溝6西岸上	土師器皿T種大型	口径13.05cm 器高2.9cm 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、白色粒子・砂粒を含む 砂質
6	側溝6西岸上	土師器皿T種大型	口径(12.5)cm 器高(2.2)cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・黒色粒子を含む
7	側溝6西岸上	土師器皿T種大型	口径(12.5)cm 器高2.8cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯を含む 口縁部に油煤少量付着
8	側溝6西岸上	土師器皿R種小型	口径(8.9)cm 底径(7.1)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
9	側溝6西岸上	土師器皿R種大型	口径(12.6)cm 底径(8.4)cm 器高2.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
10	側溝6西岸上	土師器皿R種大型	口径(12.6)cm 底径(8.0)cm 器高2.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
11	側溝6西岸上	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石含む 器表は暗灰色
12	側溝6西岸上	渥美甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色
13	側溝6西岸上	鬼瓦	最大厚3.2cm 胎土は白色微粒を含み灰色で緻密 永福寺Ⅰ期
14	側溝6西岸上	丸瓦	厚1.8cm 胎土は白色微粒・砂粒を含む灰色土 凸面は縄目一部撫で消し、凹面は布目痕が残る 永福寺Ⅰ期
図16－1	土師器集中部3	土師器皿T種小型	口径8.9cm 器高1.8cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	土師器集中部3	土師器皿T種小型	口径(9.8)cm 器高2.0cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む
3	土師器集中部3	土師器皿T種小型	口径(8.4)cm 器高1.5cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	土師器集中部3	土師器皿T種小型	口径9.0cm 器高1.8cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
5	土師器集中部3	土師器皿T種大型	口径(13.5)cm 底径(8.9)cm 器高2.5cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部一部打ち欠き、油煤付着
6	土師器集中部3	土師器皿T種大型	口径(13.2)cm 器高3.3cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
7	土師器集中部3	土師器皿T種大型	口径12.7cm 器高2.8cm 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・砂粒を含む
8	土師器集中部3	土師器皿T種大型	口径13.2cm 器高3.1cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む 粉質
9	土師器集中部3	土師器皿T種大型	口径(12.4)cm 器高2.4cm 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・砂粒を含む 弱砂質 口縁部に油煤付着
10	土師器集中部3	土師器皿T種大型	口径(13.6)cm 器高3.2cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
11	土師器集中部3	土師器皿R種小型	口径(8.6)cm 底径(7.4)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
12	土師器集中部3	土師器皿R種小型	口径(9.8)cm 底径(7.8)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
13	土師器集中部3	土師器皿R種大型	口径12.8cm 底径8.5cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
14	土師器集中部3	土師器皿R種大型	口径(12.4)cm 底径8.6cm 器高3.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
15	土師器集中部3	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色 釉は灰緑色半透明 内側は画花文、外側は無文
図17－1	柱穴列4 P.1	青白磁小皿	口縁～体部片 ロクロ成形 素地は灰白色、結晶質 釉は水色半透明

表5 出土遺物観察表（5）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
2	柱穴列5 P.4	東遠系山茶碗	口縁部片 ロクロ成形 胎土は灰色、気孔多い 焼成良好
3	柱穴列6 P.3	土師器皿T種小型	口径8.7cm 器高1.8cm 内底部ナデ 胎土は橙色、海綿骨芯・砂粒を含む
4	柱穴列6 P.3	舟形木製品	残存長(10.3)cm 残幅(3.9)cm 厚1.0cm
5	P.68	土師器皿R種小型	口径8.9cm 底径7.0cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子を含む 粉質
6	P.68	土師器皿R種大型	口径(13.4)cm 底径7.2cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、海綿骨芯・砂粒を含む 弱粉質
7	P.73	土師器皿T種小型	残存長(4.2)cm 残幅(2.3)cm 厚0.6cm 黒色粘板岩 筆舟を持つ 縁部には波頭文の線刻を施す
8	P.73	土師器皿R種小型	口径(8.9)cm 器1.9cm 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、赤色粒子・泥岩粒・砂粒を含む
図19－1	側溝7上層	土師器皿T種小型	口径9.0cm 器高1.4cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、・白色粒・砂粒を含む
2	側溝7上層	土師器皿T種小型	口径8.7cm 器高2.1cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む 弱砂質
3	側溝7上層	土師器皿T種大型	口径14.4cm 底径8.2cm 器高3.0cm 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む
4	側溝7上層	土師器皿T種大型	口径(14.6)cm 器高2.7cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒を含む 砂質
5	側溝7上層	土師器皿R種小型	口径8.5cm 底径6.2cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む 砂質
6	側溝7上層	土師器皿R種小型	口径8.9cm 底径6.7cm. 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、雲母片・砂粒を含む
7	側溝7上層	土師器皿R種小型	口径9.3cm 底径7.6cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、海綿骨芯・砂粒を含む
8	側溝7上層	土師器皿R種大型	口径13.1cm 底径8.8cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む 弱砂質
9	側溝7上層	土師器皿R種大型	口径12.7cm 底径8.6cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
10	側溝7上層	南部系山茶碗	底部片 胎土は灰色、砂質 貼り付け高台
11	側溝7上層	東遠系山茶碗	口縁部片 胎土は灰色 ロクロ成形 内側に降灰 図17－2と同一個体か
12	側溝7上層	常滑片口鉢Ⅰ類	高台径(14.8)cm 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子含む内底面は使用による磨耗激しく油煤状物質少し付着
13	側溝7上層	常滑片口鉢Ⅰ類	高台径(12.8)cm 輪積み成形 胎土は明灰色、長石・大きめの黒色粒含む 内底面は使用により磨耗激し滑らか
14	側溝7上層	常滑片口鉢Ⅰ類	高台径(17.3)cm 輪積み成形 胎土は灰色、長石含む 内底面は使用により滑らかに磨耗
15	側溝7上層	常滑甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・砂粒含む 器表は明茶色
16	側溝7上層	渥美甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は明灰色、長石・砂粒含む 器表は暗灰色～灰緑色
17	側溝7上層	渥美甕	口縁部片～肩部 輪積み成形 胎土は明灰褐色、黒色粒子・白色粒子・微砂粒含む 口縁部内側釉刷毛塗り、肩部には降灰釉が厚く掛かりざらつく
18	側溝7上層	渥美甕	口縁部片～肩部 輪積み成形 胎土は灰色、長石む
19	側溝7上層	渥美甕	口縁部片～頸部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英含む 器表は暗灰色
20	側溝7上層	渥美 甕	口縁部片～頸部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・黒色粒子含む 釉刷毛塗りの上に降灰ざらつく
21	側溝7上層	渥美甕	胴部片 輪積み成形 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒含む 器表灰緑色 線刻・叩き目あり
22	側溝7上層	平瓦	厚1.8cm 胎土は白色微粒を含む明灰色緻密土 凸面・凹面ともヘラ撫で？
23	側溝7上層	丸瓦	厚1.8cm 胎土は灰色～灰橙色、白色微粒を含み堅く焼き締まる 凸面自然釉、凹面布目
24	側溝7上層	輪羽口	厚3.3cm 胎土は灰褐色砂質土、白色粒子・多量の砂礫を含む
25	側溝7上層	不明金属製品	鉄製品 厚0.15mm 径3mmの孔貫通
26	側溝7上層	鉄釘	長10.8cm 幅0.5cm 厚0.4cm
27	側溝7上層	鉄釘	長12.5cm 幅0.7cm 厚0.5cm
28	側溝7上層	灰ならし？	残存長(4.4)cm 幅9.2cm 厚0.7cm 片面が一部炭化
29	側溝7上層	下駄	長17.4cm 幅8.79cm 残高3.2cm
30	側溝7上層	下駄歯	残高(4.9)cm 最大幅(9.2)cm 厚2.5cm 鉄釘1本残存
31	側溝7上層	不明木製品	長14.0cm 幅4.4cm 厚0.9cm 柾目材
32	側溝7上層	漆器皿	無高台 内・外とも黒漆塗り、内面に朱漆で葉の文様
図20－33	側溝7上層	棒状木製品	長35.4cm 幅2.4cm 厚2.0cm 円柱状に成形、両端も丸めてある 鉄釘一箇所残存、貫通した小孔も一個所、釘の抜け痕か
34	側溝7上層	棒状木製品	口縁部片 ロクロ成形 胎土は淡黄灰色 灰緑色灰釉ハケ塗り
35	側溝7上層	串状木製品	長15.8m 幅0.9cm 厚0.3cm
36	側溝7上層	箸	長15.9cm 幅0.7cm 厚0.4cm 両口
37	側溝7上層	箸	長17.5cm 幅0.5cm 厚0.45cm 片口
38	側溝7上層	串状木製品	長24.8cm 幅0.9cm 厚1.0cm
39	側溝7上層	箸	長29.2cm 幅0.6cm 厚0.6cm
40	側溝7上層	部材	長14.8cm 幅7.1cm 厚4.4cm
41	側溝7上層	部材	長15.95cm 幅7.4cm 厚0.6cm 柾目材
42	側溝8・9・10	土師器皿T種小型	口径8.8cm 器高1.7cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部に油煤の付着と打ち欠きあり
43	側溝8・9・10	土師器皿T種大型	口径13.8cm 器高2.7cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・砂粒を含む 内側の半分弱に油煤付着

表 6　出土遺物観察表（6）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
44	側溝8･9･10	土師器皿T種 大型	口径14.0cm　器高3.0cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む
45	側溝8･9･10	土師器皿 R種 小型	口径8.4cm　底径6.8cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、白色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む
46	側溝8･9･10	土師器皿R種 小型	口径9.5cm　底径6.8cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤橙色、白色粒子･砂粒を含む弱砂質土
47	側溝8･9･10	土師器皿R種 小型	口径8.9cm　底径6.9cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤橙色、白色粒子･砂粒を含む弱砂質土
48	側溝8･9･10	土師器皿R種 大型	口径(14.6)cm　底径(9.7)cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、白色粒子を含む
49	側溝8･9･10	渥美甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色
50	側溝8･9･10	白磁端反碗	口径(19.5)cm　ロクロ成形　素地は淡黄灰色、黒色微粒子含む　釉は淡青灰色不透明で気泡･貫入あり
51	側溝8･9･10	竜泉窯青磁画花文碗	口縁～体部片　ロクロ成形　素地は淡灰色　釉は淡緑灰色半透明　内側に片彫りと櫛目による飛雲文
52	側溝8･9･10	平瓦	厚2.0cm　胎土は白色粒を含む灰色緻密土　凸面は縄目、凹面は縄目のち撫で消し
53	側溝8･9･10	漆器椀	黒漆塗り、内側に朱漆で鳥の翼部分と思われる文様、外側に同じく鳥の足部らしき文様描かれる
54	側溝8･9･10	部材	残存長(16.0)cm　幅4.3cm　厚2.3cm　鉄釘1本残存
55	側溝8･9･10	不明木製品	長11.35cm　幅1.5cm　厚0.6cm　一端は斜めに切断　小孔1貫通
56	側溝8･9･10	箸	長21.2cm　幅0.7cm　厚0.6cm　両口
57	側溝8･9･10	箸	長18.5cm　幅0.6cm　厚0.4cm　両口
58	側溝8･9･10	棒状木製品	長20.5cm　幅1.4cm　残厚(1.1)cm
59	側溝8･9･10	串棒状木製品	長37.7cm　幅1.2cm　厚0.35cm　先端は炭化
60	側溝7西岸	土師器皿T種 大型	口径14.3cm　器高3.1cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、海綿骨芯･砂粒を含む弱砂質土
61	p. 98	土師器皿T種 小型	口径8.4cm　器高1.2cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、雲母片･砂粒を含む弱砂質土
62	p. 98	渥美甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色
63	p. 98	渥美甕	底部片　輪積み成形　胎土は灰色、長石む　内底面に降灰
図22－1	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径6.15cm　器高1.55cm　内折れ　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子･砂粒を含む
2	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(7.1)cm　器高1.6cm　内折れ　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む
3	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径7.3cm　器高1.65cm　内折れ　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む
4	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.55)cm　器高(2.1)cm　内底部ナデ　胎土は淡褐色、海綿骨芯を含む
5	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.5cm　器高1.95cm　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
6	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.6)cm　器高1.75cm　内底部ナデ　胎土は淡褐色、海綿骨芯･砂粒を含む
7	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.7)cm　器高1.55cm　内底部ナデ　胎土は赤橙色、白色粒子･海綿骨芯を含む
8	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径9.0cm　器高1.45cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色～赤橙色、赤色粒子･海綿骨芯を含む粉質土
9	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.8)cm　器高1.6cm　内底部ナデ　胎土は肌色～赤橙色、海綿骨芯含む粉質土
10	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.5)cm　器高1.55cm　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む
11	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(9.8)cm　器高1.85cm　内底部ナデ、内底面波状に変形　胎土は淡褐色、赤色粒子･白色粒子･微砂粒を含む
12	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径7.9cm　器高1.7cm　内底部ナデ　胎土は赤橙色、赤色粒子･海綿骨芯･白色粒を含む
13	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.9)cm　器高1.65cm　内底部ナデ　胎土は淡黄褐色、赤色粒子･砂粒を含む弱砂質土
14	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(9.05)cm　器高1.6cm　内底部ナデ　胎土は淡褐色、白色粒子･海綿骨芯含む
15	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径(8.4)cm　器高(1.8)cm　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子･海綿骨芯･微砂粒を含む
16	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径11.7cm　器高3.4cm　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む弱砂質土
17	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径(13.2)cm　器高3.4cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
18	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径(13.2)cm　器高3.4cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯含む
19	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径(13.6)cm　器高(3.0)cm　内底部ナデ　胎土は橙褐色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒を含む弱砂質土
20	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径(12.6)cm　器高(2.9)cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
21	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径12.8cm　器高3.15cm　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子･海綿骨芯を含む
22	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径(13.3)cm　器高(3.2)cm　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子･海綿骨芯･白色粒子･砂粒を含む
23	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径12.85cm　器高3.1cm　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子･海綿骨芯･白色粒子含む
24	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径(12.6)cm　器高2.75cm　内底部ナデ　胎土は淡黄褐色、赤色粒子･海綿骨芯･砂粒･赤色大粒礫を含む　口縁部に油煤付着

表7 出土遺物観察表（7）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
25	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(7.9)cm 底径(6.8)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む弱砂質土
26	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.8)cm 器高1.7cm 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
27	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.75cm 底径7.8cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
28	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.9cm 底径6.6cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
29	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.7cm 底径6.8cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む
30	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.5cm 底径7.2cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯含む
31	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.5cm 底径6.5cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
32	側溝一括	土師器皿R種小型	口径9.3cm 底径7.6cm 器高1.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
33	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(8.4)cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
34	側溝一括	土師器皿R種小型	口径9.4cm 底径6.7cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子を含む
35	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(8.95)cm 底径6.5cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
36	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(8.8)cm 底径6.5cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、微砂粒・白色粒子を含む
37	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(9.15)cm 底径(7.0)cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子含む
38	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(8.6)cm 底径6.0cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む弱砂質土
39	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.4cm 底径6.4cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む弱砂質土
40	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.5cm 底径6.7cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む弱砂質土
41	側溝一括	土師器皿R種小型	口径8.6cm 底径6.7cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
42	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(7.9)cm 底径(4.4)cm 器高2.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・微砂粒を含む
43	側溝一括	土師器皿R種小型	口径(7.8)cm 底径(4.8)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む
44	側溝一括	土師器皿R種中型	口径(10.6)cm 底径(6.8)cm 器高2.6cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む
45	側溝一括	土師器皿R種中型	口径(10.6)cm 底径(6.8)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
46	側溝一括	土師器皿R種中型	口径(11.7)cm 底径6.3cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
47	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(13.2)cm 底径(9.6)cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
48	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(13.2)cm 底径9.5cm 器高3.15cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
49	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.6)cm 底径(8.3)cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒・白色粒子を含む
50	側溝一括	土師器皿R種大型	口径12.6cm 底径8.1cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
51	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.3)cm 底径(9.5)cm 器高3.15cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む粉質土
52	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.5)cm 底径(8.5)cm 器高3.55cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡黄灰色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
53	側溝一括	土師器皿R種大型	口径13.6cm 底径9.4cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡灰褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む砂質土
54	側溝一括	土師器皿R種大型	口径12.9cm 底径8.4cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡灰褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
55	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.0)cm 底径(8.5)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨芯を含む
56	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.05)cm 底径(7.8)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
57	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(13.3)cm 底径(8.8)cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
58	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.2)cm 底径(9.4)cm 器高2.85cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む粉質土
59	側溝一括	土師器皿R種大型	口径12.15cm 底径7.7cm 器高3.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む弱砂質土
60	側溝一括	土師器皿R種大型	口径(12.6)cm 底径(8.6)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む粉質土
61	側溝一括	白色土師器皿T種大型	口縁部片 胎土は乳白色
62	側溝一括	白色土師器皿T種大型	口縁部片 胎土は乳白色 縁に油煤少量付着
63	側溝一括	瓦器小皿	器高0.55cm 外底部指頭痕 内折れ 胎土は明灰色、器表は灰色

表 8　出土遺物観察表（8）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
64	側溝一括	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は明灰色、長石・砂粒含む
65	側溝一括	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色微粒子含み緻密
66	側溝一括	常滑片口鉢Ⅰ類	口径(31.1)cm　高台径(15.0)cm　器高14.7cm　輪積み成形　胎土は灰色、長石・石英含む　内底面は使用により少し磨耗激する
67	側溝一括	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は暗灰色、長石・石英・黒色粒多く含む　器表茶褐色
68	側溝一括	常滑片口鉢Ⅱ類	口径(29.3)cm　底径(14.9)cm　器高11.3cm　輪積み成形　胎土は暗灰色、長石含む　器表明茶褐色　内側全体に厚めの降灰
69	側溝一括	渥美甕	胴部片　胎土は灰色、器表は暗灰色　格子叩き目
図23－70	側溝一括	常滑甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒子・気泡含む　器表茶褐色　内側厚めに降灰
71	側溝一括	渥美甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒子少量含む　器表灰黒色
72	側溝一括	渥美甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は淡灰褐色、白色粒・気泡含む　器表茶褐色
73	側溝一括	白磁端反碗	口縁部片　ロクロ成形　素地は白色、黒色微粒子含む　釉は青味灰白色透明
74	側溝一括	竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗	口径(17.2)cm　ロクロ成形　素地は明灰色　釉は淡青色透明
75	側溝一括	竜泉窯青磁蓮弁文碗	底径(3.6)cm　ロクロ成形　削り出し高台、畳み付きのみ露胎　素地は淡灰色　釉は灰緑色半透明、大き目の貫入
76	側溝一括	竜泉窯青磁折れ縁鉢	口縁部片　ロクロ成形　素地は明灰色、黒色粒子含む　釉は青灰色不透明
77	側溝一括	竜泉窯青磁碗	画花文または大宰府Ⅱ類碗　底径6.0cm　ロクロ成形　削り出し高台、畳み付きより内側は露胎　素地は灰色、黒色粒子多く含む　釉は淡灰緑色半透明
78	側溝一括	平瓦	厚1.9cm　胎土は明灰色、砂質、礫を含む　凸面は縄目、凹面は布目のち撫で消し
79	側溝一括	平瓦	厚2.7cm　胎土は白色粒・黒色粒・礫を含む灰色土　凸面は格子叩き目、凹面は布目少し残る
80	側溝一括	東海系平瓦	厚2.2cm　胎土は橙灰色、白色微粒子含み堅く焼き締まる　凸面は縄目、凹面は粗い布目
81	側溝一括	東海系丸瓦	厚2.0cm　胎土は淡灰橙色、白色粒・砂粒を含み、堅く焼き締まる　表面は明茶褐色　凸面は布目のあとナデ消し、凹面は布目
82	側溝一括	漆器皿	口径8・9cm　底径6.0cm　器高2.0cm　黒漆塗り、平高台で外底面まで施漆　内・外とも朱漆で橘文を描く
83	側溝一括	漆器椀	底径(7.1)cm　黒漆塗り、無文　平高台で外底面は木地、磨耗してデコボコしている
84	側溝一括	箸	長23.2cm　幅0.65cm　厚0.6cm　片口
85	側溝一括	箸	長23.3cm　幅0.7cm　厚0.3cm　両口
86	側溝一括	箸	長21.65cm　幅0.7cm　厚0.3cm　両口
87	側溝一括	串状木製品	残存長(18.5)cm　幅0.8cm　厚0.75cm　一端が尖り、炭化している
88	側溝一括	ヘラ状木製品	残存長(17.9)cm　幅1.0cm　厚0.7cm
89	側溝一括	串状木製品	長15.4cm　幅0.9cm　厚0.6cm
90	側溝一括	ヘラ状木製品	長14.6cm　幅1.1cm　厚0.4cm
91	側溝一括	棒状木製品	長21.5cm　幅1.2cm　厚0.5cm　一端は斜めに切断　反対の端は丸く削りを施し炭化
92	側溝一括	ヘラ状木製品	残存長(13.1)cm　幅1.4cm　厚0.7cm
93	側溝一括	棒状木製品	長38.5cm　幅1.0cm　厚0.8cm　一端にU字型の削り
94	側溝一括	折敷	長18.0cm　残幅(5.7)cm　厚0.3cm　柾目材
95	側溝一括	円板状木製品	復元径(21)cm　残幅(2.4)cm　厚(0.8)cm　柾目材
96	側溝一括	不明木製品	長8.1cm　幅2.6cm　厚1.0cm　断面蒲鉾型
97	側溝一括	部材	長(9.4)cm　幅16.4cm　厚2.8cm　一部炭化
図24－1	中世以前	土師器坏	底径5.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は赤橙色、雲母片・白色粒子・砂粒を含む
2	中世以前	須恵器坏	底径6.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　胎土は灰色、白色粒子・砂粒を含む
3	中世以前	須恵器坏	高台径(7.8)cm　回転ロクロ　貼り付け高台　胎土は灰色、白色日粒子を含み堅緻
4	遺構外採集	土師器皿R種小型	口径8.9cm　底径7.3cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む砂質土
5	遺構外採集	東遠系山皿	口径8.0cm　底径3.8cm　器高31.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　胎土は明灰色、黒色粒子・白色粒子少し含み堅緻　降灰あり　外底面に薄く墨書「方」
6	遺構外採集	鍔鍋	口径(14.6)cm　胎土は黄灰白色　胴部にササラ状工具痕、煤付着
7	遺構外採集	南伊勢系土鍋	口縁部片　胎土は淡灰褐色、白色粒子・砂粒を多く含む　器表は肌色～乳白色
8	遺構外採集	渥美甕	頚部～肩部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒子・黒色粒子含む　器表は暗灰色　叩き目あり
9	遺構外採集	渥美甕	口縁部～肩部片　輪積み成形　胎土は灰色、白色粒子・黒色粒子含む　器表は灰色　叩き目あり
10	遺構外採集	下駄歯	長10.3cm　幅12.0cm　厚2.4cm
11	遺構外採集	部材	長(30.0)cm　幅6.1cm　厚3.4cm　四角い刻みの部分に鉄くぎ残存　一部炭化

第4章　まとめと考察

1．遺構の変遷について

本地点調査で発見された遺構について、その変遷をあらためてまとめておきたい。ただし平坦面の方はほとんど基盤層近くまで後世に削りとられているため、残存遺構についても構築年代の詳細はわからず、年代別に面の変遷を追うこともできない。結局、本項記述の主体は小町大路側溝とその関連遺構についてのものとなる。検出した 10 条の側溝に関しては、それが全面的な改修であるのかあるいは浚渫程度のものなのかという判断はつきかねるため、ここではすべての側溝を同等に扱う。

なお、以下で小町大路幅を推測する場合に本地点対岸として引き合いに出す「地点 27」（図 1 地点番号）は、「若宮大路周辺遺跡群」小町二丁目 402 番 9 地点（馬淵・伊丹 2007）を指す。

大路の東西側溝間の距離は、側溝中心軸間の数値である。側溝間の距離を測定する主目的は大路幅を知ることにある。中世日本各地の都市計画を比較するためにも、これは不可欠の作業であると考えるが、それには統一的な測定法が前提となる。道路幅の測定には、都城でおこなわれているような築地または土塁の中心軸間の距離を使うのも有効であろう。しかし、鎌倉においては現在までに大路そのものはもちろん、築地や土塁の痕跡も検出されていないため、ここではかねて筆者が若宮大路においておこなったと同様（馬淵 1987／馬淵ほか 1996）、側溝中心軸間の距離を用いる。なお、本調査においては、大半の側溝の東岸が東側調査区外にあり、全体を把握できた例は少ない。そのため、数値の多くは推計によったことを了解していただきたい。

中世Ⅰ期

小町大路側溝 10 の時期が相当する。調査区の限りでこれより古い側溝はなく、大路反対側の（東側）地点 27 で発見されたような自然流路も存在しない。おそらく源頼朝入部直後、鎌倉時代の最初の大路側溝であろう。地点27では「第２期」（「３面」）が対応する。なお、若宮大路の側溝でいえば、やはり当初は逆台形を呈しており、本址との年代的な共通性は注意を要する。

上部幅は現況で 235cm 以上、おそらく 3m近くに復元される。深さは平坦面から 2.5mほどもある逆台形の大溝である。護岸設備については、ほとんどを後世の側溝に削られているためか、存否はわからない。大路東側溝のうち鎌倉時代初期のものとの間隔は、中心軸で 22m前後である。

中世Ⅱ期

小町大路側溝 8 の時期になる。本址に特定される遺物を欠くため年代判定は困難だが、前後の側溝との相対的な関係から、12 世紀末～ 13 世紀第 1 四半期に位置づけたい。断面形は逆台形のままで変わらないが、側溝 10 より 10 ～ 20cm ほど底が上がり、幅も底面で 175cm 程度と大幅に縮小される。また、側板こそ残っていないものの、東岸には杭がよく残っており、護岸の施設のあったことがわかる。10 の浚渫というより、大路側溝の全面的な改修と考えるべきであろう。

大路反対側の地点 27 調査との対比ではやはり「第２期」に相当する。側溝個別の対応関係の判断には困難がともなうので厳密な数値は得づらいが、地点 27「第２期」とされる「第３面」検出の側溝との間隔は、概測で 22 ～ 23mとなる。

中世Ⅲ期

小町大路側溝 9 の時期が相当する。先章で述べたとおり、8 との新旧関係の判定には微妙なとこ

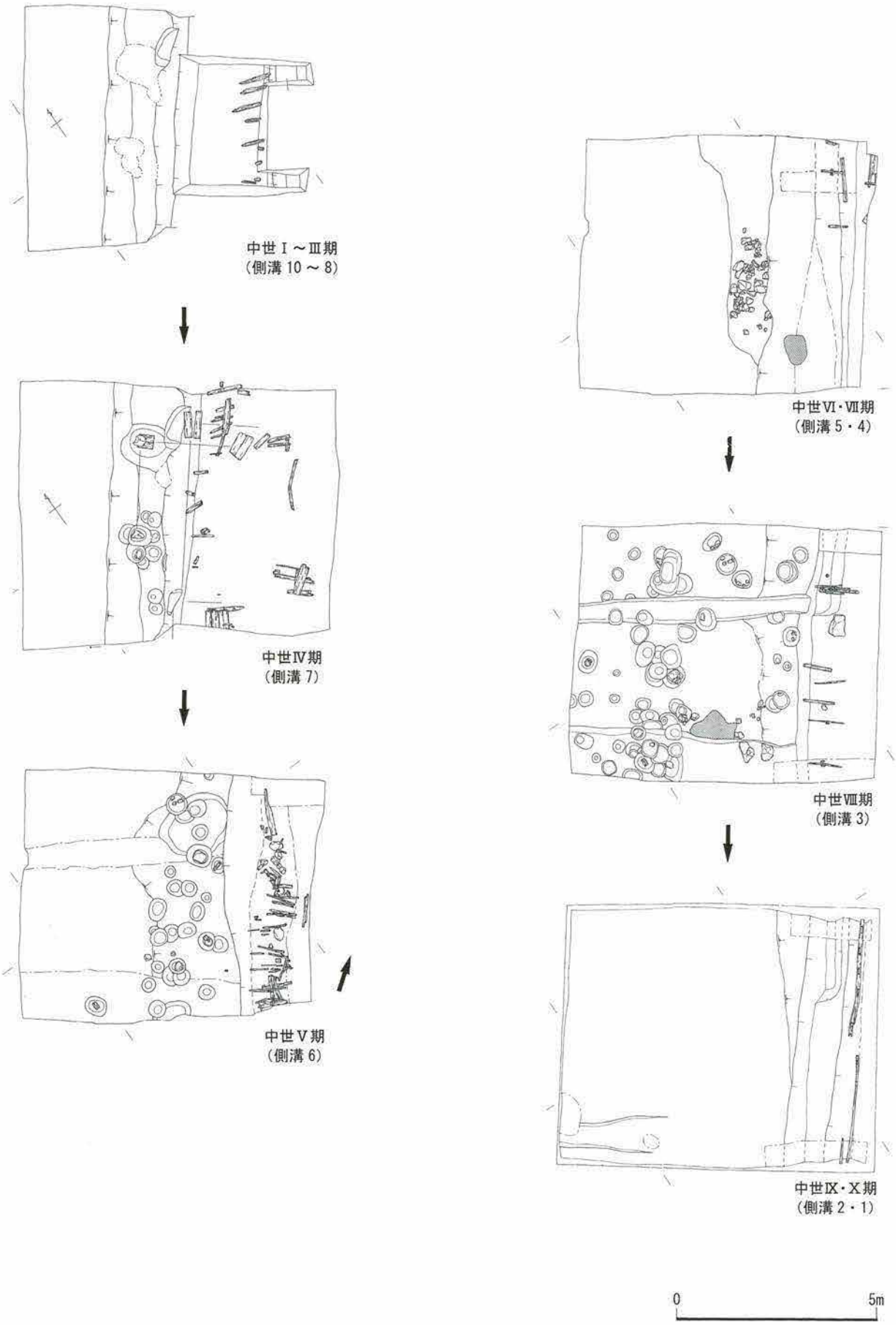

中世Ⅰ～Ⅲ期
（側溝 10 ～ 8）
中世Ⅳ期
（側溝 7）
中世Ⅴ期
（側溝 6）
中世Ⅵ・Ⅶ期
（側溝 5・4）
中世Ⅷ期
（側溝 3）
中世Ⅸ・Ⅹ期
（側溝 2・1）
0
5m

図 25　遺構変遷図

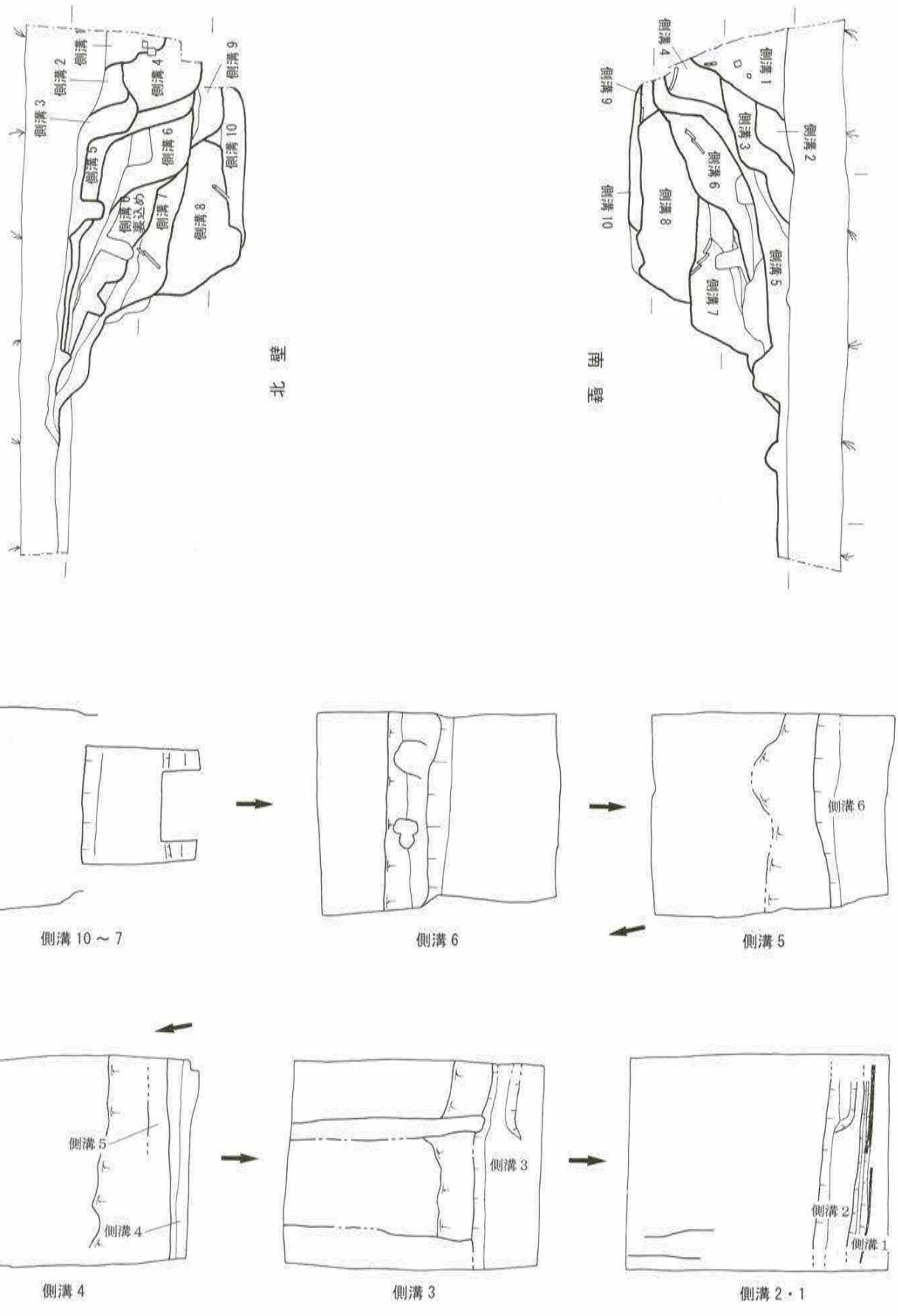


図 26　小町大路側溝変遷模式図

ろがあるものの、ここでは本址が新しいと判断した。年代は、これも前後の相対関係から 13 世紀第 1 四半期を充てたい。深さは平坦面から 2.1mほどもあり、幅はわからないが、これも相当な規模があると推測できる。大路東側の調査地点 27 との対比では依然「第 2 期」に含まれる。

地点 27 検出溝との対応関係は難しいが、第 2 期の側溝のうち層位的に中位のものとあえて組み合わせれば、ほぼ 23m前後となる。

中世Ⅳ期

小町大路側溝 7 の時期が該当する。溝幅は 2.5mになり、深さは 185cm と、幅に比べ浅くなる。断面はそれ以前の逆台形と異なって箱形に近くなり、上層溝に削られて遺存状態こそよくないものの、この時点でしっかりした木枠を持つようになる。木枠の幅は、東半部が調査区外にあり正確にはわからないが、3mほどになるのではないか。

年代は 13 世紀第 1 四半期～第 2 四半期。若宮大路側溝が、やはりこの時期箱形の断面で木枠を備えるようになる。共通性に注意する必要があろう。この点については後述する。

地点 27 の大路東側との対比は相変わらず難しいが、年代からいって「第 3 期」に相当すると考えたい。側溝でいえば東側にも木枠の一部を残すものがあり（馬淵・伊丹 2007, 196 頁図 15）、対応関係が認められる。このとき東西側溝間の距離はもっとも大きく、推定で約 24mである。

橋脚が検出されていることに注目したい。この時期にこの場所に東西の道路が敷設されたことになる。つまり、あらたな街割区画がここに出現したことを意味する。これはきわめて重大な事実であり、背景については後論する。

中世Ⅴ期

小町大路側溝 6 の時代である。平坦面からの深さ 2mを超え、幅は調査区内でも 180 cmを測る。土層堆積状況から推測すれば幅は 3mほどにもなろう。護岸設備については、側板の遺存状態は良好ではないが、杭などの部材がよく残っているので、断面箱形の木枠を備えていたことが推測できる。規模は鎌倉時代中期～後期の最盛期若宮大路側溝に匹敵し、護岸にも共通性が認められる。ただし本址でいえば、出土遺物に土師器皿 T 種や竜泉窯青磁画花文碗などが多く含まれている。これらはかねて筆者が主張しているように、13 世紀第 2 四半期前半までに姿を消すとみられるところから（馬淵 1998 ほか）、ここでの年代も 13 世紀第 2 四半期としておきたい。

小町大路東西側溝の間隔は、前代よりも若干縮小し、約 22mとなる。

中世Ⅵ期

側溝 4 が該当する。大半削られているので幅は 1mほどしか残っていない。しかし深さは、上半部を失ってもなお平坦部から 2m近くあり、若宮大路側溝に匹敵する。溝の西半部しかとらえられなかったが、西岸護岸施設の木製部材が確認された。底面標高から推測して雪ノ下一丁目 400 番 1 地点（図 1 地点 4）の「側溝 3」に相当する可能性が高く、両者の軸線を延長させて計測すると側溝幅は約 3mになる。

位置的には大幅に東（小町大路側）に移行しており、地点 27 の小町大路東側溝との間隔は、27 の方にぶれ幅が小さいことを勘案すれば推定で 21m前後となる。

掘削時の錯誤から下層の側溝 6 と遺物の混入があった。そのため年代はやや流動的であるが、出土遺物のみでいえば、2 点の竜泉窯青磁画花文碗の存在、土師器皿 T 種の存在と同 R 種の形状から、ひとまずこれも前代と変わらず、13 世紀前半としておく。

中世Ⅶ期

側溝 5 の時期を充てたい。後世の側溝にほとんどを削り取られ、本来の姿をうかがい得ない。現況遺存部分は深さ 1m弱と浅く、断面は皿形を呈する。本址にともなう橋脚は確認できなかったが、平坦面からの落ち際に大小泥岩の集積が見られるのは、あるいは道路の痕跡かもしれない。

側溝 5 出土遺物は混乱しているが、年代は大きくみてこれも 13 世紀前半に属する。

中世Ⅷ期

側溝 3 の時期が相当する。当該面西域の平坦部にはいくつもの柱穴がみられる。これは基盤層まで後世の削平がおよんでいてほとんどが同一面で検出されたためである。したがって、本来この層に帰属するのではない柱穴も含まれている可能性もある。

側溝 3 はこれまでのものに比べ、平坦面からの深さ 1mと浅くなる。側溝底面には護岸溝枠の束柱らしい杭が水流と直交方向に倒れていた。西側の平坦面には東西方向に2本の溝が平行して通じ、この間にある帯状の平坦面が道路である可能性が高い。これが道路であることは、その延長上の大路側溝中に橋脚の礎板らしい平たい凝灰岩が存在していることからも理解される。

このとき大路東西の側溝の間隔はおよそ 22mである。

側溝 3 の年代は 13 世紀中葉前後であるが、帯状平坦部の範囲内にある土師器集中部は同第 2 四半期とみられることから、全体としては 13 世紀前半～中葉としておきたい。

中世Ⅸ期

側溝 2 が相当する。多くを後代の側溝 1 に削られているが、幅 100 cm以上、深さ 85cm 以上を残す。側溝 1 に据えられた木枠などの控えにかかわる施設の可能性も消えないが、側溝 1 より 70cm ほども浅く、やはり独立した側溝とみるのが自然であろう。大路東側地点 27 検出の側溝との間隔は、21 ～ 22mとなる。

側溝 1 との遺物区分が厳密ではないが、図 5 にみる年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半の典型的な鎌倉時代後期の様相を呈している。1 が鎌倉時代いっぱいまで存続するとすれば、2 は相対的な位置づけから、13 世紀末ごろまでとしたい。

中世Ⅹ期

側溝 1 の時期になる。本地点に残る最後の小町大路側溝である。これより上部は後世に削り取られてほとんど残っていない。これまでで最も東に寄っており、大半が調査区外にある。調査区内には西側根太しか見えていない。幅は調査区内で 122 cmを超え、深さ 143cm 以上。深さはおそらく 1.5mほどになるのだろう。小町大路西側溝で同様の根太を持つ側溝は、地点 4（雪ノ下一丁目 400 番 1 地点）でも検出されている。地点 4 では層位的に同時期とみられる大路西側溝の東肩部分を検出した。本地点と地点 4 それぞれの根太を延長して算出した溝の間隔は約 3mである。これがこの時期の小町大路側溝とすれば、若宮大路側溝と同規格の溝を擁していたことになる。

北側の根太にはホゾ穴があるが、南側にはない。前代までこの位置には橋があり、この時期にも見つかってはいないものの存在していた可能性は低くない。その点で他と異なる構造を持っていたのかもしれない。平坦部は後代に削られ、ほとんどの遺構が失われているが、東西溝 1 から道路の存在が推測できる。

年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半、すなわち鎌倉時代後期いっぱいとしておきたい。

2．まとめ

調査成果の要点を以下のように整理し、まとめとする。

小町大路側溝の形態変化について

鎌倉時代初期、小町大路側溝はまず、逆台形の深い溝として現れ（「中世Ⅰ期」側溝 10）、位置をいくらか変えつつ、13 世紀第 1 四半期ごろまでその形状を保ちながら推移する（側溝 8・9）。そして、13 世紀第 1 四半期から同第 2 四半期にかけて形を大きく変える（「中世Ⅳ期」）。すなわち、幅に比べ深さが浅く、断面箱型の木枠を持つようになる（側溝 7）。そして以後箱型の木枠は、鎌倉時代後期を通じて維持される。つまり、側溝 7 の出現は、この地点の側溝構造における明白な画期を示している。

この点に関して注目すべきは、若宮大路側溝においても、この時期同様の変化が見られることである。すなわち、若宮大路東側の側溝において、それまで逆台形もしくはＶ字形の断面を持っていたのが、13 世紀前半、箱型の木枠を備えるようになる。

かつて馬淵は、図 1 地点 8（「北条小町邸跡」雪ノ下一丁目 377 番 7 地点）の調査において、街割基本寸法の変化と年代からこの現象を、第三代執権北条泰時による街区再編事業の一環と考えたことがある（馬淵ほか 1996）。このとき木枠で示される溝幅はほぼ 3m（「溝 5・6」）、同時期に大路西側の側溝も同様の構造に整備される。この状況は少なくとも二ノ鳥居近くまでおよぶ。側溝と側溝の間隔は約 33m、年代的には大きくいって 13 世紀前半代に始まる。そして、この溝にともなう面上の建物柱間は、それまでの約 210cm 前後とは異なって一律に 200 ㎝弱に統一される。ここに見られるのは強力な規制によって街区が一新される状況であり、それは権力によってはじめて可能な事業であろう。年代からいってもこれこそが、嘉禄元年（1225）以後、新執権北条泰時がおこなった街区再編の具体的表現と考える。

とすると、本地点における木枠溝の出現も、その一環ととらえることができるのではないか。木枠の幅については、厳密な数値を欠くものの、3mほどになると推定される。この数値は若宮大路側溝のそれに匹敵する。しかし、小町大路のすべてにおよぶのか、執権亭あるいは第 3 次幕府（「若宮大路御所」）の存在したことが確実なこの 200m四方の区画のみにとどまるのかについては、現段階では判断を保留したい。

橋脚の出現とその意味

側溝 7 以後、小町大路側溝に橋が架けられるというあらたな要素がこの地に加わる。それはすなわち、この場所に東西の街路、すなわち街割の区画が敷設されたということでもある。年代は 13 世紀第 1 四半期から第 2 四半期。この時期ここに街路を敷設する意味とは何だろうか。

嘉禄元年(1225)7 月 11 日政子が死ぬと、百ヶ日も済まないうちに北条泰時は御所移転を計画する。はやくも 12 月、あらたな御所が宇津宮辻子に完成し、20 日には将軍九条頼経移徙の儀がおこなわれた。新御所の場所は、方違のために大御堂前の伊賀朝行亭を仮の本所とし、そこから西に 256 条 5 尺、南に 61 条の地を新御所の北西角とする。松尾剛次はその位置について図示しており、それによればやはり従来の推測どおりの場所に収まっている（松尾 1993）。ただし問題は、測距の起点である「大御堂前」という伊賀朝行亭の位置であって、この点で松尾の推定にはいささか問題なしとしない（馬淵 2003）。

さて、かねて想定されてきた宇津宮辻子御所（幕府）の北辺とは、調査区の南側を通る東西道に

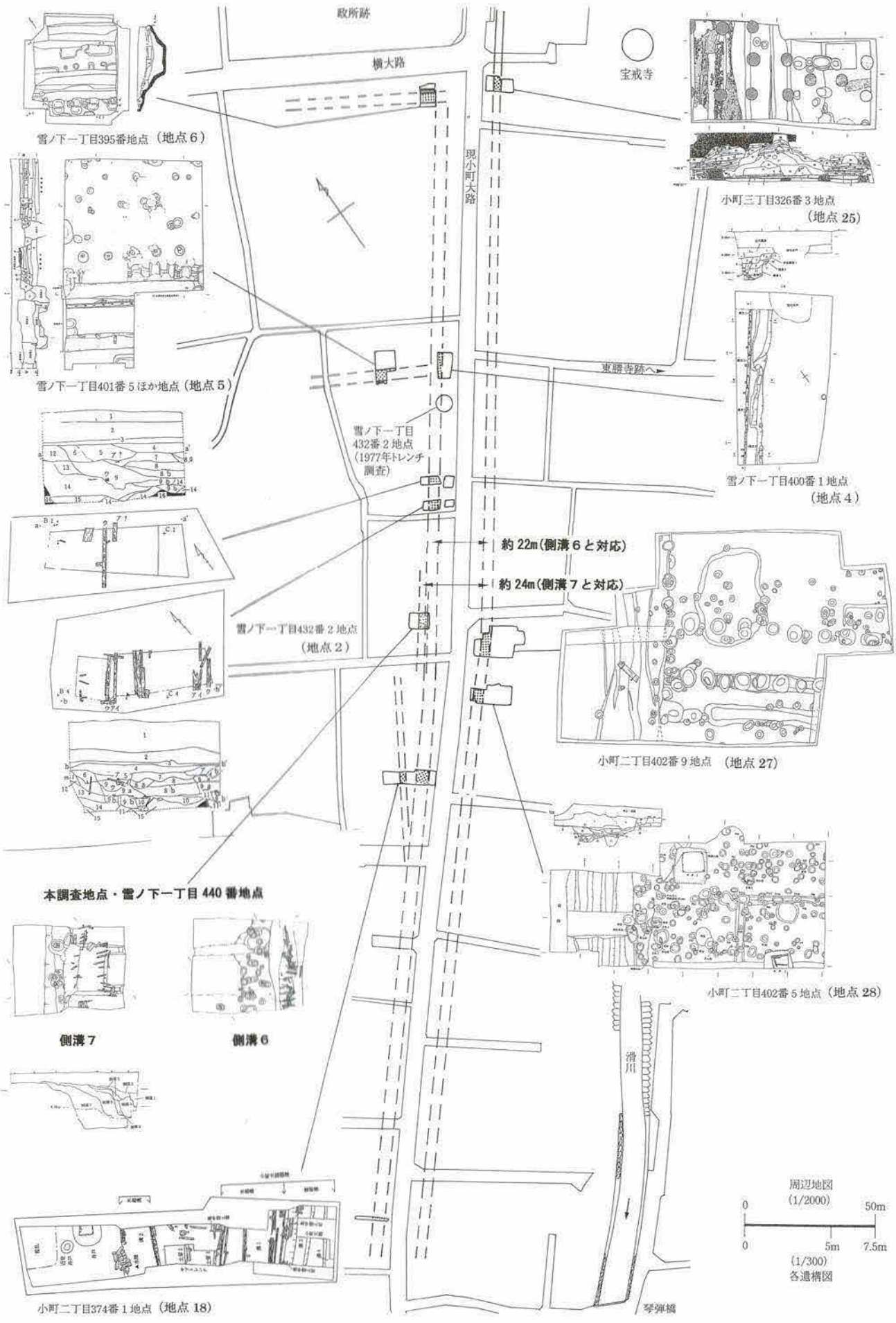


図 27　小町大路側溝対比図

ほかならない。本調査で発見された橋脚は、東西道の最初の姿であろう。側溝 7 にみられる構造変化の背景に北条泰時による街区再編があるとすれば、それにともなう橋脚を持つ道もまた、その時のものということになる。この橋脚は、宇津宮辻子御所が設置されたときにその北限とされた道のものと考える。

小町大路の幅について

本地点はかねて調査された地点 27 の大路を挟んだ対面位置に当たり、側溝が検出されたことによってこの場所での大路幅の推測が可能になった。先述のように道幅測定の基点とすべきものは鎌倉においてはまず側溝しかなく、ここでも本地点側溝と大路対面位置にある地点 27 検出の側溝中心軸間の距離によった。それによれば最小で 21m（側溝 4 の時代）、最大で 24m（側溝 7 の時代）となる。おそらく 22 ～ 23mが平均的な数値であろう。

この数値は、近年筆者が算出した鶴岡八幡宮前の東西道（「横大路」か）や二階堂大路の 20 ～ 21mとほぼ同等である（馬淵 2003・馬淵 2008）。もう少し資料増加に期待したいところだが、ひとまずは小町大路や二階堂大路あるいは横大路など、鎌倉内で若宮大路に次ぐ高規格の街路は 20 m強の幅員を持つ、といっておこう。これはあるいは 22mであって、若宮大路大路の三分の二という規格の存在を示唆しているのかもしれない。

引用・参考文献

松尾剛次 1993 『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館

馬淵和雄 1987 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 233 番 9 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3

馬淵和雄 1998 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

馬淵和雄 2002 「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目 400 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18（第 2 分冊）

馬淵和雄 2003 「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目 401 番 5 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19』

馬淵和雄 2008 「大倉幕府周辺遺跡群（№49）の発掘調査―雪ノ下天神前 562 番 30 地点―」『第 19 回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）　雪ノ下一丁目 377 番 7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12

馬淵和雄・伊丹まどか 2007 「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目 409 番 9 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23（第 2 分冊）

（馬淵）

第５章　北条小町邸跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

北条小町邸跡（鎌倉市雪ノ下一丁目 440 番）において行われた発掘調査で、小町大路側溝と確認される溝が少なくとも 7 条検出された。この側溝埋積土を中心に調査区北壁セクションより土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、北条小町邸跡周辺の植生変遷について検討した。

２．試料

試料は、調査区北壁の上段セクションおよび下段セクションより採取された 24 試料である。これら 24 試料の採取層準を図 1 に示した。以下に各試料について簡単に記す。

上段セクション（試料 1 ～ 12）:試料 1 はオリーブ黒色の砂質粘土、試料 2 は暗灰褐色の砂質粘土、試料 3 は黒色の砂質粘土で、土丹小片が散在している。試料 4 も黒色の砂質粘土で、小礫が認められる。試料 5 はやや砂質の黒色粘土、試料 6 ～ 9 はやや砂質の黒～黒褐色有機質粘土である。試料 10 は黒色の砂質シルト、試料 11 は黒色シルト、試料 12 は黒～黒褐色の有機質粘土である。これらのうち、試料 1 ～ 3 が側溝 1 に、試料 4 が側溝 4 に、試料 5 が側溝 5 に当たり、試料 6, 7 は側溝 6 の埋土、試料 8, 9 は側溝 6 の裏込め土で、試料 12 は側溝 9 に当たる。また、年代は側溝 1 が 13 世紀後半～14 世紀前半、側溝 4 および側溝 5 が 13 世紀前半、側溝 6 が 13 世紀第 2 四半期と考えられている。

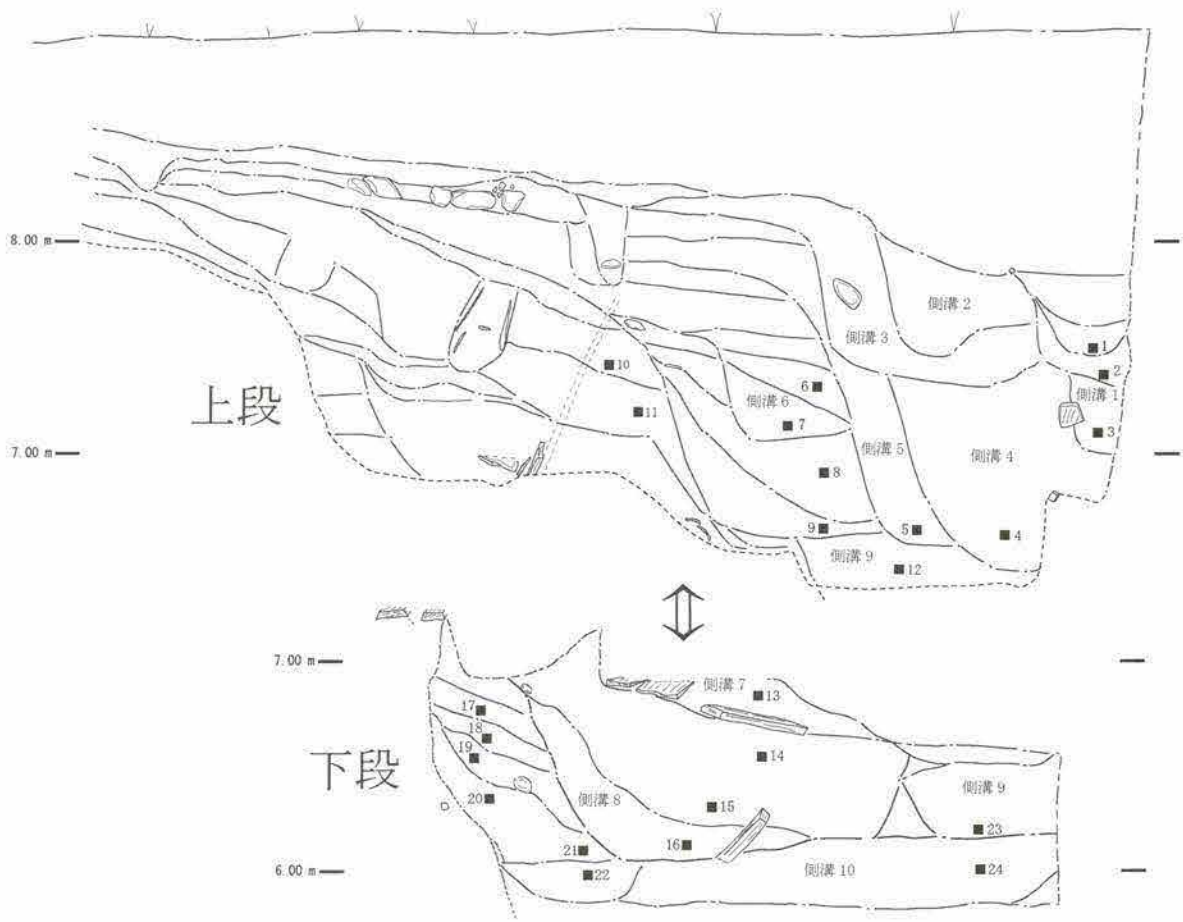


図１　試料採取地点付近の土層断面（調査区北壁）と試料採取層準（■）

下段セクション(試料13～24):試料13はやや砂質の黒～黒褐色粘土、試料14は黒褐色の有機質粘土、試料15～18はやや泥炭質の黒褐色粘土である。試料19は黒褐色の泥炭質粘土、試料20,21はやや砂質の黒～黒褐色有機質粘土、試料22は黒褐色の植物遺体で、黒色粘土が混入している。試料23はやや砂質の黒～黒褐色有機質粘土、試料24は黒色の有機質粘土がわずかに混じる砂礫である。これらのうち、試料13が側溝7に、試料14～22が側溝8に、試料23が側溝9に、試料24が側溝10に当たる。また、年代は側溝7が13世紀第1四半期～第2四半期、側溝8が12世紀末～13世紀第1四半期、側溝9が13世紀第1四半期と考えられており、側溝10は鎌倉時代の最初の大路側溝と推測されている。

3．分析方法

上記した24試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～5g、試料24は30g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

4．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉43、草本花粉42、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計89である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1（上段セクション）、表2（下段セクション）に、それらの分布を図2（上段セクション）、図3（下段セクション）に示した。なお、分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、試料5～7,9,10,14～16,22,24の10試料については樹木花粉の検出数が少なく、それを基数として算出すると検出された樹木花粉が異常に高率で示されてしまうことから分布図として示すことをひかえた。

上段セクション（図2）：草本花粉の占める割合が高く、最も低い試料1でも75%を越えている。その草本花粉ではイネ科が圧倒的に多く、全試料40%以上を示しており、分布図で示した試料のなかでは試料2が73%と非常に高い出現率を示している。次いで多く得られているのはヨモギ属であるが、出現率は10%前後である。アカザ科－ヒユ科やカヤツリグサ科が5%前後を示しており、ソバ属は上部試料で連続して検出されている。その上部試料でオオバコ属がほぼ連続して得られており、その他、つる植物のヘクソカズラ属や水生植物のガマ属、オモダカ属などが若干検出されている。樹木花粉ではスギが多く検出されているが、上部に向かい減少している。15%前後を示しているコナラ属アカガシ亜属も上部試料において急速に出現率を下げており、コナラ属コナラ亜属にも同様の傾向が認められる。反対にマツ属複維管束亜属（アカマツ，クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）は上部試料で急増しており、同様の傾向がツガ属にも認められる。その他、針葉樹ではモミ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、落葉広葉樹のクマシデ属－アサダ属やニレ属－ケヤキ属、常緑広葉樹のシイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）などが観察されている。

下段セクション(図3):やはり草本花粉の占める割合は高く、多くの試料で80%以上を示している。その大半がイネ科で占められ、図に示すことができなかった試料22では出現率が約95%に達している。次いで多く観察されている

表1　産出花粉化石一覧表（その1：上段）

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
マキ属	*Podocarpus*	1	–	1	3	1	–	1	–	2	1	2	3
モミ属	*Abies*	6	3	2	4	2	–	–	2	1	1	2	2
ツガ属	*Tsuga*	15	7	3	2	3	5	1	1	–	2	6	4
トウヒ属	*Picea*	1	1	–	–	–	–	–	2	–	1	1	1
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	–	–	1	1	1	–	–	–	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	62	62	28	17	4	2	3	21	7	8	8	19
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	13	7	11	7	1	1	2	3	1	2	4	8
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	1	–	–	1	3	2	–	1	–	1	2	3
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	7	8	17	21	14	6	13	29	9	13	43	20
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	2	–	6	3	2	4	1	5	1	2	2	9
ヤナギ属	*Salix*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ヤマモモ属	*Myrica*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
ペカン属	*Carya*	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya*-*Juglans*	–	2	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	1	1	7	3	–	–	–	3	–	–	–	2
カバノキ属	*Betula*	–	2	–	1	–	–	–	1	1	1	–	–
ハンノキ属	*Alnus*	2	3	4	1	–	1	–	4	–	1	1	–
ブナ	*Fagus crenata* Blume	3	3	2	–	–	–	–	3	–	–	–	1
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	4	7	7	12	5	3	1	8	4	1	9	6
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	–	3	7	18	8	5	7	13	13	4	12	15
クリ属	*Castanea*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis* - *Pasania*	2	1	2	2	1	2	–	4	4	3	3	3
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* - *Zelkova*	2	3	4	1	1	–	1	1	–	–	2	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis*-*Aphananthe*	–	1	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イスノキ属	*Distylium*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
フウ属	*Liquidambar*	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
サンショウ属	*Zanthoxylum*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
シラキ属	*Sapium*	1	4	–	–	–	–	–	–	1	–	–	2
ウルシ属	*Rhus*	–	1	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–
ニシキギ科	Celastraceae	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
カエデ属	*Acer*	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	1
ムクロジ属	*Sapindus*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ブドウ属	*Vitis*	–	1	–	3	–	–	1	1	2	1	1	–
マタタビ属近似種	cf. *Actinidia*	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ウコギ科	Araliaceae	3	–	–	1	–	–	–	1	–	1	–	–
アオキ属	*Aucuba*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
エゴノキ属	*Styrax*	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
イボタノキ属	*Ligustrum*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
トネリコ属	*Fraxinus*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ガマズミ属	*Viburnum*	1	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
草本													
ガマ属	*Typha*	1	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	1
サジオモダカ属	*Alisma*	–	–	–	–	–	–	–	1	2	–	–	–
オモダカ属	*Sagittaria*	–	–	–	1	1	–	–	2	1	1	–	–
イネ科	Gramineae	334	969	654	809	170	344	234	899	388	235	439	918
カヤツリグサ科	Cyperaceae	21	20	16	43	26	21	19	70	18	109	50	39
ツユクサ属	*Commelina*	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イボクサ属	*Aneilema*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ユリ科	Liliaceae	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	4	4
クワ科	Moraceae	–	1	1	5	–	2	1	3	4	7	1	3
ギシギシ属	*Rumex*	–	9	3	1	–	–	–	–	–	–	–	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	1	1	8	–	1	1	2	2	1	–	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
他のタデ属	other Polygonum	–	1	1	1	–	–	1	–	–	–	1	2
ソバ属	*Fagopyrum*	–	2	2	1	–	–	–	–	–	–	–	–
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	41	46	66	106	90	55	66	21	18	22	55	28
スベリヒユ属	*Portulaca*	–	1	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	2	2	3	1	1	1	–	8	1	3	3
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	1	5	6	2	1	1	2	1	1	–	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	3	5	6	–	–	1	1	–	1	1	–	–
タケニグサ属	*Macleaya*	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アブラナ科	Cruciferae	10	3	15	34	12	8	11	–	14	5	111	91
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
他のバラ科	other Rosaceae	1	–	1	3	1	–	–	–	1	–	–	2
ノアズキ属	*Dunbaria*	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
他のマメ科	other Leguminosae	2	1	–	2	1	1	1	–	1	–	4	3
フウロソウ属	*Geranium*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ツリフネソウ属	*Impatiens*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イチビ属	*Abutilon*	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
セリ科	Umbelliferae	2	–	5	58	2	1	1	3	3	4	11	1
シソ科	Labiatae	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	3
ナス属	*Solanum*	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	1	–
オオバコ属	*Plantago*	1	–	1	1	–	–	–	–	1	1	–	–
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia* - *Galium*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ヘクソカズラ属	*Paederia*	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	3	1
オミナエシ属	*Patrinia*	1	2	–	–	1	–	–	2	–	–	2	3
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora* - *Campanula*	–	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	1
ベニバナ属	*Carthamus*	–	–	1	–	1	–	1	–	2	–	–	–
ヨモギ属	*Artemisia*	69	69	152	179	27	42	29	125	87	33	146	170
他のキク亜科	other Tubuliflorae	8	11	13	86	6	15	1	16	7	2	4	15
タンポポ亜科	Liguliflorae	11	15	6	18	5	18	7	20	6	26	26	31
シダ植物													
ゼンマイ科	Osmundaceae	4	4	1	2	2	–	1	–	2	–	4	3
サンショウモ	*Salvinia natans*	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
単条型胞子	Monolete spore	29	23	16	23	4	23	8	23	8	13	27	13
三条型胞子	Trilete spore	5	5	2	8	2	1	1	8	2	7	1	20
樹木花粉	Arboreal pollen	128	124	106	107	46	31	31	107	47	43	102	102
草本花粉	Nonarboreal pollen	510	1164	955	1370	348	513	376	1166	565	450	862	1324
シダ植物胞子	Spores	39	32	19	33	8	24	10	31	12	20	33	36
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	677	1320	1080	1510	402	568	417	1304	624	513	997	1462
不明花粉	Unknown pollen	17	9	6	13	11	7	8	8	13	17	8	16

T.－C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表2　産出花粉化石一覧表（その２：下段）

和名	学名	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
樹木													
マキ属	*Podocarpus*	–	–	2	–	10	6	5	3	3	–	2	–
モミ属	*Abies*	3	1	1	–	2	5	11	5	3	–	2	1
ツガ属	*Tsuga*	1	1	1	1	4	11	11	6	4	1	9	1
トウヒ属	*Picea*	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	7	1	–	1	7	6	6	4	3	1	7	6
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	6	–	–	–	3	1	5	1	1	–	3	4
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	2	–	–	–	4	3	6	5	5	–	3	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	45	10	15	4	13	41	66	38	25	2	20	10
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	11	2	4	–	2	4	8	4	3	1	6	1
ヤナギ属	*Salix*	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
ヤマモモ属	*Myrica*	–	–	–	–	–	1	–	1	–	–	–	–
ペカン属	*Carya*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	1	–	1	–	1	–	–	–	1	–	2	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	2	–	–	–	1	1	2	3	7	–	3	4
カバノキ属	*Betula*	–	1	1	–	1	–	1	–	–	–	1	–
ハンノキ属	*Alnus*	2	–	–	–	–	–	1	1	1	–	2	–
ブナ	*Fagus crenata* Blume	1	–	1	–	–	–	–	1	1	–	–	1
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	7	3	–	1	6	8	10	4	6	–	9	4
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	13	2	6	6	29	12	19	18	28	–	18	6
クリ属	*Castanea*	–	–	–	–	3	1	–	–	–	–	3	–
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	2	–	1	–	7	1	4	2	5	–	4	–
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	–	3	–	1	1	2	5	3	–	4	1
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イスノキ属	*Distylium*	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
フウ属	*Liquidamber*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サクラ属近似種	*cf. Prunus*	1	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
サンショウ属	*Zanthoxylum*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
シラキ属	*Sapium*	–	1	2	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ウルシ属	*Rhus*	–	–	–	–	2	–	–	1	–	–	–	–
ニシキギ科	Celastraceae	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
カエデ属	*Acer*	–	–	1	10	3	–	–	–	–	–	4	–
ムクロジ属	*Sapindus*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ブドウ属	*Vitis*	–	–	1	1	2	–	–	–	–	–	–	–
マタタビ属近似種	*cf. Actinidia*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–
ウコギ科	Araliaceae	–	–	–	–	1	–	–	–	2	–	1	–
アオキ属	*Aucuba*	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
エゴノキ属	*Styrax*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イボタノキ属	*Ligustrum*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
トネリコ属	*Fraxinus*	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
ガマズミ属	*Viburnum*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
草本													
ガマ属	*Typha*	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
サジオモダカ属	*Alisma*	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–
オモダカ属	*Sagittaria*	–	–	–	–	–	1	1	–	1	–	–	–
イネ科	Gramineae	514	652	412	133	225	606	582	872	1064	1203	604	204
カヤツリグサ科	Cyperaceae	64	35	8	10	17	42	60	38	35	13	44	2
ツユクサ属	*Commelina*	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
イボクサ属	*Aneilema*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ユリ科	Liliaceae	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
クワ科	Moraceae	2	1	10	6	5	2	–	1	3	–	1	1
ギシギシ属	*Rumex*	–	–	3	–	1	–	–	–	–	–	2	–
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	6	1	1	1	–	–	3	1	–	–	–	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–
他のタデ属	other Polygonum	–	1	5	–	2	5	3	6	3	–	4	2
ソバ属	*Fagopyrum*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	41	15	94	14	37	45	53	34	41	3	46	14
スベリヒユ属	*Portulaca*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3	–	4	1	3	6	8	3	1	1	6	1
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	–	–	2	–	–	1	1	–	–	7	–
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	4	1	8	2	–	–	1	1	–	–	1
タケニグサ属	*Macleaya*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
アブラナ科	Cruciferae	7	6	2	2	8	12	12	13	8	2	28	4
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
他のバラ科	other Rosaceae	–	–	1	1	3	–	1	–	–	–	1	–
ノアズキ属	*Dunbaria*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
他のマメ科	other Leguminosae	–	22	3	1	4	–	1	2	1	–	4	–
フウロソウ属	*Geranium*	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–
ツリフネソウ属	*Impatiens*	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イチビ属	*Abutilon*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アリノトウグサ属	*Haloragis*	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
セリ科	Umbelliferae	–	4	2	3	13	2	1	1	1	–	4	3
シソ科	Labiatae	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–
ナス属	*Solanum*	–	–	2	1	–	–	–	1	–	–	–	–
オオバコ属	*Plantago*	2	1	4	–	1	2	1	–	3	–	3	1
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	2	–
ヘクソカズラ属	*Paederia*	1	–	–	–	14	1	–	–	1	–	1	–
オミナエシ属	*Patrinia*	–	1	2	2	3	–	–	1	–	–	1	1
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ベニバナ属	*Carthamus*	1	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ヨモギ属	*Artemisia*	84	373	192	973	55	59	71	135	139	36	252	51
他のキク亜科	other Tubuliflorae	7	5	14	190	5	13	8	9	7	1	24	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	19	2	8	352	6	28	24	13	24	2	196	4
シダ植物													
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	–	1	–	2	5	4	–	1	–	1	2
サンショウモ	*Salvinia natans*	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
単条型胞子	Monolete spore	25	6	8	15	49	19	24	11	12	1	34	7
三条型胞子	Trilete spore	7	10	7	3	4	3	8	5	9	–	19	1
樹木花粉	Arboreal pollen	106	25	41	25	104	105	159	104	103	5	104	41
草本花粉	Nonarboreal pollen	754	1129	772	1702	404	825	832	1134	1333	1261	1238	294
シダ植物胞子	Spores	34	16	16	18	55	27	37	16	22	1	54	10
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	894	1170	829	1745	563	957	1028	1254	1458	1267	1396	345
不明花粉	Unknown pollen	22	7	4	9	21	22	23	15	19	4	27	3

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

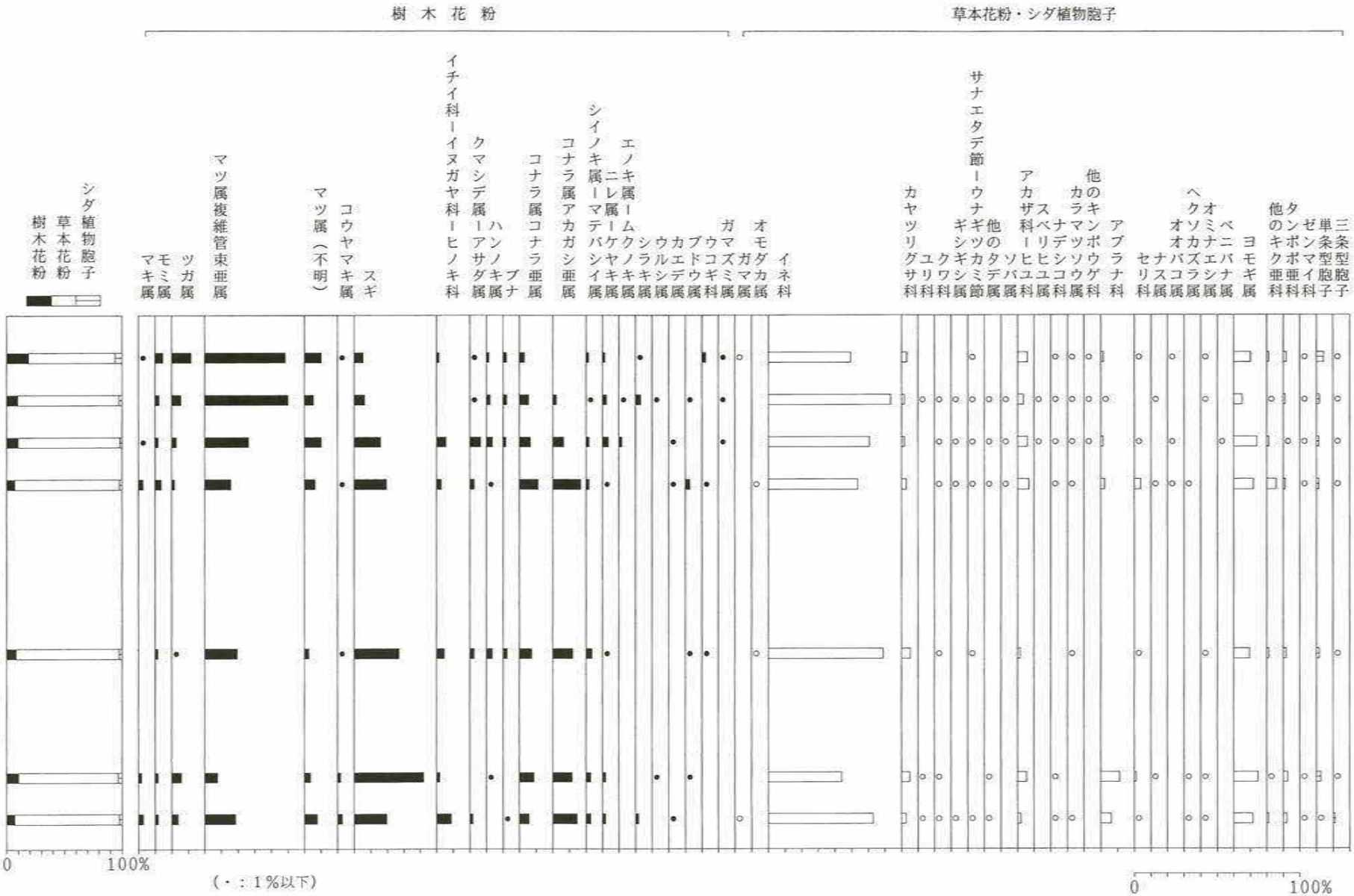


図2　北条小町邸跡調査区北壁上段セクションの主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

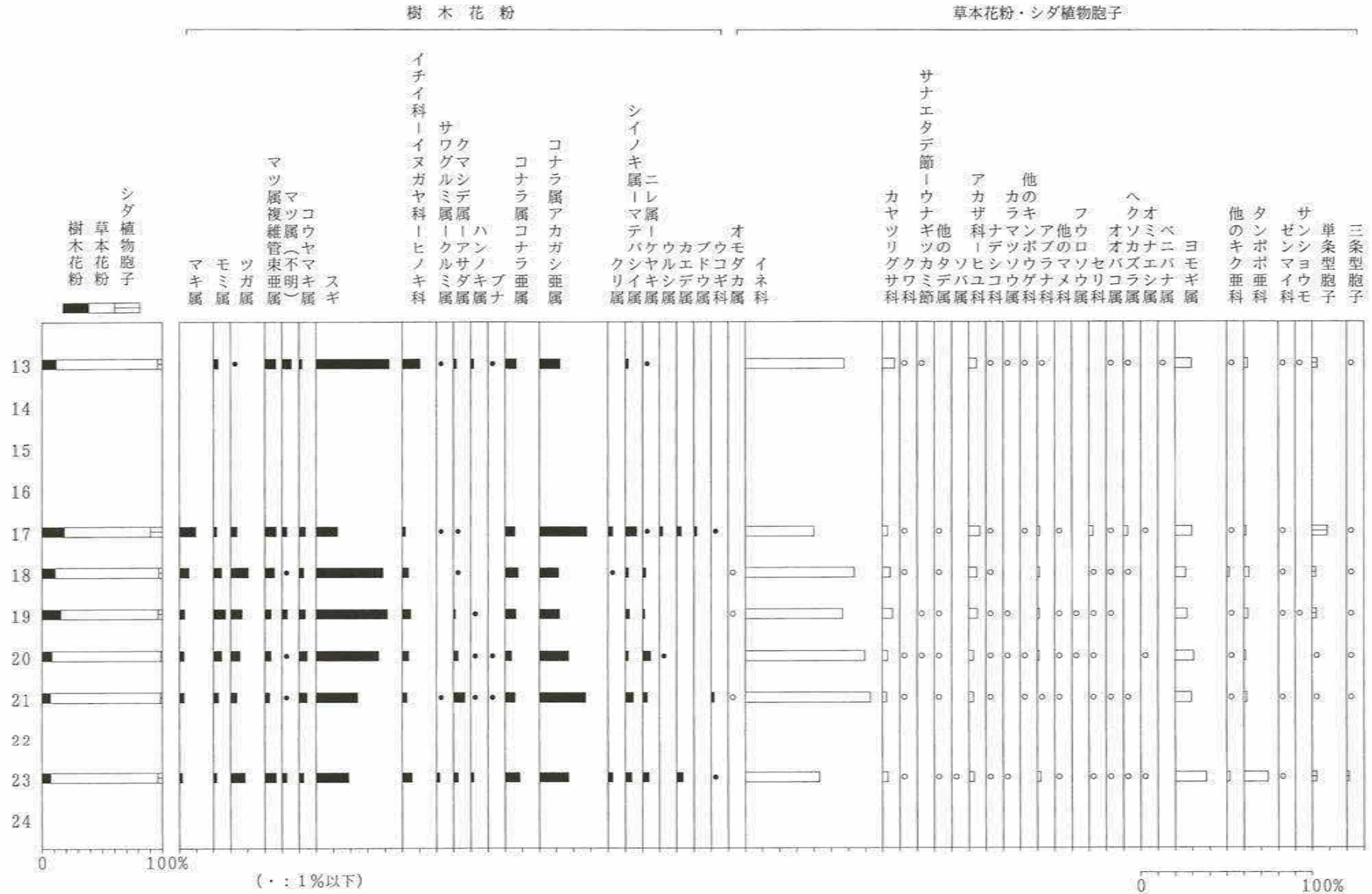


図3　北条小町邸跡調査区北壁下段セクションの主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

のはヨモギ属であるが、多くは 10% に達していない。カヤツリグサ科やアカザ科－ヒユ科が 5% 前後を示しており、タンポポ亜科は試料 23 で突出した出現を示している。その他、オオバコ属やヘクソカズラ属が多くの試料で観察されている。樹木花粉ではスギが最も多く、試料13や19では40%を越えている。次いでアカガシ亜属が多く、大半の試料が 10 ～ 20% の出現率を示している。また、ニヨウマツ類が上部に向かい漸増しており、マキ属にも同様の傾向が認められる。その他、針葉樹のモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、ヒノキ類、広葉樹のコナラ亜属、シイ類が 5% 前後の出現率を示している。

5． 北条小町邸跡周辺の古植生

上記した花粉分析結果および検出された各側溝の年代から北条小町邸跡周辺の植生変遷について検討を試みた。

12 世紀末から 13 世紀初め頃（図 3：試料 13 ～ 24）の鎌倉周辺丘陵部では斜面部を中心にスギ林が成立していたと推測される。またアカガシ亜属やシイ類を中心とした照葉樹林も丘陵の尾根部に林分を広げていたとみられ、マキ属、モミ属、コウヤマキ属、ヒノキ類といった針葉樹類や落葉広葉樹のクマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属なども一部に生育していたと推測される。さらにニヨウマツ類の二次林も一部に成立しており、分布を拡大しつつあったとみられる。一方、試料採取地点周辺ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、シダ植物などの雑草類が多く生育していたものと推測される。さらに道端雑草のオオバコ属も生育していたとみられ、これらに絡まるようにつる植物のヘクソカズラ属が分布していたとみられる。

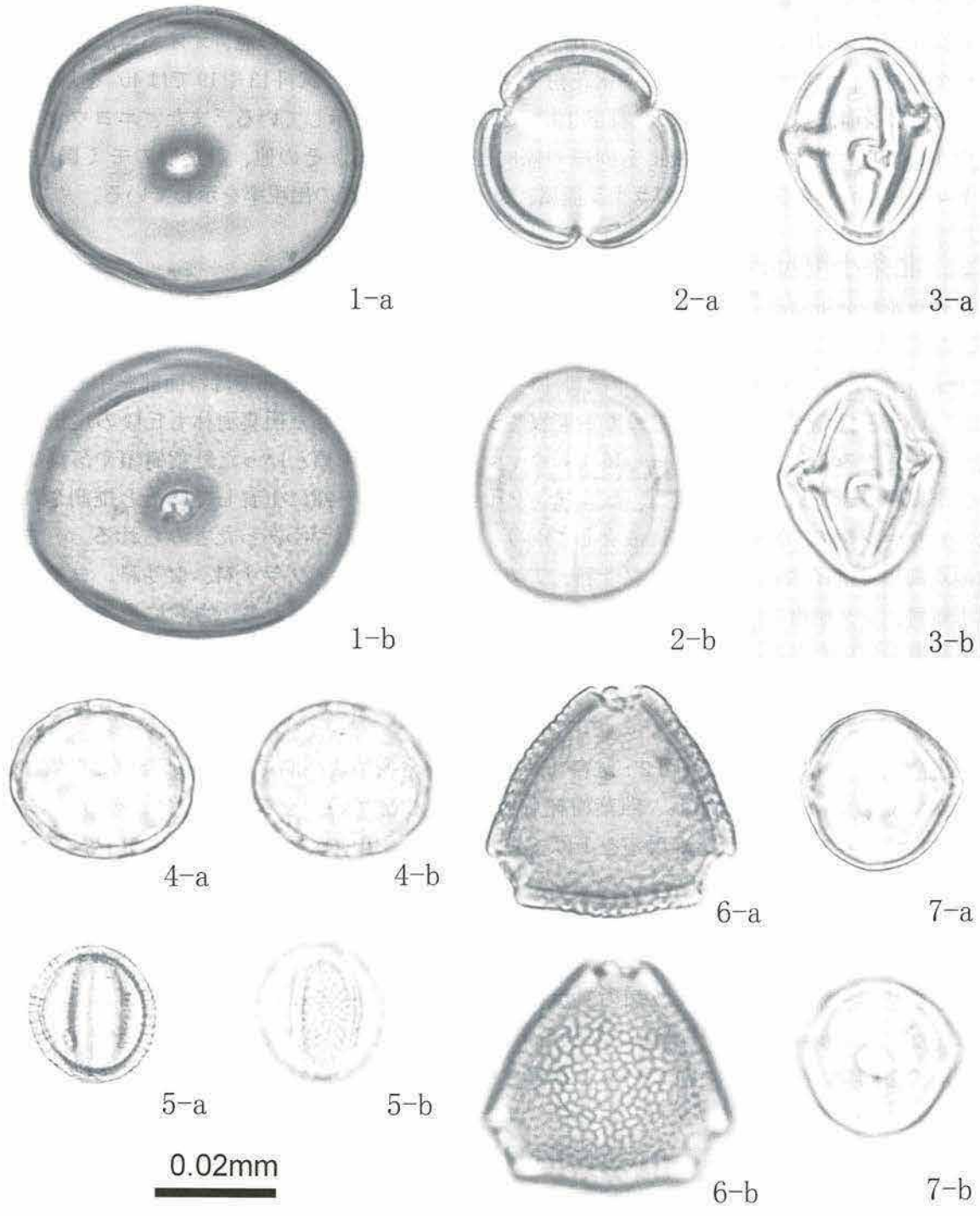
13 世紀初めから 13 世紀中頃（図 2：試料 4 ～ 12）の鎌倉周辺丘陵部では斜面部を中心に依然としてスギ林が成立していたと推測され、照葉樹林も丘陵の尾根部に林分を広げていたとみられる。また、先の時期に比べニヨウマツ類が出現率を上げており、鎌倉周辺の丘陵部においてニヨウマツ類の二次林が分布域をやや広げたとみられる。

13 世紀後半～ 14 世紀前半頃（図 2：試料 1 ～ 3）になると、それまで広く見られたスギ林や照葉樹林は急速に林分を狭め、ニヨウマツ類の二次林が広く成立するようになったと推測される。こうした様相は鎌倉市内の多くの遺跡で行われた花粉分析においても認められており（鈴木，2001 など）、北条小町邸跡でも同様の変化が示されていると推察される。この頃の試料採取地点では先の時期と同様にイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、シダ植物などの雑草類が多く生育していたと推測される。さらに道端雑草のスベリヒユ属やオオバコ属も生育していたとみられる。

なお、試料 22 はおおむね植物遺体で、その花粉分析結果は大半がイネ科花粉であった。こうしたことから、この植物遺体はイネ科植物の可能性が高いと推察され、稲藁やその他のイネ科植物が刈られ捨てられたことによりイネ科花粉が大量に供給されたのではないかと思われる。北条小町邸跡の多くの試料は有機質や泥炭質であり、これはイネ科植物が捨てられたことによる可能性が考えられ、多くの試料でイネ科花粉が多く検出されているのは、一つはこうしたことによる可能性が高いと思われる。

引用文献

鈴木　茂（2001）高徳院周辺遺跡の花粉化石．鎌倉大仏周辺発掘調査報告書，鎌倉市教育委員会，26-33.



図版　北条小町邸跡の花粉化石

1：イネ科　PLC.SS 4098　No.22

2：タデ属　PLC.SS 4096　No.11

3：ナス属　PLC.SS 4097　No.20

4：アカザ科－ヒユ科　PLC.SS 4094　No.11

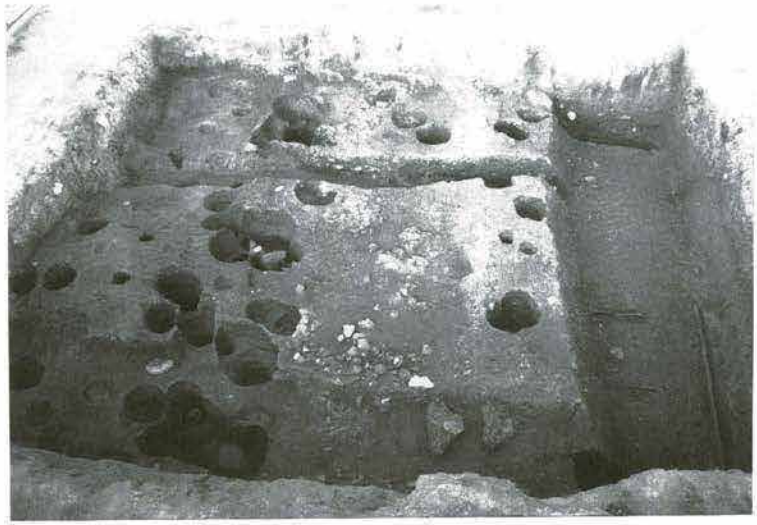
5：アブラナ科　PLC.SS 4092　No.11

6：ノアズキ属　PLC.SS 4093　No.11

7：他のマメ科　PLC.SS 4095　No.11

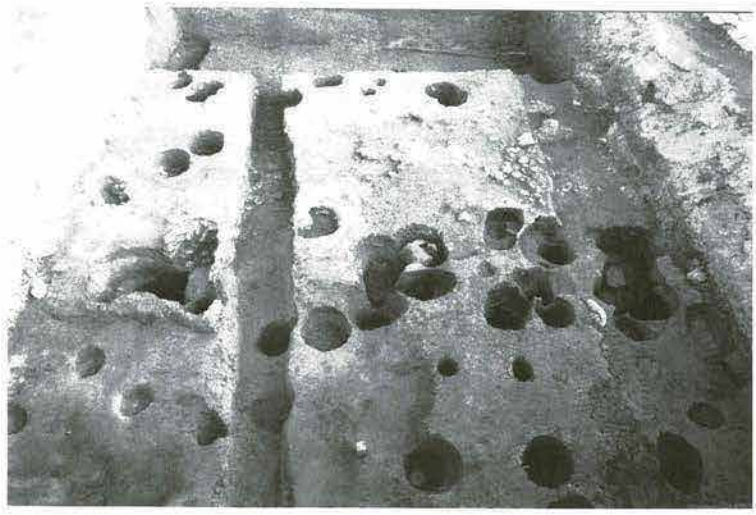
1. 土師器集中部1　南から

3. 側溝5　南から



4. 側溝5と関連遺構　南から

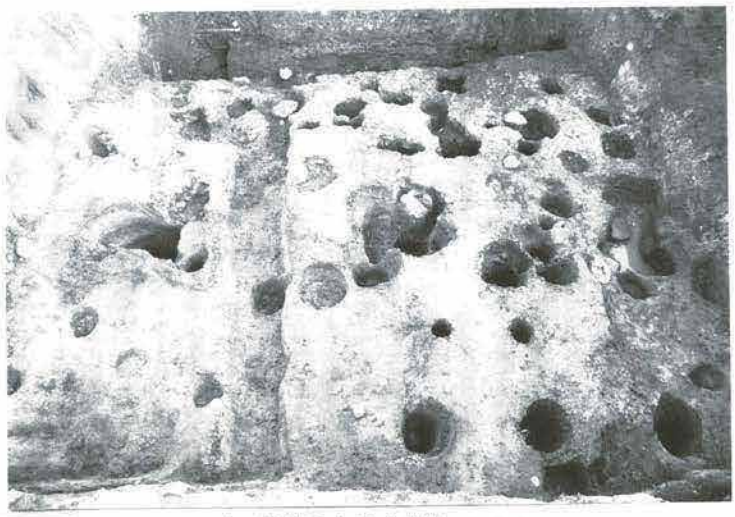
2. 建物1　P.2



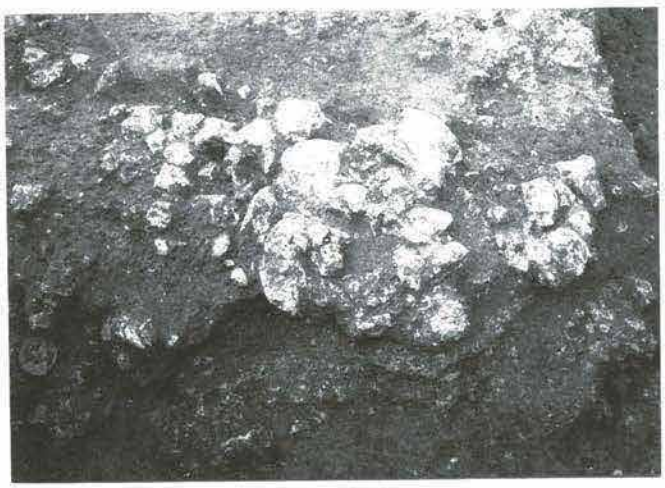
5. 側溝5と関連遺構　西から▶

図版２

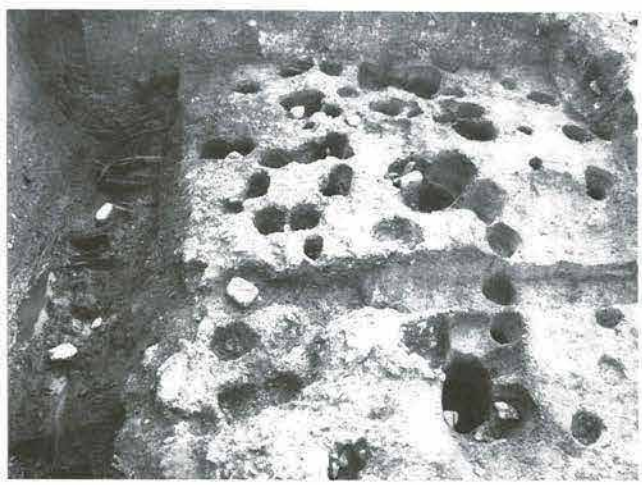
1. 土師器集中３　南から



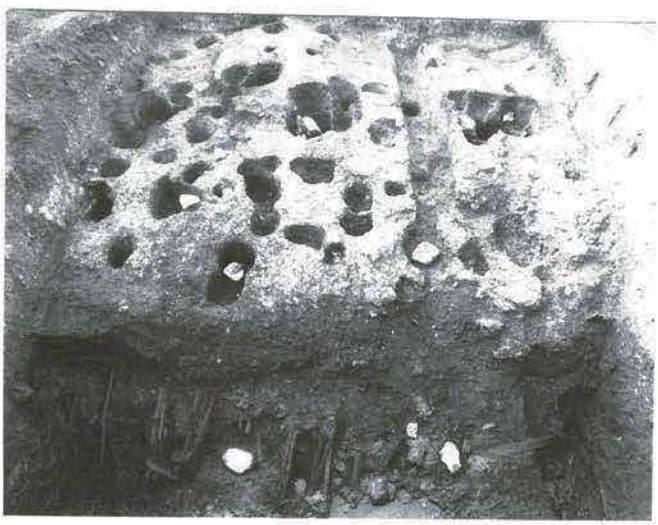
4. 側溝７と関連遺構　西から



2. 側溝６肩部　東から



5. 側溝７と関連遺構　北から



3. 側溝７と関連遺構　東から

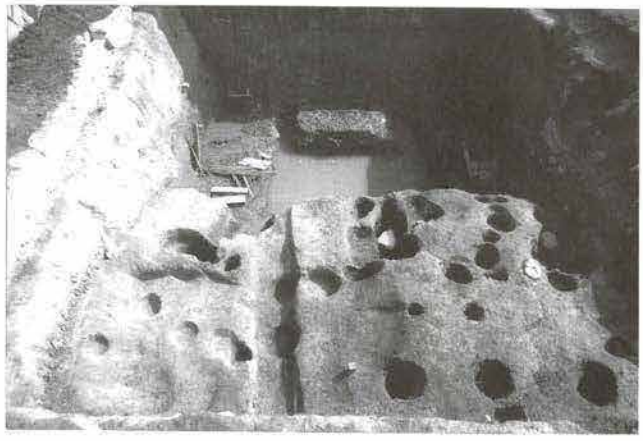
1. 側溝８ 木材出土状況　南から

2. 側溝９と関連遺構　東から

3. 側溝９西岸上 大型礎板　南から

4. 側溝９　東から

5. 側溝９　南から



6. 側溝９　西から

図版４

◀調査区北壁東側土層断面
（上段）

◀ 同
（下段）

調査区南壁東側土層断面▶
（上段）

同 ▶
（下段）

7-17

7-10

7-28

7-23

8-6

8-10

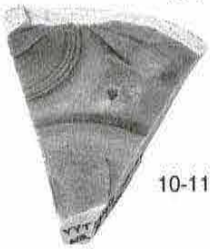
9-1

8-13

9-2

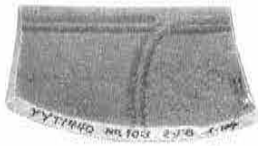
10-1

10-20



10-11

11-1



11-3

11-5

11-10

13-1

13-4

13-2

13-6

13-12

図版 6

14-10

14-14

14-12

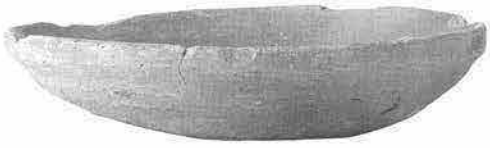
15-13

16-8

16-13

19-1

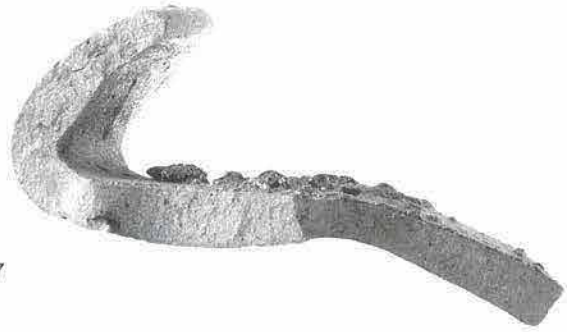
19-7



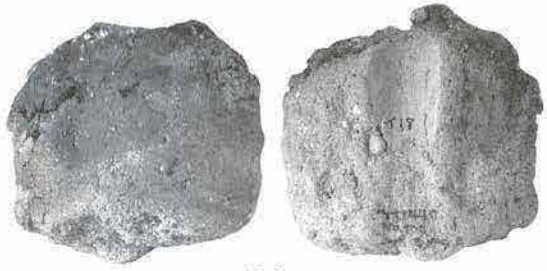
19-3

19-9

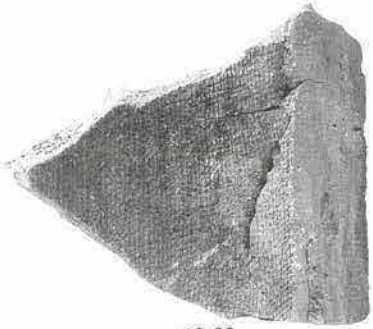
17-4



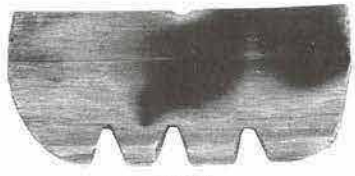
19-17



19-24



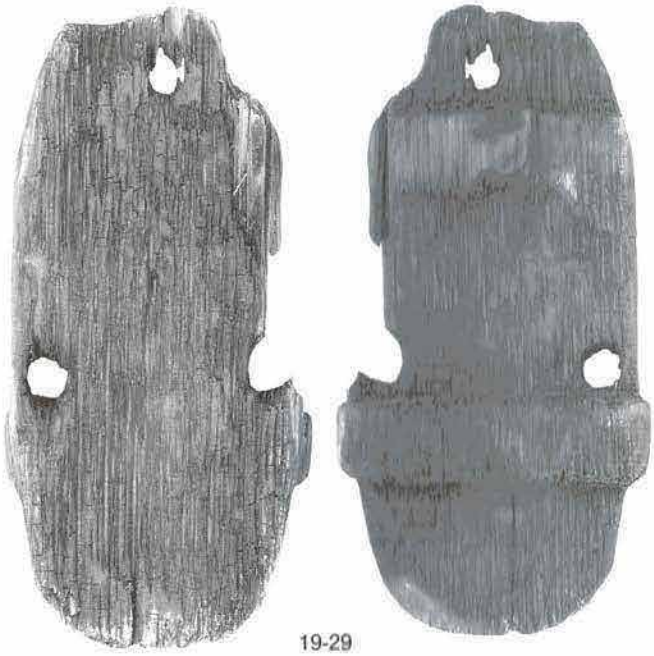
19-23



19-28

19-25

19-27

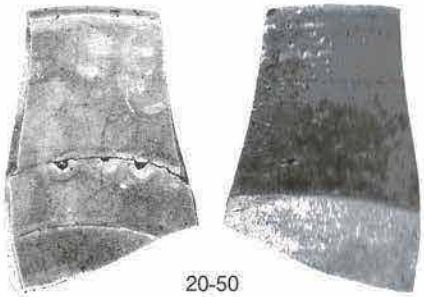


19-29

20-42

20-43

20-46



20-50

20-51

20-53

22-63

22-66

23-74

23-75

23-82

24-5

24-6

下馬周辺遺跡（No. 200）

由比ヶ浜二丁目39番14

例　　言

1. 本報は、下馬周辺遺跡の鎌倉市由比ヶ浜二丁目39番14地点における自己用店舗併用住宅に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、平成16年5月11日～同年5月31日にかけて、調査面積20.0㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
   調査担当者：原　廣志
   調　査　員：須佐直子・太田美智子・須佐仁和・久保田裕美・栂岡ケイト
   調査補助員：宇都洋平・山口正紀・野崎美帆
   協力　機関：（社）鎌倉シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 本報の執筆は、第1～3章を原が執筆し、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。
   また挿図・写真図版作成には須佐（直）・栂岡・山口・小野が実施した。
5. 本報の掲載写真は、全景・個別遺構を原、宇都があたり、出土遺物は須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物、図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
   ・図版縮尺　　全測図：1/40　遺構図：1/30　遺物図：1/3
   ・遺構図　　遺構図のレベルは海抜標高の数値を示している。
   ・遺物図　　－・－・－は釉薬範囲を示す。黒塗は主にかわらけ灯明皿付着の油煤煙や漆器の朱塗文様を表現している。遺物観察表における手捏ねかわらけの外底径計測値は外底指頭痕と口縁部との境、即ち稜部の数値を表している。
   ・使用名称　　本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
   秋山哲雄・伊丹まどか・河野眞知郎・菊川　泉・菊川英政・古田戸俊一・汐見一夫・玉林美男・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・手塚直樹・福田　誠・松尾宣方・馬淵和雄

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……187
１．調査地点の位置 ……187
２．遺跡の歴史的環境 ……188
第２章　調査の概要 ……190
１．調査の経過 ……190
２．測量軸の設定 ……190
３．層序と生活面 ……193
第３章　検出遺構と出土遺物 ……194
１．第１面の遺構・遺物 ……194
２．第２面の遺構・遺物 ……198
第４章　まとめ ……214

挿 図 目 次

図１　調査地点と周辺遺跡……187
図２　調査区設定図……191
図３　国土座標の位置・グリッド配置図……191
図４　土層堆積図……192
図５　第１面全測図……194
図６　第１面上包含層出土遺物……195
図７　第１面ａ層出土遺物……196
図８　第１面ｂ層出土遺物……197
図９　第２面全測図……199
図10　第２面建物・木組遺構……200
図11　第２面建物１出土遺物……201
図12　第２面木組土留遺構出土遺物……202
図13　第２面溝状遺構出土遺物……203
図14　第２面遺構外出土遺物……204

表 目 次

表１　遺物観察表（1）……206
表２　遺物観察表（2）……207
表３　遺物観察表（3）……208
表４　遺物観察表（4）……209
表５　遺物観察表（5）……210
表６　遺物観察表（6）……211
表７　遺物観察表（7）……212
表８　遺物分類別出土数量・比率表……213

図 版 目 次

図版１　１．第１面全景（南から）　２．第２面全景（南から）……215
図版２　１．第２面 建物１・木組土留遺構検出状況（南東から）．２．同上（北東から）
３．木組土留遺構（東から）……216
図版３　１．第２面 木組土留遺構完掘状況（南東から）　２．木組土留遺構北側（東から）
３．同上南側（東から）……217
図版４　１．第２面 建物１内礎板　東壁際（西から）　２．同左南壁際（北から）　３．調査区南壁上層堆積（北から）　４．調査区西壁土層堆積（東から）……218
図版５　１．第１面上包含層　２．第１面下ａ層……219
図版６　１．第１面下ａ層出差し銭……220
図版７　１．第１面下ｂ層　２．第２面建物１柱穴　３．第２面木組土留裏込……221
図版８　１．第２面溝状遺構　２．第２面遺構外……222
図版９　１．第２面遺構外……223

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．調査地点の位置

調査地点は鎌倉市由比ヶ浜二丁目 39 番 14 に所在する地点で下馬周辺遺跡（県遺跡台帳№ 200）の一角に位置する。鎌倉市の旧市街地は北の鶴岡八幡宮を頂点とする南の相模湾に面した三角形状の沖積地、

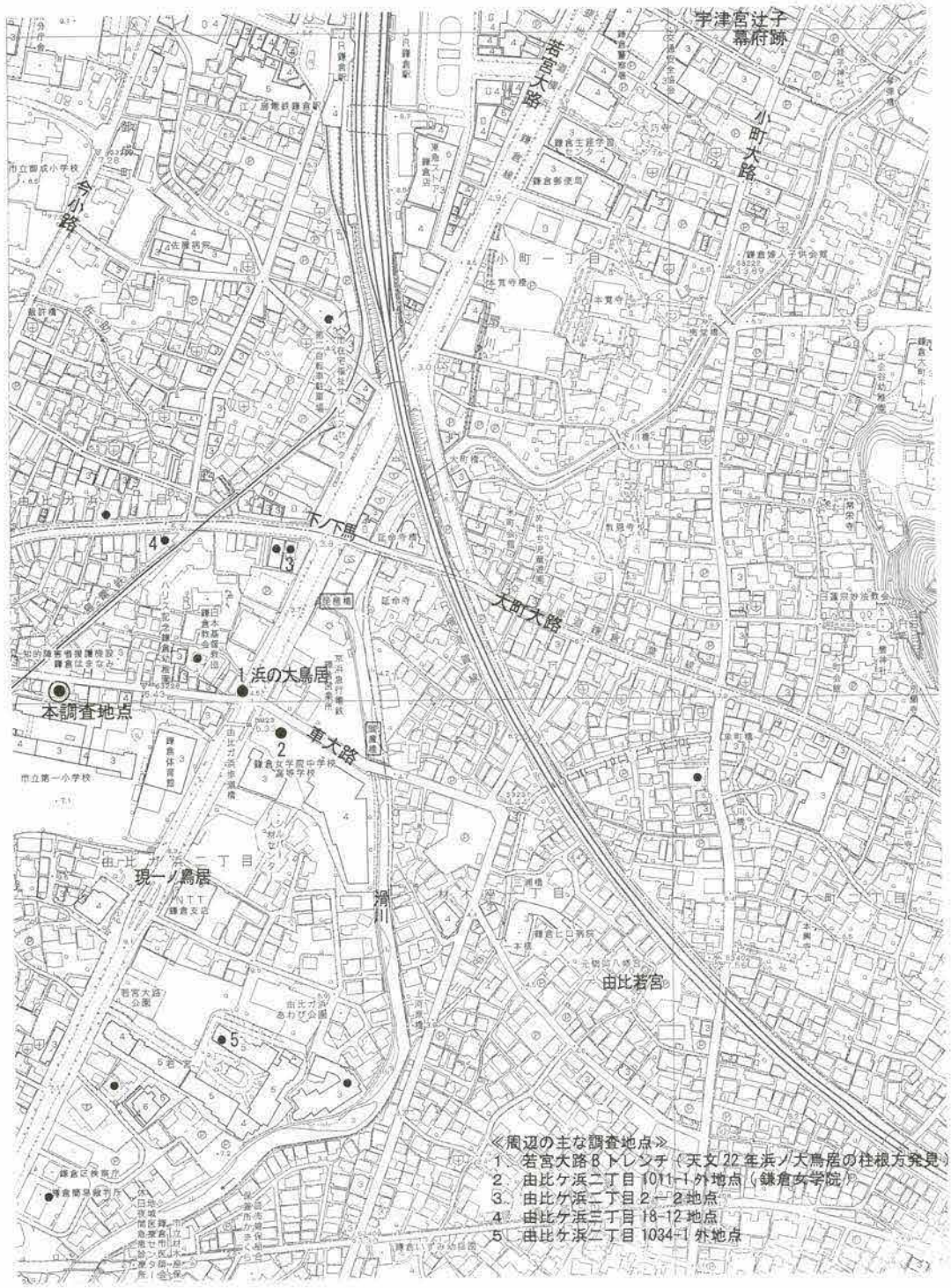


図１　調査地点と周辺遺跡

及び砂浜地があり、それを取り巻く丘陵の谷戸地、朝比奈に源を発し東北丘陵の裾を流れた滑川低地から形成されている。その三角形状の沖積地中央を鶴岡八幡宮から由比ヶ浜へ向かって南北に貫くのが都市鎌倉の基本軸となった若宮大路である。若宮大路と直交する道路は「下馬」と呼称され三ヵ所でのみで接続するもので、三つの下馬は北端が鶴岡八幡宮社頭の横大路との交差点（上ノ下馬）、現二ノ鳥居のあたり（中ノ下馬）南端が現在の下馬四ツ角にあたり大町大路との交差点（下ノ下馬）が考えられる。この下馬四ツ角をさらに南へ進むと若宮大路と東西道路が交差するが、この道路が名越方面へ抜ける「車大路」にあたり旧東海道と想定される。さらに交差点の西方、道沿に60 mほど進んだ江ノ電踏切の手前、道路の南側に面して位置するのが調査地点である。地形的には、由比ヶ浜の海浜砂丘帯の裏側に位置し、滑川と佐助川が合流する下馬四ツ角付近から車大路周辺にかけては市街地でも最も海抜高の低い地域である。調査地点の現地表の標高は6 mほどであり、砂丘帯頂部に建っている現在の一ノ鳥居より3 mほど低い標高を示している。

2．遺跡の歴史的環境

若宮大路は寿永元（1182）年、源頼朝は妻政子の安産祈願のため海浜から八幡宮へいたる真っすぐな参詣道を造成した。先に述べ記したように若宮大路には北から順に「上ノ下馬」「中ノ下馬」「下ノ下馬」と呼ばれた三ヶ所が設けられ、何れかの下馬をへて若宮大路へ通行するのである。若宮大路の北部でニノ鳥居から八幡宮社頭間の両側の大路沿いでは再開発に伴う相当数の発掘調査が実施されており、東西両側溝から道幅と側溝の規模や構造などの状況がほぼ判明しつつある。しかしニノ鳥居以南の状況については十分な調査結果が得られていないが、中世の絵図である『善宝寺寺地図』（鎌倉国宝館 1969）や近世の『鶴岡八幡宮境内図』（鎌倉国宝館 1968）などによると、大路中央の段葛がニノ鳥居からさらに南方の下ノ下馬近辺まで存在したように描かれている。なお下馬四ツ角の交差点付近から車大路交差点までの発掘調査によって河川合流や低湿地で現地表の標高が4～5 mほどであるのに対し、現一ノ鳥居の砂丘頂部から由比ヶ浜にかけて海浜飛砂による厚い砂層が堆積した地域では標高が7～9 mと異なる様相が認められる。その中で注目される調査結果としては図1の前者が調査地点1～4、後者の地点5が挙げられる。

地点1（大三輪・斉木ほか1991・斉木1993）では、若宮大路修景事業に先立つ試掘調査が行われ現在の歩道下より巨大な鳥居脚柱の根方が発見された。根方覆土に伴う遺物は鎌倉期の資料はなく戦国時代の陶器・土器で16世紀代所産のものであった。鶴岡八幡宮供層の日記『快元僧都記』には天文22(1553)年に北条氏綱が鳥居造替の記事があり、この修理の際にあたると推定されている。浜の大鳥居の造立記録をみると、治承4(1180)年頼朝の造立に始まり、寛元3(1245)年、延文3(1358)年、応永20(1413)年などそれ以前にも連続して造替されていたことが知られるが、現在の石造一ノ鳥居はこの地点より南約180 mに位置し、寛文8(1668)年に建てられたものである。地点1に南隣して『吾妻鏡』にみえる車大路と推定される道が東西方向に走っており、この地点が記事にある連続して造替られた浜ノ大鳥居の場所と想定され、中世都市鎌倉の中心部と周縁部の境であった可能性が考えられる。

次に地点1の近隣で交差点のすぐ南東に位置した地点2（大河内 1998）は、海浜砂丘の北側裾にあたり約50 m東には滑川が流れて閻魔橋が架けられている。調査では13世紀前半～14世紀中頃までの性格が異なる三時期の遺構が検出された。Ⅰ期（13世紀前半頃）は沼状の窪地が存在し、遺物に柿経・笹塔婆の大量投棄という行為が鎌倉時代前期のこの場を考える上で重要な意味が含まれている。Ⅱ期（13世紀中頃）は生活の営みが認められる場へ変化、溝や段で区画した敷地に掘立柱建物や井戸、土坑が点

在した。屋敷地が想定されているⅢ期（13 世紀後葉～ 14 世紀中葉頃）は人々の生活が最も活況を呈した時期で多数の竪穴建物・井戸・通路や多くのゴミ穴土坑を検出し多量の豊富な種類の遺物が発見されており、この場が町屋へと変貌した。地点 5（佐藤・原ほか 1993）では、13 世紀後葉～ 14 世紀中葉頃を主体とした通路で区画した遺構の大型竪穴建物・井戸・土坑や墓跡などが占められており、鎌倉時代後期の浜地は倉庫群を中心とした町屋の様相を呈していたと想定されよう。以上のように本調査地点の周辺は、中世鎌倉の繁栄と供に鎌倉時代後期～南北朝期にかけておびただしい竪穴建物が造られており、基本的に町屋と化した場と解釈できる。それ以前についてはまとまった調査成果が得られた調査は少ないが、『吾妻鏡』の記事をみると鎌倉時代前期に御家人が屋地を所有していたことが知られており、中世都市鎌倉における周縁景観の形成とその発展過程を理解する上でも周辺調査が望まれるところである。

引用・参考文献

大河内勉　1998『下馬周辺遺跡発掘調査報告書―鎌倉女学院地点―』下馬周辺遺跡発掘調査団

大三輪龍彦　1989「鎌倉都市計画―政治都市・軍事都市として―」『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』平凡社

大三輪龍彦・斉木秀雄ほか　1991『若宮大路遺跡発掘調査報告書』Ⅴ　史跡若宮大路遺跡発掘調査団

斉木秀雄　1993『若宮大路遺跡発掘調査報告書』Ⅷ　史跡若宮大路遺跡発掘調査団

鎌倉国宝館　1968「鎌倉の古絵図Ⅰ」『鎌倉国宝館図録』第 15 集　鎌倉市教育委員会

鎌倉国宝館　1969「鎌倉の古絵図Ⅲ」『鎌倉国宝館図録』第 16 集　鎌倉市教育委員会

河野眞知郎　1995「中世都市鎌倉　遺跡が語る武士の都」講談社

河野眞知郎　2004『政権都市「鎌倉」―考古学研究のこの十年―』中世都市研究会編『中世都市研究９　政権都市』新人物往来社

宗臺秀明・宗臺富貴子　1992『下馬周辺遺跡発掘調査報告書―東京電力鎌倉営業所改築に係る発掘調査報告書―』下馬周辺遺跡発掘調査団

斉藤直子　1992「13 ～ 19 世紀鎌倉海岸部における潟湖の変貌」『国立歴史民族博物館研究報告』第 81 集　国立歴史民族博物館

佐藤仁彦・原廣志ほか　1993「由比ケ浜中世集団墓地遺跡（No. 327）由比ケ浜二丁目 1034 番 1 他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9

高橋慎一朗　2005『日本史リブレット 21　武家の古都鎌倉』山川出版社

第２章　調査の概要

１．調査の経過

調査地点は、下馬四ツ角の南西に所在し、稲村ヶ崎方面から海沿いに由比若宮（元八幡）、名越を経て三浦半島方面へ抜けていく旧東海道筋にあたり琵琶小路とも呼称されている。この小路と若宮大路との交差点で発見された天文年間の北条氏康再建という浜の大鳥居（図１-地点１）からは西へ120ｍ程の距離で南側に面した場所に位置する。本調査地点は、個人専用住宅で鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため。事前に鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が実施された。その結果、地表下約120cmより中世前期の遺構・遺物を確認したため発掘調査を実施することとなった。現地調査は平成16年５月11日から工事範囲内約20.0㎡を対象に発掘調査するに至った。

現地調査は、５月11日よりまず遺構確認調査の資料結果を受けて表土を重機掘削することから開始され、その後は人力により掘り下げを行なった。調査期間中は脆い砂質土と多量の湧水に悩まされながらの調査作業ではあったが、13世紀後半ー14世紀前半にかけて鎌倉時代後期を中心とした２時期以上の生活面と、それに伴う遺構・遺物が多数発見された。同年５月31日までの間に緊急調査に必要な記録保存を行ない調査機材の撤収を含め、現地調査を無事に終了することができた。

２．測量軸の設定

調査に際して使用した測量軸の設定は、図２・３に示した国土座標の数値を用いた。設定は調査地点北側を東西に走る琵琶小路の路面上に鎌倉市道路管理課が設置した市３級都市基準点（第　座標系）のＲ047（Ｘ＝－76,336,387　Ｙ＝－25,662,569）とＲ048（Ｘ＝－76,342,984　Ｙ＝－25,611,455）が確認された。このＲ047・048を国土座標の基準点として図２に示したようにＲ047から敷地内に測量基準点にあたる原点１（Ａ－３杭:Ｘ＝－76,340,540　Ｙ＝－25,681,523　Ｚ＝6.430ｍ）、原点２（Ｅ－３杭:Ｘ＝－76,348,505　Ｙ＝－25,682.495　Ｚ＝6.630ｍ）をそれぞれ設置した。なお方眼軸線は測量の便利性と、予想される検出遺構の軸方位を優先させる方法で調査区の形状に即した配置にしたために、国土座標とは一致していない。

調査区の測量軸は、図３に示すように基準点のＡ－３杭からＥ－３杭の南北軸線（距離８ｍ）を設けて、そこから東西と南北をそれぞれ２ｍ間隔の軸線を配して方眼を設定を行なった。東西軸線はアルファベットで北からＡーＥ、南北軸線には算用数字で西から１ー５を充てて、各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。なお市３級都市基準点のＲ047・048及び任意点のａ点、Ａ－３杭・Ｅ－３杭の国土座標数値は図３に示した通りである。

図中の方位はすべて真北を採用しており、南北軸線はＮ－6°　58′　48″－Ｅである。

海抜標高の水準原点移動に関しては、若宮大路と琵琶小路の交差点南西付近、鎌倉女学院正門前の歩道橋基礎に設置された鎌倉市三角水準点：Ｌ＝6.330ｍから調査地点のＡ－３杭上：Ｌ＝6.430ｍに仮水準点を移動したものである。文章中及び挿図に記載されたレベル数値はこれを基準とした海抜標高を表わしている。

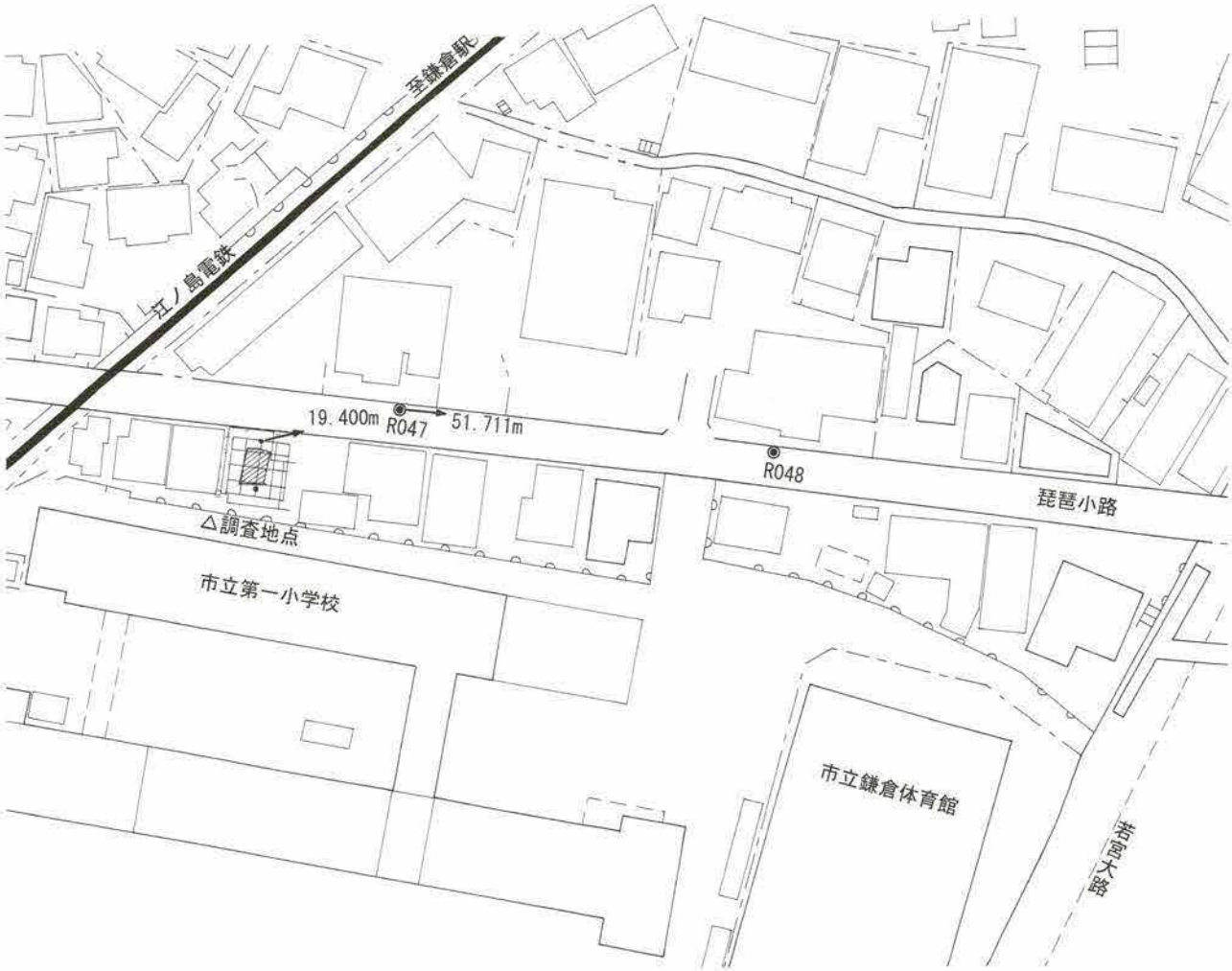


図２　調査区設定図

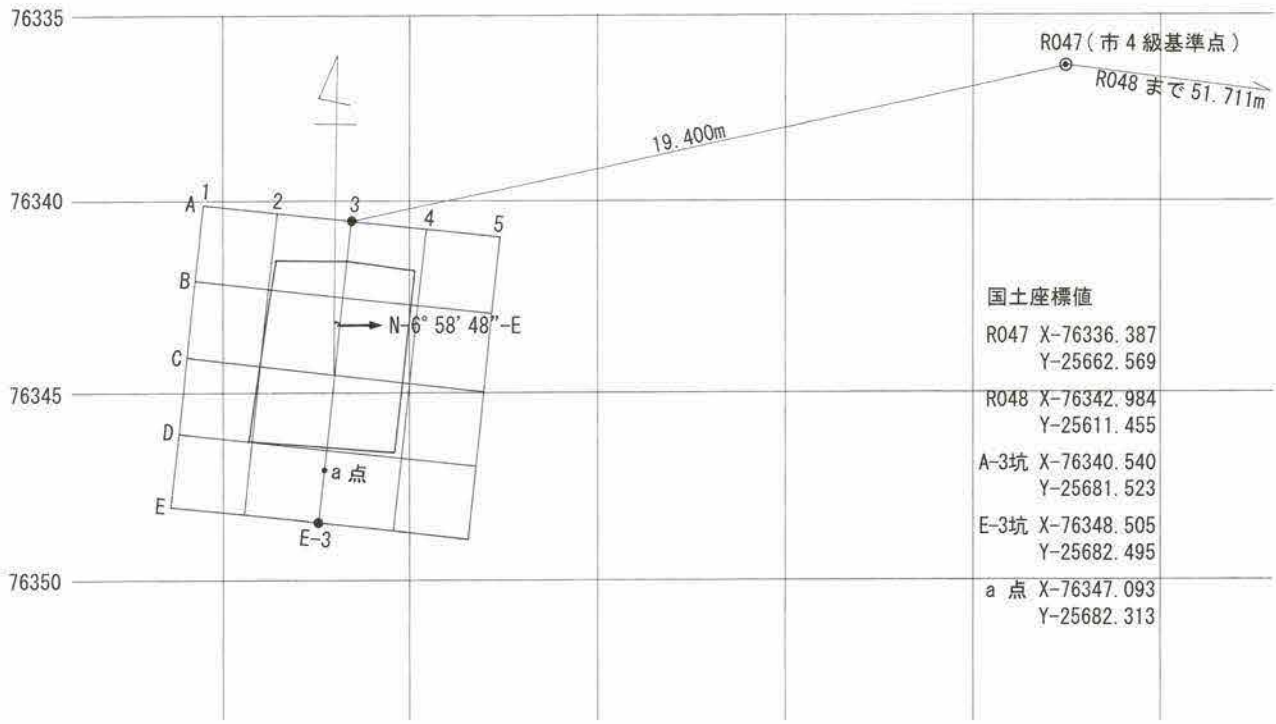
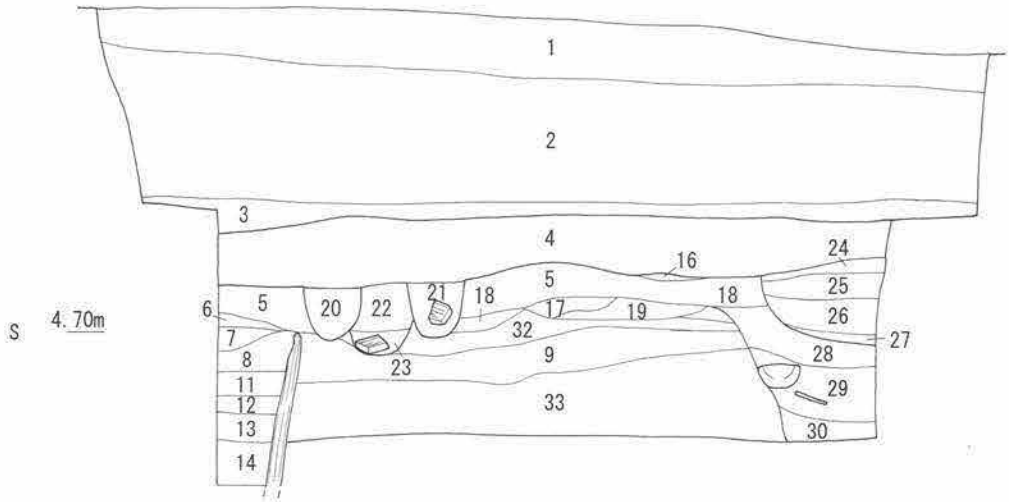
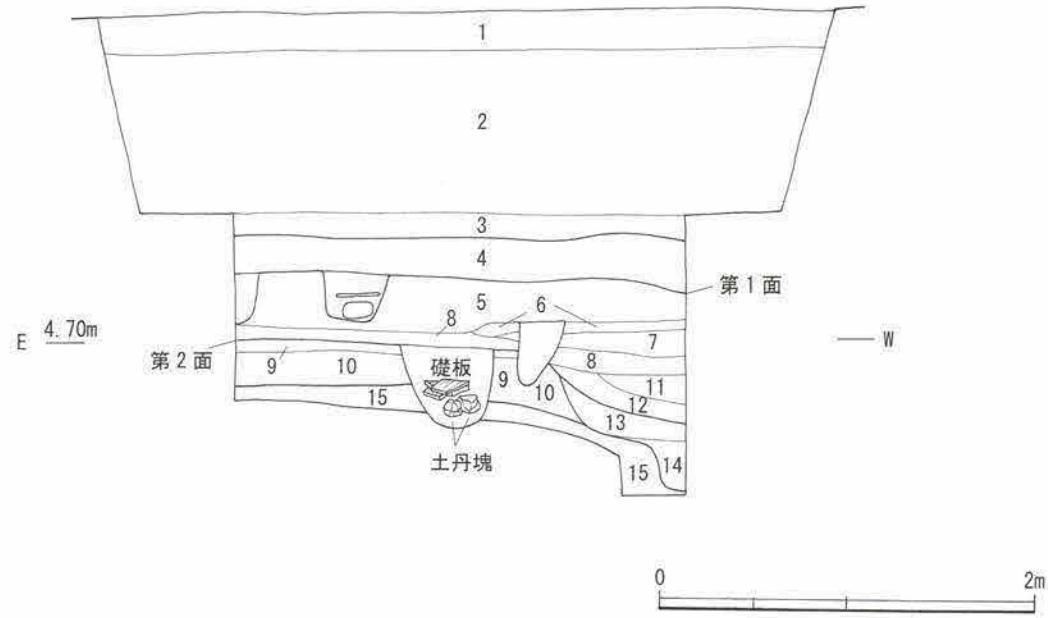


図３　国土座標・グリット配置図



▲調査区西壁土層堆積図



▼調査区南壁土層堆積図

調査区南壁・西壁土層堆積注記

1. 表土
2. 近代客土　：大小土丹塊による埋立土
3. 暗褐色粘質土　：水田耕作土
4. 暗褐色砂質土　：土丹・貝殻粒、炭化物多量
5. 暗褐色砂質土　：土丹・貝殻粒、炭化物多量　強い締り第1面
6. 明茶褐色粘質土：有機物腐蝕土　締り無し
7. 灰褐色砂層　：貝殻粒多量に含む砂層
8. 明茶褐色粘質土：有機物腐蝕土　木片多量　締り無し
9. 暗灰褐色砂層土：貝殻粒多量　強い締りで上面硬化 第2面
10. 暗褐色砂質土　：砂層・木片を多めに含む　やや締り有り
11. 茶褐色弱粘層土：木片多量　締り無し
12. 茶褐色弱粘層土：砂層ブロック・木片多く含む　締り無し
13. 灰褐色砂層　：貝殻粒多量の灰白色砂層　埋戻土
14. 茶褐色粘質土　：木片を多く含む粘質土　（裏込用）
15. 茶褐色粘質土　：木製品・木片多量
16. 黒褐色粘質土　：貝殻粒少量含む　粘性・締りやや有り
17. 黒褐色粘質土　：貝殻粒多めに含み　粘性・締り有り
18. 暗茶褐色粘質土：有機物腐蝕土多め貝砂少量含む　粘性・締り有り
19. 黒褐色粘質土　：有機物腐蝕土・貝砂少量含む　粘性・締り有り
20. 暗灰色砂質土　：貝砂多量　粘性・締りやや有り
21. 暗灰色砂質土　：20層類似、炭化物・土丹粒含む　粘性・締りやや有り
22. 暗灰色砂質土　：貝砂多量　炭化物・土丹粒含む　粘性・締りやや有り
23. 明茶褐色粘質土：有機物腐蝕土　締り無し
24. 灰白色砂層　：貝殻粒多量に含む砂層　締り無し
25. 黒褐色弱粘質土：貝砂多めかわらけ片少量　粘性・締り有り
26. 黒褐色弱粘質土：貝砂多く貝殻粒少量　粘性・締り有り
27. 貝殻層　：ハマグリ・アサリなど
28. 暗茶褐色粘質土：貝砂多量　有機物腐蝕土やや多め　粘性・締り有り
29. 明茶褐色粘質土：有機物腐蝕土　木製品多量　締り無し
30. 明茶褐色粘質土：有機物腐蝕土　木製品やや多め　締り無し
31. 暗茶褐色粘質土：有機物腐蝕土　貝砂やや多く　粘性・締りが強い
32. 暗灰褐色砂質　：有機物腐蝕土　貝殻やや多く　粘性弱いが締り有り
33. 明茶褐色粘質土：有機物腐蝕土

図4　調査区壁土層堆積図

3．層序

調査地点の現地表は、海抜標高が6.4ｍ前後でほぼ平坦な地形を呈している。図4の土層堆積図を観察するように地表下約115cmのまで近・現代の埋立て造成土と水田耕作土が調査区全体を覆っていた。この厚い土層を除去すると、海抜高約5.3ｍから中世の遺物や遺構を含んだ堆積土層が検出された。

1層は茶褐色粘質土の厚さ20～30cmの中世遺物包含層でこれを除去すると、ある一定の厚みと拡がりをみせる炭化物層を挟んで標高 4.7ｍ前後で第1面が表出した。この面の構築土の2層は茶褐色粘質土の大小泥岩塊を混入したやや粗い地業層で土坑や柱穴などの遺構を確認している。また調査区北東域の部分的な範囲だけに泥岩を突き固めて版築した様子が確認できた。

第2面は厚さ20～30cmの第1面構築土の下から間層を挟まずに認められた。第2面を構成する土層のうち、3層の暗黄褐色粘質土は小型泥岩の版築層で調査区東半部を中心に確認されたが厚みは場所によりかなり異なるもので、西側では包含層のような脆弱な堆積土（4層：暗茶褐色粘質土）へと変化していた。この土層の少し下、標高 4.7ｍ前後にもう一枚の泥岩地業面（5層：暗黄褐色粘質土）が認められた。これは上層の版築層とは場所によって一枚の生活面に集約されるので、時間的な差があまりなく下層地業上に張増した版築層と捉え、一括で第2面として調査した。

第３章　検出遺構と出土遺物

１．第１面の遺構・遺物

第１面は、調査区北西端で現地表から約 145cm の深度に検出したが、表土は南に向かって緩やかに傾斜して低くなる。これは前章で触れたように、現在の一の鳥居が建つ辺りは海抜標高約 10 ｍの海岸砂丘頂部であり、下馬四角の交差点の辺りは海抜標高約 3.6 ｍの鎌倉中心部では最も低い場所であり、調査

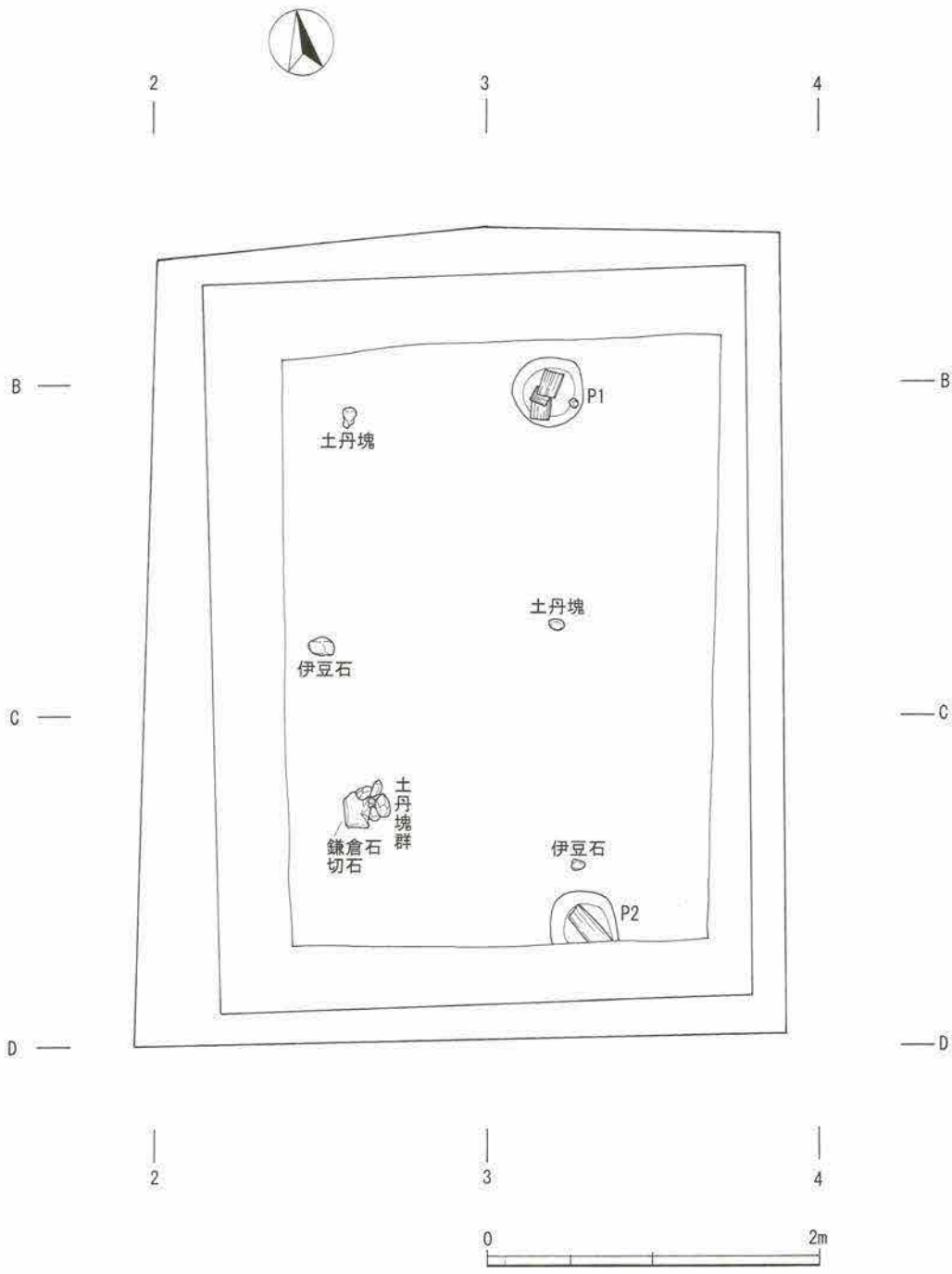


図５　第１面全測図

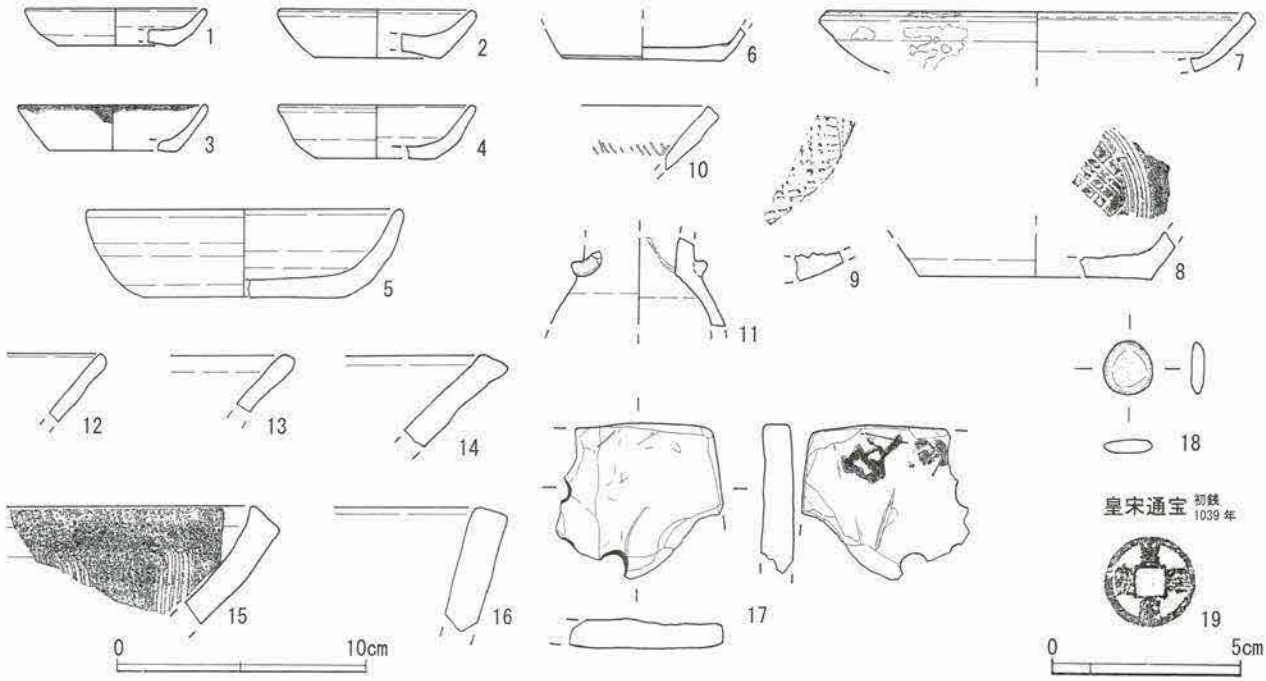


図6　第1面上包含層出土遺物

地点周辺をみると、第一小学校側の南から北側の道路へ緩やかに傾斜した地形であり、第1面も地表と同じ傾斜を呈していた。この面の遺構は柱穴2穴と、土丹塊の集積したものなどが確認されただけであり、検出された遺構からみると、この場は遺構密度の低い閑散とした状況が伺える（図5・6）。

P1：B－3杭の東隣に位置している。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径45cm、遺構面からの深さ32cmを測る。遺構確認の精査時に柱の抜き取り痕跡が確認でき、底面には礎板3枚を重ねて据えていた。礎板は概ね長さ10～16cm、幅13cm、厚さ2cmである。覆土は暗褐色砂質土で貝殻や玉砂利を多く含む締まりの弱いものである。遺物は図示できるものはないがロクロ整形のかわらけ小片や木片が少量出土している。

P2：C－3グリットに位置し、調査区外南に拡がるため全容不明である。規模は東西径42cm、南北径30cm以上、遺構面からの深さ28cmを測り、平面形は楕円形と思われる。底面には鎌倉石の切石片と、その上に礎板1枚が据えられており、切石片は15cm程の方形で厚さ8cmを測り、礎板は長方形で長さ32cm、幅12cmである。覆土は暗褐色砂質土で貝殻や有機物腐植土ブロックが交じる締まりないもの。図示可能な遺物は出土していない。

集石：調査区南西に位置し、面上に鎌倉石製切石1個と大小土丹塊5個からなっている。鎌倉石片は長さ23cm、幅15cm、厚さ5cm、土丹塊は不整形で8～15cm程の大きさである。本跡から北側1mの距離に安山岩製の伊豆石が検出され、礎石建物の一部かと思われたので面上精査を実施したがそれ以上の拡がりを示す礎石や掘り方などは確認できなかった。図示可能な遺物は出土していない。

第1面上包含層出土遺物（図6、図版5）

第1面上包含層に伴う遺物は232点であり、その内訳はかわらけ113点、舶載品2点、国産陶器80点、土製品（火鉢）3点、石製品5点、銭1点などの他、骨・貝等が25点とある程度の量が出土している。

面上遺物のうち、実測掲載し得た資料は図6－1～19だけである。1～5はロクロ成形のかわらけ大小皿、3は口縁部内外に煤が付着した灯明皿である。6は白磁口兀皿で、復元底径6.3cmである。7～10は瀬戸窯の灰釉卸皿で、7が復元口径16.8cm、8が復元底径9.4cmを測り、内底面に篦による荒い卸目

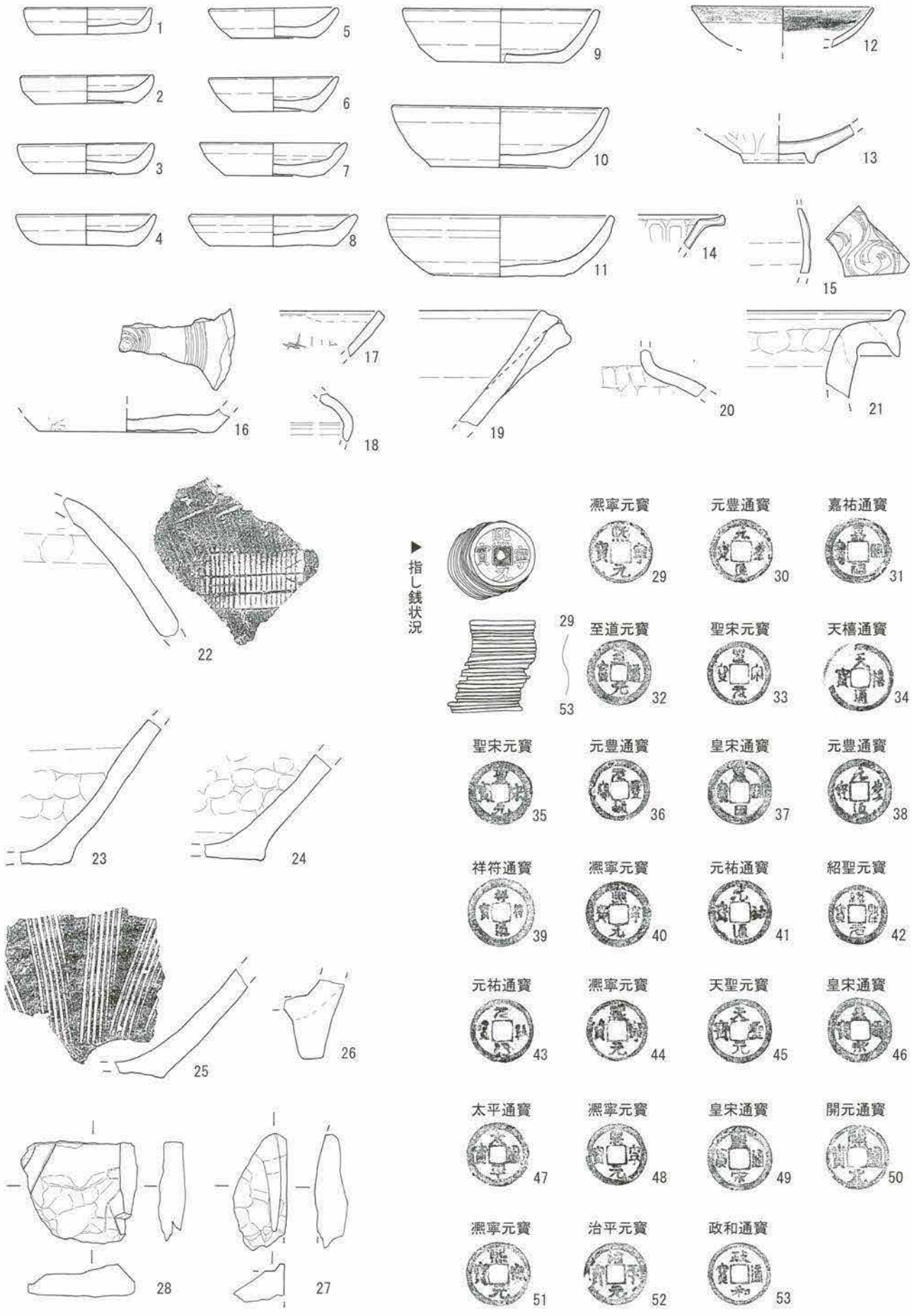


図7　第1面下a層出土遺物

を施す。11は瀬戸窯製品の仏華瓶で双耳付もので、12は南部系山茶碗の口縁部小片である。13・14は常滑窯製品で片口鉢　・　類の口縁部である。15は備前窯の摺鉢で内面に数状一単位の筋目帯を有する。16は瓦質火鉢の口縁部、17は温石で滑石鍋の体部を転用加工したものである。18は径2.1ー2.5cmの楕円形を呈した偏平な碁石の黒石である。19は北宋銭の「皇宋通宝」である。

第1面下a層出土遺物（図7、図版1）

この土層に伴う遺物は297点が出土している。その内訳をみると、かわらけ156点、舶載品5点、国産陶器88点、土製品（火鉢）2点、石製品2点、金属製品が銭24点・釘1点、木製品5点などの他、骨・貝が18点とある程度の量がまとまって出土している。

1ー11はロクロ成形のかわらけであり、1ー8は小皿、9は中皿、10・11は大皿である。小皿は1ー4が口径7.2ー7.8cm、底径5.4ー6.0cm、器高1.5ー1.7cmを測り、低い器高で比較的に口径と底径の比率が小さめの一群であり、5ー7が口径7.2ー8.2cm、底径4.6ー4.8cm、器高1.7ー1.9cmを測り、口径と底径の比率がやや大きな一群である。8は口径8.2cm、底径7.0cm、器高1.9cmと一回り大型で低い器高の口径と底径の比率が小さめである。9の中型品は口径11.0cm、底径7.2cm、器高2.9cm、10・11の大型品は口径12.2・12.6cm、底径7.8・7.4cm、器高約3.4cmを測り、大中型ともに薄手の器壁で高めの器高をもつ。12は瓦器碗である。13ー15は貿易磁器で13が龍泉窯系青磁の連弁文碗（復元高台径4.0cm）と14の内面に連弁文もつ折縁皿、15は景徳鎮窯系青白磁梅瓶の胴部片である。

16ー18は瀬戸窯製品であり、16が復元底径10.1cmの灰釉折縁皿、17が灰釉卸皿、18が小型の灰釉仏花瓶である。19ー24は常滑窯所産品、19が片口鉢Ⅱ類、20が鳶口壷の頚ー肩部、21ー24が甕口縁・底部である。25は備前窯の摺鉢で内面に6状一単位の筋目帯を有する。26は瓦質火鉢の脚部、27・28は石製品で27が硯で赤間石製か。29ー53は図7に示した状況で25枚が重なって出土しており、指し

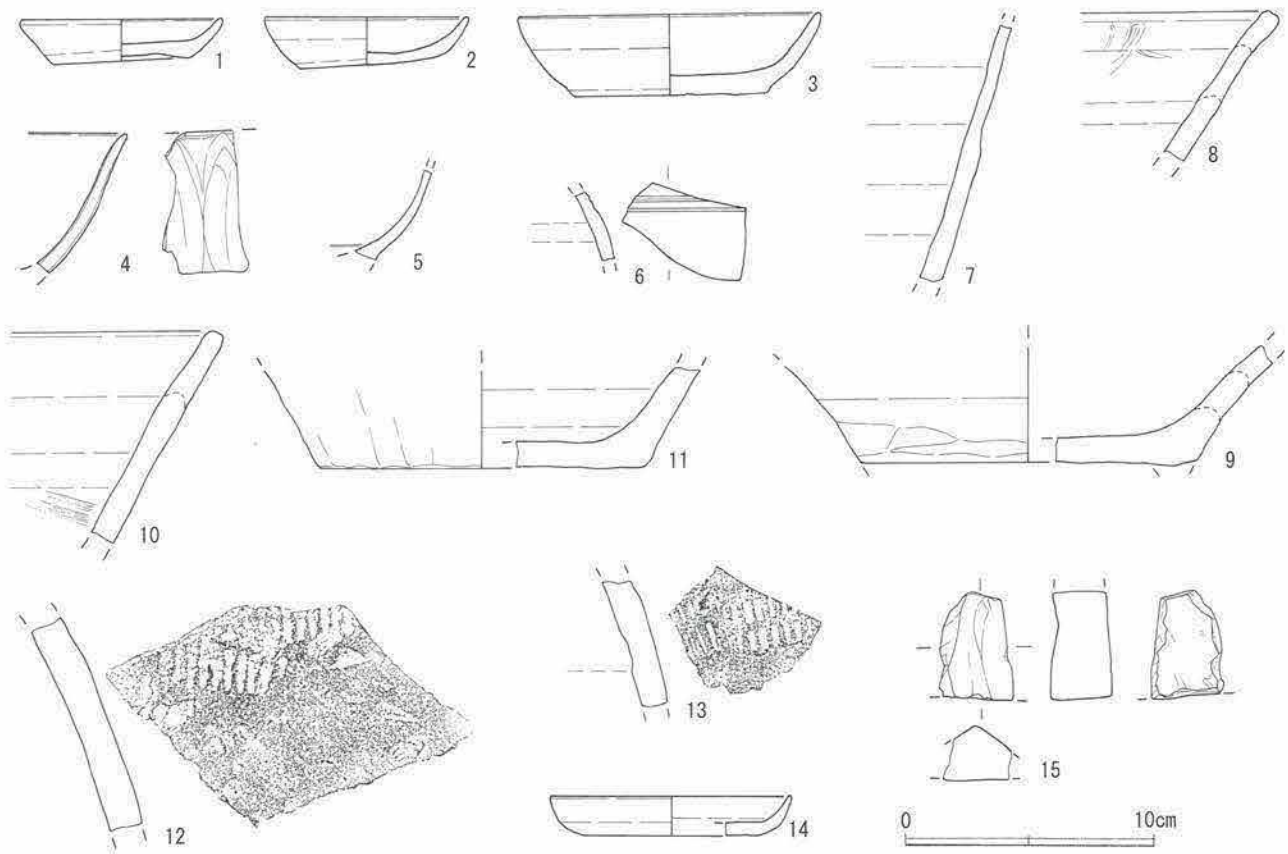


図8　第1面b層出土遺物

銭の一部と思われる。

銭種銘別の出土数をみると、熙寧元宝（北宋1068年）が5点、皇宋通宝（北宋1038年）・元豊通宝（北宋1078年）が各3点、元祐通宝（北宋1078年）・聖宋元宝（北宋1101年）が各2点、開元通宝（唐845年）・太平通宝（北宋976年）・至道元宝（北宋995年）・祥符通宝（北宋1009年）・天禧通宝（北宋1017年）・天聖元宝（北宋1023年）・嘉祐通宝（北宋1056年）・治平元宝（北宋1064年）・紹聖元宝（北宋1094年）・政和通宝（北宋1111年）が各1点の内訳である。

第1面下b層出土遺物（図8、図版2）

1ー3はロクロ成形のかわらけで1・2の小皿と3の大皿である。小皿は口径8cm・底径5.5cm・器高1.9cm余り、大皿は口径12.2cm・底径7.8cm・器高3.2cmを測り、ともに薄手器壁をもつ口径と底径の比率が大きいものである。

4ー7は貿易陶磁器で、4が龍泉窯系青磁の鎬連弁文碗、5は白磁の口兀碗体部過半、6・7は褐釉壷胴部である。8ー13は常滑窯製品であり、8・9が片口鉢　類口縁・底部片と10・11の片口鉢　類口縁・底部片である。14は漆器皿で復元口径9.6cm・底径7.0cm・器高1.5cmを測り薄手木地に黒色系漆塗りの無文皿である。15は上野産砥石の中砥である。

2．第2面の遺構・遺物

第2面の遺構は、現地表下1.7m、海抜標高4.7m前後で検出された貝殻粒を多く含んで褐鉄分が染み込んだ表面が硬化する暗灰褐色砂質土（9層）の上面で確認している。ここで検出した遺構は掘立柱建物、道路・木組土留遺構、溝1、柱穴12口、礎板などが認められた。調査区内では区画された居住域が拡がる空間であったことか想像される。遺物は多量のロクロ成形によるかわらけ他、貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品、漆・木製品などがあげられる。

建物1（図9ー11、図版2ー4・7）

調査区範囲が狭い関係で限られた中での遺構規模の確認となったが、上面は褐鉄分で硬化した生活面から底面に礎板を据えた建物跡と推測される柱穴列が発見された。調査区内ではP1ーP3の柱穴3口が確認された。規模はP1が上幅径40ー55cm、深さ37cmの楕円形を呈しており、底面に礎板4枚（長10ー15cm、幅8ー12cm、厚1.5ー3cm）が設置されていた。P3が上幅径約50cm、深さ43cmの円形を呈し、底面に礎板1枚（長16cm、幅13cm、厚3cm）が遺存する。

P2は上記2口に比べ一回り小型なもので上幅径約23ー32cm、深さ28cm程で礎板も遺存していない。柱穴の間隔は、礎板の中心距離でP1からP3が206cm、を測り、間柱と推定されるP2までの距離が約112cmである。柱通りの南北軸方位は、N－39°　40′－Eをなしている。この南北軸方位は木組み土留や道路、溝と同じ軸方向を示した柱通りであり、掘立柱建物跡と考えられ東側に拡がると想定したいところである。

図11－1はP1から出土した宋銭の元豊通宝(北宋1078年)で、2はP2に伴う常滑窯甕底部片である。3・4はP3から出土したロクロ成形のかわらけ大皿、口径12.5cm、底径6.6・6.8cm、器高3.3cmを測り、ともに高めの薄手器壁をもつ、4は内面に煤付着し灯明皿と思われる。

木組土留遺構（図11・13ー17、図版3ー5・）

木組土留の護岸構造は、板材の束柱杭と土留めの側板からなりいわゆる「しがらみ」が組まれてたものである。束柱杭は角柱を縦に割った材で長さ1m以上、幅7ー9cm、厚3ー5cmの板状材が45ー60cmの間隔で地中に打ち込まれている。この束柱杭に長さ2m前後、幅9ー15cm、厚1.5ー2cm程の

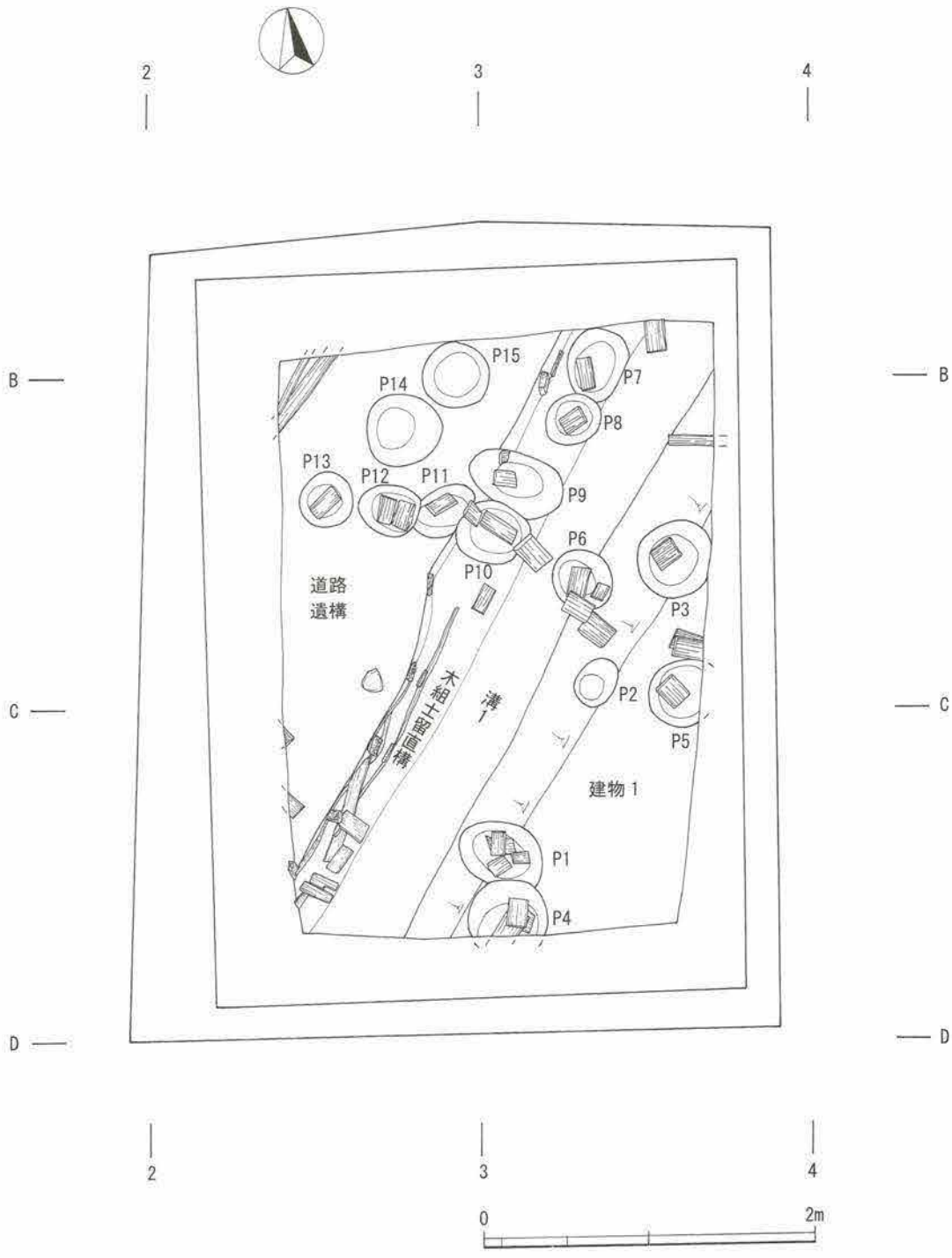

2
3
4
B
C
D
P15
P14
P7
P8
P13
P12
P11
P9
P6
P10
道路
遺構
P3
木組土留回溝
溝1
P2
P5
建物1
P1
P4
0
2m

図９　第２面全測図

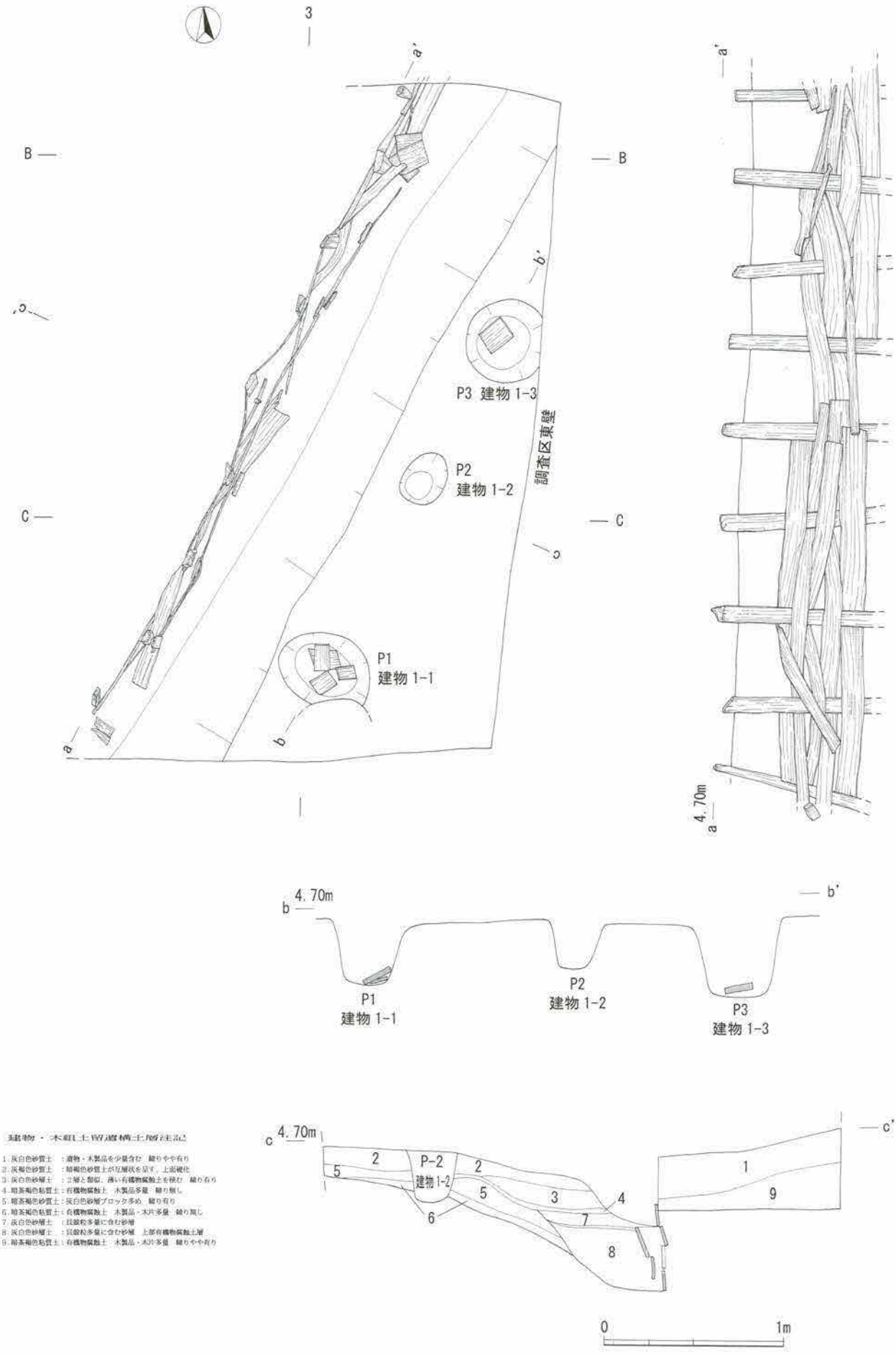


図 10　第２面建物１・木組土留遺構

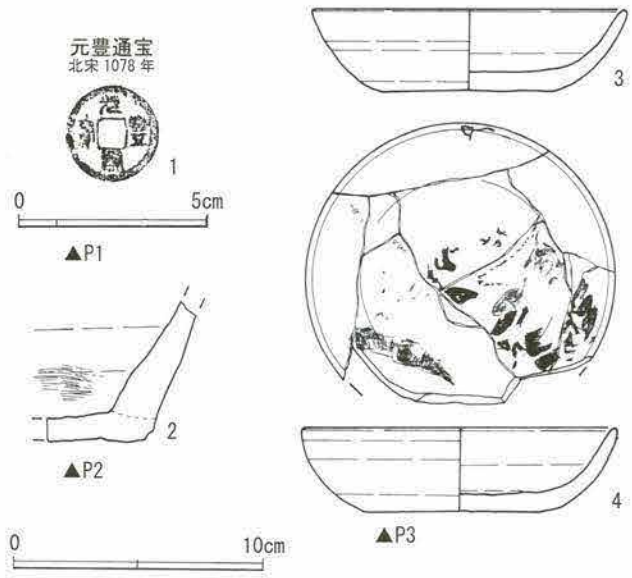


図 11 建物 1 出土遺物

細長い板材が杭の内外に交互に編むように組み込まれ、遺存状態の良好なところでみると 5 段の積み重ねが確認さている。興味深いのは側板を束杭に組み込む際に一段毎に上下逆に編んだ「しがらみ」構造にしており、強度を増したもの推測される。この木組土留の調北西域に平行して走る道路状遺構の護岸と考えるのが妥当であろう。なお護岸に東隣して側溝にあたる溝 1 が存在している。

南北軸方位は、N－39° 40′ －E をなし建物 1 と同一軸方位を示している。

出土遺物は図 12－1 ー 29 である。1 ー 7 は小型糸切りかわらけ、口径 7.7 ー 8.8cm、底径 5.1 ー 6.8cm、器高 1.4 ー 1.8cm を測り、背が低く器壁の薄い開きながら立ち上がる資料が主体をなし、8 の大型糸切底かわらけは口径 12.8cm、底径 8.8cm、器高 3.2cm を測り薄手の器壁で開いた立ち上がりである。9 ー 11 は常滑窯製品であり、9 が片口鉢　類口縁部片であり、10・11 が甕口縁部片である。12 は伊勢系土鍋口縁部である。

13 ー 29 は木製品である。13 は折敷の薄板を切り加工して烏帽子を被った横向きの人形代で、下部は先端が尖るになる。14 は板目材を断面半月形を呈したもので小刀の鞘片側と思われ破片、15 ー 17 は片側先端を尖らし気味で薄くなるように加工したヘラ様のものである。18 ー 29 は箸で長さ 19.5 ー 25.5cm、径 4 ー 7mm の断面多角形の棒状に削り、端部を尖らせた両口加工を施している。

上記のような木組みによる「しがらみ」護岸の良好な発掘調査事例については、米町遺跡（大町二丁目 2235 番 3 地点）から 13 世紀前半に位置づけられる溝の護岸に用いられた遺存状態の好例が知られる。この例では、板状の束杭に側板を内と外に交互に表れるように組み込んだもので、6 段の積み重ねられている。本例と同じく釘を使用せず「しがらみ」構造で強度が維持されているが、さらに補強材として不定の位置に細い杭を差し込んだり、全体を 2 本の大型角柱で内側への土圧倒壊を支える構造が用いられていた（馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子・鈴木弘太 2008「米町遺跡大町二丁目 2235 番 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 平成 19 年度発掘調査報告』24）。

溝 1（図 11・13 ー 17、図版 3 ー 5）

道路・木組土留護岸遺構の東側に敷設された側溝である。この溝は上部が後世の削平で欠失しているが調査区の南壁面と中央部に設けた土層観察ベルトからその規模などを窺うことができる。確認されたのは上幅 45cm、深さ約 30cm の浅い掘り方である。底部海抜標高は調査区北壁で 4.16 m、調査区南壁で 4.22 m を測り短い距離ではあるが南から北へと溝底面は低くなっている。覆土は木片を多く含んだ茶褐色弱粘質土の 2 層から構成されるものである。有機物腐蝕土が混入しており、最後はゴミ捨てによって埋没した様子が観察される。

出土遺物は図 13－1 ー 23 が溝 1 に伴うものである。1 ー 10 は糸切底のロクロ成形かわらけで、1 ー 4 は小型の皿、5 ー 10 は大型の皿になる。小皿は口径 7.5 ー 8.0cm、底径 5.1 ー 5.6cm、器高 1.5 ー 1.8cm を測り、背が低めで器壁が開いた立ち上がりである。大皿は 5・6 が口径 11.6・11.8cm、底径 7.3・7.2cm、器高 3.0・2.9cm で、7 ー 10 が口径 12.0 ー 12.4cm、底径 7.0 ー 7.9cm、器高 3.05 ー 3.3cm を測り、内湾気味に立ち上がる器壁のものである。11・12 は常滑窯製品であり、11 が片口鉢　類底部片で内面に

は使用による著しい摩滅痕、12が甕肩部片で外面の叩き目痕は短形内に×状の交差線を組合わせたものによる。13は漆器皿で、口径8.4cm、底径5.0cm、器高1.0cmに復元される。黒色系漆地塗りした後に内外面に花文スタンプで施文する。14ー23は木製品である。14は金剛草履の片足分の板芯である。半月状の薄板を中央で二枚合わせたもので、鼻緒を取り付けるために先端に2口の小穴、側面に切れ込みがあり表裏面には藁状の植物圧痕が認められる。15・16は先細り状に断面円形になるように丁寧に加工した木栓であろう。17は長さ20cmを超えた丸棒状の多角形に加工した菜箸とおもわれ、18も箸で断面多角形の棒状で端部を尖り気味に両口削り加工を施す。19は丸棒状の片端を耳掻き皿風に削り、横断面が「く」の字形に削り仕上げされ、皿部に煤が付着する。20は断面長方形の用材で片上面のL字形に加工した端面に3カ所の穿孔が見られ、表面は焼け焦げて煤ける。21ー23は薄板の加工品であるが用途不明である。

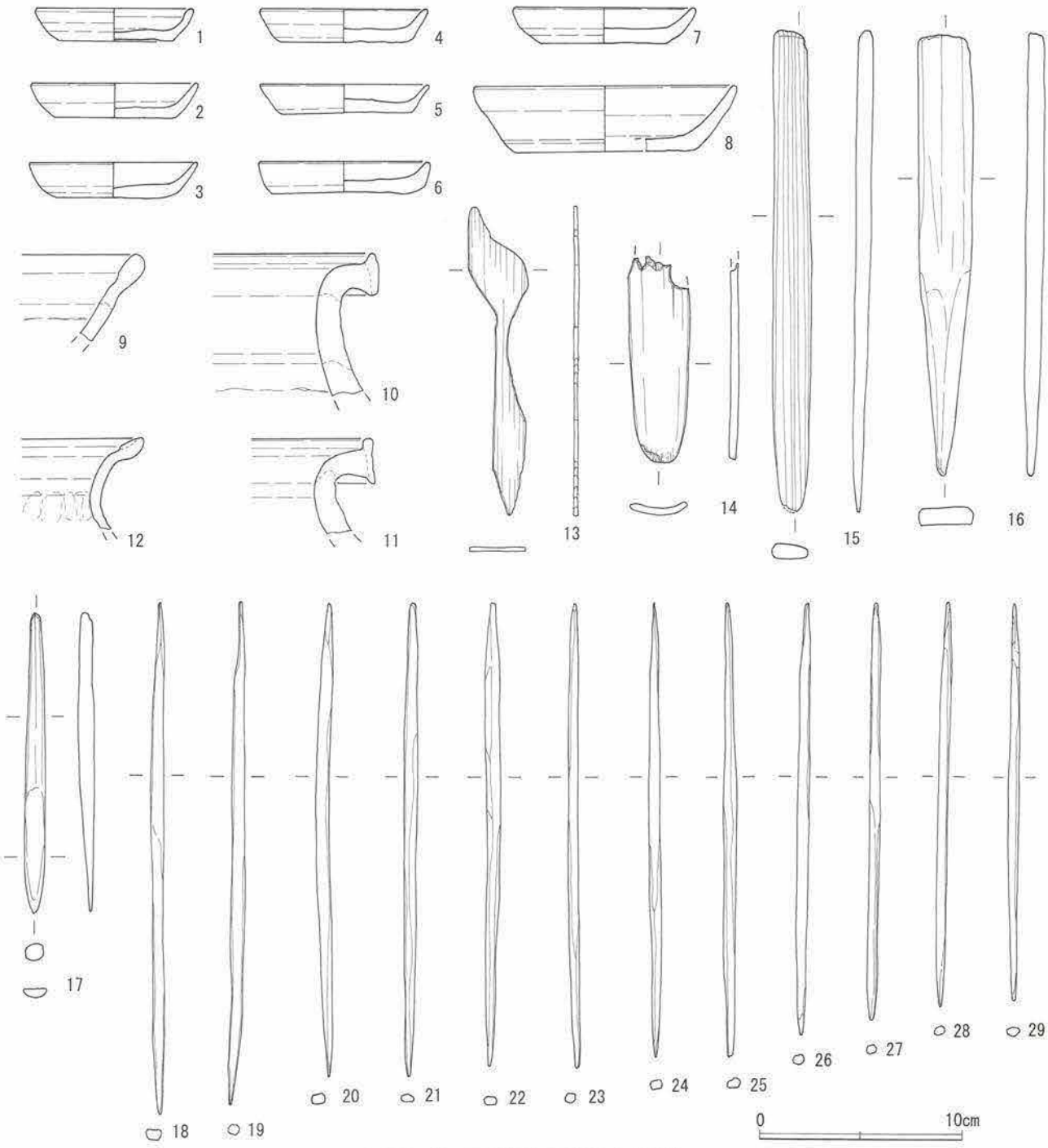


図12　第2面木組土留裏込出土遺物

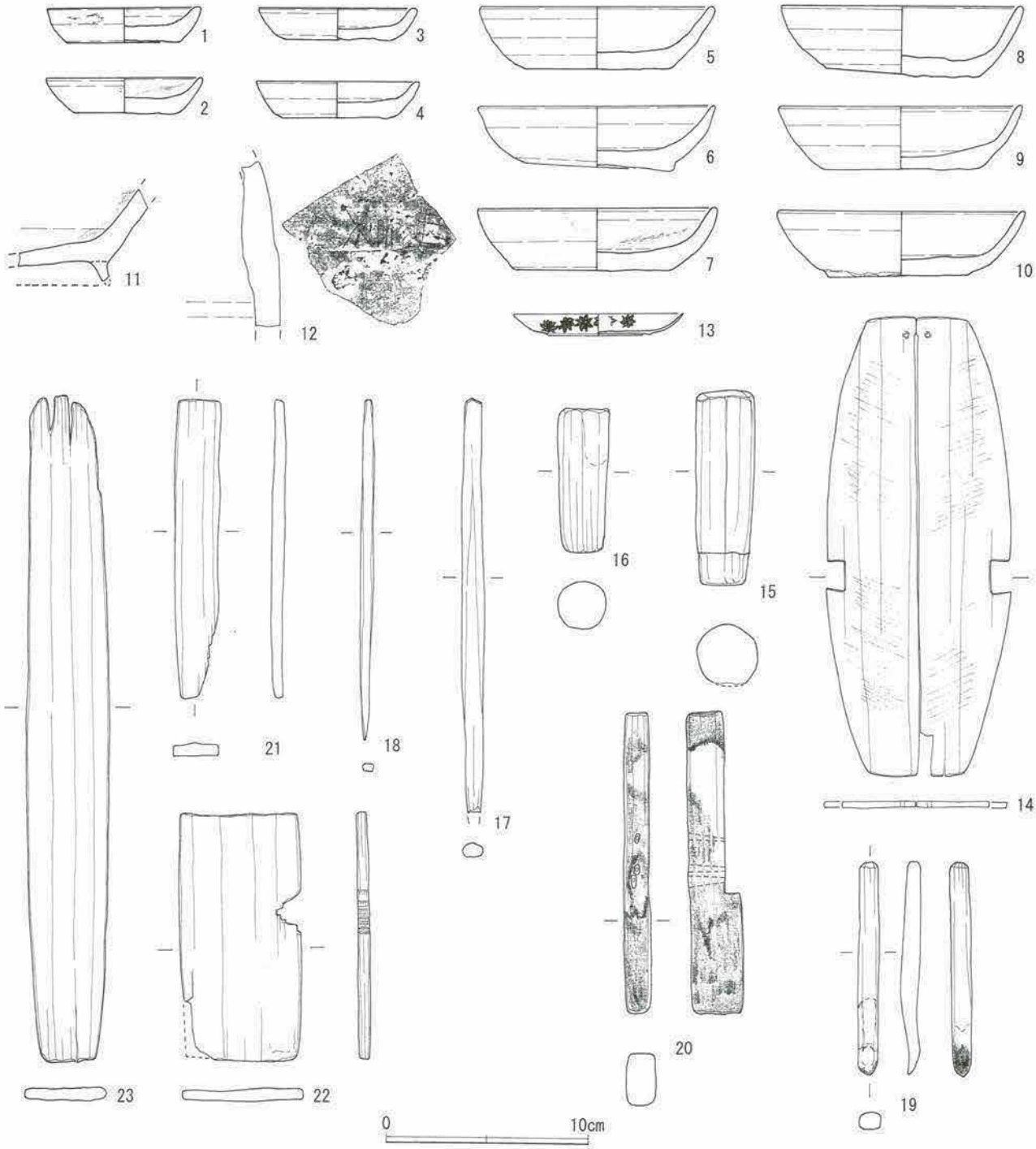


図 13　第２面溝１遺構出土遺物

道路状遺構（図 11・13 ー 17、図版 3 ー 5）

道路の東には木組み護岸と側溝が設けられている南北方向の道路（通路状の可能性も）と考えられる。調査区内での規模は長さ 3.8 m確認しており、南北両方向に延伸することは調査区土層壁面において確認できる。調査区内では幅 1.5 mまで検出されたが、より西へと拡がることが土層観察にやはり確認できる。確認した路面の最上層には厚さ 20cm 前後の灰白砂層を積み上げて路床を構築している。調査区北西墨から２枚の板材が木組護岸と同じ方向で検出され西岸の護岸の木組の倒壊した痕跡とも推定されたたが、灰白砂層を積み上げ路床の拡がりが観察されるので断言はできない。この遺構伴う図示可能な遺物は出土していない。

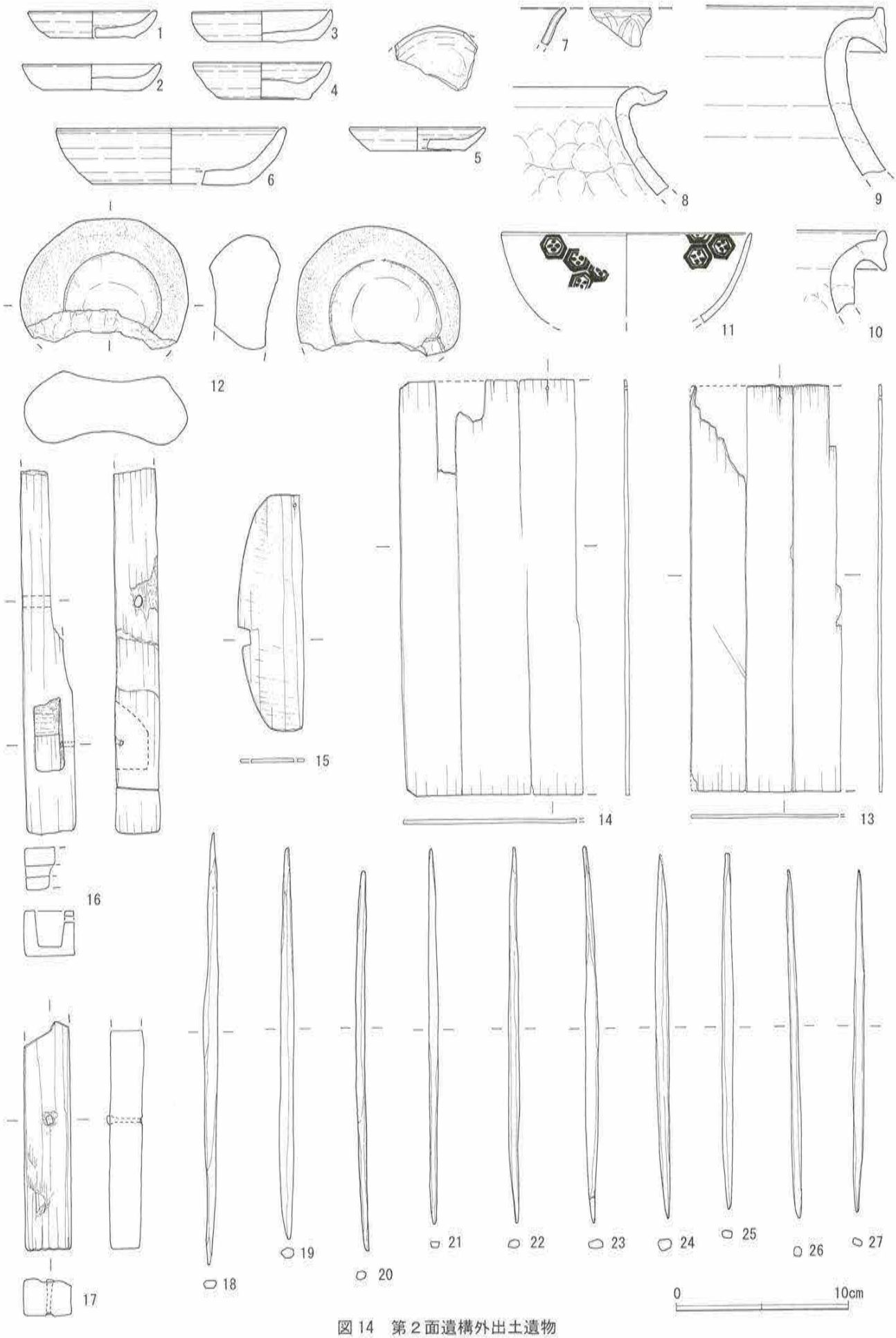


図 14　第２面遺構外出土遺物

第2面遺構外出土遺物（図14、図版9）

1ー6はロクロ成形の糸切底かわらけで1ー5は小皿、6は大皿である。小皿は口径7.5ー8.2cm、底径は3の6.4cm以外が5.0ー5.5cm、器高1.5ー2.1cm、6の大皿は口径13.3cm、底径9.1cm、器高3.2cmでともに低い器高で比較的に口径と底径の比率が小さめで内彎した器形である。5は内底面に兎風の戯画みられる。7は貿易磁器で龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部片である。8ー10は常滑窯所産品で甕口縁ー頚部片である（常滑窯中野編年5ー6型式）。11は漆器椀で復元口径14.5cmで、黒色系漆地塗り後に朱漆による亀甲文スタンプで施文する。12は石製品の窪石で上下面中央が円形に摺り窪む。13ー27は木製品である。13・14は経木製の折敷片であり、15は小型の金剛草履の板芯で表面に藁状の圧痕を残す。16・17は釘穴や抉りの痕跡から組物部材の破片と考えられる。18ー27は箸で長さ20.1ー25.3cm、径3ー5mmの断面多角形の棒状に削り、端部を尖らせた両口加工を施している。

以上のように第2面に伴う遺物は、遺構及び遺構外を併せて543点と最も多く、出土比率は全体の約50%を占めている。その内訳をみると、かわらけ224点、舶載品1点、国産陶器48点、土製品3点、石製品2点、金属製品1点、木・漆製品212点とある程度の量まとまってみられ、その他に骨・貝が49点出土している。

表1　遺物観察表(1)

図番号	層位・遺構	種　別	観　察　項　目
図6－1	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.2) 底径(4.6) 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母のやや多い弱砂質土
2	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.7) 底径(5.0) 器高1.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母の多い砂質土
3	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.4) 底径(5.1) 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む 煤付着
4	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.8) 底径(4.8) 器高2.1 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
5	1面上包含層	かわらけ 大型	口径(12.6) 底径(8.0) 器高3.4 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む砂質土
6	1面上包含層	白磁　口兀皿	底部片 ロクロ成形素地は灰白色の粘質で緻密 釉は乳白色薄手
7	1面上包含層	瀬戸　卸皿	口径(16.8) 器高(2.4) ロクロ成形 胎土は明灰色粘質緻密土 釉は白濁気味の灰緑色、二次焼成で釉剥落あり
8	1面上包含層	瀬戸　卸皿	底径(9.4) ロクロ成形 胎土は灰白色粘質緻密土 釉は白濁気味の淡緑色薄い刷毛塗り
9	1面上包含層	瀬戸　卸皿	底部片 ロクロ成形 胎土は灰白色粘質緻密土 釉は半透明な淡緑色
10	1面上包含層	瀬戸　卸皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は明灰色粘質緻密土 釉は半透明な淡黄 緑色内面に摩滅痕
11	1面上包含層	瀬戸　仏華瓶	ロクロ成形 双耳貼付け 胎土は灰白色粘質緻密土 釉は不透明な暗灰緑色 古瀬戸中期様式か
12	1面上包含層	南部系 山茶碗	口縁部片 ロクロ成形 胎土は明灰色で石粒を多く含む粗土 内面摩滅痕
13	1面上包含層	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積成形胎土は灰色で長石・石英粒を多く含む粗土 小片のため内面使用痕は不明
14	1面上包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積成形胎土は淡赤褐色で長石・石英粒を含む 小片のため内面使用痕は不明
15	1面上包含層	備前　擂鉢	口縁部片 輪積成形胎土は淡赤灰色で長石粒を含む粘質土で表面茶褐色内面に櫛描条線 備前Ⅲ期様式か
16	1面上包含層	瓦質　火鉢	口縁部片 内面を横方向のヘラナデ 胎土は灰色で微砂・白色粒内面が二次焼成で赤変色し荒肌
17	1面上包含層	滑石製　温石	長(6.1) 幅(6.6) 厚1.4 方板状加工で二カ所に円孔をもつ 煤付着
18	1面上包含層	石製品　碁石	径2.1～2.5厚0.5 楕円形の偏平なもの 産地不明の黒色系安山岩質
19	1面上包含層	銭　皇宋通寶	外径2.5 内径1.9 厚0.1 北宋 初鋳1039年
図7－1	1面下a層	かわらけ 小型	口径7.2 底径6.0 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で赤色粒・白色針状・雲母のやや多い弱砂質土
2	1面下a層	かわらけ 小型	口径7.4 底径5.6 器高1.6 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母を含む弱砂質土
3	1面下a層	かわらけ 小型	口径(7.6) 底径(6.0) 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で微砂・白色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
4	1面下a層	かわらけ 小型	口径7.8 底径5.4 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母の多い砂質土
5	1面下a層	かわらけ 小型	口径(7.2) 底径(4.8) 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
6	1面下a層	かわらけ 小型	口径(7.2) 底径4.6 器高1.9ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は淡黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土

表2　遺物観察表(2)

図番号	層位・遺構	種　別	観　察　項　目
図7－7	1面下a層	かわらけ 小型	口径8.2 底径4.8 器高1.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
8	1面下a層	かわらけ 小型	口径(9.1) 底径7.0 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母の多い砂質土
9	1面下a層	かわらけ 中型	口径(11.0) 底径(7.2) 器高2.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は淡黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土
10	1面下a層	かわらけ 大型	口径(12.2) 底径(7.8) 器高3.4 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・雲母のやや多い弱砂質土
11	1面下a層	かわらけ 大型	口径(12.6) 底径7.4 器高3.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土
12	1面下a層	瓦器　土碗	口径(10.2) ロクロ成形 胎土は明灰色で口縁部内外側が黒灰色
13	1面下a層	龍泉窯系青磁 鎬蓮弁文碗	底径(4.0) ロクロ成形 高台断面が三角形 素地は明灰色の緻密釉は灰緑色半透明 高台内施釉で畳付露胎
14	1面下a層	龍泉窯系青磁 折縁皿	口縁部片 ロクロ成形 内面蓮弁文 素地は明灰白色の緻密 釉は灰緑色半透明で厚手に施釉
15	1面下a層	景徳鎮窯系 青白磁梅瓶	胴部片 ロクロ成形外面唐草文 素地は明白色粘質で緻密 釉は水青色透明の薄い施釉 内面露胎
16	1面下a層	瀬戸　折縁皿	口径(10.1) ロクロ成形 内底の中央と外周に櫛描円圏文 胎土は灰白色粘質緻密土 釉は半透明な淡灰緑色の灰釉を刷毛塗り
17	1面下a層	瀬戸　卸皿	口縁部片 ロクロ成形 内面ヘラで荒く卸目を刻む 胎土は灰白色緻密釉は淡緑色の灰釉を刷毛塗り
18	1面下a層	瀬戸　華瓶	胴部片 ロクロ成形 胎土は灰白色粘質土で緻密 釉は外面に灰緑色
19	1面下a層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積成形 胎土は暗灰色で長石・石英粒を含む 器表褐色小片のため内面使用痕は不明
20	1面下a層	常滑 鳶口壺	頸～肩部片 輪積成形 胎土は灰色で長石・石英粒をやや多く含む 器表赤褐色肩部に一条凹線
21	1面下a層	常滑　甕	口縁部片 輪積成形 胎土は暗灰色で長石・石英粒を多く含む 自然降灰釉
22	1面下a層	常滑　甕	肩部片 輪積成形 格子目状の叩き痕胎土は灰色で長石・石英粒を多く含む器表赤褐色
23	1面下a層	常滑　甕	胴部～底部片 輪積成形 砂目底 胎土は灰色で長石・石英粒が多い
24	1面下a層	常滑　甕	胴部～底部片 輪積成形 砂目底 胎土は灰色で長石・石英粒が多い
25	1面下a層	備前　擂鉢	口縁部片 輪積成形 胎土は淡赤灰色で長石粒を含む粘質土で器表茶褐色内面の櫛描条線は6条一単位の擂目
26	1面下a層	瓦質　火鉢	脚部片 脚部は別粘土で貼付 灰色で白色粒・黒色微砂・雲母を含む 表面灰黒色の薫状を呈す
27	1面下a層	石製品　硯	長(6.2) 幅(3.0) 厚(1.9) 赤褐色頁岩製で赤間石製か？
28	1面下a層	石製品　不明	長(5.6) 幅(6.6) 厚(1.8) 緑泥片岩質の石材
29	1面下a層	銭　熙寧元寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鋳1068年
30	1面下a層	銭　元豊通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鋳1078年
31	1面下a層	銭　嘉祐通寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鋳1056年
32	1面下a層	銭　至道元寶	外径2.4 内径1.9 北宋 初鋳955年

表3 遺物観察表(3)

図番号	層位・遺構	種 別	観 察 項 目
図7－33	1面下a層	銭 聖宋元寶	外径2.4 内径1.9 北宋 初鋳1101年
34	1面下a層	銭 天禧通寶	外径2.5 内径2.0 北宋 初鋳1017年
35	1面下a層	銭 聖宋元寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鋳1101年
36	1面下a層	銭 元豊通寶	外径2.3 内径1.8 北宋 初鋳1078年
37	1面下a層	銭 皇宋通寶	外径2.3 内径1.9 北宋 初鋳1038年
38	1面下a層	銭 元豊通寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鋳1078年
39	1面下a層	銭 祥符通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鋳1009年
40	1面下a層	銭 熙寧元寶	外径2.5 内径1.8 北宋 初鋳1068年
41	1面下a層	銭 元祐通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鋳1086年
42	1面下a層	銭 紹聖元寶	外径2.2 内径1.7 北宋 初鋳1094年
43	1面下a層	銭 元祐通寶	外径2.4 内径1.9 北宋 初鋳1086年
44	1面下a層	銭 熙寧元寶	外径2.3 内径1.9 北宋 初鋳1068年
45	1面下a層	銭 天聖元寶	外径2.5 内径2.0 北宋 初鋳1023年
46	1面下a層	銭 皇宋通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鋳1038年
47	1面下a層	銭 太平通寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鋳967年
48	1面下a層	銭 熙寧元寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鋳1068年
49	1面下a層	銭 皇宋通寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鋳1038年
50	1面下a層	銭 開元通寶	外径2.4 内径2.0 唐 初鋳621年
51	1面下a層	銭 熙寧元寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鋳1068年
52	1面下a層	銭 治平元寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鋳1064年
53	1面下a層	銭 政和通寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鋳1111年
図8－1	1面下b層	かわらけ 小型	口径8.0 底径5.5 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
2	1面下b層	かわらけ 小型	口径8.1 底径5.6 器高1.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で赤色粒・白色針状・雲母・微砂を含む弱砂質土
3	1面下b層	かわらけ 大型	口径12.2 底径(7.8) 器高3.2 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母・微砂を多く含む砂質
4	1面下b層	龍泉窯系青磁 鎬蓮弁文碗	口縁～体部片 ロクロ成形 口縁端反気味 素地は灰白色粘質の緻密釉は灰緑色不透明 厚手施釉
5	1面下b層	白磁 口兀皿	ロクロ成形 素地は白色粘質で緻密 釉は乳白色の薄手
6	1面下b層	褐釉 壺	肩部片 ロクロ成形 胎土は黄褐色で粘質精良の緻密 釉は暗褐色
7	1面下b層	褐釉 壺	胴部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色で粘質精良の緻密 釉は茶褐色

表4　遺物観察表(4)

図番号	層位・遺構	種　別	観　察　項　目
図8－8	1面下b層	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～体部片　輪積成形　胎土は灰色で長石・石英粒・砂を多く含む粗土　内面使用の摩滅痕
9	1面下b層	常滑 片口鉢Ⅰ類	体部下～底部片　輪積成形　貼付高台が剥離　胎土は灰色で長石・石英粒を多く含む粗土　内面使用の著しい摩滅痕
10	1面下b層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～体部片　輪積成形　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を含むやや粗土　器表は灰褐色　内面使用の摩滅痕
11	1面下b層	常滑 片口鉢Ⅱ類	輪積成形　砂目底　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を含む　器表褐色　器表は灰褐色　内面使用の摩滅痕
12	1面下b層	常滑　甕	肩部片　輪積成形　格子叩き目痕　胎土は灰色で石粒・砂粒を含む
13	1面下b層	常滑　甕	肩部片　輪積成形　格子叩き目痕　胎土は灰色で石粒・砂粒を含む
14	1面下b層	漆器　皿	口径 (9.6) 底径(7.0) 器高1.5　ロクロ成形 薄手木地　黒色系漆のみの無文
15	1面下b層	石製品　砥石	長(4.4) 幅(2.6) 厚(2.4)　砥面は上下面に使用痕　淡緑色凝灰岩製　上野産の中砥か
図11－1	2面建物1　P1	銭　元豊通寶	外径2.5 内径2.1　北宋　初鋳1078年
2	2面建物1　P2	常滑　甕	底部片　輪積成形　砂目底　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含む　内面に自然降灰
3	2面建物1　P3	かわらけ 大型	口径(12.6) 底径6.6 器高3.3　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は黄橙色で白色針状・雲母・微砂を 含む弱砂質土
4	2面建物1　P3	かわらけ 大型	口径12.5 底径6.8 器高3.3　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む　内面に煤付着
図12－1	2面木組土留	かわらけ 小型	口径7.7 底径5.6 器高1.7　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む砂質土
2	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.1 底径5.8 器高1.7　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含むやや粉質土
3	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.3 底径5.1 器高1.8　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は黄灰色で白色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
4	2面木組土留	かわらけ 小型	口径(8.3) 底径(6.1) 器高1.7　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は淡黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土
5	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.3 底径6.3 器高1.4　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は黄灰色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
6	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.3 底径6.9 器高1.6　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は橙色で微砂・白色針状・雲母をやや多く含む砂質土
7	2面木組土留	かわらけ 小型	口径(8.9) 底径6.3 器高1.8　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は橙色で微砂・白色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
8	2面木組土留	かわらけ 大型	口径(12.8) 底径(8.8) 器高3.2　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を多く含む砂質土
9	2面木組土留	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積成形　胎土は灰色で石粒・砂粒を多く含む　内面摩滅痕
10	2面木組土留	常滑　甕	口縁部片　輪積成形　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を含む自然降灰　中野編年6型式
11	2面木組土留	常滑　甕	口縁部片　輪積成形　胎土は灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い　器表暗赤褐色　中野編年6型式
12	2面木組土留	伊勢系　土鍋	口縁～頸部片　輪積成形　薄手器壁で口端部を内側に折り曲げ　胎土は暗褐色で黒色微砂・雲母を多く含む砂質土　外面に煤付着
13	2面木組土留	木製品 人形代	長15.3 幅0.4～2.8 厚0.2　折敷様の薄板を切って烏帽子を冠った整形の横向き人形代　下部は先端が尖る加工を施す

表5 遺物観察表(5)

図番号	層位・遺構	種 別	観 察 項 目
図12－14	2面木組土留	木製品 鞘か	長(10.3) 幅3.0 厚0.4 板目材で断面半月状で小刀の鞘を再加工か
15	2面木組土留	木製品 ヘラ状	長23.7 幅1.9 厚0.7 偏平加工の用材の片端部を両側面から削り下し、さらに上面を先端に向け薄く削り仕上げする
16	2面木組土留	木製品 ヘラ状	長21.8 幅2.7 厚0.9 断面が長方形偏平な用材粗く削り先端を尖らす仕上げ
17	2面木組土留	木製品 ヘラ状	長14.9 幅1.0 厚0.5 断面丸棒の箸状に加工した用材 片端部を両側面から削り尖らし、さらに片面を先端に向け削り仕上げする
18	2面木組土留	木製品 箸	長25.5 幅0.7 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
19	2面木組土留	木製品 箸	長25.0 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
20	2面木組土留	木製品 箸	長23.5 幅0.7 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
21	2面木組土留	木製品 箸	長23.5 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
22	2面木組土留	木製品 箸	長23.0 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
23	2面木組土留	木製品 箸	長23.0 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
24	2面木組土留	木製品 箸	長22.5 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
25	2面木組土留	木製品 箸	長22.4 幅0.7 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
26	2面木組土留	木製品 箸	長21.5 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
27	2面木組土留	木製品 箸	長20.5 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
28	2面木組土留	木製品 箸	長20.0 幅0.5 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
29	2面木組土留	木製品 箸	長19.5 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
図13－1	2面溝状	かわらけ 小型	口径7.5 底径5.6 器高1.6 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母を含む砂質土 煤付着の灯明皿
2	2面溝状	かわらけ 小型	口径7.7 底径5.1 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む 煤付着の灯明皿か
3	2面溝状	かわらけ 小型	口径7.7 底径5.1 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含むやや粉質土
4	2面溝状	かわらけ 小型	口径8.0 底径5.5 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含むやや砂質土
5	2面溝状	かわらけ 大型	口径11.6 底径7.3 器高3.0 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含むやや砂質土
6	2面溝状	かわらけ 大型	口径11.8 底径7.2 器高2.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む
7	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.0 底径7.9 器高3.0 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を多く含む粗土
8	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.1 底径7.7 器高3.3 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含むやや砂質土
9	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.3 底径7.8 器高3.1 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で赤色粒・白色針状・雲母を含むやや粉質土
10	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.4 底径7.0 器高3.2 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土

表6　遺物観察表(6)

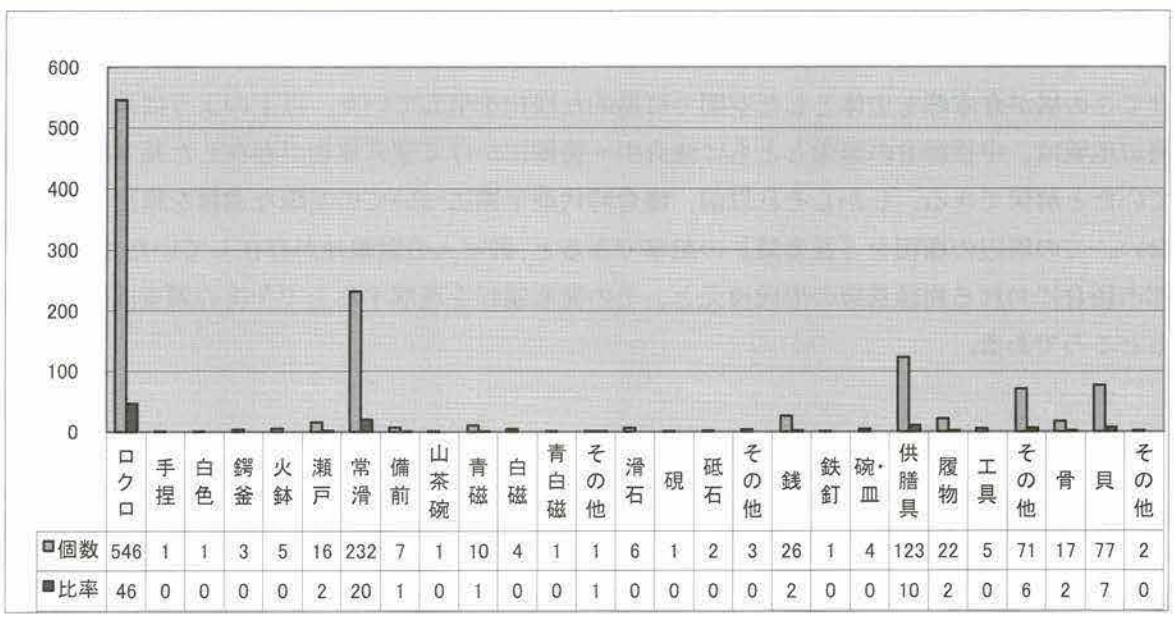
図番号	層位・遺構	種　別	観　察　項　目
図13－11	2面溝状	常滑 片口鉢Ⅰ類	体部下半～底部片　輪積成形胎土は灰色で石粒・砂粒を多く含む　内面使用痕の著しい摩滅
12	2面溝状	常滑　甕	胴部片　輪積成形　叩き目は矩形内に×状と交差線の組み合せ　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い　器表茶褐色
13	2面溝状	漆器　皿	口径(8.4) 底径(5.0) 器高1.0　ロクロ成形　木地が極薄手　黒色系漆の地塗りに赤色漆で内外面に花文スタンプの施文
14	2面溝状	木製品 草履　板芯	長22.7 幅9.1 厚0.3　半月状の薄板を中心線で二枚を合わせて片足分　藁状の植物圧痕残る金剛草履
15	2面溝状	木製品　栓状	長9.7 径2.3～3.0　円形の先細り状へと縦位の削り施し先端部は丁寧な削り仕上げ
16	2面溝状	木製品　栓状	長7.2 径2.0～2.4　円形の先細り状に縦位の丁寧な削りで仕上げる
17	2面溝状	木製品　菜箸	長(20.6) 幅9.1 厚0.3　先端欠失　柾目材を縦割り後、丸棒状の多角形に削り加工
18	2面溝状	木製品　箸	長16.8 幅0.4 厚0.3　断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
19	2面溝状	木製品 耳掻き状	長10.7 幅1.0 厚0.8　断面丸棒の箸状に加工した用材で片端部を耳掻皿風に削り仕上げたもの　皿部に煤付着
20	2面溝状	木製品　部材	板状用材の片面をL字形に削り加工し側面中央部に3カ所の縦位穿孔あり表面焼け焦げ黒ずむ
21	2面溝状	木製品　不明	長14.6 幅2.2 厚0.4　板状用材の先端片側を刃先状に斜めに削る
22	2面溝状	木製品　不明	長12.3 幅6.0 厚0.3　長方形の板材の片側にV字形切り込みを入れる
23	2面溝状	木製品　不明	長32.8 幅4.0 厚0.4　細長い板状で両側がやや細く丸味もつ仕上げ
図14－1	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(7.5) 底径(5.0) 器高1.5　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕　胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母を含む弱砂質土
2	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(8.1) 底径(5.5) 器高1.5　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は灰橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
3	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(8.2) 底径(6.4) 器高1.8　ロクロ成形で外底回転糸切痕　板状圧痕　胎土は黄灰色で白色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
4	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(7.9) 底径(5.2) 器高2.1　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕　胎土は黄橙色で微砂・白色針状・雲母を含む弱砂質土
5	2面遺構外	かわらけ墨書 小型	口径(7.8) 底径(5.5) 器高1.4　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状・雲母を含む　内底面に兎風の墨書あり
6	2面遺構外	かわらけ 大型	口径(13.3) 底径(9.1) 器高3.2　ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕　胎土は黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を多く含む粗土
7	2面遺構外	龍泉窯系青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片　ロクロ成形 口縁外反気味素地は灰白色粘質緻密　釉は灰緑色の不透明
8	2面遺構外	常滑　甕	口縁～頸部片　輪積成形　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い 器表褐色　内外面に自然降灰　中野編年5型式
9	2面遺構外	常滑　甕	口縁～頸部片　輪積成形　胎土は灰褐色で石粒・砂粒を多く含み粗い　器表暗褐色口縁内に自然降灰　中野編年6型式
10	2面遺構外	常滑　甕	口縁～頸部片　輪積成形　胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い　器表暗褐色内外面に自然降灰　中野編年6型式
11	2面遺構外	漆器　椀	口径(14.5)　ロクロ成形　黒色系漆の地塗りに赤色系漆を用い、内外面に亀甲文スタンプで施文
12	2面遺構外	石製品　窪石	径9.7 中央厚2.9 両端厚4.0前後　上下面は中央部が円形に窪む擂り、加工を施す凝灰岩質

表7 遺物観察表(7)

図番号	層位・遺構	種 別	観 察 項 目
図14－13	2面遺構外	木製品 折敷	長23.7 幅(8.8) 厚0.2 柾目取りに極薄へぎ経木製の折敷 周囲に縁を綴じるための小孔を穿つ
14	2面遺構外	木製品 折敷	長24.1 幅(10.1) 厚0.1 柾目取りに極薄へぎ経木製の折敷 軽く隅を切り落とす 折敷周囲の縁を綴じる小孔を穿つ
15	2面遺構外	木製品 草履 板芯	長13.8 幅3.7 厚0.2 半月状の薄板で二枚を合わで片足分としたものの半分 表面藁状の植物圧痕残る 金剛草履
16	2面遺構外	木製品 組物部材	長(21.2) 幅2.9 厚2.6 角材を用い中央部に釘穴状の孔、片端近くにU字形のほぞ穴風の抉りを施す 用途不明
17	2面遺構外	木製品 不明	長(13.5) 幅2.8 厚1.9 角材で中央部に鉄釘1本が打ち込まれ残存
18	2面遺構外	木製品 箸	長25.3 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
19	2面遺構外	木製品 箸	長22.9 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
20	2面遺構外	木製品 箸	長22.2 幅0.3 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
21	2面遺構外	木製品 箸	長22.0 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
22	2面遺構外	木製品 箸	長22.0 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
23	2面遺構外	木製品 箸	長22.0 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
24	2面遺構外	木製品 箸	長21.4 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
25	2面遺構外	木製品 箸	長20.8 幅0.3 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
26	2面遺構外	木製品 箸	長20.5 幅0.3 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
27	2面遺構外	木製品 箸	長20.1 幅0.3 厚0.2 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工

表8　遺物分類別出土数量・比率表

出土地 / 種類		1面上	1面下a層	1面下b層	2面	その他	合計	比率(%)
かわらけ	ロクロ	113	156	53	224	0	546	46
	手捏	0	0	1	0	0	1	0
	白色	0	1	0	0	0	1	0
土製品	鍔釜	0	0	0	3	0	3	0
	火鉢	3	2	0	0	0	5	0
国産陶器	瀬戸	8	6	1	1	0	16	2
	常滑	69	77	38	48	0	232	20
	備前	2	5	0	0	0	7	1
	山茶碗	1	0	0	0	0	1	0
舶載陶磁器	青磁	2	4	3	1	0	10	1
	白磁	3	0	1	0	0	4	0
	青白磁	0	1	0	0	0	1	0
	その他	0	0	1	0	0	1	1
石製品	滑石	4	0	0	2	0	6	0
	硯	0	1	0	0	0	1	0
	砥石	0	1	1	0	0	2	0
	その他	1	0	0	2	0	3	0
金属品	銭	1	24	0	1	0	26	2
	鉄釘	0	1	0	0	0	1	0
漆・木製品	碗・皿	0	0	1	3	0	4	0
	供膳具	0	0	0	122	1	123	10
	履物	0	0	1	21	0	22	2
	工具	0	0	0	5	0	5	0
	その他	0	5	2	61	3	71	6
自然遺物	骨	5	3	4	4	1	17	2
	貝	18	10	3	45	1	77	7
	その他	2	0	0	0	0	2	0
合計		232	297	110	543	6	1188	
比率(%)		19	25	9	46	1		



	ロクロ	手捏	白色	鍔釜	火鉢	瀬戸	常滑	備前	山茶碗	青磁	白磁	青白磁	その他	滑石	硯	砥石	その他	銭	鉄釘	碗・皿	供膳具	履物	工具	その他	骨	貝	その他
■個数	546	1	1	3	5	16	232	7	1	10	4	1	1	6	1	2	3	26	1	4	123	22	5	71	17	77	2
■比率	46	0	0	0	0	2	20	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	10	2	0	6	2	7	0

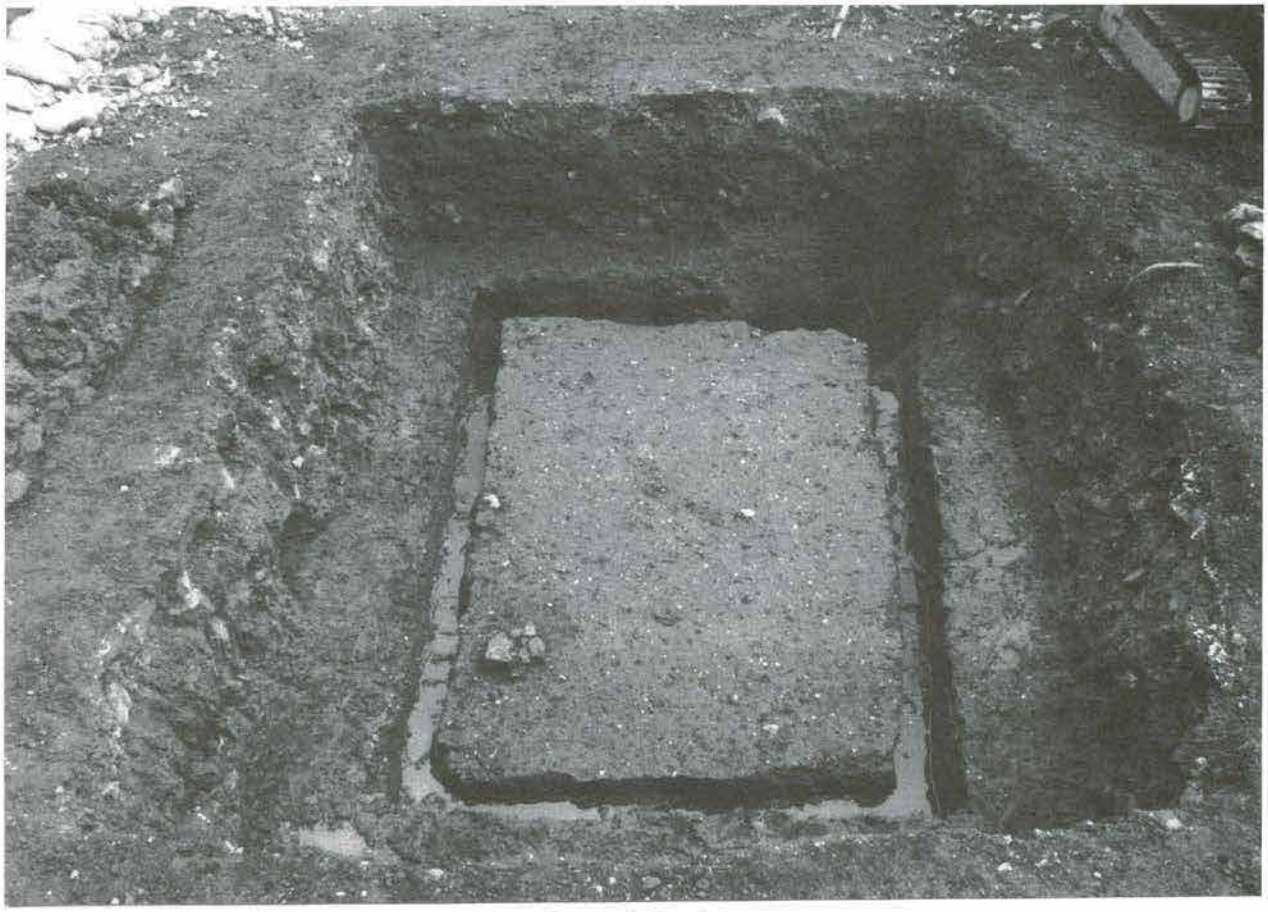
第4章　まとめ

下馬周辺遺跡内における今回の調査地点（由比ヶ浜二丁目 39 番 14）では、調査面積の狭さや湧水に伴う崩落の危険性から掘削深度の制約があり限定された範囲内の遺構検出や出土遺物に留まっており、遺構の性格や敷地の空間的な様相を明確にすることはできなかった。ここでは前章までに記した調査の成果について概観すると共に、近辺の調査地点との関係などを簡単に触れてまとめにかえたい。

本調査地点は由比ヶ浜の海浜砂丘帯の裏側に位置し滑川や佐助川が合流する下馬四ツ角付近から車小路近辺にかけては鎌倉市街地の中でも最も海抜標高の低い地域で現地表の海抜高６ｍ程を測るものであり、南側の砂丘帯頂部に建っている現在の石造浜ノ大鳥居より３ｍも低い標高を示している。第１面は地表下約 1.4 ｍで検出されたた弱い地形層による遺構密度の低い生活面で明確な建物を示す柱穴や礎石は確認されていない。出土遺物からみて概ね 14 世紀代の所産と考えらる。

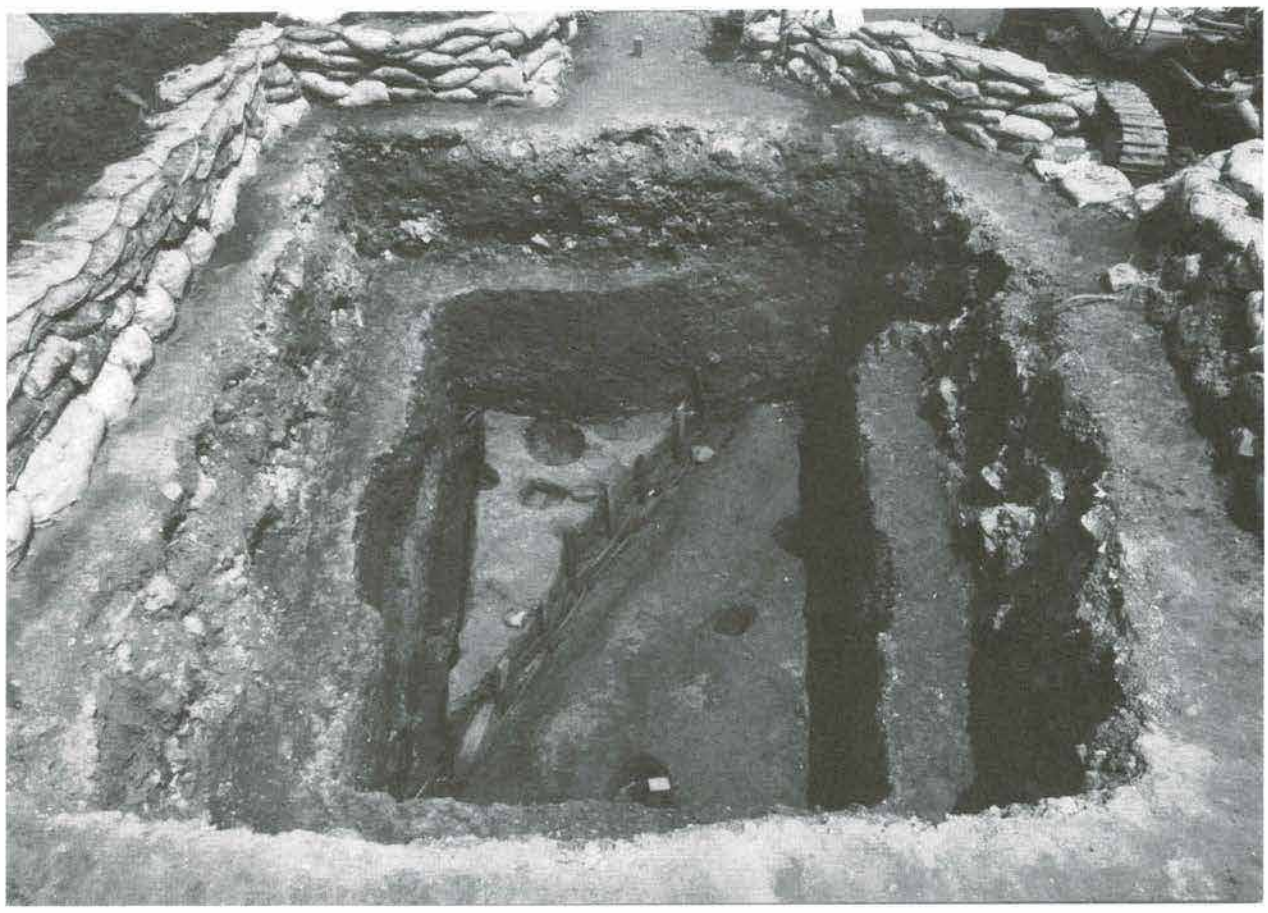
第２面は海抜高 4.7 ｍ前後で貝殻粒を多く含み褐鉄分が染み込んだ硬化面であった。この上面では掘立柱建物、道路（通路）・木組みの土留遺構柱穴、溝などが検出された。この面に伴う出土遺物からみて概ね 13 世紀後葉～ 14 世紀初頭頃の所産と考えらる。

本遺跡の発掘調査では現在までのところ、まとまった調査成果が得られた事例が少ないが、若宮大路修景事業に伴う発掘調査で車小路と若宮大路が交差する図１（地点位置は本図参照）の地点１からは天文年間頃の造替を思わす浜ノ大鳥居になる西側脚柱の根方が発見され鎌倉時代からほぼ同じ場所での鳥居造立が行なわれたと想定され、中世都市鎌倉の中心部と周縁部を分かつ境であった可能性が考えられる。海浜砂丘の北側裾部に位置する地点２の調査では鎌倉時代を主体とした三時期の遺構・遺物が発見された。最下層遺構の 13 世紀前半頃は沼のような湿地の窪地が存在しており、それに伴う遺物は柿経・笹塔婆などを多量投棄した特殊な行為が確認され生活臭の少ない鎌倉前期のこの場を考える上でこれらの遺物が重要な意味を含くんでいると思われる。次の時期、13 世紀中頃は生活の営みが認められる空間へと変化、溝や段で区画された中に掘立柱建物・井戸・ゴミ穴の土坑が点在し屋敷地が想定された。さらに 13 世紀後葉～ 14 世紀中頃では人々の生活が最も活況に満ちた時期で竪穴建物・井戸・通路と、多くのゴミ穴土坑が発見され、それに伴い豊富な種類の多量な遺物が出土しており、この場が町屋的な空間に変貌したと考えられる。地点５などの砂丘頂部の南側に拡がる前浜の浜地からは通路で区画した中に頻繁に建て替えられた大型の竪穴建物や井戸、土坑墓跡などが密集しており、鎌倉後期～南北朝期にかけてこの場が倉庫群を主体とした空間で町屋的な様相を呈していた。以上のように本調査地点を含めた周辺地域は、中世鎌倉の繁栄とともに鎌倉中～後期にかけて竪穴建物が存在した基本的に町屋が展開していたと解釈できる。しかしそれ以前、鎌倉時代前半期についての明瞭な遺構を検出した調査事例は少ない。この周辺の様相を『吾妻鏡』の記事でみると、御家人の屋敷地が存在していたことが知られ、中世都市鎌倉におれる周縁景観の形成復元と、その発展過程を理解する上で今後の調査成果の蓄積が望まれるところである。

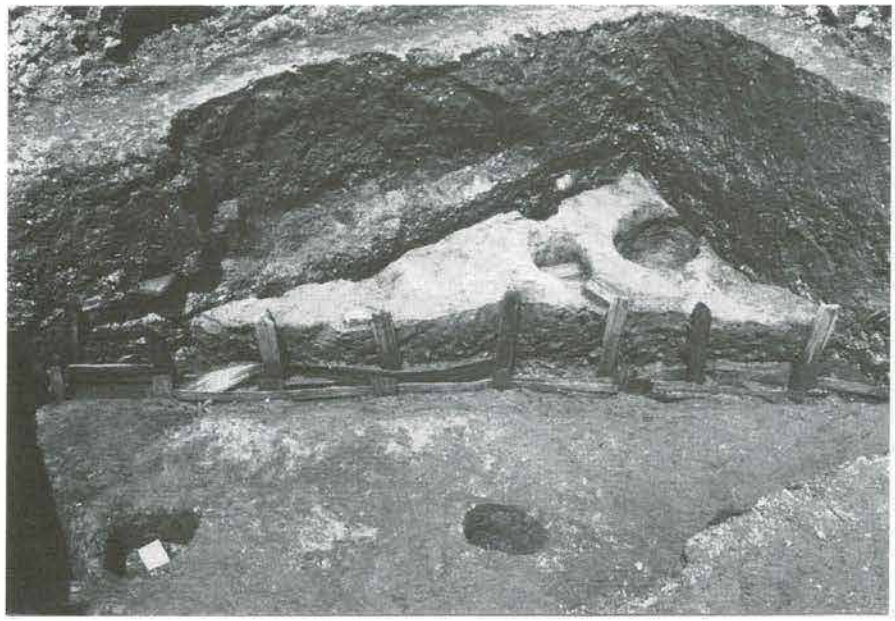


▲ 1. 第 1 面全景（南から）

▼ 2. 第 2 面全景（南から）

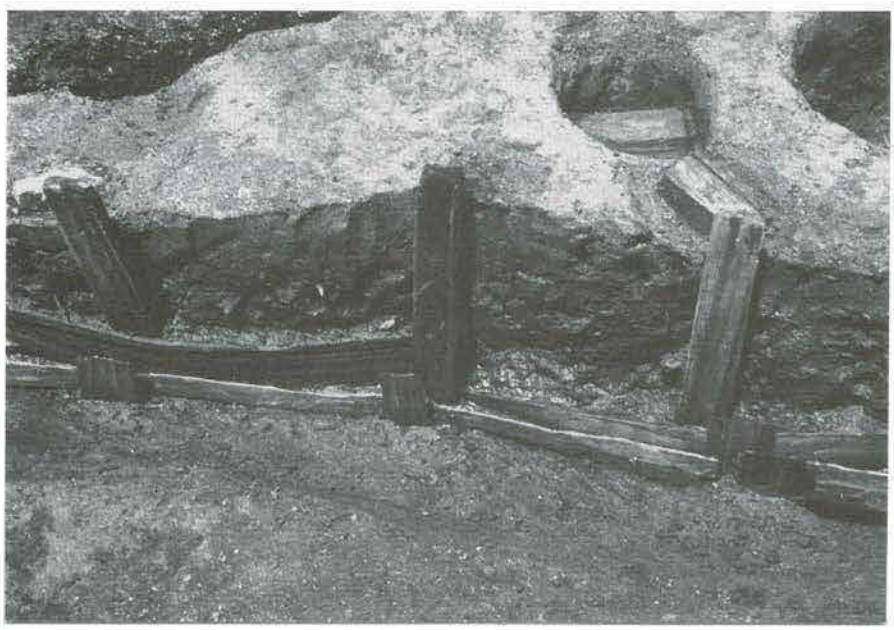


図版２



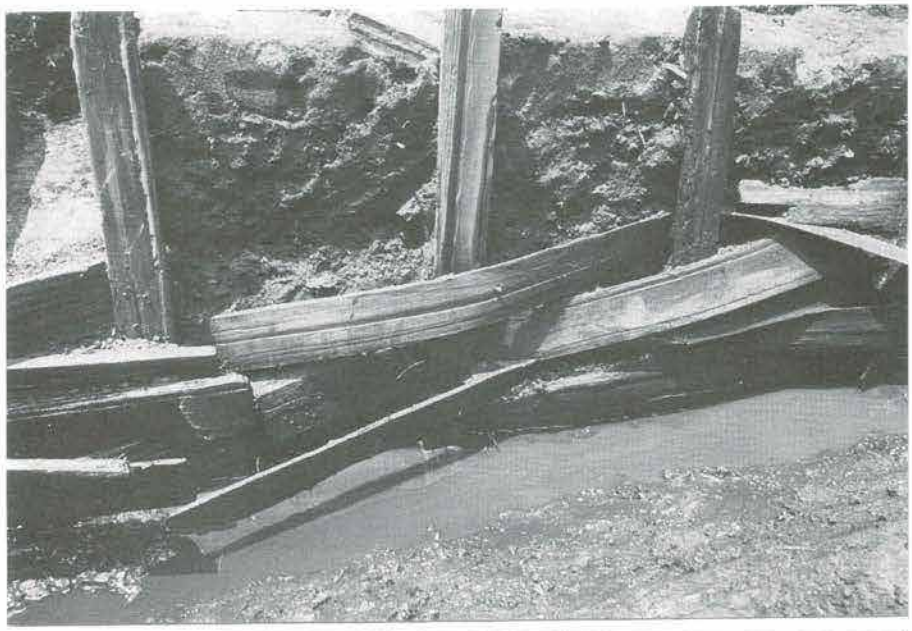
◀ 1. 第２面
建物１･木組土留遺構
検出状況（南東から）

◀ 2. 同上（南東から）

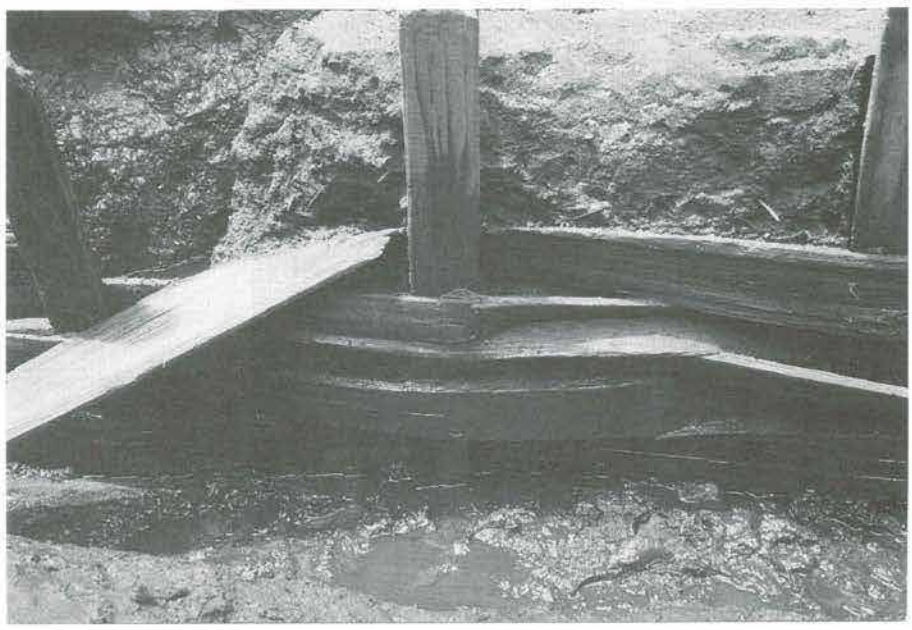


◀ 3. 木組土留遺構
（東から）

◀ 1. 第２面
木組土留遺構
完掘状況（南東から）

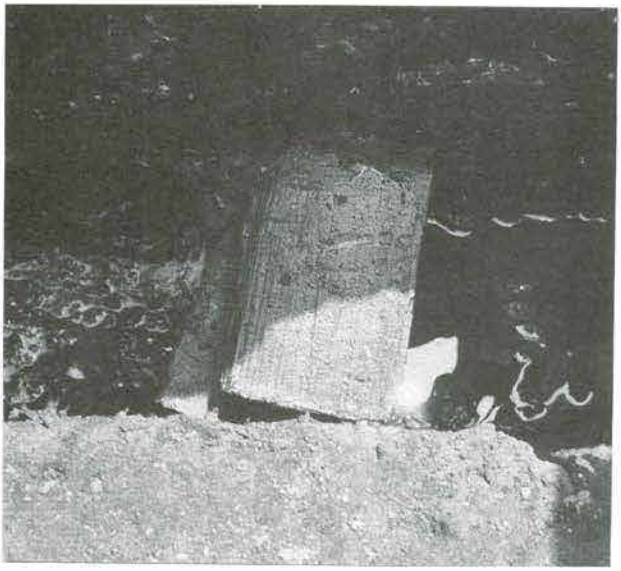


◀ 2. 木組土留遺構
北側（東から）

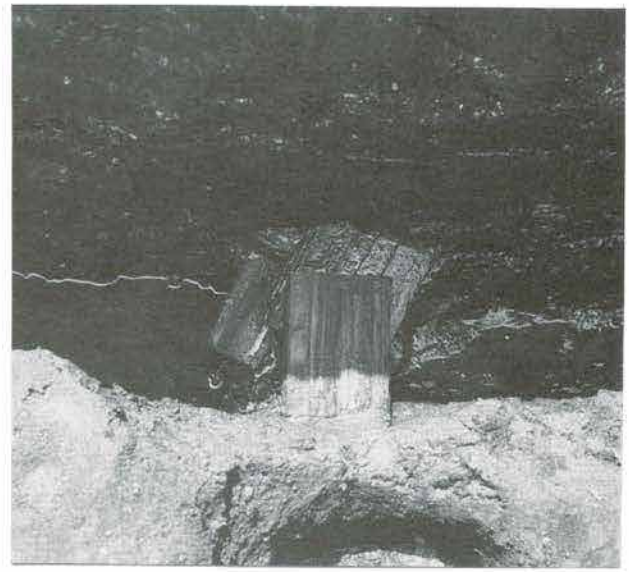


◀ 3. 同上
南側（東から）

図版４



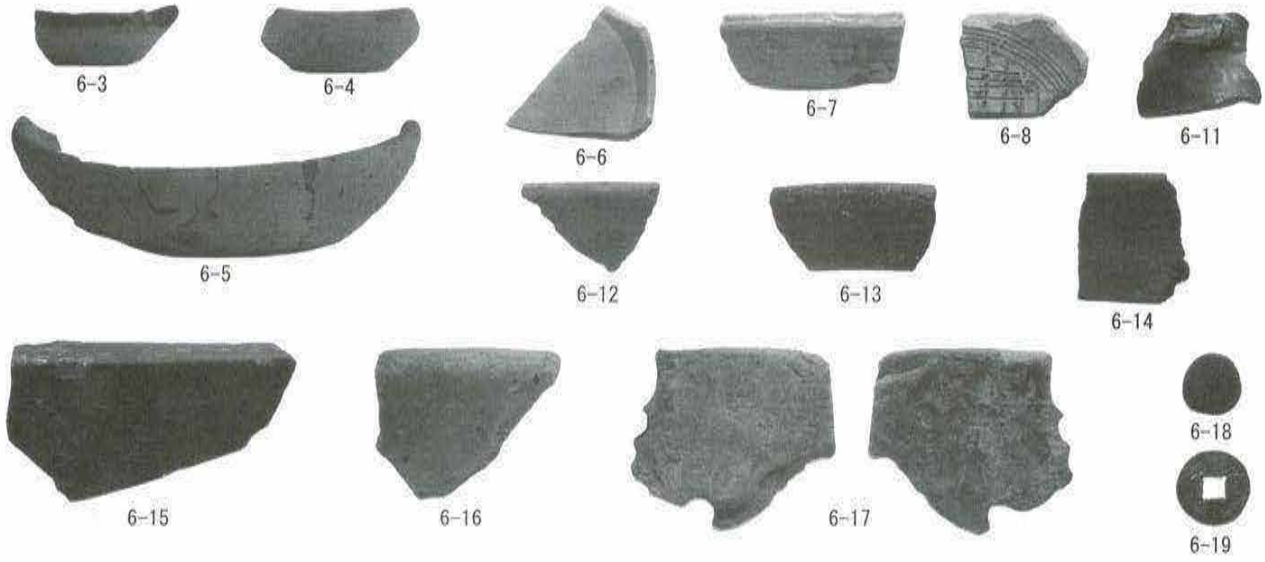
▲ 1. 第２面 建物内礎板 東壁際（西から）



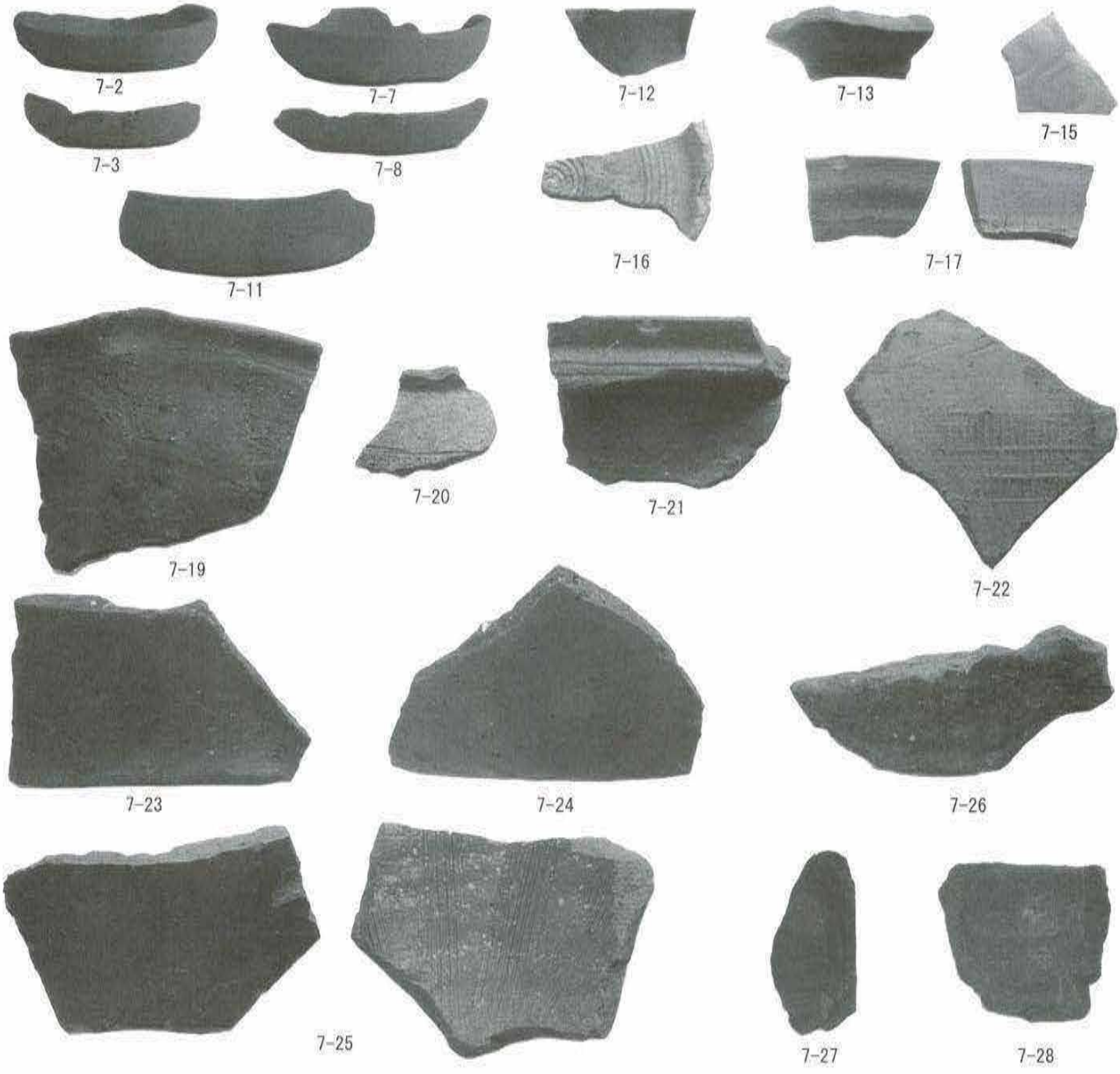
▲ 2. 同左 南壁際（北から）

▲ 3. 調査区南壁土層堆積（北から）

▼ 4. 調査区西壁土層堆積（東から）



▲ 1. 第１面上包含層



▲ 2. 第１面下ａ層

図版６

第1面下a層出土さし銭

7-29

7-30

7-31

7-32

7-33

7-34

7-35

7-36

7-37

7-38

7-39

7-40

7-41

7-42

7-43

7-44

7-45

7-46

7-47

7-48

7-49

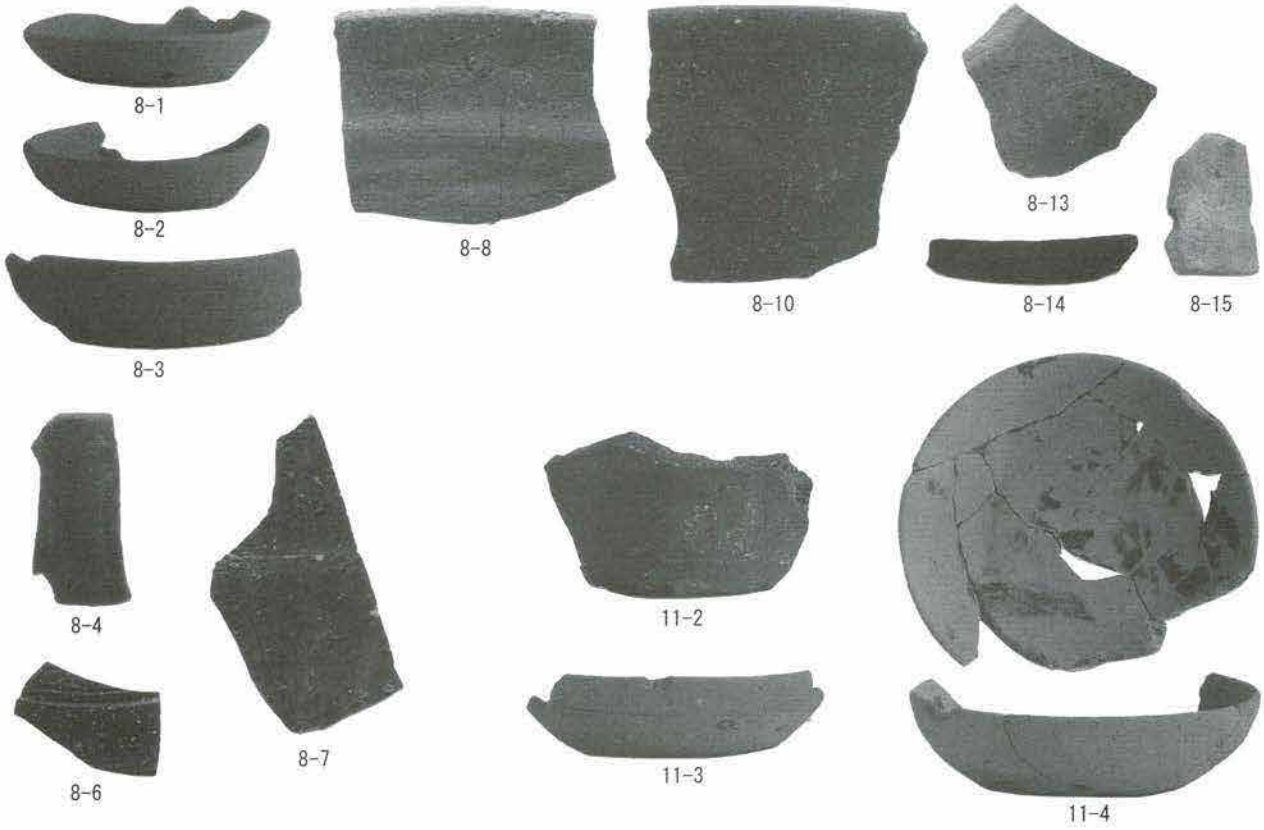
7-50

7-51

7-52

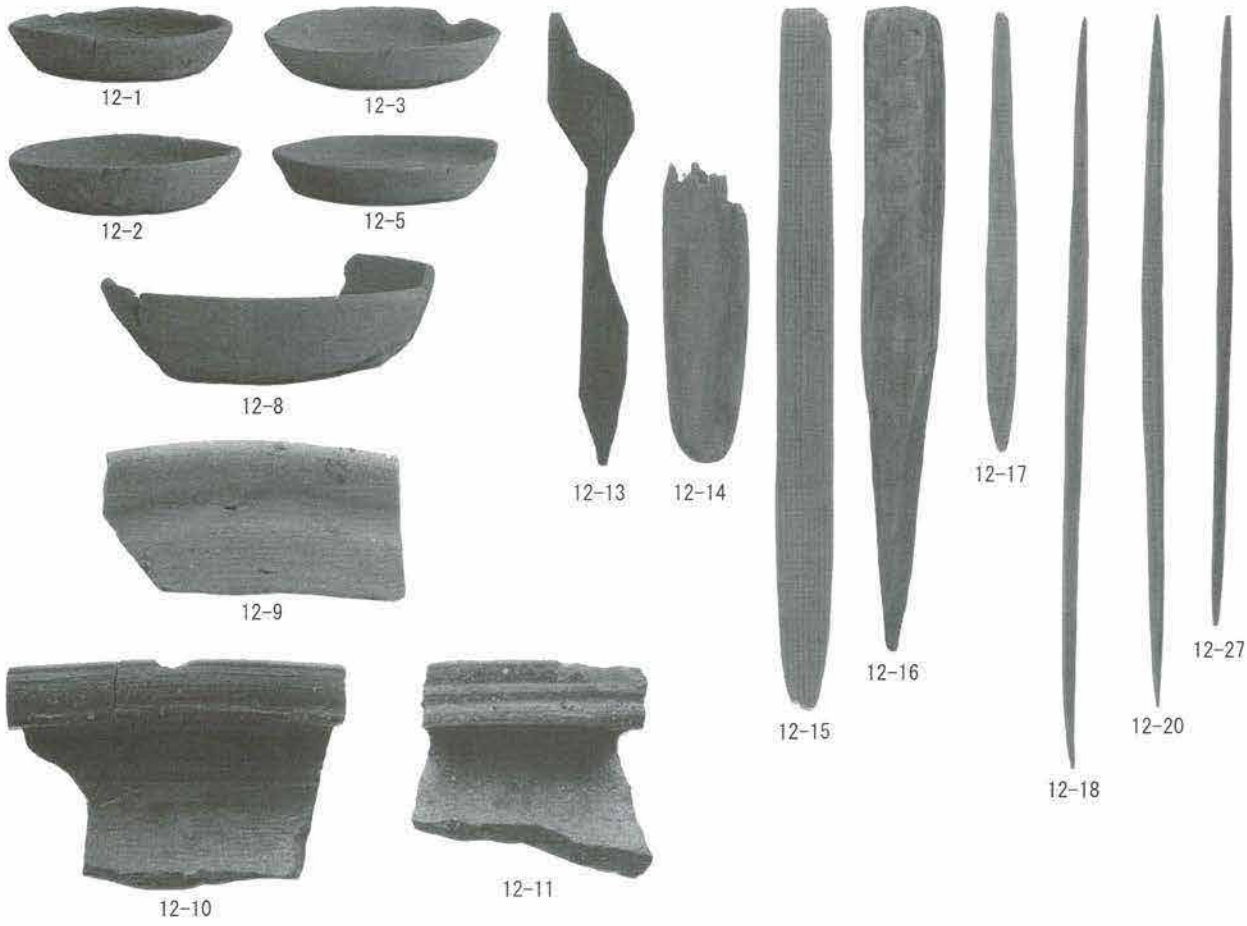
7-53

1目盛
1cm



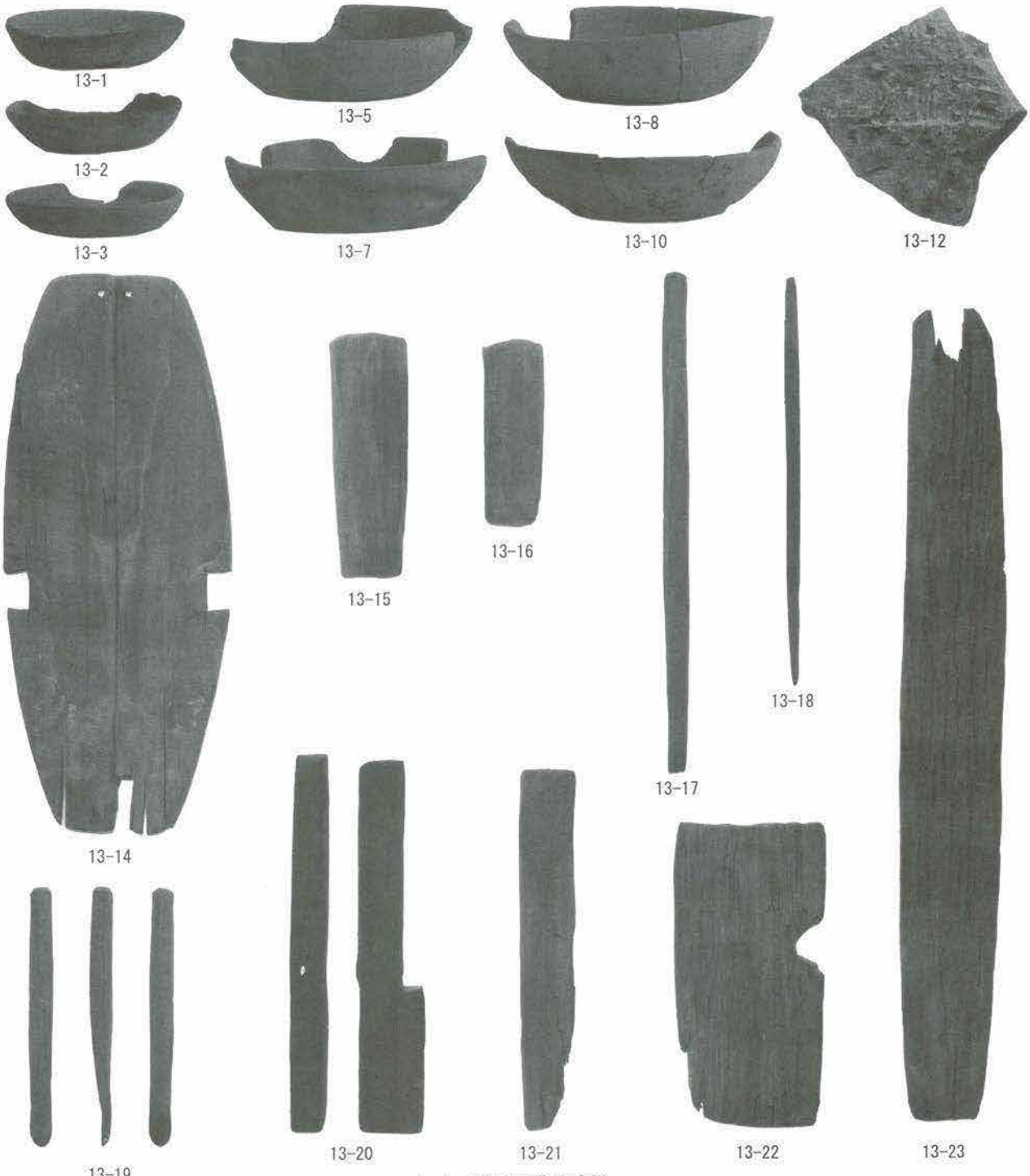
▲ 1. 第 1 面下 b 層

▲ 2. 第 2 面建物 1 柱穴

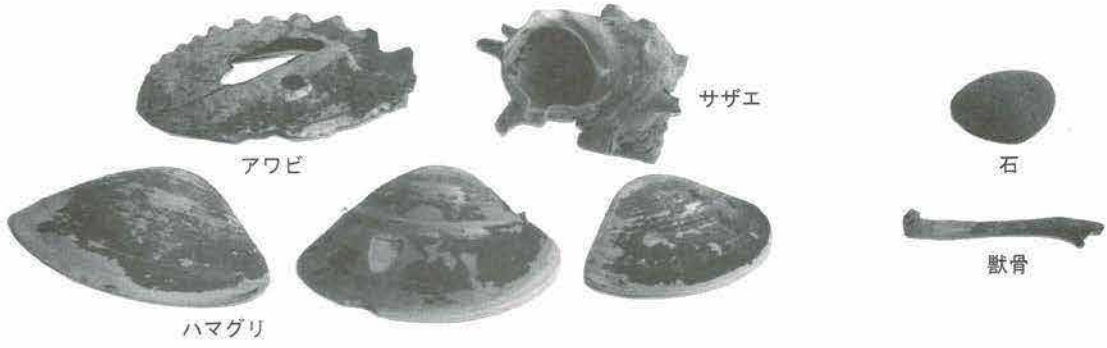


▲ 3. 第 2 面木組土留裏込

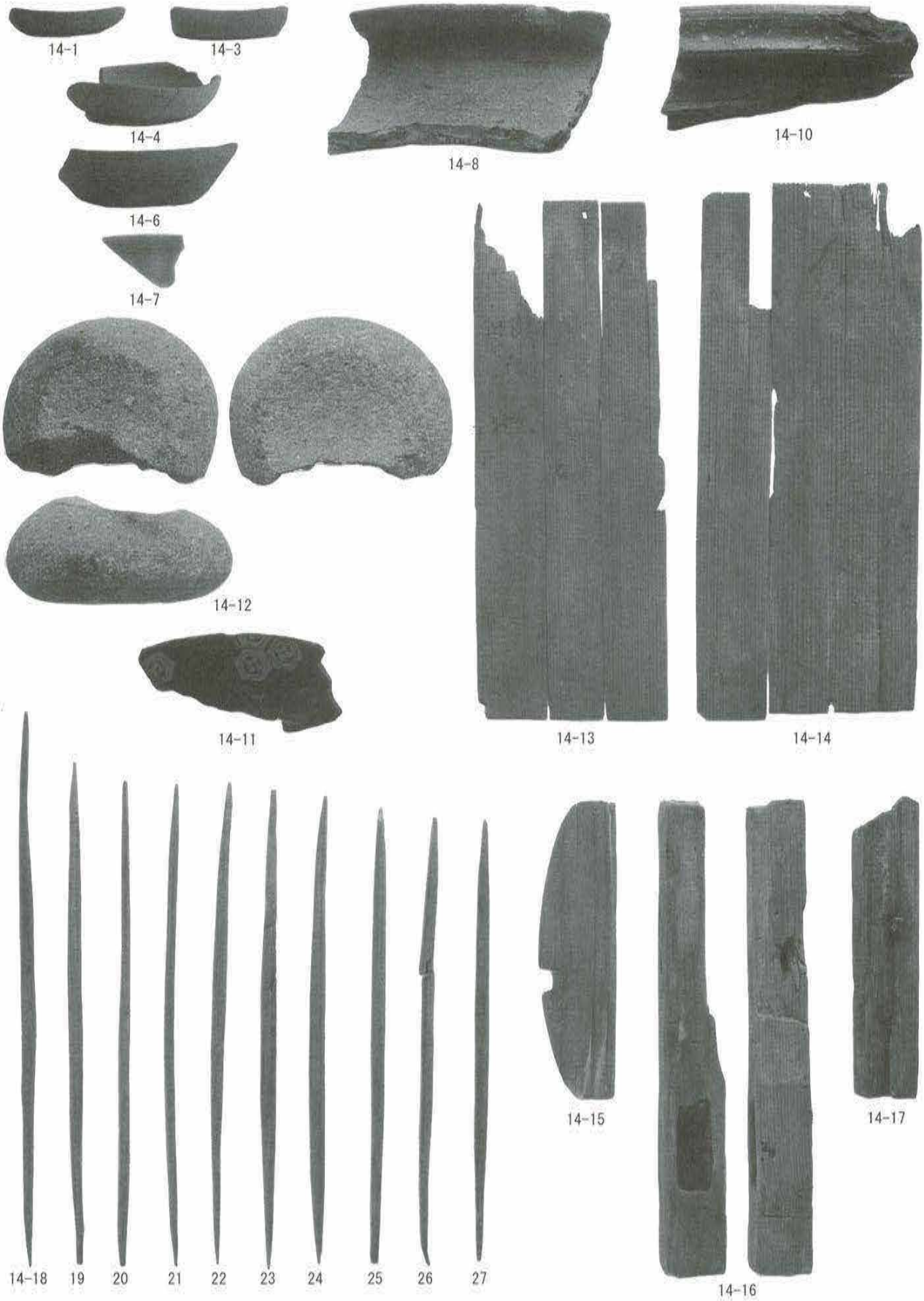
図版８



▲ 1. 第２面溝状遺構



▲ 2. 第２面遺構外


14-1
14-3
14-4
14-6
14-7
14-8
14-10
14-11
14-12
14-13
14-14
14-15
14-16
14-17
14-18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

▲ 1. 第２面遺構外

覚園寺旧境内遺跡（No.435）

二階堂字会下351番3外

例　　言

1. 本報告は鎌倉市二階堂字会下 351 番 3 外地点に所在する個人専用住宅建設に伴い実施された、覚園寺旧境内遺跡（県遺跡台帳№ 435）の緊急調査報告である。
2. 発掘調査は、平成 16 年 10 月 27 日から同年 12 月 10 日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査・整理作業体制は以下の通りである。
   調査担当者：伊丹まどか
   調　査　員：石元道子・宇都洋平・須佐仁和・須佐直子・鈴木絵美・本城裕・吉田桂子
   調査補助員：白石哲也（明治大学）・早川智・井上朔太郎・北泉剛史（鶴見大学）
   調査作業員：片山直文・河原龍雄・清水政利・田口康雄・渡辺輝彦（(社)鎌倉市シルバー人材センター）
   協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 遺物実測・観察は宇都。遺物・遺構トレースは吉田が作成した。図版作成は伊丹・須佐（直）。
   執筆・編集は伊丹が行った。
5. 遺構写真は鈴木が、遺物は須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 凡例は以下の通りである。
   図版縮尺　　全測図：1/60　　遺構図：1/60　　遺物図：1/3
   遺構実測図において焼痕の残る箇所。および、遺物実測図において油煤が付着した箇所は黒く塗りつぶして表わしている。
   法量表…復元実測を行った場合は、法量の数値に（　）を付してある。径は、直径を表わす。
8. 現地調査および資料整理においては、多くの方からご指導、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表わします。（敬称略・50 音順）
   井関文明・押木弘己・菊川英政・斎木秀雄・汐見一夫・鈴木次郎・原廣志・福田誠・降矢順子
   松尾宜方・馬淵和雄

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……228
　１．遺跡の位置と歴史的環境 ……228
第２章　調査の概要 ……231
　１．調査の経緯と経過 ……231
　２．堆積土層 ……231
第３章　発見した遺構と遺物 ……233
　１．第１面の遺構と遺物 ……233
　２．第２面の遺構と遺物 ……233
　３．第３面の遺構と遺物 ……236
　４．第４面の遺構と遺物 ……241
　５．第５面～第７面 ……245
第４章　まとめ ……247
法量表 ……249

挿 図 目 次

図１　遺跡地周辺・調査地位置図……230
図２　調査区国土座標位置図……231
図３　調査区壁堆積土層図……232
図４　第２面全測図……233
図５　第２面個別遺構図……234
図６　第２面遺構・構成土出土遺物……235
図７　第３面全測図……237
図８　第３面個別遺構図……237
図９　遺構 47 出土遺物 ……237
図 10　第３面構成土出土遺物（１）……238
図 11　第３面構成土出土遺物（２）……239
図 12　第３面構成土出土遺物（３）……240
図 13　第４面全測図……241
図 14　第４面個別遺構図……242
図 15　第４面遺構出土遺物……243
図 16　第４面面上・構成土出土遺物……244
図 17　第５面～７面確認トレンチ位置図……245
図 18　第５面構成土出土遺物……245
図 19　第６面構成土出土遺物
　　第７面構成土出土遺物・表採遺物……246

図 版 目 次

図版１　第１面全景・第２面全景・第２面遺構・第３面全景・第３面遺構 ……254
図版２　第４面全景・第４面遺構・最終トレンチ・調査区北壁堆積状況 ……255
図版３　第２面遺構出土・第２面上出土・第２面構成土出土遺物 ……256
図版４　第３面構成土出土遺物 ……257
図版５　第４面遺構出土・第４面上出土・第４面構成土出土遺物 ……258
図版６　第５面構成土出土・第６面構成土出土・第７面構成土出土・表採遺物 ……259

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置と歴史的環境

調査地は、JR鎌倉駅から北西に1.7㎞の地点。薬師堂ヶ谷（覚園寺ヶ谷）と呼ばれる谷戸内に位置する。この薬師堂ヶ谷の入り口には明治二年に建立された鎌倉宮（大塔宮）があるが、元は東光寺（山号医王山。臨済宗。開山・創建・廃絶年次などは不明）があった地とされる。鎌倉宮から谷戸を約400m奥に入った地点が調査地である。さらに約300m行った谷戸最奥には、谷戸名の由来になる鷲峯山真言院覚園寺（開山・智海心慧。開基・北条貞時。元は四宗兼学だったが明治初年に一寺一宗と定められ、古義真言宗とした。京都泉涌寺末）がある。

覚園寺の前身は北条義時が建保六年（1218）七月に建立し、同年十二月に薬師如来を安置供養した大倉薬師堂（新御堂）であった。寛元元年（1243）二月二日に火災に遭い、弘長三年（1263）三月十日、北条時宗が当堂を修造している。この薬師堂は、泉涌寺系の法系である北京律系の人々が関与し、貞応三年（1224）泉涌寺開山俊芿が関東に下向してからは、北京律系の関東弘通の拠点になっていたことが推定されている。大倉薬師堂を寺に改めて覚園寺としたのは、永仁四年（1296）北条貞時である。当寺開創の目的は覚園寺僧申状案（県史三）によると、「為降伏異国、鎮護朝廷」とあり、元寇撃退と朝廷鎮護の祈願にあった。また、覚園寺裏山の山号にもなる鷲峯山の南斜面一帯には「覚園寺百八やぐら」と呼ばれるやぐら群があるが、そのうちの１穴である「彫出地蔵やぐら」と呼ぶやぐらは、奥壁中央に半肉彫の地蔵菩薩坐像を掘り出して本尊とし、三方に低壇をもち、その上に五輪等や宝篋印塔が置かれ、そのうちの２基の銘文から文和（1252～56）・応永（1394～1428）の両度の覚園寺大修造に活躍した仏師正祐・朝祐父子の墓窟であったことが明らかになっている。

覚園寺は、大倉薬師堂創建以来北条氏の庇護の下に寺勢を誇ってきた寺であるが、北条氏が滅亡した元弘三年（1333）以降は後醍醐天皇の勅願所が置かれ、その後足利尊氏の祈願所となり、建武四年（1337）・文和三年（1353）の火災の際も足利尊氏の助力により復興を遂げている。また、小田原城主北条氏も歴代にわたり相応の保護を加え、豊臣秀吉、徳川家康ともに寺領を寄進した。歴代の権力者の庇護の下に置かれた寺であったが、元禄十六年（1703）の大地震、文政十三年（1830）の庫院消失などを経て寺運は次第に衰退していき、幕末には無住の時期を経て現在に至っている。

現在国指定遺跡となっている境内地には、元禄十六年の大震災後に古材を使用して再建した薬師堂を始め、地蔵堂・愛染堂・祖師堂・庫裏などが立ち並び、鎌倉十井の一つである「棟立ノ井」がある。

遺跡地を含む薬師堂ヶ谷は奥に向かって約700mの距離があるが、谷戸幅は現在でも谷戸内を走る河川・道路を挟んで20～80ｍと、狭く細長い谷戸である。『吾妻鏡』の記事に、「薬師堂ヶ谷辺に浄密なる僧の住む坊の前庭に優曇華が咲いたので鎌倉中の人々が見物に出かけ、将軍実朝も家来に見に行かせたところ芭蕉の花であったらしい」（貞応二年（1223）七月九日条）。「当谷の丹波良基宅に将軍頼経室の二棟の奥方（大宮殿）が産気のため大倉から移った」（延応元年（1239）十一月二十日条）。「当谷が焼亡し二階堂大路の南辺まで延焼」（建長三年（1251）十月七日条）。「将軍宗尊親王が大慈寺供養に出席するための方違の場所として、佐々木泰綱の薬師堂ヶ谷山荘が定められ、九月三十日に山荘に移った」（正嘉元年（1257）八月十八日条）。「北条教時亭が当谷にあった」（文永三年（1266）七月四日条）。などが記されている。

現在までに覚園寺境内内の調査としては、昭和四十一年に行われた宝篋印塔解体修理。昭和五十四

年、県指定重要文化財旧内海家住宅の移築予定地の試掘調査。その結果を受けての昭和五十四年から昭和五十五年にかけて防災設置箇所に関して、20数箇所にわたるトレンチ発掘調査があるが、覚園寺旧境内遺跡地内の調査としては、谷戸内のやぐらを含め多くはない。(図1参照)

参考文献

『覚園寺境内発掘調査報告書』 覚園寺境内遺跡発掘調査団　河野眞知郎　1982年3月

『会下山西やぐら発掘調査報告書』「会下山西やぐら」二階堂会下312番　田代郁夫　1987年3月

『平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』「天王寺跡やぐら」二階堂中村381番1番　田代郁夫　1995年3月

『No.331遺跡内やぐら』「平成5年度鎌倉市急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」 田代郁夫　東国歴史考古学研究所　1995年3月

『中世石窟遺構の調査Ⅱ』平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書　東国歴史考古学研究所調査報告第7集 「天王寺跡やぐら」二階堂中村地区内　田代郁夫　1996年3月

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12—2』「覚園寺旧境内遺跡」鎌倉市二階堂字平子412番地1外地点　汐見一夫　1996年3月

『中世石窟遺構の調査Ⅱ』平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書　東国歴史考古学研究所調査報告第15集 「天王寺跡やぐら」 田代郁夫　1998年3月

『中世石窟遺構の調査Ⅱ』平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書　東国歴史考古学研究所調査報告第15集　田代郁夫　1998年3月

『覚園寺総門跡東やぐら群』二階堂428番イ　(財) かながわ考古学財団　宍戸信吾　2001年11月

『覚園寺総門跡東やぐら群Ⅱ』(財) かながわ考古学財団　鈴木次郎　2002年10月

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20-2』「横小路周辺遺跡」二階堂字会下323番外　2004年3月　福田誠

『鎌倉廃寺事典』1980年　有隣堂　貫達人・川副武胤

『鎌倉市史』総説編　1959年　吉川弘文館　高柳光壽

『鎌倉市史』考古編　1967年　吉川弘文館

『鎌倉事典』 1987年　東京堂出版　白井永二

『中世の出土銭』 1994年　永井久美男

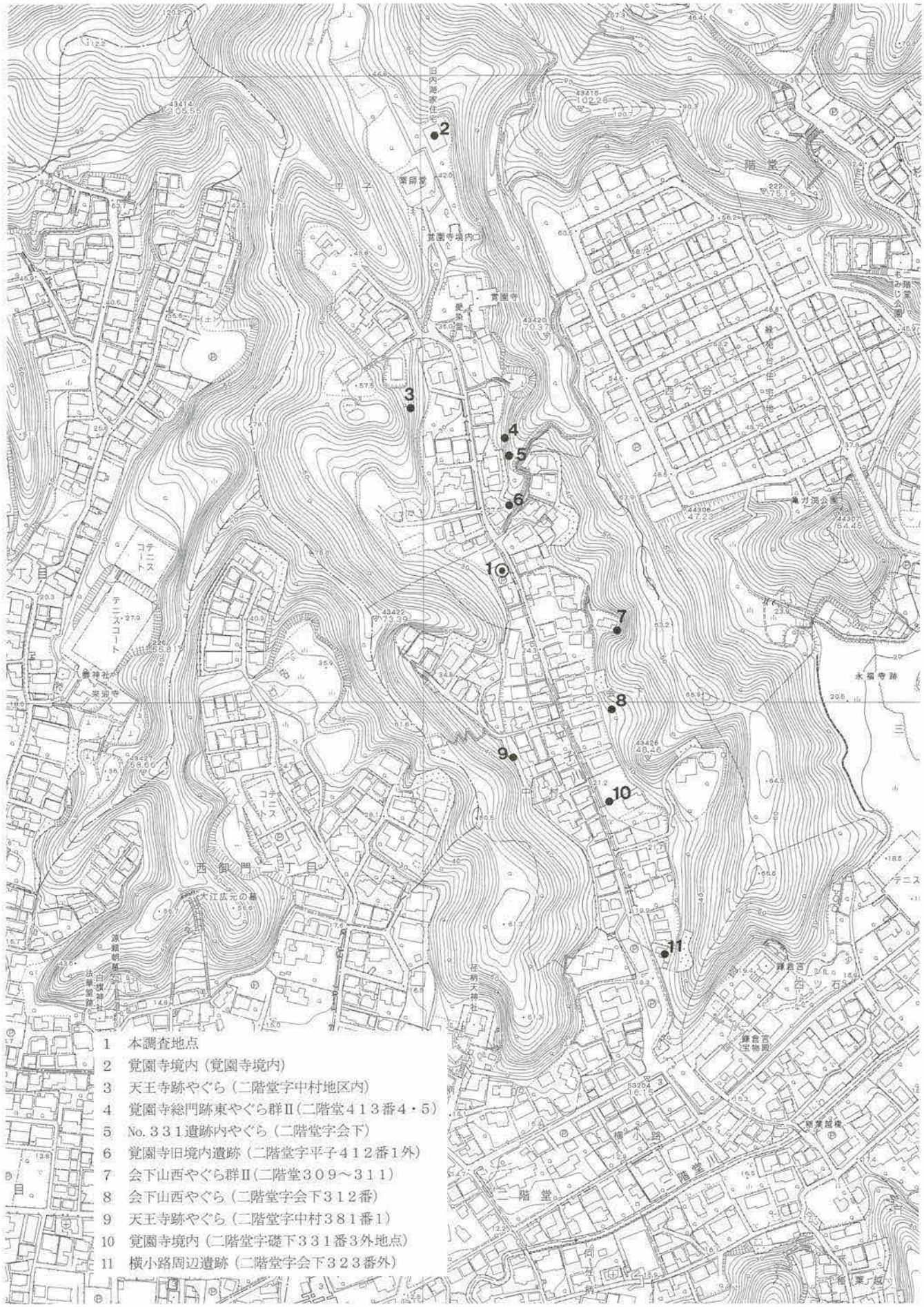


図１　調査地点と近辺の遺跡

第２章　調査の概要

１．調査の経緯と経過（図２）

本調査は個人専用住宅建設に伴い実施した。調査期間は平成 16 年 10 月 27 日から同年 12 月 10 日である。調査面積は約 50 ㎡。表土は重機により地表より約 40 ～ 60 ㎝を除去し、これ以下を人力によって掘削・廃土処理を行い、遺構の発見・遺物採集を実施。測量・写真撮影などの記録保存を行った。遺構検出に伴う廃土を調査区外に搬出できなかったことや、多量の湧水を排水する設備が整わなかった等の悪条件から調査は困難を極め、最終的には平面調査を断念しトレンチによる土層観察のみの調査になったことは遺憾である。

調査に際しては調査区の形状に沿って任意に測量用の基本杭を設定し、これを元に光波測量機によって遺構等の記録を行った。任意で設けた基準杭には、鎌倉市４級基準点を元に国土座標軸を算出して座標値を与えてある（図２）。なお、調査軸は磁北から 21°　27′　30″ 西に振れる。

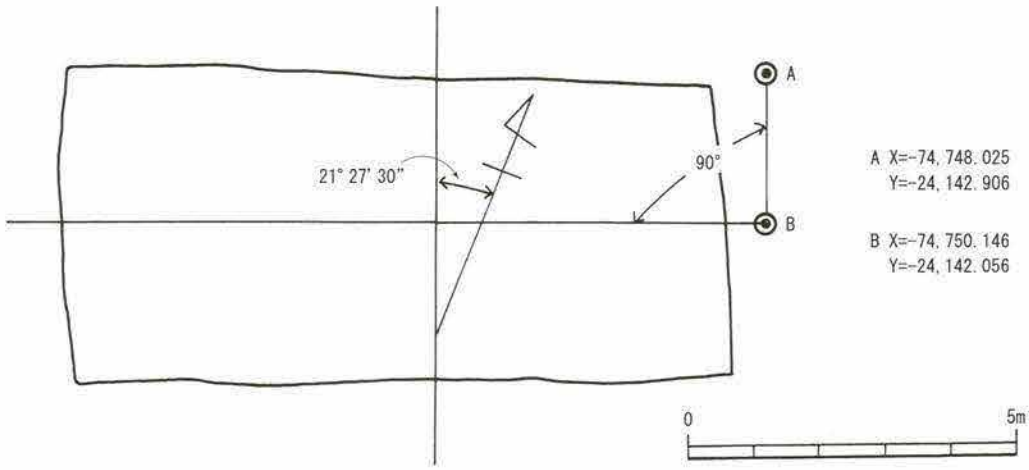


図２　調査区国土座標位置図

２．　堆積土層（図３）

調査区南・西壁で確認した土層堆積図から、堆積状況を上層より説明する。

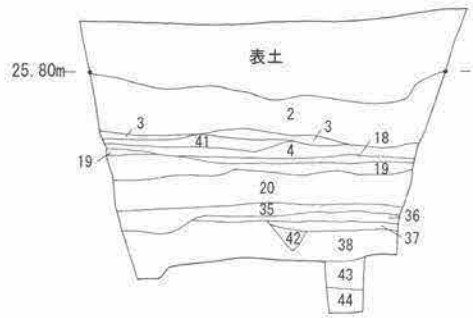
本調査地点の現地表の海抜高は約 25. 30m である。第１面までは大きく撹乱で削平されていた部分を含み、約 60 ㎝と厚く堆積していた表土を取り除き、破砕泥岩の地業上（第２層）を第１面として検出作業を行った。

第１面は破砕泥岩の地業である。（海抜 25. 80m）破砕泥岩の地業は 60 ～ 40 ㎝と厚く堆積していた。地業上に数穴のピットを確認したが、いずれも表土によって削平・撹乱を受けており、中世の生活面として捉えることができず、堆積土層図のみの記録である。

第２面は南北に走る溝・土坑・柱穴・礎板・囲炉裏を発見した。発見した遺構からは建物の存在を推測することはできたが、建物の規模等を確認することはできなかった。第２面構成土は暗褐色弱粘質土。破砕泥岩・炭化物・有機質土を含む（海抜 25. 10 ～ 25. 20m）。第２面としている地業面では、遺構の切り合い等の観察から少なくとも２時期の生活面の作り替えが行われたようである。

第３面は礎板を伴う柱穴を発見している。青灰色弱粘質土。破砕泥岩・有機質土・炭化物を含むやや脆弱な地業であった。上層に炭化物を多く含む層が薄く堆積しており、火災等でこの生活面を造り変えた様子である。（海抜 24. 80m）

〈調査区東壁土層図〉



1a 茶褐色砂質土　泥岩粒（少）・炭化物（少）
1b　泥岩層・炭化物（少）
2 茶褐色弱粘質土　泥岩粒・泥岩・炭化物・砂質土（第1面構成土）
3 暗褐色粘質土　炭化物（少）・有機質土（少）（第2面構成土）
4 暗青灰色弱粘質土　泥岩粒（多）・泥岩（多）・炭化物（少）・砂質土（少）（第2面構成土）
5 暗褐色弱粘質土　泥岩粒（多）・炭化物（多）・有機質土（多）
6 暗褐色弱粘質土　泥岩（少）・炭化物（多）・有機質土（多）柱痕？
7 暗褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物（少）・粘土
8 暗青灰色弱粘質土　泥岩・泥岩粒（多）・炭化物（少）・砂質土（少）
9 暗青灰色弱粘質土　泥岩粒（少）・有機質土（少）・砂質土（多）
10 暗青灰色弱粘質土　泥岩粒（少）・炭化物（多）
11 暗青灰色弱粘質土　炭化物（多）・砂質土（少）・褐色粘質土（多）
12 暗青灰色弱粘質土　泥岩・泥岩粒（少）・炭化物（多）・砂質土を含む
13 暗青灰色弱粘質土　泥岩粒（少）・泥岩・砂質土（少）・炭化物（少）
14 暗青灰色弱粘質土　泥岩・炭化物
15 青灰色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・炭化物（少）・有機質土（少）（第3面構成土）
16 暗青灰色弱粘質土　泥岩粒（多）・泥岩（多）・炭化物（少）・有機質土（少）・砂質土（少）（第3面構成土）
17 暗青灰色弱粘質土　泥岩粒（多）・泥岩（多）・炭化物（少）（第3面構成土）
18 暗褐色弱粘質土　泥岩粒（少）・有機質土（多）・炭化物（多）
19 暗青灰色弱粘質土　泥岩（多）・泥岩粒（多）
20 青灰色弱粘質土　泥岩・有機質土（少）・炭化物（少）
21 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・砂質土（多）（第4面構成土）
22　5cmから40cm大の泥岩層・暗褐色弱粘質土も混じる
23　炭化物層・有機質土（多）泥岩粒（少）
24 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）・泥岩粒（少）
25 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）・泥岩粒（多）
26　10cmから25cm大の泥岩層。青灰色弱粘質土
27 暗褐色弱粘質土　泥岩・泥岩粒（多）・炭化物（多）・有機質土（多）
28　10cmから30cmの泥岩層
29 暗青灰色弱粘質土　破砕泥岩による地業層。泥岩・泥岩粒
30 暗褐色弱粘質土　泥岩粒（少）
31 暗褐色弱粘質土　泥岩粒・泥岩
32 暗褐色弱粘質土　泥岩粒（少）・有機質土（少）・炭化物（少）・砂質土（少）
33 暗褐色弱粘質土　泥岩粒（少）・炭化物（少）・有機質土（少）
34 暗褐色弱粘質土　炭化物（少）（第4面構成土）
35 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）
36　泥岩層・泥岩粒（多）・泥岩（多）
37 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）
38 暗青灰色弱粘質土　泥岩・泥岩粒・有機質土（少）・炭化物（少）（4面構成土）
39 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）
40 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）
41 暗褐色弱粘質土　泥岩粒（多）・炭化物（少）・粘土
42 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）
43　泥岩と炭化物による互層・暗青灰色弱粘質土
44 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土（多）
45 暗褐色弱粘質土　炭化物（多）・有機質土・泥岩粒

〈調査区南壁土層図〉

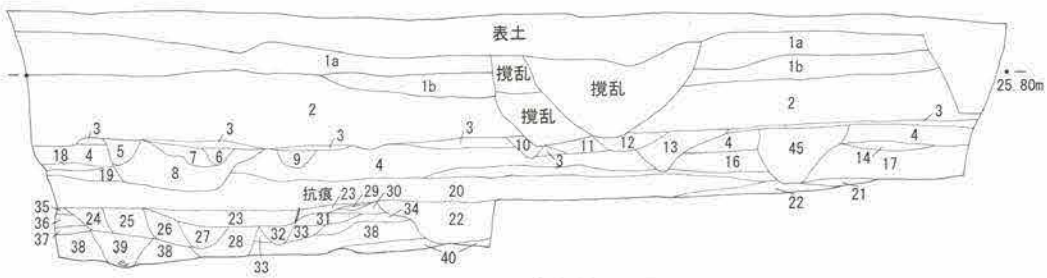


図３　調査区壁堆積土層図

第４面は頻繁に生活面の作り替えが行われた様子が伺え、建物址・溝・柱穴・土坑など多くの遺構を発見している。第４面構成土は炭化物・土丹粒を含む暗褐色弱粘質土。（海抜 24.40m）

第５面から第７面までの生活面は、第４面終了時に調査区東側にトレンチ坑を設け確認した。

調査区の西側では第４面下層は山裾の岩盤を削り出していた様子が観察できたが、地業等の生活面としての痕跡は確認できなかった。トレンチ坑を設けた東側は第４面下層においても生活面を確認しており、第４面の生活面を作るときに大きく山側を削り西側に地所を広げた様子が伺えた。

第５面は暗褐色弱粘質土。炭化物層との互層に地業し生活面を造成していた。（海抜 23.90m）第６面は暗褐色弱粘質土。上層に薄く炭化物層が堆積。（海抜 23.80m）第７面は泥岩粒・炭化物・砂質土・有機質土を含む暗褐色弱粘質土。炭化物層と弱粘質土の互層で地業されている。（海抜 23.60m）第７面下層遺構では、西側山裾に当たる岩盤面の削り出しを確認している（海抜 23.50m）が、調査区西側では第４面構成土下層、海抜 24.50m で西側山裾に繋がる岩盤を確認している。

第３章　発見した遺構と遺物

本報では調査によって発見した遺構・遺物を上層より順を追って報告している。遺構に付した番号は、確認作業の際に便宜的に付したものであり、遺構の新旧・性格に伴うものではない。個別に図示しなかった遺構については、文章中に計測値等の説明を加えている。それぞれの遺構の位置は全体図を参照していただきたい。遺構の計測値は（長軸×短軸×深さcm）で示した。

出土遺物の内、実測不可能であったものは、法量表の最後に出土遺構と破片数を掲載した。

１．第１面の遺構と遺物

第２面とした生活面を確認する前に、その上層海抜約 25.80 ｍで破砕泥岩による地業層を確認していたが、掘削の手違いから第１面に相当する層の殆どを重機によって取り除いてしまった。数穴のピットを発見したが第１面での遺構検出・記録はできなかった。第１面構成土中からの遺物出土は確認できなかったが、第１面に相当すると考えられるピット等の遺構覆土からは近世遺物（瓦）と共に中世遺物（かわらけ細片・箸・折敷等の木製品）が出土している。

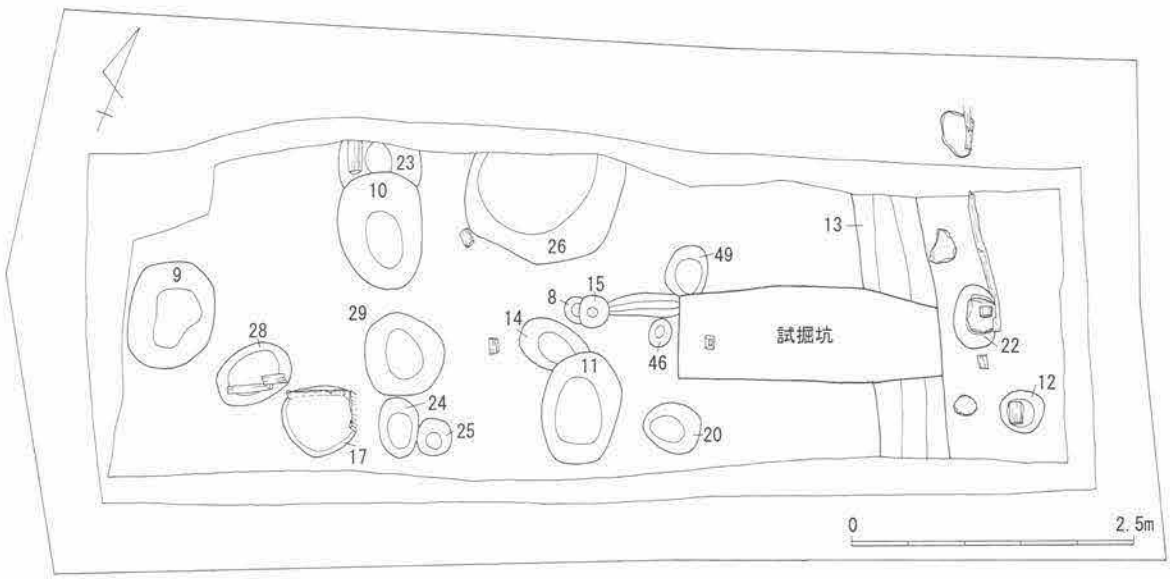


図４　第２面全測図

２．第２面の遺構と遺物（図４～図６）

第２面は約 50 cmの厚さで堆積していた第１面構成土を取り除き、破砕泥岩を含む青灰色弱粘質土上面で確認した。（海抜約 25.20 ｍ）第２面上層全体に炭化物層が広がる。第１面の地業によって削平を受け、遺構の遺存状態は良好ではなかったが、南北に延びる溝１条・土坑６基・ピット９穴・囲炉裏１基・礎板・礎石を確認した。

調査区の西側では、礎板・礎板を伴う柱穴、囲炉裏を発見し建物の存在が考えられたが、上層の地業に壊されたためか建物址の範囲・規模等は不明である。調査区東側では、礎石の据えられた柱穴上に柱を組むための枘を切った木材が南北に置かれており、遺構 22 内の礎石上には、遺存状態は悪かったが柱も残っていた。この遺構 22 から約３ｍ東の位置に現在は河川が流れており、南北に通された木材を

建物址の一部（根太？）と考えるには、調査地東側に流れる河川までの幅を考えると、やや東西幅が狭いように思われ、柵（塀）等の施設の一部であったかもしれない。この柱穴列の西側に、同じく南北に延びる溝（遺構 13）を確認している。同様に区画の施設（溝と塀）であったと考えている。

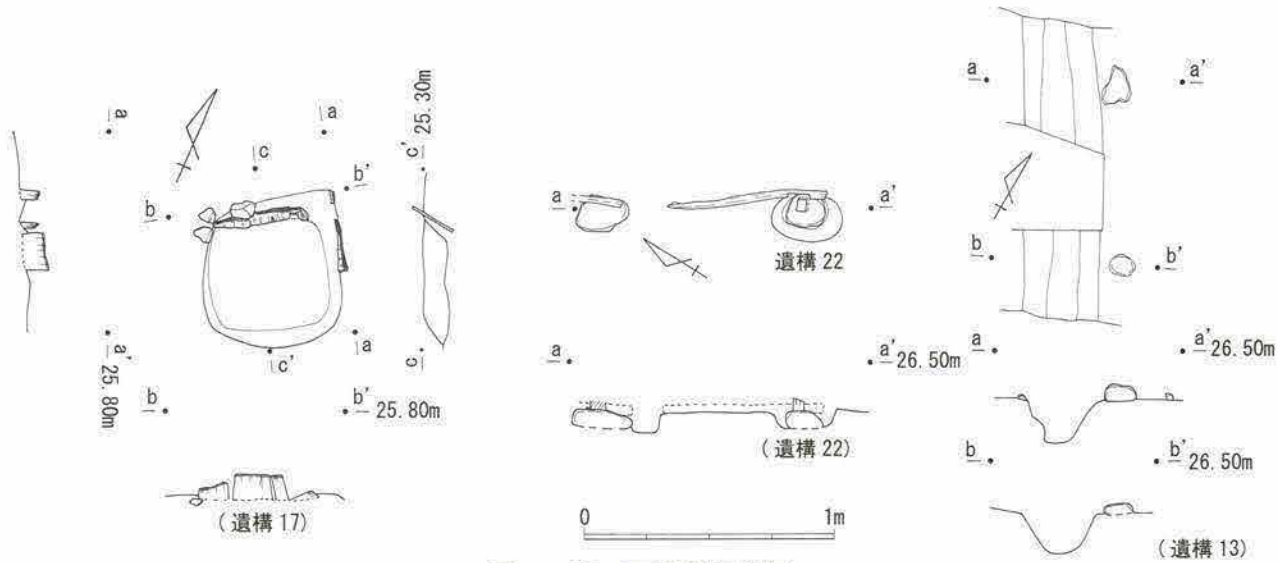


図５　第２面個別遺構図

・遺構８（図４）

幅 20 cm・深さ７cmの浅いピット。上層の遺構 15 に壊されていたが、ほぼ円形を呈する。遺構覆土は暗褐色弱粘質土・褐色砂質土・泥岩粒を含む。

・遺構８出土遺物（図６）

２は轆轤成形かわらけ。

・遺構 13（図４・５）

調査区東側で発見した南北に延びる溝である。幅約 60cm・深さ約 45cm、やや逆台形を呈する。底面のレベルはほぼ平坦であった。遺構覆土は青灰色弱粘質土・炭化物・砂質土を含む。

・遺構 13 出土遺物（図６）

１は轆轤成形かわらけ。

・遺構 17（図４・５）

囲炉裏。遺構内側の土には灰が多量に堆積していた。粘土と灰が混入した締まりある土。板囲い外側に焼痕が認められ、火災等によって消失したと思われる。板囲い外側は泥岩によって支えて（補強）いたようである。遺構内からの出土遺物は発見できなかった。

・遺構 24（図４）

54 × 35 × 35 cm。遺構覆土は青灰色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土・炭化物を含む。

・遺構 24 出土遺物（図６）

３は常滑窯甕胴部片。同一個体と思われる破片がこの他に４点出土。

・遺構 22（図４・５）

56 × 40 × 22 cm。黒褐色弱粘質土。破砕泥岩・泥岩粒を含む。底面に据えられていた礎石上には遺存状態が悪く、採集はできなかったが柱が残っていた。また、礎石には焼痕が認められた。遺構内からの出土遺物は、発見できなかった。

・遺構 26（図４）

140 × 95 以上× 22 cm。遺構覆土は灰褐色弱粘質土。

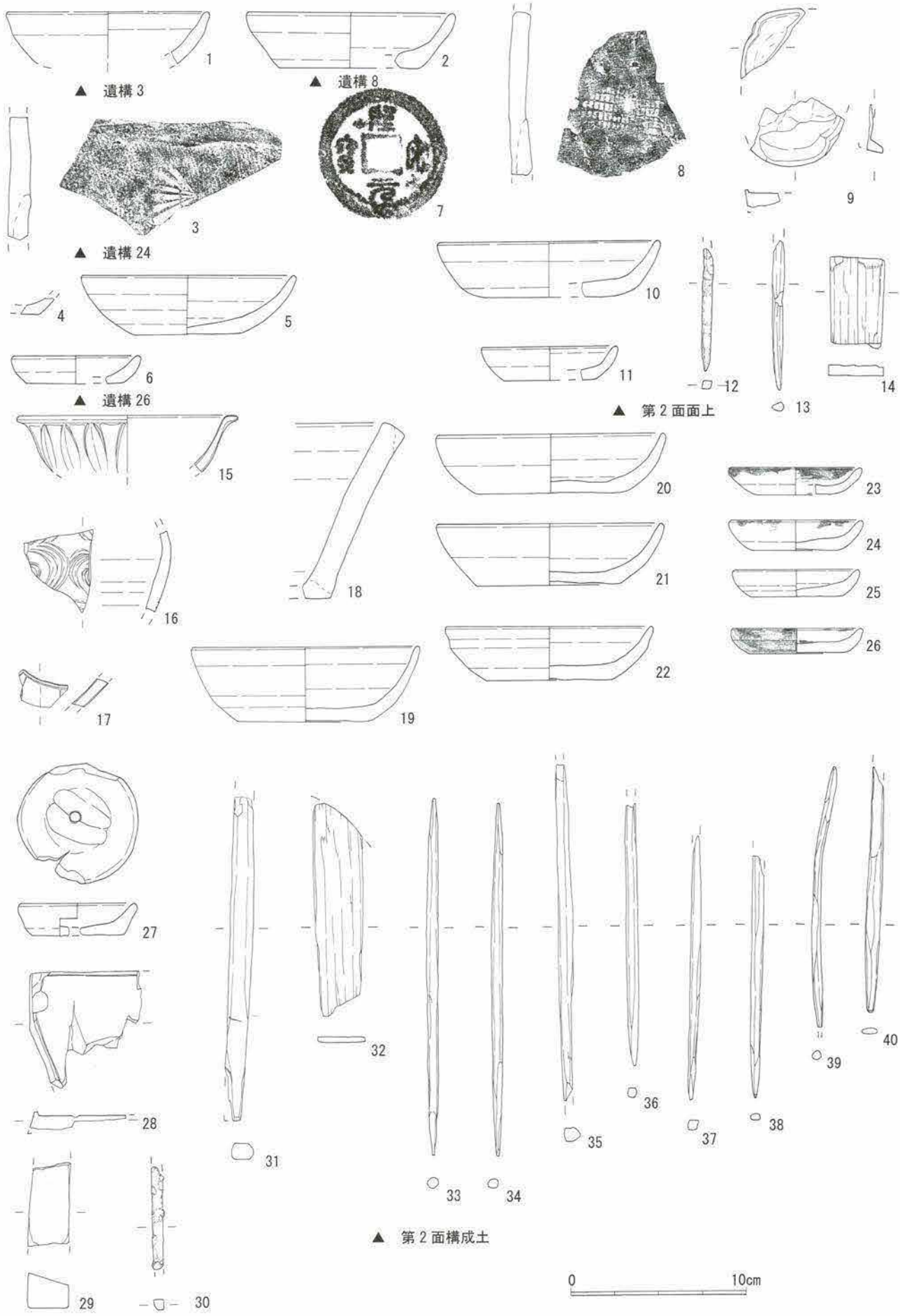


図６　第２面遺構・構成土出土遺物

・遺構 26 出土遺物（図６）

４は緑釉陶器片。底部露胎。５・６は轆轤成型かわらけ。

・第２面で確認した、個別に図示していない遺構の計測値と遺構覆土の観察である。それぞれの遺構の位置については全体図（図４）を参照していただきたい。

遺構９は 75 × 95 × 9 ㎝。黒色粘質土。多量の炭化物混入。上層の遺構か。遺構 10 は 103 × 74 × 49 ｃｍ。青灰色弱粘質土・破砕泥岩・泥岩粒、炭化物を多量に含む。遺構 11 は 98 × 70 × 25 ㎝。青灰色砂質土・泥岩粒・灰褐色砂質土を含む。遺構 12 は 40 × 39 × 20 ㎝。底面に礎板が据えてあった。黒褐色粘質土。炭化物・泥岩・破砕泥岩を多く含む。遺構 14 は青灰色砂質土。破砕泥岩・褐色粘質土を含む。約 62 × 43 × 18 ㎝。遺構 11 に切られる。遺構 16 は青灰色弱粘質土。多量の炭化物・破砕泥岩・有機質土・砂質土を含む。遺構 19 は 48 × 36 × 16 ㎝。青灰色弱粘質土。破砕泥岩・泥岩粒を含む。遺構 21 を切る。遺構 20 は 50 × 45 × 27 ㎝。青灰色弱粘質土。遺構 19 覆土に近似。遺構 21 は青灰色弱粘質土。破砕泥岩・泥岩粒を含む。上層の地業の際に壊され形状は不明。深さ 10 ㎝。遺構 23 は青灰色弱粘質土。泥岩粒・炭化物を含む。上層の遺構 10 に切られ正確な形状は不明。幅 75 ㎝・深さ 35 ㎝。遺構底面の中心からは外れるが礎板が出土している。遺構 25 は青灰色弱粘質土。泥岩粒を含む。33 × 32 × 23 ㎝。ほぼ円形を呈する。遺構 27 は灰褐色弱粘質土。破砕泥岩・泥岩粒を多量に含む。72 × 72 × 22 ㎝。遺構 28 は灰褐色弱粘質土。破砕泥岩・灰褐色弱粘質土を多く含む。底面に礎板が据えられていた。70 × 49 ×約 10 ㎝。また第２面で発見した遺構覆土全体に、微量ながらも炭化物が混入していた。

・第２面面上出土遺物（図６）

７は銭・聖宋元宝。８は常滑胴部片。９は石製品・硯。10・11 は轆轤成型のかわらけ。12 は鉄製品・釘。13・14 は木製品。13 は箸。14 は用途不明。

・第２面構成土出土遺物（図６）

15 は竜泉窯・青磁鎬蓮弁文折縁皿。16 は青白磁・梅瓶。17 は竜泉窯・青磁鎬蓮弁文碗。18 は土器質火鉢。19 ～ 27 は轆轤成型かわらけ。23・24 は口唇部・内面に油煤付着。26 は口唇部・外面油煤付着。27 は底面に穿孔あり。28・29 は石製品。28 は硯。29 は砥石・中砥。30 は鉄製品・釘。31 ～ 40 は木製品。31 は部材。32 は曲物。33 ～ 39 は箸。40 は篦状木製品。

３．第３面の遺構と遺物（図７～図 11）

第３面は有機質土・木片を含む暗褐色弱粘質土上面で確認した。（海抜 24.80 ｍ）

湧水の影響もあり地業は弱く、発見した遺構は柱穴５穴・土坑１基と数少ない。柱穴は南北方向に並んでいるように見えるが、それぞれの柱穴の芯芯の距離に統一性がなく、同一の建物を構築するための柱間とは言い切れない。第３面構成土下層には、木器層とも言えるほどに多くの木片と炭化物を含んだ茶色有機質土が堆積していた。

・遺構 30・31（図８）

遺構 30・31 は柱穴である。建物の範囲・規模等は確認できなかった。遺構 30 は 37 × 37 × 9 ㎝。暗青灰色弱粘質土。有機質土・炭化物多量・泥岩粒を含む。底面に礎板あり。遺構 31 は 34 × 34 × 12 ㎝。暗褐色青灰色弱粘質土。有機質土・炭化物多量・泥岩粒を含む。後で述べる遺構 29 と覆土近似。柱間は芯芯で 202 ㎝。遺構内からの出土遺物は無い。

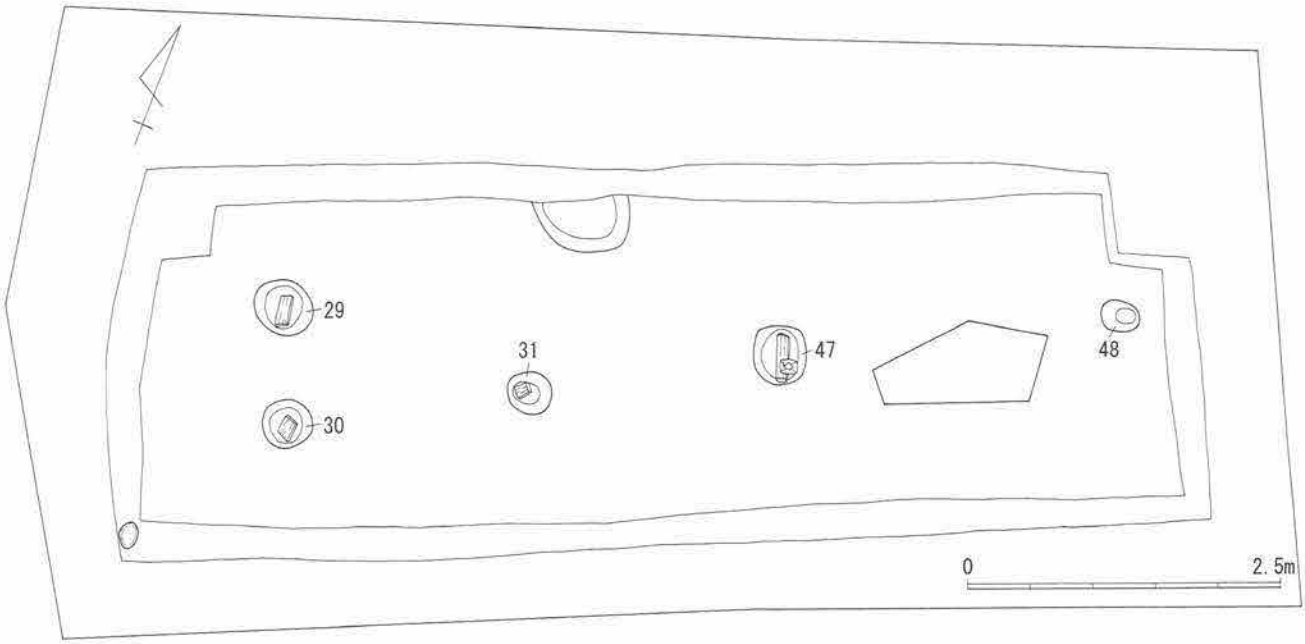


図７　第３面全測図

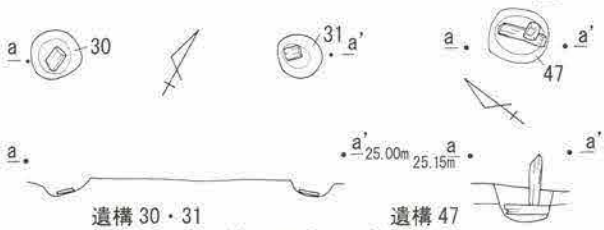


図８　第３面個別遺構図

・遺構 47（図８）

46 × 43 × 25 cm。遺構底面に据えられていた礎板の上に柱が残る。柱穴内で礎板がずれないように補強したのか、杭状の木が礎板脇に打ち込まれていた。遺構覆土は破砕泥岩を含む暗褐色弱粘質土。

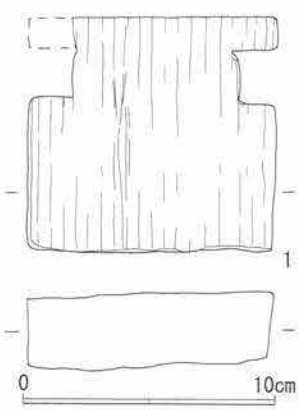


図９　遺構 47 出土遺物

・遺構 47 出土遺物遺物（図９）

1 は木製品・用途不明。大型の組み物の部材か？

・第３面で確認した、個別に図示していない遺構の計測値と遺構覆土の観察である。それぞれの遺構の位置については全体図（図７）を参照していただきたい。

遺構 26 は幅 78 cm・深さ 23 cm。調査区外に遺構が伸びてしまっているため正確な形状は不明。青灰色弱粘質土。炭化物を少量含む。遺構 29 は 49 × 42 × 14 cm。暗青灰色弱粘質土。有機質土・炭化物少量・泥岩粒を含む。底面に礎板あり。遺構 29・30・31 は覆土近似。遺構 48 は 31 × 24 × 13 cm。青灰色弱粘質土。泥岩粒を少量含む。

・第３面構成土出土遺物（図 10 ～図 12）

1 は白磁口兀皿。2 は褐釉壷。3 ・ 5 は常滑窯片口鉢Ⅰ類。4 は瀬戸窯水注。6 は滑石鍋。7 は常滑窯甕。8 は土器質火鉢。 9 は白かわらけ。10 は滑石鍋。11 ～ 39 は轆轤成型かわらけ。32・35 は内外面口唇部油煤付着。33 は内外面に油煤付着。40・41 は鉄製品・釘。42 ～ 108 は木製品。42 ～ 44・46・47・49 ～ 52・55・56 は用途不明。45・57・58 は板折敷。48 は部材。釘痕あり。53 は箸。54 は織機。59・61 ～ 65 は曲物底板。60 は曲物蓋？中央に 2 穴の穿孔あり。62 は楕円形を呈する。66 ～ 104 は箸。105 ～ 108 は串状製品。

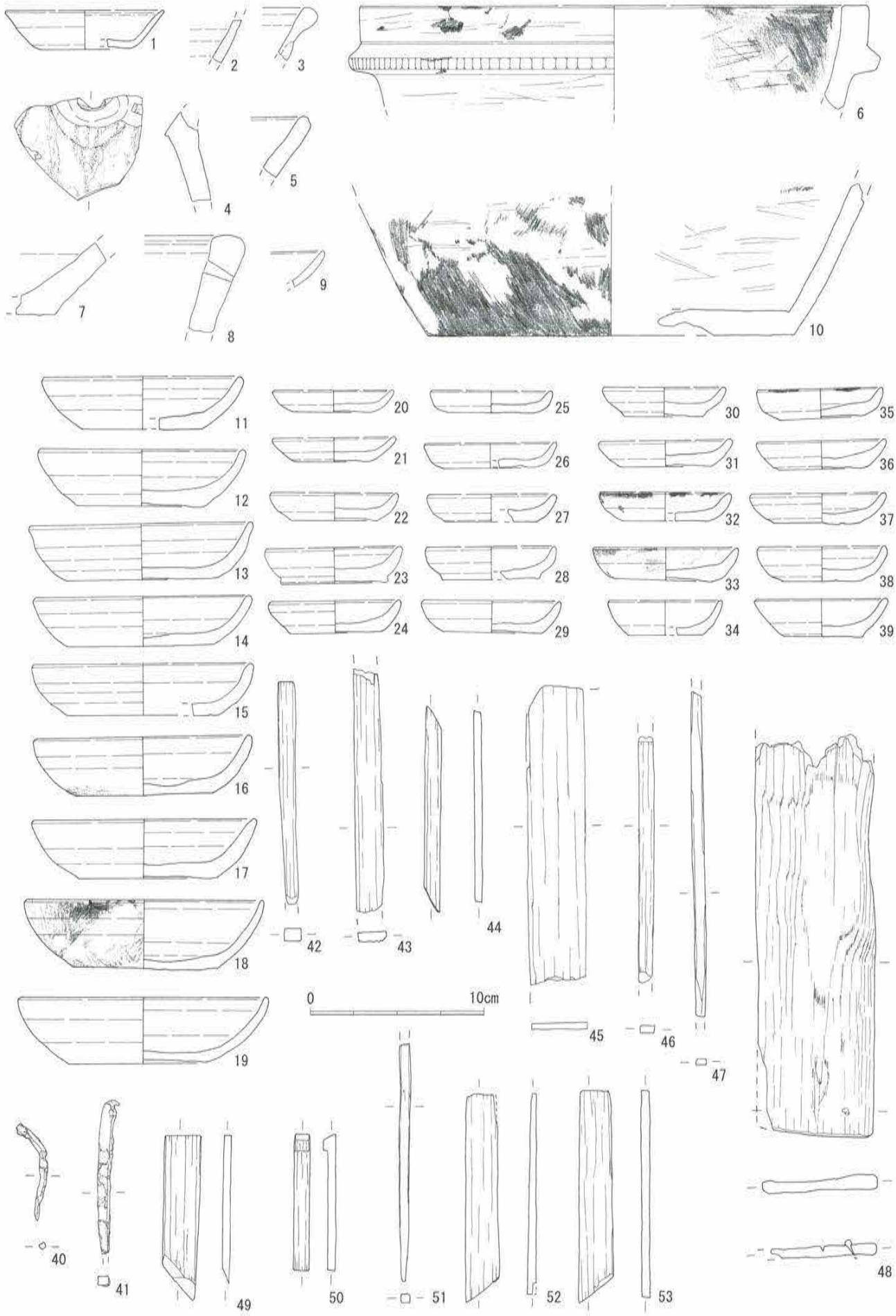


図 10　第３面構成土出土遺物（１）

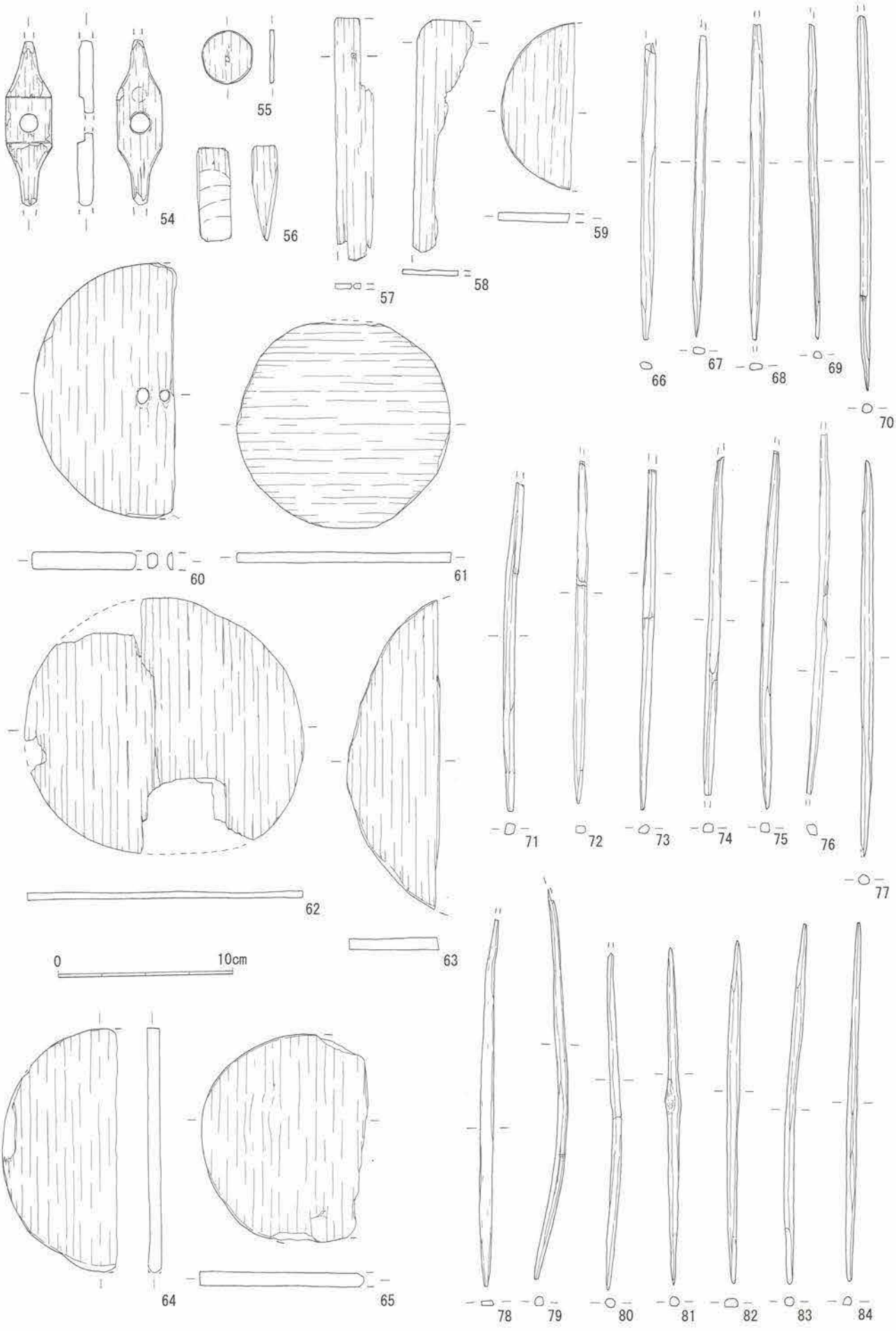


図11　第３面構成土出土遺物（２）

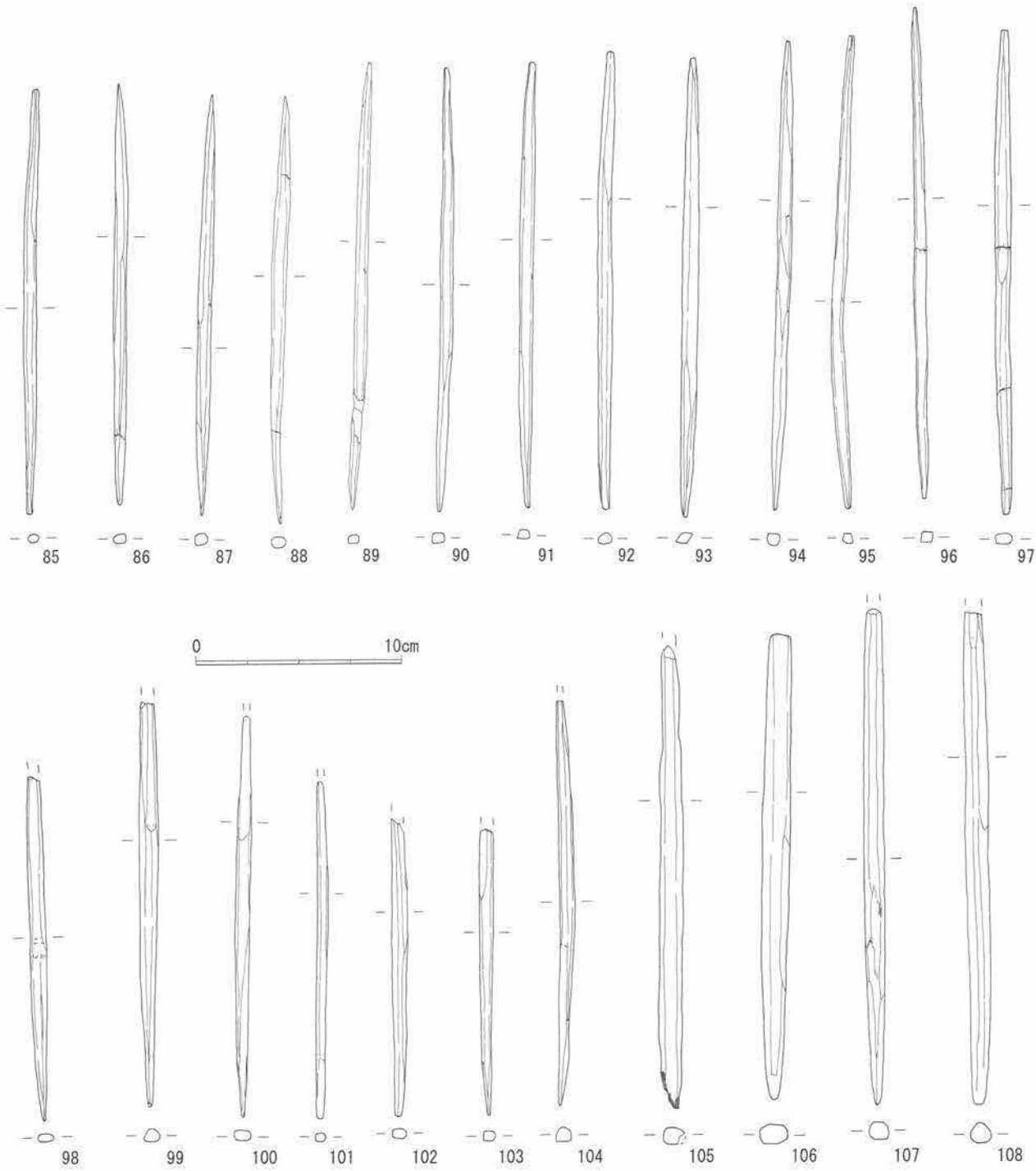


図 12　第３面構成土出土遺物（３）

4．第4面の遺構と遺物（図13～図16）

第4面は破砕泥岩と有機質土を含む茶褐色弱粘質土の粗い地業上で確認した。（海抜24.40ｍ）

発見した遺構は溝2条・土坑3基・ピット20穴・杭穴37穴。

調査区西側で不規則に並んだ杭痕を確認しており、そのうちの数穴には杭が遺存していた。上層の第3面、あるいは第4面の生活面を地業する際の土留めであったのではないかと考えている。杭は2本で一組を基本として打たれていたようである。遺存していた杭は丸杭で直径3㎝から8㎝と均一ではなく、土中の先端部分は尖らせていた。

調査区東では、南北方向の溝状の遺構を2条確認した。西側の溝（遺構60）は溝壁の護岸と考えら

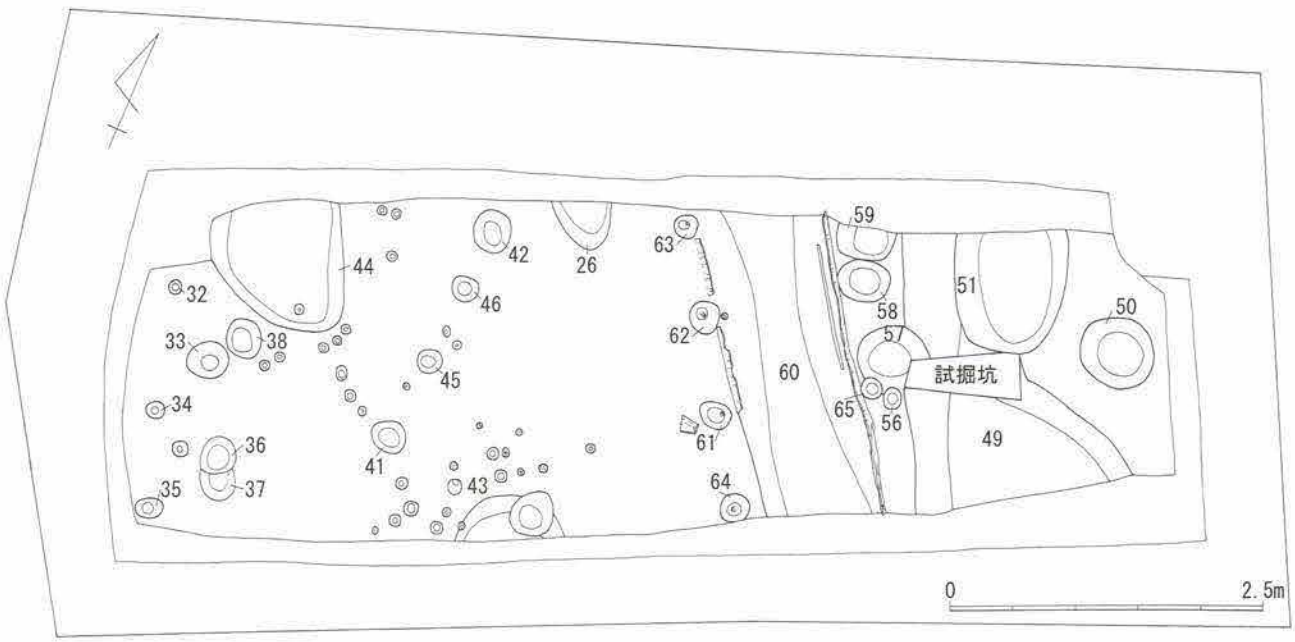


図13　第4面全測図

れる杭と縦板が遺存していた。遺構60の西には芯芯で70～80㎝の間隔で、溝に沿って柱穴が並ぶ。

東側の溝（遺構49）は、遺構の南側が大きく崩れてしまい、北側は上層の土坑によって切られ当初の形状を残していないが、遺構49を廃棄した後に遺構60を造り替えたことが、土層断面の観察から窺えた。また、遺構60を境に東側では粗い破砕泥岩でしっかりとした地業が成されていた。通路（道路）の可能性を考えている。

・遺構42（図13）

33×30×7㎝。遺構覆土は暗灰褐色弱粘質土。褐色砂質土・少量の炭化物を含む。

・遺構42出土遺物（図15）

1・4は常滑窯・片口鉢Ⅰ類。

・遺構49（図13）

南北に延びる溝である。上層の遺構によって壊されてしまい正確な形状を留めていないが、調査区壁の土層観察では逆台形を呈していた事が分かる。底面レベルはほぼ平坦であった。第2面で発見した構13と同位置にあり、遺構13同様に区画のための溝であったのかもしれない。

・遺構49出土遺物（図15）

2は白磁口兀皿。3～5は常滑窯。3は壷口縁部片。4は片口鉢Ⅰ類。5は甕口縁部片。6は滑石製

鍋。7～17は轆轤成型かわらけ。18・19は木製品・箸。

・遺構50（図13）

60×60×15㎝。遺構覆土は暗褐色弱粘質土。炭化物・有機質土を多く含む。

・遺構50出土遺物（図15）

20～23は轆轤成型かわらけ。

・遺構51（図13）

調査区外に遺構が延びてしまっているため正確な形状は不明。幅90㎝。深さ22㎝。遺構49（溝）を切る。黒褐色弱粘質土。炭化物・有機質土を多く含む。

・遺構51出土遺物（図15）

24は常滑窯片口鉢Ⅰ類。内外面に薄く油煤痕。25～27は轆轤成型かわらけ。

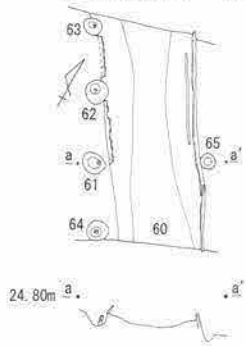


図14　第4面個別遺構図

・遺構60（図14）

調査区内を西から東に下がる斜面に平行して南北方向に板が並んでいる事。建物（板壁囲い）にしては左右の板にレベル差が有ることなどから土留めも想定していたが、土留めにしては伴う杭が無いこと。板が薄すぎることなどの疑問点があり、建物の板壁（2軒ぶんか？）。あるいは東西の縦板が90㎝の幅で延びているところから、縦板で両脇を囲って地業した道路（通路）の可能性もあると考えている。調査区外に延びてしまっているため、正確な形状は不明。南北方向に250㎝。東西方向に90～100㎝の幅を観察した。調査区南壁に残る遺構断面の観察では深さ30㎝であったが、全体に20～30㎝のだらだらとした浅い掘り込みを確認している。

遺構60の西側に並ぶピット61・62・63・64には、ピット内に杭状の木質痕が観察できた。通路（遺構60）に伴う柵の痕跡ではないかと考えている。遺構覆土は暗茶褐色弱粘質土。大小の破砕泥岩を多量に含む。

・遺構60出土遺物（図15）

28は竜泉窯・青磁折縁皿。29は褐釉壷。30は常滑窯・片口鉢Ⅱ類。31・32は轆轤成型かわらけ皿。33は木製品・箸。

・以下は第4面で確認した、個別に図示していない遺構の計測値と遺構覆土の観察である。それぞれの遺構の位置については全体図（図13）を参照していただきたい。

遺構32は11×11×20㎝。杭痕か？暗灰褐色弱粘質土。炭化物・砂質土を含む。遺構33は35×30×20㎝。暗灰褐色弱粘質土。炭化物・砂質土・泥岩粒を含む。遺構34は13×16×11㎝。暗灰褐色弱粘質土。遺構32覆土に近似。杭痕か？遺構35は22×16×10㎝。暗褐色弱粘質土。遺構32覆土に近似。杭痕か？遺構36は29×29×10㎝。暗茶褐色弱粘質土。砂質土を多く含む。実測不可能なかわらけ小片を多く含む。覆土内に杭痕あり。遺構37は遺構36に切られ正確な形状は不明。幅28㎝。深さ15㎝を測る。暗茶褐色弱粘質土。遺構36覆土に近似。遺構38は30×30×11㎝。暗灰褐色弱粘質土。炭化物・有機質土を含む。遺構41は30×25×21㎝。暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物有機質土を含む。遺構43は調査区外に遺構が延び、上層の遺構に切られ正確な形状は不明。深さ10㎝の浅い土坑。暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構44は調査区外に遺構が延びており正確な形状は不明。幅106㎝以上。深さ8㎝の浅い土坑。灰褐色粘質土。覆土内に木質が残る。杭痕か？遺構45は20×20×6㎝。

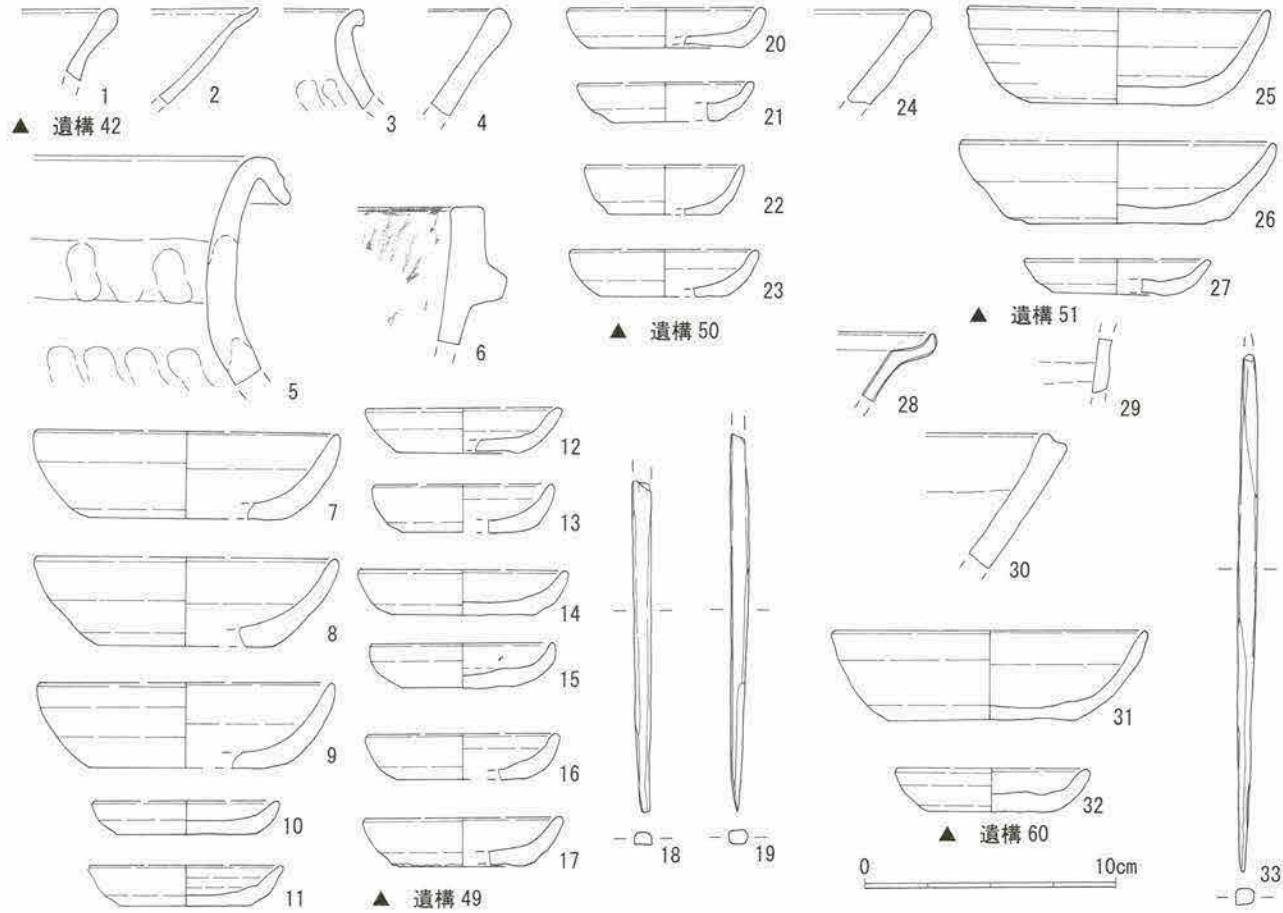


図 15　第 4 面遺構出土遺物

暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・砂質土を含む。遺構 46 は 22 × 20 × 6 cm。暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 は 16 × 15 × 10 cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 57 は 59 × 55 × 9 cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 覆土に近似。遺構 58 は 42 × 35 × 11 cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 覆土に近似。遺構 59 は調査区外に遺構が延びていて正確な形状は不明。幅 48 cm。深さ 13 cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 覆土に近似。遺構 61・62・63・64 は遺構 60 の西側に並ぶ柱穴。それぞれの遺構覆土は近似しており、暗褐色粘質土。覆土内に木質が残る。遺構 61 は 25 × 22 × 11 cm。遺構 62 は 24 × 24 × 18 cm。遺構 63 は 20 × 20 × 11 cm。遺構 64 は 24 × 22 × 10 cm。遺構 65 は 17 × 17 × 17 cm。暗褐色粘質土。遺構 60 の西に並ぶ遺構 61 ～ 54 に覆土は近似していた。杭痕か？

その他に通路と考えている遺構 60 より西には、杭痕と思われる小さなピット群と杭を発見しているが、用途および性格は不明である。

・第 4 面面上出土遺物（図 16）

1・3・4 は轆轤成型かわらけ。1 は二次焼成のためか白く変色。2 は泉州窯系緑釉陶器・盤。5 ～ 10 は木製品。5・6・10 は用途不明。7 ～ 9 は箸。

・第 4 面構成土出土遺物（図 16）

11 は青白磁水注。12 は白磁・壷。13 は褐釉・壷。14 は瀬戸窯・天目茶碗。15・16 は常滑窯。15 は片口鉢Ⅱ類。16 は甕口縁部片。17 ～ 27 は轆轤成型かわらけ。21 は内外面口唇部に油煤痕。27 は内底

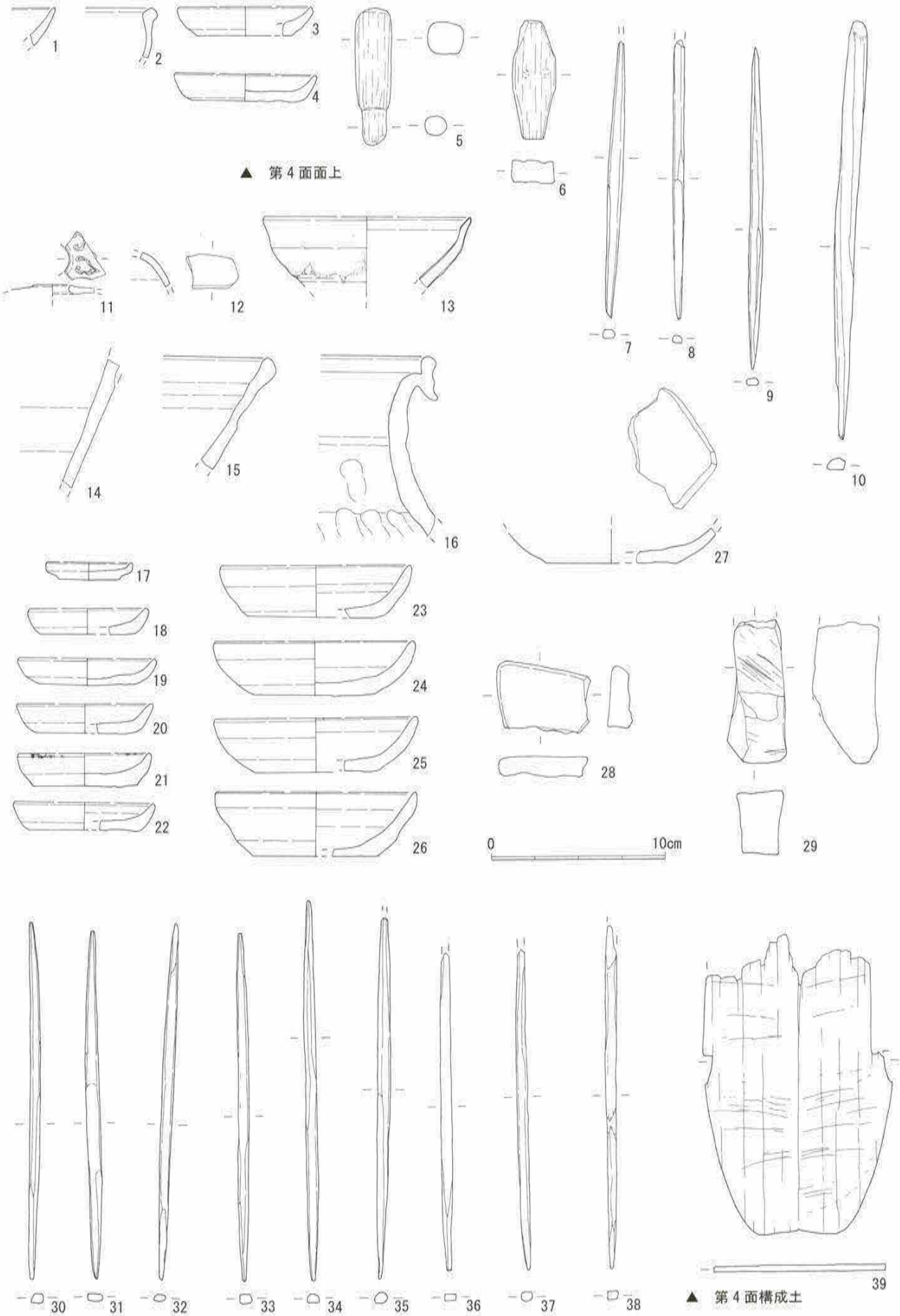


図16 第4面面上・構成土出土遺物

面に赤色の色素付着。28は常滑窯・甕。転用品。断面部分磨耗。29は石製品・砥石。30～39は木製品。30～38は箸。39は板草履。

5．第5面～第7面（図17）

第4面より下層の調査は、多量の湧水を排出する設備が整わなかった事、調査に伴う廃土を調査区内で処理することができなくなった等の条件から、平面的に調査を行うことが出来なくなったため、調査区を二分割し西側に廃土置き場を設置。東側にトレンチ坑を設け、下層の生活面・遺構等の確認作業を行った。第5面から第7面までは、トレンチ坑の壁で堆積層を確認し平面調査は実施していない。

・第5面（図17）

第5面は粗い砂質泥岩による地業。上層に有機質土・炭化物を含む層と破砕泥岩を含む暗褐色弱粘質土が互層に堆積している。（海抜23.90ｍ）

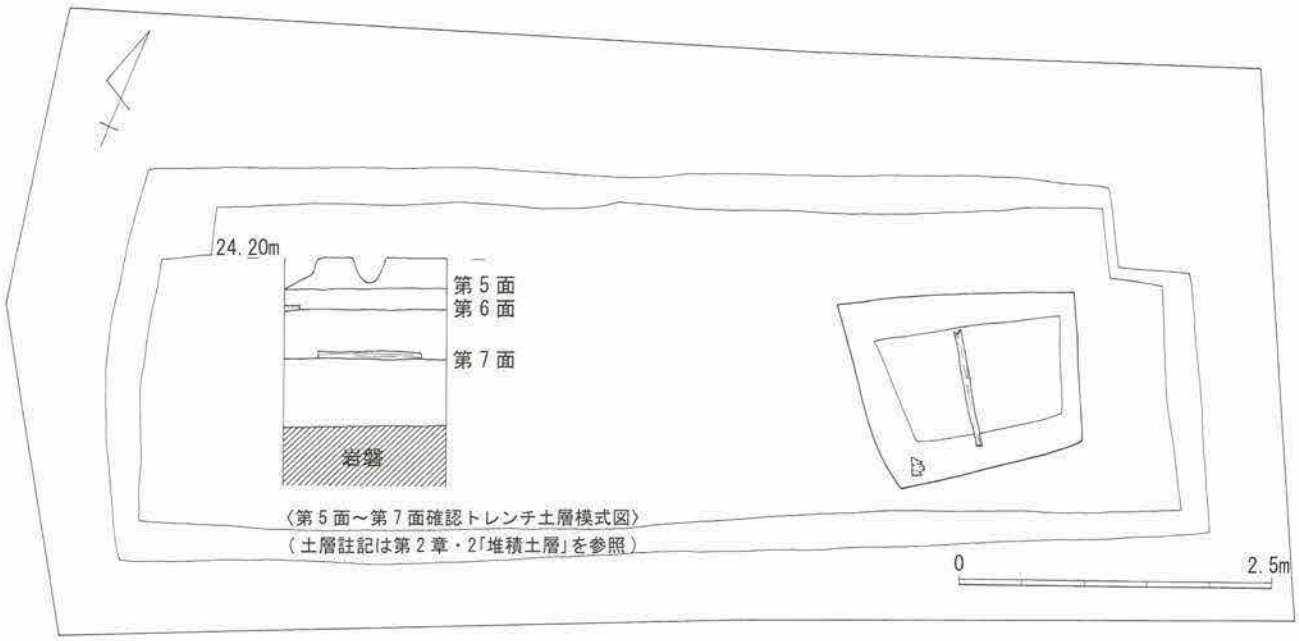


図17　第5面～7面確認トレンチ位置図

・第5面構成土出土遺物（図18）

1は竜泉窯・青磁鎬蓮弁文碗。2・3・5・6は常滑窯片口鉢Ⅰ類。5・6は内面油煤痕。4は常滑窯・甕。7～9は木製品。7は用途不明品。8は板折敷。9は板草履。

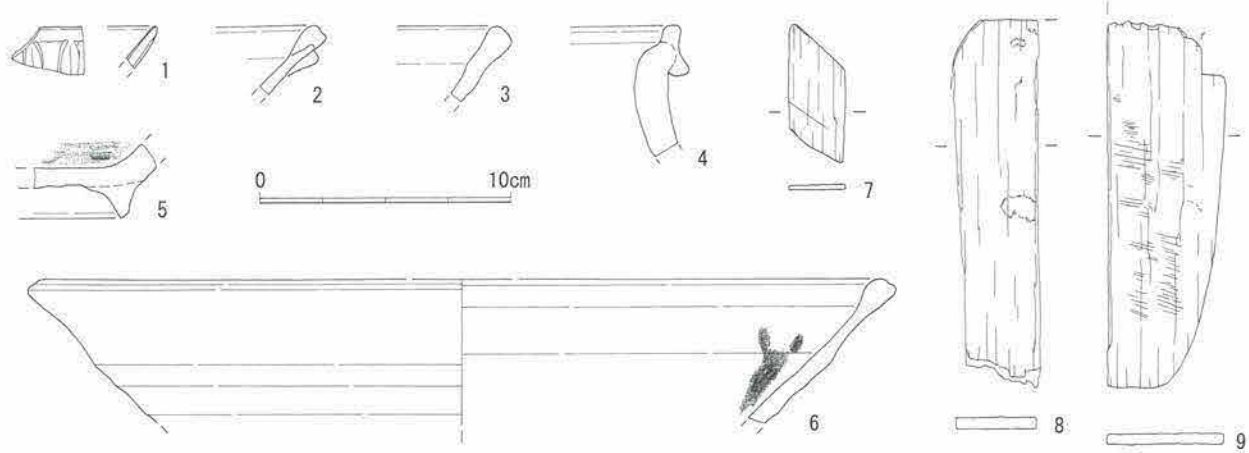


図18　第5面構成土出土遺物

・第６面（図 17）

暗褐色弱粘質土の地業上層に炭層が厚く堆積していた。トレンチ坑壁で焼痕のある板材を確認した。（海抜 23.80 m）

・第６面構成土出土遺物（図 19）

１～４は轆轤成型かわらけ。２は内外面口唇部油煤痕。５～８は木製品。５は玩具。６・８は用途不明品。７は箸。

第７面（図 17）

泥岩粒・炭化物などを含む暗褐色弱粘質土と炭化物層との互層で地業されていた。南北に延びる側板出土。（海抜 23.60 m）第７面の地業下層、海抜 23.50m で岩盤を確認している。

・第７面構成土出土遺物（図 19）

９は白磁口兀碗。10 は白磁口兀皿。11 は瀬戸窯・皿。12 ～ 16 は轆轤成型かわらけ。17 ～ 23 は木製品。17 は板草履。18 は用途不明。19 ～ 21 は箸。22・23 は串状製品。

・表採出土遺物（図 19）

24 は常滑窯・片口鉢Ⅰ類。25 は瀬戸窯・盤。26・27 は轆轤成型かわらけ。

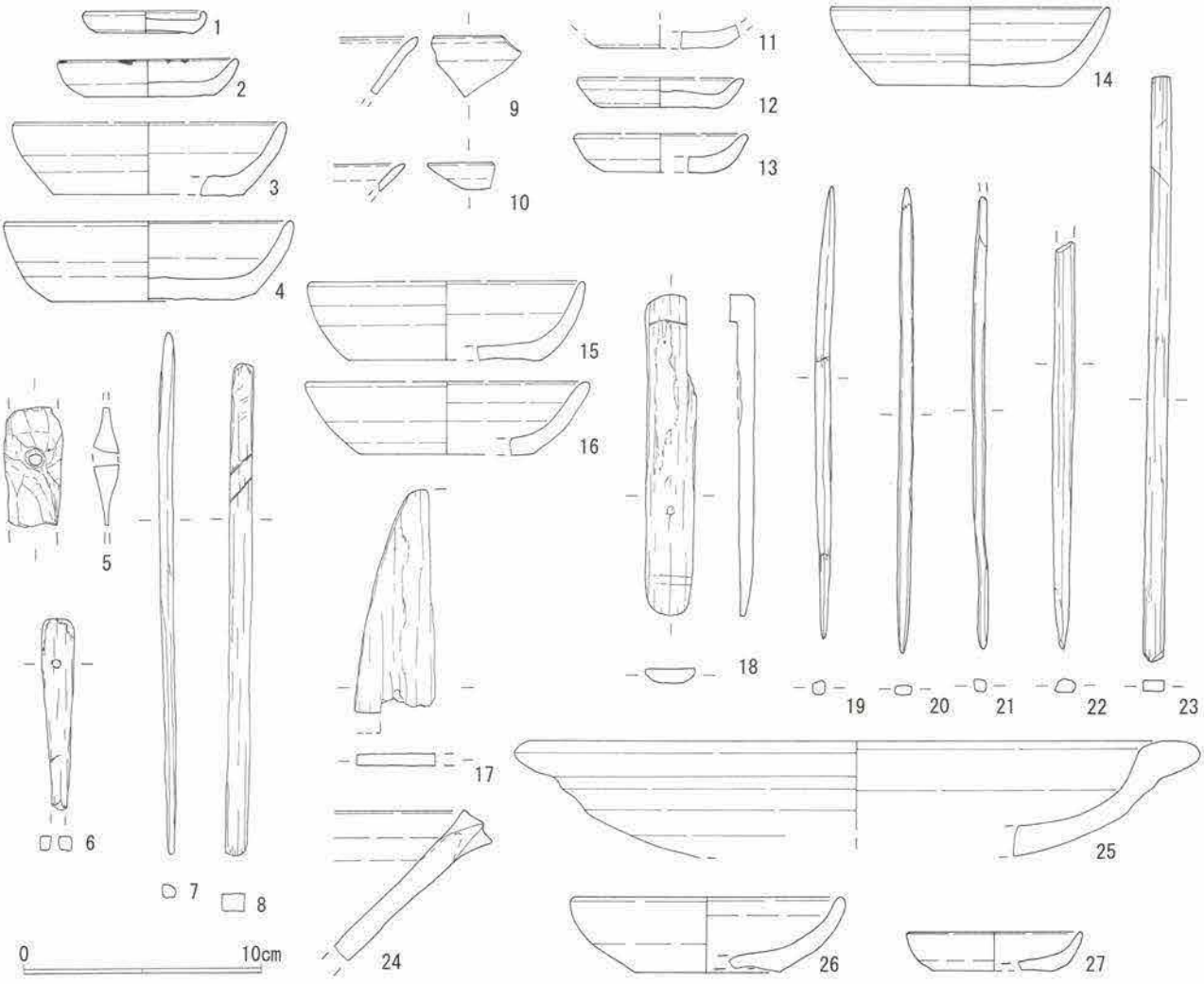


図 19　第６面構成土出土遺物

第４章　まとめ

調査地点は、薬師堂ヶ谷（覚園寺ヶ谷）の最奥に所在する覚園寺に向かう参道の西側に位置する。参道沿いには閑静な住宅地が並ぶが、ここ数年住宅建設に伴うやぐらを含む谷戸内の開発が進み、多くの調査成果をあげつつある。

本調査は、湧水を排水する設備や廃土を処理する場所を確保できないなどの悪条件が重なったために、満足な調査を行うことが困難となり、下層の調査はトレンチによる地業層の確認のみとなってしまった。

以下、発見した遺構・遺物について簡単なまとめを行いたい。

検出した遺構

第１面から第７面までの生活面（地業）を確認している。それぞれの生活面で遺構の重複があり、同一地業上で造成が繰り返されていることを、遺構の切り合い・調査区壁の土層観察等で確認した。

第７面から第５面までの生活面は、比較的しっかりとした地業がなされていたが、前述した悪条件から平面的な調査が不可能となり、調査区東側に設けたトレンチ壁の堆積土層で観察・確認したため、遺構の種類・性格・範囲等を確認することはできなかった。

第７面、第６面に相当する土層からは、板壁囲い建物、あるいは溝側壁の護岸の板か？と思われる側板が南北方向に出土している。第７面で発見した側板には火災のためか焼痕が残っていた。後述する第４面以降で、ほぼ同位置に南北に走る溝を発見しており、この側板も溝の側壁の板であった可能性を考えている。

第５面の構成土は、厚く堆積した炭化物層と泥岩層の互層で形成される。

第７面から第５面の構成土は、炭化物と泥岩の互層で形成されており、どの期も火災などの事故により生活面を再構築せざる得なくなり、炭化した建造物などの廃材を含んだ土を、新しい生活面を構築する埋め立ての際に利用したのではないだろうか。

第７面から第５面に相当する堆積層を、調査区の西側では確認していない。調査区西側では、第４面を確認した面より約 40 ㎝下層は岩盤面となる。

第５面の生活面を何らかの理由で廃棄した後に、調査区西側の山裾を削り谷戸の拡張を行い、谷戸内の土地利用を大きく変えていった時期が第４面以降の生活面となる。

第４面では、南北に走る溝を発見した。溝の西側には、溝に沿って杭を伴う柱穴が並ぶ。西側は湧水のために地業自体が弱く、土留めの杭と思われる杭痕が多く発見された。溝の東側は、破砕泥岩を用いしっかりとした地業がされていた。

第３面・第２面では、礎板を伴う柱穴を数穴発見している。建物範囲・規模等は不明である。

第２面では、第４面等で発見した溝とほぼ同位置で、南北に走る溝を発見している。

第７面から第２面で、ほぼ同一の位置で発見した南北に走る溝を、現在の参道に沿って走る小河川の原型、あるいは参道に伴う側溝と考えているが、溝西側に延びる建物址の敷地区画の溝であった可能性もある。

第３章で述べた理由で、第１面の遺構・遺物についての記録は無いが、破砕泥岩によるしっかりとした地業、中世および近世後期の遺物と共にピットを確認している。

出土した遺物

本調査で出土した遺物はテンバコ数にして計８箱である。出土した遺物は、かわらけ・舶載磁器（青磁・青白磁・白磁）・国産陶磁器（常滑窯・瀬戸窯）・褐釉陶器・緑釉陶器・石製品（硯・砥石・滑石製鍋）・火鉢（土器質）・鉄製品（釘）・木製品（箸・曲げ物・板折敷・篦・串状製品・織機部材・板草履・玩具・用途不明品）・漆器（椀・皿）・銭である。

破片で出土した遺物を含めて、大半はかわらけであった。

第７面から第２面までの出土遺物を観察すると、おおよそ 13 世紀半ばから 14 世紀初頭の遺物が含まれている。

遺跡の変遷

調査地前の道路を北に向かって進んでいくと、薬師堂ヶ谷最奥の鷲峰山真言院覚園寺に突き当たる。覚園寺を含む谷戸辺の景観や寺領の規模を推定できる資料として、「覚園寺古図」等がある。この古図は年代的にかなり下った史料であるため、覚園寺開山時の 13 世紀初頭、および盛隆を誇った 14 世紀代の覚園寺を示すものではないが、往時の谷戸内の景観を表わす一資料と考えれば、調査地は覚園寺門前の位置にあたる。

最終面の第７面から第５面の生活面は、出土遺物の観察から 13 世紀半ばから 13 世紀第３四半期に比定される遺物を含む地業層・遺構であると判断しているが、狭いトレンチ坑内での観察のため遺構の性格・様相などを推測することは困難である。このトレンチ坑では、海抜約 23.40 ｍで本調査地西側山裾に繋がる岩盤面を確認しているが、調査区の西側では海抜約 24.50 ｍの高さで岩盤面を確認し、第７面から第５面に相当する生活面の発見は無い。第４面の生活面を造成した時期から、山裾を削り谷戸内の拡張・造成を行ったと思われる。第４面は 13 世紀第４四半期の年代を与えているが、この頃には頻繁に遺構の造り替えも行われたようであり、覚園寺の盛隆期に一致する。第３面廃絶時より遡っての遺構（生活面）廃棄の原因は、炭化物層の堆積状況などから何度かの火災が考えられる。第２面は、遺構出土遺物が少量であったことや、第１面の地業によって壊されていたために、概ね 14 世紀代と考えている。第１面は現代の撹乱による削平を大きく受けており、判断しにくいが 15 世紀初頭の年代を与えている。第１面の構成土は厚さ約 50 ㎝の破砕泥岩による堆積を確認しており、第４面の 13 世紀第４四半期と第１面の 15 世紀初頭以降に、大きく谷戸内の造成・開発が行われたことが推察される。

＊参考文献は第１章末にまとめて記載。

法量表

（単位はcm）

図版No.	No.	出土地	種別	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚み）	備考
6	1	遺構3	かわらけ	(11.4)			
	2	遺構8	かわらけ	(11.6)	(8.0)	3.1	
	3	遺構24	常滑窯甕 胴部片				
	4	遺構26	緑釉陶器片				底部露胎
	5	遺構26	かわらけ	(12.1)	(5.95)	3.35	
	6	遺構26	かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.6	
	7	第2面面上	銭	聖宋元宝　初鋳　1101年			
	8	第2面面上	常滑窯甕 胴部片				
	9	第2面面上	石製品　硯				
	10	第2面面上	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.15	
	11	第2面面上	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.9	
	12	第2面面上	鉄製品　釘	(7.0)	0.55	0.45	
	13	第2面面上	木製品　箸	(8.5)	(0.6)	(0.5)	
	14	第2面面上	木製品　用途不明	(5.3)	(3.1)	(0.6)	
	15	第2面構成土	青磁鎬蓮弁文折縁碗	(12.0)			竜泉窯
	16	第2面構成土	青白磁　梅瓶				
	17	第2面構成土	青磁鎬蓮弁文碗				竜泉窯
	18	第2面構成土	土器質火鉢				
	19	第2面構成土	かわらけ	(12.8)	(7.6)	4.3	
	20	第2面構成土	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.45	
	21	第2面構成土	かわらけ	12.8	8.1	3.5	
	22	第2面構成土	かわらけ	(11.6)	(7.1)	3.1	
	23	第2面構成土	かわらけ	(7.4)	(4.1)	1.6	口唇部・内面油煤付着
	24	第2面構成土	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.7	口唇部・内面油煤付着
	25	第2面構成土	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.55	
	26	第2面構成土	かわらけ	7.2	5.4	1.4	口唇部・外面油煤付着
	27	第2面構成土	かわらけ	6.4	5.25	1.75	底面に穿孔有
	28	第2面構成土	石製品　硯				鳴滝産
	29	第2面構成土	石製品　砥石	(4.85)	(1.2)	(2.0)	中砥
	30	第2面構成土	鉄製品　釘	(5.95)	0.6	0.6	
	31	第2面構成土	木製品　部材	(18.4)	1.3	0.9	
	32	第2面構成土	木製品　曲げ物			0.3	
	33	第2面構成土	木製品　箸	20.2	0.6	0.6	
	34	第2面構成土	木製品　箸	19.5	0.6	0.5	
	35	第2面構成土	木製品　箸	(19.1)	0.9	0.7	
	36	第2面構成土	木製品　箸	(14.8)	0.5	0.5	
	37	第2面構成土	木製品　箸	(15.0)	0.55	0.5	
	38	第2面構成土	木製品　箸	(13.8)	0.5	0.5	
	39	第2面構成土	木製品　箸	(14.9)	0.5	0.5	
	40	第2面構成土	木製品　箆？	(13.9)	0.9	0.4	
9	1	遺構47	木製品　用途不明				
10	1	第3面構成土	白磁　口兀皿	(9.0)	(5.2)	2.25	
	2	第3面構成土	褐釉　壷				
	3	第3面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	4	第3面構成土	瀬戸窯　水注				
	5	第3面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	6	第3面構成土	滑石鍋	(29.0)			
	7	第3面構成土	常滑窯　甕				
	8	第3面構成土	土器質火鉢				
	9	第3面構成土	白かわらけ				
	10	第3面構成土	滑石鍋		(11.0)		
	11	第3面構成土	かわらけ	(11.2)	(6.8)	3.05	
	12	第3面構成土	かわらけ	(11.6)	(7.4)	3.3	
	13	第3面構成土	かわらけ	(12.6)	(8.6)	3.2	
	14	第3面構成土	かわらけ	12.2	8.4	2.9	

（単位はcm）

図版No.	No.	出土地	種別	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚み）	備考
10	15	第3面構成土	かわらけ	(12.4)	(8.6)	3.1	
	16	第3面構成土	かわらけ	12.2	2.95	3.3	
	17	第3面構成土	かわらけ	12.6	8.2	3.35	
	18	第3面構成土	かわらけ	13.6	7.7	3.9	
	19	第3面構成土	かわらけ	14.1	8.8	3.75	
	20	第3面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.25	
	21	第3面構成土	かわらけ	(6.9)	(4.2)	1.4	
	22	第3面構成土	かわらけ	(7.1)	(4.9)	1.55	
	23	第3面構成土	かわらけ	(7.6)	(6.1)	2.05	
	24	第3面構成土	かわらけ	7.4	5.25	1.85	
	25	第3面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.8)	1.3	
	26	第3面構成土	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.45	
	27	第3面構成土	かわらけ	(7.1)	(5, 3)	(1.55)	
	28	第3面構成土	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.9	
	29	第3面構成土	かわらけ	7.9	5.55	1.85	
	30	第3面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.7	
	31	第3面構成土	かわらけ	(7.4)	(5.1)	1.5	
	32	第3面構成土	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	内外口唇部油煤付着
	33	第3面構成土	かわらけ	8.2	5.6	1.9	内外面に油煤付着
	34	第3面構成土	かわらけ	(6.4)	(4.2)	2.05	
	35	第3面構成土	かわらけ	7.1	4.7	1.7	内外口唇部油煤付着
	36	第3面構成土	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.65	
	37	第3面構成土	かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.65	
	38	第3面構成土	かわらけ	(7.1)	(4.6)	2.0	
	39	第3面構成土	かわらけ	7.4	4.6	2.2	
	40	第3面構成土	鉄製品　釘	(5.8)	0.4	0.5	
	41	第3面構成土	鉄製品　釘	8.8	0.65	0.6	
	42	第3面構成土	木製品　用途不明	(12.85)	0.95	0.7	
	43	第3面構成土	木製品　用途不明	(14.1)	1.65	0.55	
	44	第3面構成土	木製品　用途不明	11.85	0.9	0.5	
	45	第3面構成土	木製品　板折敷	(17.2)	(3.2)	0.35	
	46	第3面構成土	木製品　用途不明	(14.1)	0.85	0.4	
	47	第3面構成土	木製品　用途不明	(18.6)	0.6	0.35	
	48	第3面構成土	木製品　部材	(46.2)	13.4	1.6	釘痕有
	49	第3面構成土	木製品　用途不明	9.4	2.0	0.4	
	50	第3面構成土	木製品　用途不明	7.75	0.9	0.7	
	51	第3面構成土	木製品　用途不明	12.0	1.95	0.5	
	52	第3面構成土	木製品　用途不明	12.15	2.05	0.5	
	53	第3面構成土	木製品　箸	(13.7)	0.5	0.5	
11	54	第3面構成土	木製品　織具	9.3	2.6	0.9	
	55	第3面構成土	木製品　用途不明	径3.0		2.0	
	56	第3面構成土	木製品　用途不明	5.25	1.8	1.5	楔？
	57	第3面構成土	木製品　板折敷	(13.6)	(2.15)	0.3	
	58	第3面構成土	木製品　板折敷	(13.2)	(3.25)	0.3	
	59	第3面構成土	木製品　曲げ物底板	径　約9.4		0.5	
	60	第3面構成土	木製品　曲げ物蓋？	径　14.5		1.0	中央に2穴の穿孔
	61	第3面構成土	木製品　曲げ物底板	径　約12.0		0.6	
	62	第3面構成土	木製品　曲げ物底板	(14.5)	(15.7)	0.45	楕円形を呈する
	63	第3面構成土	木製品　曲げ物底板	径　約21.2		0.7	
	64	第3面構成土	木製品　曲げ物底板	径　約14.0		0.7	
	65	第3面構成土	木製品　曲げ物底板	径　約12.0		0.8	
	66	第3面構成土	木製品　箸	(16.7)	0.7	0.4	
	67	第3面構成土	木製品　箸	(17.1)	0.5	0.4	
	68	第3面構成土	木製品　箸	(17.8)	0.7	0.4	
	69	第3面構成土	木製品　箸	(18.0)	0.45	0.4	

（単位はcm）

図版No.	No.	出土地	種別	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚み）	備考
11	70	第3面構成土	木製品　箸	(19.2)	0.5	0.5	
	71	第3面構成土	木製品　箸	(18.7)	0.6	0.6	
	72	第3面構成土	木製品　箸	(19.45)	0.6	0.4	
	73	第3面構成土	木製品　箸	(19.4)	0.6	0.5	
	74	第3面構成土	木製品　箸	(19.3)	0.6	0.5	
	75	第3面構成土	木製品　箸	(20.4)	0.6	0.5	
	76	第3面構成土	木製品　箸	(20.6)	0.6	0.6	
	77	第3面構成土	木製品　箸	(21.3)	0.6	0.5	
	78	第3面構成土	木製品　箸	(20.95)	0.8	0.3	
	79	第3面構成土	木製品　箸	(22.3)	0.6	0.5	
	80	第3面構成土	木製品　箸	22.7	0.5	0.5	
	81	第3面構成土	木製品　箸	19.15	0.85	0.5	
	82	第3面構成土	木製品　箸	19.5	0.6	0.5	
	83	第3面構成土	木製品　箸	20.65	0.5	0.5	
	84	第3面構成土	木製品　箸	20.4	0.45	0.45	
12	85	第3面構成土	木製品　箸	20.5	0.6	0.4	
	86	第3面構成土	木製品　箸	20.3	0.6	0.5	
	87	第3面構成土	木製品　箸	23.5	0.6	0.6	
	88	第3面構成土	木製品　箸	20.6	0.7	0．5	
	89	第3面構成土	木製品　箸	21.5	0.55	0.5	
	90	第3面構成土	木製品　箸	21.4	0.6	0.6	
	91	第3面構成土	木製品　箸	21.5	0.6	0.4	
	92	第3面構成土	木製品　箸	22.1	0.6	0.55	
	93	第3面構成土	木製品　箸	22.1	0.6	0.5	
	94	第3面構成土	木製品　箸	22.7	0.6	0.6	
	95	第3面構成土	木製品　箸	22.8	0.6	0.5	
	96	第3面構成土	木製品　箸	23.7	0.5	0.5	
	97	第3面構成土	木製品　箸	23.4	0.7	0.6	
	98	第3面構成土	木製品　箸	(16.8)	0.75	0.4	
	99	第3面構成土	木製品　箸	(19.7)	0.85	0.6	
	100	第3面構成土	木製品　箸	(19.8)	0.7	0.7	
	101	第3面構成土	木製品　箸	(16.35)	0.4	0.5	
	102	第3面構成土	木製品　箸	(14.55)	0.7	0.5	
	103	第3面構成土	木製品　箸	(13.95)	0.6	0.45	
	104	第3面構成土	木製品　箸	(19.8)	0.7	0.7	
	105	第3面構成土	木製品　串状	(22.65)	1.3	0.9	先端篦状に加工
	106	第3面構成土	木製品　串状	(22.6)	1.05	0.8	片端に焼痕
	107	第3面構成土	木製品　串状	(24.2)	0.9	0.9	
	108	第3面構成土	木製品　串状	(24.0)	1.0	0.9	片端に焼痕
15	1	遺構42	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	2	遺構49	白磁　口兀皿				
	3	遺構49	常滑窯　壷口縁部片				
	4	遺構49	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	5	遺構49	常滑窯　甕口縁部片				
	6	遺構49	滑石製鍋				内面油煤痕
	7	遺構49	かわらけ	(11.9)	(7.6)	3.45	
	8	遺構49	かわらけ	(11.7)	(7.0)	3.5	
	9	遺構49	かわらけ	(11.6)	(8.0)	3.55	
	10	遺構49	かわらけ	(7.3)	(5.6)	1.3	
	11	遺構49	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.65	
	12	遺構49	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.75	
	13	遺構49	かわらけ	(7.0)	(5.2)	1.9	
	14	遺構49	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.8	
	15	遺構49	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.8	

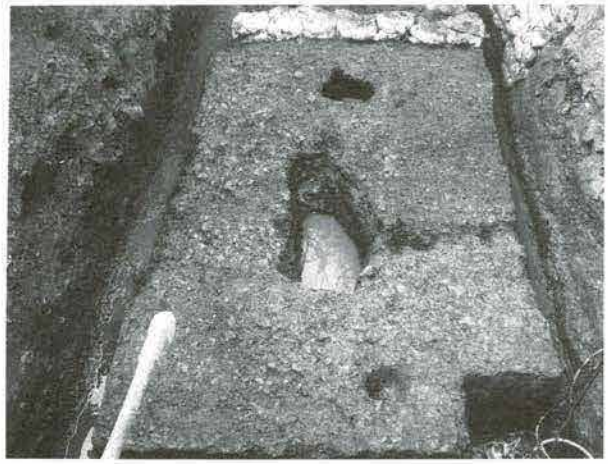
（単位はcm）

図版No.	No.	出土地	種別	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚み）	備考
15	16	遺構49	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.8	
	17	遺構49	かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.9	
	18	遺構49	木製品　箸	(13.2)	0.7	0.5	
	19	遺構49	木製品　箸	(14.9)	0.7	0.5	
	20	遺構50	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.65	
	21	遺構50	かわらけ	(6.9)	(4.2)	1.55	
	22	遺構50	かわらけ	(6.2)	(4.4)	1.95	
	23	遺構50	かわらけ	(7.3)	(5.0)	1.9	
	24	遺構51	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				内外面に薄く油煤痕
	25	遺構51	かわらけ	(11.8)	(6.6)	3.8	
	26	遺構51	かわらけ	(12.3)	(7.0)	3.3	
	27	遺構51	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.45	
	28	遺構60	青磁　折縁皿				竜泉窯
	29	遺構60	褐釉　壷				
	30	遺構60	常滑窯　片口鉢Ⅱ類				
	31	遺構60	かわらけ	12.3	7.5	3.5	
	32	遺構60	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.7	
	33	遺構60	木製品　箸	(20.5)	0.7	0.6	
16	1	第4面面上	かわらけ				
	2	第4面面上	緑釉陶器　盤				泉州窯系
	3	第4面面上	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.7	
	4	第4面面上	かわらけ	(8.0)	(5.9)	1.55	
	5	第4面面上	木製品　用途不明	6.8	2.05	1.8	
	6	第4面面上	木製品　用途不明	6.8	2.55	1.2	
	7	第4面面上	木製品　箸	(15.7)	0.7	0.5	
	8	第4面面上	木製品　箸	(15.8)	0.55	0.45	
	9	第4面面上	木製品　箸	18.3	0.7	0.4	
	10	第4面面上	木製品　用途不明	23.9	0.9	0.7	
	11	第4面構成土	青白磁　水注				
	12	第4面構成土	白磁　壷				
	13	第4面構成土	褐釉　壷				
	14	第4面構成土	瀬戸窯　天目茶碗	(11.8)			
	15	第4面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅱ類				
	16	第4面構成土	常滑窯　甕口縁部辺				
	17	第4面構成土	かわらけ	(4.8)	(3.4)	1.0	
	18	第4面構成土	かわらけ	(6.6)	(5.4)	1.5	
	19	第4面構成土	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.6	
	20	第4面構成土	かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.65	
	21	第4面構成土	かわらけ	(7.4)	(5.8)	1.8	内外面口唇部に油煤痕
	22	第4面構成土	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.55	
	23	第4面構成土	かわらけ	(10.8)	(7.8)	2.95	
	24	第4面構成土	かわらけ	(11.3)	(6.8)	3.15	
	25	第4面構成土	かわらけ	(11.4)	(6.9)	3.05	
	26	第4面構成土	かわらけ	(11.4)	(7.4)	3.75	
	27	第4面構成土	かわらけ		(7.4)		内底面に赤色顔料付着
	28	第4面構成土	常滑甕　転用品				断面磨耗
	29	第4面構成土	石製品　砥石	8.3	3.3	3.5	荒砥
	30	第4面構成土	木製品　箸	20.5	0.7	0.5	
	31	第4面構成土	木製品　箸	19.95	0.9	0.4	
	32	第4面構成土	木製品　箸	20.45	0.7	0.4	
	33	第4面構成土	木製品　箸	19.95	0.8	0.5	
	34	第4面構成土	木製品　箸	21.8	0.7	0.5	
	39	第4面構成土	木製品　箸	(20.8)	0.75	0.6	
	36	第4面構成土	木製品　箸	(18.2)	0.6	0.4	

（単位はcm）

図版No.	No.	出土地	種別	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚み）	備考
16	37	第4面構成土	木製品　箸	（18.4）	0.6	0.7	
	38	第4面構成土	木製品　箸	（19.6）	0.6	0.5	
	39	第4面構成土	木製品　板草履	（17.2）	（10.75）	0.35	
18	1	第5面構成土	青磁鎬蓮弁文椀				竜泉窯
	2	第5面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	3	第5面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	4	第5面構成土	常滑窯　甕				
	5	第5面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				内面油煤痕
	6	第5面構成土	常滑窯　片口鉢Ⅰ類	（33.2）			内壁一部油煤痕
	7	第5面構成土	木製品　用途不明	5.5	2.25	0.2	
	8	第5面構成土	木製品　板折敷	（14.6）	3.3	0.45	
	9	第5面構成土	木製品　板草履	（14.5）	4.6	0.4	
19	1	第6面構成土	かわらけ	4.95	4.1	0.9	
	2	第6面構成土	かわらけ	7.4	5.45	1.55	内外面口唇部油煤痕
	3	第6面構成土	かわらけ	（11.2）	（8.0）	3.1	
	4	第6面構成土	かわらけ	12.0	8.9	3.2	
	5	第6面構成土	木製品　玩具	（4.9）	2.4	1.0	
	6	第6面構成土	木製品　用途不明	（7.1）	1.3	0.8	
	7	第6面構成土	木製品　箸	（21.9）	0.6	0.5	
	8	第6面構成土	木製品　用途不明	20.6	0.95	0.9	斜めに刻み痕
	9	第7面構成土	白磁口兀碗				
	10	第7面構成土	白磁口兀皿				
	11	第7面構成土	瀬戸窯　皿		（4.8）		
	12	第7面構成土	かわらけ	（6.8）	（4.8）	1.3	
	13	第7面構成土	かわらけ	（7.0）	（4.6）	1.6	
	14	第7面構成土	かわらけ	（11.6）	（7.8）	3.25	
	15	第7面構成土	かわらけ	（11.4）	（8.0）	3.3	
	16	第7面構成土	かわらけ	（11.6）	（7.2）	3.1	
	17	第7面構成土	木製品　板草履	（9.25）	（3.3）	0.5	
	18	第7面構成土	木製品　用途不明	13.5	2.1	1.0	
	19	第7面構成土	木製品　箸	19.05	0.6	0.6	
	20	第7面構成土	木製品　箸	19.55	0.65	0.4	
	21	第7面構成土	木製品　箸	（19.0）	0.5	0.5	
	22	第7面構成土	木製品　串状	（17.15）	0.9	0.6	
	23	第7面構成土	木製品　串状				
	24	表採	瀬戸窯　盤	（27.2）			
	25	表採	常滑窯　片口鉢Ⅰ類				
	26	表採	かわらけ	（11.2）	（6.1）	3.15	
	27	表採	かわらけ	（7.2）	（5.2）	1.6	

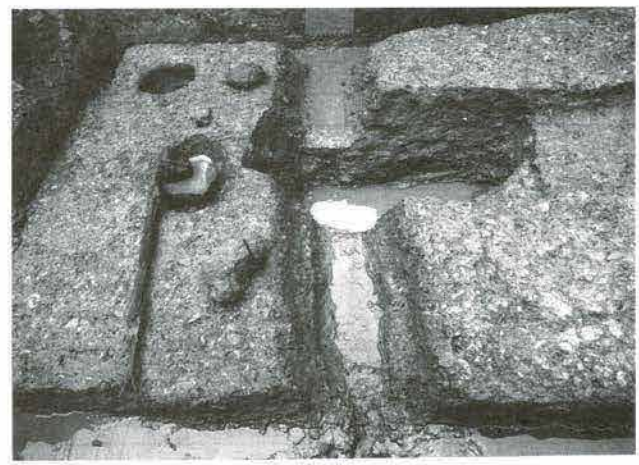
図版 1



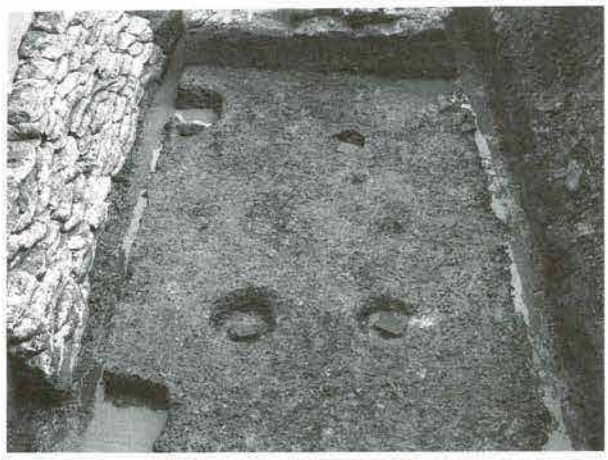
第 1 面　（東から）

第 2 面全景　（西から）

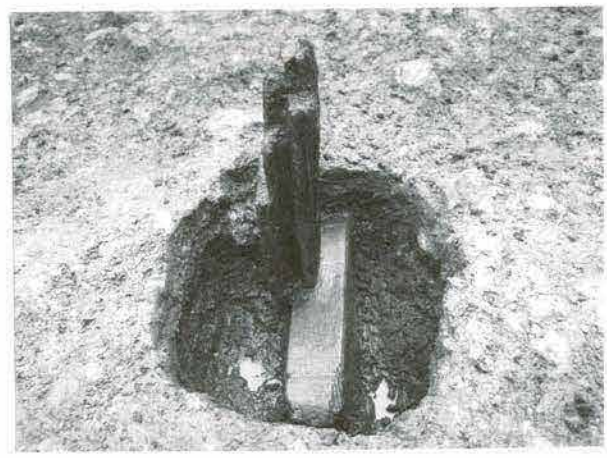
第 2 面　遺構 22



第 2 面　遺構 12・13・22
（北から）

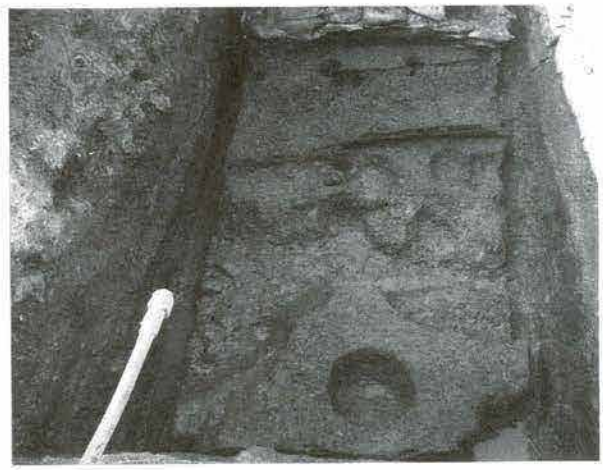


第 3 面　調査区西側（西から）

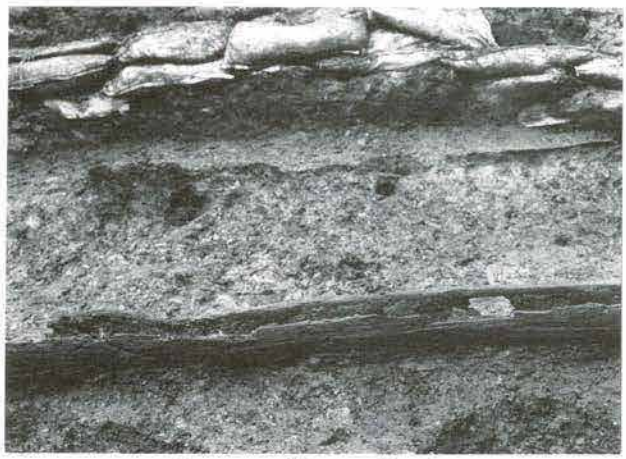


第 3 面　遺構 47（北から）

第４面　調査区西側（西から）

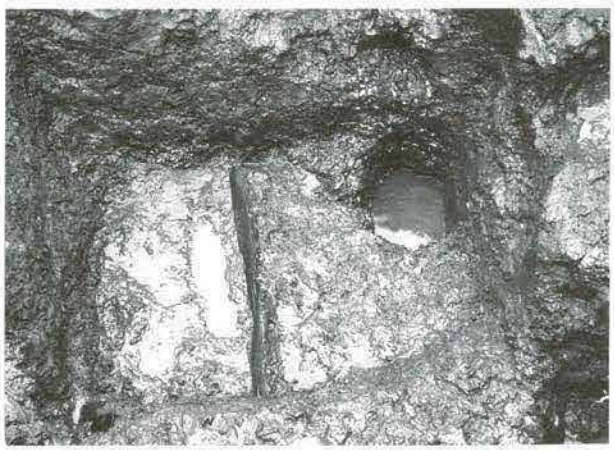


第４面調査区東側（東から）

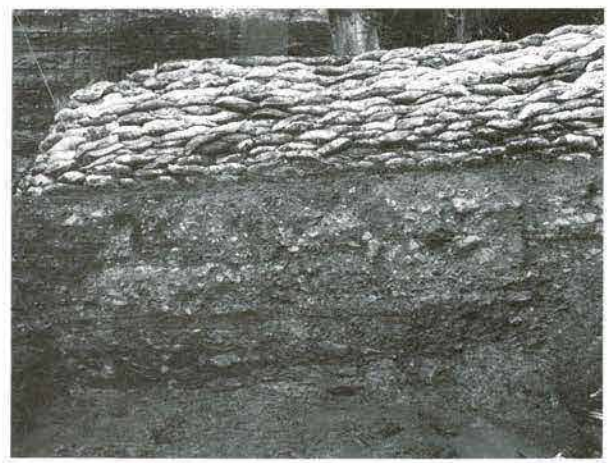


第４面　遺構 60（東から）

第４面　遺構 60（南から）

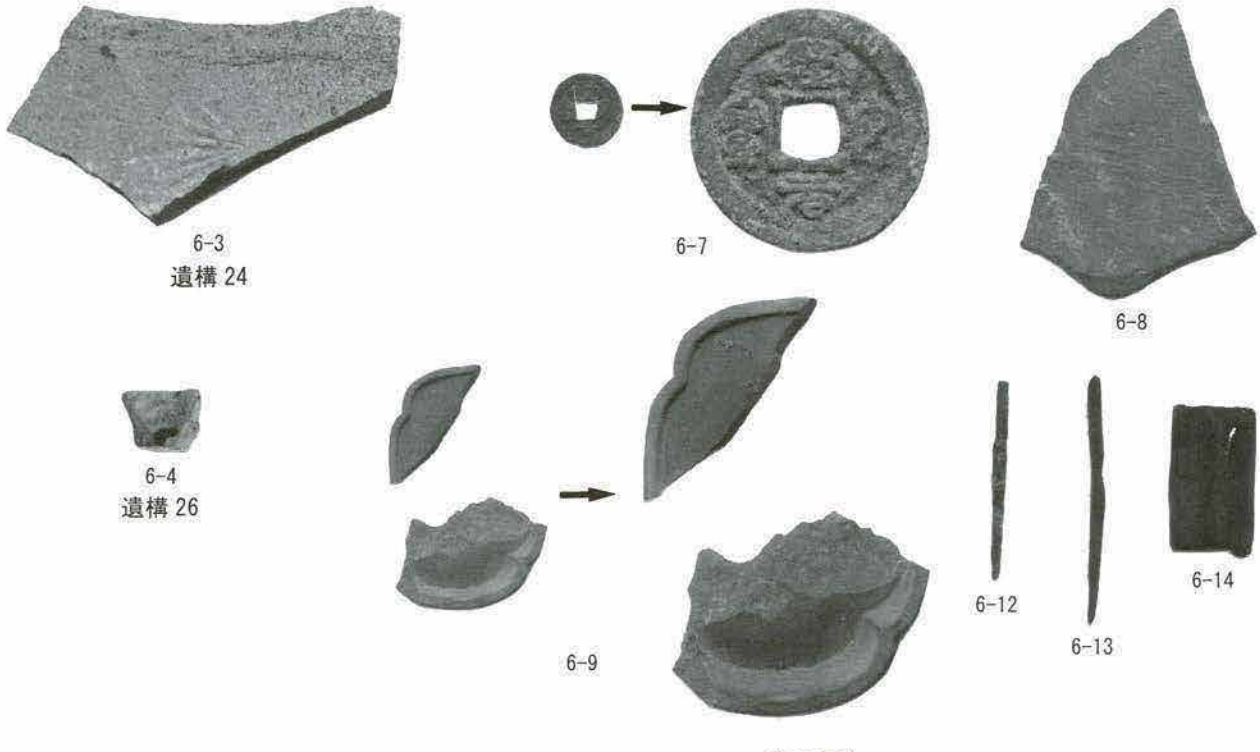


最終トレンチ（第５面～第７面）

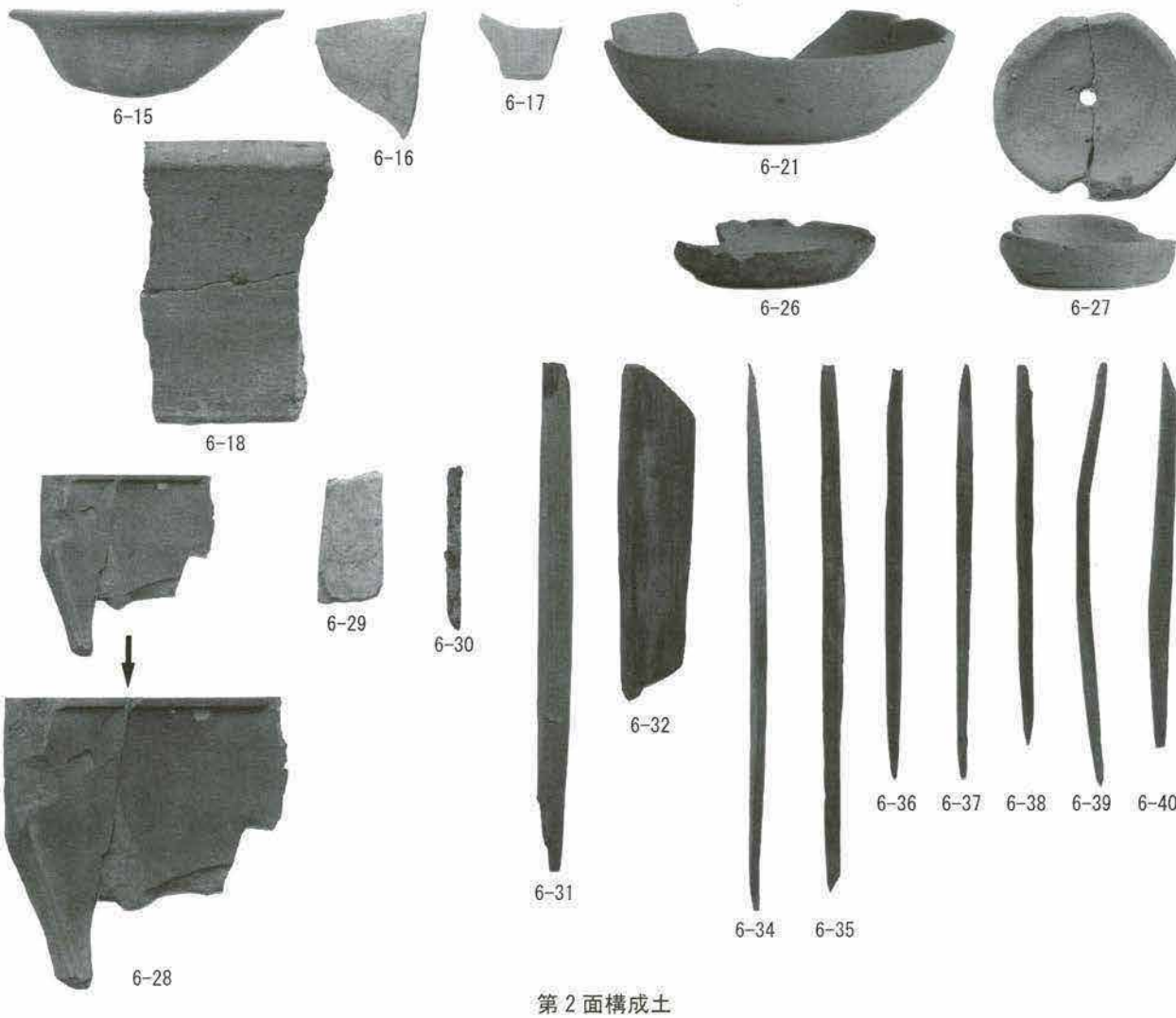


調査区北壁堆積状況

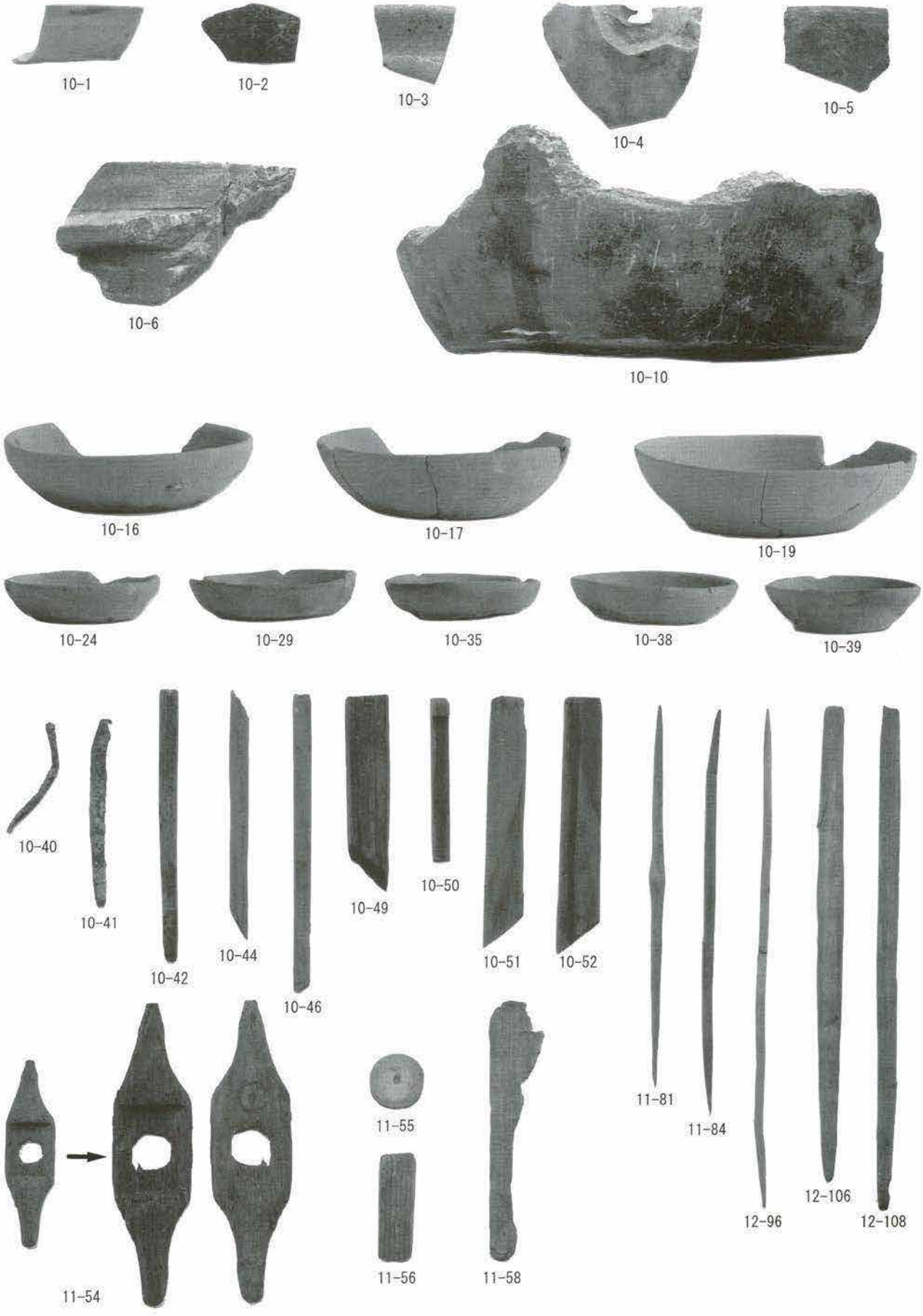
図版 3



第 2 面上



第 2 面構成土


10-1
10-2
10-3
10-4
10-5
10-6
10-10
10-16
10-17
10-19
10-24
10-29
10-35
10-38
10-39
10-40
10-41
10-42
10-44
10-46
10-49
10-50
10-51
10-52
11-81
11-84
12-96
12-106
12-108
11-54
11-55
11-56
11-58

第 3 面構成土

図版５

15-2

遺構 42

15-3

15-5

15-6

遺構 49

15-7

15-10

15-20

15-24

遺構 50

15-28

15-29

15-31

15-30

15-32

遺構 60

16-2

16-5

16-6

16-7

16-8

16-9

第 4 面上

16-11

16-12

16-13

16-15

16-16

16-17

16-18

16-19

16-20

16-21

16-22

16-23

16-24

16-25

16-26

16-28

16-29

16-30

16-32

16-34

16-39

第 4 面構成土

18-1

18-2

18-3

18-4

18-5

18-6

18-7

18-8

18-9

第５面構成土

19-1

19-2

19-4

19-5

19-6

19-7

19-8

第６面構成土

20-1

20-2

20-3

20-4

20-5

20-7

20-9

20-10

20-12

20-13

第７面構成土

20-15

21-1

21-2

21-3

21-4

表土採集

報　告　書　抄　録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成21年度調査報告
巻次	26　（第1分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	原　廣志・宇都洋平／原　廣志／馬淵和雄・鍛治屋勝二・松原康子／ 原　廣志／伊丹まどか
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
うつのみやずしばくふあと 宇津宮辻子幕府跡	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 390番2外	14204	239	35° 31′ 96″	139° 55′ 37″	20040226 ～ 20040403	62.62	個人専用 住宅 （地下室）
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 236番1	14204	278	35° 32′ 25″	139° 55′ 34″	20040303 ～ 20040405	22.50	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 440番の一部	14204	282	35° 32′ 11″	139° 55′ 56″	20040116 ～ 20040219	56.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 39番14	14204	200	35° 31′ 47″	139° 54′ 77″	20040511 ～ 20040531	20.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
かくおんじきゅうけいだいいせき 覚園寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字会下 351番3	14204	435	35° 32′ 91″	139° 56′ 45″	20041027 ～ 20041210	30.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
うつのみやずしばくふあと 宇津宮辻子幕府跡	官衙跡	中世	方形竪穴建物跡、 井戸、土坑、柱穴等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、金属製品	
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	城館跡	中世	礎石建物跡、 苑池跡、土坑、 柱穴、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、木製品、 金属製品	
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡、 柱穴、土坑、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、木製品	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	都市遺跡	中世	掘立柱建物跡、 柱穴、道路跡、 溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品等	
かくおんじきゅうけいだいいせき 覚園寺旧境内遺跡	社寺跡	中世	柱穴、溝、土坑、 囲炉裏等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品等	

報　告　書　抄　録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成21年度調査報告
巻次	26　（第1分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	原　廣志・宇都洋平／原　廣志／馬淵和雄・鍛治屋勝二・松原康子／ 原　廣志／伊丹まどか
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
うつのみやずしばくふあと 宇津宮辻子幕府跡	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 390番2外	14204	239	35° 31′ 96″	139° 55′ 37″	20040226 ～ 20040403	62.62	個人専用 住宅 （地下室）
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 236番1	14204	278	35° 32′ 25″	139° 55′ 34″	20040303 ～ 20040405	22.50	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 440番の一部	14204	282	35° 32′ 11″	139° 55′ 56″	20040116 ～ 20040219	56.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 39番14	14204	200	35° 31′ 47″	139° 54′ 77″	20040511 ～ 20040531	20.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
かくおんじきょうけいだいいせき 覚園寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字会下 351番3	14204	435	35° 32′ 91″	139° 56′ 45″	20041027 ～ 20041210	~~30.00~~ 50.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）

＊令和6年1月12日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
うつのみやずしばくふあと 宇津宮辻子幕府跡	官衙跡	中世	方形竪穴建物跡、井戸、土坑、柱穴等	貿易陶磁器、かわらけ、国産陶器、金属製品	
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	城館跡	中世	礎石建物跡、苑池跡、土坑、柱穴、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、国産陶器、木製品、金属製品	
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、国産陶器、木製品	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	都市遺跡	中世	掘立柱建物跡、柱穴、道路跡、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、木製品等	
かくおんじきょうけいだいいせき 覚園寺旧境内遺跡	社寺跡	中世	柱穴、溝、土坑、囲炉裏等	貿易陶磁器、かわらけ、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、木製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　26
平成21年度発掘調査報告
（第1分冊）

発行日　平成22年3月31日

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　テクノヤマモト